

今井道上・道下遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団

いま いみちうえ みちした
今井道上・道下遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われています。

本書は、昭和61年10月より翌年の昭和62年10月にかけて発掘調査をしました前橋市今井町所在の旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である今井道上・道下遺跡の報告書です。2万年前の旧石器人たちの活動の痕跡をはじめとして、古墳時代から平安時代にかけての集落址、“あずま道”と呼ばれる東山道推定駅路の下から発見された中世の道路跡など、当地域の歴史的発展を知る上での貴重な資料が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願ひ序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

- 1 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う、事業名称「JK37-3 今井道上・道下遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する方法を採用しており、小字名の「道上」と「道下」にまたがっていることから、両字名をとって「今井道上・道下遺跡」と命名した。
- 3 遺跡所在地 群馬県前橋市今井町939・940他
- 4 事業主体 建設省関東地方建設局高崎工事事務所
- 5 調査及び整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 発掘調査と整理事業を実施した期間と体制は以下のとおりである。

(1) 発掘調査

昭和61年10月1日～昭和62年10月31日

調査担当 飯島義雄、坂井 隆、山口逸広、大木紳一郎

事務局 白石保三郎、梅沢重昭、井上唯雄、大沢秋良、田口紀雄、上原啓巳、板場一寿、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏

発掘作業 青木秀邦、青木芳子、秋間キヨ子、阿部利一、荒牧 章、石川典子、磯辺ヤス、板垣てる子、板垣利平治、井上とも江、井上ふく代、卯野やす子、遠藤キヌ江、大島 博、大山貞一、岡田やす、岡野きみ子、織間芳雄、川井美代、川田佳子、川端いくの、川端キヨ子、川和久子、神沢梅子、神沢シモ、神沢芳子、神沢利江、菊池ミキ、木暮吾一、北爪ヒデ子、木村公子、木村唯雄、木村とよ、喜楽トヨ、国定 勇、久保田ひろみ、栗原増雄、小坂橋きみよ、高坂ちまの、小暮悠太、木暮近雄、小沼あき、小沼里子、小林栄輔、小謝きみ江、近藤きよし、近藤 貴、斎藤秋子、斎藤たけ、桜井健作、重田夏子、清水享子、下境すえ、須賀サイ子、鈴木しげ子、鈴木まき江、鈴木ヨシエ、須藤よしの、高橋友子、滝川律子、田中すみ子、田中高志、田中幹子、田部井ケイ、田部井正子、塚田より、富田裕登、長岡武、奈良芳子、新野見茂雄、羽鳥愛子、羽鳥かつ江、羽鳥ふみ子、羽鳥正代、羽鳥八重子、浜岡仁一、早川フサ子、原田房子、平野智子、広瀬正子、福田たみ子、福田春江、古郡恒信、細谷友江、堀越ふみ江、松井さきの、松井千代枝、松井りょう、黛 幹江、水料瀬太郎、宮本サトノ、森村伊勢雄、八木原きぬ子、吉沢美枝子、吉田さだ子、吉田ツヤ子、吉原君子

(2) 整理作業

平成5年4月1日～平成6年3月31日

整理担当 坂井 隆、大木紳一郎

整理作業 坂庭常盤、佐藤美代子、六反田達子、岡田美知枝、小林幸枝、下境マサ江、大塚とし子

- 7 遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は佐藤元彦が行った。
- 8 出土遺物の保存処理は関 邦一と小村浩一、土橋まり子が行った。
- 9 出土遺物の科学分析に関しては、以下の方々、団体に依頼した。(敬称略)

鉄 分 析 赤沼英男(岩手県立博物館)

石材同定 飯島静男 (群馬地質研究会)

樹種同定 藤根 久 (株式会社パレオ・ラボ)

胎土分析 井上 巖 (第四紀地質研究所)

建物跡の復元・考察は石井英一 (世田谷区教育委員会) に依頼した。(敬称略)

- 10 発掘調査における井戸跡の掘削には原沢ボーリング株式会社に委託した。
- 11 本書の編集は大木紳一郎が行い、本文の執筆分担は以下による。
 - 第3章-1 旧石器時代の遺構と遺物 津島秀章
 - 第3章-2 縄文時代の遺物 (石器) 岩崎泰一
 - 第3章-3 縄文時代の遺物 (土器) 山口逸弘
 - 第5章-2 方形区画溝について 神谷佳明
 - 第1・2章、第3章-4~12、第5章-1・3 大木紳一郎
- 12 遺構名称は、発掘調査時に登録したものをそのまま用いており、すべて遺構の種類毎に通し番号で示している。ただし番号登録後の検討で遺構と認められなかったものについては欠番とした。
- 13 遺構検出位置については、区とグリッド名で示し、各節のはじめに全体図を掲げてこれを示した。
- 14 遺構規模は、検出面での長さ、幅、深さ等の最大値を計測して記載した。また計測値に大きな差がある場合には最小値と最大値を「~」で示した。
- 15 挿図中の方位記号と本文記載の方位はすべて国家座標上の北を基準としている。
- 16 出土遺物は可能な限り実測図、写真、出土位置図を掲げたが、掲載出来なかったものについては本文中に概要を記した。
- 17 本書では各遺構名、施設名について以下の略称を用いることがある。
「住」 竪穴住居跡 「坑」 土坑 「P」 ビット 「掘立」 掘立柱建物跡
また、炉やかまどの焼土部分は細かい網目で表してある。
- 18 本書では、テフラの略称としてAs-A (浅間山1783年)、As-B (浅間山1108年推定)、Hr-FA (榛名山二ツ岳6世紀初頭)、Hr-FP (榛名山二ツ岳6世紀半ば)を用いる。
- 19 挿図の縮尺は、遺構1/60、遺物1/3を基準として掲げたが、大形品と小形品はそれぞれに応じた縮尺を採用した。
- 20 本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際しては前橋市教育委員会ならびに地元関係者の多大なるご支援を戴いた。ここに記して感謝の意を表す次第である。
- 21 本遺跡の出土遺物、資料類は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

目 次

序 言

第1章 調査に至る経過と方法	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法	2
第2章 周辺の環境と歴史的背景	3
1 地理環境	3
2 歴史的背景	3
第3章 検出された遺構と遺物	7
1 旧石器時代の遺構と遺物	7
2 縄文時代の遺物	23
(1) 石 器	23
(2) 土 器	33
3 古墳時代以降の遺構と遺物	39
(1) 竪穴住居跡	41
(2) 鍛 冶 跡	214
(3) 掘立柱建物跡	221
(4) 竪穴遺構	243
(5) 溝	244
(6) 井 戸 跡	252
(7) 粘土採掘坑	271
(8) 道 路 跡	278
(9) 土 坑	287
(10) 遺構外出土遺物	317
第4章 科学分析及び建築学的考察	321
1 鉄器・鉄滓の金属学的解析	321
2 出土土器胎土分析	343
3 住居跡出土材の樹種同定	358
4 中世以後の掘立柱建物跡の検討	365
第5章 ま と め	371
1 道路跡について	371
2 方形区画溝について	372
3 集落について	374

挿 図 目 次

第 1 図	今井道土・道下遺跡の位置と調査区	1	第 58 図	12号住居跡	66
第 2 図	周辺の地形と遺跡の分布	4	第 59 図	12号住居竈・貯蔵穴土層断面	66
第 3 図	旧石器時代調査全体図及び基本土層(石器出土層位)	8	第 60 図	12号住居跡掘り方	67
第 4 図	石部分布図・石材別分布図(1)	10	第 61 図	12号住居跡遺物出土位置及び柱穴配置	68
第 5 図	石部分布図(2)	11	第 62 図	12号住居跡出土遺物(1)	69
第 6 図	石部分布図(3)	12	第 63 図	12号住居跡出土遺物(2)	70
第 7 図	出土石器(1)	13	第 64 図	12号住居跡出土遺物(3)	71
第 8 図	出土石器(2)及び接合資料(1)	14	第 65 図	12号住居跡出土遺物(4)	72
第 9 図	接合資料(2)	15	第 66 図	13号住居跡	73
第 10 図	接合資料(3)	16	第 67 図	13号住居跡土層断面	74
第 11 図	接合資料(4)	17	第 68 図	13号住居跡掘り方	74
第 12 図	接合資料(5)	18	第 69 図	13号住居跡出土遺物	75
第 13 図	縄文石器(1)	23	第 70 図	14号住居跡及び出土遺物	76
第 14 図	縄文石器(2)	24	第 71 図	15号住居跡	77
第 15 図	縄文石器(3)	25	第 72 図	15号住居跡掘り方及び出土遺物(1)	78
第 16 図	縄文石器(4)	26	第 73 図	15号住居跡出土遺物(2)	79
第 17 図	縄文石器(5)	27	第 74 図	16号住居跡	80
第 18 図	縄文石器(6)	28	第 75 図	16号住居跡土層及び竈断面	81
第 19 図	縄文石器(7)	29	第 76 図	16号住居跡掘り方	81
第 20 図	縄文石器(8)	30	第 77 図	16号住居跡出土遺物(1)	82
第 21 図	縄文石器(9)	31	第 78 図	16号住居跡出土遺物(2)	83
第 22 図	包含層出土縄文土器(1)	34	第 79 図	16号住居跡出土遺物(3)	84
第 23 図	包含層出土縄文土器(2)	35	第 80 図	16号住居跡出土遺物(4)	85
第 24 図	包含層出土縄文土器(3)	36	第 81 図	17号住居跡	86
第 25 図	包含層出土縄文土器(4)	37	第 82 図	17号住居跡掘り方	87
第 26 図	竈穴住居跡位置図	40	第 83 図	17号住居跡出土遺物(1)	87
第 27 図	1号住居跡	41	第 84 図	17号住居跡出土遺物(2)	88
第 28 図	1号住居跡掘り方及び出土遺物	42	第 85 図	17号住居跡出土遺物(3)	89
第 29 図	2号住居跡	43	第 86 図	17号住居跡出土遺物(4)	90
第 30 図	2号住居跡竈周辺	44	第 87 図	18号住居跡及び出土遺物	91
第 31 図	2号住居跡出土遺物(1)	44	第 88 図	19号住居跡	92
第 32 図	2号住居跡掘り方	45	第 89 図	19号住居跡土層及び竈断面	93
第 33 図	2号住居跡出土遺物(2)	45	第 90 図	19号住居跡出土遺物(1)	93
第 34 図	2号住居跡出土遺物(3)	46	第 91 図	19号住居跡出土遺物(2)	94
第 35 図	3号住居跡及び出土遺物	47	第 92 図	20号住居跡及び出土遺物	95
第 36 図	4号住居跡	48	第 93 図	21号住居跡	96
第 37 図	4号住居跡遺物出土状態及び出土遺物	49	第 94 図	21号住居跡出土遺物	97
第 38 図	5号住居跡	50	第 95 図	22号住居跡	98
第 39 図	5号住居跡土層断面	51	第 96 図	22号住居跡出土遺物	99
第 40 図	5号住居跡出土遺物(1)	51	第 97 図	23号住居跡	100
第 41 図	5号住居跡出土遺物(2)	52	第 98 図	23号住居跡土層断面及び出土遺物(1)	101
第 42 図	6号住居跡及び出土遺物(1)	53	第 99 図	23号住居跡出土遺物(2)	102
第 43 図	6号住居跡出土遺物(2)	54	第 100 図	24号住居跡	103
第 44 図	7号住居跡	54	第 101 図	24号住居跡竈断面	104
第 45 図	7号住居跡土層断面	55	第 102 図	24号住居跡掘り方	104
第 46 図	7号住居跡掘り方	56	第 103 図	24号住居跡出土遺物	105
第 47 図	7号住居跡出土遺物(1)	56	第 104 図	25号住居跡	106
第 48 図	7号住居跡出土遺物(2)	57	第 105 図	25号住居跡土層及び竈断面	107
第 49 図	8号住居跡及び出土遺物	58	第 106 図	25号住居跡掘り方	107
第 50 図	9号住居跡	59	第 107 図	25号住居跡出土遺物(1)	108
第 51 図	9号住居跡及び出土遺物	60	第 108 図	25号住居跡出土遺物(2)	109
第 52 図	10号住居跡	61	第 109 図	25号住居跡出土遺物(3)	110
第 53 図	10号住居跡出土遺物	62	第 110 図	26号住居跡	110
第 54 図	11号住居跡	63	第 111 図	26号住居跡土層断面及び掘り方	111
第 55 図	11号住居跡掘り方	64	第 112 図	26号住居跡竈断面	111
第 56 図	11号住居跡出土遺物(1)	64	第 113 図	26号住居跡出土遺物	112
第 57 図	11号住居跡出土遺物(2)	65	第 114 図	27号住居跡	113

第115図	27号住居跡土層及び竈断面	114
第116図	27号住居跡掘り方	115
第117図	27号住居跡柱穴配置	116
第118図	27号住居跡出土遺物(1)	116
第119図	27号住居跡出土遺物(2)	117
第120図	28号住居跡	118
第121図	28号住居跡竈断面	119
第122図	28号住居跡出土遺物	119
第123図	29号住居跡及び掘り方	120
第124図	29号住居跡出土遺物(1)	121
第125図	29号住居跡出土遺物(2)	122
第126図	30号住居跡及び掘り方断面	123
第127図	30号住居跡竈断面及び掘り方	124
第128図	30号住居跡出土遺物(1)	125
第129図	30号住居跡出土遺物(2)	126
第130図	31号住居跡及び出土遺物	126
第131図	33号住居跡土層断面	127
第132図	33号住居跡	128
第133図	33号住居跡竈土層断面	129
第134図	33号住居跡掘り方	130
第135図	33号住居跡出土遺物(1)	130
第136図	33号住居跡出土遺物(2)	131
第137図	33号住居跡出土遺物(3)	132
第138図	34・35号住居跡	134
第139図	34・35号住居跡及び竈土層断面	135
第140図	34・35号住居跡掘り方	136
第141図	34号住居跡出土遺物(1)	136
第142図	34号住居跡出土遺物(2)	137
第143図	35号住居跡出土遺物(1)	137
第144図	35号住居跡出土遺物(2)	138
第145図	35号住居跡出土遺物(3)	139
第146図	35号住居跡出土遺物(4)	140
第147図	35号住居跡出土遺物(5)	141
第148図	36号住居跡	141
第149図	36号住居跡出土遺物	142
第150図	37号住居跡土層断面	142
第151図	37号住居跡	143
第152図	37号住居跡出土遺物(1)	143
第153図	37号住居跡出土遺物(2)	144
第154図	38号住居跡	145
第155図	38号住居跡竈土層断面	146
第156図	38号住居跡掘り方	146
第157図	38号住居跡出土遺物(1)	147
第158図	38号住居跡出土遺物(2)	148
第159図	38号住居跡出土遺物(3)	149
第160図	38号住居跡出土遺物(4)	150
第161図	39号住居跡及び出土遺物	151
第162図	40号住居跡及び出土遺物	152
第163図	41号住居跡土層断面	153
第164図	41号住居跡	154
第165図	41号住居跡炭化材出土状態及び掘り方 及び出土遺物(1)	155
第166図	41号住居跡出土遺物(2)	156
第167図	42号住居跡	156
第168図	42号住居跡土層断面及び出土遺物	157
第169図	43号住居跡及び出土遺物	158
第170図	44号住居跡土層断面	159
第171図	44号住居跡	160
第172図	44号住居跡出土遺物(1)	161
第173図	44号住居跡出土遺物(2)	162
第174図	44号住居跡出土遺物(3)	163
第175図	45号住居跡	164

第176図	45号住居跡土層断面及び出土遺物	165
第177図	46号住居跡	165
第178図	46号住居跡出土遺物	166
第179図	47号住居跡	167
第180図	47号住居跡出土遺物	168
第181図	48・49・55号住居跡	170
第182図	48・49・55号住居跡竈断面及び掘り方	171
第183図	48号住居跡出土遺物	172
第184図	49号住居跡出土遺物(1)	172
第185図	49号住居跡出土遺物(2)	173
第186図	55号住居跡出土遺物	173
第187図	50号住居跡	174
第188図	50号住居跡土層断面	175
第189図	50号住居跡掘り方	175
第190図	50号住居跡出土遺物(1)	176
第191図	50号住居跡出土遺物(2)	177
第192図	50号住居跡出土遺物(3)	178
第193図	50号住居跡出土遺物(4)	179
第194図	51号住居跡	180
第195図	51号住居跡断面図	181
第196図	51号住居跡竈	182
第197図	51号住居跡掘り方	182
第198図	51号住居跡遺物出土状態	183
第199図	51号住居跡出土遺物(1)	184
第200図	51号住居跡出土遺物(2)	185
第201図	51号住居跡出土遺物(3)	186
第202図	51号住居跡出土遺物(4)	187
第203図	51号住居跡出土遺物(5)	188
第204図	51号住居跡出土遺物(6)	189
第205図	51号住居跡出土遺物(7)	190
第206図	52・53号住居跡	191
第207図	52号住居跡出土遺物(1)	192
第208図	52号住居跡出土遺物(2)	193
第209図	53号住居跡出土遺物	194
第210図	54号住居跡	195
第211図	54号住居跡出土遺物	196
第212図	56号住居跡及び出土遺物	197
第213図	57号住居跡及び出土遺物	198
第214図	58号住居跡	199
第215図	58号住居跡出土遺物	200
第216図	59号住居跡	201
第217図	59号住居跡土層断面	202
第218図	59号住居跡出土遺物	203
第219図	60・63号住居跡	204
第220図	60・63号住居跡竈土層断面及び掘り方	205
第221図	60号住居跡出土遺物(1)	206
第222図	60号住居跡出土遺物(2)	207
第223図	63号住居跡出土遺物	207
第224図	61号住居跡及び竈土層断面	208
第225図	61号住居跡掘り方及び出土遺物	209
第226図	62号住居跡	209
第227図	62号住居跡出土遺物	210
第228図	64号住居跡	211
第229図	64号住居跡掘り方及び出土遺物	212
第230図	65号住居跡及び出土遺物	213
第231図	1号鍛冶跡断面	214
第232図	1号鍛冶跡	215
第233図	1号鍛冶跡鉄、鉄滓出土状態	216
第234図	1号鍛冶跡石出土状態	216
第235図	1号鍛冶跡出土遺物(1)	216
第236図	1号鍛冶跡出土遺物(2)	217
第237図	1号鍛冶跡出土遺物(3)	218

第238図	1号鐵治跡土器出土状態及び出土遺物(4)	219	第300図	1～8号土坑	288
第239図	1号鐵治跡土器出土状態及び出土遺物(5)	220	第301図	9～18号土坑	289
第240図	竪立柱建物位置図	221	第302図	19～27号土坑	290
第241図	1・2号竪立柱建物	223	第303図	28～32・34・35・38・41号土坑	291
第242図	2号竪立柱建物断面	224	第304図	36・37・39・40・44・45号土坑	292
第243図	2号竪立柱建物断面及び出土遺物	224	第305図	42・43・46号土坑	293
第244図	3号竪立柱建物	225	第306図	47～54号土坑	294
第245図	4～6号竪立柱建物	227	第307図	55～61・70号土坑	295
第246図	4～6号竪立柱建物土層断面	228	第308図	62～68号土坑	296
第247図	9号竪立柱建物及び出土遺物	229	第309図	69・71～80号土坑	297
第248図	10号竪立柱建物	230	第310図	81～85・88～94・102号土坑	298
第249図	11号竪立柱建物及び出土遺物	231	第311図	95～101・104・105・115号土坑	299
第250図	12・13号竪立柱建物	232	第312図	103・106～111号土坑	300
第251図	14・15号柱穴列	233	第313図	112～114・116～121・123・124号土坑	301
第252図	16号竪立柱建物	235	第314図	122・125～128・138・140号土坑	302
第253図	17号竪立柱建物	236	第315図	129～135号土坑	303
第254図	18号竪立柱建物	237	第316図	141～143・146・147・151・152・154号土坑	304
第255図	21号竪立柱建物	238	第317図	153・157・159～165号土坑	305
第256図	22号竪立柱建物	239	第318図	167(a-c)～169・171・172・184・185号土坑	306
第257図	23号竪立柱建物	240	第319図	173～181号土坑	307
第258図	24号竪立柱建物	241	第320図	183・186～189・191～193・195～197号土坑	308
第259図	3号竪穴遺構及び出土遺物	243	第321図	194・198～201・203・204号土坑	309
第260図	4号竪穴遺構	243	第322図	2・31・32・42・103号土坑出土遺物	310
第261図	溝位置図	244	第323図	103・121・135・148号土坑出土遺物	311
第262図	1・2・8・15号溝土層断面	246	第324図	151・164号土坑出土遺物	312
第263図	26・27号溝	247	第325図	184・188・189号土坑出土遺物	313
第264図	26・27号溝土層断面	248	第326図	1・2区グリッド出土遺物	318
第265図	1・4・11・21・22・26号溝出土遺物	249	第327図	2・4区グリッド出土遺物	319
第266図	27号溝出土遺物(1)	250	第328図	5区グリッド出土遺物	320
第267図	27号溝出土遺物(2)	251	第329図	分析を行った鉄物の外観	321
第268図	井戸位置図	252	第330図1	鉄器から採取した試料片の マクロおよびミクロ組織	322
第269図	1号井戸掘り方	253	第330図2	鉄器から採取した試料片の マクロおよびミクロ組織(つづき)	323
第270図	1号井戸全体図	254	第331図	No.1釘、No.6鏝、No.7刀子、No.11鏝、No.12 鏝から採取した試料片のマクロ組織	323
第271図	1号井戸散・傾斜面出土遺物(1)	255	第332図	No.1釘から採取した試料片に見いだされた 非金属介在物の EPMA による分析結果	324
第272図	1号井戸出土遺物(2)	256	第333図	No.6鏝から採取した試料片に見いだされた 非金属介在物の EPMA による分析結果	324
第273図	1号井戸出土遺物(3)	257	第334図	No.11鏝から採取した試料片に見いだされた 非金属介在物の EPMA による分析結果	325
第274図	2～5号井戸跡	259	第335図1	No.2刀子、No.5釘、No.7刀子、No.9釘、No.12鏝 から採取した試料片に見いだされた非金属介在 物の EPMA による分析結果	325
第275図	6・7・9号井戸跡	260	第335図2	No.2刀子、No.5釘、No.7刀子、No.9釘、No.12鏝 から採取した試料片に見いだされた非金属介在 物の EPMA による分析結果(つづき)	326
第276図	8・10号井戸跡	261	第336図	鉄物の外観	327
第277図	11～14・16号井戸跡	262	第337図1	鉄物のマクロおよびミクロ組織	328
第278図	15号井戸跡	263	第337図2	鉄物のマクロおよびミクロ組織(つづき)	329
第279図	4・5・6号井戸跡出土遺物(1)	264	第337図3	鉄物のマクロおよびミクロ組織(つづき)	330
第280図	6号井戸跡出土遺物(2)	265	第338図	No.14鉄押の EPMA による分析結果	340
第281図	6号井戸跡出土遺物(3)	266	第339図	No.15鉄押の EPMA による分析結果	341
第282図	6号井戸跡出土遺物(4)	267	第340図	No.21鉄塊の黒鉄層に見いだされた結晶(IP-Cm) の EPMA による分析結果	341
第283図	6・8・9号井戸跡出土遺物(5)	268	第341図	No.21鉄塊に付着した鉄押の EPMA に よる分析結果	342
第284図	10・11号井戸跡出土遺物	269	第342図	推定される鋼造法	342
第285図	12・13・15・16号井戸跡出土遺物	270	第343図	三角・菱形ダイヤグラム位置分類図	346
第286図	粘土探掘坑位置図	271	第344図	三角・菱形ダイヤグラム	349
第287図	粘土探掘坑全体図	272	第345図	Qt-P相図	350
第288図	1～3号粘土探掘坑	273			
第289図	5～7号粘土探掘坑	274			
第290図	7号粘土探掘坑断面及び8号粘土探掘坑	275			
第291図	1・1～2・2号粘土探掘坑出土遺物(1)	276			
第292図	2号粘土探掘坑出土遺物(2)	277			
第293図	道路位置図	278			
第294図	1・2号道路位置図	279			
第295図	3号道路土層断面	281			
第296図	3・4号道路位置図及び土層断面	183・284			
第297図	4号道路土層断面	285			
第298図	3・4・5・7号道路出土遺物	286			
第299図	土坑位置図	287			

第346図	X線回折試験チャート(1)	350	第356図	29号住居跡出土炭化材の樹種	362
第347図	X線回折試験チャート(2)	351	第357図	今井道上・道下遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真	363
第348図	X線回折試験チャート(3)	352	第358図	今井道上・道下遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真	364
第349図	土器胎土電子顕微鏡写真(1)	353	第359図	竪立柱建物群位置図	369
第350図	土器胎土電子顕微鏡写真(2)	354	第360図	2号・5号竪立柱建物柱芯想定図	369
第351図	土器胎土電子顕微鏡写真(3)	355	第361図	2号・5号竪立柱建物推定平面図(1/120)	370
第352図	土器胎土電子顕微鏡写真(4)	356	第362図	2号竪立柱建物推定断面図(1/100)	370
第353図	土器胎土電子顕微鏡写真(5)	357	第363図	方形区画測定図	372
第354図	材組織とその名称	358	第364図	今井道上・道下遺跡全体図(折り込み)	
第355図	41号住居跡出土炭化材の樹種	361			

表 目 次

表1	旧石器時代の石器一覧(1)	19
表2	旧石器時代の石器一覧(2)	20
表3	旧石器時代の石器一覧(3)	21
表4	旧石器時代の石器一覧(4)	22
表5	縄文時代石器一覧	32
表6	2号～16号井戸跡一覧	258
表7	土坑一覧(1)	314
表8	土坑一覧(2)	315
表9	土坑一覧(3)	316
表10	土坑一覧(4)	317
表11	鉄器・鉄滓分析資料	322
表12	鉄器の分析結果	323
表13	鉄滓の分析結果	325
表14	胎土性状表	347
表15	タイプ分類一覧表	348
表16	住居跡等出土材の樹種	359
表17	柱間寸法一覧表	368

写真図版目次

PL. 1	5区1号ブロック遺物出土状況		
PL. 2	1号住居跡東半部分 1号住居跡西半部分		
PL. 3	2号住居跡遺物出土状況 2号住居跡全景		
PL. 4	3号住居跡掘り方全景 3号住居跡断面 3号住居跡遺物出土状況		
PL. 5	4号住居跡全景 4号住居跡遺物出土状況		
PL. 6	5号住居跡全景 5号住居跡断面		
PL. 7	6号住居跡全景 6号住居跡遺物出土状況		
PL. 8	7号住居跡全景 7号住居跡電 7号住居跡貯蔵穴 7号住居跡遺物出土状況全景		
PL. 9	8号住居跡全景 8号住居跡遺物出土状況 8号住居跡電遺物出土状況 8号住居跡掘り方全景		
PL. 10	9号住居跡全景 9号住居跡電遺物出土状況 9号住居跡遺物出土状況全景		
PL. 11	10号住居跡全景 10号住居跡電 10号住居跡電断面		
PL. 12	12号住居跡遺物出土状況 12号住居跡電遺物出土状況 12号住居跡掘り方全景		
PL. 13	13号住居跡全景 13号住居跡電 13号住居跡掘り方(部分)		
PL. 14	15号住居跡掘り方全景 15号住居跡遺物出土状況		
PL. 15	16号住居跡全景 16号住居跡断面 16号住居跡遺物出土状況		
PL. 16	17号住居跡全景 17号住居跡遺物出土状況		
PL. 17	18号住居跡遺物出土状況 18号住居跡土層断面 18号住居跡・19号住居跡全景		
PL. 18	19号住居跡全景 19号住居跡貯蔵穴 19号住居跡電脇遺物出土状況		
PL. 19	20号住居跡全景 20号住居跡土層断面 20号住居跡掘り方全景		
PL. 20	21号住居跡全景 21号住居跡土層断面 21号住居跡電		
PL. 21	22号住居跡全景 22号住居跡土層断面 22・23号住居跡重複関係		
PL. 22	23号住居跡全景		
		23号住居跡電	
PL. 23	24号住居跡全景 24号住居跡掘り方全景		
PL. 24	25号住居跡全景 25号住居跡遺物出土状況		
PL. 25	26号住居跡全景 26号住居跡電断面 26号住居跡掘り方全景		
PL. 26	27号住居跡全景 27号住居跡電 27号住居跡ビットP3断面 27号住居跡掘り方全景		
PL. 27	29号住居跡全景 29号住居跡電遺物出土状況 29号住居跡貯蔵穴遺物出土状況		
PL. 28	30号住居跡全景 30号住居跡電全景		
PL. 29	33号住居跡全景 33号住居跡南壁炭化材出土状況		
PL. 30	33号住居跡電遺物出土状況 33号住居跡電全景 33号住居跡電断面		
PL. 31	34号住居跡全景 34号住居跡電掘り方 34号住居跡電遺物出土状況 34号住居跡掘り方全景		
PL. 32	35号住居跡全景 35号住居跡電遺物出土状況 35号住居跡北袖窓遺物出土状況 35号住居跡掘り方全景		
PL. 33	36号住居跡全景 37号住居跡全景		
PL. 34	37号住居跡電全景 37号住居跡貯蔵穴 37号住居跡掘り方全景		
PL. 35	38号住居跡全景 38号住居跡掘り方		
PL. 36	39号住居跡土層断面 40号住居跡全景		
PL. 37	41号住居跡 41号住居跡電		
PL. 38	41号住居跡炭化材出土状況		
PL. 39	42号住居跡掘り方 42号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 42号住居跡全景		
PL. 40	43号住居跡全景 43号住居跡電掘り方 43号住居跡掘り方全景		
PL. 41	44号住居跡全景 44号住居跡電 44号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 44号住居跡掘り方全景		
PL. 42	45号住居跡全景 45号住居跡電掘り方 46号住居跡全景 46号住居跡土層断面 46号住居跡遺物出土状況		

- PL. 43 47号住居跡全景
47号住居跡電掘り方
47号住居跡掘り方
- PL. 44 48・49・55号住居跡全景
48号住居跡電・貯蔵穴
48・49・55号住居跡掘り方
- PL. 45 50号住居跡全景
50号住居跡電
50号住居跡掘り方
- PL. 46 51号住居跡全景
51号住居跡遺物出土状況
- PL. 47 52号住居跡電部分
52号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
52号住居跡土層断面
52・53号住居跡全景
- PL. 48 54号住居跡全景
54号住居跡電
54号住居跡南壁遺物出土状況
54号住居跡掘り方
- PL. 49 56号住居跡全景
57号住居跡全景
- PL. 50 59号住居跡全景
59号住居跡電
59号住居跡断面
- PL. 51 60・63号住居跡全景
60号住居跡電
60号住居跡電断面
60・63号住居跡掘り方
- PL. 52 61号住居跡全景
61号住居跡電
61号住居跡電掘り方
61号住居跡掘り方
- PL. 53 1号竪穴遺物出土状況
1号竪穴掘り方全景
- PL. 54 2号竪立柱建物跡土間部分断面
2号竪立柱建物跡土間部分
- PL. 55 1号竪立柱建物跡中央右下ビット
3号竪立柱建物跡全景
- PL. 56 2号竪立柱建物跡全景
- PL. 57 1～8号竪立柱建物跡全景
- PL. 58 9号竪立柱建物跡全景
10号竪立柱建物跡全景
- PL. 59 11号竪立柱建物跡全景
12・13号竪立柱建物跡全景
- PL. 60 16号竪立柱建物跡全景
17号竪立柱建物跡全景
- PL. 61 21号竪立柱建物跡全景
22号竪立柱建物跡全景
- PL. 62 23号竪立柱建物跡全景
24号竪立柱建物跡全景
- PL. 63 3号竪穴遺物全景
4号竪穴遺物全景
- PL. 64 26・27号溝
27号溝遺物出土状況
- PL. 65 1号井戸自然湧水状態
1号井戸石敷断面
1号井戸を組む溝
1号井戸新井戸
1号井戸傾斜面遺物出土状況
- PL. 66 1号井戸～5号井戸・7号井戸
- PL. 67 9～12号井戸・14号井戸・15号井戸
- PL. 68 15号井戸
16号井戸
- PL. 69 粘土探堀坑検出状況
- PL. 70 1～3号粘土探堀坑
1～2号粘土探堀坑
2号粘土探堀坑
- PL. 71 3号道路跡
3～7号道路跡全景
3号道路跡西側下面
3号道路跡土構状部分
3号道路跡側溝断面
- PL. 73 4号道路跡全景
- PL. 74 1号道路跡全景
- PL. 75 母岩1 接合資料1
母岩1 接合資料2
- PL. 76 母岩2 接合資料1
母岩3 接合資料4
- PL. 77 包含層出土縄文土器
- PL. 78 縄文時代の石函(1)
- PL. 79 縄文時代の石函(2)
- PL. 80 1号住居跡出土遺物
2号住居跡出土遺物
- PL. 81 3号住居跡出土遺物
4号住居跡出土遺物
5号住居跡出土遺物
- PL. 82 6号住居跡出土遺物
7号住居跡出土遺物
- PL. 83 9号住居跡出土遺物
10号住居跡出土遺物
11号住居跡出土遺物
- PL. 84 12号住居跡出土遺物
13号住居跡出土遺物
- PL. 85 14号住居跡出土遺物
15号住居跡出土遺物
- PL. 86 16号住居跡出土遺物
- PL. 87 16号住居跡出土遺物
17号住居跡出土遺物(1)
- PL. 88 17号住居跡出土遺物(2)
19号住居跡出土遺物
- PL. 89 22号住居跡出土遺物
23号住居跡出土遺物
- PL. 90 25号住居跡出土遺物
- PL. 91 24号住居跡出土遺物
26号住居跡出土遺物
27号住居跡出土遺物
- PL. 92 28号住居跡出土遺物
29号住居跡出土遺物
- PL. 93 30号住居跡出土遺物
31号住居跡出土遺物
34号住居跡出土遺物
- PL. 94 33号住居跡出土遺物
- PL. 95 35号住居跡出土遺物(1)
- PL. 96 35号住居跡出土遺物(2)
36号住居跡出土遺物
37号住居跡出土遺物
- PL. 97 38号住居跡出土遺物(1)
- PL. 98 38号住居跡出土遺物(2)
39号住居跡出土遺物
- PL. 99 40号住居跡出土遺物
41号住居跡出土遺物
42号住居跡出土遺物
43号住居跡出土遺物

	45号住居跡出土遺物		1・4・11号溝出土遺物
PL-100	44号住居跡出土遺物		26号溝出土遺物
	47号住居跡出土遺物	PL-111	27号溝出土遺物
	48号住居跡出土遺物	PL-112	1号井戸出土遺物(1)
PL-101	49号住居跡出土遺物	PL-113	1号井戸出土遺物(2)
	50号住居跡出土遺物	PL-114	4・6号井戸出土遺物(1)
PL-102	51号住居跡出土遺物(1)	PL-115	6号井戸出土遺物(2)
PL-103	51号住居跡出土遺物(2)	PL-116	9号井戸出土遺物
PL-104	51号住居跡出土遺物(3)		10号井戸出土遺物
	52号住居跡出土遺物		11号井戸出土遺物
PL-105	53号住居跡出土遺物		13号井戸出土遺物
	54号住居跡出土遺物		15号井戸出土遺物
	57号住居跡出土遺物		1・2号粘土採掘坑出土遺物
	58号住居跡出土遺物	PL-117	3号道路跡出土遺物
	59号住居跡出土遺物		4号道路跡出土遺物
PL-106	60号住居跡出土遺物		27号土坑出土遺物
	61号住居跡出土遺物		31号土坑出土遺物
	62号住居跡出土遺物		42号土坑出土遺物
	64号住居跡出土遺物		121号土坑出土遺物
	65号住居跡出土遺物		164号土坑出土遺物
PL-107	1号鍛冶跡出土遺物(1)		184号土坑出土遺物
PL-108	1号鍛冶跡出土遺物(2)		188号土坑出土遺物
PL-109	1号鍛冶跡出土鉄滓		189号土坑出土遺物
PL-110	11号竪立出土遺物	PL-118	151号土坑出土遺物
	2号竪立出土遺物		184号土坑出土遺物
	3号竪穴遺構出土遺物		

第1章 調査に至る経過と方法

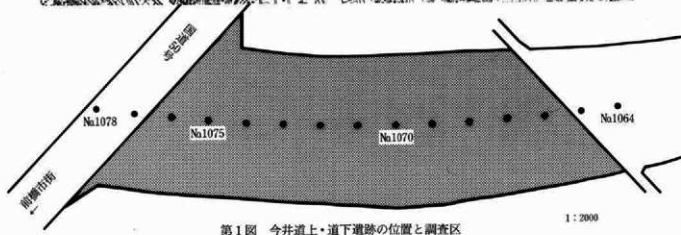
1 調査に至る経過

上武道路は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、深谷バイパス上武インターチェンジを起点とし利根川を渡って群馬県に入り、前橋市田口町を終点とする延長41.4kmのバイパス道路として計画された。これをうけて、群馬県教育委員会は予定路線地域内幅2kmの範囲において埋蔵文化財の分布調査を実施し、総計472カ所の遺跡を確認した。

昭和48年4月には建設省と群馬県教育委員会との間で「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が取り交わされ、昭和49年1月から発掘調査が実施される運びとなった。調査は新田郡尾島町地内の遺跡を皮切りに順次北方へと進められ、昭和61年度にはすでに

都市計画決定がなされていた国道50号線との合流地点（前橋市今井町）に達することとなった。

当初、上武道路の埋蔵文化財調査は群馬県教育委員会文化財保護課によって行われ、昭和48年度の尾島町下江田遺跡から翌年度の歌舞伎遺跡、更に佐波郡境町西今井遺跡・三ツ木遺跡・小角田前遺跡の調査を経て、昭和52年度の下湧名塚越遺跡までがこれに該当する。昭和53年7月の財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の発足にともない、上武道路にかかわる発掘調査は同事業団に引き継がれることとなった。本遺跡は国道50号合流地点にあたり、昭和61年10月1日～昭和62年10月31日の13か月間にわたって発掘調査が実施されることとなり、地名から今井道上・道下遺跡と命名された。道路横断では、S T No.1065～1077に相当する。



第1図 今井道上・道下遺跡の位置と調査区

1:2000

2 調査の方法

今井道上・道下遺跡は、すでに奈良・平安時代の集落跡として調査の行われていた二之宮谷地遺跡に西接しており、調査区南東部では同集落の西限を確認することに重点が置かれた。調査区中央の谷部では浅間As-B軽石の堆積と黒色土層が確認されていたため、水田あるいは溜井等の存在が予想された。調査区北西部の国道50号線と交差する地点では、台地上で多量の土器片（古墳時代～平安時代）が散布しており、集落跡の存在が確実視された。また、国道50号線の南方約50mの地点には通称「あづま道」と呼ばれる市道が東西に延びており、これが古代官道の東山道駅路推定地でもあったことから、その存否や実態解明にむけて本遺跡の発掘調査に期待がかけられていた。以上の調査前所見に基づき、調査区全域（面積16,800㎡）を対象として表土掘削、遺構調査を行うこととなった。

調査区は国家座標に従い、一辺100メートルの方眼を1区画として調査範囲を6区に大きく分割し、北西側より1～6区と命名した（別添遺跡全体図参照）。各区は更に一辺4mのグリッドに細分され、北西隅を起点として東方向にアルファベット（A～Y）、南方向に算用数字（0～24）を与えて各グリッドを呼称した。

発掘調査は、まず大型掘削機械により全面的に表土削除を行い、遺物包含層及び遺構確認面に達した段階で、人力による調査を行った。

遺構の平面実測は、このグリッド杭を使用して、平板測量を行った。1/20の縮尺を基本としており、竈、貯蔵穴、柱穴などの微細図については1/10を基本とした。

なお、遺構記録は実測図と写真を主体としたが、粘土探掘坑では、断面記録として樹脂を用いた剝取りを実施しており、朝鮮馬県埋蔵文化財調査事業団で保管してある。

3 調査日誌抄

調査開始から終了までの主な調査過程を日誌抄としてまとめた。

昭和61年10月1日 調査区の南東部から大型掘削機械による表土除去作業を開始。同時に遺構確認作業も始める。

昭和61年10月15日 調査区南東端で鍛冶跡と推定される竪穴1基を確認。中央の谷部以東では他に目立った遺構は確認できず、わずかに縄文土器と石器の散布が見られた。

昭和61年10月16日 調査区南東半の西に緩傾斜する台地上で旧石器試掘を開始。

昭和61年11月28日 旧石器試掘で、浅間一板鼻褐色軽石群を含む硬質ロームから暗色帯にかけて石器剥片が出土。

昭和61年12月3日 旧石器ブロック確認のため、掘削範囲を拡張する。

昭和62年3月13日 調査区北西部の表土掘削と遺構確認作業を開始。

昭和62年3月31日 昭和61年度分の調査を終了する。旧石器ユニット1カ所、平安時代の鍛冶跡1基、土坑42基、溝2条を検出。

昭和62年4月15日 事前の準備期間を経た後、昭和62年度の調査を開始。調査区北西部を対象として遺構確認作業を行う。

昭和62年5月11日 調査区中央の谷部で礫を敷き詰めた井戸1基と粘土探掘坑を確認する。

昭和62年5月27日 調査区北西部台地上で60軒以上の竪穴住居からなる集落跡の存在が判明し、掘削調査を開始する。

昭和62年7月30日 調査区を横断する通称「あづま道」に沿って道路跡を検出、精査を行う。

昭和62年8月31日 調査区北西部台地上で旧石器試掘を開始。以後、集落跡の調査と併行して行う。

昭和62年10月31日 調査終了。この間、調査成果を公開するため遺跡現地説明会を開催。検出された遺構は、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡63軒、掘立柱建物跡24棟、中世以降の竪穴遺構4基、道路跡7条、平安時代以降の溝25条、井戸16基、土坑261基であった。

第2章 周辺の環境と歴史的背景

1 地理環境

今井道上・道下遺跡は、赤城山頂(1,828m)から南方に約20km離れた南麓端に位置する。標高85m前後の南方に緩く傾斜する低台地に立地しており、周辺も同様に高低差の少ない平坦な地形がひろがる。この地点からは、北方に裾野を大きく広げた典型的な成層火山である赤城山の雄姿を、何ひとつ遮るものなく眺望することができる。また南方には、旧利根川の流路である広瀬川低地帯を挟んで、平坦な前橋台地が広がり、そのまま広大な関東平野へと続いて行く。この場所は日照良好で全方位に目晴らしの効く反面、冬から初春にかけては群馬のからっ風として有名な「赤城風」が直に吹き荒れ、極端に乾燥が進む地域でもある。

赤城山の裾野は、火砕流堆積物や扇状地堆積物から構成されており、南麓では中腹より流下する白川、荒砥川、粕川等の主要河川の他、湧水点を谷頭とする小河川の侵食による開析谷が樹枝状に発達している。南麓中央部分には、赤城山形成初期の梨木泥流に関連する「流れ山」が多く点在する。

広瀬川低地帯は、現利根川河畔の前橋市田口町付近から南東方向に延びる沖積地で、幅3～2kmの広さをもつ。現在は広瀬川と桃木川が流れているが、かつて利根川の流路であったと推定されている。現在は完新世の河川堆積物によって覆われ、ほぼ平坦な景観を呈しているが、それ以前の更新世に形成された微高地(河成段丘)が帯状に断続しており、ここに縄文時代後期まで満ちうる遺跡の存在したことが判明している(註1)。なお、広瀬川低地帯と赤城山南面地形とは比高差2～5mの崖で画されており、この崖から北方に約500m離れた位置に本遺跡が存在する。

本遺跡の立地する低台地は、西の荒砥川、東は宮川の開析谷によって画されており、東西幅は約800m

である。地形的には後期更新世前半に形成されたとされる荒砥川扇状地に分類され、その南西扇端部にあたる。基盤となる扇状地礫層の上には、榛名八崎軽石層(Hr-HP)、浅間板鼻褐色軽石層(As-BP)、浅間板鼻黄色軽石層(As-YP)等のテフラを含むローム層が乗る。また、この地域では、ローム層の最下層にあたる礫層の上位から榛名八崎軽石層までの間に、厚い粘土層の存在することが判明しており、本遺跡で検出された粘土探掘坑(第3章-7)との関連が注目される。

荒砥川の開析谷は、幅500m、奥行き14kmと、赤城山南面に形成された開析谷のなかでも最も広大な流域面積をもっており、本遺跡の西方で広瀬川低地帯と合流している。一方、宮川の開析谷は、幅300～100m、奥行き6kmと比較的小規模であり、縄文時代の砂壤土や古墳時代以後の泥炭層が厚く堆積している。これらの開析谷は、弥生時代以降の水田可耕地として重要な位置を占めた事は容易に推測できるし、そのことは実際の遺跡分布や水田址の検出によってすでに実証もされている(註2)。

なお、この低台地上には開析の進んでいない小規模な窪地が幾つかの箇所で見られる。本遺跡調査区の中央部分では、古墳時代以降の集落を載せる台地の最高位より3m低い緩やかな窪地となっており、30cm前後の厚さで黒泥土が堆積していた。東に隣接する二之宮谷地遺跡においても同様の窪地が見られ、浅間As-B(推定1,108年)に覆われた水田址が検出されている。これらは、黒泥土の下位にローム層が見られることから、完新世に河川によって開析された谷ではなく、それ以前の更新世に形成された扇状地面に残されたものと考えられよう。

2 歴史的背景

赤城山南麓は群馬県内でも遺跡の密度が高い地域として知られる。特に、本遺跡の存する標高200m以



第2図 周辺の地形と遺跡の分布

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 今井道上・道下遺跡 (本報文による) | 19 箕井八日市遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安・中近世) |
| 2 今井道上遺跡 (古墳・奈良・平安) | 20 小島田八日市遺跡 (縄文・古墳・中世) |
| 3 二之宮谷地遺跡 (旧石器・縄文・古墳・奈良・平安) | 21 荒砥北三木堂遺跡 (旧石器・縄文・古墳・奈良・平安) |
| 4 二之宮洗橋遺跡 (古墳・奈良・平安) | 22 荒砥大日塚遺跡 (古墳・奈良・平安) |
| 5 荒砥洗橋遺跡 (古墳・奈良・平安・近世) | 23 荒砥北原遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安) |
| 6 二之宮千足遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安・中世) | 24 鶴ヶ谷遺跡群 (弥生・古墳・奈良・平安) |
| 7 荒砥宮西遺跡 (古墳・奈良・平安) | 25 荒砥上ノ坊遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安) |
| 8 宮川遺跡 (弥生・古墳・奈良・平安) | 26 荒口前原遺跡 (弥生・平安) |
| 9 荒砥天之宮遺跡 (縄文・弥生・古墳・奈良・平安) | 27 荒砥宮田遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安・中近世) |
| 10 二之宮宮下西遺跡 (古墳・奈良・平安) | 28 荒砥諏訪遺跡 (古墳) |
| 11 二之宮宮下東遺跡 (古墳・奈良・平安) | 29 柳久保遺跡群 (旧石器・縄文・古墳・奈良・平安) |
| 12 二之宮宮東遺跡 (縄文・平安・中近世) | 30 頭無遺跡 (弥生・古墳・平安) |
| 13 二之宮赤城神社 (平安・中近世) | 31 荒砥中照敷Ⅰ・Ⅱ遺跡 (古墳・平安) |
| 14 荒砥青柳遺跡 (古墳・奈良・平安) | 32 荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡 (古墳・奈良・平安) |
| 15 荒砥島原遺跡 (弥生・古墳・奈良・平安) | 33 荒砥荒子遺跡 (古墳・奈良・平安) |
| 16 宮原遺跡 (古墳) | 34 女堀 (中世) |
| 17 今井神社古墳と古墳群 | |
| 18 今井白山遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安) | |

下の平坦な地帯は、多くの湧水地やこれを谷頭とする開折谷の発達が見られ、弥生時代以降の生産基盤となる恰好の水田可耕地を提供している。当地域では、旧石器時代から始まり中世の城館址に至るまで、各時代の遺跡が連続と存在することが知られており、中でも古墳が密集する点では県内でも有数の地域である。ここでは、本遺跡を中心とした今井・二之宮地域における各時代の遺跡の分布とその様相を史的に概観してみよう。

旧石器時代 かつて、今井地区でルヴァア型石核の発見が報じられたことがある(註3)が、これは表探資料であり、出土層位が不明であったために、同じ赤城南麓の不二山遺跡や権現山遺跡のように大きく注目されることはなかった。しかしその後の大規模工事に伴う発掘調査によって、当地域での旧石器文化の存在が疑わしく知られるようになった。本遺跡の東側に隣接する二之宮谷地遺跡では、暗色帯からフレイクや礫群が検出され、南東700mほど離れた二之宮千足遺跡では、暗色帯から礫群を伴うブロック2カ所を検出した。また、本遺跡の北方500mの荒砥北三木堂遺跡では木葉形および柳葉形尖頭器から構成される尖頭器石器群が出土している。更に本遺跡から北東約2kmの同一台地の奥部に位置する頭無遺跡では、荒屋型彫器を伴う細石刃、細石刃核等から構成される石器群が発見された。これは当地域での北方系石器文化の存在を示すとともに、石材が当地域に一般的な黒色頁岩や安山岩ではなく、珪質頁岩を用いる異質性が注目される。以上は、ほぼ直径2kmの範囲に分布するが、さらに周囲に目を転ずれば、石山遺跡、下触牛伏遺跡、飯土井中央遺跡、三ツ屋遺跡等が存在し、分布密度の非常に高い地域であることが知られる。

縄文時代 草創期から遺跡の分布が見られ、小島田八日市遺跡では、草創期の土坑と微隆起線文土器、荒砥北三木堂遺跡や荒砥北原遺跡では燃糸文土器の出土が知られる。他にも柳久保遺跡、下鶴谷遺跡等があげられ、次の早期まで含めて、比較的遺跡が集積する地域といえる。早期の遺跡数は草創期と大き

く変わらないが、二之宮千足遺跡で集石土坑と埋壘、頭無遺跡では陥穴群等の遺構が検出されている。前期になると小規模集落の存在が認められるようになり、遺跡数も増加して縄文時代におけるひとつのピークを迎えられる。荒砥北三木堂、下鶴谷、荒砥宮田、荒砥上ノ坊等で住居跡が検出されており、土器のみ出土例を加えれば、当地域の台地部分全体に濃密な分布が見られる。中期では後半の時期に分布が見られるが、本遺跡周辺では集落の検出が少なく、むしろ南方2kmの荒砥前原や、東方3kmの荒砥二之壠に見られる。後期に至って遺跡数は減少し、荒砥二之壠で集落をみるほか、まとまった資料は少ない。晩期ではほとんど分布が見られなくなる。赤城南麓や大間々扇状地での遺跡分布の研究によって、前期は海拔高度の高い丘陵地、中期は高度の低い台地と占地傾向の異なることが明らかにされている(註4)が、本遺跡の周辺地域は台地でありながらやや前期の遺跡数が勝っているようである。

弥生時代 当地域では、縄文晩期以来弥生時代中期中葉までほとんど遺跡は見られない。弥生時代の中期後半になってようやくその分布が知られるようになる。本遺跡の西方、荒砥川右岸の低台地上に立地する今井白山遺跡では、壺を伴う墓坑1基が確認されている。この他には、荒口前原、荒砥北三木堂、荒砥前原、荒砥島原、頭無遺跡等で集落の存在が判明しており、また本遺跡の南東約4kmに存する伊勢崎市西太田遺跡や、北東へ約5km離れた粕川村西迎遺跡でも同時期の集落が見られる。広瀬川低地帯の左岸に分布するこれらの遺跡は、当時の中枢地域と考えられる対岸の高崎市から前橋市西部での集落遺跡に比べて規模が小さく、分布範囲も限られているが、少数ながら分布密度に関してはほとんど遜色なく、またこれ以東の地域では遺跡の存在自体が希薄であることからひとつの小地域圏を形成していた可能性が高い。更にこの地域では、東北地方南部の土器の濃厚な影響や南関東との交流が伺えるなど、特異な土器様相を示すことから、当時における地域間交流の中継基地的な性格も指摘される(註5)。しか

し、これらの遺跡は継続される事なく、しばらく断絶し、次に集落が形成されるようになるのは後期後半に至ってからである。本遺跡周辺の今井～二之宮地区では希薄であるが、北東へ約4kmの西大室地区で集落の存在が知られる。出土土器は、広瀬川低地帯以西に分布の中心をもつ樽式と在地と思われる赤井戸式が混在し、一部に古墳時代初頭の土器を伴うのが特徴である。これは新たにこの地域に進出した拠点集落と考えられ、次の古墳時代にも引き継がれていく。

古墳時代 前期は、弥生時代には見られなかった遺跡の爆発的な増大と広範な展開によって特徴づけられる。荒砥上之坊、荒砥大日塚、荒砥宮田等では集落が、荒砥諏訪、荒砥島原、荒砥北原では周溝墓が検出されており、これらの遺跡分布から、当地域の開析谷の開発が急激に高まったことが知られる。なお、この時期の古墳としては、広瀬川低地帯の対岸に位置する八幡山古墳(全長130m、前方後方墳)や天神山古墳(全長129m、前方後円墳)が知られており、当地域との支配従属関係が注目される。前期で見られた遺跡分布は、その後の古墳時代全般を通じて継続され、次第に分布域も広げ、遺跡自体の規模も拡大する。中期には、柳久保や頭無遺跡のような集落のほか、本遺跡の北方の地域で、豪族の居館跡と推定される丸山遺跡、梅木遺跡、荒砥荒子遺跡の3カ所が知られている。いずれも方形の堀で囲まれ、内側に櫓列を巡らし、内部に掘立柱建物や竪穴等の居住施設を設けたといった共通する構造をもつ。時期は5世紀後半から6世紀初頭に限定され、同時期の集落や生産域、墓域との関連性の解明が課題となっている。また、本遺跡の西方3kmの箕井八日市遺跡でも、古墳時代中期と推定される幅7.6mの堀が検出されており、全形は不明であるが、伊勢崎市の原之城遺跡をしのぐ東西200mの大規模な居館となる可能性をもっている。一方、この時期の古墳としては、本遺跡の西方約700m、荒砥川左岸に位置する今井神社古墳が知られる。これは全長71mの前方後円墳で、墳輪の年代観から5世紀後半の築造と推定されてお

り、当地域の古墳のなかでは最古の部類に位置付けられる。当地域を統括した首長の墓と考えるとよいだろう。後期になると、当地域では古墳群の形成が進み、本遺跡の存する今井字道下地区だけでも7基の古墳が存在したことが『上毛古墳総覧』(昭和13年)に記されている。また古墳群に対応するように、集落遺跡数の増大や拡散現象も見られ、この時期から新たに集落が形成されたと考えられる遺跡も多い。

奈良・平安時代 第2図に示した遺跡のほとんどで、この時期の集落が見られる。多くは前代からの継続集落で、二之宮宮東や荒砥中屋敷II遺跡のように、平安時代になって新たに形成された集落遺跡も一部で見られる。このように、当地域における古墳時代以降平安時代にいたるまでの遺跡の継続的な拡大、発展の背景には、比較的安定した耕地と灌漑施設の採用など新しい農業技術に基づいた耕地開発があったからだろう。なお、今井白山遺跡や柳久保遺跡から弘仁9年(818年)の地震跡と思われる地割れや噴砂が発見されており、赤城南麓を襲った当時の地震災害の様子を物語る貴重な資料を提供している。

中世 集落遺跡は不明だが、12世紀代に開削された大規模用水路である女堀が本遺跡の約1km北方を東西に延びている。また、古代官道の東山道駅路とも推定される通称「あずま道」が、本遺跡を貫通して東西に延びる。これは、現在も舗装道路として利用されているが、本遺跡の調査ではじめて古代官道の存否について検証のメスがかけられることになった。

[註]

- 1993 『今井白山遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1983 籠登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城南麓における遺跡群研究」『信濃』35-4
- 1960 塚田 光「群馬県勢多郡城南村塚原の石器2例」『考古学』40号
- 1989 籠登 健「群馬県赤城山麓の遺跡群調査—縄文時代前期から中期の遺跡立地について—」『研究論集』7 東京都埋蔵文化財センター
- 1991 石坂 茂「縄文時代の地域性—遺跡分布と集落標榜の分析を通して—」『群馬文化』226
- 1988 大木幹一郎「群馬県東部における弥生時代中期後半の土器について」『群馬の考古学』

[参考文献]

- 1990 早田 勉「第1章 群馬県の自然と風土」『群馬県史通史編』1 原始古代1

第3章 検出された遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

調査区南東の西向き斜面で旧石器のブロックを検出した。位置は5区J～N-5～9グリッドである。周囲には6カ所の小規模な集中箇所が見られた。

石器群の概要

本遺跡からは、192点の石器が出土した。石器石材組成は、黒色安山岩179点、黒曜石7点、黒色頁岩1点、チャート1点、珪質凝灰岩1点、輝緑岩1点、砂岩1点、細粒安山岩1点である。器種組成は、剥片・砕片177点、二次加工ある剥片7点、石核5点、楔形石器1点、使用痕ある剥片1点、石刃1点である。

以上のことから、黒色安山岩を石材組成の主体とする、そして、機種組成の中で、剥片、砕片の占める割合が非常に高い石器群といえる。

石器の分布は、一つの石器出土集中地点（1号ブロック）をもつ。さらに、その周辺に数点の石器が散在する様相を示す。発掘調査時において、本来石器群を構成したであろう全体を検出しておらず、1号ブロックが調査区域外にのびることは確実である。

1号ブロックは黒色安山岩を中心に構成され、剥片剥離作業を示す剥片、砕片が多い。そして、おもに黒色安山岩以外（黒曜石、珪質凝灰岩）の石材を利用する石器が、1号ブロック周辺に散在する。

石器出土層位（第3図）

石器は、Va層（As-BP（浅間一板鼻褐色軽石）を含むローム層）からVII層（褐色ローム層）にかけて出土した。約1mの高低差をもつ。そして、VIIa、VIIb層のローム層暗色帯部分に石器群の出土極大値がくる。①AT（始良丹沢火山灰）の極大値が、VI層（粘質ローム層）とVIIa層の境界付近にくる。②石器包含層の下層、IX層が、Hr-HP層（榛名一八崎軽石層）である。この二点と石器出土層位から判断すると、本石器群は、いわゆるAT下位の暗色帯に属す

る石器群の可能性が高い。

石器の分布

第3図に示す通り、1号ブロックが調査区域外にのびることは確実である。本石器群の石材は、黒色安山岩が主体である。しかし、1号ブロックの周辺、数十mを隔てて、黒色安山岩以外の石材製（黒曜石、珪質凝灰岩）石器が散在する。1号ブロック帰属の石器と、ブロック外の石器には母岩の共有関係もなく、この両者の石器が、同じ石器群に属するものか問題が残る。仮に、同じ石器群とすると、黒色安山岩の剥片剥離作業を中心とする1号ブロックと、その他の作業の痕跡であるブロック外、という空間構成になる可能性もある。今後、この平面分布に類似する石器群が存在するか、注意する必要がある。

次に、1号ブロックについて石器の分布状況を提示する。

1号ブロック全出土石器分布（第4図）

1号ブロック全体の石器は、径約10mの不整形形の範囲に分布する。とりわけ、径約5mの不整形形の範囲に集中して分布する。よって、この径5mの範囲が、剥片剥離作業の中心地域である可能性が高い。

石材別分布（第4図下）

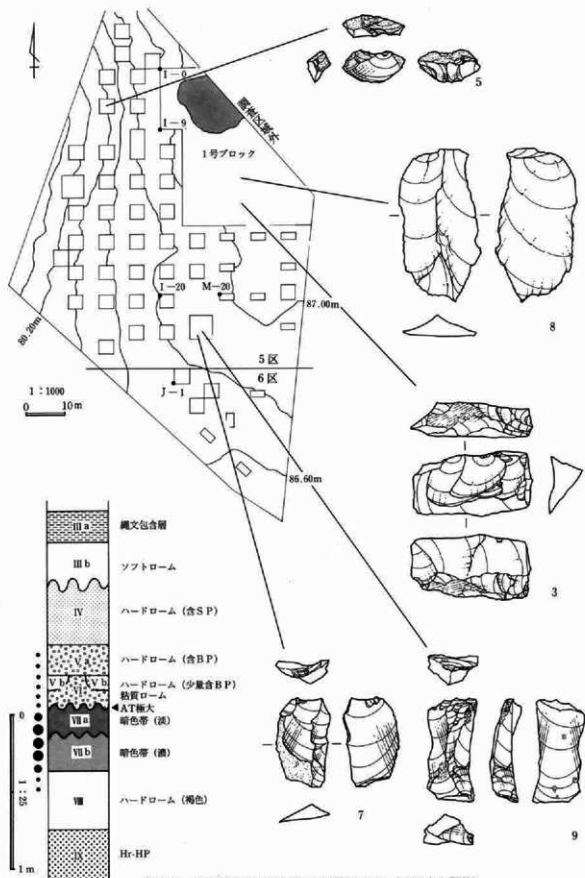
全出土石器192点中、179点が黒色安山岩製の石器である。よって、黒色安山岩製石器を中心とした分布状況になる。その中で、黒曜石製石器3点、チャート製石器1点、黒色頁岩製石器1点、輝緑岩製石器1点が、1号ブロックに帰属する。

器種別分布（第5図上）

剥片、砕片を中心とする分布状況で、特定の器種が、特定の場所に偏在する現象はみられない。その中において石核の分布状況が注目される。二つの石核が対になり、東西に約5m離れた状態で存在する。

接合関係分布（第5図下）

接合関係分布は、大きく二つの地点に別れる。多



第3図 旧石器時代調査全体図及び基本土層 (石器出土層位)

数の接合関係をもつ東地点。それとは別に、少数の接合関係をもつ西地点が存在する。

母岩別分布 (第6図)

178点の黒色安山岩製石器が、7母岩に分類された。母岩の平面分布は、大きく三つに類別される。母岩1、4、5、6、7は、東地域に分布する。母岩2は西地点に分布する。そして、母岩3は両地点にわたり分布する。また、前にみたように、接合関係の分布状況も、大きく東地点と西地点とに別れる。これらの分布状況から、1号ブロックは二つの地点に分離される可能性が高い。1号ブロックは、黒色安山岩製の剥片、砕片が器種組成の主体であることから、剥片剥離作業の場が東地点と西地点に分離される可能性がある。また、母岩3が両地点にまたがり存在することから、東、西地点は独立的に存在するものではなく、関連をもった存在であるといえる。

出土石器

二次加工ある剥片 (第7図-1、5)

1は、三つに折断されたものが接合した資料である。基部両側片を背面方向に集中的に二次加工し、

主要剥離両側にも一部加工がみられる。黒曜石製。

5は、主要剥離面側に二次加工痕が認められる。黒曜石製。1号ブロック外から出土。

石刃 (第7図-2)

背面剥離痕は、すべて主要剥離面と同一の剥離方向をしめす。中央で折断されている。黒色頁岩製。

石核 (第7図-3)

断面三角形の剥片を素材とする。素材剥片の主要剥離面を作業面とし、打面を固定した連続的な剥片剥離痕が認められる。珪質凝灰岩製。1号ブロック外から出土。

楔形石器 (第7図-4)

主に上下端からの二次加工で楔形に整形した後、両側片を折断している。使用痕と考えられる微細剥離痕が、上下端に著しく残る。黒曜石製。

使用痕ある剥片 (第7図-4)

片面に自然面を残す剥片の一端に、微細剥離痕(使用痕)が認められる。微細剥離痕は、主要剥離面側

になされる部分と、自然面側になされる部分の二箇所からなる。細粒安山岩製。

剥片 (第7図-7、第8図上-8、9)

7は、背面の一部に自然面を残す。上下両端で折断されている。黒曜石製。1号ブロック外から出土。

8は打面を残す。打面は、剥離面二面で構成される。黒色安山岩製。1号ブロック外から出土。

9は、上端で折断されている。黒曜石製。1号ブロック外から出土。

接合資料

母岩1・接合1 (第8図下、第9図上)

石核1点、二次加工ある剥片2点、剥片・砕片24点の合計27点で構成される。

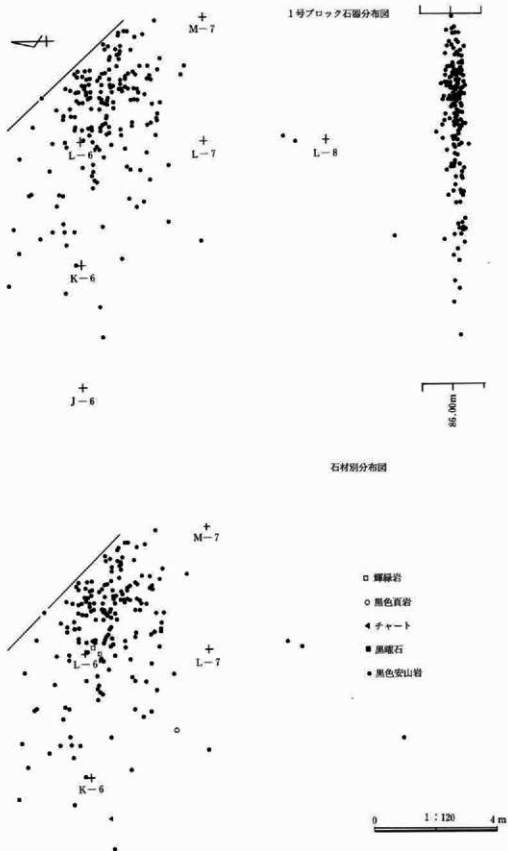
大人の拳より、やや大きい礫を分割し剥片剥離作業を開始したと考えられる。分割面と反対側で、自然面除去を目的とした剥片剥離作業が行われ、その後、打面位置を90度方向転移し縦長剥片を剥離している。さらに90度方向の打面転移を繰り返し、剥片剥離作業を終了している。剥片剥離作業終了後に、石核は分割されている。最終的に、石核の形態は、片側に自然面をもつ直方体に近い形態となっている。

本接合資料から、打面位置が一定せず90度方向の打面転移を繰り返す剥片剥離技術の存在がうかがわれる。そして、生産された剥片の形態も不定形である。

母岩1・接合2 (第9図下、第10図上)

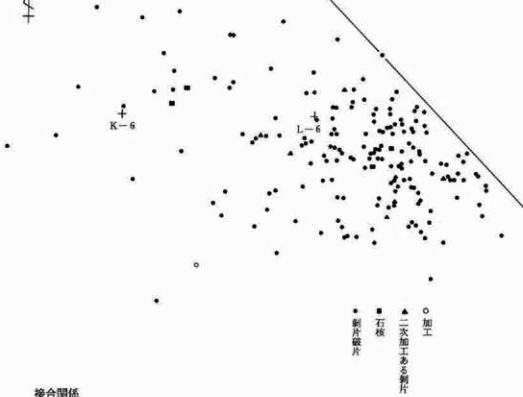
二次加工ある剥片3点、剥片・砕片17点の合計20点で構成される。

自然面除去を目的とした剥片剥離作業を、180度方向の打面転移を繰り返すことで行っている。その後、打面位置を固定し剥片剥離作業が進行する。その工程で得られた大形剥片を、石核の素材としている。その石核の形態は、一側面に自然面を残した扁平な形態である。そして、剥片剥離痕は一面しかなく、剥片剥離作業を進行させずに石核を放棄している。本接合資料では、自然面除去作業を、180度方向の打面転移を繰り返すことで行っているが、その後は、打面位置を固定し剥片剥離作業を行っている。しか

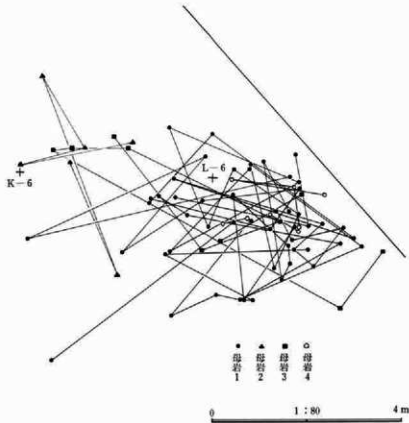


第4図 石器分布図・石材別分布図(1)

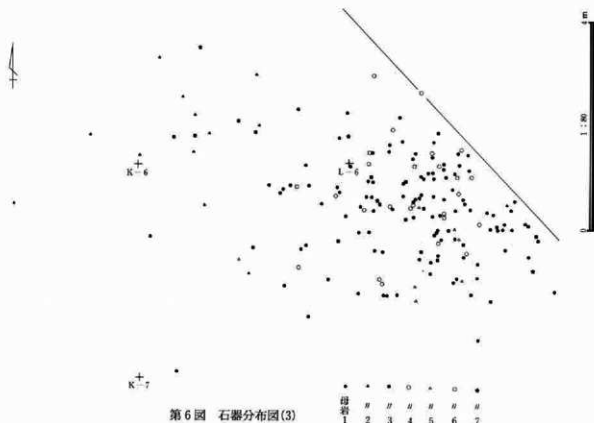
器種別



接合関係



第5図 石器分布図(2)



第6図 石器分布図(3)

し、生産された剥片の形態は不定形である。

母岩1・接合3 (第10図下)

剥片・碎片8点からなる接合資料である。自然面を打面とし、打面位置を固定し、剥片剥離作業を行っている。

母岩2・接合1 (第11図上)

石核2点、剥片・碎片4点の合計6点で構成される。大人の拳大の原石を利用している。自然面を打面とし、二つの個体に分割した後、それぞれの個体で剥片剥離作業を行っている。しかし分割後は、一方の個体には、大きな剥離面が一面認められるだけである。もう一方の個体では、自然面を打面とし小さな剥片を二つ剥離しているだけである。つまり、分割後、剥片剥離作業を進行させずに、石核を放棄している。

石核は、一方に自然面を残す偏平な形態と、同じく一方に自然面を残す立方体に近い形態がある。両石核に残る剥離痕の剥離方向は一定せず、打面転移を繰り返す剥片剥離技術の存在がうかがわれる。ま

た、石核に残る剥離痕の形態から、生産された剥片の形態も、不定形であると考えられる。

母岩3・接合1 (第11図下、第12図上)

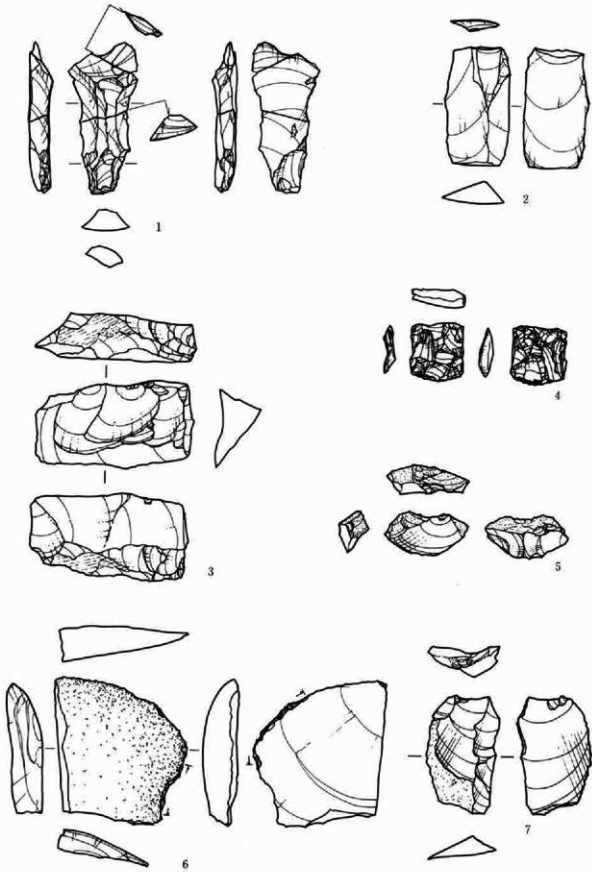
剥片・碎片9点の接合資料である。大人の拳よりやや大きい原石を利用している。一方に大きな平坦面を作出し、そこを打面として、自然面除去を目的とした剥片剥離作業を行っている。打面の位置は一定している。

母岩4・接合1 (第12図中)

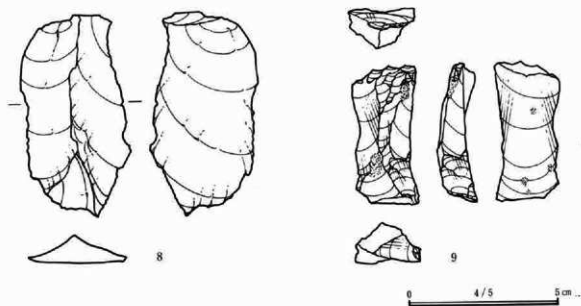
剥片・碎片6点の接合資料である。自然面を保有する接合資料が多いなかで、本資料は自然面を保有していない。90度方向の打面転移を繰り返し、剥片剥離作業を行っている。生産された剥片の形態は、不定形である。

母岩4・接合2 (第12図下)

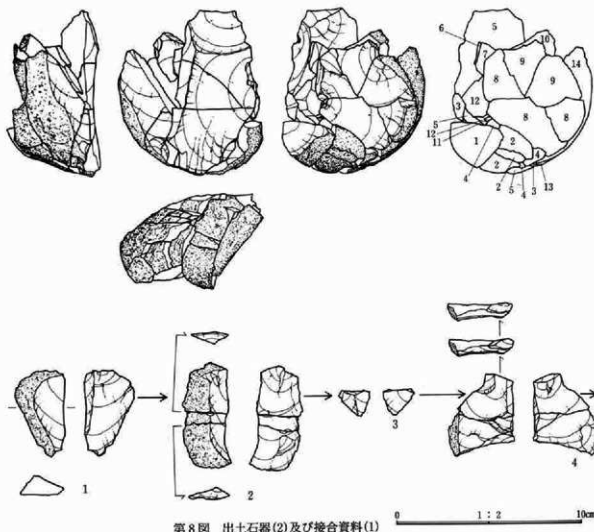
剥片・碎片4点の接合資料である。本資料も自然面を保有していない。90度方向の打面転移が認められる。



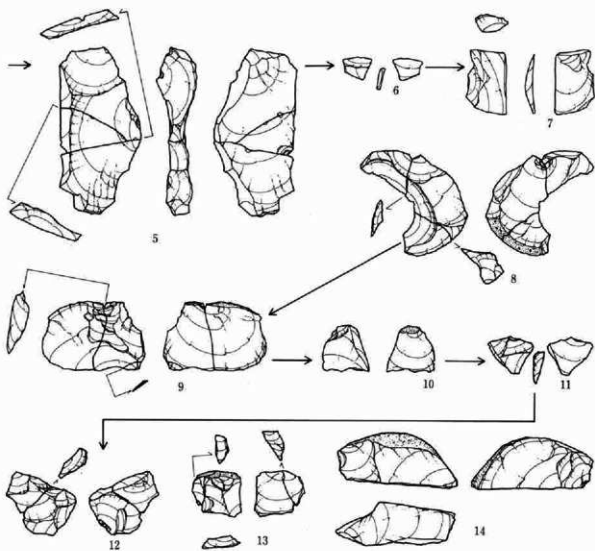
第7図 出土石器(1)



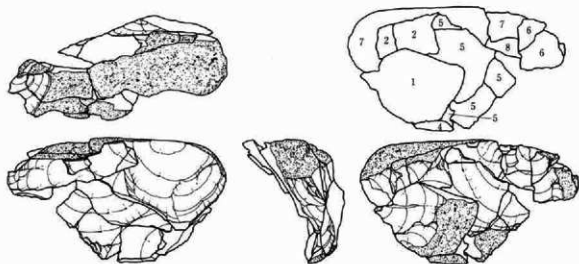
母岩 1 接合 1



第8図 出土石器(2)及び接合資料(1)

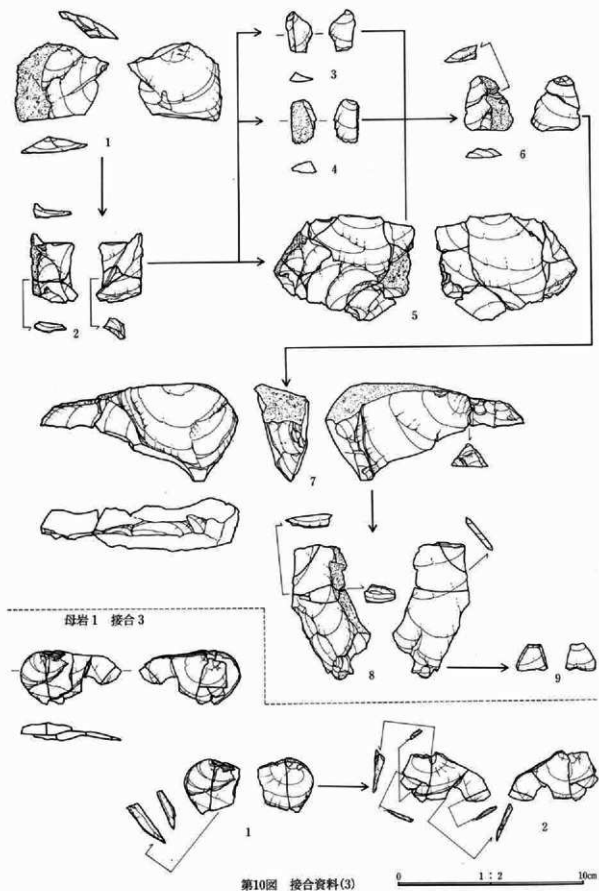


母岩1 接合2



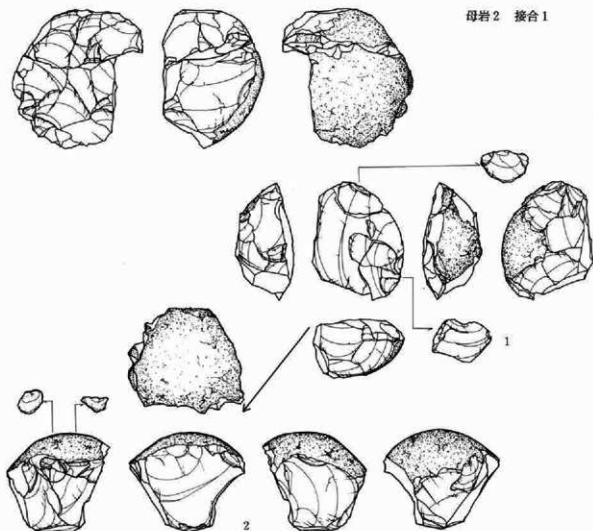
第9図 接合資料(2)

0 1:2 10cm

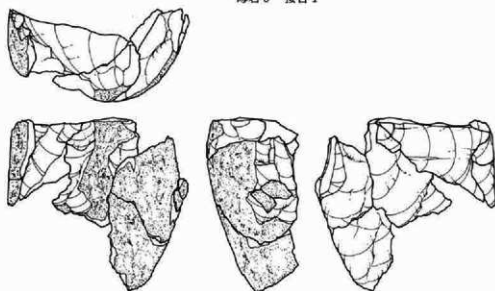


第10図 接合資料(3)

母岩 2 接合 1



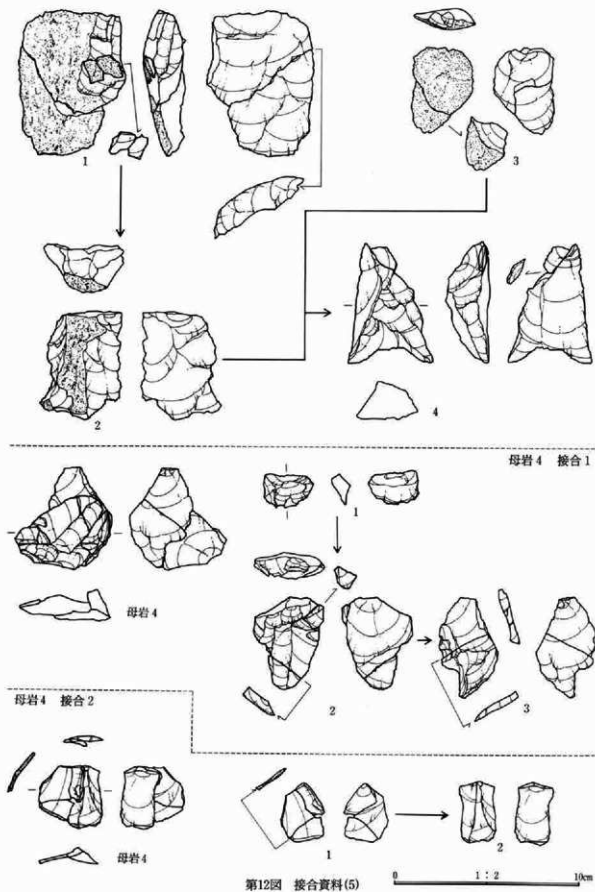
母岩 3 接合 1



第11図 接合資料(4)

0 1 : 2 10cm

第3章 検出された遺構と遺物



ま と め

本石器群においては、石器の技術形態の特徴から、石器群の編年的位置を決定するのは困難である。

剥片剥離技術は、打面の位置が一定せず打面転移を繰り返す特徴がある。そして、生産された剥片は、石刃のような一定の形態を所持していない。剥片剥離技術としては、石刃のような定形的な剥片を一定量生産する技術とかなり相違する様相がうかがえる。ただし、本石器群には黒色頁岩製の石刃が1点存在する。たとえば、群馬県月夜野町の後田遺跡の石器群では、石材により剥片剥離技術の様相が異なることが知られている。石刃などの縦長剥片は黒色頁岩を専ら利用し、その他の剥片は黒色安山岩を利用し生産している。本石器群の石刃も黒色頁岩製であることから、後田遺跡と同様の技術展開を示す可能性は十分ある。そしてまた現在、剥片剥離技術の様相、その発達段階が、石器群の編年的位置を決定する一つの重要な要素となっている。しかし、同一の石器群において、石材により剥片剥離技術の様相が相違することから、今後は、石材と剥片剥離技術の関係を十分考慮し、編年研究に結び付けていく必要がある。

本石器群は、AT下位の暗色帯部分に出土点数の極大値をもつ。よって、これまで群馬県下で数多く報

告され、AT下位暗色帯層属と総括される石器群と相前後する編年的位置が、現在では最も妥当と考えられる。それらの石器群の編年関係の詳細は、今後の課題である。

石器の平面分布は、一つの集中地点（1号ブロック）と、その周囲に散在する石器とで構成される。1号ブロックは、母岩の分布状況、接合関係から、二つの地域で構成される。1号ブロックは黒色安山岩の剥片剥離作業を中心とする地点であることから、剥片剥離作業の場が大きく二つ存在した可能性がある。

1号ブロック外の石器は、黒曜石、珪質凝灰岩という黒色安山岩以外の石材を中心に利用している。また、1号ブロック層属の石器と、ブロック外の石器とは母岩の共有関係がなく、この両者が同一石器群に属するものか疑問が残る。仮に、同一石器群とすると、黒色安山岩の剥片剥離作業を中心とした痕跡の1号ブロック、そして、それ以外のなんらかの作業痕跡の1号ブロック周辺地域、という二つの空間構成が存在した可能性がある。今後、このような平面分布を示す石器群に注意し、考察を深める必要がある。また、旧石器時代の集落構造を追及するには、発掘調査時において、石器集中地点外の地域にも注意していく必要がある。

表1 旧石器時代の石器一覧(1)

No	器 種	母岩番号	接合番号	石 材	重量	採回番号	備 考
1	剥 片	1	1	黒色安山岩	3.00	第8図-2	
2	剥 片	1	1	黒色安山岩	5.20	第8図-2	
3	剥 片	1	1	黒色安山岩	3.50	第8図-4	
4	剥 片	1	1	黒色安山岩	12.70	第8図-1	
5	剥 片	1	1	黒色安山岩	23.60	第9図-5	
6	剥 片	1	1	黒色安山岩	6.90	第9図-8	
7	剥 片	1	1	黒色安山岩	5.40	第8図-4	
8	剥 片	1	1	黒色安山岩	0.70	第9図-13	
9	剥 片	1	1	黒色安山岩	2.80	第9図-8	
10	剥 片	1	1	黒色安山岩	13.50	第9図-8	
11	剥 片	1	1	黒色安山岩	5.00	第9図-13	
12	石 槌	1	1	黒色安山岩	44.90	第9図-14	
13	砕 片	1	1	黒色安山岩	0.40	第9図-13	
14	剥 片	1	1	黒色安山岩	16.40	第9図-5	
15	剥 片	1	1	黒色安山岩	6.90	第9図-5	
16	剥 片	1	1	黒色安山岩	13.70	第9図-9	
17	剥 片	1	1	黒色安山岩	1.30	第8図-2	
18	剥 片	1	1	黒色安山岩	0.70	第8図-4	
19	剥 片	1	1	黒色安山岩	5.00	第9図-9	
20	砕 片	1	1	黒色安山岩	0.02	第9図-9	
21	剥 片	1	1	黒色安山岩	3.70	第9図-10	

第3章 検出された遺構と遺物

表2 旧石器時代の石器一覽(2)

No.	器 種	母岩番号	接合番号	石 材	重量	採 取 番 号	備 考
22	二次加工ある剥片	1	1	黒色安山岩	6.00	第9図-12	
23	剥 片	1	1	黒色安山岩	2.20	第9図-11	
24	二次加工ある剥片	1	1	黒色安山岩	3.20	第9図-12	
25	砕 片	1	1	黒色安山岩	0.50	第8図-3	
26	剥 片	1	1	黒色安山岩	7.30	第9図-7	
27	砕 片	1	1	黒色安山岩	0.40	第9図-6	
28	砕 片	1	2	黒色安山岩	0.40	第10図-2	
29	砕 片	1	2	黒色安山岩	0.50	第10図-8	
30	剥 片	1	2	黒色安山岩	15.70	第10図-8	
31	剥 片	1	2	黒色安山岩	4.80	第10図-8	
32	剥 片	1	2	黒色安山岩	23.40	第10図-5	
33	二次加工ある剥片	1	2	黒色安山岩	1.50	第10図-5	
34	剥 片	1	2	黒色安山岩	2.20	第10図-2	
35	剥 片	1	2	黒色安山岩	0.50	第10図-5	
36	二次加工ある剥片	1	2	黒色安山岩	5.60	第10図-5	
37	剥 片	1	2	黒色安山岩	0.50	第10図-8	
38	剥 片	1	2	黒色安山岩	1.40	第10図-6	
39	剥 片	1	2	黒色安山岩	21.70	第10図-1	
40	石 核	1	2	黒色安山岩	86.70	第10図-7	
41	剥 片	1	2	黒色安山岩	6.90	第10図-7	
42	剥 片	1	2	黒色安山岩	4.40	第10図-2	
43	剥 片	1	2	黒色安山岩	4.00	第10図-6	
44	二次加工ある剥片	1	2	黒色安山岩	3.10	第10図-5	
45	剥 片	1	2	黒色安山岩	1.80	第10図-4	
46	砕 片	1	2	黒色安山岩	0.25	第10図-9	
47	剥 片	1	2	黒色安山岩	1.00	第10図-3	
48	剥 片	1	3	黒色安山岩	2.40	第10図-1	
49	砕 片	1	3	黒色安山岩	0.20	第10図-2	
50	剥 片	1	3	黒色安山岩	2.90	第10図-2	
51	砕 片	1	3	黒色安山岩	0.80	第10図-2	
52	砕 片	1	3	黒色安山岩	1.00	第10図-2	
53	砕 片	1	3	黒色安山岩	0.14	第10図-2	
54	砕 片	1	3	黒色安山岩	0.18	第10図-2	
55	剥 片	1	3	黒色安山岩	3.60	第10図-1	
56	砕 片	1	4	黒色安山岩	0.50		
57	砕 片	1	4	黒色安山岩	0.40		
58	剥 片	1	4	黒色安山岩	1.20		
59	砕 片	1		黒色安山岩	0.11		
60	砕 片	1		黒色安山岩	0.02		
61	砕 片	1		黒色安山岩	0.38		
62	剥 片	1		黒色安山岩	1.40		
63	砕 片	1		黒色安山岩	0.20		
64	砕 片	1		黒色安山岩	0.30		
65	剥 片	1		黒色安山岩	0.50		
66	砕 片	1		黒色安山岩	1.00		
67	砕 片	1		黒色安山岩	0.80		
68	砕 片	1		黒色安山岩	0.06		
69	剥 片	1		黒色安山岩	0.64		
70	砕 片	1		黒色安山岩	0.40		
71	砕 片	1		黒色安山岩	0.22		
72	砕 片	1		黒色安山岩	0.34		
73	剥 片	1		黒色安山岩	1.30		
74	砕 片	1		黒色安山岩	0.10		
75	剥 片	1		黒色安山岩	0.20		
76	砕 片	1		黒色安山岩	0.50		
77	砕 片	1		黒色安山岩	0.63		
78	砕 片	1		黒色安山岩	0.10		

表3 旧石器時代の石器一覧(3)

No	器 種	母岩番号	接合番号	石 材	重量	揮 固 番 号	備 考
79	砕 片	1		黒色安山岩	1.20		
80	砕 片	1		黒色安山岩	0.40		
81	砕 片	1		黒色安山岩	0.30		
82	砕 片	1		黒色安山岩	0.40		
83	砕 片	1		黒色安山岩	0.21		
84	削 片	1		黒色安山岩	1.90		
85	砕 片	1		黒色安山岩	0.08		
86	砕 片	1		黒色安山岩	0.14		
87	砕 片	1		黒色安山岩	0.11		
88	砕 片	1		黒色安山岩	0.04		
89	砕 片	1		黒色安山岩	0.26		
90	砕 片	1		黒色安山岩	0.26		
91	削 片	1		黒色安山岩	2.20		
92	砕 片	1		黒色安山岩	0.10		
93	砕 片	1		黒色安山岩	0.15		
94	砕 片	1		黒色安山岩	0.27		
95	砕 片	1		黒色安山岩	0.30		
96	砕 片	1		黒色安山岩	0.03		
97	削 片	1		黒色安山岩	3.20		
98	砕 片	1		黒色安山岩	0.70		
99	砕 片	1		黒色安山岩	0.37		
100	砕 片	1		黒色安山岩	0.02		
101	砕 片	1		黒色安山岩	0.06		
102	砕 片	1		黒色安山岩	0.07		
103	砕 片	1		黒色安山岩	0.12		
104	砕 片	1		黒色安山岩	0.01		
105	削 片	1		黒色安山岩	0.50		
106	砕 片	1		黒色安山岩	0.30		
107	砕 片	1		黒色安山岩	0.05		
108	砕 片	2	1	黒色安山岩	1.20	第118-2	
109	石 核	2	1	黒色安山岩	170.30	第118-2	
110	砕 片	2	1	黒色安山岩	0.30	第118-2	
111	削 片	2	1	黒色安山岩	3.30	第118-1	
112	削 片	2	1	黒色安山岩	2.70	第118-1	
113	石 核	2	1	黒色安山岩	94.50	第118-1	
114	削 片	2		黒色安山岩	2.40		
115	砕 片	2		黒色安山岩	0.80		
116	砕 片	2		黒色安山岩	0.02		
117	削 片	2		黒色安山岩	1.50		
118	砕 片	2		黒色安山岩	0.10		
119	削 片	2		黒色安山岩	0.70		
120	削 片	2		黒色安山岩	3.90		
121	砕 片	2		黒色安山岩	0.32		
122	削 片	3	1	黒色安山岩	35.80	第128-1	
123	削 片	3	1	黒色安山岩	66.70	第128-1	
124	削 片	3	1	黒色安山岩	37.00	第128-4	
125	削 片	3	1	黒色安山岩	58.10	第128-2	
126	削 片	3	1	黒色安山岩	3.10	第128-3	
127	砕 片	3	1	黒色安山岩	0.50	第128-4	
128	削 片	3	1	黒色安山岩	13.90	第128-3	
129	砕 片	3	1	黒色安山岩	0.32	第128-1	
130	砕 片	3	1	黒色安山岩	0.40	第128-1	
131	砕 片	3		黒色安山岩	0.04		
132	砕 片	3		黒色安山岩	0.06		
133	砕 片	3		黒色安山岩	0.06		
134	砕 片	3		黒色安山岩	0.08		
135	砕 片	3		黒色安山岩	0.02		

第3章 検出された遺構と遺物

表4 旧石器時代の石器一覧(4)

No	器 種	母岩番号	接合番号	石 材	重量	検出番号	備 考
136	砕 片	3		黒色安山岩	0.36		
137	砕 片	3		黒色安山岩	0.23		
138	砕 片	3		黒色安山岩	0.12		
139	砕 片	3		黒色安山岩	0.03		
140	剥 片	3		黒色安山岩	1.09		
141	砕 片	3		黒色安山岩	0.20		
142	砕 片	3		黒色安山岩	0.30		
143	剥 片	4	1	黒色安山岩	3.80	第12図-3	
144	剥 片	4	1	黒色安山岩	4.80	第12図-3	
145	剥 片	4	1	黒色安山岩	1.30	第12図-2	
146	砕 片	4	1	黒色安山岩	0.30	第12図-2	
147	剥 片	4	1	黒色安山岩	4.20	第12図-1	
148	剥 片	4	1	黒色安山岩	16.70	第12図-2	
149	剥 片	4	2	黒色安山岩	0.30	第12図-1	
150	剥 片	4	2	黒色安山岩	0.70	第12図-1	
151	剥 片	4	2	黒色安山岩	1.20	第12図-1	
152	剥 片	4	2	黒色安山岩	4.10	第12図-2	
153	剥 片	4	3	黒色安山岩	13.20		
154	剥 片	4	3	黒色安山岩	21.20		
155	剥 片	4	4	黒色安山岩	6.60		
156	剥 片	4	4	黒色安山岩	1.90		
157	砕 片	4		黒色安山岩	0.50		
158	剥 片	4		黒色安山岩	20.20		
159	剥 片	4		黒色安山岩	2.00		
160	剥 片	4		黒色安山岩	10.30		
161	砕 片	4		黒色安山岩	0.12		
162	砕 片	4		黒色安山岩	0.19		
163	砕 片	4		黒色安山岩	0.24		
164	砕 片	4		黒色安山岩	0.40		
165	砕 片	5		黒色安山岩	0.22		
166	砕 片	5		黒色安山岩	0.70		
167	砕 片	5		黒色安山岩	0.30		
168	剥 片	5	1	黒色安山岩	10.90		
169	剥 片	5	1	黒色安山岩	3.60		
170	剥 片	5	1	黒色安山岩	2.50		
171	剥 片	5	1	黒色安山岩	0.70		
172	砕 片	6		黒色安山岩	0.90		
173	剥 片	6		黒色安山岩	4.60		
174	剥 片	6		黒色安山岩	0.80		
175	剥 片	6		黒色安山岩	2.90		
176	剥 片	7		黒色安山岩	2.50		
177	剥 片	7		黒色安山岩	0.50		
178	剥 片	7		黒色安山岩	2.60		
179	石 刃			黒色頁岩	6.50	第7図-2	
180	剥 片			輝 緑 岩	4.80		
181	砕 片			チャート	0.40		
182	剥 片	8	1	黒 曜 石	3.27	第7図-1	
183	二次加工ある剥片	8	1	黒 曜 石	3.23	第7図-1	
184	砕 片	8	1	黒 曜 石	0.24	第7図-1	
185	石 核			珪質凝灰岩	20.45	第7図-3	石器集中地点外
186	板形石器			黒 曜 石		第7図-4	出土地点不明
187	剥 片			黒 曜 石		第8図-9	石器集中地点外
188	剥 片			黒色安山岩	19.90	第8図-8	石器集中地点外
189	使用痕ある剥片			細粒安山岩	27.39	第7図-6	出土地点不明
190	剥 片			黒 曜 石		第7図-7	石器集中地点外
191	二次加工ある剥片			黒 曜 石		第7図-5	石器集中地点外
192	砕 片			砂 岩			出土地点不明

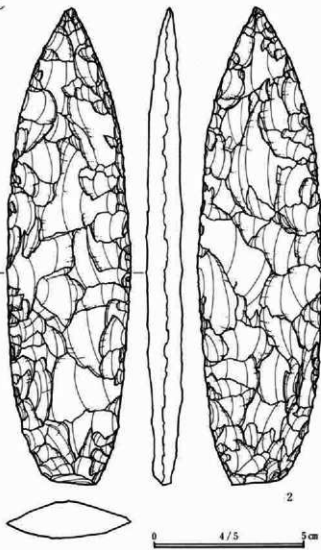
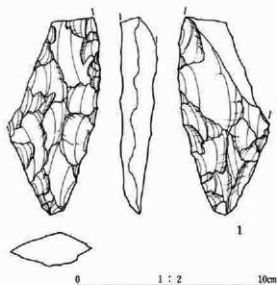
2 縄文時代の遺物

(1) 石器

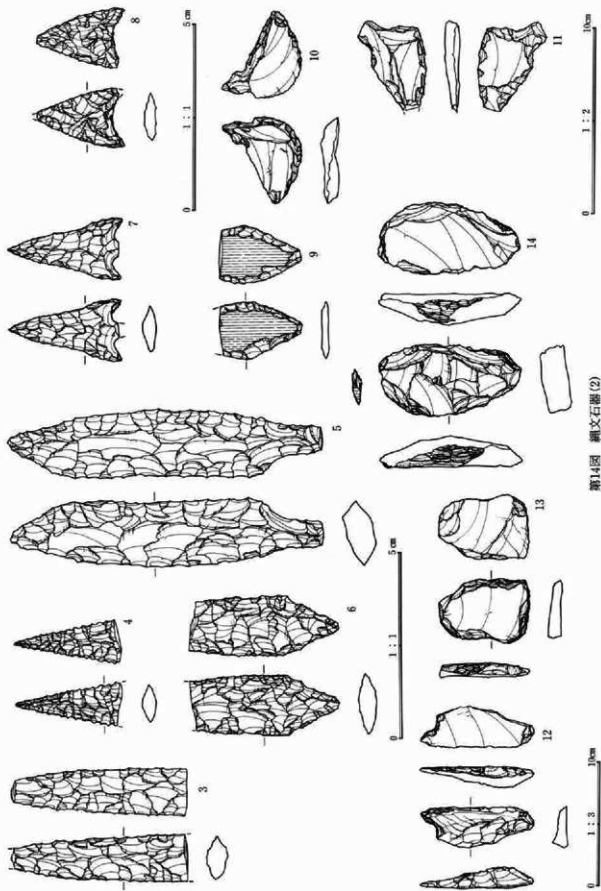
伴出土器の細別型式は前期から後期に位置づく。打製石斧も前期や後期に特徴的な例が多く、概して出土資料は前期から後期に属す可能性が高い。しかし、一方で草創期に特徴的な尖頭器（第13・14図）や、早期・撫米文系土器群に伴う例（第20図66～69）が含まれ、また分布域も重なるため、所属時期は明確にできない。

調査段階の所見では、縄文時代以前の出土資料は遺跡中央付近の浅い埋没谷の東側台地部分に集中しており、特にこの地点で遺物が多く分布し、西向き斜面では後期の土器が比較的集中することが判明している。

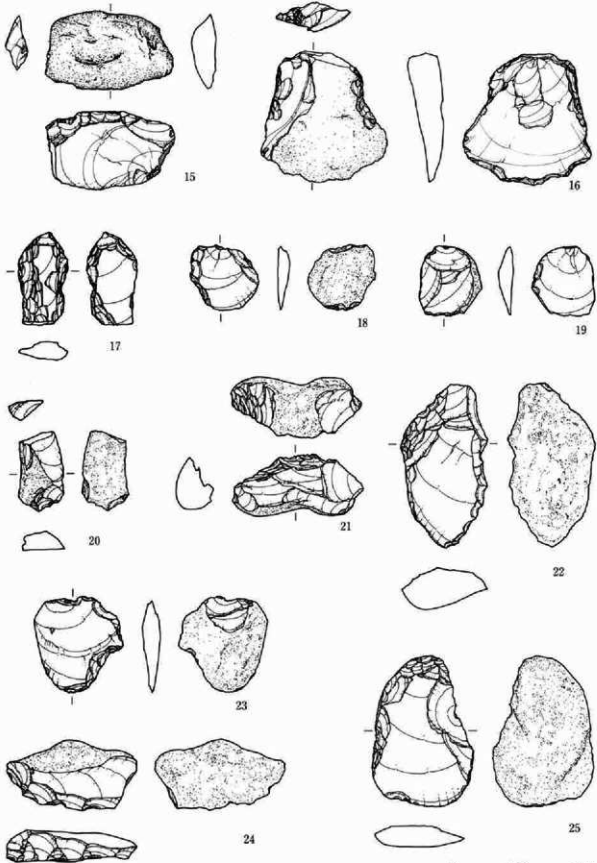
各区域毎の出土点数は、位置不明の4点を除き、1区24点、2区276点、3区29点、4区196点、5区452点、6区7点の総計988点を数える。出土資料の主たる器種構成は、打製石斧35点（短冊形8・楕形8・分銅形7・分類不能12）、磨製石斧2点、石鏃30点（磨製石鏃1を含む）、尖頭器6点（うち2点は有茎）、石匙3点、削器22点、加工痕を残す剥片71点、使用痕を残す剥片42点、石核45点、礫器5点、凹石3点、磨石5点、敲石45点、石皿1点、多孔石2点、礫石1点で、出土資料全体の約30%を占める。各々は散漫な分布状態を示しており、特定の器種が集中する傾向は見られない。例えば、形態的に見た打製石斧の分布は、短冊形を呈する例は2区に3点、4区に1点、5区に4点、楕形を呈する例はそれぞれ2点、3点、2点、分銅形はそれぞれ2点、2点、4点と偏差は見られないのである。出土資料を製作・使用の脈絡の中に位置付けられないため断定は困難だが、剥片や破片に比べ石核の占める率が高く、石器製作址の本来の姿を示すものではあるまい。



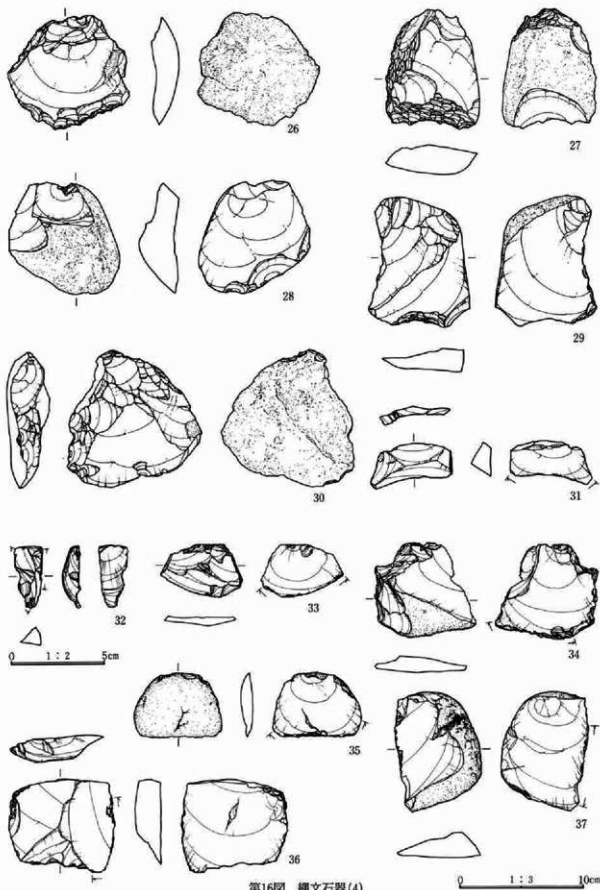
第13図 縄文石器(1)



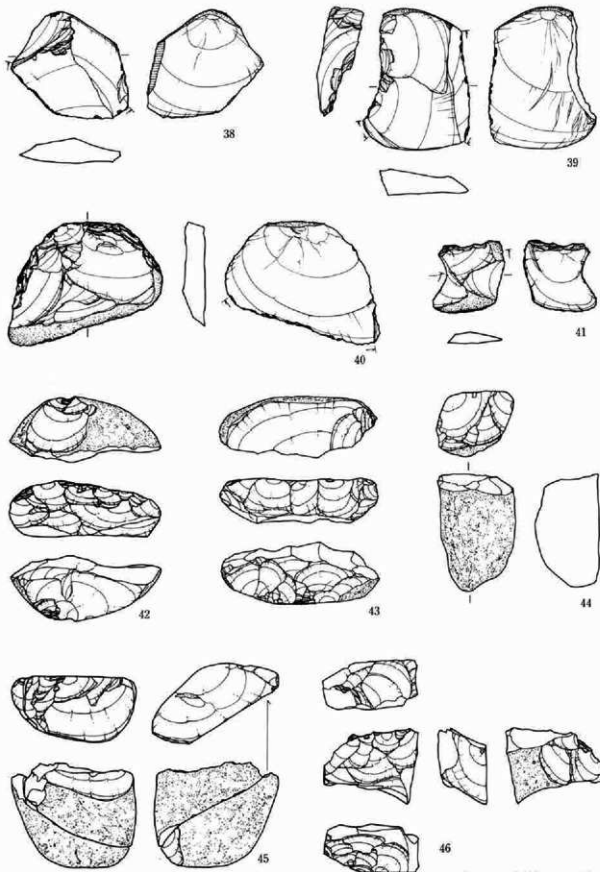
第14図 網文石器(2)



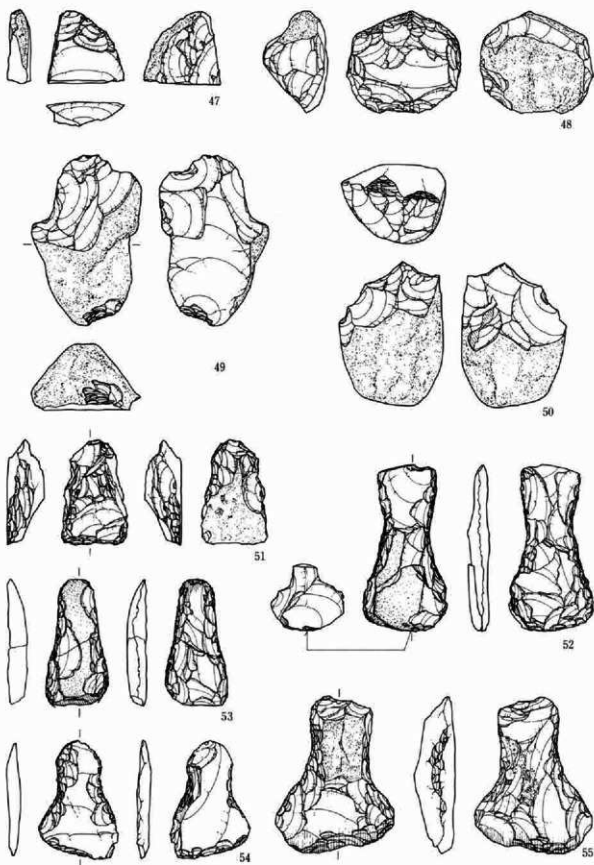
第15図 縄文石器(3)



第16図 縄文石器(4)

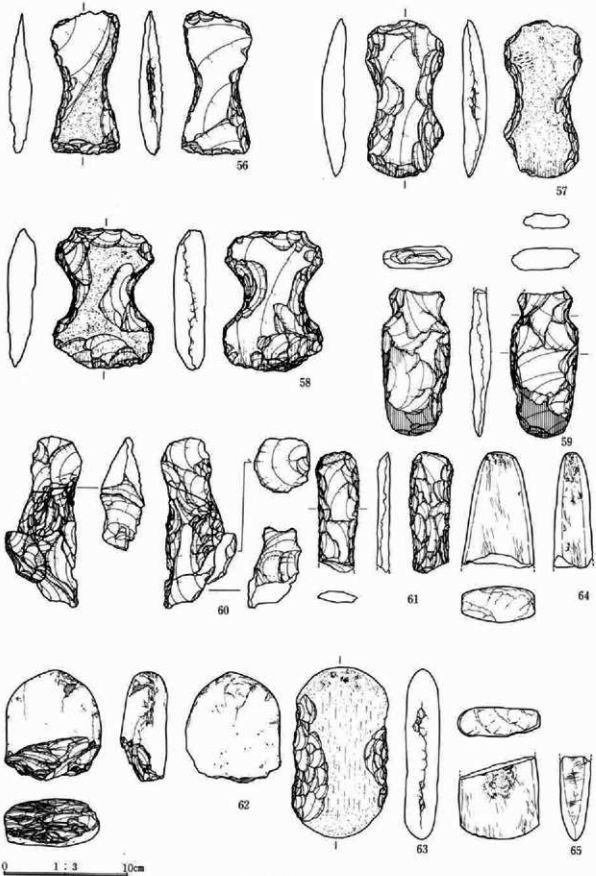


第17図 縄文石器(5)

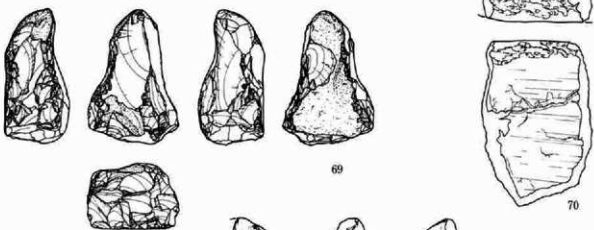
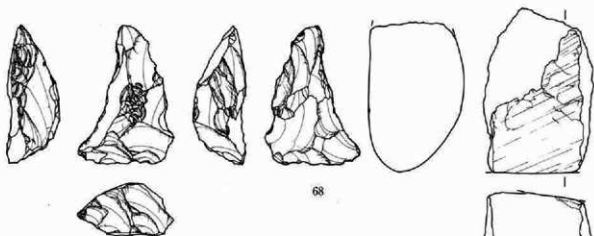
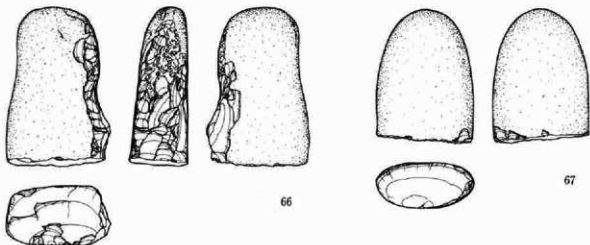


第18図 縄文石器(6)

0 1:3 10cm

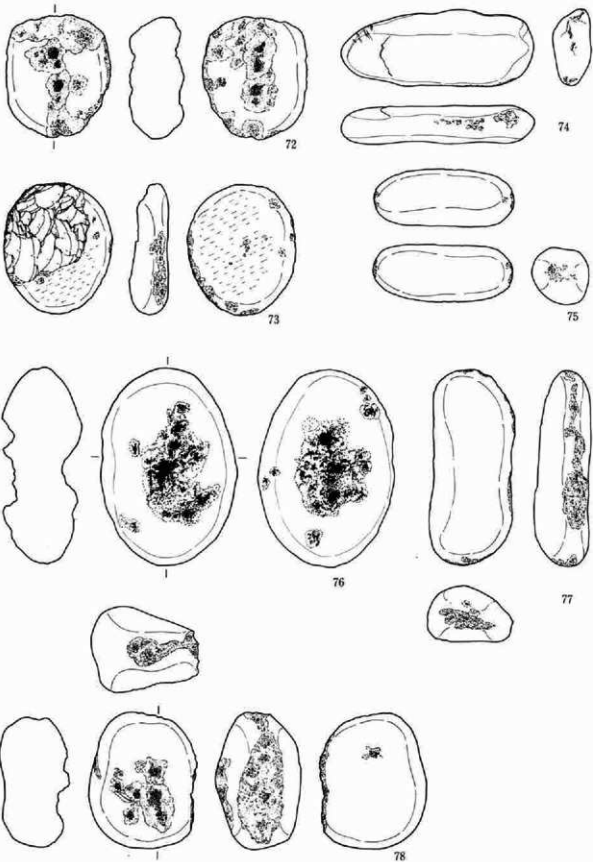


第19図 縄文石器(7)



0 1 : 3 10cm

第20図 縄文石器(8)



第21図 縄文石器(9)

0 1 : 3 10cm

表5 縄文石器一覧表

No.	種類	出土位置		長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	石材
		区	グリッド					
1	尖頭礫石槍	2	V-12~16	(098)	(46)	18	11.4	
2	石槍	5	K-8 IIIa層	158	42	12	94.9	黒頁
3	尖頭器	2	I-14	(47)	13	6	4.2	
4	尖頭器	2	S-11 IIIa層	(29)	(12)	4	0.9	
5	尖頭器	4	S-3	(84)	19	10	14.7	
6	有基尖頭器	4	横乱	(40)	15	5	3.8	
7	凸基有基器	2	F-20 II層	(31)	17	4	1.5	黒安
8	凹基有基器	4	R-8 IIIa層	(24)	16	35	1.0	黒曜
9	磨製石斧	5	C-15 IIIa層	(22)	16	20	0.9	珪頁
10	石匙	5	G-16 IIIa層	42	46	10	12.5	
11	石匙	5	A-5・6 2粘坑	32	(48)	8	12.1	
12	削器	5	IIIa層	100	33	17	40.9	黒頁
13	削器	5	IIIa層	72	52	11	53.4	黒頁
14	削器	5	IIIa層	113	57	25	166.7	黒頁
15	削器	2	H・I-7・8	62	103	23	161.2	黒頁
16	削器	1	W-10 II層	103	102	29	231.1	黒頁
17	加工砥削片	5	IIIa層	74	40	15	49.9	黒片
18	加工砥削片	1	X・Y-11	52	54	10	30.6	黒頁
19	加工砥削片	5	U-4	55	50	13	32.6	黒頁
20	加工砥削片	5	I-11 IIIa層	63	36	16	38.7	黒頁
21	加工砥削片	4		49	105	30	150.3	黒頁
22	加工砥削片	2	Y-17 II層	128	70	32	314.7	黒頁
23	加工砥削片	2	E-14	75	71	15	75.4	黒頁
24	加工砥削片	5	F-4	55	104	25	157.2	黒頁
25	加工砥削片	5	F-21 IIIa層	119	81	18	189.9	黒頁
26	加工砥削片	2	Q・R-I・2	90	96	22	180.6	黒頁
27	加工砥削片	4	IIIa層	95	75	23	192.7	黒頁
28	加工砥削片		試坑 N-3谷地	89	89	33	243.8	
29	加工砥削片	1	V-7	103	81	22	172.5	黒頁
30	加工砥削片	2	I-21	108	107	34	360.9	黒頁
31	使用砥削片	5	I-5 a層	36	65	17	30.9	黒頁
32	使用砥削片	5	D-3 IIIa層	33	16	10	3.6	黒曜
33	使用砥削片	4	U-10 FP製	42	65	7	19.1	黒頁
34	使用砥削片	2	P-22	75	82	15	73.5	黒頁
35	使用砥削片	5	L-13 IIIa層	51	71	10	49.5	黒頁
36	使用砥削片	4	X-5 トレンナ内	73	85	22	133.4	黒頁
37	使用砥削片	2	G-10 H-11 I-15	95	70	31	159.0	黒頁
38	使用砥削片	2	T-17 CⅡ黒土	85	93	21	142.7	黒頁
39	使用砥削片	2	N-20 上層	112	85	20	248.0	黒頁

No.	種類	出土位置		長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	石材
		区	グリッド					
40	使用砥削片	2	F-11 IIIa層	98	112	23	235.2	黒頁
41	使用砥削片	5	M-12 IIIa層	57	58	11	29.1	黒頁
42	石槍	4	I・J-1 II層	44	120	52	243.2	黒頁
43	石槍	5	M-13 IIIa層	36	126	49	257.5	黒頁
44	石槍		南西外表	93	62	51	400.4	黒頁
45	石槍	2	I-18	52	99	83	235.5	黒頁
46	石槍	5	H-4 IIIa層	60	76	39	184.0	黒頁
47	石槍	5	F-15 IIIa層	58	62	19	74.6	黒頁
48	石槍	5	IIIa層	80	91	30	414.9	黒頁
49	石槍	2	C-10	134	87	52	536.7	黒頁
50	石槍	4	N-6	114	83	52	704.4	黒頁
51	打斧擦形	5	K-18	83	53	51	133.2	珪頁
52	打斧擦形	4	R-7	131	67	18	122.6	黒頁
53	打斧擦形	5	A-5・6 2粘土坑	(99)	50	16	41.4	砂岩
54	打斧擦形	4	X-16 IIIa層	93	63	12	62.3	黒頁
55	打斧擦形	3	B・C-21	123	94	31	317.9	黒頁
56	打斧分銅形	5	A-18	113	56	19	126.0	ホルン
57	打斧分銅形	2	W-17 横乱面	124	62	17	172.4	灰安
58	打斧分銅形	4	O-7 CⅡ黒土	111	80	25	246.2	黒安
59	打製石斧	5		(117)	54	18	136.8	
60	削片	3	Y-23	135	56	39	39.3	黒頁
61	打製石斧	1	W-8 25住	(95)	35	10	44.1	
62	礫器	2	I-9 II層	87	77	37	350.4	黒頁
63	礫石	2	W-12	134	76	26	389.5	黒安
64	石斧	4	X-6 黒色混土	93	58	30	283.5	
65	石斧	4	表採谷表土	63	64	24	167.7	
66	スタンブ形	5	IIIa層	126	83	47	741.7	黒安
67	スタンブ形	5	I溝	106	78	36	468.7	黒安
68	三角錐形	2	Y-2・3 IIIa層	110	77	42	249.2	黒頁
69	三角錐形	5	G-12 IIIa層	106	73	52	451.1	黒頁
70	磨石	4	X-0	(88)	(131)	(80)	1386.7	石閃
71	磨石	4	N-6	(75)	(50)	(57)	149.6	黒安
72	凹石	4	R-2 IIIa層	97	84	45	487.7	粗安
73	礫石	4	R-4	103	86	31	358.1	石閃
74	礫石	3	K-23 IIIa層	153	61	30	427.5	黒頁
75	礫石	4	P-8	110	45	45	387.8	石閃
76	削片	2	H・I-8 混土	155	110	67	3.6	黒安
77	敲石	5	E-14	154	68	44	597.0	粗安
78	凹石	5	M-11 IIIa層	168	86	68	539.2	粗安

「種類」の欄の略号は次のことを示す。

加工砥削片：加工痕ある削片

使用砥削片：使用痕ある削片

打斧：打製石斧

「石材」の欄の略号は次のことを示す。

黒安：黒色安山岩 黒頁：黒色頁岩

珪頁：珪質頁岩 石閃：石英閃緑岩

灰安：灰色安山岩 黒片：黒色片岩

粗安：粗粒安山岩 黒安：黒質安山岩

ホルン：ホルンフェルス 黒曜：黒曜石

(2) 土器

本遺跡の縄文時代出土土器は概して少量である。縄文時代に比定される遺構が検出されず、遺構確認作業時や、奈良・平安時代の遺構覆土からの出土が多い。また、土坑状の落ち込みからの出土も確認されたが、遺構伴出遺物ではなく、自然流入によるものと判断し、本遺跡出土の縄文土器は総て包含層出土扱いとした。本報告では今後における周辺遺跡の調査・整理に伴い、同時期の資料の充実を目的とし、出土土器のうちから必要なものを抽出し掲載する。出土土器の多くは縄文時代後期のものが多く、当該地域の例えば、荒砥二之堰遺跡や箕井八日市遺跡等に比較資料が出土しており、本遺跡の出土資料も併せて比較分析が果たせ得るものと考えられる。

1～10は、縄文時代前期初頭～中葉に位置付けられる。胎土に繊維を含む。1は0段多条RL横位施文。原体幅は短い。2は隆帯上に刻みを施し、燃糸側面圧痕が沿う。3は器面が荒れ判然としなが0段多条RLが施される。4は0段3条縦位・斜位施文。早期末葉から前期初頭期に見られる施文である。5～7は体部破片。いずれも0段多条のRL、LRで、原体幅は短い。1～7は花積下層式期に比定される。8～10は同一個体。外反気味の口縁部にLR縄文が施され、内面は横位の研磨により滑らかである。9・10には追加成型施文の痕跡がわずかに認められる。前期中葉段階のあるいは黒浜式終末期と考えられよう。

11～29は、前期後半の諸磯式に比定される。色調は赤褐色～褐色を呈す。11～14は前期後半諸磯a式初頭期に見られる、いわゆる「米字文」であろう。地文にRL縄文を施し、円形沈文を縦位に配し、平行沈線を縦位・斜位に結ぶ。ただ平行沈線は地文の条には沿っておらず、丁寧な施文ではない。また、胎土に少量の繊維を含み、諸磯a式初頭期の様相を見せる。15～19は諸磯a式。繊維は含まず、堅緻な焼成である。17～19は同一個体であろう。円形竹管文が縦位に施される。薄手の器厚を呈し、内面は丁寧に研磨される。17は外反する波状口縁で、波頂下に円形竹管文と同規模の孔が穿たれる。20は小型の円

形竹管文が施される。21～27はa式の体部破片。28も形態から諸磯a式と見られる。29は諸磯c式の貼付文を付す口縁部破片である。地文に集合沈線を施している。

30～33は、中期後半加曾利EⅢ式と捉えた。30～32は垂下細沈線とLR縄文の充填施文。33は波状小突起下に刺突列が間隔を保ち平行する。体部は縦位の集合沈線が地文として施される。

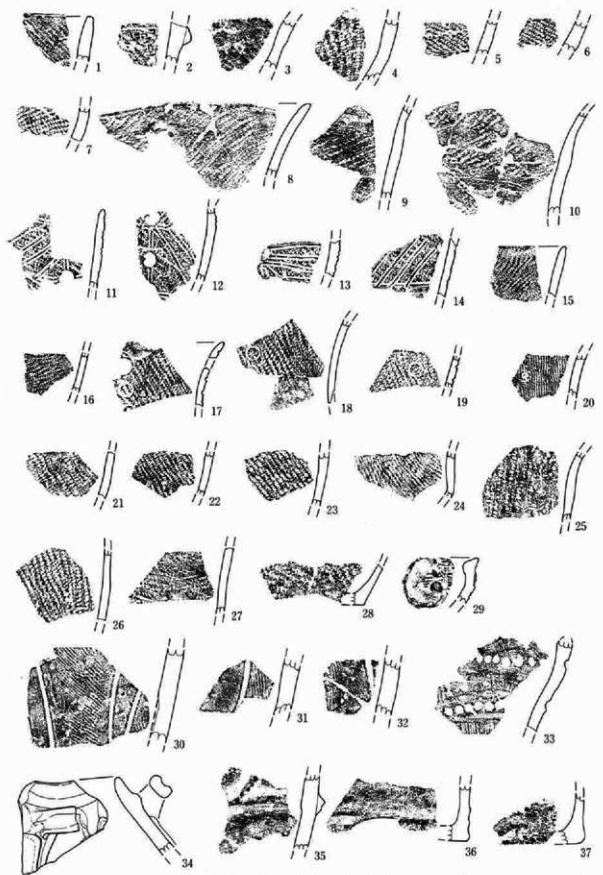
34・35は、加曾利EⅣ式であろうか。両者とも特殊な在り方である。34はおそらく瓢形の鉢あるいは深鉢であろう。内傾する口縁部には橋状把手が横位に付けられ、両端から細隆線が派生する。35は細隆線文による区画文であろうか。

36・37は加曾利EⅤ式の底部破片と思われる。36は腰部に横位の強い撫でが加わる。

38・39は、称名寺式古段階とした。いずれも加曾利EⅤ式の要素を残す資料である。39は平行する隆線によるモチーフ内を縄文充填施文する。おそらく縦位RL施文。39は細沈線文が縦に縦位施文される。外面は研磨され平滑である。

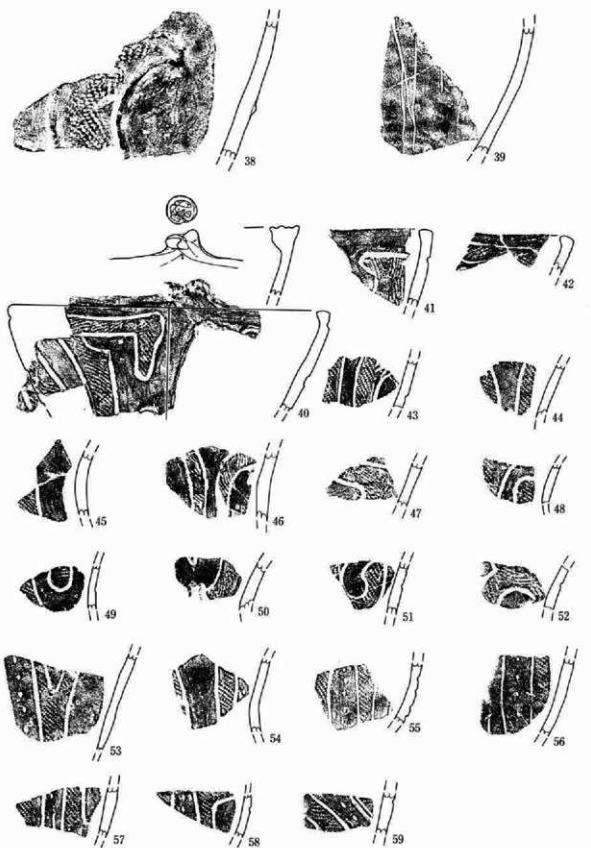
40～59は、後期初頭の称名寺式の中段階Ⅰ式の後半に比定されよう。冒頭に断つたが、この後期の土器群は本遺跡の縄文時代遺物の中では比較的まとまった出土を見せているが、遺構に帰属し得る出土状態は示しておらず、包含層出土としてまとめた。しかしながら、周辺の遺跡では当該期の資料が少なからず出土しており、当地域の後期集落や包蔵地の在り方が徐々にではあるが明らかになりつつある。将来的な課題として、赤城山南麓域平野部周辺の該期遺跡と出土資料を考えなければならないだろう。

40は平縁で円形の小突起を突出させる。突起上面には刺突が施される。口縁下の横位一次区画文を描かず、モチーフは上部運算線より派生する。モチーフの全容は判然としなが、おそらく空白部による渦巻き状の变化形が配されるものと思われる。充填縄文はLR細縄文を用い、モチーフ上位は横位、下位は縦位に施す。41～52も同等の「渦巻き状」・「J字状」・「鉞先状」のモチーフによるものと考えら



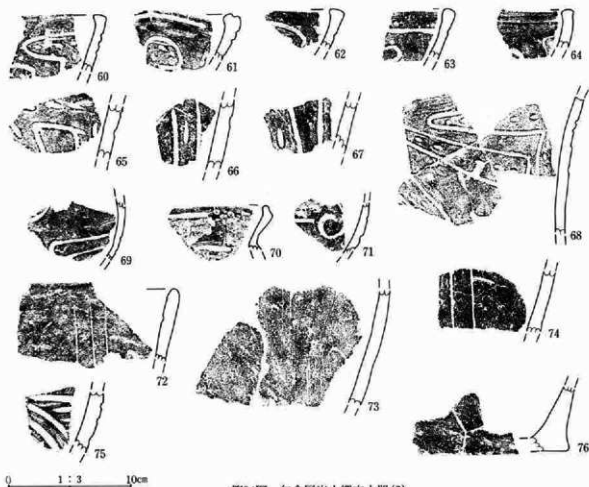
第22図 包含層出土縄文土器(1)

0 1:3 10cm



第23図 包含層出土縄文土器(2)

0 1:3 10cm



第24図 包含層出土縄文土器(3)

れよう。すべて充填縄文施文で、無文部は丁寧な撫で・研磨で滑沢である。沈線も深い。

この段階で特筆すべきは、53～59の一群であろう。空白部と縄文施文部および刺突列施文部に分けられ、称名寺式に普遍的な、いわゆる「交互充填施文の原則」からすると、破格の文様構成を示している。いずれも、細沈線による懸垂状の構成で、充填縄文は縦位LR細縄文である。刺突列は比較的小型で、間隔も狭い。当地域の独特の文様構成であろうか、特殊な例として位置付けておきたい。

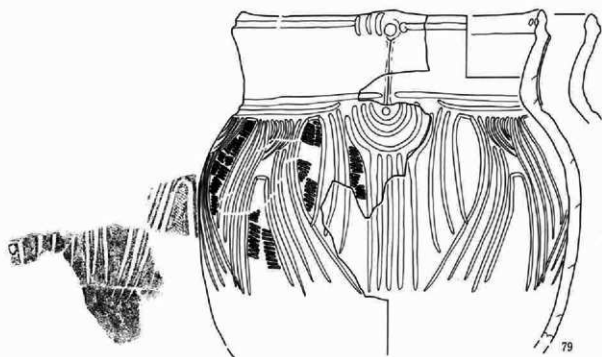
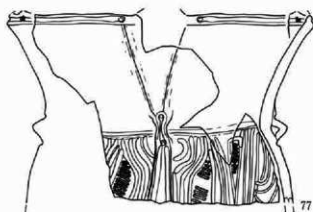
68～69は、称名寺式の新段階—称名寺2式とした。やや太めの一本書きの沈線でモチーフが描かれ、刺突文を充填する文様構成である。60～64に集めた内屈する口唇部は称名寺式に見られる特徴で、61のように口唇部上端に沈線を巡らすものもある。刺突文は、65～68に見られる雨垂れ状の刺突が充填され

ており、前段階に見られた小型の刺突文との差が見られる。69の器面は入念に研磨され、おそらく注口土器体部破片であろう。

70～79は、後期中葉の堀之内1式である。少量の出土量にかかわらず、大形破片の出土が見られ復元実測が果たし得た個体もある。

70の口唇部には2ケの刺突文が付され、沈線が巡る。71は小渦巻き文が配される。器面は研磨され、あるいは注口土器か。72・73は同一個体か。3条一組の浅い細沈線が懸垂する。74も細沈線による懸垂文でやや深く平行施文されている。75は深鉢頭部の破片か。やや太めの沈線で、区画文が描かれるようだ。沈線の施文は丁寧である。76は底部で、端部が張り出し、内外面とも研磨される。

77～79は、器形復元を果たし得た深鉢である。堀之内1式とした。



第25図 包含層出土縄文土器(4)

第3章 検出された遺構と遺物

77の口縁部上には、おそらく小突起が付され、口唇部に沿って沈線が巡る。口縁部は強く外反し、頸部は括れ体部は大きく張る器形である。屈曲部には細隆線が巡り、「8」字状の小把手が付せられ、この小把手より口縁部と体部に2条の細隆線が分岐懸垂する。この体部細隆線は、懸垂状の文様構成の基準となっているようだ。体部文様は、沈線を懸垂し縦位LR縄文を充填する。色調は褐色色を呈し、胎土は緻密である。焼成は堅緻。口縁部内面は、丁寧に撫でられ滑沢面を持つ。口縁部から体部上半の約1/3の残存である。

78の口縁部は内湾ぎみに強く開く。体部は小径で直線的に体部下半に至る。口縁部には小波状の小突起を付し、突起上端には刺突文が加えられる。突起直下より隆線が垂下し、隆線には円形の浮文と刺突文が付される。体部の文様は、垂下隆線と垂下沈線、および体部下半の横位沈線によって大区画され、区画内を沈線によるモチーフが配され、空白部を斜位の沈線で充填する。内面は研磨により滑沢面を持つ。色調は鈍い黄褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口縁部から体部下半約1/4の残存である。

79は大型の深鉢。口唇部は内傾し、口縁部に波状小突起を設ける。頸部は緩やかに屈曲し体部上半は球胴状に張る壺状の器形を呈す。波状小突起は円形の沈文を付した浮文と弧状短沈線を持ち、内面にも円形沈文を施す。小突起下より、細隆線が頸部の円形沈文に垂下する。頸部には2条の沈線が巡り、口縁部と体部を画す。体部文様は、波状小突起下位に円形沈文を施し、半円状の沈線が閉む。以下沈線による懸垂文が体部文様を構成し、区画部分には縦位LR細縄文が充填される。体部下半は、懸垂文が及んでおらず無文である。色調は明褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は普通である。口縁部から体部下半約1/4の残存である。

以上のように本遺跡の包含層出土の縄文土器を概観したが、後期称名寺式と堀之内式の資料がやや多い。

該期の周辺遺跡としては、前述の荒砥二之堰遺跡や笈井八日市遺跡の他に、荒砥前原遺跡・荒砥北原遺跡や今井白山遺跡等でも該期土器の出土が見られる。また当地域は、荒砥二之堰遺跡調査以来、中期～後期の敷石住居跡が点在する地域として知られており、前に挙げた荒砥前原や今井白山でも、少数ながらも敷石住居跡が検出されている。また、古くは笈井遺跡敷石住居跡も報告された経緯もある。

本遺跡は、このような周辺環境にあり後期資料が出土する必然性は充分あったのだが、残念ながら遺構出土ではなく、包含層出土の資料群となった。また、各段階でのまとまった出土量はなく散在的な出土であり、当地域の後期土器群の特徴や変遷を具現するものではない。

しかしながら、何点かの資料には特徴的な要素が見られ、今後の資料増加に備えて事例や特徴を指摘しておきたい。本文中にも触れたが、53～59は体部破片資料ながら、称名寺式の文様基本構成である、「交互充填施文の原則」から外れた一群である。縄文施文部に刺突文を施す例は多く見られるが、無文部と縄文部さらに刺突部が加わる文様構成は他に例を見ない。おそらく、口縁部に沿う刺突列帯の変化あるいは無文部の内部の変化から発生した文様構成と思われ、今後完形土器の出土例を望みたい。

次に、復元実測し得た3個体の堀之内式土器は、77・79が近接した時期と思われる。両個体とも、堀之内1式普通の文様構成であり、県内でも比較的類例は多い。新田町矢太神沼遺跡1号住出土土器に良好な一括資料が知られ、荒砥二之堰34号住・35号住でも同段階の土器群が出土している。78の類例は少ない。矢太神沼1号住にも同様の文様構成を持つ朝顔形の小型深鉢が見られるが、78は沈線文充填手法を取り、モチーフの在り方、体部下半の横位一次区画線の存在から、堀之内1式後半の所産と捉えたい。

3 古墳時代以降の遺構と遺物

概要

本遺跡で検出された遺構の大部分は、ここで扱う古墳時代以降に属する。竪穴住居跡の場合は、出土遺物や住居形態から、帰属する時代がある程度判明するが、その他の掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸等については確定できないものが多いため、ここではあえて時代区分をせず、一括して記述を行った。ただし、遺構群構成を把握する便を図るため、帰属する時期が推定できるものについては下記にまとめた。なお暦年代推定については、平成7年段階で判明している群馬県中部の土器編年と年代観（1994坂口「今井道上遺跡の集落構成と変遷」『今井道上遺跡』、神谷佳明「出土土器について」『二之宮谷地遺跡』いずれも財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）に従った。更に本遺跡での編年細分も可能だが、同一地域における隣接遺跡での成果をまとめて考察するのが良策と考え、本書ではあえてそれを行わなかった。

- 4世紀—1・5・14号住、3号竪穴
 6世紀—9・19・20・21・22・23・24・26・29・33・34・35・36・37・38・40・41・43・45・51・54・55号住、10号掘立柱建物、15号井戸
 7世紀—2・3・12・13・15・16・17・25・27・30・39・46・47・48・49・50・52・53・57・58・59・62・64号住、（1号井戸）
 8世紀—10・18・42・63号住
 9世紀—4・6・7・11・28・44・60・61・65号住
 1号鍛冶、26・27号溝
 10世紀—8・56号住

以上のように、本遺跡では4世紀（後半）から集落形成が始まり、5世紀に断絶、6～10世紀には継続的に集落が営まれたことが判明している。とりわけ6～7世紀には竪穴住居跡の密集度が高く、8世紀と10世紀には極端に減少する傾向が伺われる。東側に隣接する二之宮谷地遺跡ではこれと逆の傾向が見られることから、この二遺跡は各々が独立した集

落ではなく、本来同一集落と捉えるべきものであり、何らかの理由が生じたことによって居住域の中心を移したと考えておきたい。

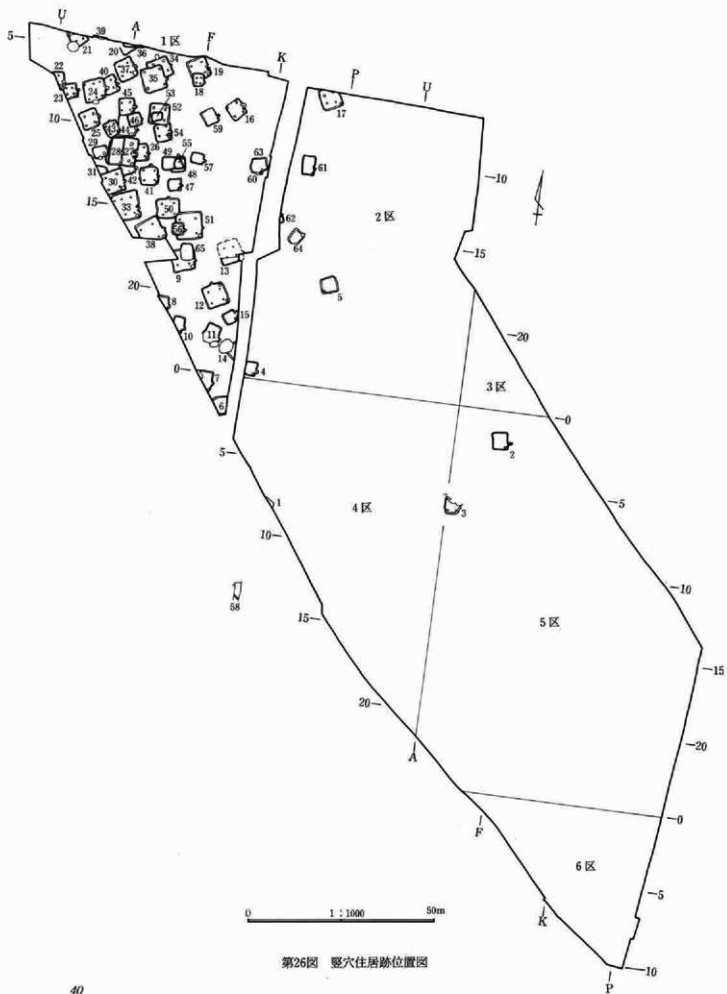
1号鍛冶跡は、9世紀代の集落に伴うものであるが、その位置は本遺跡と二之宮谷地遺跡の居住域の中間である空閑地にあり、一般竪穴住居跡とは隔絶させる意図が伺える。

掘立柱建物跡は、6世紀中～後半の10号掘立、中世と推定される1・2号掘立以外は、時期を限定するのは困難であるが、竪穴住居跡との重複関係から23・24号掘立は古墳時代に溯る可能性が高い。

特殊な遺構としては、調査区北西部で検出された直線状に南北に走る2条の溝と中央窪地の粘土採掘坑が上げられる。この溝は北側と南方で西方に折れ、一辺100m強の方形区画になることが想定される（神谷1994『今井道上遺跡の方形区画遺構について』『今井道上遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）。粘土採掘坑のある窪地は南方に展開する浅い谷地形の谷頭にあたるが、湧水は見られずわずかに黒色土が堆積する程度で、乏水性の谷だったと考えられる。この窪地には自然の表流水を集めたとみられる浅い溝が数条集まっている。

遺構群の分布から、調査区中央の窪地をはきんで、西側微高地上に居住域があり、窪地から東側微高地に至る緩斜面では祭祀的な1号井戸と鍛冶跡のみという明確な土地利用の区別がある。ただし、この緩斜面地点は前述の二之宮谷地遺跡居住域の西はずれという位置関係にあたることから、集落全体としては谷頭を囲む東西の微高地上に居住域が展開し、中央窪地で粘土採掘や祭祀の場を設け、1棟やや離れた鍛冶場を営むという景観が想定できよう。

なお、調査区北西部で東西に走る道路遺構と、その南側に掘立柱建物群と井戸で構成される中世屋敷跡が検出されている。道路遺構は「あずまみち」の伝承がある現市道の下にあり、「古東山道」との関連を検証する重要な意義をもつ。



第26图 竖穴住居跡位置图

(1) 竪穴住居跡

1区から5区で合計65棟が検出された。時期は古墳～平安時代に属するもので、中世と推定される竪穴状遺構は別に扱う。

1号住居跡 (第27・28図)

位置 4区M-7、N-7・8グリッド

規模 4.7×3.3m

壁高 40cm

主軸方位 N-30°-E

床面 全体的に貼床を施し、床面レベルはほぼ水平。全体的に硬質で、硬軟の境界は不明確。

炉 不定形と円形に床面に焼けた痕跡が中央部分で検出された。くぼみはなくほぼ平坦。焼土の量は少なく、使用期間は比較的短かったと思われる。

貯蔵穴 北隅の北東壁に沿って掘り込まれる。平面は不整形円形で、径70×30cm、深さ15cm。底面は浅

い碗状を呈する。

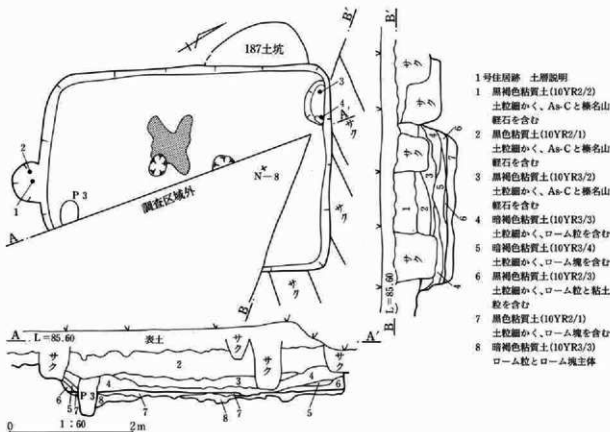
ピット 柱穴と考えられるものはない。南西壁のほぼ中央付近で外側に張り出すピット1基が検出された。半円形を呈し、径50cm、底面の深さは検出面から30cm深く、床面からは16cm高い。なお、炉に隣接して浅い円形のくぼみが検出されたが、焼土を切っていることから、本住居跡を切る新しい掘り込みの痕跡と考えたい。

周溝 床面検出時には不明瞭であったが、掘り方確認時に検出された。北西壁に沿って掘り込まれ、幅10cm前後、深さは最大10cmで凹凸が多い。

掘り方 北西壁に沿って帯状に掘りくぼめているが、周囲とのレベル差は顕著ではない。

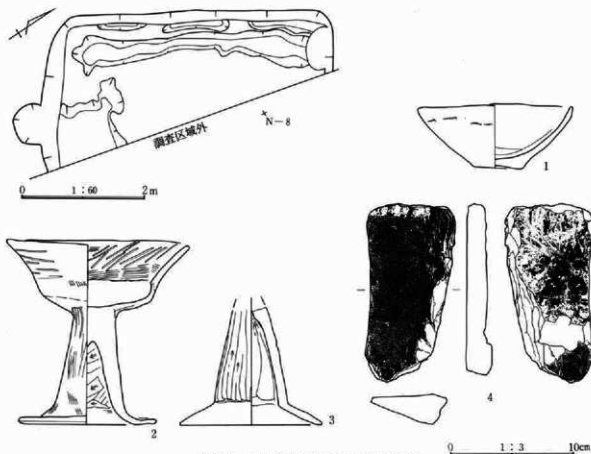
遺構重複関係 187号土坑との新旧関係は不明。近世以降の畚サクに切られる。

遺物 貯蔵穴及び張り出しピットから遺存状態の良い遺物が出土する。時期は古墳時代前期に属する。



第27図 1号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第28図 1号住居跡掘り方及び出土遺物

2号住居跡(第29~34図)

位置 5区C・D-1・2

規模 4.1×4.4m 壁高 59cm

主軸方位 N-85°-E

床面 西半部は、ローム地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦で東半に比べ4cm前後低い。東半部は、掘り方のくぼみや床下土坑をローム塊混土で埋めて床面とする。やや凹凸が目立つ。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、天井部は残っていない。袖部はわずかに堅穴内に張り出すのみで、燃焼部の大部分は地山を掘り込んだ内側に粘土とロームの混合土を貼って構築される。燃焼部の形状は箱形で、規模は長さ1.42m、幅60~40cmである。燃焼部は焚口から70cmほどで、奥に長さ20cmの礫を直立させて支脚としている(第30図)。煙道は約50°で傾斜し、中央で段をなしてほぼ直上にのびる。

貯蔵穴(P1) 南東隅に位置するビット、平面は不

整方形で、規模は73×44cm、深さ63cm。上半はすり鉢状で、下半は円筒状を呈する。埋没は住居廃絶以後の周囲からの流入土によると思われる。

柱穴 確認できない。性格不明のビット6基を検出。このうちP2は出入りに関連する支柱穴、P5~P7は床面を掘り込み住居の第一次埋没土が堆積することから、住居廃絶に開穿された可能性が高い。

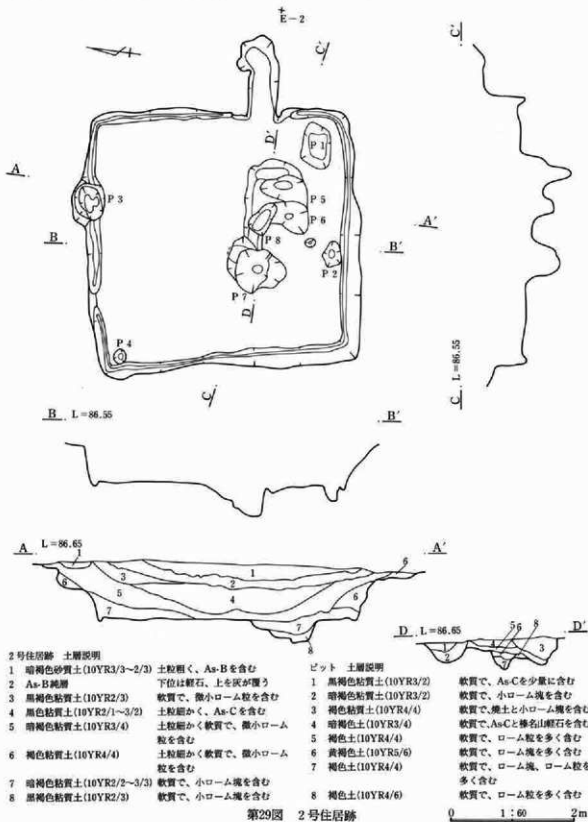
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 2	37×29	32	10
P 3	67×52	82	25
P 4	25×20	12	10
P 5	80×60	50	30×10
P 6	60×48	51	10
P 7	96×70	52	14

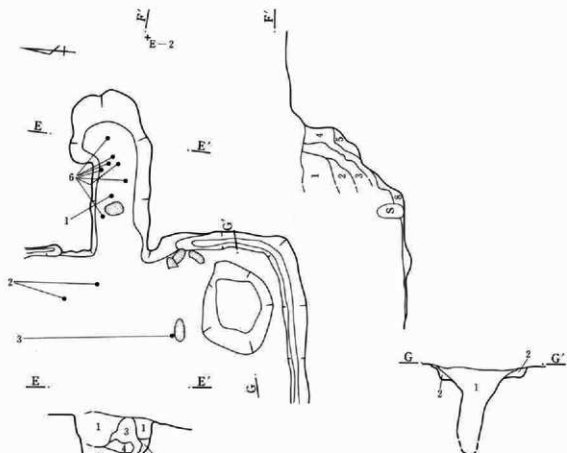
周溝 竈と北辺の西端から1.2mの部分を除いて巡っており、最大幅22cm、深さは10cm以下。

掘り方 南壁に沿って帯状、竈前面部は皿状、住居中央部と西壁際中央に土坑状の掘り方が検出された。いずれもローム塊の多い土で埋填される。

遺構重複関係 なし。

遺物 竈から完形坏と甕割部が出土。7世紀後半のものに限られ、混入品は見られない。





竪 土層説明

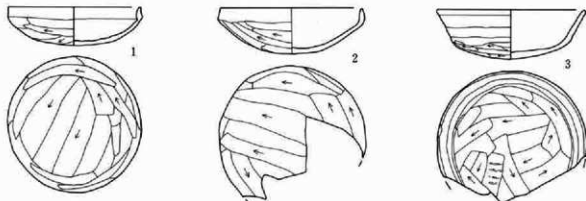
- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 黄褐色土(10YR4/4~5/4) | 粘土粒と暗褐色土粒の混合、As-Cを含む |
| 2 暗褐色土 (10YR3/4) | 軟質で、炭化物、焼土、ローム粒を含む |
| 3 赤褐色土(2.5YR5/8) | 天井~煙道部内壁の崩落焼土 |
| 4 褐色土(10YR4/6) | 焼土粒とローム粒を含む、煙道狭入土 |
| 5 赤褐色土(2.5YR5/8) | 煙道部崩落焼土 |
| 6 黄褐色土(10YR4/4) | 焼土粒とローム粒を多く含む |
| 7 黄褐色土(10YR4/4) | 軟質で、焼土粒とローム粒が主体 |
| 8 黄褐色土(10YR4/4) | 焼土、ロームの集合、灰を含む |

貯蔵穴 土層説明

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/3~2/3) | 軟質でローム粒多い、焼土とローム塊を少量含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 小ローム塊を多く含む、粘球埋土 |

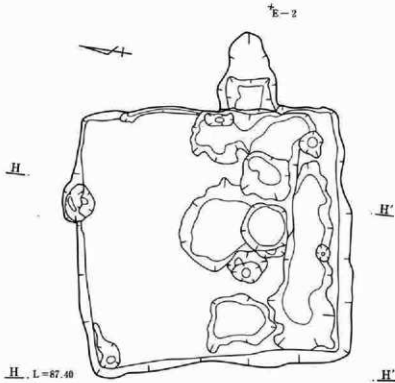
0 1:30 1m

第30図 2号住居跡竪断面



第31図 2号住居跡出土遺物(1)

0 1:3 10cm



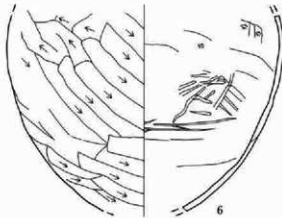
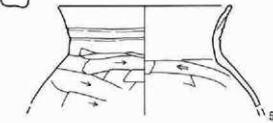
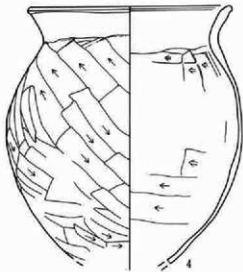
掘り方 土層説明

- 1 黄褐色土(10YR5/8)
- 2 黄褐色土(10YR5/8)
- 3 褐色土(10YR4/4)
- 4 褐色土(10YR4/4)

- ローム塊主体
- ローム主体、増山と思われる
土粒粗く、ローム塊を含む
- ローム塊主体で、炭化物を少量
含む

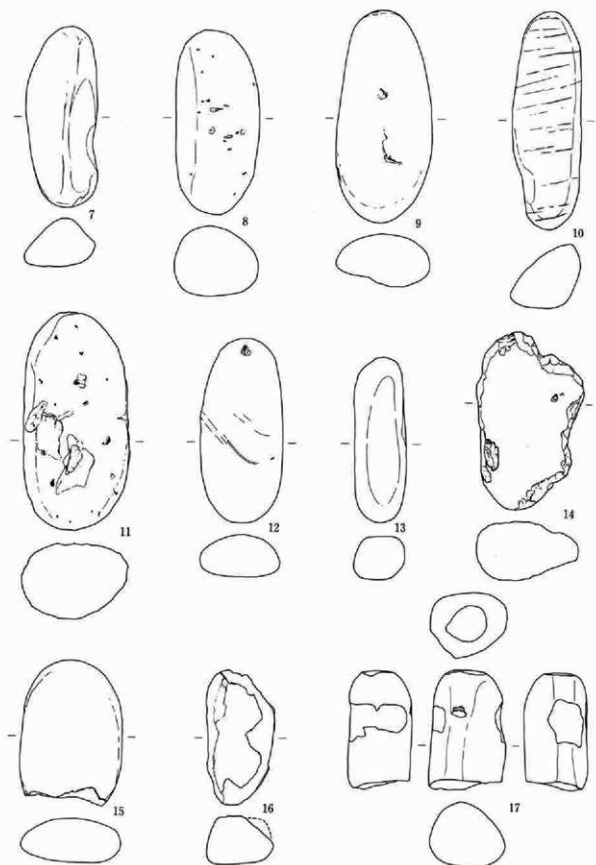
0 1:60 2m

第32図 2号住居跡掘り方



第33図 2号住居跡出土遺物(2)

0 1:4 10cm



第34図 2号住居跡出土遺物(3)

3号住居跡 (第35図)

位置 5区A・B-6・7

規模 (4.5)×3.1m 壁高 63cm

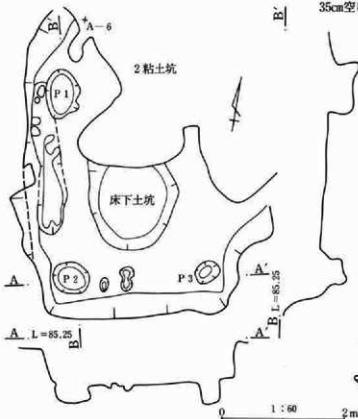
主軸方位 N-80°E

床面 ほぼ平坦な貼床で、床埋土の厚さは不均一。

竈 東壁の南寄りに位置し、北半部は不明。遺存規模は、長さ80cm、幅80cm。掘り方底面に20cmの厚さ

で埋土を行い火床面とする。火床面は平坦で焚口よりやや高く、奥行きは35cm前後である。奥壁は直立し、中位から外傾して煙道となる。袖部～本体は粘土を芯としてロームで覆って構築する。

柱穴 住居跡の隅部に3基のピットが確認され、位置と規模から、柱穴と考えられる。なお、南壁際に並ぶ2基の小穴は、壁上端から50cm離れ、間隔を35cm空けている。*はしご穴* だろう。



上端径 深さ 下端径 (cm)

P 1 80×56 52 62×35

P 2 60×50 40 48×35

P 3 40×30 35 20×12

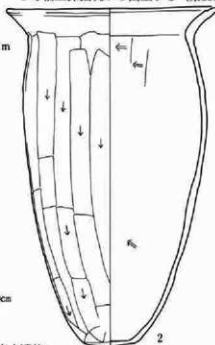
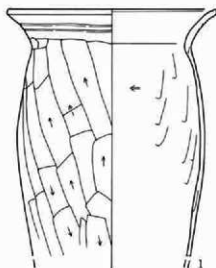
P 1-P 2 2.9m P 2-P 3 2.1m

周溝 西壁に沿い幅40cm以下、深さ3cm前後。底面は凹凸多く、掘り方か。

掘り方 中央部から床下土坑1基を検出した。不整形円形で、径(1.5)×1.4m、深さ28cmである。底面は平坦。

遺構重複関係 2号粘土探掘坑に切られる。

遺物 南東隅の電右脇から壺が出土。又、本住居跡から落下した可能性のある平瓶が2号粘土探掘坑から出土する (第292図)。



第35図 3号住居跡及び出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

4号住居跡 (第36・37図)

位置 2区K・L-23・24

規模 2.9×3.6m 壁高 25cm

主軸方位 N-95°-E

床面 全体にローム地山を床とし、竈の焚口周辺を除いて硬質。レベル差もほとんどなく平坦。

竈 東壁の南寄りに構築、袖部はやや壁穴内に張り出す。長さ110cm、燃焼部内法幅は50cm。焚口から燃焼部にかけての掘り方は、舟底状にくぼみ、人為的な埋土を行っている。

貯蔵穴 南東隅に構築。隅丸長方形を呈し、規模は68×48cm。断面は逆台形状で深さは19cm。なお貯蔵穴周囲は床面に比べ2～3cmくぼんでいる。

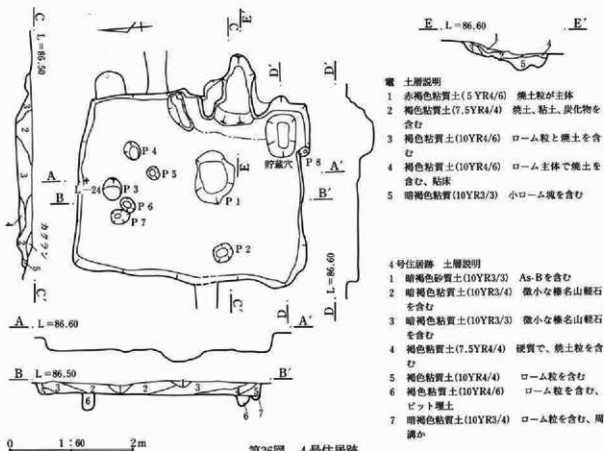
柱穴 ビット8基が検出されたが、性格は不明。ただしP1は人為的な埋土から床下土坑の可能性はある。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	75×61	18	50×40
P 2	30×27	28	18×12
P 3	36×28	18	15
P 4	30×25	27	20×14
P 5	20	16	10
P 6	26×18	14	12×8
P 7	30×25	19	8

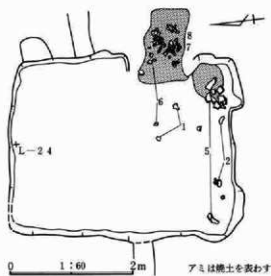
その他の施設 竈の左側の東壁中央から南側に湾曲してのびる短い溝が検出された。長さ65cm、幅20cm、深さ17cm。これを境にして床面が北では硬質、南では軟弱であることから、何らかの境界を意味する遺構か。

遺構重複関係 なし。

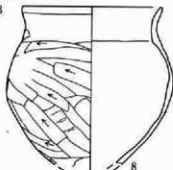
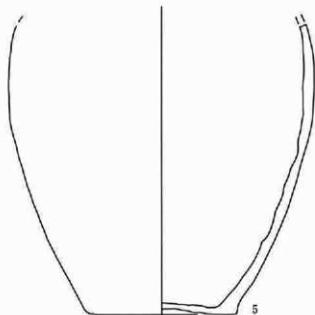
遺物 竈、貯蔵穴、及び住居の南壁際に偏って分布する。土器が主であるが、埋土から鉄製の釘、刀子、基石状石製品が出土している。



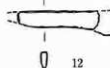
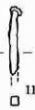
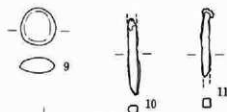
第36図 4号住居跡



アミは焼土を表わす



0 1:4 10cm



0 1:3 10cm

第37図 4号住居跡遺物出土状態及び出土遺物

0 1:2 5cm

第3章 検出された遺構と遺物

5号住居跡 (第38~41回)

位置 2区O・P-17・18

規模 4.2×4.6m 壁高 64cm

主軸方位 N-20°-W

床面 ほぼ水平で、軟質ローム土を床土とする。

炉 主軸線上に30cm離れて2基が並ぶ。F1は北西寄り、F2は中央に位置し、規模は直径40cm深さ4cmと同じ。踏み固められた痕跡が認められず、新旧関係が同時存在かは不明。

ピット 竪穴からは貯蔵穴(P1)と5基のピットが検出されたが、配置からみて柱穴とは考えにくい。貯蔵穴は南西隅に掘られ、平面形は不整形円形。断面は箱形。

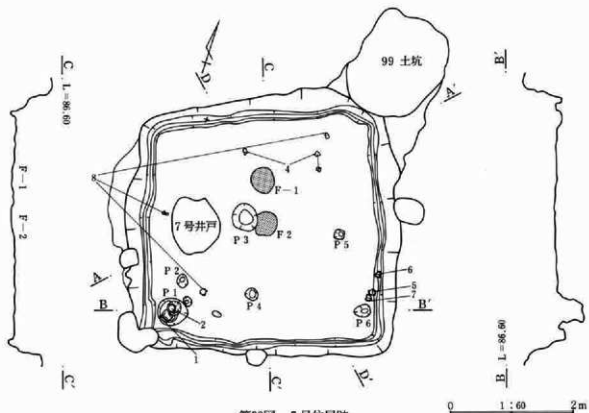
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	45×42	45	35
P 2	20×16	14	10
P 3	45×40	9	23
P 4	20	6	10
P 5	17	8	8
P 6	25×20	11	10×6

周溝 最深部10cmで全周する。幅は最大で15cm。底面はハードローム層に達する。

掘り方 凹凸はあるが全体に平均した掘り方で、ハードローム層を掘り抜く。

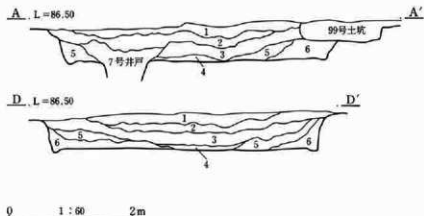
遺構重複関係 6・7・8号掘立柱建物、7号井戸、99号土坑に切られる。

遺物 貯蔵穴P1からはほぼ完形の台付甕2個体が出土。東壁際に台付甕の脚台部3ヶがまとめて出土。いずれも古墳時代前期。



第38回 5号住居跡

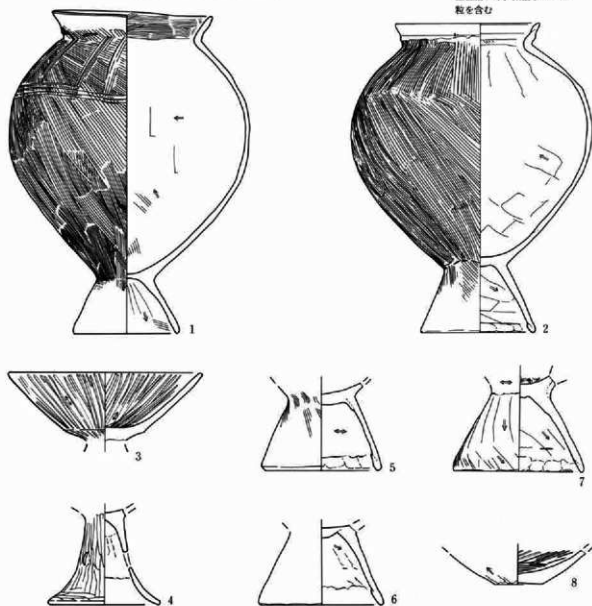
3 古墳時代以降の遺構と遺物



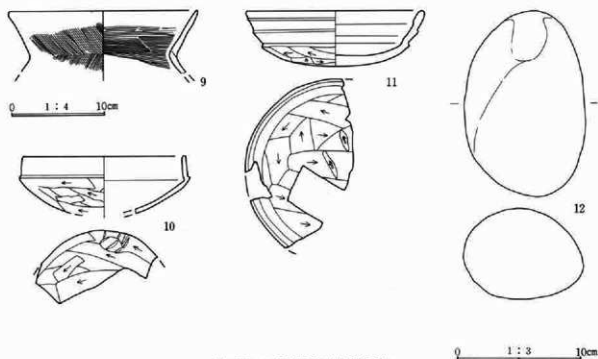
第39図 5号住居跡土層断面

5号住居跡 土層説明

- 1 黒褐色粘質土(10YR2/2)
土粒細かく、3~5ミリの
礫名山軽石を含む
- 2 黒色粘質土(10YR2/1)
1層と同質で、As-Cが少
量加わる
- 3 黒褐色粘質土(10YR2/2)
土粒細かく、As-Cを含む
- 4 黒褐色粘質土(10YR2/3)
土粒細かく、軟質で、ロー
ム粒を含む
- 5 黒褐色粘質土(10YR2/3)
土粒細かく、3~5ミリの
礫を含む
- 6 暗褐色粘質土(10YR3/3)
土粒細かく、微細なロー
ム粒を含む



第40図 5号住居跡出土遺物(1)



第41図 5号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡(第42・43図)

位置 4区I・J-1・2

規模 4.2×?m 壁高 72cm

主軸方位 N-(76)°-E

床面 全面ロームブロック主体の貼床。中央と西壁際が硬化する。レベルはほぼ均一。

竈・炉 不明。

柱穴 壁穴内で中央部と南東壁際に3基づつ計6基が検出されたが、伴う可能性については不明。P3とP6、P1とP4、P2とP5はそれぞれ約1.8mの距離で平行に並び、重複する掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

上端径 深さ 下端径 (cm)

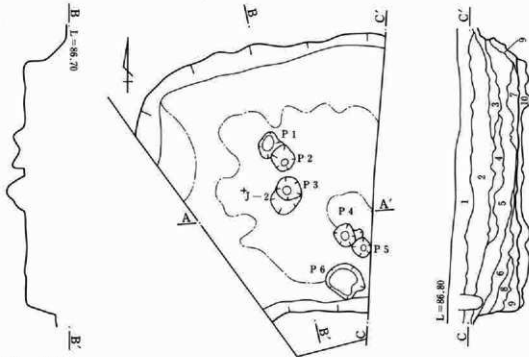
P 1	40×28	16	25×16
P 2	35×32	27	12
P 3	60×32	31	14
P 4	35×30	25	12
P 5	30×25	19	10
P 6	65×50	21	45

周溝 なし。

掘り方 中央がやや浅く、壁際を深く掘るが、明瞭ではない。最深部で10cm前後の埋土で貼床を構築。

遺構重複関係 15号溝に切られる。

遺物 大部分が埋土から出土。



6号住居跡 土層説明

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3)
- 2 暗褐色土(10YR3/4)
- 3 暗褐色土(10YR3/4)
- 4 褐色粘質土(10YR4/4)
- 5 褐色粘質土(10YR4/4)
- 6 黒褐色土(10YR2/3)
- 7 褐色粘質土(10YR4/4)
- 8 暗褐色土(10YR3/3)
- 9 褐色土(10YR4/6)
- 10 暗褐色土(10YR3/4)

As-Bを含む、現耕作土

軟質で、ブロック状

棒名山礫石、As-C、焼土、ローム粒を含む

ローム粒を含む

軟質で、焼土とローム粒を含む

軟質で、棒名山礫石と焼土含む

ロームと暗褐色土の混合土

軟質で、ローム粒と焼土を含む

ロームを主体とする

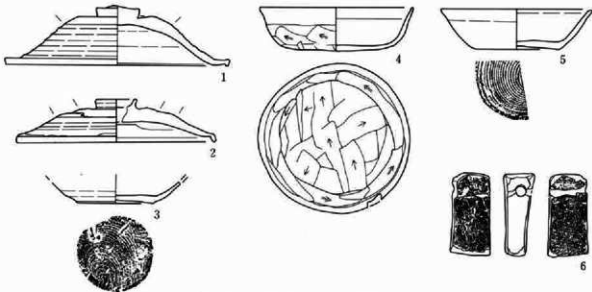
ローム粒、ローム塊主体、焼土をブロック状に含む、粘床埋土

A, L=86.80



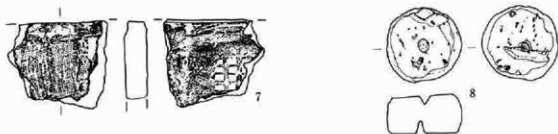
A'

0 1:60 2m



第42図 6号住居跡及び出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第43図 6号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

7号住居跡 (第44・48図)

位置 4区H・I-0

規模 4.8×3.5m 壁高 42cm

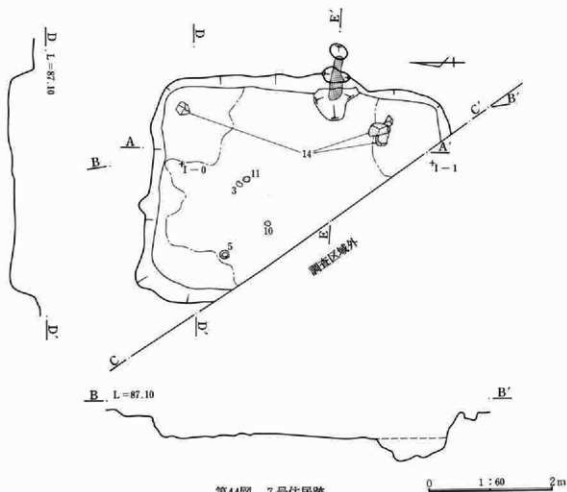
主軸方位 N-5°-E

床面 中央は地山のローム、隅部は埋土による貼床。中央は硬質で北から南へ緩傾斜する。

竈 東壁の南寄りに位置。煙道と器設部を残す。竪

穴内に張り出す袖部は見られない。奥行き60cm。焚口は40°ほどの傾斜で下がるが、灰掻きのためであろうか。火床面は平坦で床面より10cmレベルが低い。器設部は40×20cmの横長楕円形。燃焼部天井はロームで構築され、煙道は地山を掘り抜く。煙道は50°傾斜し、直径約10cmを測る。

柱 穴 床面精査では南東寄りにP10を検出。これ



第44図 7号住居跡

0 1:60 2m

は柱穴の可能性あり。床下からP1とP2の2基、壁際にP3～P9の7基が検出された。これらが本遺構に伴う可能性は不明。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	85×65	22	50×38
P 2	75×70	28	40
P 3	30×25	30	18×12
P 4	40	18	17×12
P 5	25	28	6
P 6	30×20	(40)	14
P 7	50×20	51	18×12
P 8	55×35	13	30×12

P 9 45×30 29 18×12

P10 76 36 30×22

なおP3～P9の深さは遺構検出面からを測った。

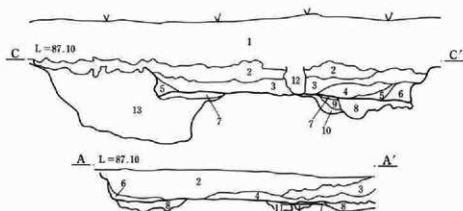
貯蔵穴 南東隅に構築され、平面は方形、規模は100×(70)cm深さ35cmを測る。

周溝 なし。

掘り方 隅を深く掘る傾向あり。また電前面部も皿状に浅く掘り込んでいる。

遺構重複関係 140号土坑を切る。

遺物 貯蔵穴と竈の間で人頭大の割罫が3ヶまとまって出土したが、電袖構築材だった可能性あり。大部分は埋土からの出土である。



7号住居跡 土層説明

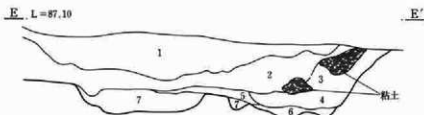
- 1 暗褐色土(10YR3/4)
- 2 黒褐色土(10YR2/3)
- 3 黒褐色粘質土(7.5YR3/3)
- 4 暗褐色土(10YR3/4)
- 5 黒褐色土(10YR2/3)
- 6 褐色土(10YR4/4)
- 7 褐色土(10YR4/4)
- 8 暗褐色土(10YR3/3)
- 9 暗褐色土(10YR3/4)
- 10 黄褐色土(10YR5/6)

- As-A含む、近～現代の耕作土
 標名山軽石、焼土粒、炭化物粒を含む
 2層に近似
 As-C、焼土粒、ローム粒を含む
 As-C、焼土粒を含み、炭化物粒が多い
 ロームを主体とする壁崩落土
 ローム塊を主体とする床土
 ローム粒、粘土、焼土、炭化物粒の混土
 ローム塊を主体で、焼土、炭化物粒を含む
 ローム塊主体、黒色土を中にはさむ

- 11 暗褐色土(10YR3/3)
- 12 暗褐色土(10YR3/4)
- 13 140号土坑埋土

- ローム塊、粘土、焼土、炭化物粒の混土
 近～現代の耕作土に掘り込まれたビット

0 1:60 2m



竈 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR3/4)
- 2 黒褐色土(10YR2/3)
- 3 黄褐色土(10YR5/6)
- 4 黒褐色土(10YR3/2)

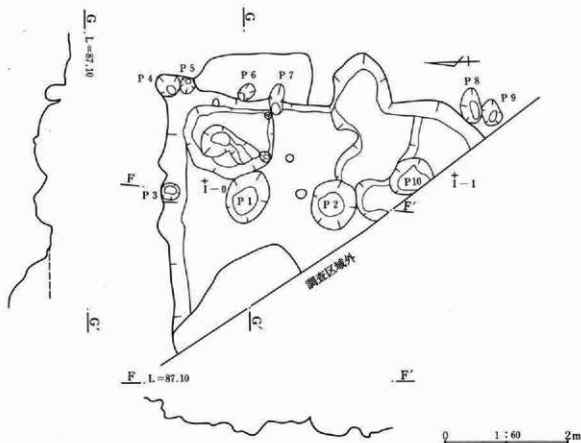
- As-A含む、近～現代の耕作土
 標名山軽石、焼土粒、炭化物粒を含む
 天井部、ローム主体
 竈内流入土、焼土多い

- 5 黒色土(10YR2/1)
- 6 黒褐色粘質土(10YR3/2)
- 7 暗褐色土(10YR3/3)

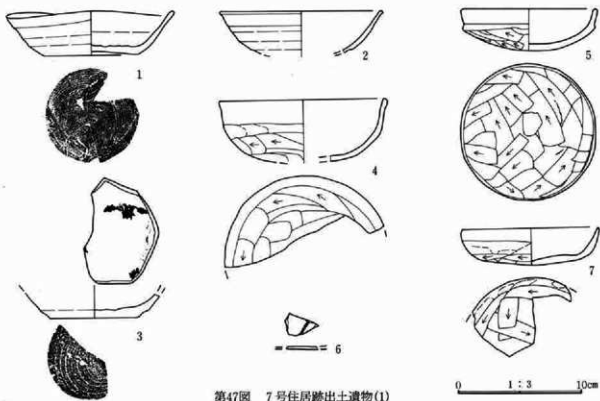
- ローム塊を含む互層、硬化した契口床面
 燃焼部底面の埋土か
 掘り方埋土

0 1:30 1m

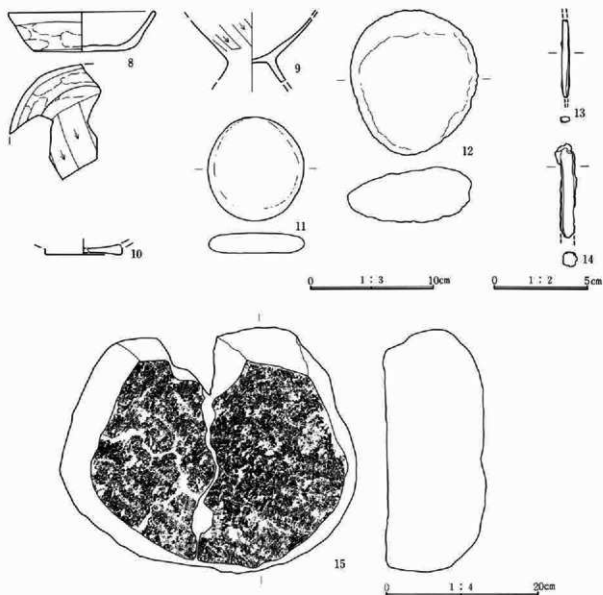
第45図 7号住居跡土層断面



第46図 7号住居跡掘り方



第47図 7号住居跡出土遺物(1)



第48図 7号住居跡出土遺物(2)

8号住居跡 (第49図)

位置 2区E・F-20

規模 不明 壁高 23cm

主軸方位 N-91°-E

床面 中央がややくぼむ。地山と思われる。

竈 東壁の南寄りに位置、地山を掘り込んで燃焼部を構築する。袖部と煙道は不明。燃焼部規模は80×

60cm、竈口は床面と同レベルで、火床面は奥へ約20°で傾斜して上がる。

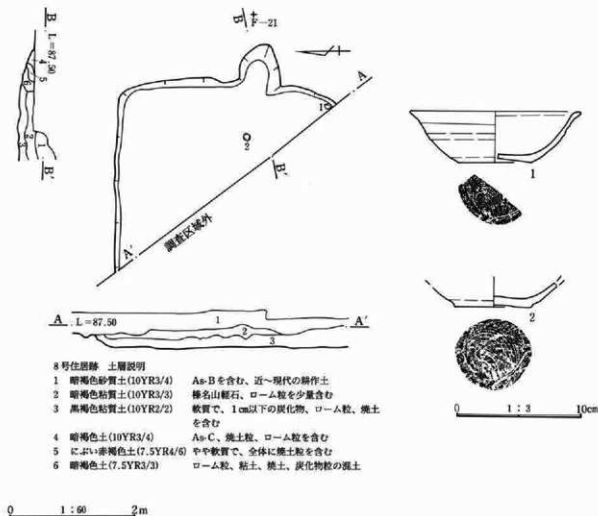
柱穴 検出されなかった。

周溝 なし。

遺構重複関係 なし。

遺物 埋土下層から土器片が出土。なお、下層には炭化物が含まれ、火災住居の可能性あり。

第3章 検出された遺構と遺物



第49図 8号住居跡及び出土遺物

9号住居跡 (第50・51図)

位置 2区F-17 規模 6.0×-m

壁高 50cm 主軸方位 N-75°-E

床面 地山のローム床、平坦。東西壁際以外は硬質。

竈 東壁南寄りに位置、袖部は110cm壁穴内に張り出す。全長150cm、幅95cm。燃焼部は縦長で内壁幅35～40cm。焚口は床面と同レベルで、下位は径50×40cm、深さ17cmのすり鉢形に掘って埋める。火床面は床と同レベルで、焚口から約30cmの位置に高坏(6)を倒立させ支脚とする。煙道は地山を掘り込み、燃焼部奥

壁から急傾斜で立ち上がる。火床面には厚い灰の堆積が見られる。

貯蔵穴 南東隅、竈の右脇にあり、平面は隅丸長方形、規模は105×95cm深さ90cm底面35×28cmを測る。竈との境と西側の上端部分は5cm前後の深さでくぼんでおり、壁との間に140×120cmの方形区画が形成される。おそらく蓋受けと思われる。

柱穴 8基のピットが検出され、P1～P4は主柱穴と考えられる。P5とP6は出入りに関連する支柱穴、P7とP8は重複する65号住居跡に伴う可能性あり。

3 古墳時代以降の遺構と遺物

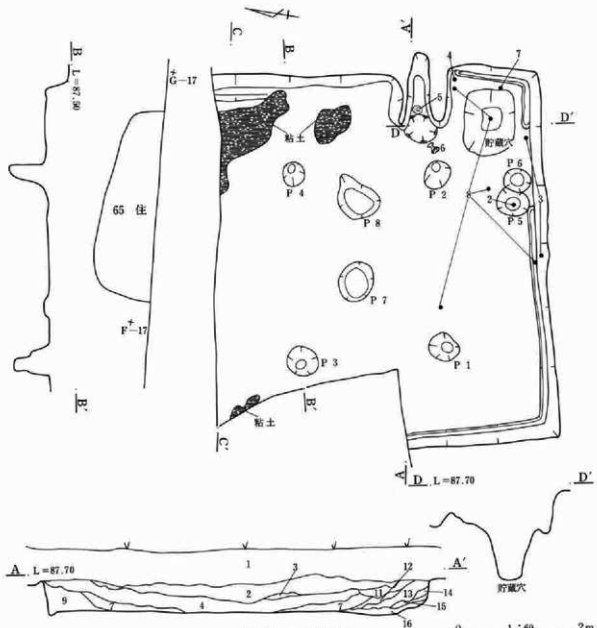
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	50×40	49	20×15
P 2	45×40	56	15
P 3	50×45	59	18×13
P 4	38×35	62	13
P 5	50×40	18	24
P 6	45×35	16	20
P 7	65×53	13	46×38
P 8	75×53	11	50×34

P 1-P 2 294 P 2-P 4 230
 P 3-P 4 310 P 1-P 3 239

周溝 竈左脇部分と貯蔵穴の南側が切れる。最大幅20cm、最深部8cm。

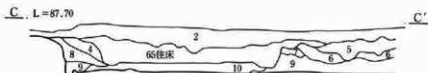
遺構重複関係 65号住居跡に切られる。

遺物 竈と貯蔵穴周辺に偏在。古墳時代後期のものが主。底部糸切りの坏(1)は混入品だろう。なお、北東と北西際の床面上に粘土が堆積する。人為的廃棄の可能性あり。



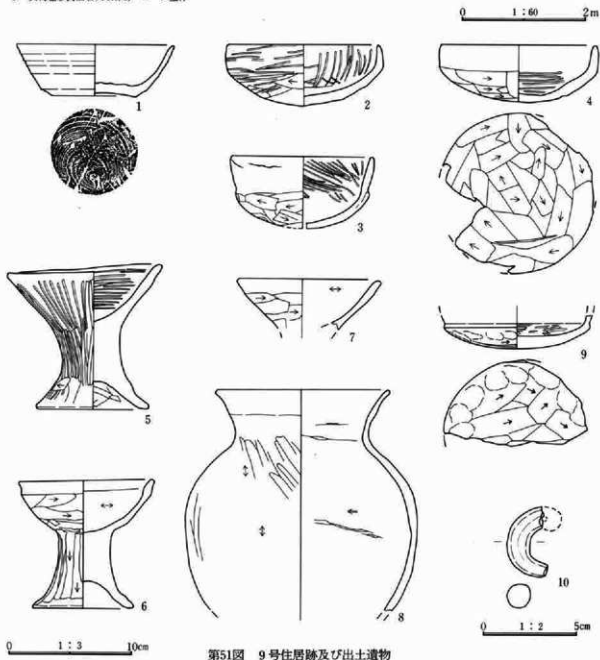
第50図 9号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



9号住居跡 土層説明

- | | | | |
|-------------------|---------------------|-------------------|----------------------|
| 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) | 土粒粗く、As-Bを含む | 10 黄褐色土(10YR6/8) | 小ローム塊主体で、標名山軽石と粘土を含む |
| 2 暗褐色土(10YR2/4) | 軟質で、標名山軽石を少量含む | 11 褐色土(7.5YR4/4) | 粘土主体、窠天井材 |
| 3 黒褐色土(10YR2/3) | 軟質で、1cm大の炭化物を含む | 12 褐色土(7.5YR4/6) | 軟質で、粘土と礫土の混土 |
| 4 褐色土(10YR4/4) | 土粒細かく、ローム粒を含む | 13 暗赤褐色土(5YR3/3) | 焼土塊主体 |
| 5 褐色土(10YR4/4) | 標名山軽石を含み、黄褐色の斑紋が目立つ | 14 暗褐色土(7.5YR3/3) | 灰を多く含み、焼土も少量混入する |
| 6 暗褐色粘質土(10YR3/4) | やや硬質で、標名山軽石を含む | 15 暗褐色土(10YR3/4) | 微細なローム粒を含む、珪質硬入土 |
| 7 黒褐色土(10YR2/2) | 標名山軽石を少量含む | 16 黒褐色土(7.5YR3/2) | 灰を主体とし、焼土を少量含む |
| 8 黄褐色粘質土(10YR5/8) | ローム粒を多く含む | | |
| 9 黄褐色砂質土(10YR6/8) | ローム主体 | | |



第51図 9号住居跡及び出土遺物

10号住居跡 (第52・53図)

位置 2区F・G-21・22

規模 4.3以上×3.0m。隅丸長方形で壁線は歪む。

壁高 34cm 主軸方位 N-95°-E

床面 中央は地山のローム床で硬質。北へ西壁際は貼床。

竈 東壁南寄りに位置、袖部はわずかに竪穴内に張り出す。全長125cm、幅70cm。燃焼部は焼土集中箇所の範囲から直径40cm前後の規模と思われる。焚口から火床面はほぼ同レベルで平坦。煙道は奥壁の約10cmの高さから20cmほど水平にのびて上方に立ち上がる。火床面には灰が堆積する。

柱穴 3基のピットが検出されたが、いずれも柱穴とは考えにくい。P1は竈右脇に位置することから貯蔵穴の可能性あり。P2は、その直上に明確な

床面は見られなかったが、上位の堆積土に遺構重複や乱れは認められない。従ってこれは本跡以前の遺構、床下土坑、住居廃絶時に掘られた坑のいずれかだろう。P3は竈前面に位置し、床下に埋められたピットである。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	55×50	18	30×20
P 2	180×110	44	120×60
P 3	60×50	—	—

P 1

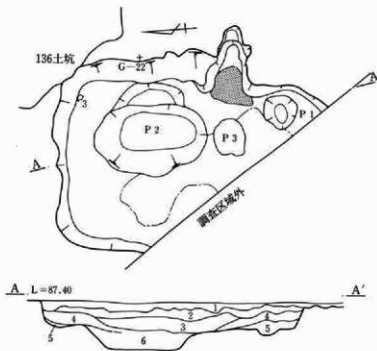
P 2

P 3

周溝なし。

遺構重複関係 9号掘立柱建物を切る。136号土坑とわずかに重複するが、新旧関係は不明。

遺物 大部分が埋土からの出土で、時期はほぼ平安時代に限定される。復元、図示できたのは坏類だけだが、他に釘とおもわれる鉄製品(5)が出土。



10号住居跡 土層説明

1 褐色砂質土(10YR4/4)

2 暗褐色土(10YR3/4)

3 暗褐色土(10YR3/4)

4 褐色土(10YR4/4)

5 褐色土(10YR4/4)

6 床下土坑(P2)埋土

土粒粗く、As-Bを含む

軟質で、As-Bを少量含む

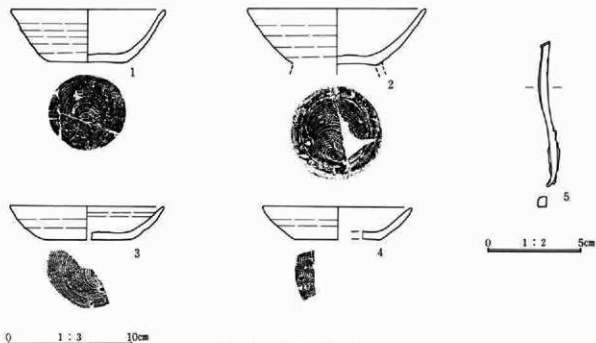
ローム粒、焼土粒を含む

土粒細かく、焼土、ローム粒を含む

ローム粒を含む

第52図 10号住居跡

0 1:60 2m



第53図 10号住居跡出土遺物

11号住居跡 (第54~57図)

位置 2区H・I-22

規模 4.9×3.8m。横長長方形。

壁高 32cm 主軸方位 N-105°-E

床面 竈周辺と中央は地山のローム床、他は貼床。
小さな凹凸が多いがほぼ水平。

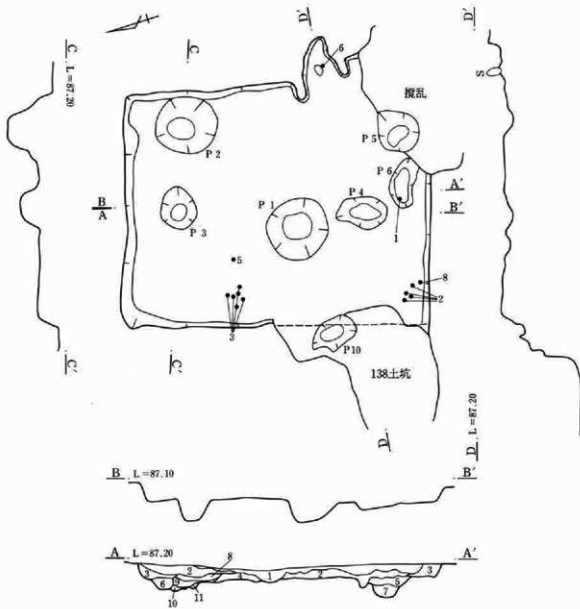
竈 東壁南寄りに位置、軸は20°前後南方に傾く。左袖部は30cmほど竈穴内に張り出し、燃焼部は東壁線上に位置する。全長70cm、幅は焚口部で最も広く60cm。燃焼部は平面が三角形状で、火床面は緩い傾斜で奥壁方向へ立ち上がる。燃焼部中央、焚口から約30cmの位置に礎を直立させて支脚とする。火床面からの支脚高は約20cm。煙道は検出できなかった。

柱穴 10基のピットが検出され、北側中央に位置するP3は主柱穴の可能性があり、これに相対する柱穴が特定できない。P5とP6は人為的埋土が認められ、住居使用時には埋められていた可能性あり。なおP7~P9は床下ピットで、西壁延長線上の外側に位置するP10は本跡と重複する遺構の可能性あり。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	105×85	35	45×40
P 2	95×85	50	45×35
P 3	65×55	33	28×22
P 4	80×59	12	50×25
P 5	75×65	28	40×20
P 6	80×35	14	55×23
P 7	95×85	36	80
P 8	75×55	8	62×32
P 9	75×55	15	58×40
P 10	75×45	35	—
周溝	なし。		

掘り方 北、西、南壁に沿ってドーナツ状に浅く掘り込む。また、竈前面も浅い皿状に掘る。掘り方にはローム塊主体で埋土を行い、部分的に焼土も見られる。

遺構重複関係 南西隅で重複する138号土坑に切られ

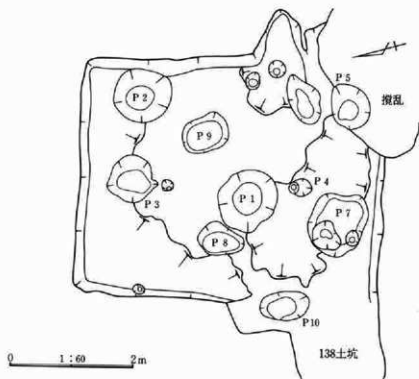


11号住居跡 土層説明

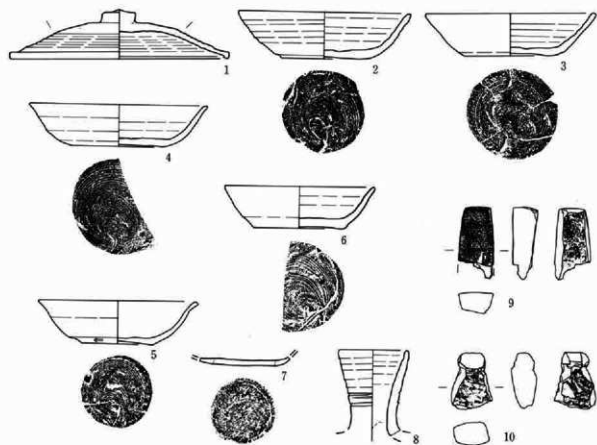
- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) | As-Bを含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 微細な礫名山軽石を少量含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/4) | 微細なローム粒を含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | 3層に近似し、5mm大のローム粒を含む |
| 5 黒褐色土(10YR2/3) | 微細な炭化物を含む |
| 6 暗褐色土(7.5YR3/4) | やや硬質で、焼土の小塊と微細な炭化物、粘土粒を含む |
| 7 褐色土(10YR4/6) | 全体に微細なローム粒を含む |
| 8 暗褐色土(7.5YR3/4) | やや硬質で、焼土を多く含む |
| 9 褐色土(7.5YR4/4) | 粘土が主体で焼土を含む |
| 10 暗褐色土(10YR3/4) | ローム塊と焼土を含む |
| 11 褐色土(10YR4/6) | ロームを主体とし、焼土を含む |

0 1:60 2m

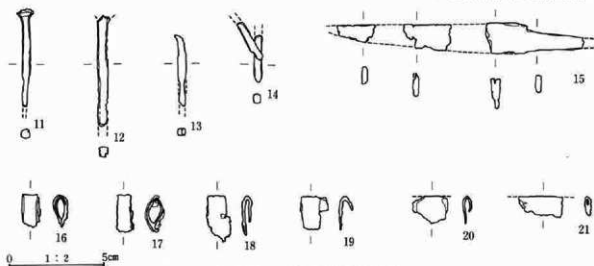
第54図 11号住居跡



第55図 11号住居跡掘り方



第56図 11号住居跡出土遺物(1)



第57図 11号住居跡出土遺物(2)

る。南東隅は攪乱坑。

遺物 床面上と埋土下層から出土しており、時期はほぼ平安時代の古段階に限定される。礎石、鉄滓とともに釘(11~14)、刀子(15~21)が出土しているのが特筆される。ただし、鉄滓は1点のみで羽口はなく、遺構面に炉などの施設が見られないことから、本跡を直接鍛冶跡と関連付けることはできない。

12号住居跡 (第58~65図)

位置 2区H・I-19 **規模** 5.90×5.97m

壁高 81cm **主軸方位** N-28°-W

床面 北西隅以外は貼床。南壁際で二層の硬化面があり、出入口を想定できる。東半が土間か。

竈 北西壁中央に位置、全長120cm。袖部は35cm竈穴内に張り出す。燃焼部は地山を奥行き30cm幅87cmの方形に掘り込み、粘土とロームの混土で構築(第59図)。袖先に礫を立て補強。燃焼部内部は奥行き37cm幅52cmと横に広く、中央に22cmの礫を直立させ支脚とし、支脚高は13cm。火床面は地山のまま水平、煙道は奥壁25cmの高さから掘り込まれ、約30°の傾斜で立ち上がる。焚口手前には深さ6cmの灰掻き穴が残る。なお、北東壁際に踏み回められた焼土が見られ、住居構築当初の竈の痕跡だろう。また壁には煙道掘り方が残る。

貯蔵穴 東隅(1号)と北隅(2号)に2基検出。前者

は当初の竈に伴い、住居構築時から存在したと考えられるが、両者とも最終段階では開口していた。なお、2号は当初大きな掘り方であったが(120×109cm)、北東壁側を埋め戻して規模を縮小している。

上端径 深さ 下端径 (cm)

1号 74×48 47 50×27 蓋受けなし

2号 88×63 58 58×48 高さ6cmの周堤

柱穴 床面上で8基のビットを検出、P1~P4は最終段階の主柱穴、P6は出入口関連の支柱穴だろう。P15は周溝末端にあり、間仕切に関連する支柱穴か。床下からは7基を検出。P14を除いていずれも主柱穴の配置関係を示す。これらの柱穴配置と竈の付け替えから本跡が3段階に改築されたことが推定される(第61図下)。これによれば、初期に竈が設置された北東壁と出入口のある南東壁はそのまま、北西と南西方向に拡張した経過がうかがえる。

上端径 深さ 下端径 上端径 深さ 下端径

P 1 35×28 55 15 P 2 37×27 52 15×20

P 3 30×27 57 15 P 4 38 57 20×23

P 5 37 45 18 P 6 25 20 15

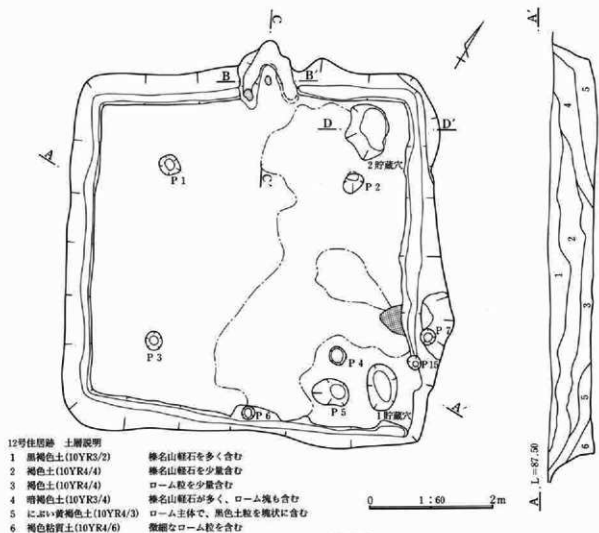
P 7 27×21 60 10 P 8 45×37 — 13

P 9 37 — 11 P10 (52) — 19

P11 (37) — (13) P12 — — 12×8

P13 95×36 — 12 P14 37×27 — 16×12

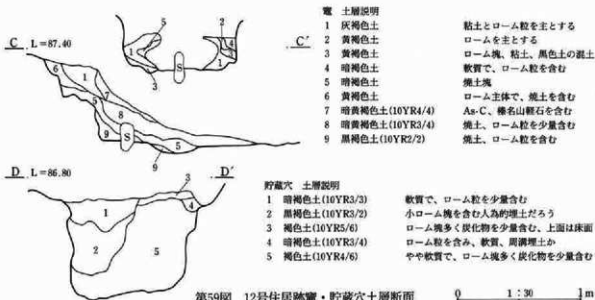
P15 25 8 8



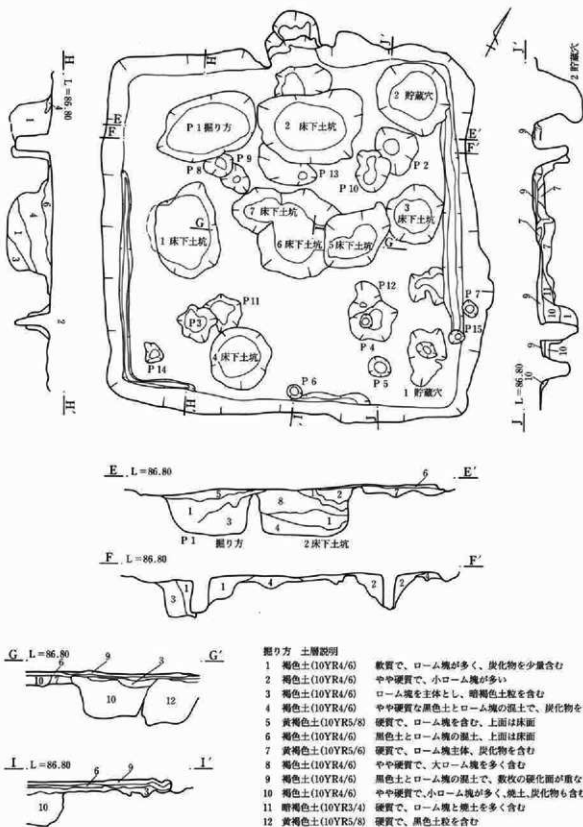
第58図 12号住居跡

B L=87.00

B'



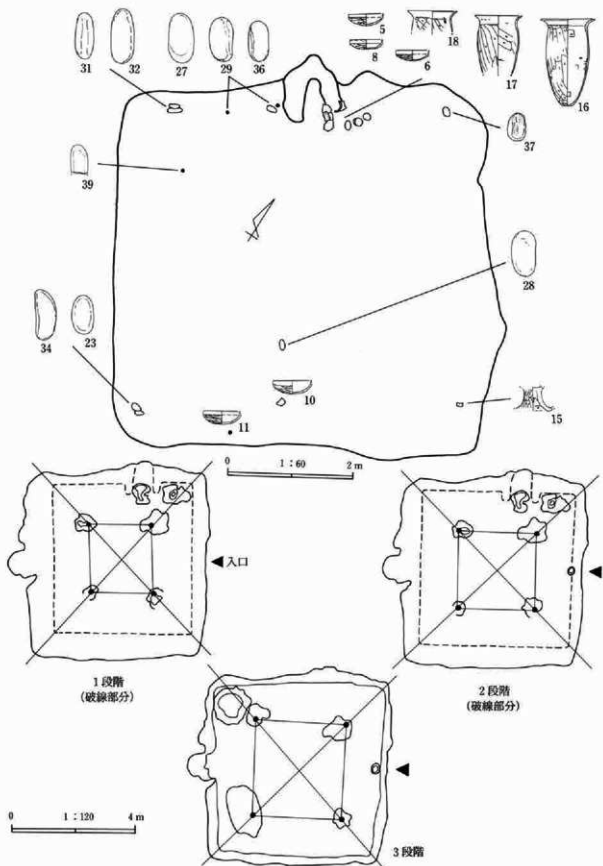
第59図 12号住居跡・貯蔵穴土層断面



第60図 12号住居跡掘り方

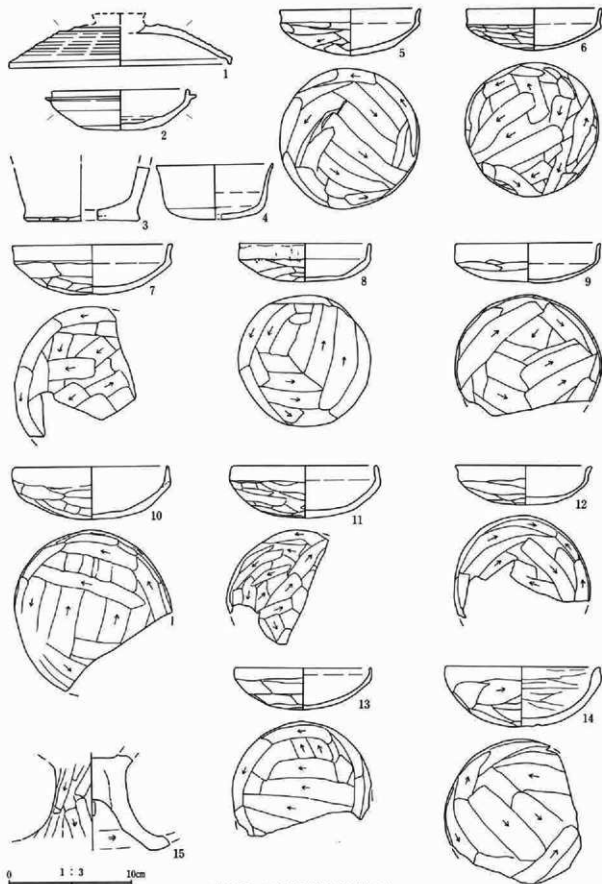
0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物



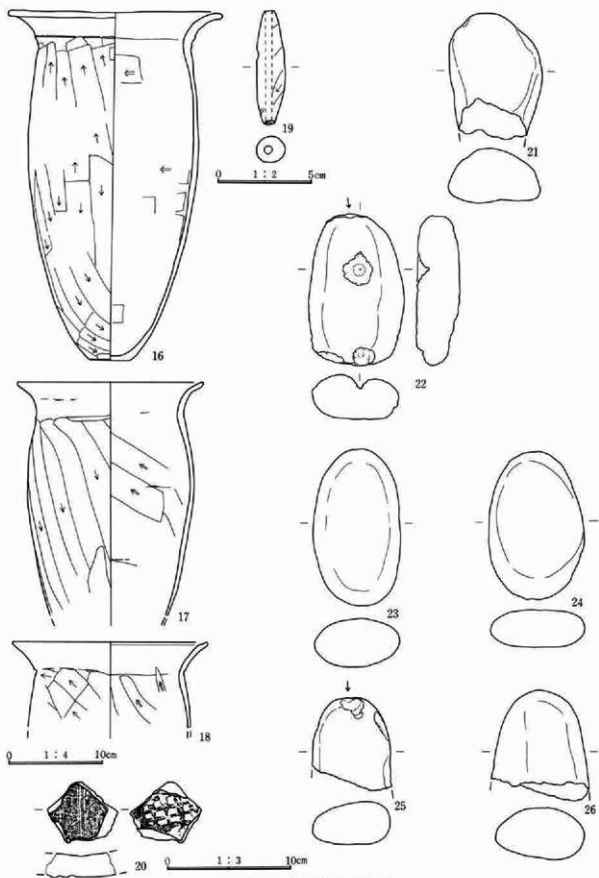
第61図 12号住居跡遺物出土位置及び柱穴配置

3 古墳時代以降の遺構と遺物

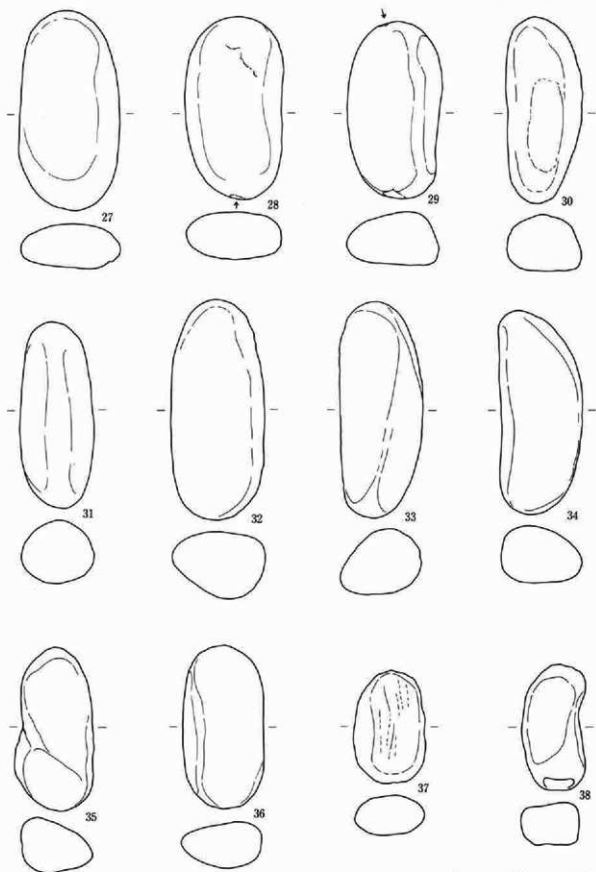


第62図 12号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第63図 12号住居跡出土遺物(2)



第64図 12号住居跡出土遺物(3)

0 1 : 3 10cm

第3章 検出された遺構と遺物



第65図 12号住居跡出土遺物(4)

周溝 最大幅30cm最深部6cmで北東壁の南隅約1mが切れる。最終段階での壁に沿っており、拡張以前のものは認められない。

掘り方 7基の床下土坑を検出。円形あるいは方形で、長さ1m前後深さ70cm前後をはかり、いずれもハードルーム層を抜く。ルーム塊で埋め戻しており、重複関係から少なくとも2段階の掘削が考えられる。それぞれ上屋改築に伴うものだろう。

遺物 北隅部を中心に床面上に散在、時期は7世紀が主。編み機の錘と思われる礫が見られる。

13号住居跡(第66～69図)

位置 2区I-16

規模 5.8×5.7m **壁高** 90cm

主軸方位 N-66°-E

床面 ほぼ全体にルーム塊の多い土による貼床。硬軟の顕著な境界は見られない。

竈 新旧2基を検出。1号が古く北壁に位置する。掘り方のみ遺存し、地山を50cmほど斜に掘り込んで、煙道部としたらしい。2号は東壁南寄りに位置し、全体に粘土で構築し、袖は竈穴内に20cmほど張り出す。火床はほぼ平坦で硬化する。

柱穴 床下を含めて10基が検出されたが、P1～P4が主柱穴、床下のP7とP8が出入り口施設に伴う支柱穴か。P6は性格不明だが、住居下層土が埋積することから、住居廃絶時に空いていたと思われる。

る。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	(40)	23	(25)
P 2	38	68	17
P 3	40×35	51	25×13
P 4	25	53	12
P 5	30	18	15
P 6	(70)	56	65
P 7	46×38	14	—
P 8	38	13	—
P 9	30×23	24	—
P10	90×65	39	—

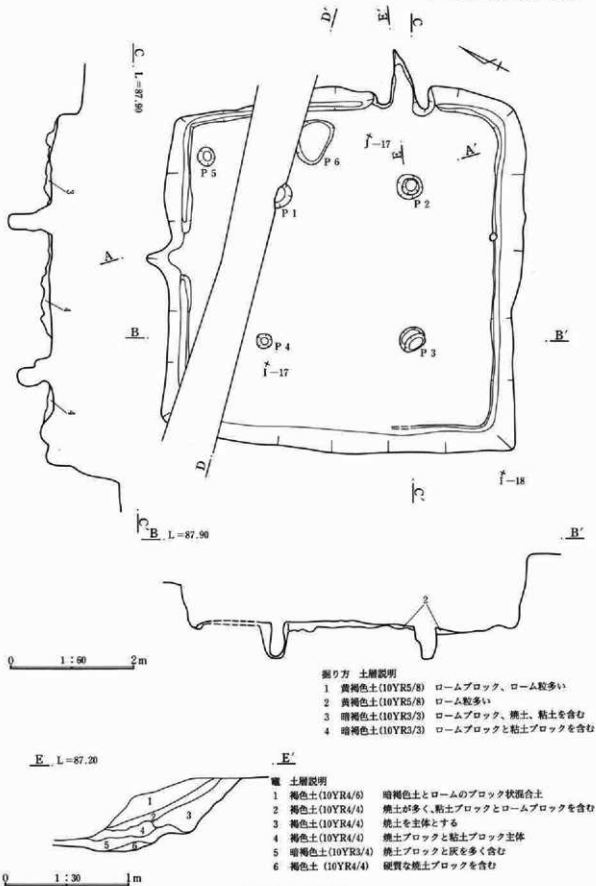
周溝 2基の竈部分を空けて廻るが、出入り口と思われる南西壁隙は不明瞭。最大幅18cm、深さ8cm

掘り方 壁隙部分をテラス状に残して中央をほぼ平坦に掘る。中央(1号)と北東部(2号)に2基の床下土坑を検出。2号は粘土と焼土で埋め北西半を床面としている。南東半は貯蔵穴に使用された可能性がある。また東隅にも長さ1m前後、床面からの深さ30cm前後の掘り込みがあり、貯蔵穴だった可能性がある。ただし床面との関係は不明である。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
1号	150×140	56	113
2号	247×83	43	170×80

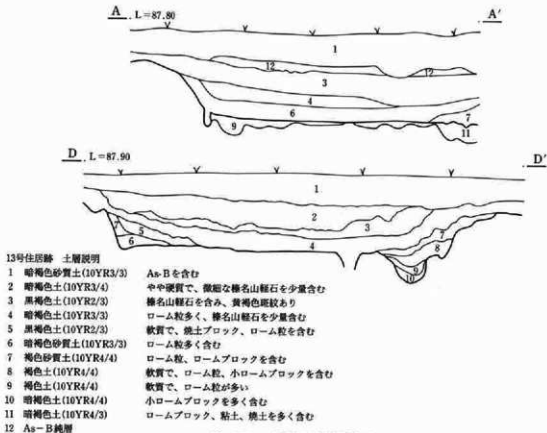
遺構重複関係 4号道路跡に切られる。

遺物 壁隙から坏が出土。7世紀後半代が主体。

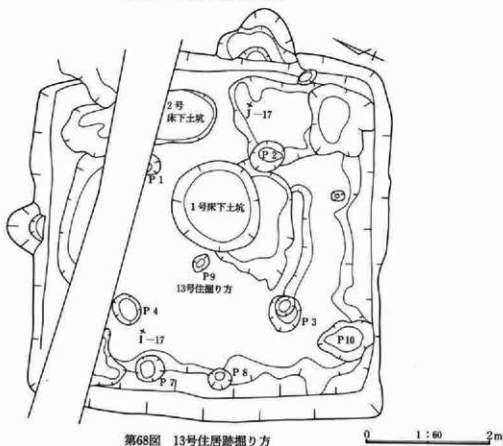


第66図 13号住居跡

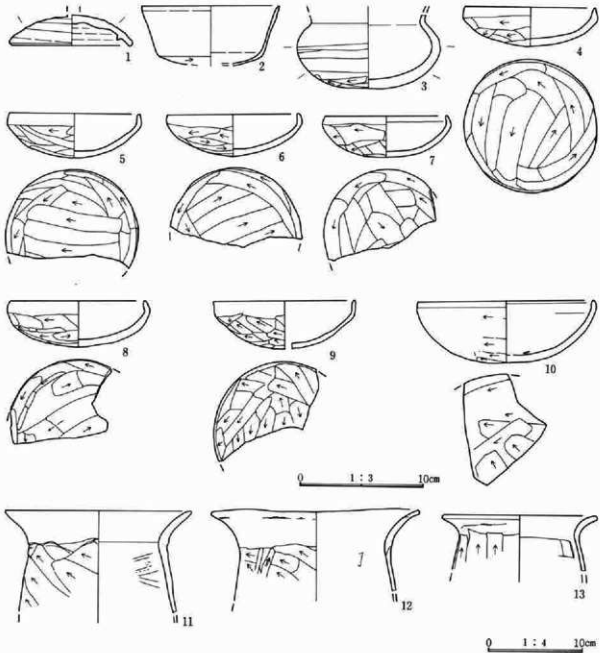
第3章 検出された遺構と遺物



第67図 13号住居跡土層断面



第68図 13号住居跡掘り方



第69図 13号住居跡出土遺物

14号住居跡 (第70図)

位置 2区I・J-22・23

規模 不明 壁高 60cm

主軸方位 N-40°-E

床面 ほぼ水平で凹凸は少ない。地山をそのまま床土としている。

炉 西側に偏って1基検出された。不整形円形の地

床炉で、規模は50×40cmを測る。

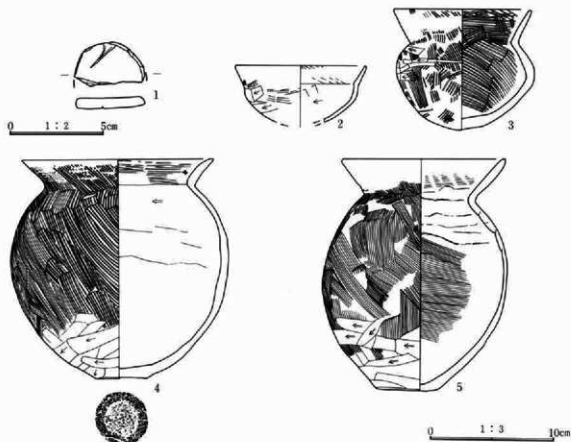
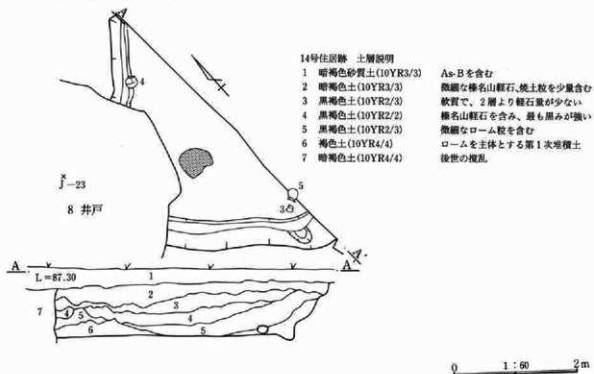
柱穴 不明。

周溝 検出された部分については全周する。最大幅15cm、深さ12cm。

遺構重複関係 8号井戸に切られる。

遺物 壁際から要3点が出土。古墳時代前期と思われる。

第3章 検出された遺構と遺物



第70図 14号住居跡及び出土遺物

15号住居跡 (第71~73図)

位置 2区I・J-21

規模 3.3×3.1m 壁高 55cm

主軸方位 N-56°-E

床面 四隅に貼床、中央は床下土坑を埋めて床とする。西隅がやや高く、東方へ緩く傾斜する。

竈 北東壁の南東寄りに位置、壁を掘り込んで構築し、竪穴内への袖の張り出しはない。燃焼部の奥行き60cm、幅65cmを測る。火床面はすり鉢状の掘り方を埋めて構築する。

貯蔵穴 東隅、竈の右脇で検出。隅丸長方形で、規模は50×30cm、深さ50cmを測る。

ピット 床面精査段階では検出出来なかったが、床下で13基の小規模なピットを検出。このうち、P1・P2・P5・P11は支柱穴、P7~9は周溝に伴う支柱穴の可能性ある。またP13は出入り口施設に伴う支柱穴か。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P1 18 26 5

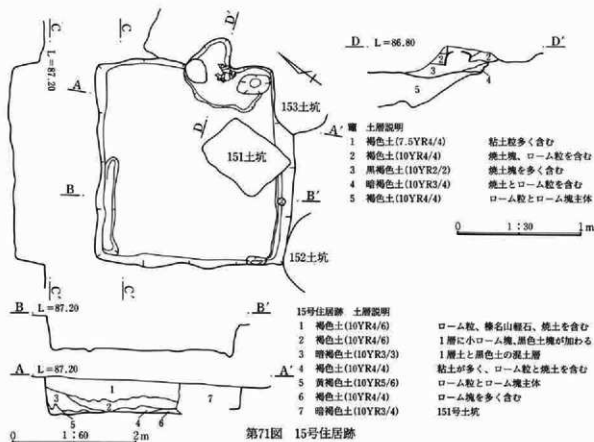
P2	20	21	8
P3	55×40	9	25×9
P4	19	5	—
P5	23	10	—
P6	10	5	—
P7	12	3	—
P8	15×8	1	—
P9	11	4	—
P10	13	7	—
P11	25	9	—
P12	23×16	13	—
P13	22×13	7	—

周溝 南東壁際と北西壁際南西半のみ認められる。最大幅は10cm、深さ12cm。

掘り方 四隅を深く掘り下げる。床下土坑は円形で、直径79cm、床面からの深さ70cm。

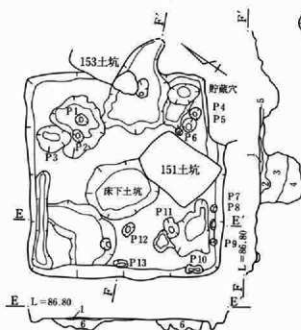
遺構重複関係 151~153号土坑に切られる。

遺物 竈内に甕(1)が横転する。他に編み機用の錵の可能性のある楕円標が14点出土。7世紀後半代。



第71図 15号住居跡

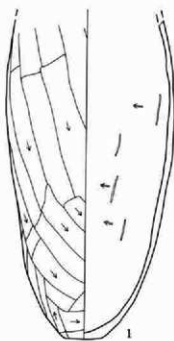
第3章 検出された遺構と遺物



掘り方 土層説明

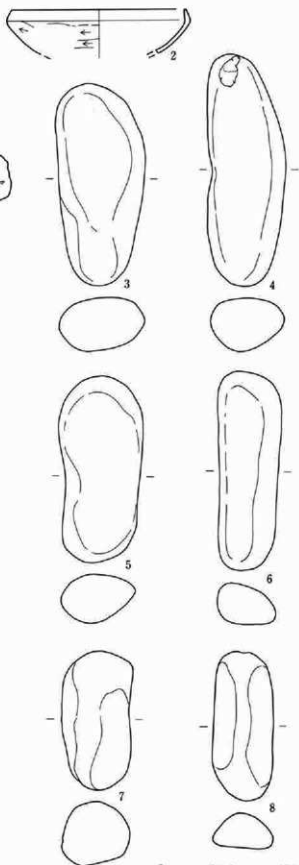
- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 黄褐色土(10YR5/8) | ローム塊を主とする粘床 |
| 2 褐色土(10YR4/6) | ローム塊、暗褐色土の混土 |
| 3 黄褐色土(10YR5/8) | 大きいローム塊を主とする |
| 4 黄褐色土(10YR5/8) | 均質で、大きいローム塊を主とする |
| 5 黄褐色土(10YR5/6) | 均質で、軟質、ローム粒が主体 |
| 6 黄褐色土(10YR5/8) | 暗褐色土主体でローム塊を少量含む |

0 1:60 2m

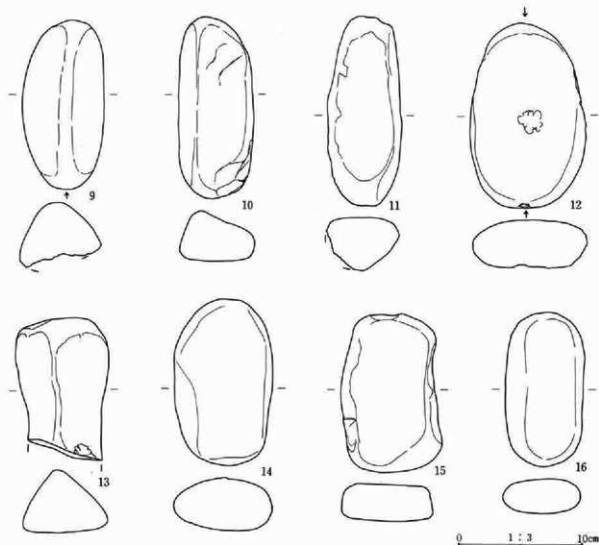


0 1:4 10cm

第72図 15号住居跡掘り方及び出土遺物(1)



0 1:3 10cm



第73図 15号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡 (第74~80図)

位置 2区H-7・8

規模 4.40×4.25m 壁高 80cm

主軸方位 N-50°-E

床面 全体にローム塊を含む土で20cm前後の埋め、貼り床を施す。

竈 北東壁に位置し、地山を箱状に掘り込み、粘土とロームの混合土で構築する。焚口は床面より3cmほど低く平坦。燃焼部は内壁の最大幅24cm、奥行きは24cm。煙道は30°の角度で外傾する。

柱穴 7基が検出され、P1、P2、P5、P6は主柱穴と考えられ、P1とP2には2~3回の掘り直しが認められる。P3は貯蔵穴の可能性があり

が、小規模なことから疑問が残る。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	(40)	20	16
P 2	50×45	53	13
P 3	45×37	22	20×5
P 4	48	78	10
P 5	75×53	58	20
P 6	65×45	13	50×30
P 7	42	19	18

周溝 なし。

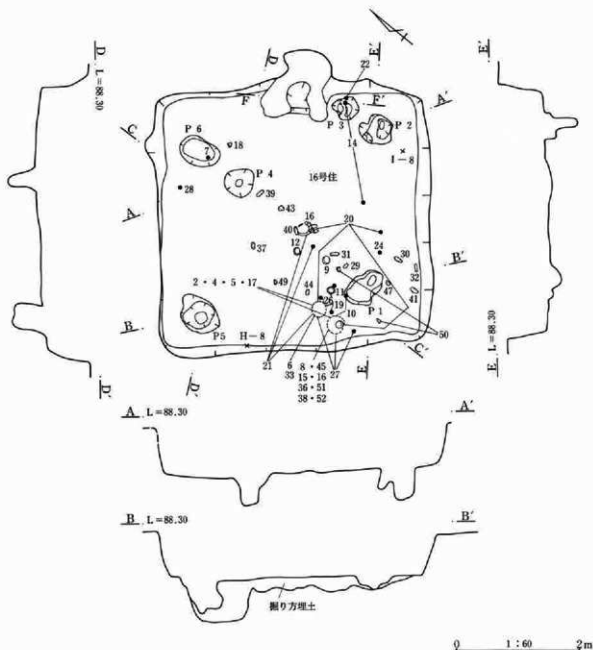
掘り方 全体に掘り込み、床下土坑5基が検出された。いずれも円形か不整形円形を呈する。

第3章 検出された遺構と遺物

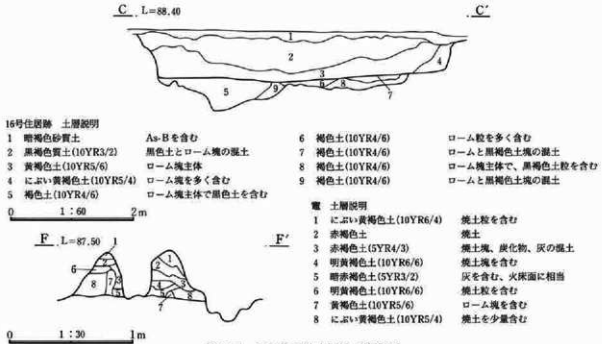
	上端径	深さ(cm)	備考
1号	85×75	35	
2号	104	62	
3号	55	51	柱穴の可能性あり
4号	161	17	
5号	136	48	P5の掘り方か

遺構重複関係 なし。

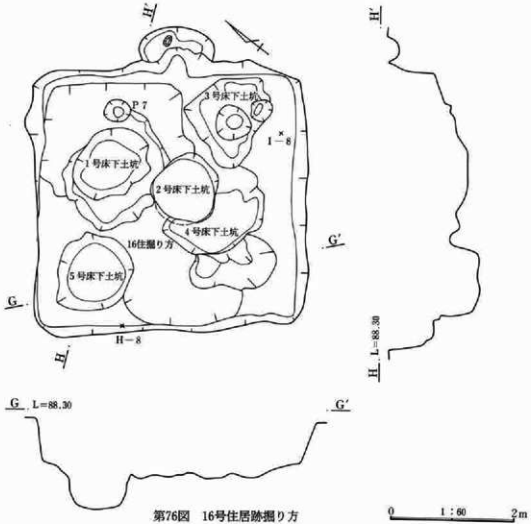
遺物 甕右脇から完形杯、南西部から中央にかけて廃棄されたと思われる状態で土器片、楕円礫が出土する。時期は7世紀中葉が主体。



第74図 16号住居跡

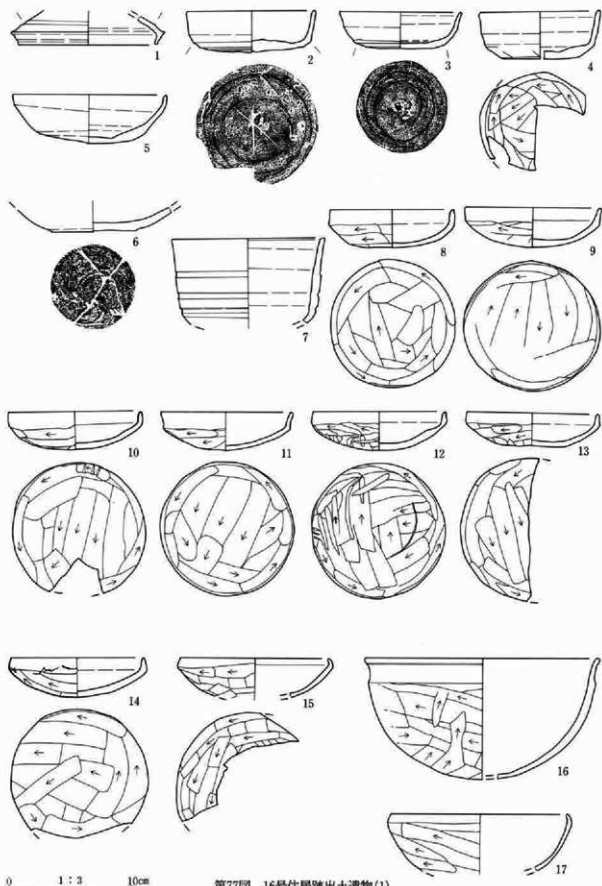


第75図 16号住居跡土層及び電断面

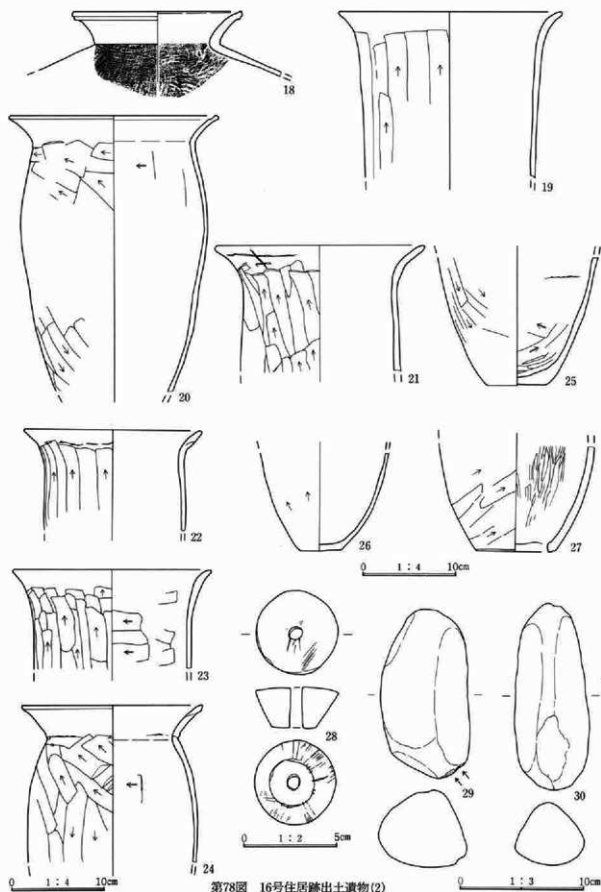


第76図 16号住居跡掘り方

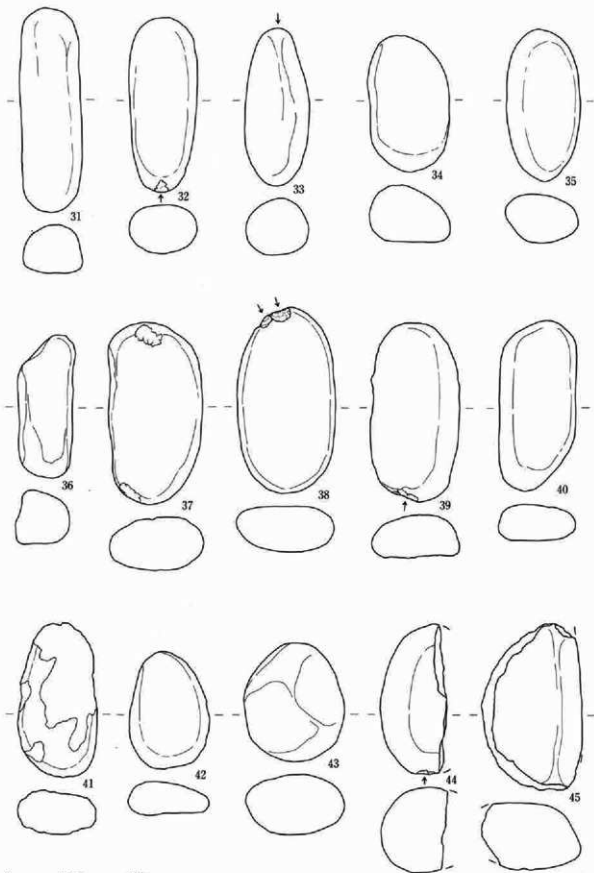
第3章 検出された遺構と遺物



第77図 16号住居跡出土遺物(1)

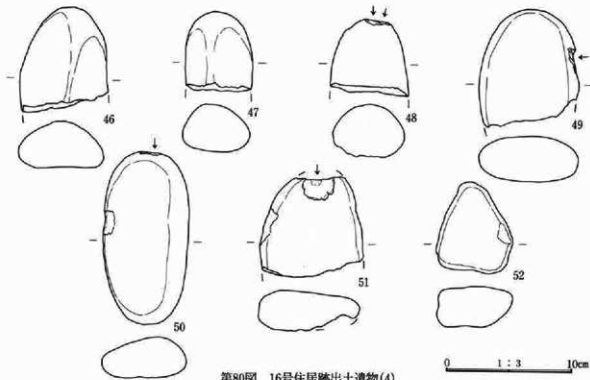


第78図 16号住居跡出土遺物(2)



0 1 : 3 10cm

第79図 16号住居跡出土遺物(3)



第80図 16号住居跡出土遺物(4)

17号住居跡 (第81~86図)

位置 2区N・O-6 規模 5.60×5.50m

壁高 54cm 主軸方位 N-65°-E

床面 全体に貼り床。竈前面から出入口口が想定される南壁にかけて硬化面が見られる。

竈 東壁の南隅に位置し、地山をわずかに掘り込み、粘土とロームの混合土で構築。焚口は床面とほぼ同レベル。燃焼部は内壁の最大幅85cm、奥行きは60cm。奥壁に近付くにつれ角度を増して立ち上がる。

柱穴 ビット6基が検出され、P1、P2、P3、P4は主柱穴。ほかに南壁の東寄りで、長径13cmの小ビット2基が75cmの間隔を空けて検出された。出入口施設に伴う支柱穴の可能性が高い。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P1	45×40	54	14
P2	45×40	25	20
P3	45	26	20×12
P4	50×42	28	25×15
P5	60	39	25
P6	30	3	—

P1-P3 230 P4-P5 200 P1-P4 210 P3-P5 235

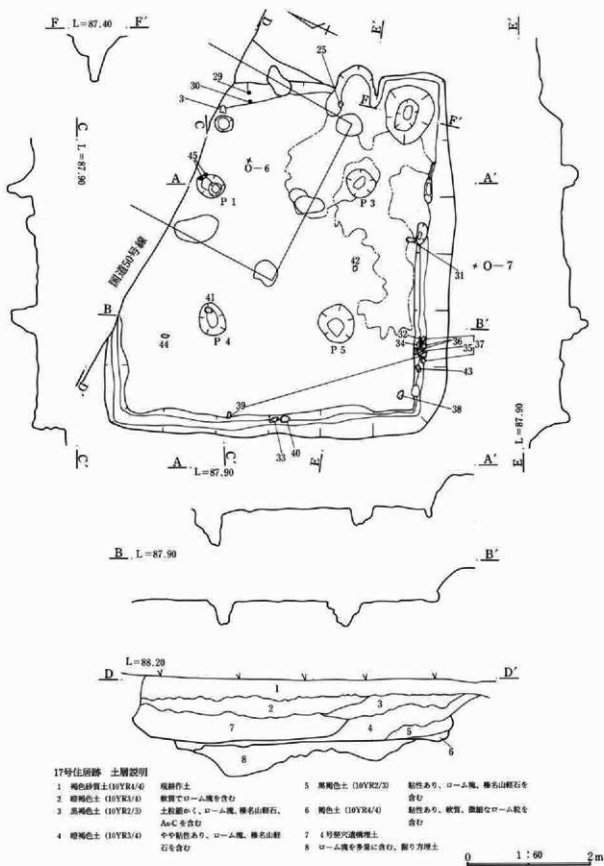
貯蔵穴 南東隅に位置し、不整形円形。規模90×80cm、深さ68cm。底面は小さく、断面は細長い台形状。周溝 竈から出入口の間を除いて廻る。最大幅25cm深さ10cm。

掘り方 東西壁際をやや深く掘る。床下土坑5基(1~5号)がビット4基(P7~P10)が検出された。

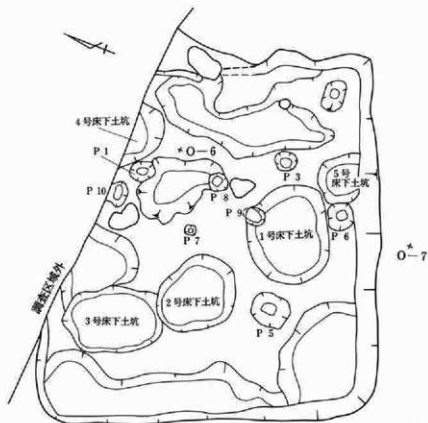
	上端径	深さ	底径(cm)	備考
1号	160×130	37	125×90	底平坦
2号	140×115	34	110×90	底平坦
3号	153×105	63	135×85	底平坦
4号	—	33	—	
5号	63×75	10	48	底すり鉢状
P7	18	24	8	
P8	33	44	16	
P9	32	72	30	
P10	40	12	25×8	

遺構重複関係 4号竈穴を切る。

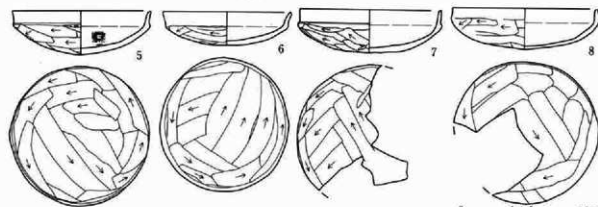
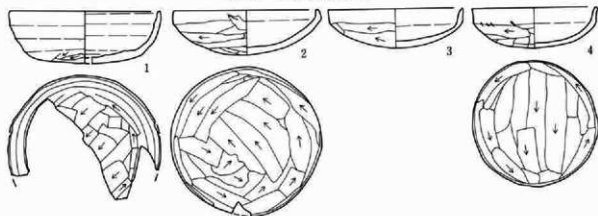
遺物 埋土からの出土が主で、南壁際西寄りに編み機用錘と思われる楕円礫9点がまとめて出土した。時期は7世紀後半代が主。



第81図 17号住居跡

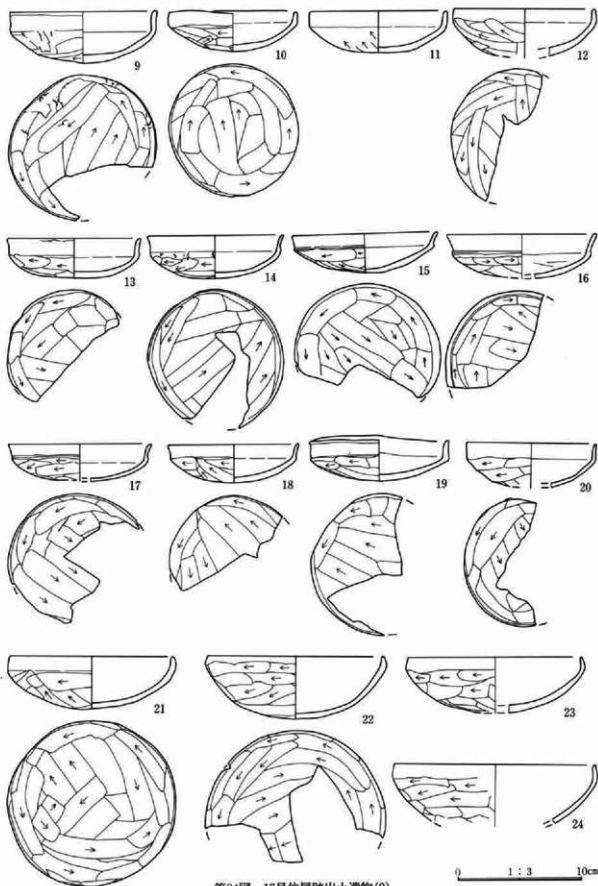


第82図 17号住居跡掘り方



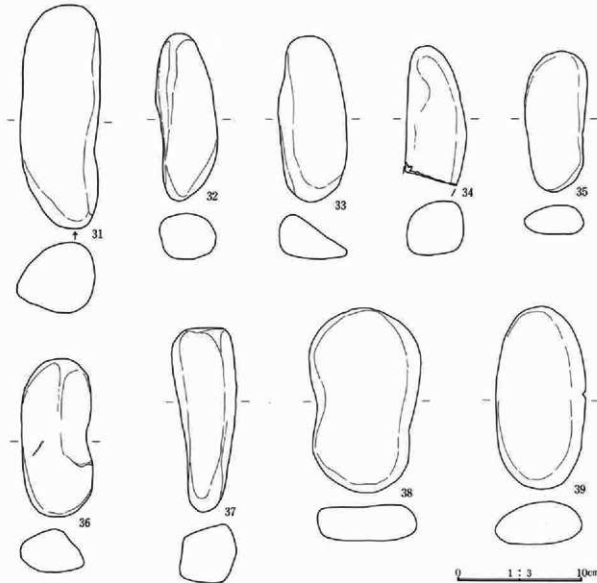
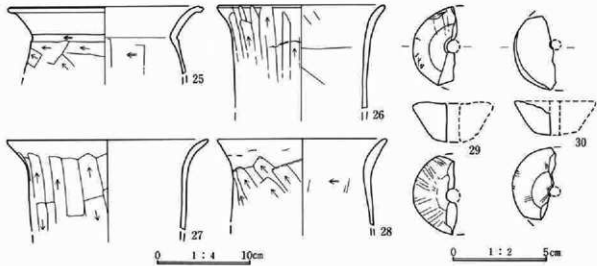
第83図 17号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物

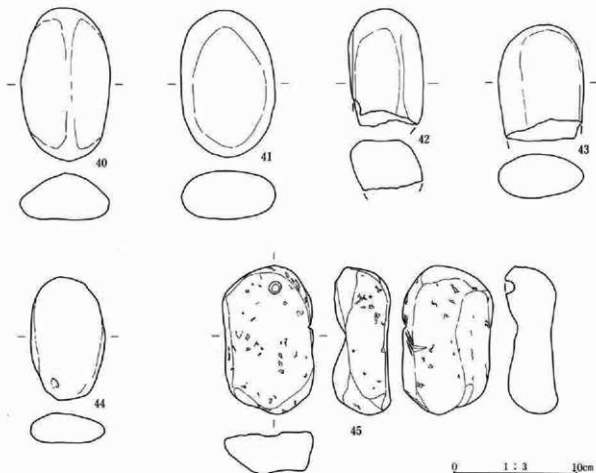


第84図 17号住居跡出土遺物(2)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第85図 17号住居跡出土遺物(3)



第86図 17号住居跡出土遺物(4)

18号住居跡 (第87図)

位置 2区E-5・6

規模 3.05×(3.6)m 壁高 29cm

主軸方位 N-89°-E

床面 全体に貼り床。凹凸が多く、硬軟の境界は不明瞭。

竈 東壁の南寄りに位置し、右袖がわずかに竪穴内に張り出す。焚口に直径40cmほどの範囲で焼土と炭化物が分布する。燃焼部は内壁の最大幅75cm、奥行きは55cm。火床面は5cmほどの深さで皿状にくぼむ。

柱穴 やや南側に偏って4基が検出された。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P 1	33	13	20
P 2	40×35	19	32×23
P 3	25	9	18
P 4	32	13	18

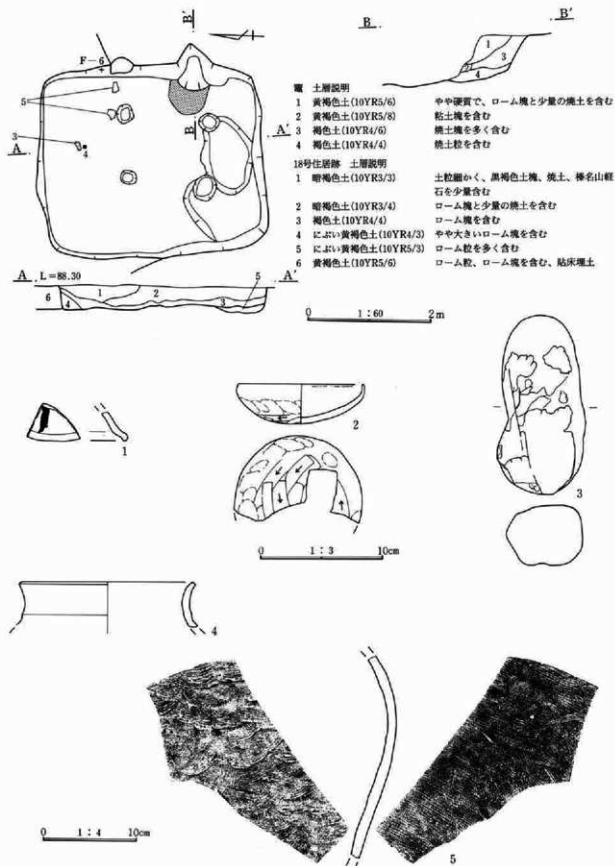
P1-P2 100 P2-P3 125 P1-P4 135 P3-P4 100
貯蔵穴・周溝 なし。

掘り方 南西半に深さ10～5cmの浅い掘り込み。この部分には粘土を含む土を埋めている。

遺構重複関係 19号住居跡を切る。

遺物 埋土からの出土が主で、時期は8世紀前半代が主。

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第87図 18号住居跡及び出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

19号住居跡 (第88～91図)

位置 2区D・E・F-5・6

規模 5.6×5.5m 壁高 52cm

主軸方位 N-63°-E

床面 全体に地山をそのまま床面とする。柱穴に囲まれた部分と竈前面にかけてが硬化しており、レベルが周囲より5cmほど低い。この部分が土間と使用されたのは明らかである。また貯蔵穴の南西側に硬化床面が延びることから、この部分に出入り口が存在した可能性が高い。

竈 北東壁の南寄りに位置し、竈穴内に50cmほど袖部が張り出す。全長125cm。焚口は床面よりややくぼみ、そのまま皿状の火床面に続く。燃焼部は方形で、内壁の最大幅40cm奥行きは60cm、高さは20～30cmと推定される。火床面は5cmほどの深さで皿状にくぼむ。中央に左寄りに高坏脚部を立てて高さ10cm前後の支脚とする。

貯蔵穴 東隅に位置し、楕円形で70×62cm深さ92cmを測る。

柱穴 壁からそれぞれ1m離れて中央に4基が検出された。また北西壁際中央に小ピット1基が検出されたが性格は不明。

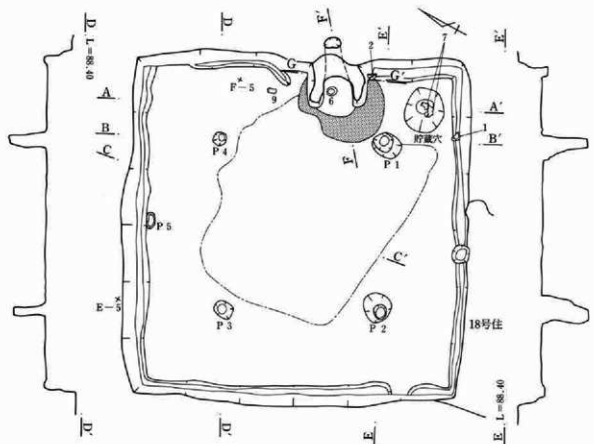
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	45×40	73	15
P 2	46	76	15
P 3	33×25	61	14
P 4	23	53	10
P 5	25×15	5	—

P1-P2 275 P2-P3 250 P1-P4 260 P3-P4 270

周溝 竈左脇、北東壁北隅、南西隅の一部で30cmほど断絶する以外、全体に廻る。

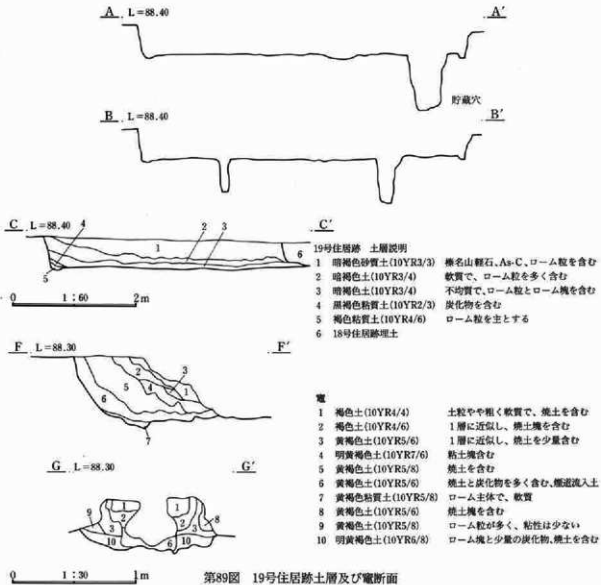
遺構重複関係 18号住居跡に切られる。

遺物 埋土からの出土が主で、時期は6世紀前半代が主。

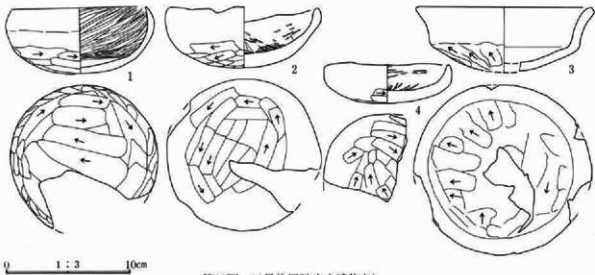


第88図 19号住居跡

0 1:60 2m

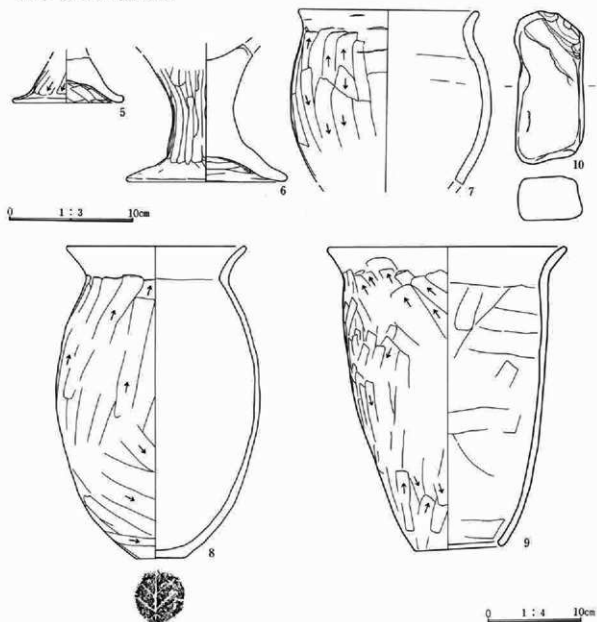


第89図 19号住居跡土層及び電断面



第90図 19号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第91図 19号住居跡出土遺物(2)

20号住居跡 (第92図)

位置 1区Y-4・5、2区A-4・5

規模 4.15×(4.40以上)m 壁高 33cm

主軸方位 N-52°-E

床面 全体に平均的な厚さで貼り床を施す。柱穴P1脇の硬化した高まりは出入口を示すものか。

竈 検出されなかった。

貯蔵穴 東隅に位置し、隅丸方形で70×65cm深さ91cm、底径38cmを測る。

柱穴 南隅に偏り、南東壁から80cm離れて1基が

検出された。対応する柱穴は不明。

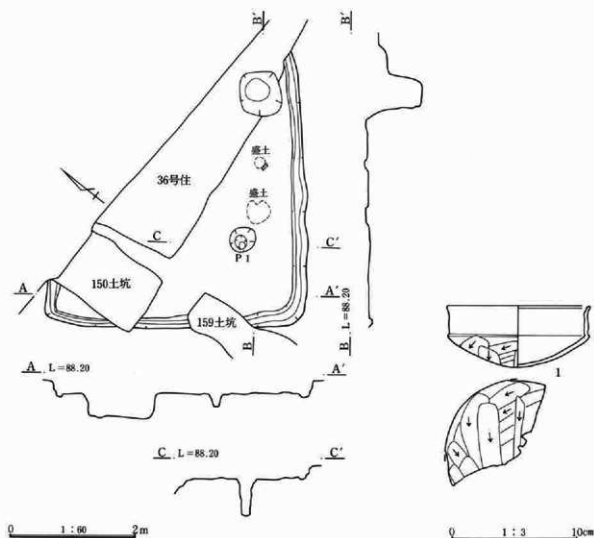
上端径 深さ 下端径 (cm)

P1	45	60	13
----	----	----	----

周溝 検出された部分では全周し、最大幅25cm深さ7cmを測る。

遺構重複関係 36号住居跡、150号土坑、159号土坑に切られる。

遺物 埋土からの出土が主で、時期は6世紀前半代か。



第92図 20号住居跡及び出土遺物

21号住居跡 (第93・94図)

位置 1区U・V-4

規模 4.3×4.5m 壁高 43cm

主軸方位 N-55'-E

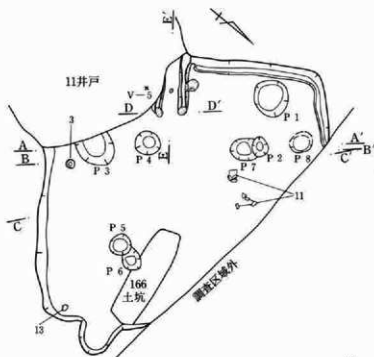
床面 全体に平均15cmほどの埋土による貼り床。全体に平坦で、硬軟の違いは不明瞭。

竈 南西壁に位置し、袖部は直線的で竈穴内に85cm張り出す。焚口両側には長さ30cmの礎を直立させて補強している。燃焼部は細長く、内壁の幅25cm奥行き90cm前後を測る。火床面中央、焚口から40cm奥で、長さ15cmの礎を直立させて支脚とする。天井部と煙道は不明。

柱穴 ビット8基が検出され、P1は貯蔵穴の可能性あり。P2、P4、P5、P6、P7は主柱穴と思われる。P2はP7を、P5はP6を切っており、それぞれ上屋建替え等に伴う柱穴の掘り直しと考えられる。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	55	16	40
P 2	30×25	7	—
P 3	55×—	8	35
P 4	40	53	18
P 5	35	7	—
P 6	30	66	15
P 7	38	50	25
P 8	36	12	26

第3章 検出された遺構と遺物



B L=88.30

C L=88.40

A L=88.30

21号住居跡 土層説明

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 黒褐色土(10YR2/2) | 1~5mm大の礫名山軽石をまばらに含む |
| 2 褐色土(10YR4/6) | ローム粒とローム塊多く、焼土を少量含む |
| 3 褐色土(10YR4/6) | ローム粒を主とする |
| 4 暗褐色土(10YR4/4) | 焼土塊、ローム塊を含む |
| 5 暗褐色土(10YR4/4) | ローム塊主体 |

6 暗褐色土(10YR4/4)

7 暗褐色土(10YR3/4)

8 黄褐色土(10YR5/8)

9 褐色土(10YR4/4)

10 黄褐色土(10YR5/6)

5層に近似するが、ローム粒が多い、周溝埋土

ローム塊と少量の焼土を含む

やや硬質で、ローム塊を含む、柱穴埋土

軟質で、ローム塊含む、掘り方埋土

大きめのローム塊を含む、掘り方埋土

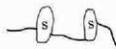


E L=88.20

E

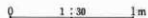
D L=88.10

D'



電 土層説明

- | | |
|------------------|------------|
| 1 明黄褐色土(10YR6/6) | 11号井戸埋土 |
| 2 黄褐色土(10YR5/6) | 焼土を少量含む |
| 3 褐色土(10YR4/6) | 焼土を少量含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土とローム塊を含む |



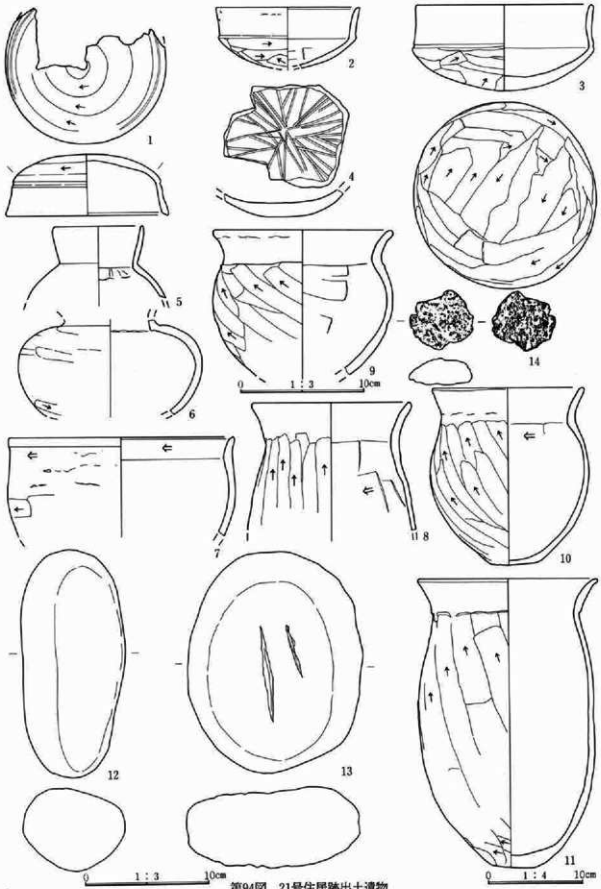
第93図 21号住居跡

周溝 北西と南西壁際のみ掘り、最大幅18cm、深さ5cmを測る。

掘り方 壁際をやや深く掘る。

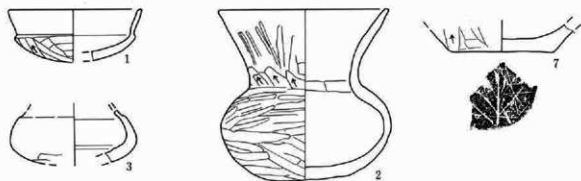
遺構重複関係 11号井戸、166号土坑に切られる。

遺物 床面から6世紀前半を主とする土器片等が出土する。廃棄されたものだろう。

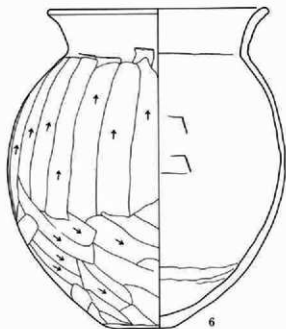
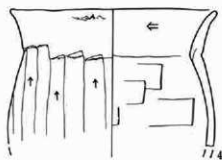
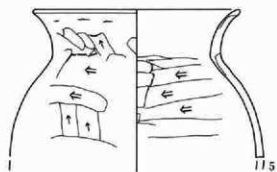


第94図 21号住居跡出土遺物

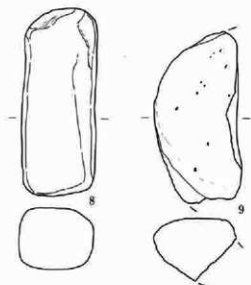
3 古墳時代以降の遺構と遺物



0 1:3 10cm



0 1:4 10cm



0 1:3 10cm

第96図 22号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

23号住居跡 (第97～99図)

位置 1区V-7・8 規模 3.8×-m

壁高 33cm 主軸方位 N-73°-E

床面 大部分は地山のロームを床土としており、小さな凹凸を埋めて平坦にしている。硬化面は竈前面～中央～南壁寄りに広がる。

竈 東壁中央に位置し、全長120cm。袖部はやや開きぎみで竈穴内に70cm張り出す。左袖先端はビットP6に切られる。焚口は内側の幅35cmを測り、20cm奥の燃焼部前方に礎を直立させ支脚とする。燃焼部は細長く最大幅35cm奥行100cm前後を測る。火床面はほぼ水平で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道は奥壁の20cmほどの高さから地山を掘り抜いて構築。

貯蔵穴 南東隅に位置し、不整形形を呈する。径70cm深さ91cm底径32cmを測る。堆積した埋土は外からの流入土である。

柱穴 ビット6基が検出され、床下土坑と思われる

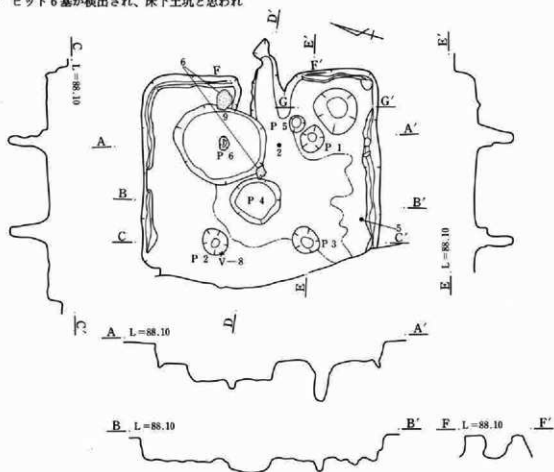
るP4を除いていずれも主柱穴と考えられる。ただしP6は規模が大きく、上面に床面も認められないことから住居廃棄時に掘削された可能性が高い。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	45	59	12
P 2	45	63	15
P 3	44	61	20
P 4	80×75	19	60
P 5	18	20	15
P 6	150	40	20×15
P 1-P 6	140		P 1-P 3 170
P 2-P 3	145		P 2-P 6 160

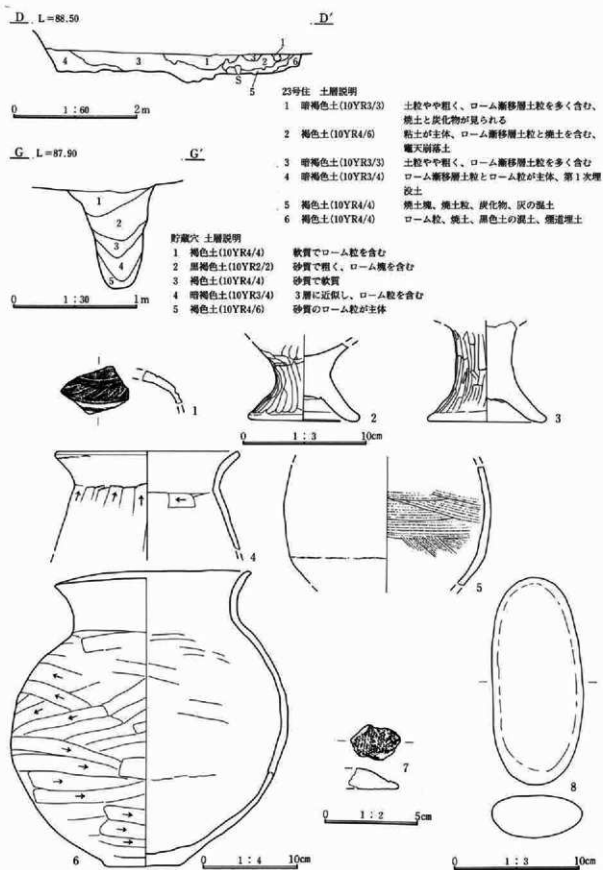
周溝 北壁中央を約30cm空けて全周する。最大幅25cm、深さ7cmを測る。

遺構重複関係 22号住居跡に切られる。

遺物 中央床面から6世紀前半の土器等が出土。

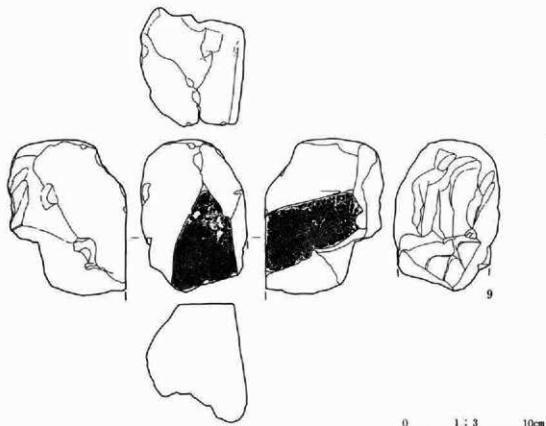


第97図 23号住居跡



第98図 23号住居跡土層断面及び出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第99図 23号住居跡出土遺物(2)

24号住居跡 (第100～103図)

位置 1区W・X-7・8

規模 5.7×5.6m 壁高 48cm

主軸方位 N-67°-E

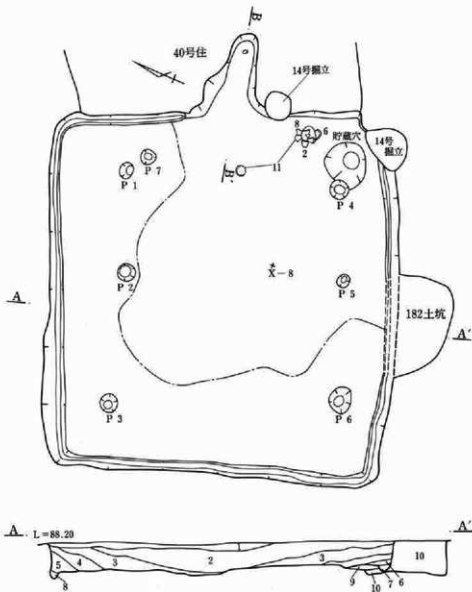
床面 全体に5cm前後の厚さで貼り床を施し、電前面～中央部～南東隅にかけて硬化面が見られる。

竈 東壁中央に位置し、壁を掘り込んで構築する。全長150cm。焚口は内側の幅90cmを測り、燃焼部奥部ほどすばまる。火床面は深さ15cmほどの皿状の掘り方に灰を充填して形成される。煙道はロームを掘り抜き、傾斜角35°で立ち上がる。

貯蔵穴 南東隅に位置し、不整形を呈する。径70×65cm深さ35cmを測る。柱穴P4と重複する。

柱穴 ビット7基が検出され、P7を除いていずれも柱穴と考えられる。このうちP2とP5は他より浅く、いずれも柱筋より南側にずれていることから、梁に結びつけられた樫持柱の痕跡の可能性がある。これより本住居は南北棟と考えたい。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	25	64	13
P 2	28	36	18
P 3	29	64	14
P 4	30	64	15
P 5	20	14	8
P 6	43×36	76	19
P 7	25	12	14
P 1-P 2	160	P 2-P 3	210
P 4-P 5	145	P 5-P 6	190
P 3-P 6	370		
周溝	電右脇を除き全周。最大幅20cm、深さ5cm。		
掘り方	北壁際を深く掘り、中央に長方形の床下土坑が見られる。規模は200×150cm深さ92cm。		
遺構重複関係	40号住、182号土坑を切り、14号獨立柱建物跡に切られる。		
遺物	中央床面から6世紀後半～7世紀前半の土器等が出土。		



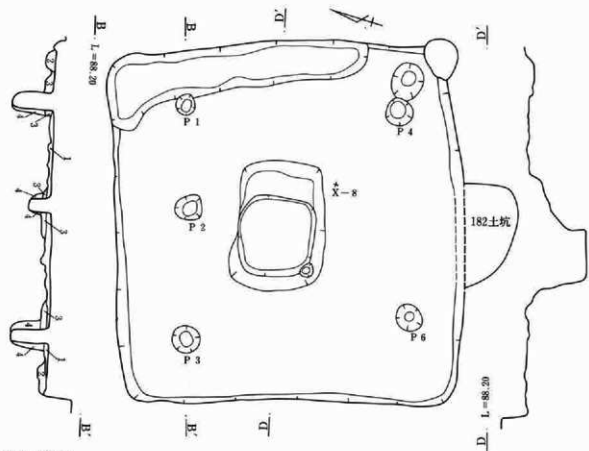
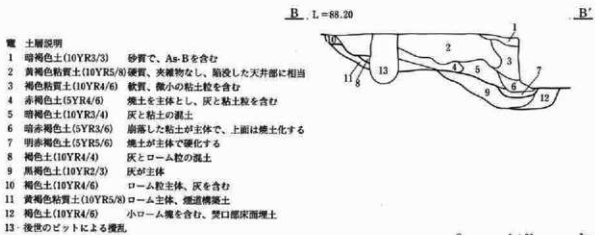
24号住居跡 土層説明

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 暗褐色土(10YR4/6) | 硬質、微小な棒名山輝石、ローム粒を含む |
| 2 暗褐色土(10YR4/6) | やや軟質で、ローム粒と小ローム塊を含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/4) | 硬質、シルト質、小ローム塊を少量含む |
| 4 褐色土(10YR4/5) | やや軟質、微小なローム粒を全体に含む |
| 5 褐色土(10YR4/4) | やや軟質、微小なローム粒を含む |
| 6 黒色土(10YR2/1) | 土粒細かく粘性なし、微小の炭化物を含む |
| 7 褐色土(10YR4/6) | 軟質で、微小ローム粒を含む、周溝埋土 |
| 8 黄褐色土(10YR5/6) | ロームと褐色土の混合土、周溝埋土 |
| 9 褐色土(10YR4/6) | 小ローム塊が主体、粘埋土 |
| 10 182号土坑埋土 | |

0 1:60 2m

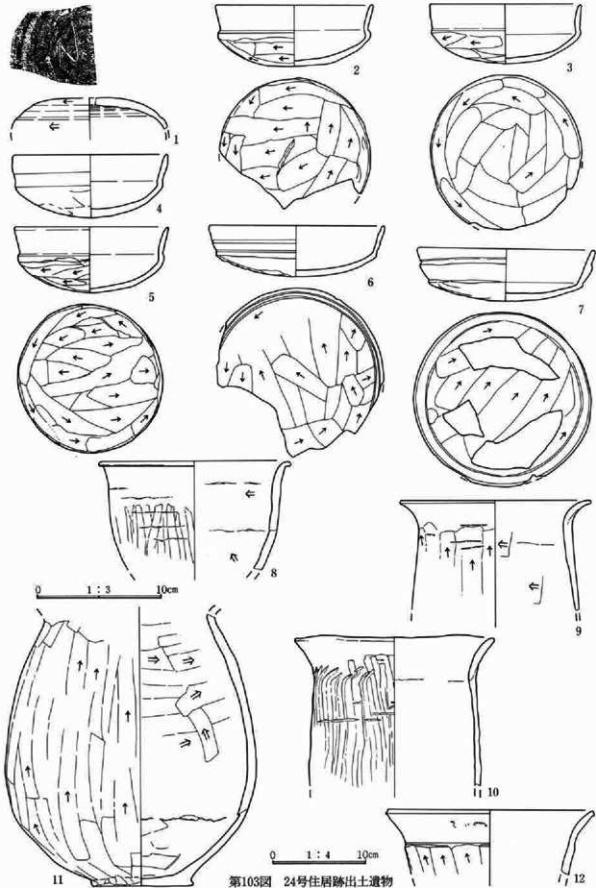
第100図 24号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



掘り方 土層説明

- 1 黄褐色土(10YR5/8) ローム塊主体で褐色土粒を混入する、粘床
- 2 褐色土(10YR4/4) 2~5cm次のローム塊を多く含む
- 3 褐色土(10YR4/6) 2層に近似するが、ローム塊小さく全体に明るい
- 4 褐色土(10YR4/4) 軟質で小ローム塊を含む、柱穴掘り方埋土



第103図 24号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

25号住居跡 (第104～109図)

位置 1区W・X-9・10

規模 4.7×4.9m 壁高 48cm

主軸方位 N-60°-E

床面 主柱穴で囲まれた中央部分は地山ロームをそのまま床とする。壁際は約1m幅で貼り床を施す。中央部～南東壁際にかけて硬化面が見られる。

竈 北東壁中央に位置し、本体は157号土坑に切られ、焚口のみ遺存する。焚口は壁から80cm壁内位置で30～40cm大の礫を架構して構築される。焚口の内側幅は34cm、高さ19cmを測る。

貯蔵穴 南東隅に位置し、不長方形を呈する。規模は75×48cm深さ60cm底面45×30cmを測る。南西側に長さ50cm高さ13cmの隆起部分が見られる。

柱穴 ピット6基が検出され、P5、P6を除いて柱穴と考えられる。P1は底部に礫をおいて柱根のおさえとしている。柱穴配置は平行四辺形を構成しており、竪穴形状と相似形をなす。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P1 70×60 68 15×10

P2 60×53 47 20×15

P3 60×52 58 23×16

P4 42×35 68 15

P5 45×38 15 36×28

P6 21×11 17 7

P1-P2 210 P1-P3 255

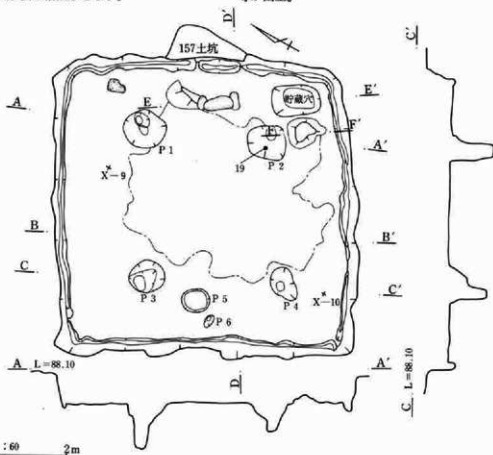
P2-P4 245 P3-P4 225

周溝 竈下部を含めて全周。最大幅10cm、深さ9cm。

掘り方 北壁際を深く掘り、中央に長方形の床下土坑が見られる。規模は200×150cm深さ92cm、南隅から10号掘立柱建物の柱穴が検出された。

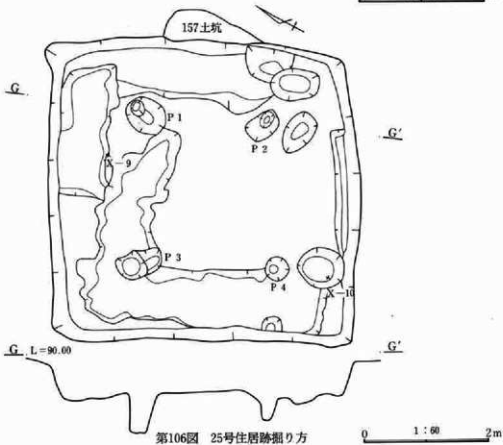
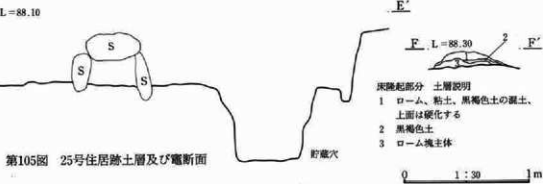
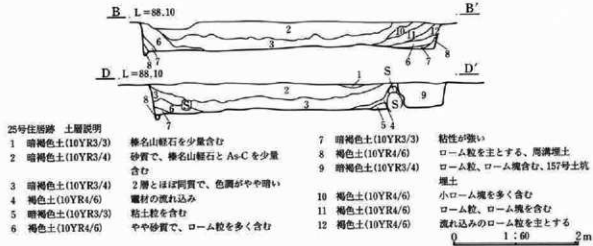
遺構重複関係 10号掘立柱建物を切り、23号溝と179号土坑に切られる。

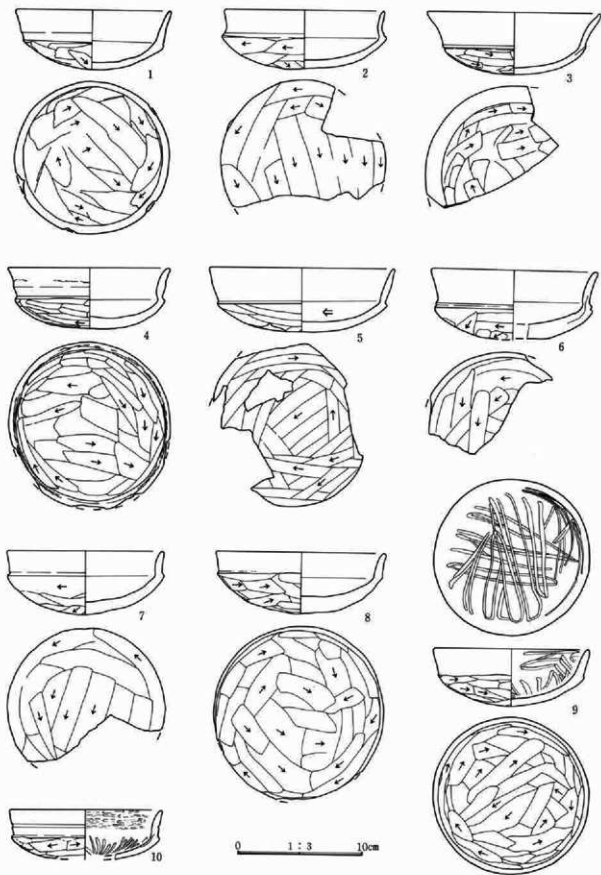
遺物 貯蔵穴を中心に6世紀後半を主とする土器等が出土。



第104図 25号住居跡

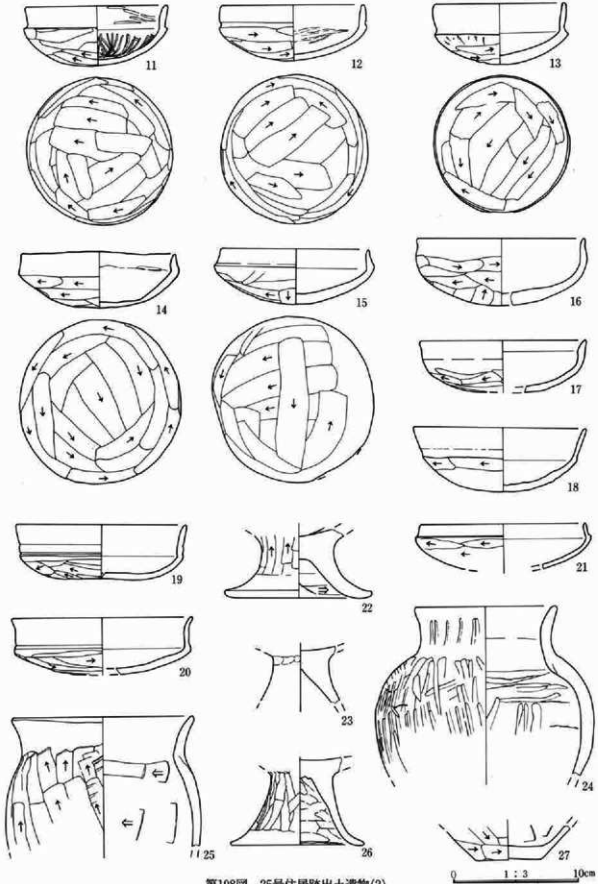
3 古墳時代以降の遺構と遺物





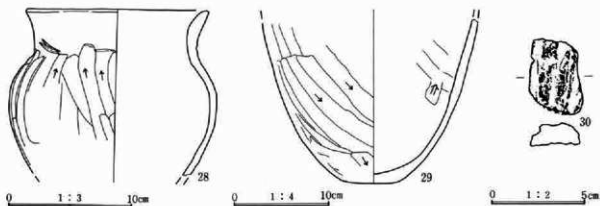
第107図 25号住居跡出土遺物(1)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第108図 25号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第109図 25号住居跡出土遺物(3)

26号住居跡(第110~113図)

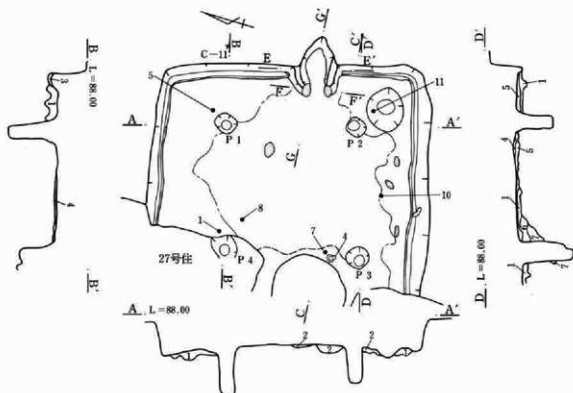
位置 2区B-11

規模 4.55×-m 壁高 54cm

主軸方位 N-80°-E

床面 主柱穴で囲まれた中央部分は地山ロームをそのまま床とする。壁際は貼り床を施す。電手前～中央部～南壁際にかけて硬化面が見られる。

竈 東壁中央に位置し、燃焼部奥部～煙道は壁を掘



貼床土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4) ローム塊多い
- 2 褐色土(10YR4/4) ローム塊、粘土、焼土を含む
- 3 褐色土(10YR4/4) ローム粒を多く含む、周溝埋土

- 4 黄褐色土(10YR6/8) ローム塊主体、踏み固まる
- 5 黄褐色土(10YR6/8) ローム塊主体、4層と同質
- 6 褐色土(10YR4/4) ローム粒多く、炭化物を少量含む
- 7 暗褐色土(10YR3/3) 小ローム塊、ローム粒を含む、柱穴埋土

0 1:60 2m

第110図 26号住居跡

り込んで構築する。全長95cm。袖部は40cmほど整穴内に張り出し、焚口部分に礎を直立させて補強する。焚口内側の幅25cm、高さは20cm前後と推定される。燃焼部は中位で膨らみ、幅45cmを測る。火床面はほぼ水平で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

貯蔵穴 南東隅に位置し、楕円形を呈する。規模は70×60cm深さ85cm底径25cmを測る。

柱穴 ピット4基が検出され、いずれも柱穴と考えられる。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	38×30	57	16
P 2	32×23	61	18

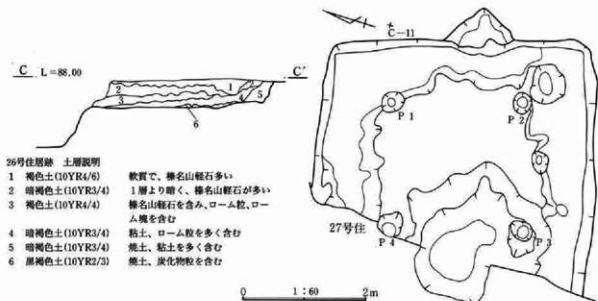
P 3	35	84	17
P 4	40	55	16
P 1-P 2	205	P 2-P 3	215
P 3-P 4	215	P 1-P 4	195

周溝 竈下部を除いて全周。最大幅15cm、深さ13cm。底面は凹凸が著しく一定しない。

掘り方 壁際を幅1m前後で掘りこむ。西側の大きな掘り込みは本住居ではなく重複する27号住居跡の電掘り方である。

遺構重複関係 27号住居跡に切られる。

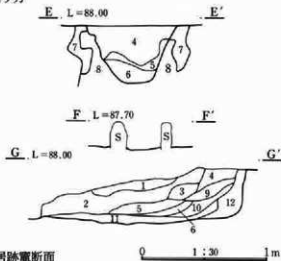
遺物 床面全体に6世紀後半を主とする土器等が散在して出土。



第111図 26号住居跡土層断面及び掘り方

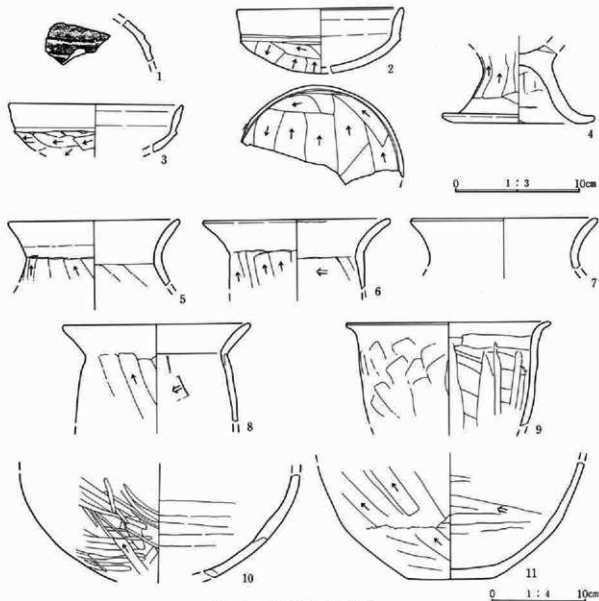
電 土層説明

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 粘土多く、礫名山軽石、ローム粒、焼土を含む |
| 2 黄褐色土(10YR5/6) | 粘土主体、礫名山軽石と焼土を含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/4) | 粘土、ローム粒、暗褐色土の混土 |
| 4 褐色土(10YR4/4) | 粘土主体、焼土と黒褐色土、ローム塊を含む |
| 5 褐色土(10YR4/4) | 3層に灰と炭化物を含む |
| 6 褐色土(10YR4/4) | 焼土塊を多く含む |
| 7 褐色土(10YR4/4) | 粘土、ローム粒を多く含む |
| 8 黄褐色土(10YR5/6) | 粘土とローム混土、袖の芯材 |
| 9 褐色土(10YR4/4) | 粘土、焼土、黒褐色土塊の混土 |
| 10 褐色土(10YR4/6) | 4層とほぼ同質 |
| 11 暗褐色土(10YR3/4) | 粘性なく、焼土多い |
| 12 暗褐色土(10YR3/3) | ローム粒多く、焼土粒を含む |



第112図 26号住居跡電断面

第3章 検出された遺構と遺物



第113図 26号住居跡出土遺物

27号住居跡 (第114～119図)

位置 2区A-10 規模 7.6×7.5m

壁高 104cm 主軸方位 N-95°-E

床面 主柱穴で閉まれた中央部分は地山ロームの床。壁際は貼り床。電手前～中央部～南壁際に硬化面が見られる。北半の柱穴P1-P3間の硬化部分で南北方向を主とする細い削痕が多数見られる。

竈 東壁中央に位置し、全長190cmを測る。袖部は130cmほど竪穴内に張り出し、燃焼部本体はほとんど竪穴内に構築される。竈口内側の幅70cm、燃焼部の推

定幅90cmを測る。掘り方にロームと粘土の混合土を埋めて基盤面を整え、そのうえに粘土・灰・ローム・焼土の混合土、ロームを順に積み上げて本体を構築する。火床面は床面とほぼ同レベルで、煙道下面まで焼けて硬化する。火床面上には灰が厚く堆積し、上に煙道からの流入土が堆積する。

貯蔵穴 南東隅に位置し、隅丸方形を呈する。規模は105×80cm深さ79cm底径35×25cmを測る。柱穴P2と浅い幅広の溝で結ばれる。

3 古墳時代以降の遺構と遺物

柱 穴 ビット7基が検出され、P1～P4は主柱穴。P6とP7は出入口施設に伴う支柱穴と思われる。なお、P1～P4にはローム塊を含む人為的な流入土が堆積しており、住居廃絶時には開口していたと思われる。

P3 83×70 95 35 P7 45 15 30

P4 63 45 45

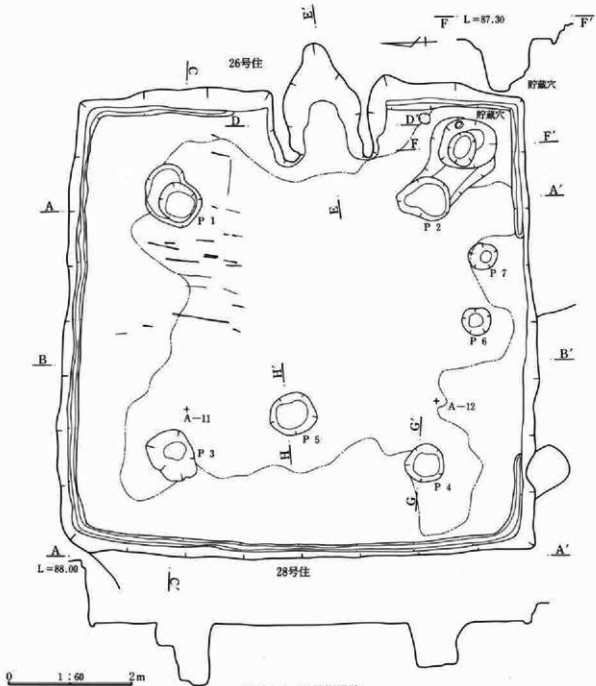
P1～P2 395 P1～P3 395 P3～P4 405

P2～P4 420 P6～P7 104

周 溝 南壁中央3.5mを空け、最大幅17cm深さ8cm。

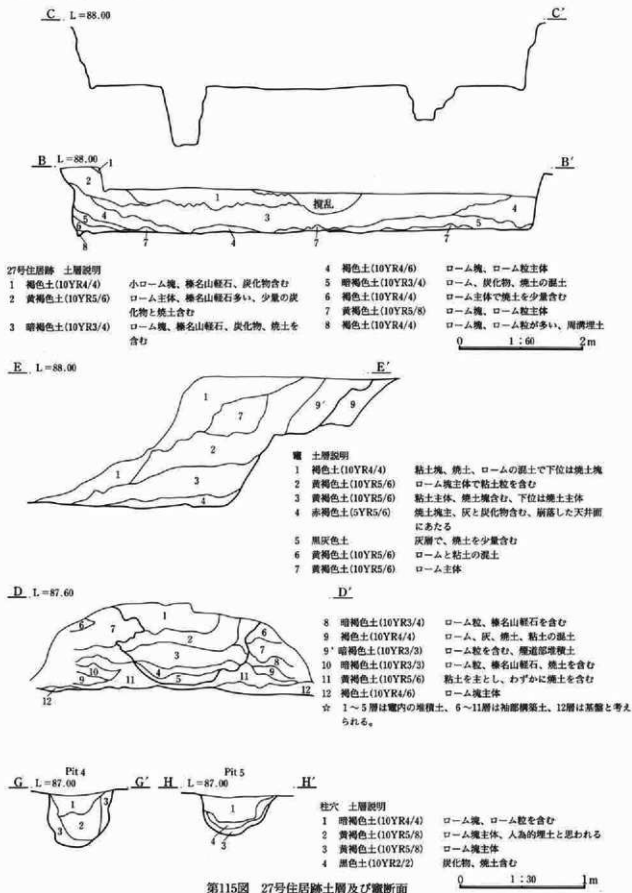
掘り方 壁際を幅1m前後の帯状に掘りこむ。床下土坑8基、ビット3基が検出された。床下土坑は底

上端径 深さ 下端径 (cm) 上端径 深さ 下端径
 P1 105×75 100 47 P5 75×65 33 54
 P2 85×55 76 62×47 P6 45 18 23

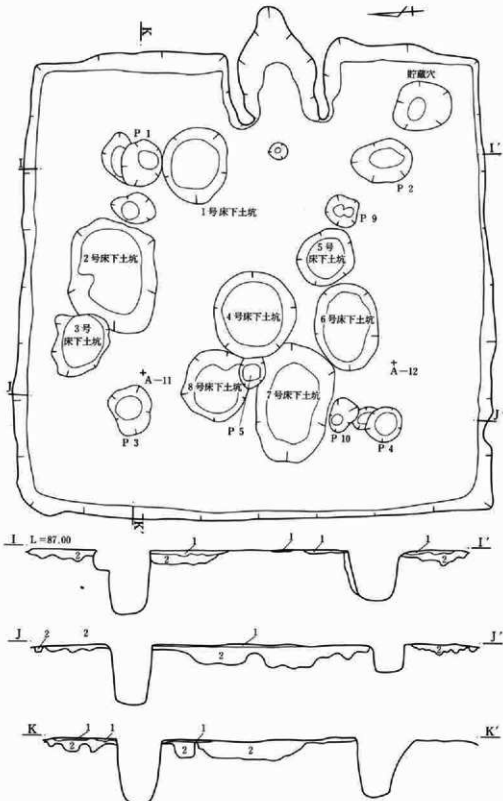


第114図 27号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第115図 27号住居跡土層及び竈断面



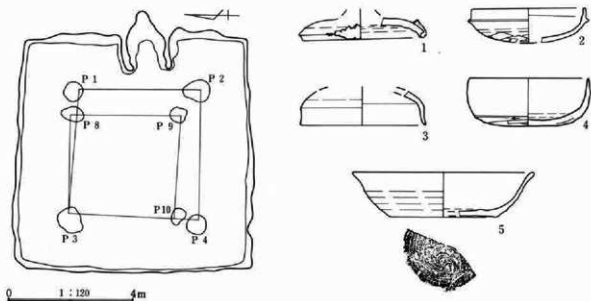
掘り方 土層説明

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| 1 黄褐色土(10YR6/8) | ロームブロック多く、焼土を少量含む、踏み固められている |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ロームブロック主体 |

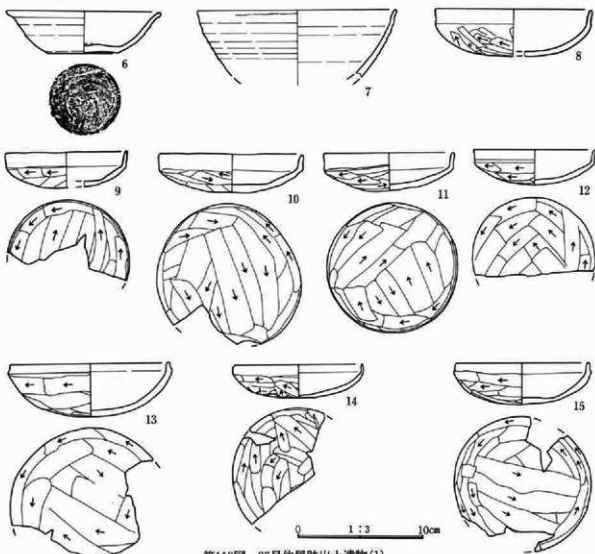
第116図 27号住居跡掘り方

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物



第117図 27号住居跡柱穴配置



第118図 27号住居跡出土遺物(1)

3 古墳時代以降の遺構と遺物

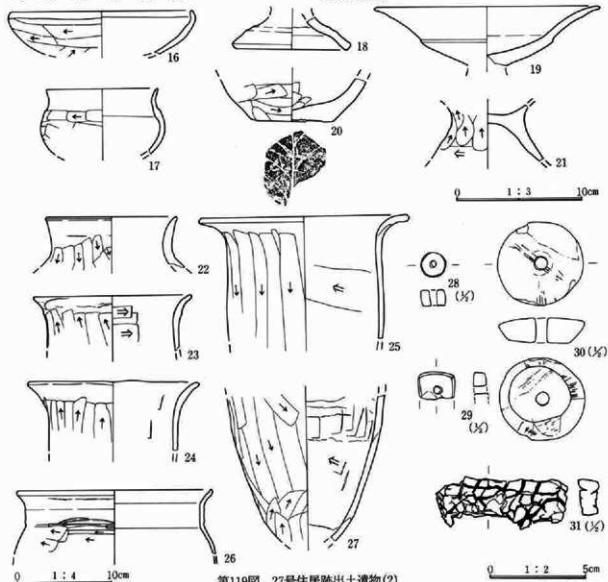
部平坦で粘土層までは達していない。P 8～P10は旧柱穴と思われる。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
1号	122×105	22	80
2号	188×138	33	128×100
3号	105×85	32	85×65
4号	140	18	105
5号	100×80	12	70×58
6号	135×100	28	110×73
7号	187×115	38	123×80

8号	115	30	78
P 8	75×48	31	28
P 9	55×45	40	15
P10	52×40	29	18
P 8-P 9	335	P 3-P10	330
		P 3-P 8	315
P 9-P10	330		

遺構重複関係 26号住を切り、28・42・44号住・145号土坑に切られる。

遺物 主に埋土から7世紀前半～9世紀初頭の土器等が出土。



第119図 27号住居跡出土遺物(2)

28号住居跡 (第120～122図)

位置 1区Y-10・11、2区A-10・11

規模 7.1×4.1m 壁高 45.5cm

主軸方位 N-91°-E

床面 西側の一部を除き、重複する27号住居跡の埋土を床とする。竈手前～中央部に硬化面。

第3章 検出された遺構と遺物

竈 東壁のやや南寄りに位置し、全長155cm。焚口底面に見られる灰掻きのくぼみの位置から袖部は壁穴内に張り出したと思われるが痕跡を残さない。燃焼部は推定幅50cm、火床面は10cmの高低差で傾斜する。掘り方に炭化物を含む土を埋めて基盤面を整え、そのうえにロームを含む褐色土で本体を構築する。

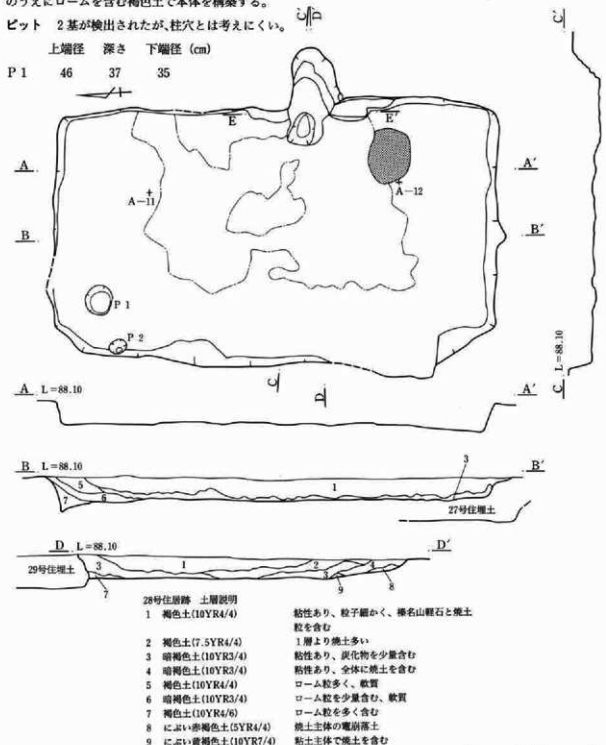
ピット 2基が検出されたが、柱穴とは考えにくい。

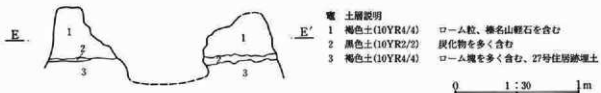
P 2 28×22 67 10

その他 竈右手前の床面上に90×70cmの範囲で焼土が集中していた。全体に炭化物も散在する。

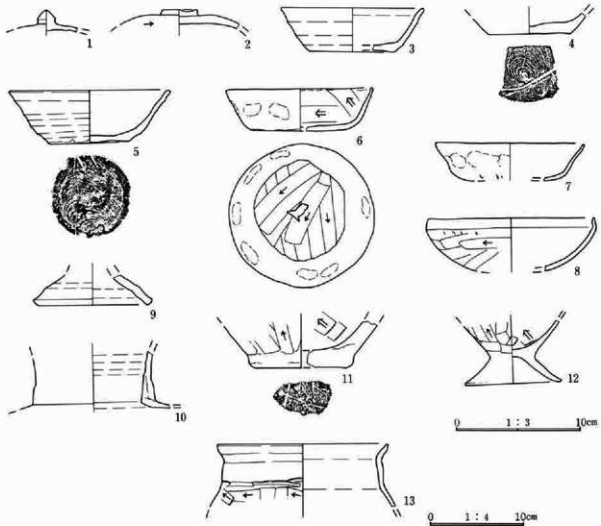
遺構重複関係 27号住、29号住を切る。

遺物 主に埋土から7～9世紀代の土器等が出土。





第121図 28号住居跡電断面



第122図 28号住居跡出土遺物

29号住居跡 (第123～125図)

位置 1区X・Y-11 規模 4.0×2.9m

壁高 52cm 主軸方位 N-70°-E

床面 中央部分のみ硬化しており、周囲の壁際
70～100cmの幅の部分は軟質。

竈 東壁のやや北寄り、全長70cm前後、推定幅30cm。

袖部は壁穴内に張り出し、先端には直立礫で補強。

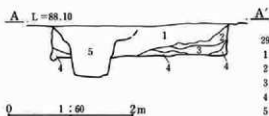
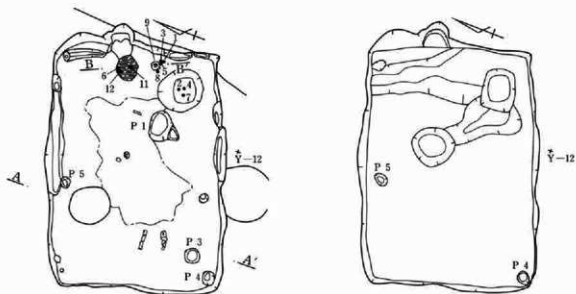
貯蔵穴 南東隅、不整形、径75×65cm、深さ45cm。

ピット 5基が検出されたが、柱穴とは考えにくい。

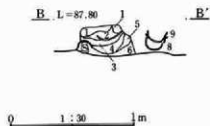
第3章 検出された遺構と遺物

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	48×38	17	35×25
P 2	15	11	8
P 3	25	14	18
P 4	25	12	13
P 5	17	20	8

周溝 東半壁際に沿う。最大幅20cm深さ4cm。
 掘り方 東壁際に沿って溝状に掘る。中央で土坑1基を
 検出。円形で径45cm、深さ20cm。
 遺構重複関係 28号住、10号掘立柱建物に切られる。
 遺物 電右脇で礎と椀が重なって出土。また上屋
 の一部と思われる炭化材が埋土下層から出土した。

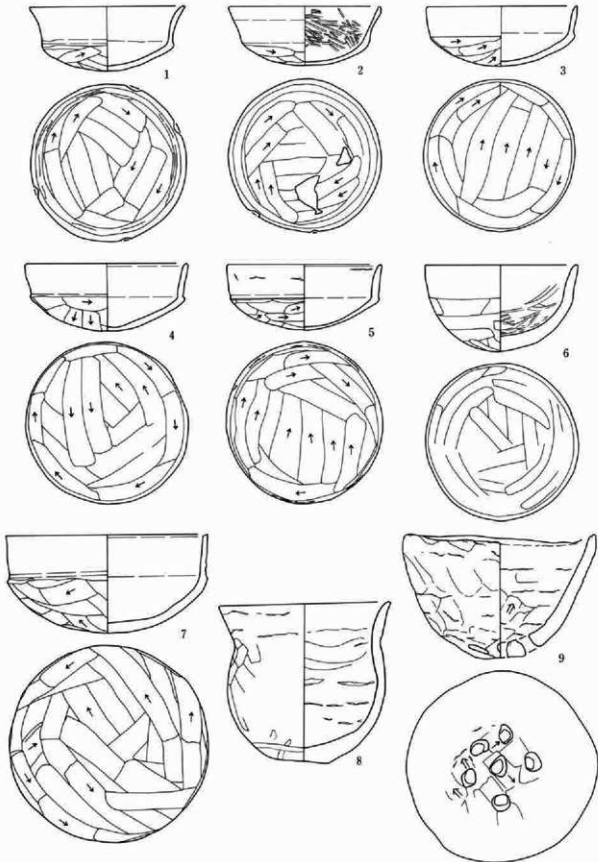


- 29号住居跡 土層説明
- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 炭化物、ローム粒、播名山磁石を少量含む |
| 2 黒褐色土(10YR2/2) | 粒子細かくやや軟質 |
| 3 黄褐色土(10YR5/6) | 全体にローム粒を含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒と炭化物を含む |
| 5 | 10号掘立柱建物跡柱穴埋土 |



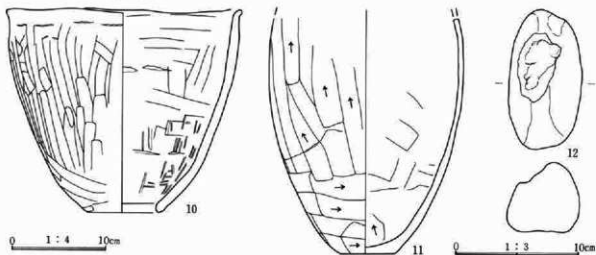
- 竈 土層説明
- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 黄褐色土(10YR5/8) | 粘土とロームの混合土、天井部と推定 |
| 2 褐色土(10YR4/6) | ロームと焼土の混合土 |
| 3 褐色土(10YR5/6) | 粘土主体で焼土を含む |
| 4 褐色土(7.5YR4/6) | 焼土主体で灰と炭化物を含む |
| 5 明黄褐色土(10YR4/8) | ローム主体 |
| 6 褐色土(10YR4/4) | ロームと暗褐色土の混合土 |

第123図 29号住居跡及び掘り方



第124図 29号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第125図 29号住居跡出土遺物(2)

30号住居跡 (第126～129図)

位置 1区Y12～14・2区A13～14グリッド

規模 6.7×5.8m以上 壁高 73cm

主軸方位 N-68°-E

床面 全体に貼床。電竈口付近と南壁際中央部のみ硬化しており、他は比較的軟質。傾斜やレベル差はほとんどなく、平坦。

竈 東壁やや南寄りに位置し、燃焼部から煙道まで比較的良好に遺存する。袖部は40cmほど竈穴内に張り出し、燃焼部の平面的位置は壁線とほぼ同じか、やや壁外にある。焼成により硬化した内壁より、燃焼部は直径60cmほどの円形、煙道は奥壁から約50°で直線的に傾斜して1mほど延びる。火床面はほぼ平坦で、奥へやや立ち上がる。燃焼部中央のやや左寄りに、長さ28cmの自然礫を直立させて支脚としている。火床面からの支脚高は14cm。掘り方は一回り大きく掘り込み、主に粘土とロームの混土を用いて本体と煙道部を構築している。構築材にはほとんど焼土は含まれない。

貯蔵穴 竈の右側、南東隅に位置する。平面は不整形楕円形で、大きさ80×59cm、底径25cm、深さ76cm。北と南側に高さ5cm以下の盛土をして、壁との間に約80cm四方の蓋受状施設を作っている。

周溝 竈部分以外は全周しており、幅20cm前後、深さは10cm以下で、底面レベルはばらつきがある。

柱穴 主柱穴4基を検出。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	75×56	53	48×25
P 2	51×45	64	24×18
P 3	61×48	59	17×15
P 4	49×39	61	21×18
P 5	41×40	21	11×10

柱間寸法

P 1-P 2	3.14m	P 2-P 3	3.05m
P 3-P 4	3.09m	P 1-P 4	2.95m

P 3とP 4の断面形が中央にやや傾斜しているのは、住居廃棄時に柱を抜き取ったためだろう。P 5は深さ20cmの短い溝で周溝とつながる。性格は不明。

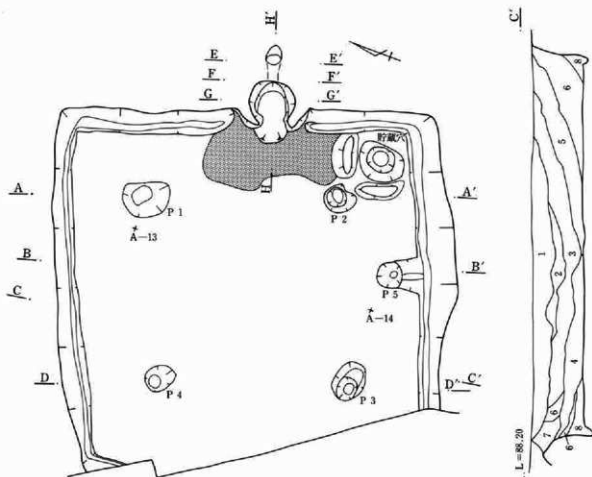
床下ビット 3基検出。いずれもローム塊の多い土で埋めており、上に床が貼られている。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 6	110×90	13	70
P 7	80×58	16	52×25
P 8	182×130	60	143×72

掘り方 柱穴で閉まれた範囲よりも壁際をやや深く掘り込み、面は凹凸が多い。25～10cmの厚さで埋土し貼床を構築する。

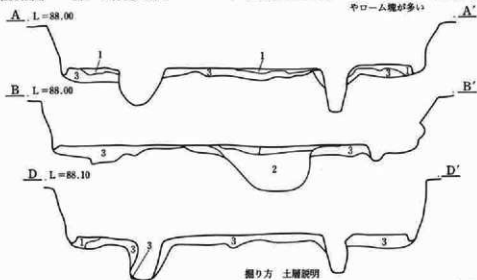
遺構重複関係 31号住居跡より新しい。

遺物 一部は竈内から出土しているが、大部分は埋土下層である。7世紀前半代～中葉のものが主。



30号住居跡 土層説明

- | | | | |
|-----------------|----------------|------------------|-----------------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 緑名山軽石を含む | 5 明黄褐色土(10YR6/8) | 4層に近似し、下に炭化物が多い |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ローム塊、焼土塊、炭化物含む | 6 黒褐色土(10YR2/3) | 有機物を多く含む |
| 3 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊が多く、炭化物を含む | 7 褐色土(10YR4/5) | ロームの混れ込み |
| 4 褐色土(10YR4/4) | 大ローム塊を多く含む | 8 暗褐色土(10YR3/4) | 小ローム塊、ローム粒を含む、周溝部はややローム塊が多い |



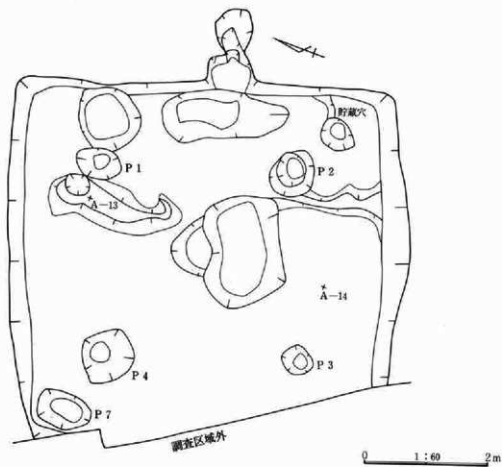
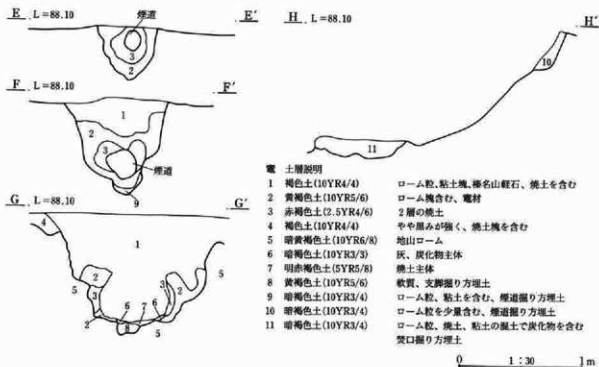
掘り方 土層説明

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | 大ローム塊、焼土、炭化物を含む |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ローム粒、ローム塊が多い |
| 3 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊が主体 |

0 1:60 2m

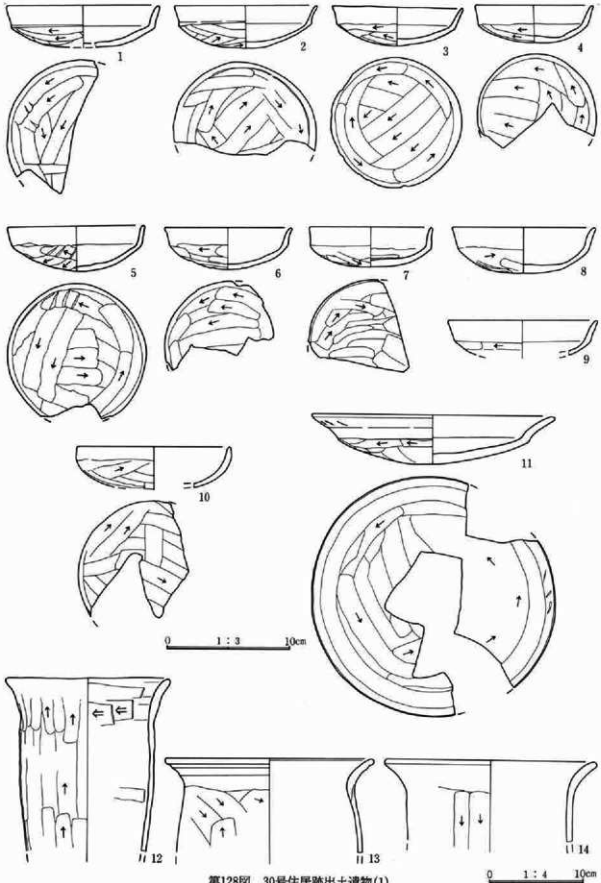
第126図 30号住居跡及び掘り方断面

第3章 検出された遺構と遺物



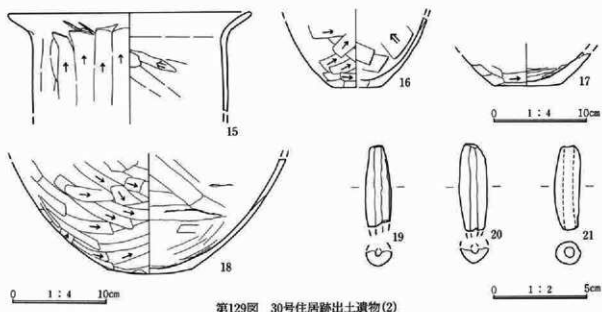
第127図 30号住居跡電断断面及び掘り方

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第128図 30号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第129図 30号住居跡出土遺物(2)

31号住居跡 (第130図)

位置 1区X12・Y12グリッド

平面形 不明、北東隅部分のみ検出。

壁高 51cm

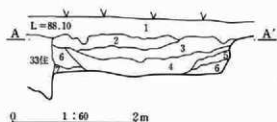
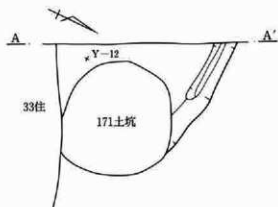
床面 中央は壁際より5cmほど高い。

竈 不明。

周溝 北壁沿いに掘り込まれ、幅18cm、深さ8cm。

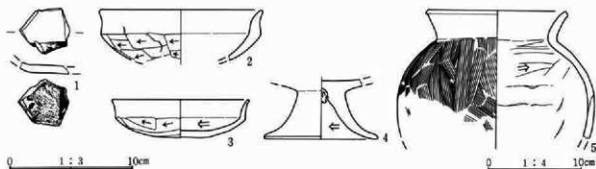
遺構重複関係 30号住居跡と171号土坑が新しい。

遺物 埋土から杯、高杯の小破片が出土。



31号住居跡 土層説明

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒を含み、砂質 |
| 2 褐色土 | ローム粒が多く、炭化物と焼土を少量含む |
| 3 暗褐色土 | やや粘性を帯び、礫・山礫石を含む |
| 4 褐色土 | ローム粒が主体でローム塊と黒色土塊を含む |
| 5 黒褐色土 | 有機質を多く含む |
| 6 褐色土 | ローム粒が主体で、砂質、地山混入土 |
| 7 褐色土 | ローム粒と、焼成変化した粘土を含む |



第130図 31号住居跡及び出土遺物

32号住居跡(欠番)

33号住居跡(第131~137図)

位置 2区A14・15、B14・15、C15グリッド

規模 7.2×6.9m 壁高 62cm

主軸方位 N-73°E

床面 全面に10~20cmの厚さでロームブロック主体の貼床。南側出入り口推定部分では互層をなす。

床面レベルはほぼ水平、平坦。硬質床面範囲は南側壁際、竈焚口、支柱穴で囲まれた内側。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、燃焼部平面形は縦長楕円形、袖は竈穴内に張り出す。天井部は崩落し、煙道下位が遺存する。検出された袖端部から煙道端部までの長さは1.8m。燃焼部内側の幅は50cm。袖部の竈穴内への張り出しは約80cm。燃焼部中央のやや左寄りに23cm大の礎を直立させて支脚とする。礎は中央ひとつだけだろう。燃焼部の下は地山を皿状に掘りくぼめ、埋土して平坦な火床面を作る。その上に粘土を芯として周囲に灰、ローム、褐色土などを積み上げて構築する。奥壁部分は掘り方に粘土を張っており、この面が焼けている。奥壁部堆積土の中央付近に硬質な焼土塊で囲まれて軟質の土が堆積しており、煙道の流入土と想定して掘削を進めたが、筒状の堆積が確認できないことから、煙道の痕跡とは認められない。

貯蔵穴 竈右脇に位置し、形状は不整形円形。規模は

82×77cm、深さ73cm、底径43×39cm。底面は平坦。

周溝 貯蔵穴南部を除き全周、幅35cm、深さ8cm。

柱穴 支柱穴は6本と推定、うち5本を検出。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P 1 30×28 94 15×13

P 2 33 92 13×12

P 3 26×22 62 11×9

P 4 32×24 52 9×4

P 5 62×34 54 17×16

P 6 25×22 69 12

P 7 90×80 16 56

柱間寸法

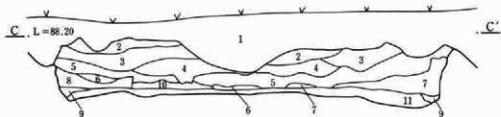
P 1-P 4 1.8m P 2-P 4 2.05m

P 2-P 3 3.75m P 3-P 5 2.25m

掘り方 柱穴と壁の間、約1mは段状に深く掘り込む。ピット状の浅いくぼみ8カ所あり。P 1とP 6の間に2条の溝状遺構。

遺構重複関係 3号道路跡に切られる。

遺物 南壁際から崩落した上屋材と思われる炭化材が出土している。材には丸太、割り材、板材があり、このうち壁と直交する方向に倒れる材は垂木と考えられる。

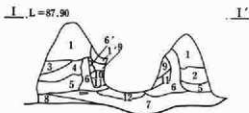
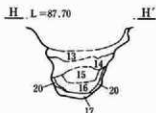
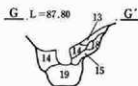
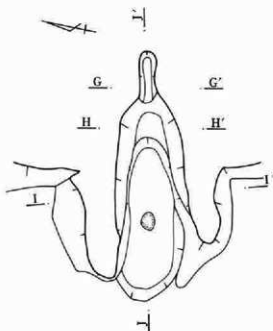


33号住 土層説明

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/3) | 土粒やや粗くAs-Bを含む、道路遺構覆土 |
| 2 暗褐色土(10YR3/4) | 微小な礫名山軽石、ローム粒を含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/4) | 1層よりやや細く、褐色の斑紋あり |
| 4 暗褐色土(10YR3/3) | 小ローム塊を少量含む |
| 5 暗褐色土(10YR3/4) | 全体にローム塊を含む |
| 6 黒褐色土(10YR2/3) | 微小な礫名山軽石を含む |
| 7 暗褐色土(10YR3/3) | 微小な礫名山軽石、焼土、炭化物粒を含む |
| 8 黒褐色土(10YR2/3) | 炭化物粒を含む |
| 9 黄褐色土(10YR5/6) | 小ローム塊主体、周溝埋土 |
| 10 黄褐色土(10YR5/4) | ローム粒が主体、硬質 |
| 11 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊を主とする、貼床埋土 |

0 1:60 2m

第131図 33号住居跡土層断面



竈 土層説明

- 1 黄褐色土(10YR5/6)
- 1' 1層の前落層
- 2 褐色土(10YR4/4)
- 3 褐色土(10YR4/4)
- 4 褐色土(7.5YR4/4)
- 5 暗褐色土(10YR3/4)
- 6 褐色土(7.5YR4/4)
- 6' 6層の焼土
- 7 褐色土(10YR4/4)
- 8 褐色土(10YR4/4)
- 9 褐色土(7.5YR4/4)
- 10 炭化物と灰層
- 11 赤褐色土(5YR4/8)
- 12 暗褐色土(10YR3/3)
- 13 褐色土(10YR4/4)
- 14 褐色土(10YR4/6)
- 15 暗赤褐色土(2.5YR3/6)
- 16 褐色土(7.5YR4/6)
- 17 暗褐色土(10YR3/4)
- 18 黄褐色土(10YR5/8)
- 19 黄褐色土(10YR6/8)
- 20 粘土主体で火を受けて、酸化、紫色する

棒名山軽石、ローム粒、焼土を含む

小ローム塊、焼土塊、粘土を多く含む

2層に近似するが、粘土が少ない

粘土が主体で、焼土塊とローム粒含む

ローム粒、炭化物、焼土、灰の混土

粘土主体で、ローム粒と鉄土を少量含む

ローム塊、焼土、炭化物、灰の混土

ローム塊を多く含む

1層と6層の混土で、ローム粒、焼土塊、炭化物を含む

焼土塊が主体

軟質で、ローム粒を少量含む

ローム塊、棒名山軽石を含む

焼土塊、ローム塊含む

焼土塊主体

灰、焼土、粘土の混土

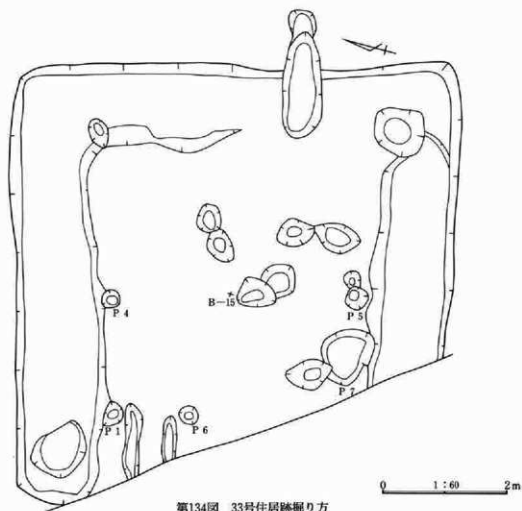
ローム塊を含む、掘り方埋土

地山の掘入土

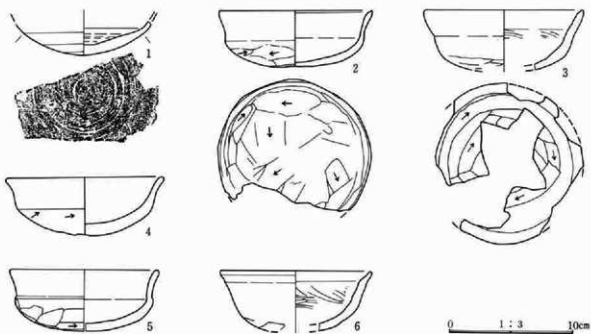
小ローム塊が主体

0 1 : 30 1 m

第133図 33号住居跡竈土層断面

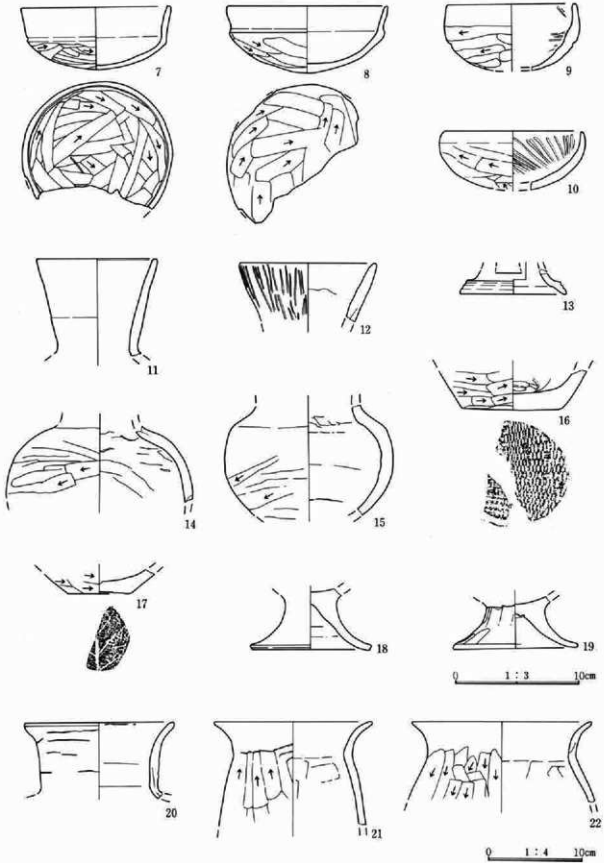


第134図 33号住居跡掘り方



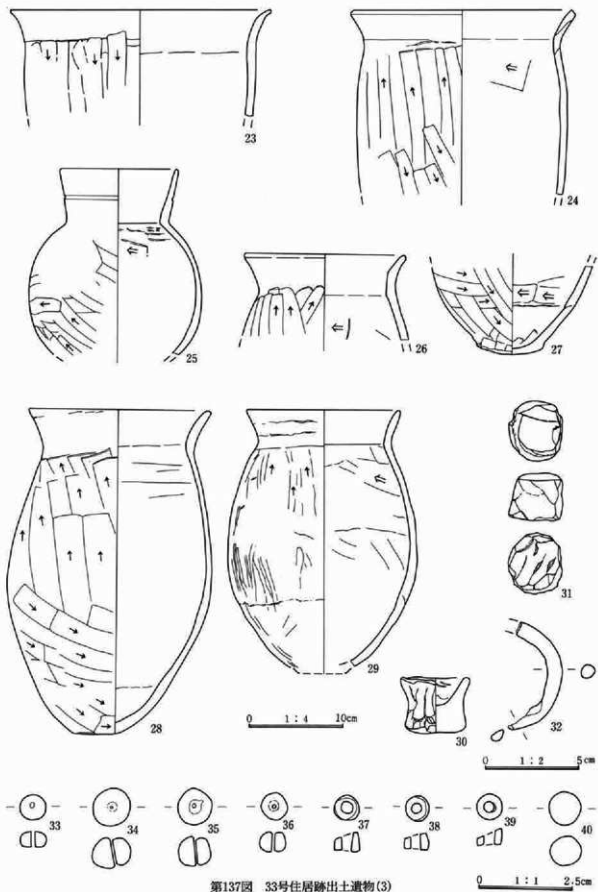
第135図 33号住居跡出土遺物(1)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第136図 33号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第137図 33号住居跡出土遺物(3)

34号住居跡 (第138~142図)

位置 2区B4・5、C4・5、D5グリッド

規模 5.6×5.3m 壁高 39cm

主軸方位 N-62°-E

床面 竈付近は貼床だが、他は地山のロームをそのまま床とする部分が多い。床面レベルは大きな差はなく平坦。硬質範囲は明確でない。

竈 北東壁中央に位置し、煙道は確認できず。袖部は80cm竈穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竈穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1.1mで、燃焼部の最大幅は50cm弱と推定される。火床面はほぼ平坦で、焚口部が灰掻きのためややくぼむ。火床面中央のやや右寄りには長さ10cmの礫を8cmほど地上に出して直立させ、支脚としている。本体は炭化物を含む粘質土を基盤にして、粘土を主体に積み上げて構築する。

貯蔵穴 東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は不整形円形で、径107×77cm、深さ96cm、底径36×34cm。周辺は床面より10cm前後深く、蓋受け状になっている。なお西隅で確認されたP5は8cmと浅いが、周囲が130×100cmの方形状に掘りくぼめてあることから、貯蔵穴であった可能性がある。

柱穴 主柱穴は4基(P1~P4)が確認された。なおP7は重複する遺構の可能性があるが、確認できなかった。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P1	71×62	64	25×21
P2	70×58	91	14×10
P3	75×—	72	21×11
P4	37×34	71	22×17
P5	67×46	8	35×24
P6	27	22	14×13
P7	71×57	18	61×48

柱間寸法

P1-P2 2.45m P2-P4 2.80m
P3-P4 2.40m P1-P3 2.70m

周溝 全周し、幅20cm前後、深さ16cm以下。

掘り方 竈付近をやや深く掘りくぼめ、他は平坦。

遺構重複関係 35号住居跡、11号獨立柱建物跡に切られる。

遺物 須恵器蓋(1)が貯蔵穴から、他の大部分は竈と貯蔵穴付近の埋土からの出土である。

35号住居跡 (第138~140・143~147図)

位置 2区B5~7、C5~7、D5グリッド

規模 6.35×6.33m 壁高 50cm

主軸方位 N-65°-E

床面 貼床は全面に施され、床面レベルはほとんど差がなく平坦。硬質範囲は中央部分から竈手前、南東壁際に沿った部分に見られる。

竈 北東壁の南東寄りに位置し、袖部は80cm竈穴内に張り出す。燃焼部を含む本体は竈穴内から壁外にかけて構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1.3mで、燃焼部の最大幅は50cm前後と推定される。火床面は中央部が深く、焚口と奥壁にかけて緩く傾斜する。本体は、掘り方面に炭化物と灰を混入した土を基盤に粘土を主として積み上げる。この粘土内には焼土が含まれる。火床面は平坦で中央に支脚用礫を据えた痕跡があるが、ここは焼土と灰を含む褐色土が充填される。袖先端部には礫を立てて補強している。なお、燃焼部から焚口にかけて、壘2個体が潰れた状態で出土している。

貯蔵穴 東隅壁際に掘り込まれる。平面は不整形円形で、径70×62cm、深さ39cm、底径41×25cm。掘り方は主柱穴P1と連続する。

柱穴 主柱穴は4基(P1~P4)が確認された。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P1	50×47	62	29×27
P2	80×71	63	36×32
P3	67×64	65	27
P4	58×53	65	13×12

柱間寸法 (心心距離)

P1-P2 4.36m P2-P3 4.14m
P3-P4 3.90m P1-P4 3.88m

周溝 貯蔵穴と竈部分を除いて全周、幅20cm前後、深さ12cm以下。

第3章 検出された遺構と遺物

掘り方 壁に沿って東隅は“腕の手”状、南西部は帯状に、幅1~1.5m、深さは周囲より20cm深く掘り込む。この部分の埋土は30cmに及び貼床とする。

床下土坑 1号は南寄り、2号は中央で確認された。2号は11号掘立柱建物跡の柱穴と重複するため全形は確認できなかった。規模は以下のとおりである。

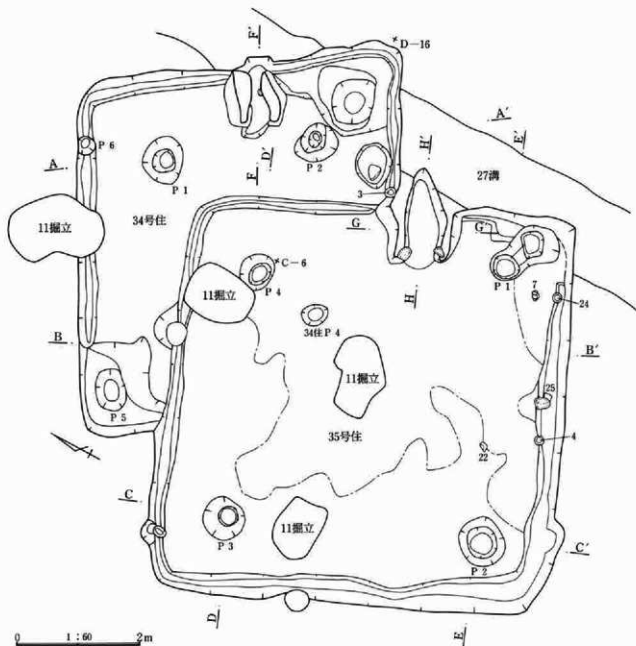
上端径 深さ 下端径 (cm)

1号 204×200 78 135×115

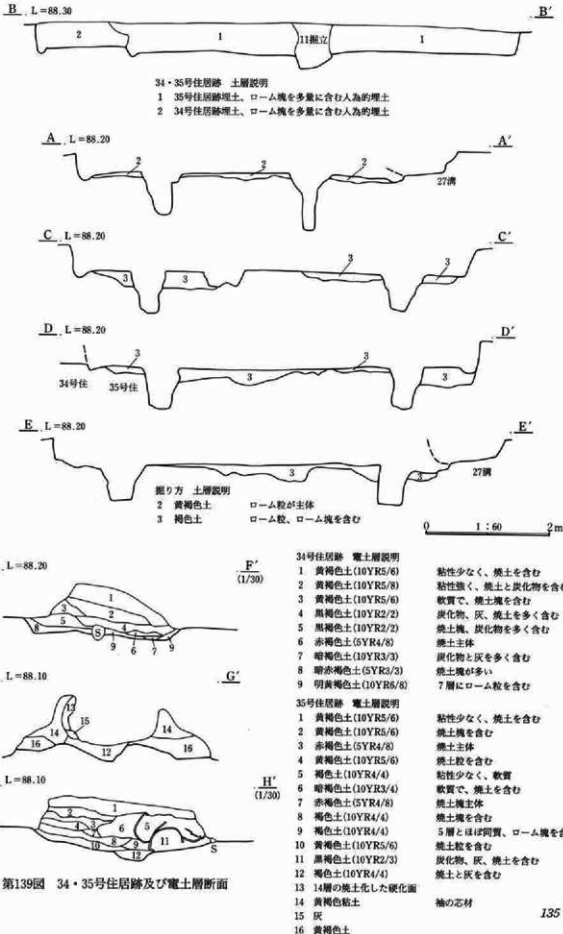
2号 182×155 55 113×85

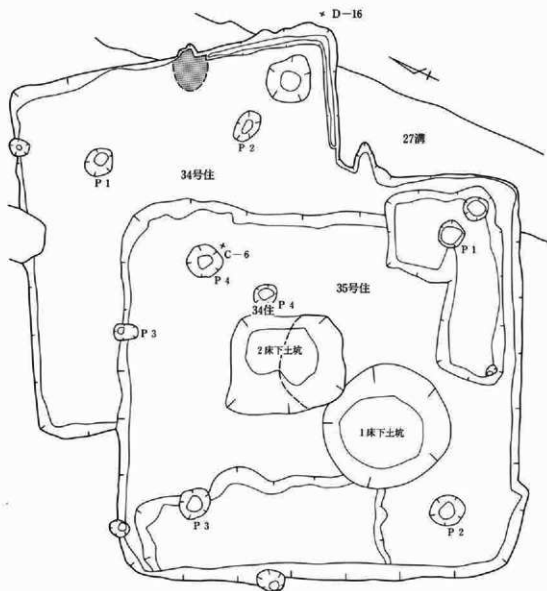
遺構重複関係 34号住居跡を切り、11号掘立柱建物跡に切られる。

遺物 ほぼ同大の楕円礫が33点出土。いずれも南東壁際や床面に分布し、住居と同時廃棄と思われる。



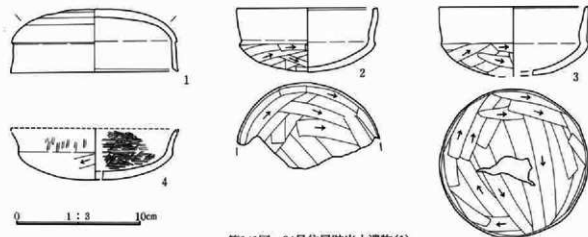
第138図 34・35号住居跡



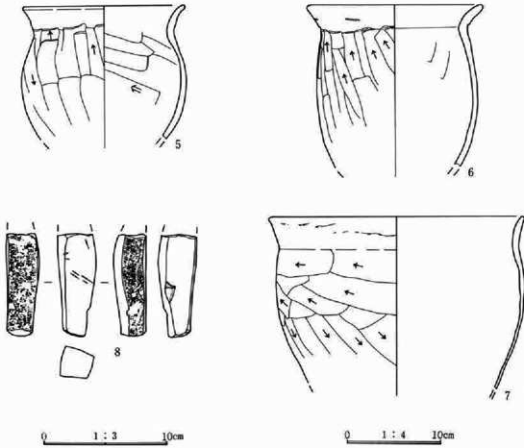


第140図 34・35号住居跡掘り方

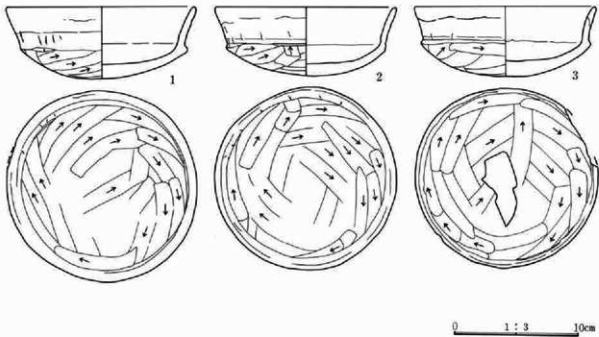
0 1:60 2m



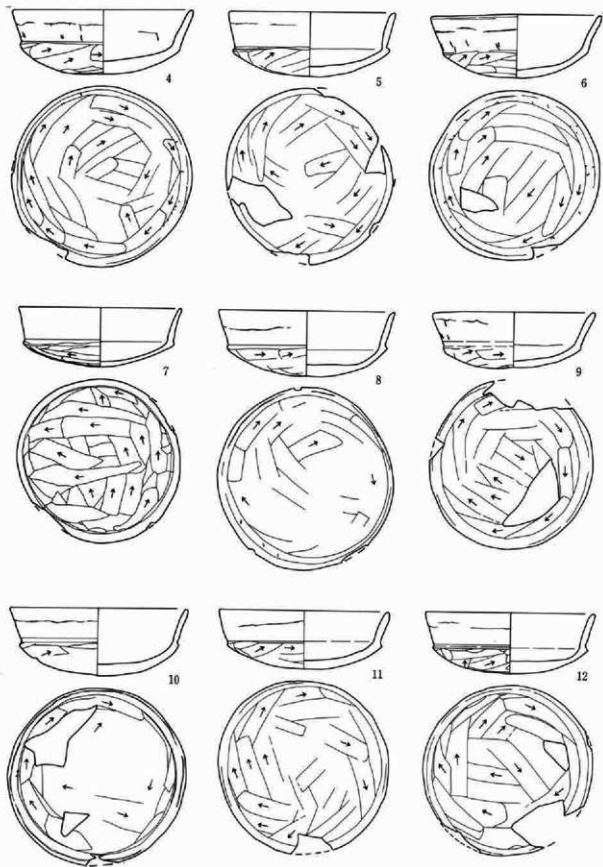
第141図 34号住居跡出土遺物(1)



第142図 34号住居跡出土遺物(2)

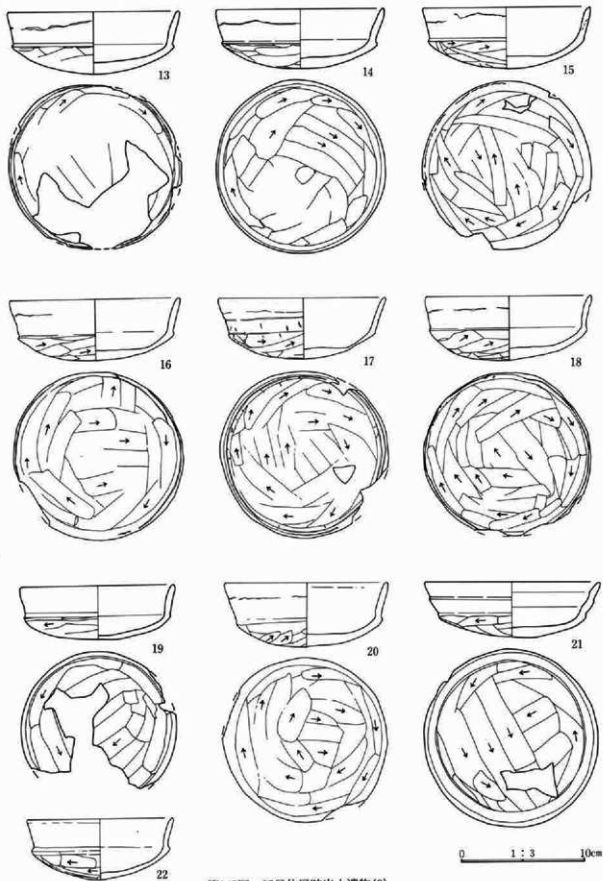


第143図 35号住居跡出土遺物(1)



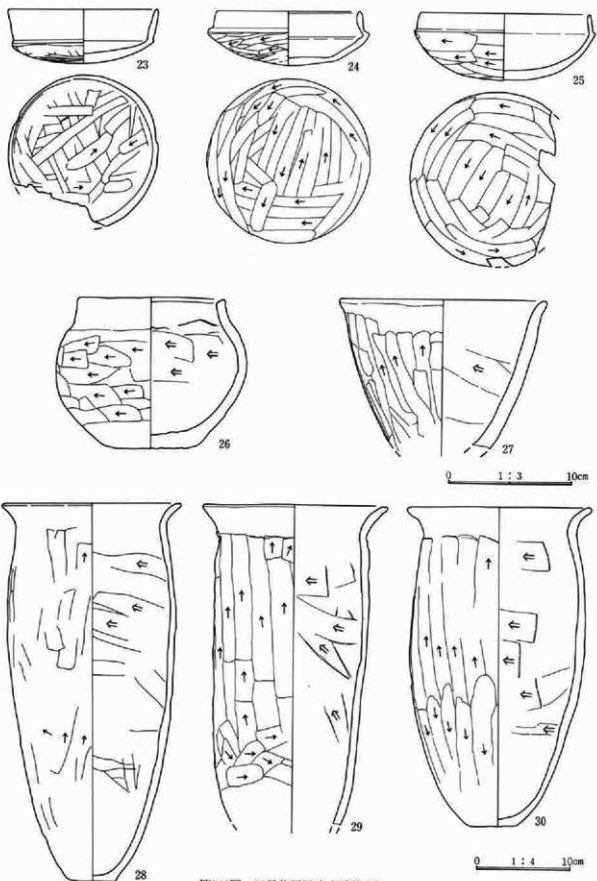
第144図 35号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

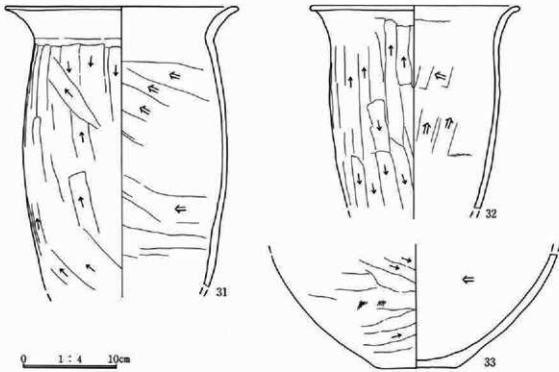


第145図 35号住居跡出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第146図 35号住居跡出土遺物(4)



第147図 35号住居跡出土遺物(5)

36号住居跡 (第148・149図)

位置 1区Y4・5、2区A5グリッド

規模 東西辺5.22m 壁高 24cm

主軸方位 N-83°-E

床面 全体に東部分が高く、東西端部でレベル差は10cm強である。竈、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。

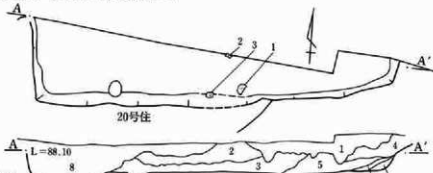
ピット 南壁際の南西隅から1.3mで、小規模なピット

ト1基を確認。径25×20cm、深さ8cm。本住居より新しい可能性がある。

埋没状況 一様にローム塊を多く含む土で埋まり、床面付近では細かい炭化物が多く見られる。

遺構重複関係 20号住居跡を切る。

遺物 数量少なく、6世紀代に属する土器片が埋土下層から出土している。



36号住居跡 土層説明

1 褐色砂質土(10YR4/6)

2 褐色土(10YR4/4)

3 褐色土(10YR4/4)

4 濃い黄褐色土(10YR5/4)

軟質で、ローム塊を含む

ローム塊、炭化物、焼土を含む

ローム塊を含む

5 褐色土(10YR4/6)

6 暗褐色土(10YR3/4)

7 黄褐色土(10YR5/6)

8 褐色土(10YR4/4)

ローム塊を含む

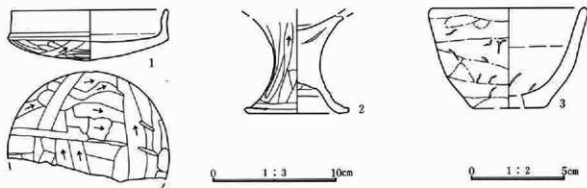
土粒粗く、As-Cをわずかに含む

ローム塊を含む

ローム塊と炭化物を含む、土坑埋土

0 1:60 2m

第148図 36号住居跡



第149図 36号住居跡出土遺物

37号住居跡 (第150～153図)

位置 1区X5・6、Y5～7、2区A5・6グリッド

規模 5.5×5.2m 壁高 38cm

主軸方位 N-62°-E

床面 全体に掘り方の凹凸面を埋めた貼床。レベルは中央部がやや高く、南東壁際が中央部より5～10cm低い。硬質な床面の範囲は4基の支柱穴に囲まれた部分と電手前、南東壁際である。

竈 北東壁中央部に位置し、煙道は遺存しない。燃焼部は竈穴内に約80cm張り出し、本体は竈穴内に構築される。中央よりやや奥で支脚と思われる礎があることから、この部分が燃焼部と思われる。燃焼部幅は40cm前後と推定される。本体の構築材には粘土とロームの混土を用い、構築前に火床面を焼き、炭を敷いている。

貯蔵穴 東隅、竈右側を掘り込む。平面は不整形で、規模は96×91cm、深さ42cm、底51×45cmで平坦。

柱穴 支柱穴4基(P1～P4)、梯子など出入口施設に関連すると推定されるピット1基(P5)確認。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	35×33	36	19×18
P 2	37×33	27	13×12
P 3	46×39	56	10×9
P 4	46×34	66	10×8
P 5	37×24	—	8×7

柱間寸法

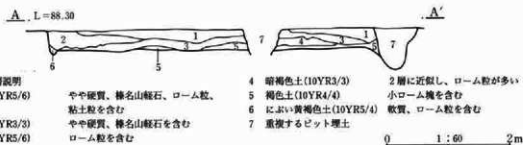
P 1—P 2	2.36m	P 2—P 4	2.23m
P 3—P 4	2.35m	P 1—P 3	2.14m

掘り方 平均的に全体を掘り下げており、12cm前後の盛土で貼床とする。

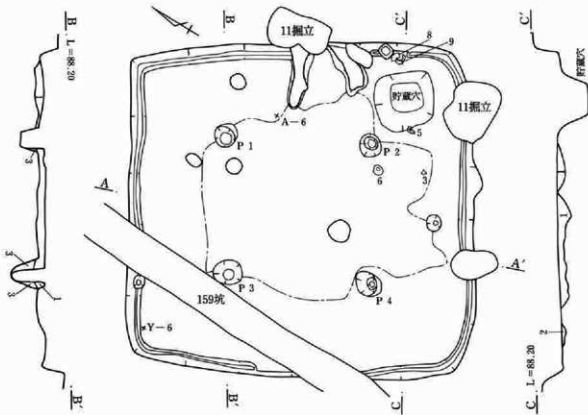
周溝 竈と、南西壁中央付近を除いて廻る。幅20cm前後、深さ5cm以下。全体に平坦で、明確なピットは認められない。

遺構重複関係 11号掘立柱建物跡、159号土坑、ピットに切られる。

遺物 竈右脇および貯蔵穴周辺から集中する。大部分は埋土内からの出土で、6世紀中葉のものが主体を占める。



第150図 37号住居跡土層断面

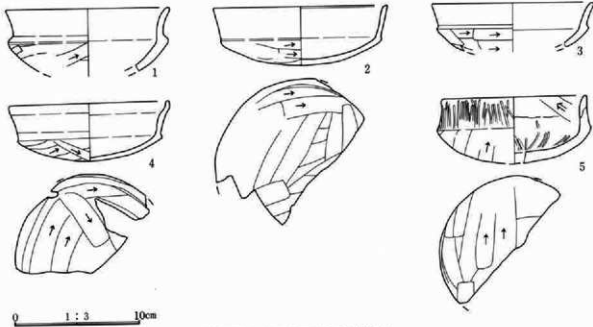


掘り方 土層説明

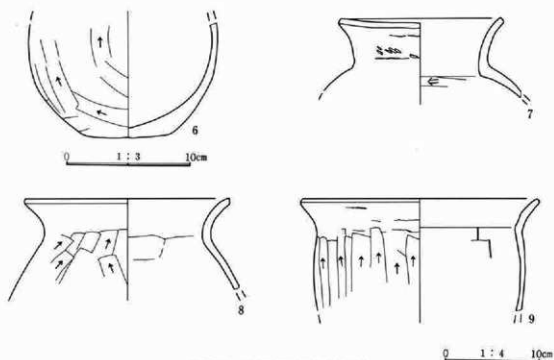
- 1 ローム、黒色土、褐色土の混土で、上面は礫化
- 2 1層と同質で、上面は軟質
- 3 褐色土でローム粒を多く含み、軟質

第151図 37号住居跡

0 1 : 60 2m



第152図 37号住居跡出土遺物(1)



第153図 37号住居跡出土遺物(2)

38号住居跡 (第154～160図)

位置 2区B16、C15～17、D15・16、E16グリッド

規模 6.4×6.3m 壁高 33cm

主軸方位 N-55°-E

床面 全体的に貼床を施し、下層はローム主体、上面はローム塊を含む暗褐色土が主体。中央部がやや高く、壁付近とは5cmほどのレベル差がある。全体的にやや硬質で、硬軟の明瞭な差は認められない。

竈 北東壁の南東寄りに位置し、天井部は崩落、燃焼部と煙道下部が遺存する。袖部は90cm竈穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竈穴内に構築される。煙道は地山を掘り込む。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約90cmで、燃焼部の最大幅は50cmと推定される。火床面は焚口から奥壁に向かって緩く傾斜して立ち上がり、煙道は約50°の角度で外傾する。凹凸のある掘り方ローム面をローム塊の多い土で埋めて基底面を整え、その上に粘土を混合した土を盛土して本体を構築する。袖端部には煙を直立させて焚口とする。

貯蔵穴 東隅、電右側に掘り込まれる。平面は円形

で、径86×77cm、深さ66cm、底径35cm。底面は浅鉢状。

柱穴 主柱穴は4基(P1～P4)が確認された。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	25×35	64	13×8
P 2	45×38	58	21×13
P 3	27×25	20	7
P 4	66×—	56	25×18
P 5	28×26	22	16×15
P 6	18	18	8

柱間寸法

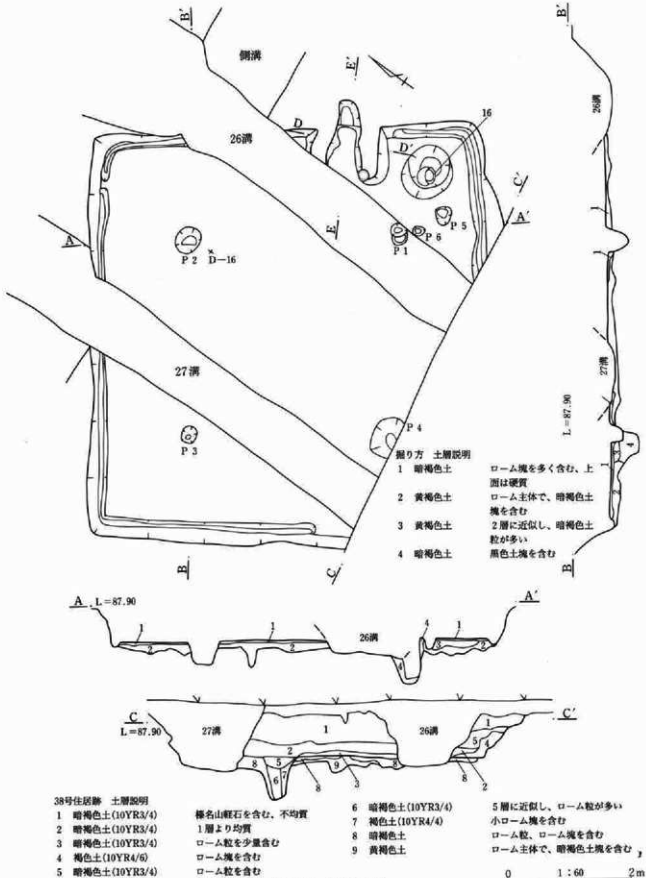
P 1—P 2	3.35m	P 2—P 3	3.10m
P 3—P 4	3.25m	P 1—P 4	3.35m

周溝 検出された範囲については全周し、幅9cm前後、深さ7cm以下でレベルは一定せず凹凸が多い。

掘り方 北西壁際に土坑状にやや深く掘り込む。

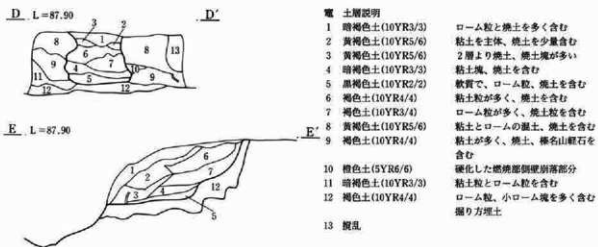
遺構重複関係 18号・26号・27号溝に切られる。

遺物 甕(16)が貯蔵穴に落ち込んだ状態で出土しており、また南東壁際の床面上には甕(20)と甔(23)が潰れた状態で出土した。



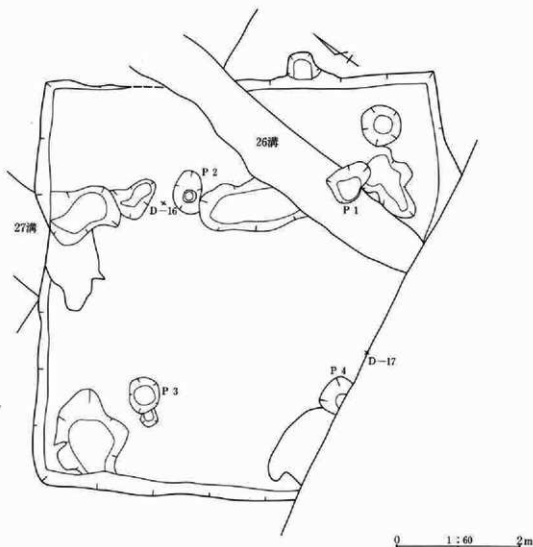
第154図 38号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



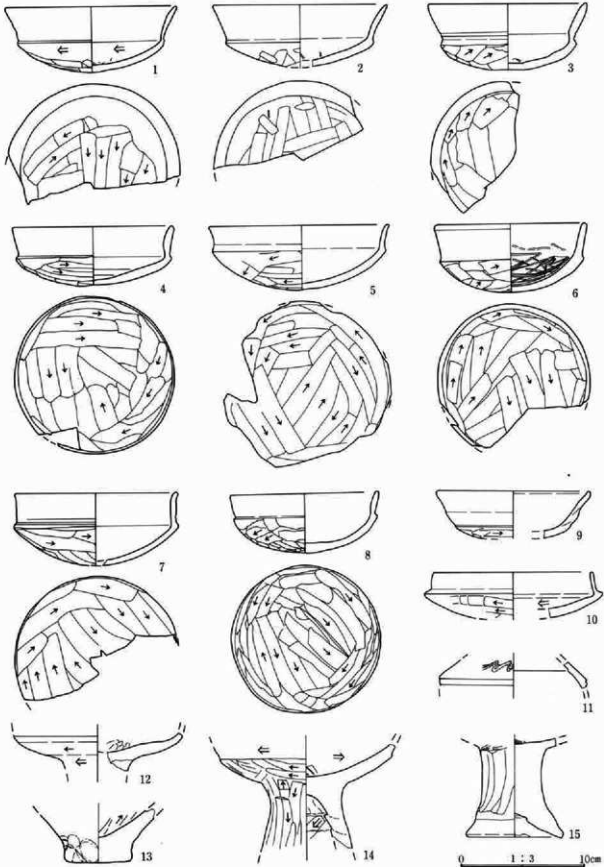
第155図 38号住居跡竈土層断面

0 1:30 1m



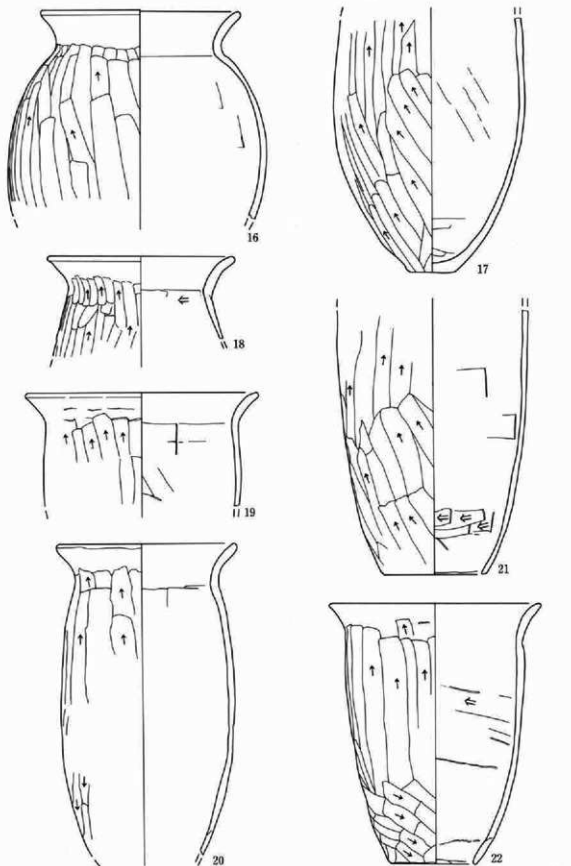
第156図 38号住居跡掘り方

0 1:60 2m

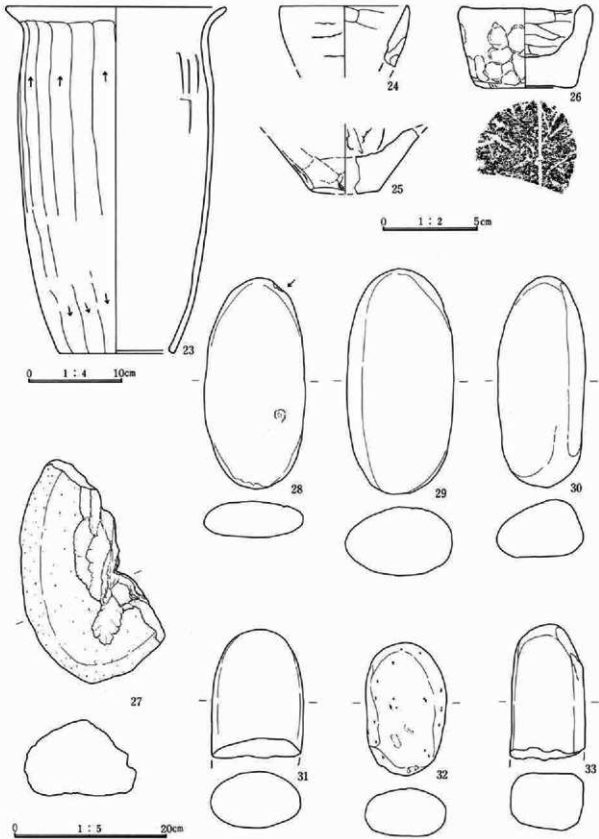


第157図 38号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物

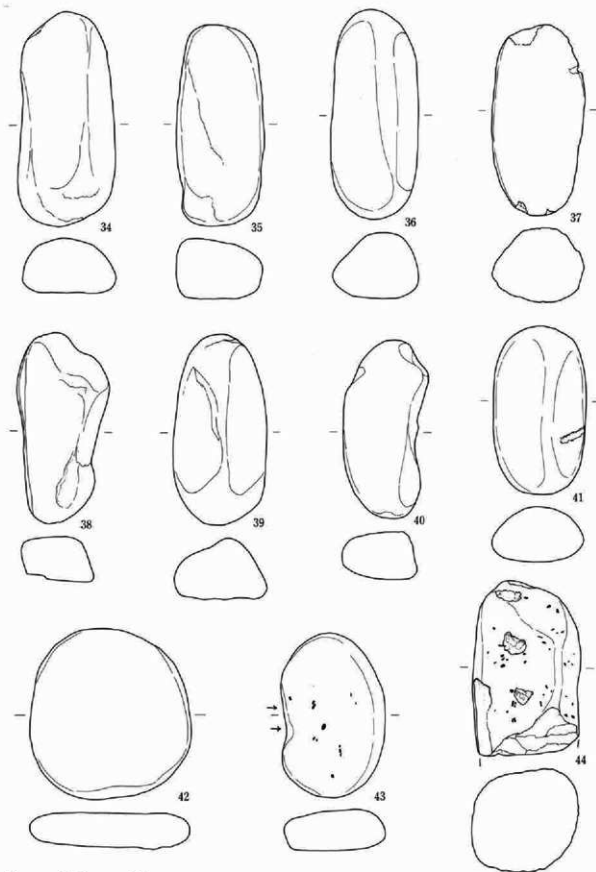


第158図 38号住居跡出土遺物(2)



第159図 38号住居跡出土遺物(3)

0 1:3 10cm



第160図 38号住居跡出土遺物(4)

39号住居跡 (第161図)

位置 1区W・X 4グリッド

規模 東西長3.5m 壁高 24cm

主軸方位 不明

床面 凹凸が激しく、地山ロームの部分が見受けられる。貼床の有無や範圍は不明。

竈 住居埋土に見られる焼土から東壁に設けられたと推定される。

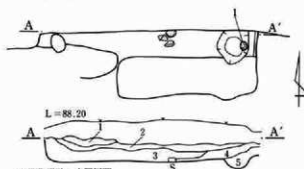
貯蔵穴 南東隅に掘り込まれる。平面は不整形で、径50cm、深さ25cm、底径31×28cm。

柱穴 不明。

周溝 確認できない。

遺構重複関係 167a号土坑に切られる。

遺物 貯蔵穴脇で完形の杯が出土。埋土からは6世紀代に属する土器小片が出土。



39号住居跡 土層説明

- | | | |
|---|---------------|-------------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/4) | 現耕作土 |
| 2 | 暗褐色土(10YR3/4) | 砂質、Aa-Bとローム粒を少量含む |
| 3 | 褐色土(10YR4/4) | 標名山軽石、ローム粒を含む |
| 4 | 暗褐色土(10YR3/4) | 微小のローム粒を含む |
| 5 | 暗褐色土(10YR3/4) | 4層より明るく、焼土を含む |

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第161図 39号住居跡及び出土遺物

40号住居跡 (第162図)

位置 1区X 6~8、Y 6・7グリッド

規模 4.7×4.1m 壁高 36cm

主軸方位 N-59°-E

床面 貼床はほぼ全体に施し、硬質な範圍は竈と貯蔵穴手前から中央部分にかけて見られ、床面レベルもこの部分がやや高い。

竈 北東壁の中央に位置し、159号土坑に切られて、袖部のみ遺存する。袖部は約90cm竈穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竈穴内に構築される。火床面はほぼ平坦。

貯蔵穴 東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は楕円形で、径85×69cm、深さ40cm、底径44×42cm。

柱穴 主柱穴は6基(P1~P6)が確認された。新旧関係は確認出来なかったが、P5とP2、P6とP4はそれぞれ柱建替えに伴う柱穴だろう。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	47×36	75	13×10
P 2	38	45	12
P 3	44×34	37	20
P 4	40	35	22×12
P 5	35	22	18
P 6	46	—	—

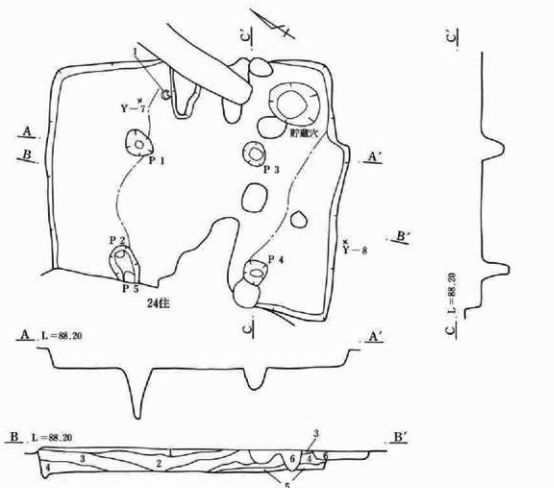
柱間寸法

P 1-P 2	1.80m	P 2-P 4	2.20m
P 3-P 4	1.85m	P 1-P 3	1.90m
P 1-P 5	2.10m	P 3-P 6	2.20m
P 5-P 6	1.90m		

掘り方 全体を平均的に掘り下げ、10~5cmの埋土で貼床を構築する。

遺構重複関係 24号住居跡に切られる。

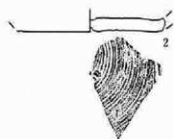
遺物 全体に小破片が多く、6世紀代の杯片(1)は竈左脇の床面から出土している。平安期の須恵器杯(2)は混入品だろう。刀子(3)も埋土出土で帰属は不明である。



40号住居跡 土層説明

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 褐色土(10YR4/6) | やや硬質、ローム粒と礫名山軽石を含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/4) | やや砂質で礫名山軽石を含む |
| 3 褐色土(10YR4/4) | 微小のローム粒を少量含む |
| 4 褐色土(10YR4/6) | ローム粒を含み、筋状 |
| 5 褐色土(7.5YR4/6) | 微小の炭土と炭化物を含む |
| 6 重層する土坑とピット | |

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

0 1:2 5cm

第162図 40号住居跡及び出土遺物

41号住居跡 (第163~166図)

位置 2区B12・13、C12・13グリッド

規模 4.9×4.6m 壁高 46cm

主軸方位 N-82°-E

床面 全面的な貼床で、凹凸が多く、床面レベルは10cmの範囲で一定しない。特に硬質な範囲は竈と貯蔵穴、出入口の想定される南東部分に限られる。

竈 東壁のやや南寄りに位置する。袖部は80cm竪穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竪穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1mで、燃焼部の最大幅は40cmと推定される。焚口は礎を組み合わせて構築し、開口部の規模は幅30cm高さ20cm。火床面は焚口から奥壁へ18cmの比高差で外傾し、煙道は60~70°で外傾する。本体は掘り方を埋めて基底面を整え、粘土とロームの混土で構築する。燃焼部の左側に礎(7)、右側に杯(1)が架けられたまま遺存しており、大小の器種2個架けと考えられる。なお焚口に13cm大の礎が横転しており、支脚と考えられる。

貯蔵穴 南東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は不整形円形で、径65×58cm、深さ90cm、底径40×24cm。

柱穴 主柱穴は4基(P1~P4)、他に性格不明のピット4基(P5~P8)が確認された。P5は

出入口施設に関わる支柱穴、P6~8は重複する遺構の可能性がある。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	36	52	24×20
P 2	40×37	62	25×23
P 3	62×45	66	26×24
P 4	46×44	79	24×18
P 5	44×42	28	22×19
P 6	26×22	12	14×13
P 7	59×35	17	45×23
P 8	50×40	55	22×18

柱間寸法

P1-P2 2.20m P2-P4 2.60m

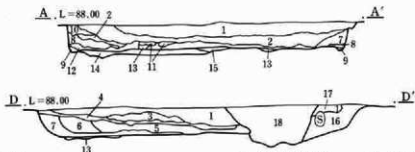
P3-P4 2.30m P1-P3 2.75m

周溝 土層断面で確認され全周すると推定。幅は20cm前後、深さ12cm前後。

掘り方 壁際を深く掘り込み、中央部は浅い。底面は凹凸が激しく、30cmほどの埋土で貼床を構築。

遺構重複関係 21号掘立柱建物跡、27号溝が切る。

遺物 床面全体から、崩落した上層材と思われる炭化物が出土。そのうち柱穴P3から柱の一部が直立して検出された。竈内に遺された土器以外は、ほとんど埋土出土である。



41号住居跡 土層説明

1 暗褐色土(10YR3/4)

軟質、礫山軽石、小ローム塊、焼土を含む

2 褐色土(10YR4/4)

ローム塊を多く含む

3 褐色土(10YR4/4)

ローム粒とローム塊を多く含む

4 褐色土(10YR4/4)

炭化物を多く含む

5 褐色土(10YR4/4)

小ローム塊を含む、全体に縦紋状

6 褐色土(10YR4/4)

5層に近似するが、ローム塊多い

7 暗褐色土(10YR3/4)

1層に近似し、少量の焼土、炭化物を含む

8 暗褐色土(10YR3/4)

焼土化したロームを多く含む

9 褐色土(10YR4/4)

10 褐色土(10YR4/4)

11 暗褐色土(10YR3/3)

12 黒褐色土(10YR3/2)

13 暗褐色土(10YR3/4)

14 暗褐色土(10YR3/4)

15 黄褐色土(10YR5/8)

16 褐色土(10YR4/4)

17 赤褐色土(5YR4/8)

18 27号埋土

ローム粒を多く含む、周溝埋土

ローム粒多く、少量の焼土を含む

焼土、ローム粒を含む

ローム粒を少量含む

軟質で、炭化物と焼土を多く含む

軟質で、ローム粒を含む

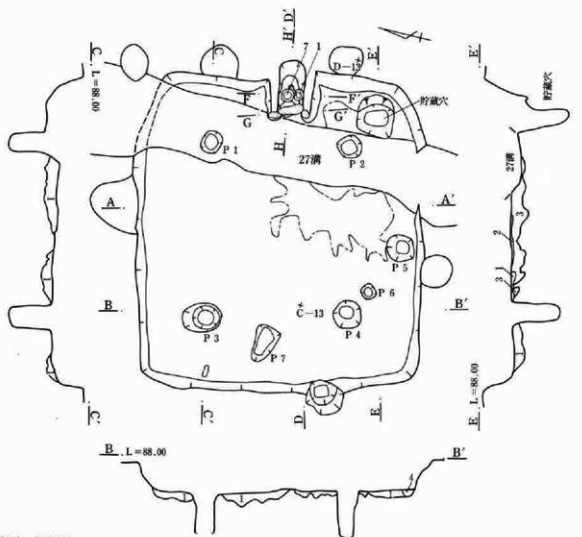
小ローム塊を主体とし、硬質

小ローム塊を含む、上面は硬質

竈崩落土、焼土が多い

第163図 41号住居跡土層断面

0 1:60 2m



掘り方 土層説明

- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|----------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊を多く含む | 3 褐色土(10YR4/4) | ローム粒、ローム塊が多い |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ローム塊主体、踏固めによる互層 | 4 褐色土(10YR4/4) | ローム粒を多く含む、周溝埋土 |

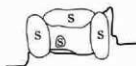
0 1:60 2m

F, L=88.00

F'

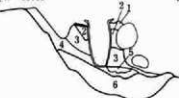
G, L=88.00

G'



H, L=88.00

H'

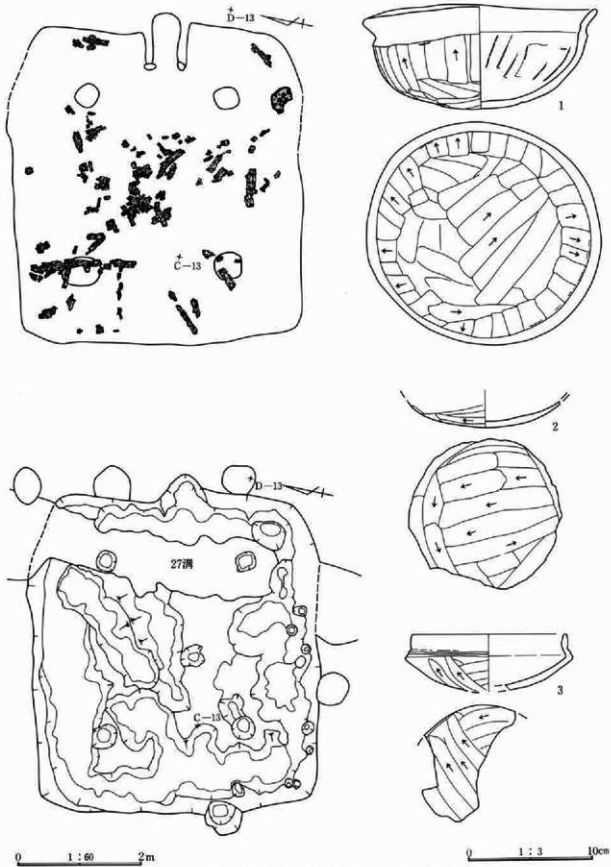


掘り方 土層説明

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 褐色土 | 焼土と灰を含む |
| 2 褐色土 | 焼土を多く含む |
| 3 赤褐色土 | 天井部、内壁の崩落土 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒、粘土、炭化物、灰、焼土の混土 |
| 5 赤褐色土(2.5YR4/6) | 焼土塊 |
| 6 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒、ローム塊多い掘り方埋土 |
| 7 黄褐色土(10YR5/8) | 粘土とロームの混土 |
| 8 7層の焼土化した部分 | |
| 9 焼土化した燃焼部内壁部分 | |

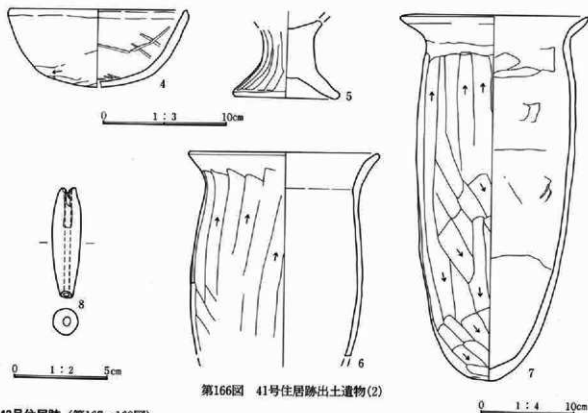
第164図 41号住居跡

0 1:30 1m



第165図 41号住居跡炭化材出土状態及び掘り方及び出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第166図 41号住居跡出土遺物(2)

42号住居跡 (第167・168図)

位置 2区A12・13、B12グリッド

規模 3.3×3.1m

壁高 57cm 主軸方位 N-69°-E

床面 全面に貼床を施し、床面レベルはほぼ水平で平坦。

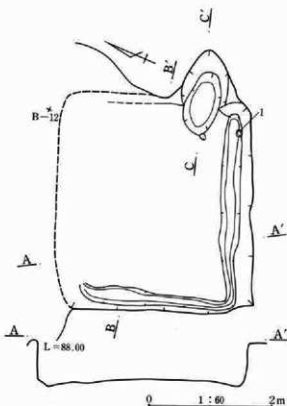
竈 東壁の南端に位置し、燃焼部底面のみ遺存。火床面の範囲から、袖部は50cm前後竪穴内に張り出しと推定されるが、不明瞭で検出できなかった。燃焼部を含む本体は壁外に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1mで、燃焼部の最大幅は50cm前後と推定される。火床面はやや中央のくぼむ浅い皿状。埋没土から本体は褐色土とローム、粘土の混土で構築したと考えられる。

周溝 全周すると推定される。幅30~10cm、深さ10cm以下。

掘り方 壁に沿ってやや深く掘り込み、深い部分では20cmに及ぶ埋土で貼床とする。

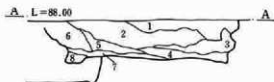
遺構重複関係 27号住居跡を切る。

遺物 南壁際から完形の杯(4)が出土。埋土からの出土が多く、8世紀前半代を主とする。



第167図 42号住居跡

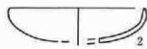
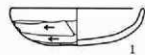
3 古墳時代以降の遺構と遺物



42号住居跡 土層説明

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 赤名山軽石、As-Cを多く含む |
| 2 褐色土(10YR4/4) | 1層に近似し、焼土とローム粒を多く含む |
| 3 黄褐色土(10YR5/6) | ローム粒、ローム塊を主体とする |
| 4 褐色土(10YR4/4) | 砂質で、ローム塊を少量含む |
| 5 黄褐色土(10YR5/4) | ローム粒、粘土、焼土を含む |
| 6 褐色土(10YR4/4) | 2層に近似し、焼土を不均一に含む |
| 7 黄褐色土(10YR5/6) | ローム粒、ローム塊を含む |
| 8 黄褐色土(10YR5/6) | ローム粒が主体、周溝埋土 |

0 1:60 2m



0 1:3 10cm



土層説明

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 粘土粒、ローム粒を多く含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/4) | 1層に近似し、軟質で、下位は焼土化する |
| 3 暗赤褐色土(5YR3/3) | 焼土塊と灰を含む |
| 4 暗赤褐色土(5YR3/4) | 焼土塊を主体とし、粘土粒を含む |
| 5 暗褐色土(7.5YR3/4) | 砂質で、焼土粒と灰を含む |
| 6 黒色土(10YR2/1) | 灰を主体とし、焼土を含む |
| 7 赤褐色土(5YR4/6) | 焼土粒を全体に含む |

0 1:30 1m



0 1:2 5cm

第168図 42号住居跡土層断面及び出土遺物

43号住居跡 (第169図)

位置 1区X10、Y9、10グリッド

規模 4.0×3.9m

壁高 48cm 主軸方位 N-32°-W

床面 全体に貼床を施し、床面レベルはほぼ水平で全体に平坦。全体に硬質。

竈 北西壁中央に位置し、天井部は崩落、煙道は検出されない。袖部は70cm竪穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竪穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1mで、燃焼部の最大幅は50cm前後と推定される。火床面は浅い皿状にくぼむ。煙道は燃焼部奥壁を15cmほど立ち上がった位置から壁を掘り込んで段状部を作り、そこからほぼ垂直に立ち上がる。本体は粘土を主とした土で構築する。

貯蔵穴 北側の竈右側で検出されたピットP5とP6が貯蔵穴の可能性あり。

柱穴 主柱穴は4基(P1~P4)が確認された。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P 1	58×54	57	14
P 2	38×33	11	12×10
P 3	69×58	34	31×29
P 4	93×60	73	55×44
P 5	37×32	38	16
P 6	36×31	41	14×13
P 7	57×38	18	10×9
P 8	61×45	17	30
P 9	62×49	11	43×37
P 10	27	15	10
P 11	48	35	30

柱間寸法

P 1-P 2	2.35m	P 2-P 4	2.40m
P 3-P 4	2.10m	P 1-P 3	2.15m

第3章 検出された遺構と遺物

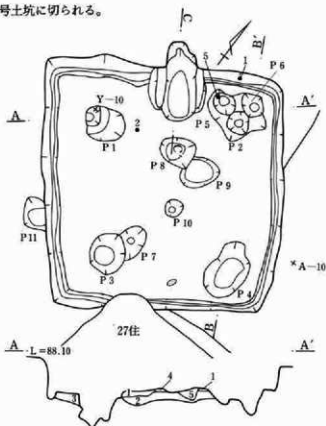
周溝 全周し、幅15～5cm、深さ20cm以下。

掘り方 壁際をやや深く掘り込み、ローム塊の多い土で最深25cmほどの埋土を行う。

埋土の状況 下層に自然堆積、中位以上はロームを主体とした人為的埋土。

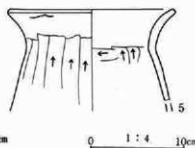
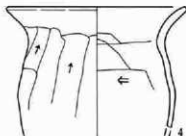
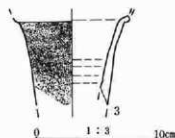
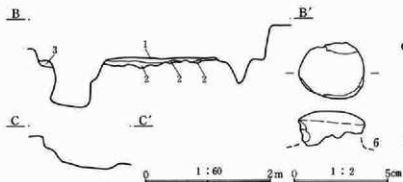
遺構重複関係 27号住居跡を切り、44号住居跡・144号土坑に切られる。

遺物 貯蔵穴付近の埋土下層からの出土が多い。7世紀後半代が多い。



43号住居跡 掘り方土層説明

- 1 黄褐色土(10YR5/8) ローム塊を主体とし、踏み固められている
- 2 褐色土(10YR4/6) 軟質で、ローム粒を含み、環状状
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 軟質で、小ローム塊を含む
- 4 褐色土(10YR4/6) 微小なローム粒を含む
- 5 暗褐色土(10YR3/4) 硬質で粘土粒が多く塵土と炭化物粒を含む



第169図 43号住居跡及び出土遺物

44号住居跡 (第170~174図)

位置 1区Y 8~10、2区A 8~10グリッド

規模 7.4×4.8m 壁高 36cm

主軸方位 N-90°-E

床面 壁際を部分的に貼床、大部分は地山ロームを床面とする。床面レベルは中央部がやや高い。硬さは全体に均等で、北部45号住居跡と重複する部分のみやや軟質。

竈 東壁の南寄りに位置し、焚口と燃焼部過半が遺存。袖部は約100cm竪穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竪穴から壁外にかけて構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約1.8mで、燃焼部の最大幅は70cm前後と推定される。火床面は皿状にくぼみ、奥壁から煙道へは40~45°の傾斜で立ち上がる。本体は粘土混入土で構築。

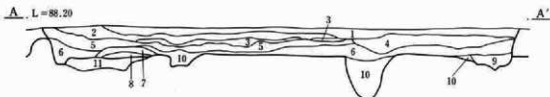
貯蔵穴 南東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は隅丸長方形で、118×57cm、深さ22cm、底78×46cm。

柱穴 主柱穴は南北主軸上に2基(P1・P2)が確認された。これを棟持柱と推定すれば、南北棟の切妻型屋根になるだろう。P3とP6それぞれ南北壁際の相対する位置、P5は西壁中央に位置しており、上屋構造に関連するものだろう。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P1 81×73 77 28×23

P2 105×79 76 35×26



44号住居跡 土層説明

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | やや砂質で、Aa-Bを少量含む |
| 2 褐色土(10YR4/6) | やや粘性あり、焼土、粘土、炭化物の粒子含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/3) | 灰と焼土を含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土、炭化物、ローム粒を少量含む |
| 5 褐色土(10YR4/6) | 鎌名山軽石、小ローム塊、炭化物を含む |
| 6 暗褐色土(10YR3/4) | 5層に近似するが、やや軟質 |
| 7 褐色土(10YR4/6) | やや粘性帯び、焼土、炭化物、粘土粒を含む |
| 8 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土と炭化物含み、踏固めで互層状、硬質 |
| 9 褐色土(10YR4/4) | やや硬質で、小ローム塊を含む |
| 10 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質で、ローム粒を含む |
| 11 黄褐色土(10YR6/8) | ローム粒、ローム塊を主体とする掘り方埋土 |

第170図 44号住居跡土層断面

0 1:60 2m

P 3	29×27	37	12×9
P 4	71×60	85	44×43
P 5	61×—	41	16×14
P 6	44×40	19	19×16
P 7	48×36	14	34×20

柱間寸法

P1-P2 3.15m

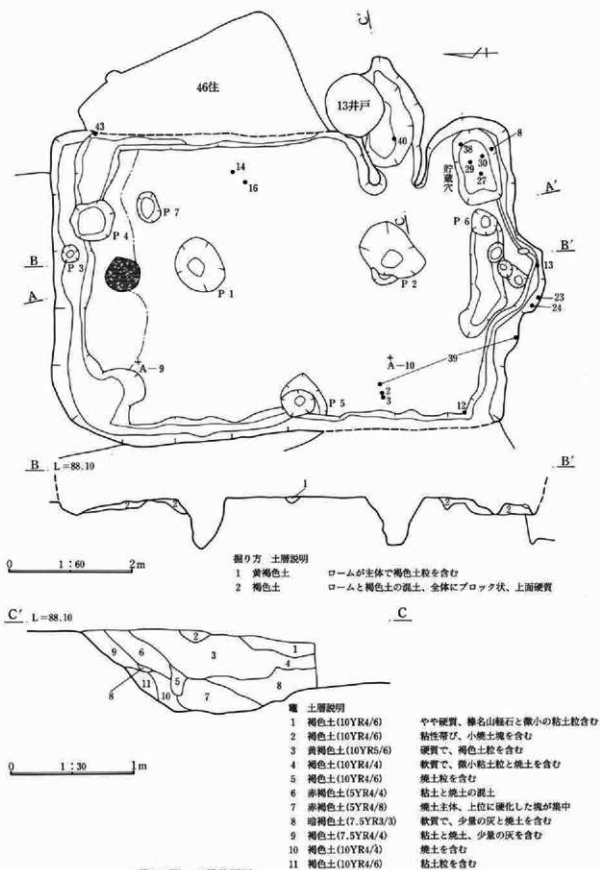
周溝 竈付近を除いて全周し、幅20×40cm、深さ20cm以下。北壁際は掘り方の可能性あり。

張出し施設 南辺中央で、奥行き70cm、幅100~150cmの台形状に張り出す。レベルは床面と同じで、やや軟質。周溝が巡ることから、当初から設けられたらしい。ピットP6から西にのびる長さ1.6m、幅50cm、深さ23cmの溝は、張出し施設と関連すると思われるが、性格は不明。建物の方向と竈位置関係から、出入り口と考えたい。

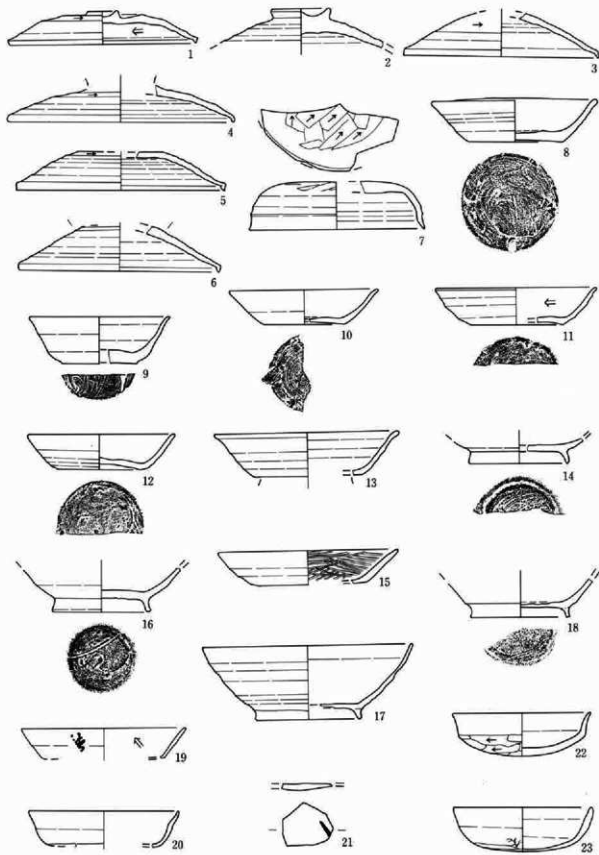
掘り方 明確な掘り方は認められなかった。

遺構重複関係 43号・45号・46号住居跡を切り、13号井戸に切られる。

遺物 南東の貯蔵穴付近を中心に、土師器杯や須恵器蓋が集中して出土。7や22のような混入品も見られるが、概ね9世紀代を主とする。なお北壁寄り中央付近床面上から直径約50cmの粘土塊が押し潰された様態で検出された。

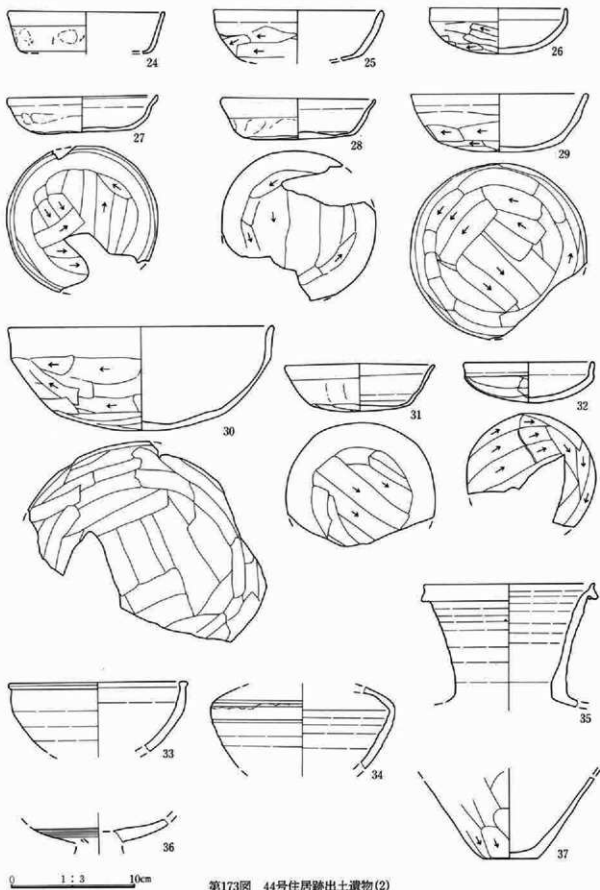


第171図 44号住居跡

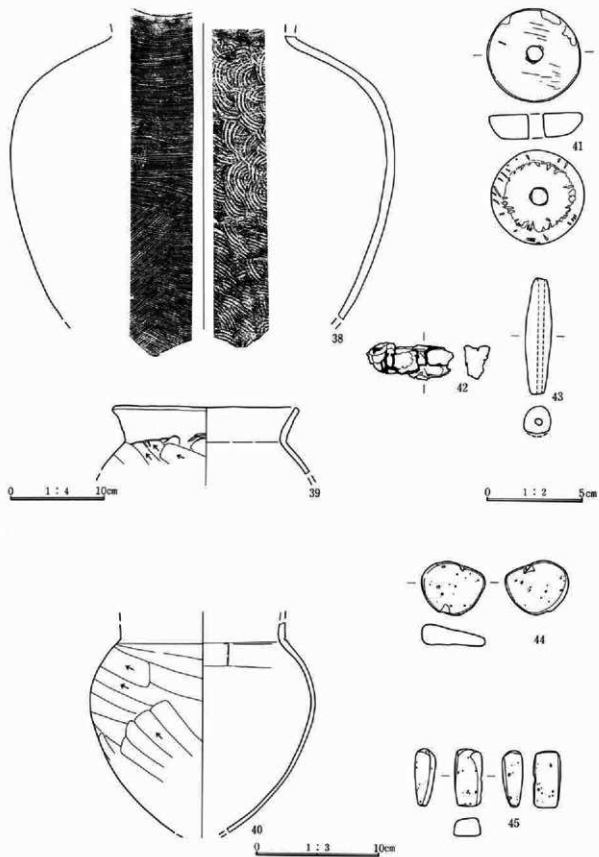


第172図 44号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第173図 44号住居跡出土遺物(2)



第174図 44号住居跡出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物

45号住居跡 (第175・176図)

位置 1区Y 8・9、2区A 7～9グリッド

規模 4.4×4.3m 壁高 48cm

主軸方位 N-80°-E

床面 全体に地山ロームを床面とする。床面レベルはほぼ水平に近く整っている。全体的に硬質で、硬軟の明確な境界は認められない。

竈 東壁の南寄りに位置し、焚口～燃焼部を検出。袖部は70cm竪穴内に張り出し、燃焼部は竪穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは80cm前後で、燃焼部の最大幅は30cm前後と推定される。火床面は床面とほぼ同レベルで、主に灰が堆積し、その上面が焼成硬化している。燃焼部奥壁は60°で外傾する。本体は地山掘り残しではなく、粘土混入土を積んで構築する。なお、左袖端部には袖石を抜き取った痕跡を残す。

貯蔵穴 南東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は不整形形で、径67cm、深さ86cm、底径40cm。底面はほ

ぼ平坦。

柱穴 主柱穴は4基(P1～P4)が確認された。

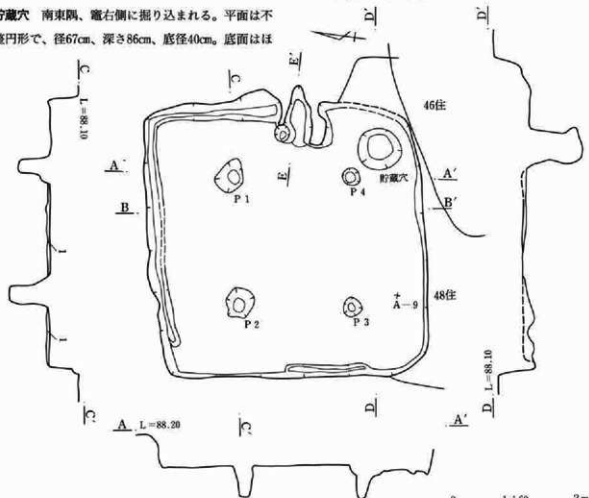
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	54×41	47	23×17
P 2	46×45	65	21×18
P 3	30×29	24	13×11
P 4	28×26	36	20×14

周溝 北壁、東壁、西壁の一部に沿って検出。南壁部分は他遺構重複のため不明確。幅17cm前後、深さ4cm以下。

掘り方 ほぼ平坦に掘り、整床のための埋土はほとんど見られない。

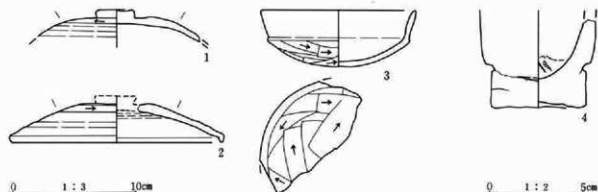
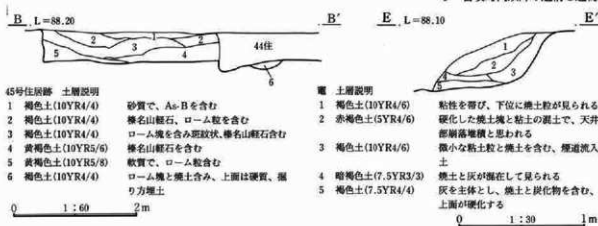
遺構重複関係 44号住居跡に切られる。

遺物 主に埋土から出土。6世紀代の杯(3)が帰属すると思われるが、1・2は44号住からの混入品だろう。他に鉄滓1点。



第175図 45号住居跡

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第176図 45号住居跡土層断面及び出土遺物

46号住居跡 (第177・178図)

位置 2区A8・9、B8・9グリッド

規模 3.6×3.4m

壁高 52cm 主軸方位 N-60°-E

床面 ほぼ全面に貼床、床面レベルは中央部が高く周辺部はくぼむ。硬質な範囲は北側に偏る。

電・貯蔵穴・柱穴 検出されず。

掘り方 壁際に幅1.4m、深さ30cmほどの帯状に深く掘り込む、埋土はローム主体。

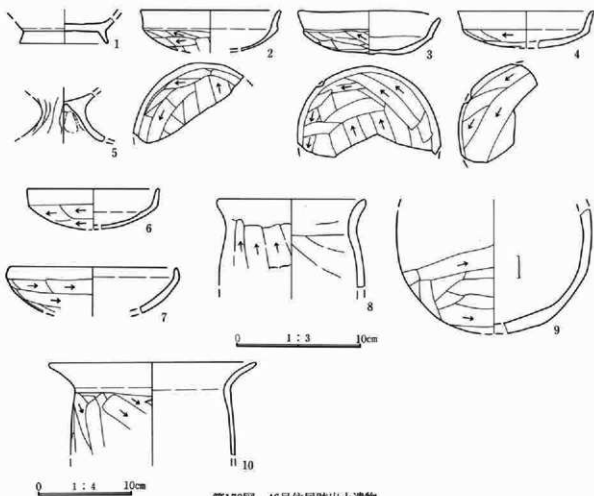
遺構重複関係 44号住居跡に切られる。

遺物 大部分は破片で、主に埋土から出土。



第177図 46号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第178図 46号住居跡出土遺物

47号住居跡 (第179・180図)

位置 2区D12・13、E12・13グリッド

規模 3.6×3.1m

壁高 39cm 主軸方位 N-80°-E

床面 全体に貼床を施し、ほぼ水平で平坦。壁際と北東部分を除いて硬質。

竈 東壁の南寄りに位置し、焚口～煙道下部が遺存。袖部は50cm竪穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竪穴内から壁外にかけて構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約70cmで、燃焼部の最大幅は40cm前後と推定される。火床面はわずかにくぼんだ皿状で、奥壁は約60°で外傾する。地山を皿状に掘りくぼめて埋填し基底面を整えた上に本体構築している。燃焼部中央には焼成硬化した10cm大の粘土塊を埋めて支脚としている。

貯蔵穴 南東隅、竈右側に掘り込まれる。2段の掘り込みで、平面は不整形円形。外郭は径67×50cm、深さ15～20cmで蓋受けのくぼみと考えられる。本体は径38×30cm、深さ30cm、底径19cm。

ビット 南壁から約50cm離れた中央部で1基検出された。これと南壁の間は床面が軟質なことから、出入りに伴う梯子状施設の支柱穴の可能性ある。

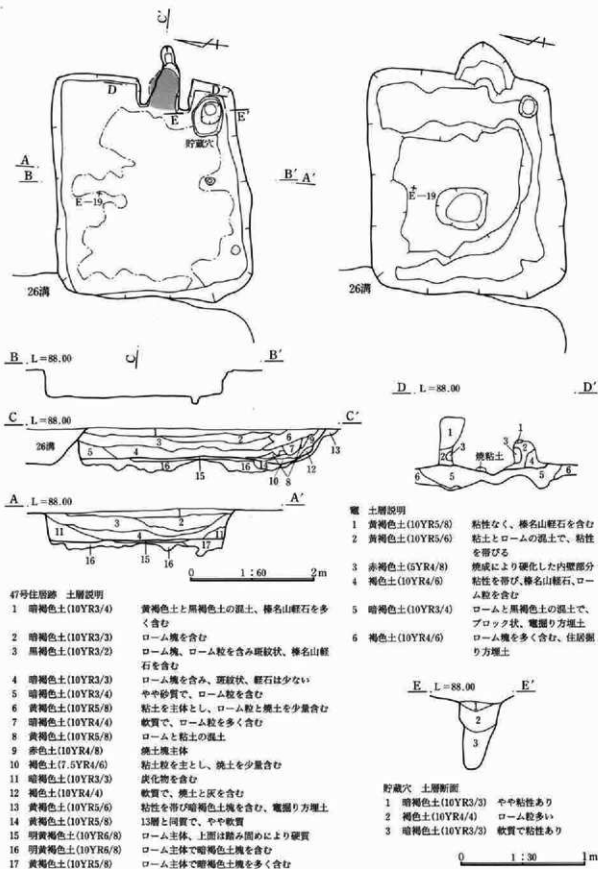
周溝 なし。

床下ビット 中央部のやや西寄りで見出。隅丸方形で、径80×65cm、深さは10cmと浅くローム層中にとまる。

掘り方 4周の壁に沿って深く掘り込み、最深部では30cmの埋土を行う。

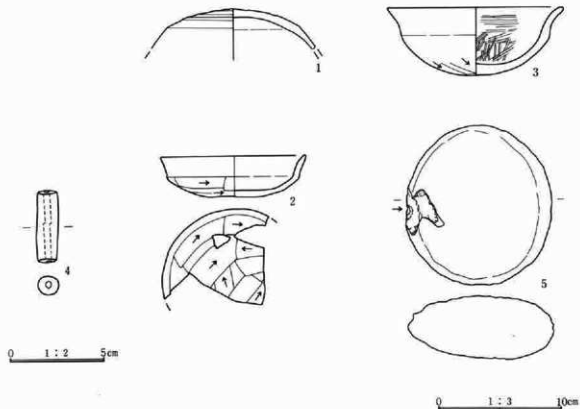
遺構重複関係 26号溝に切られる。

遺物 埋土から土器小破片と管玉1点が出土。



第179図 47号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第180図 47号住居跡出土遺物

48号住居跡 (第181～183図)

位置 2区D11・12、E11・12グリッド

規模 4.0×3.9m 壁高 36cm

主軸方位 N-11°-W

床面 壁際は掘り方がやや深いために貼床を行うが、深さは不均一。

竈 北壁の東寄りに位置し、袖部は50cm竪穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竪穴内から壁外にかけて構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約90cmで、燃焼部の幅は30cmと推定される。火床面は掘り方を埋めて整えてあり、緩い傾斜で煙道へと続く。本体は埋土で整えた基底面の上に粘土、ロームの順で積み上げて構築する。

貯蔵穴 北東隅、竈右側に掘り込まれる。平面は隅丸方形で、規模は50×44cm、深さ38cm、底28×15cm。

柱穴 支柱穴は4基(P1～P4)が確認された。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	34×24	72	11×10
P 2	28×23	66	9×8
P 3	37×36	61	20×12
P 4	34×33	(50)	22×16

柱間寸法

P 1-P 2	2.50m	P 2-P 3	2.60m
P 3-P 4	2.25m	P 1-P 4	2.45m

その他 東壁際中央部で深さ7cmの不定形の掘り込みが確認された。出入り口施設の掘り方か。

掘り方 壁際はやや深く掘る。

遺構重複関係 竈袖端部の様相と堆積土層から55号住居跡に切られているように推定される。49号住居跡・189号土坑に切られる。

遺物 49号住居跡に切られるため、帰属する遺物は少ない。1の杯は貯蔵穴内からの出土である。

49号住居跡 (第181・182・184図)

位置 2区C11・12、D11・12グリッド

規模 3.8×3.2m 壁高 48cm

主軸方位 N-11°-W

床面 地山ロームを床とし、くぼんだ部分のみ埋土して整える。小さな凹凸が目立つがレベルはほぼ

水平。全体的に均質で、硬軟の境界は認められない

竈 北壁のやや東寄りで検出されたピットP1は浅い皿状で、燃焼部火床面と推定される。本体部分は26号溝に切られて遺存せず。

P1 上端径82×74cm 深さ15cm 下端径65×53cm

ピット 主柱穴と思われるものは検出されない。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P2	39×15	8	28×15
P3	21×20	5	11×10

P2 39×15 8 28×15

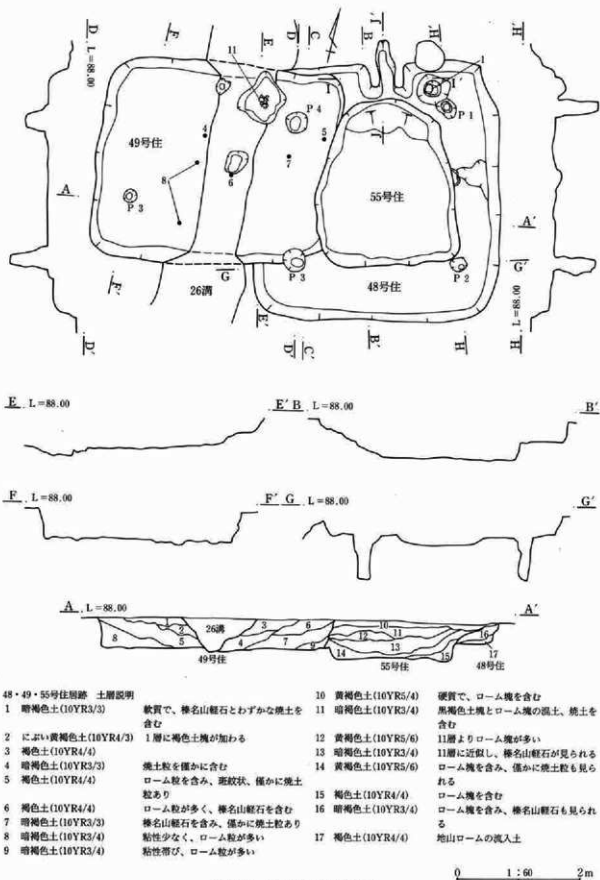
P3 21×20 5 11×10

周溝 なし。

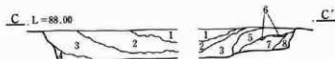
掘り方 床下中央付近から円みの強い「鍵の手」状のピットが検出された。規模は94×96cm、深さは床面から10cm、確認面から60cm前後と推定される。これは、本住居跡の床下土坑ではなく重複する22号掘立柱建物跡の隅柱穴の可能性が高い。

遺構重複関係 48号・55号住居跡を切り26号溝に切られる。22号掘立柱建物跡より新しいか。

遺物 床面および埋土下層から遺存状況の良い好な杯が出土する。8世紀前半代が主体と思われる。



第181図 48・49・55号住居跡



C-C' 土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4)
- 2 暗褐色土(10YR3/3)
- 3 暗褐色土(10YR3/4)
- 4 褐色土(10YR4/4)
- 5 褐色土(10YR4/4)
- 6 黒褐色土(10YR3/2)
- 7 褐色土(10YR4/4)
- 8 にぶい黄褐色土(10YR4/3)

ローム粒を含み、斑紋状、僅かに焼土粒あり
 棒名山軽石を含み、僅かに焼土粒あり
 粘性帯び、ローム粒が多い
 軟質、ローム塊と焼土を含む
 砂質、ローム塊、黒色土塊、棒名山軽石を含む

5層に近似

軟質、地山ロームの混入土

0 1:60 2m

I, L=88.00



I'

J, L=88.00



J'

電 土層説明

- 1 黄褐色土(10YR3/8)
- 2 黄褐色土(10YR5/6)
- 3 褐色土(10YR4/4)
- 4 黄褐色土(10YR5/6)
- 5 黄褐色土(10YR5/8)
- 6 黒褐色土(10YR3/2)
- 7 黄褐色土(10YR5/8)
- 8 明黄褐色土(10YR6/8)

ローム粒主体で、粘土塊含む

1層に焼土塊が加わる

焼土塊と灰白色粘土塊を含む

やや硬質で、ローム主体

硬質で、灰白色粘土塊を含む

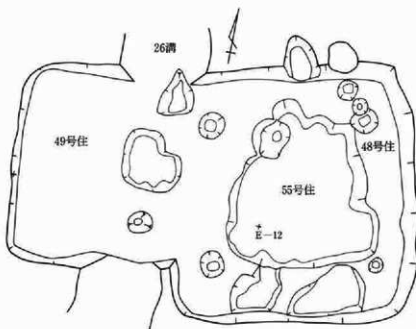
軟質で、灰、炭化物、焼土を含む、燃焼部埋

積土

黒褐色土塊を含む

7層に近似し、焼土を含む

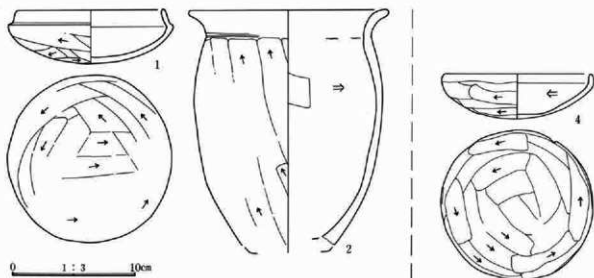
0 1:30 1m



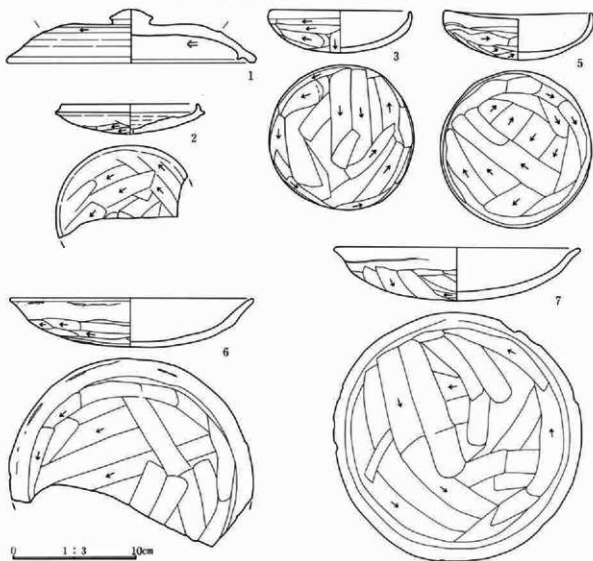
0 1:60 2m

第182図 48・49・55号住居跡電断面及び掘り方

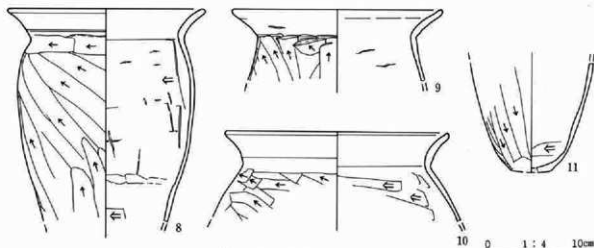
第3章 検出された遺構と遺物



第183図 48号住居跡出土遺物



第184図 49号住居跡出土遺物(1)



第185図 49号住居跡出土遺物(2)

50号住居跡 (第187~193図)

位置 2区D-14・15、E-14・15グリッド

規模 6.2~4.9m 壁高 54cm

主軸方位 N-79°-E

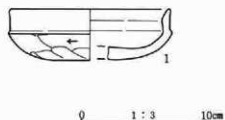
床面 掘り方を水平に整える程度の埋土で貼床を構築する。床面レベルはほぼ水平で、電焚口付近と南壁寄り中央部分が特に硬質。

電 位置は北壁中央、袖部は50cm堅穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は堅穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約0.7mで、燃焼部の最大幅は60cmと推定される。火床面は浅い皿状に掘りくぼめた掘り方に、10cm前後の埋土をして整える。奥壁は約60°の傾斜で立ち上がり、40cmほどの高さから傾斜角を減じて煙道となる。本体はローム塊主体の埋土で基底部を整え、その上に粘土とロームの混土で構築する。焚口には補強材と思われる長さ35cmの礎が出土する。

貯蔵穴 なし。

柱 穴 主柱穴は4基(P1~P4)が確認された。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	40×34	44	15×12
P 2	38×32	70	16×14
P 3	41×37	56	18×12
P 4	37×35	53	17×16
P 5	28×24	40	16
P 6	17×13	22	6×4



第186図 55号住居跡出土遺物

P 7 15×11 16 6×5

P 8 53×40 55 23×21

柱間寸法

P 1-P 2 2.9m P 2-P 4 2.7m

P 3-P 4 3.2m P 1-P 3 2.7m

床下土坑 住居中央に1基。不整形形で、規模は120×110cm、深さ60cm。内部はローム塊で充填されており、上面は硬質。

周溝 なし。

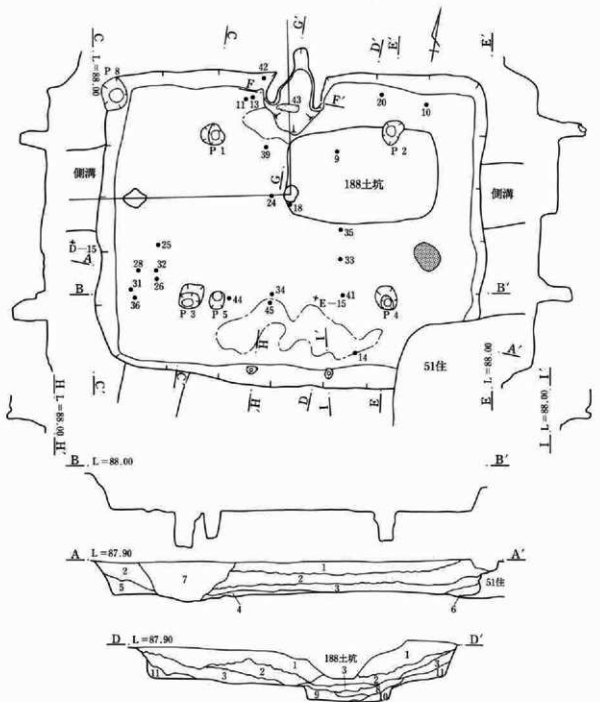
掘り方 4基の主柱穴に囲まれた部分をやや深く掘りこみ、またP1とP3を結ぶ部分を15cm前後の深さで溝状に掘る。

遺構重複関係 51号住居跡を切り、21号掘立柱建物跡、17号溝、26号溝に切られ、上面に3号道路が構築される。188号土坑は土層堆積状況から、住居跡廃棄時に掘り込まれた可能性が高い。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 7世紀後半代の土器が主体。重複する51号住居跡の土器も混入する。床面には部分的に擦った

痕跡の見られる跡が散在する。



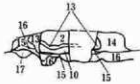
50号住居跡 土層説明

- | | | | |
|-----------------|------------------|------------------|----------------|
| 1 黄褐色土(10YR5/8) | 軽石と焼土を少量含む | 6 褐色土(10YR4/6) | 軟質で、ローム塊を含む |
| 2 褐色土(10YR4/4) | 斑紋が多く、ブロック状 | 7 26号溝埋土 | |
| 3 暗褐色土(10YR3/4) | 2層に近いがやや粗く、焼土を含む | 8 51号住居跡埋土 | |
| 4 褐色土(10YR4/4) | ローム塊を含み、焼土も見られる | 9 黒褐色土(10YR2/3) | ローム塊、ローム粒を多く含む |
| 5 褐色土(10YR4/4) | やや硬質で、焼土を少量含む | 10 暗褐色土(10YR3/4) | ローム塊と炭化物を含む |
| | | 11 褐色土(10YR4/4) | ローム塊を多く含む |

第187図 50号住居跡

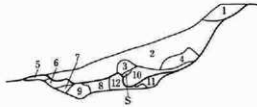
0 1:60 2m

F, L=88.00



F'

G, L=88.00



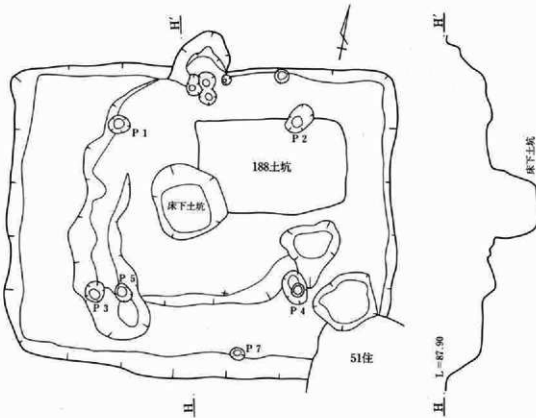
G'

■ 土層説明

1 暗褐色土(10YR3/4)	褐色土塊を含む	9 暗褐色土(10YR3/3)	焼土塊と炭化物を含む
2 褐色土(10YR4/4)	焼土塊、焼土粒を含む	10 暗褐色土(10YR3/4)	焼土と炭化物を多く含む
3 褐色土(10YR4/4)	焼土粒を少量含む	11 褐色土(10YR4/4)	ローム塊を含む
4 暗褐色土(10YR3/4)	焼土塊、焼土粒を多く含む	12 黄褐色土(10YR5/8)	ローム粒とローム塊が主体
5 黄褐色土(10YR5/8)	ローム塊と暗褐色土塊の混土	13 黄褐色土(10YR5/8)	焼土塊と粘土塊の混土、燃焼部内壁
6 褐色土(10YR4/4)	ローム塊と焼土を含む	14 明黄褐色土(10YR6/6)	粘土主体で焼土とローム粒を含む
7 暗褐色土(10YR3/3)	ローム塊と焼土を含む	15 褐色土(10YR4/4)	焼土塊、灰、ローム塊を含む
8 褐色土(10YR4/4)	ローム塊と暗褐色土塊の混土	16 褐色土(10YR4/4)	ローム塊が主体で、焼土を少量含む
		17 褐色土(10YR4/4)	ローム粒主体

第188図 50号住居跡土層断面

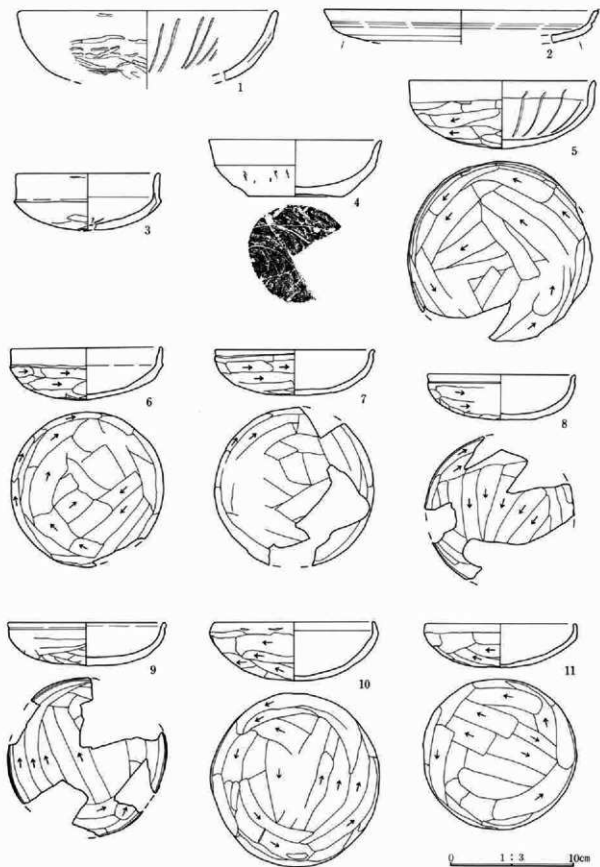
0 1:30]m



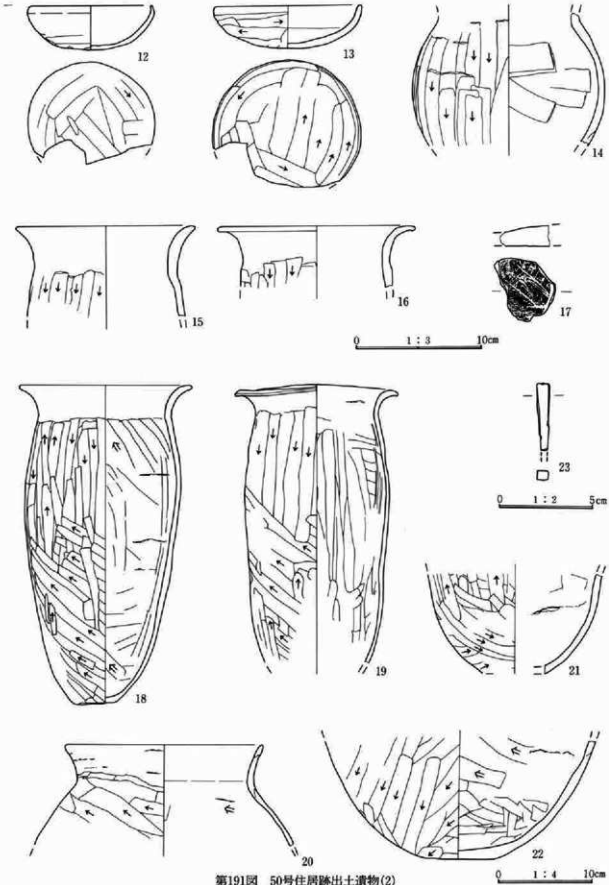
第189図 50号住居跡掘り方

0 1:60]m

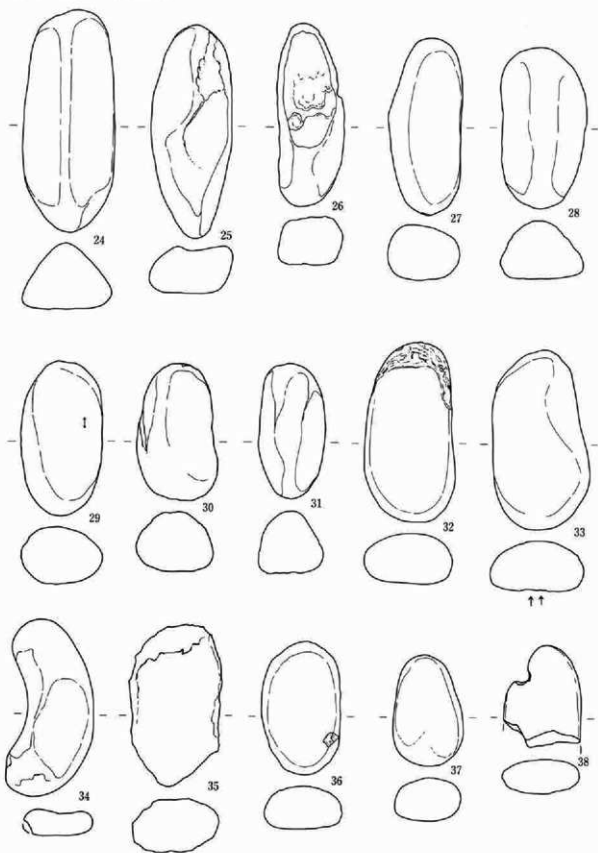
第3章 検出された遺構と遺物



第190図 50号住居跡出土遺物(1)

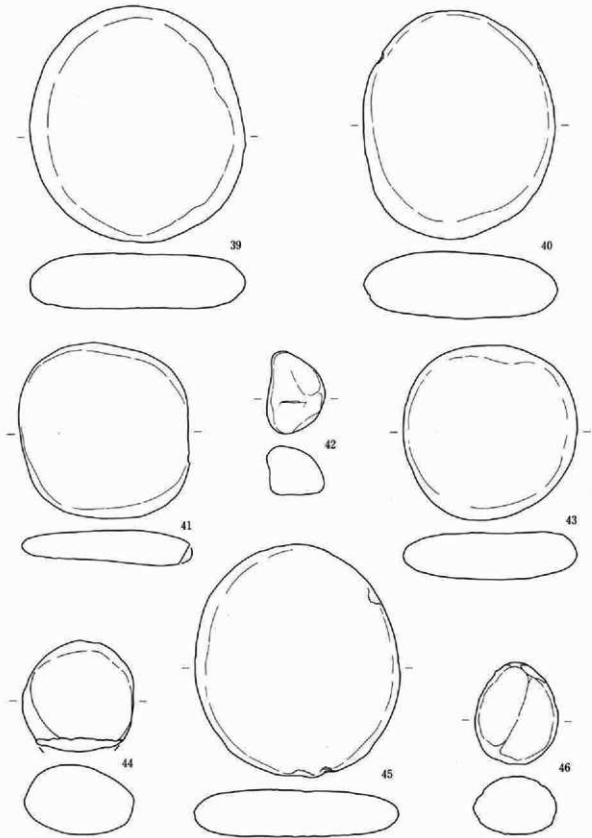


第191図 50号住居跡出土物(2)



第192図 50号住居跡出土遺物(3)

0 1:3 10cm



第193図 50号住居跡出土遺物(4)

0 1 : 3 10cm

第3章 検出された遺構と遺物

51号住居跡 (第194～205図)

位置 2区E14～16、G14～16グリッド

規模 7.2×7.0m 壁高 52cm

主軸方位 N-77°-E

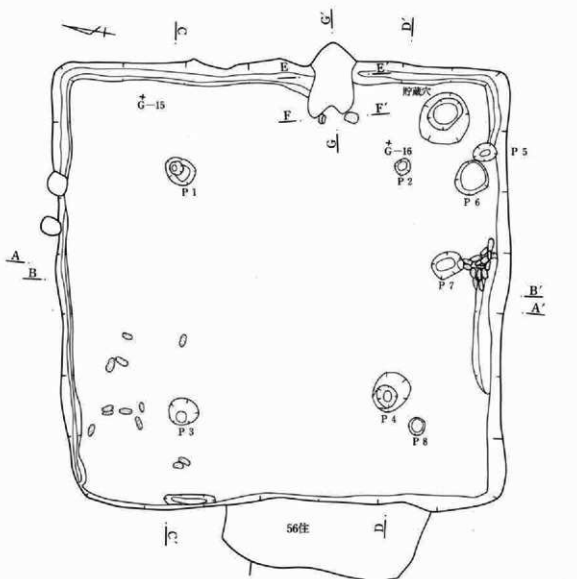
床面 地山のロームをそのまま床とし、壁際のみ埋土による部分的な貼床。床面レベルはほぼ水平で凹凸はほとんどない。

竈 東壁のやや南寄りに位置、袖部は80cm竈穴内に張り出し、燃焼部を含む本体は竈穴内に構築される。焚口から燃焼部奥壁までの長さは約0.9mで、燃焼部の最大幅は80cmと推定される。焚口の両側には35cm

大の礫を直立させて補強する。燃焼部は地山ロームの上に炭化物を含む薄い黒褐色土層を挟み、ローム主体、粘土主体の土を順に積み上げて構築する。火床面中央には25cm大の礫を直立させて支脚とする。燃焼部には4個体の甕が出土しており、そのうち大型と小型の2個体がそれぞれ右と左に寄って直立した状態で出土したことから、左右2個架けだった可能性がある。

貯蔵穴 南東隅、甕右側に掘り込まれる。平面は不整形円形で、径80×77cm、深さ45cm、底径40×32cm。

柱穴 主柱穴は4基(P1～P4)が確認された。



第194図 51号住居跡

3 古墳時代以降の遺構と遺物

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	48×38	52	10×8
P 2	27×24	36	17×12
P 3	47×43	69	17×16
P 4	65×58	71	17×14
P 5	37×28	3	18×10
P 6	56×50	12	43×40
P 7	51×37	8	31×17

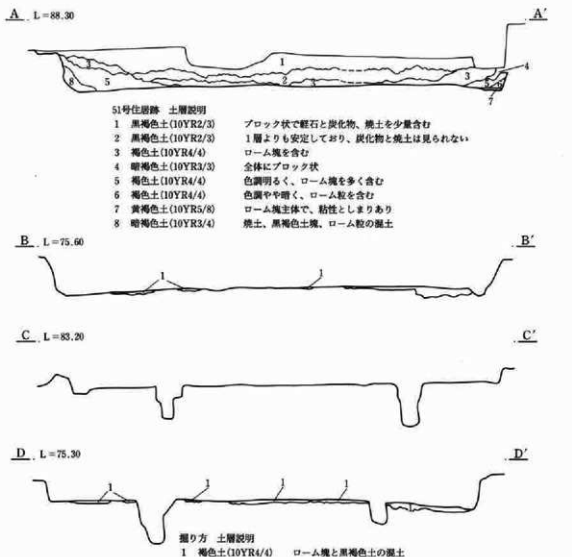
柱間寸法

P 1-P 2	3.6m	P 2-P 4	3.6m
P 3-P 4	3.3m	P 1-P 3	3.9m

周溝 南東隅から北壁にかけて廻り、西壁と南壁に沿って一部に設けられる。幅15~25cm、深さ10cm前後。底面は凹凸があるが、ピットは見られない。掘り方 ほぼ水平の掘り込み、東壁と南壁際には幅1.5mの帯状に深く掘りくぼめる。

遺構重複関係 56号住居跡に切られる。

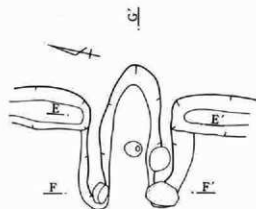
遺物 竈から甕、中央部床面に杯が集中しており、貯蔵穴脇からは甕が出土している。遺物遺存状況も良好で6世紀中葉を主とする。また、南壁際に“こも編み石”と思われる礫16個が集中し、北西隅では12個の礫が散在する。



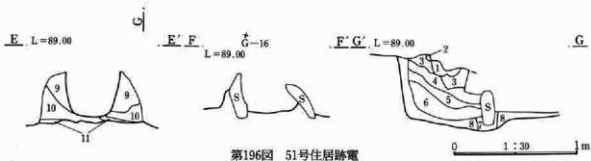
第195図 51号住居跡断面図

0 1:60 2m

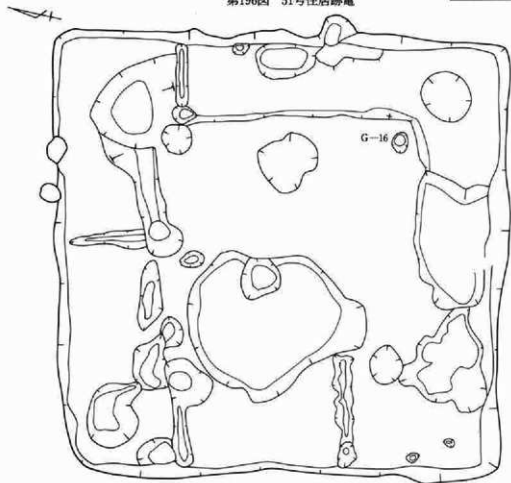
第3章 検出された遺構と遺物



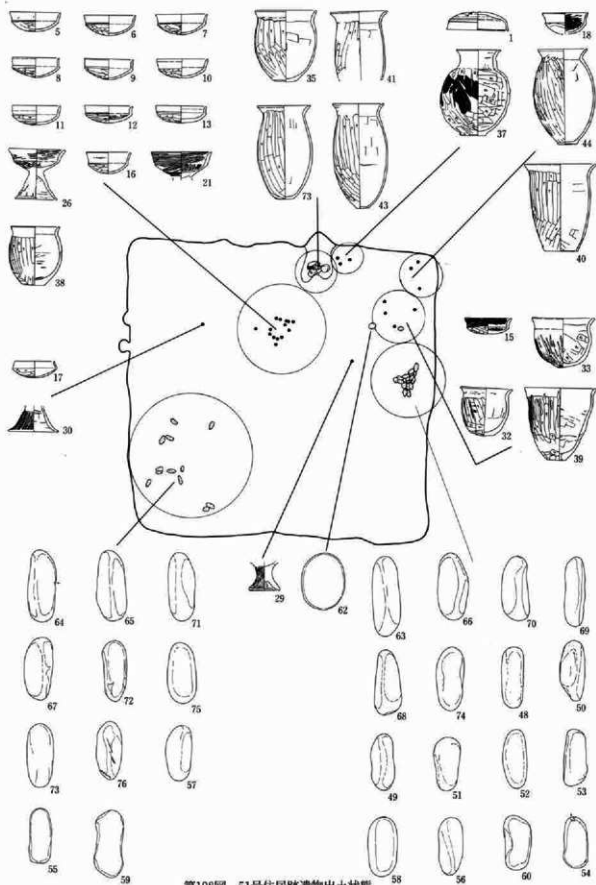
- 土層説明
- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒と焼土を含む。器殻埋土と思われる |
| 2 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒と焼土を含む |
| 3 褐色土(10YR4/4) | 粘土粒を多く含む。天井部崩落土 |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土と粘土を含む |
| 5 暗褐色土(10YR3/3) | 軟質で、粘土を含む |
| 6 暗褐色土(10YR3/3) | 5層よりやや暗い |
| 7 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊と焼土を含む人為的埋土 |
| 8 褐色土(10YR4/4) | ローム塊とローム塊を多く含む人為的埋土 |
| 9 褐色土(10YR4/4) | 粘土を主とし、焼土を含む |
| 10 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒主体で、粘土とローム塊を含む |
| 11 黒褐色土(10YR2/2) | 炭化物を少量含む |



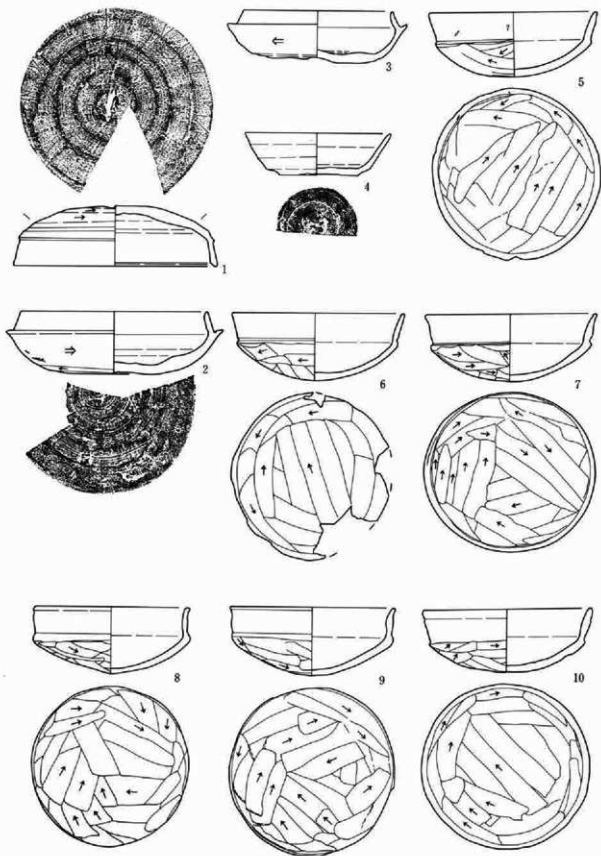
第196図 51号住居跡電



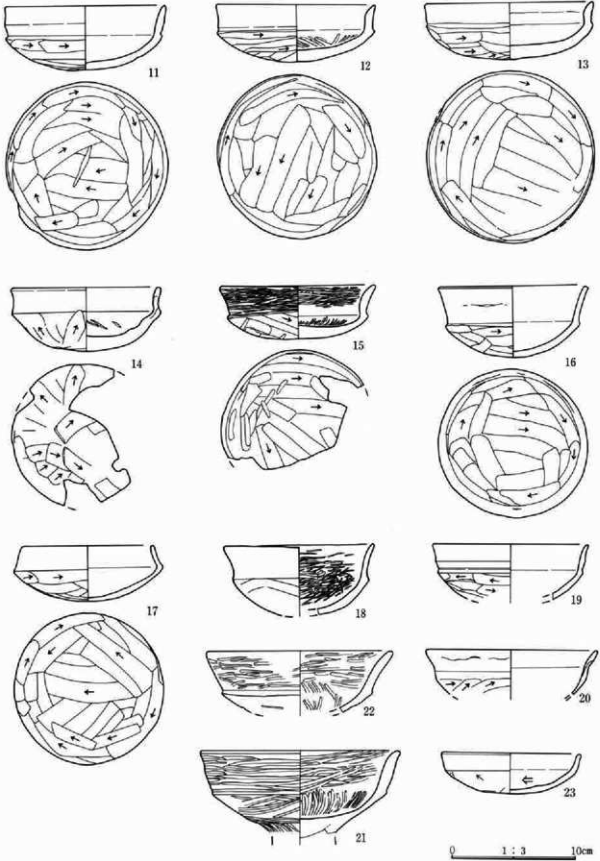
第197図 51号住居跡掘り方



第198図 51号住居跡遺物出土状態

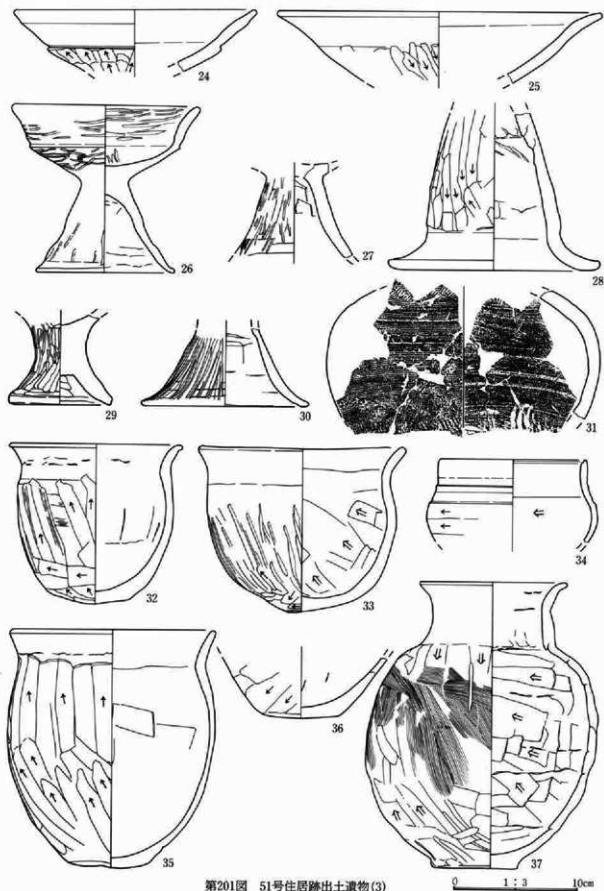


第199図 51号住居跡出土物(1)

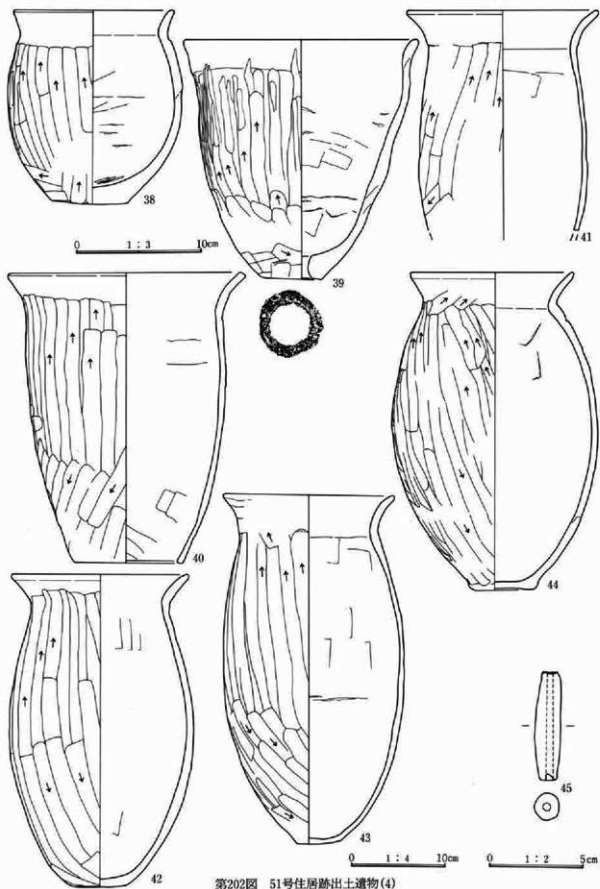


第200图 51号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

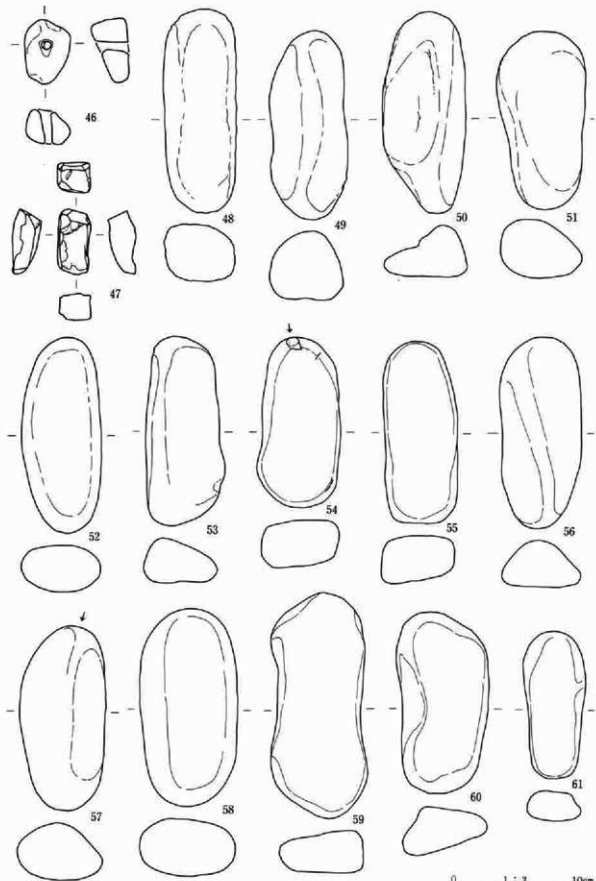


第201図 51号住居跡出土遺物(3)

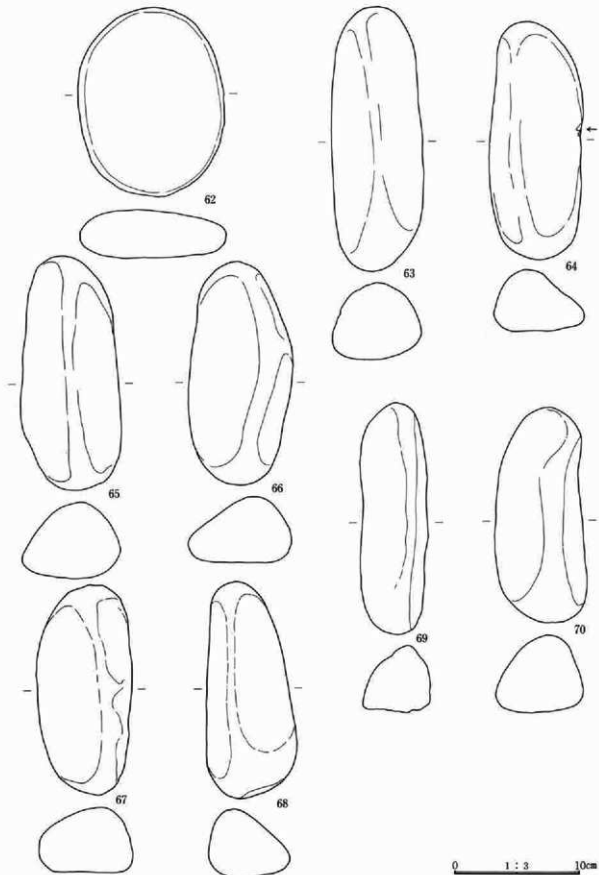


第202図 51号住居跡出土遺物(4)

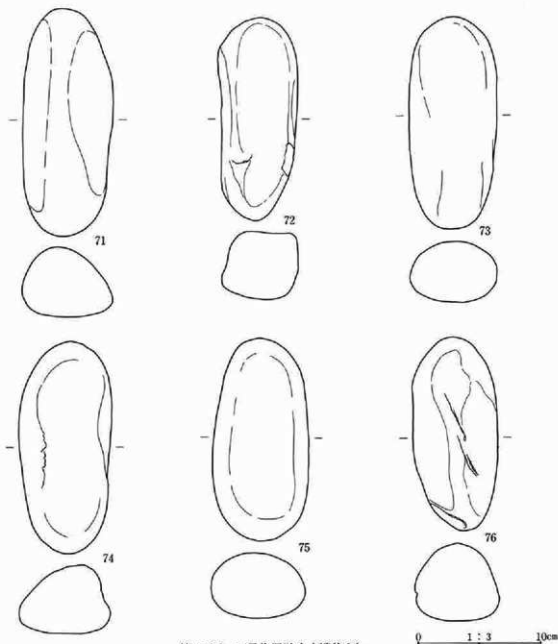
第3章 検出された遺構と遺物



第203図 51号住居跡出土遺物(5)



第204図 51号住居跡出土遺物(6)



第205図 51号住居跡出土遺物(7)

52号住居跡 (第206～208図)

位置 2区B・C・D-8・9グリッド

規模 5.5×5.4m 壁高 40cm

主軸方位 N-89°-E

床面 全体に貼床を施し、小さな凹凸を除けば床面レベルはほぼ水平。硬さは平均的。

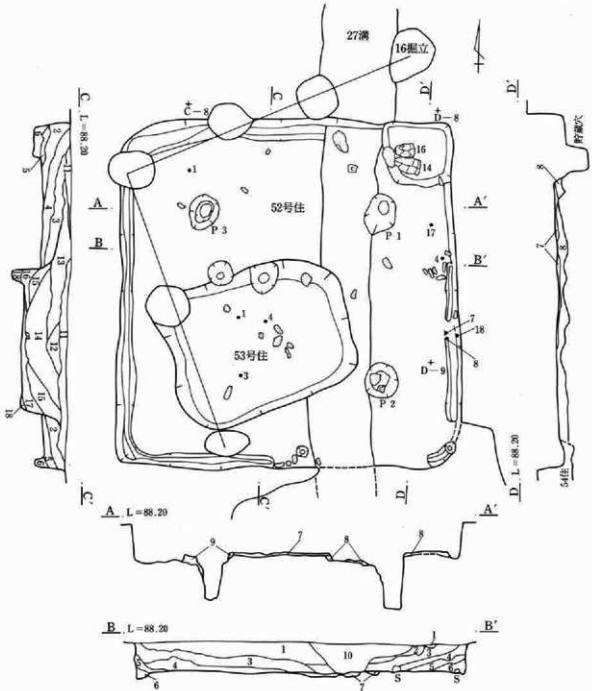
竈 北壁の東寄りに痕跡を残す。60×25cmの楕円形に焼土分布が認められ、その左脇には袖部に用いられたと思われる礎が出土している。

貯蔵穴 北東隅、電右側に壁から直接掘り込まれる。平面は方形で、上端112×100cm、深さ21cm、底径90×82cm。底面は平坦で、断面は台形状。

柱穴 主柱穴は3基(P1～P3)が確認された。南西部に位置すべき主柱穴は53号住居跡と重複するため検出できなかった。なお、中央に位置するP6は土層堆積状態から53号住居跡に伴うと考えられる。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P1 65×49 86 22×16



52号住居跡 土層説明

- 1 黄褐色土(10YR5/6)
- 2 褐色土(10YR4/4)
- 3 暗褐色土(10YR3/3)
- 4 褐色土(10YR4/4)
- 5 黒褐色土(10YR3/2)
- 6 褐色土(10YR4/6)
- 7 褐色土(10YR4/6)
- 8 褐色土(10YR4/6)
- 9 黄褐色土(10YR5/6)
- 10 27号溝埋土

- 1~5 cm大のローム塊を含む
- 微小なローム粒を含む
- 粘性あり、軟質
- 粘性あり、埴名山軽石を含む
- 3層に近似、埴名山軽石を含む
- 1 cm大のローム塊を含む
- 6層に近似、床土
- 7層と同質だが、軟質
- ローム塊を含み、軟質

53号住居跡 土層説明

- 11 褐色土(10YR4/4)
- 12 暗褐色土(10YR3/3)
- 13 黄褐色土(10YR5/6)
- 14 暗褐色土(10YR3/4)
- 15 褐色土(10YR4/4)
- 16 暗褐色土(10YR3/3)
- 17 暗褐色土(10YR3/4)
- 18 褐色土(10YR4/6)

- ローム粒と埴名山軽石を含む
- 埴名山軽石、ローム粒、炭化物含む
- 1~5 cm大のローム塊を含む
- 埴名山軽石、ローム塊を含む
- ローム粒を含む
- 軟質で、炭化物を含む
- 微小なローム粒を含む
- 軟質で、微小なローム粒を含む

0 1:60 2m

第206図 52・53号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

P 2	54×53	71	31×22
P 3	56×45	72	22×16
P 4	19×16	—	7×6
P 5	18×17	17	7×5
P 6	53×45	91	18×17
P 7	39×38	27	13×12

柱間寸法

P 1—P 2 2.7m P 1—P 3 2.7m

周 溝 東壁の北半、南壁の東半を除いて巡る。幅40cm前後、深さ10cm前後。

掘り方 全体を平均的に掘り込む。

遺構重複関係 53号住居跡と16号掘立柱建物跡に切られる。

遺 物 貯蔵穴内から竈に架けられていたと思われる壺の完形品が横転した状態で出土。住居廃絶時に竈から取り外し、廃棄したもののだろう。6世紀代が主体と思われる。

53号住居跡 (第206・209図)

位 置 2区B・C-8・9グリッド

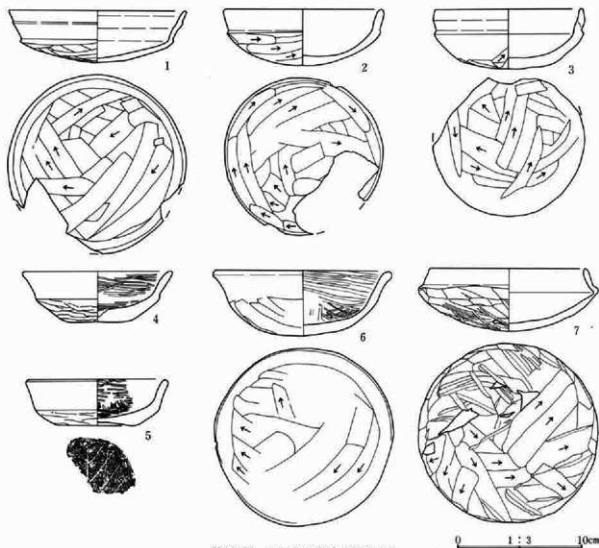
規 模 2.9×2.2m 壁 高 23cm

主軸方位 N-68°-E

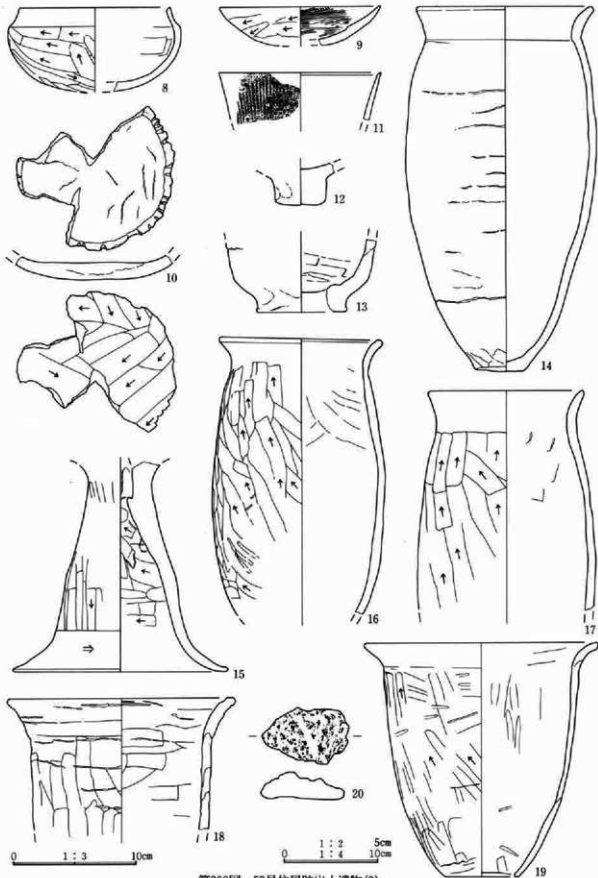
床 面 地山のロームを床とし、凹凸が見られる。

床面レベルは重複する52号住居跡より30cm前後低い。

柱 穴 北壁中央のP 6 (52号住居跡解説参照) は本住居跡に伴うと思われるが、性格は不明。竈、貯



第207図 52号住居跡出土遺物(1)



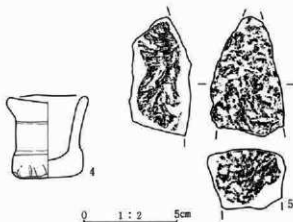
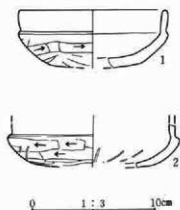
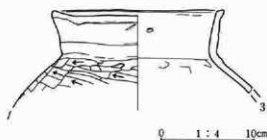
第208図 52号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

蔵穴、周溝等の屋内施設は認められない。

遺構重複関係 52号住居跡を切り、3号道路側溝に切られる。

遺物 床面より祭祀用と思われる手づくね土器1点の他、器台の代わりに再利用された可能性のある壺上半部が出土した。



第209図 53号住居跡出土遺物

54号住居跡 (第210・211図)

位置 2区C・D-9・10グリッド

規模 4.6×4.4m 壁高 49cm

主軸方位 N-68°-E

床面 全体に平均的な厚さで貼床を施す。床面レベルは均一で、硬軟の質の違いは明確でない。

竈 東壁の南寄りに位置し、袖部は100cm竪穴内に張り出し、煙道は遺存せず。天井部が完全に潰れた状態で検出された。奥行きは約1mで、燃焼部内側の最大幅は50cm前後と推定される。基盤に薄い灰と炭化物の層を敷き、本体を構築。火床面は床面とはほぼ同レベルで、平坦。中央部に粘土充填高杯を伏せて高さ10cmの支脚とする。

貯蔵穴 南東隅、竈右側。平面不整形で径60cm、深さ100cm、底径40cm。断面長方形で、他の貯蔵穴に比べて著しく深い。

柱穴 主柱穴は4基(P1~P4)が確認された。P6とP7は重複する遺構の可能性あり。

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	35×30	60	17
P 2	45×43	70	17×15
P 3	45×34	72	22×14
P 4	51×46	52	12
P 5	45×39	14	32×24
P 6	30×23	9	12×10
P 7	40×35	12	25×20

柱間寸法

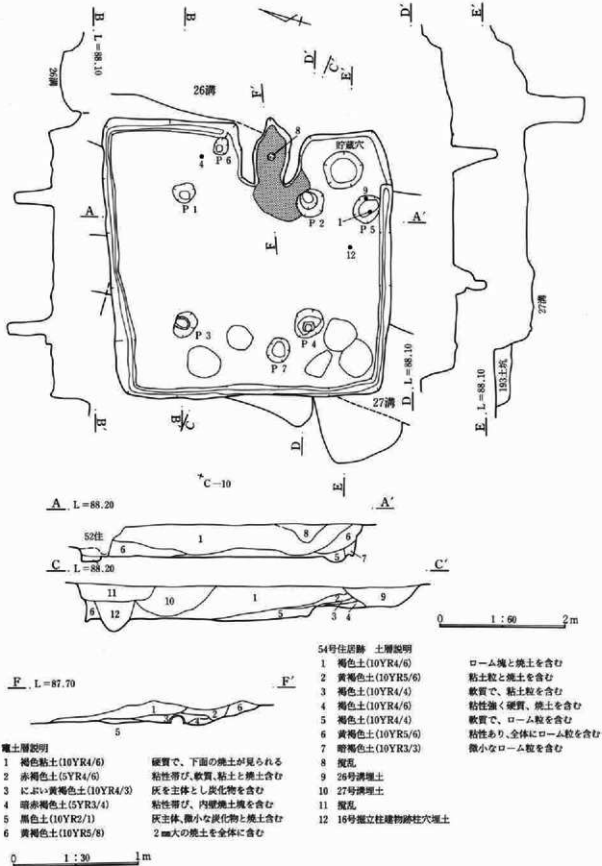
P 1-P 2	2.0m	P 2-P 4	2.1m
P 3-P 4	2.0m	P 1-P 3	2.0m

周溝 竈の右側部分を除いて全周、幅27cm前後、深さ6cm前後。底面の凹凸少なく、平坦。

掘り方 全体を平均的に掘る。床下遺構なし。

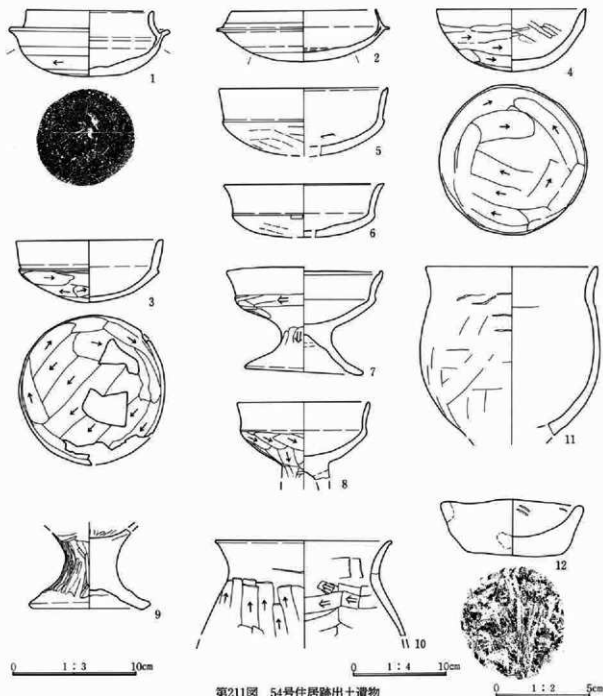
遺構重複関係 52号住、16号・23号掘立、26号・27号溝に切られる。

遺物 須恵器を含む6世紀代の土器が主体。



第210図 54号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第211図 54号住居跡出土遺物

55号住居跡 (第181・182・186図)

位置 2区D11・12、E11・12グリッド

規模 2.6×2.2m 壁高 48号住床面より32

cm、確認面から60cm前後。主軸方位 N-10°-W

床面 地山ルームの床面。全体に平坦で硬質。

遺構重複関係 48号住を切り、49号住に切られる。

遺物 杯1点が帰属すると思われる。

所見 本遺構は住居跡として登録したが、形状が

特異で小規模、竈を持たないことから、住居より重複する48号住の中央土間との見方もできよう。

56号住居跡 (第212図)

位置 2区E・F-15・16 規模 3.2×3.1m

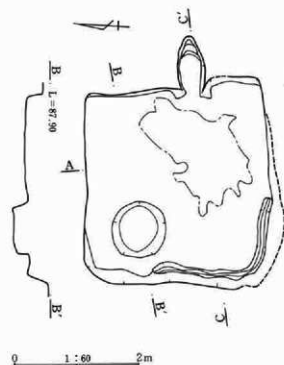
壁高 31cm 主軸方位 N-87°-E

床面 ローム地山床。竈前面～中央部が硬質。

竈 東壁の南寄りに位置し、本体は竪穴外に構築。

燃焼部平面は楕円形で、奥行き90cm、内側幅37cmを測る。袖部は竪穴内に30cm張り出す。

貯蔵穴 北西隅に位置し、平面が円形で底面は平坦。規模は上端径89cm、深さ23cm、下端径71×59cmを測る。周辺の床面が軟質で、この位置が土間とは考えにくい。床下土坑の可能性があるが、確認できなかった。



57号住居跡 (第213図)

位置 2区E・F-11・12

規模 3.15×2.80m 壁高 22cm

主軸方位 N-89'-E

床面 ローム地山を床とする。ほぼ水平で平坦。

全体的に硬質だが、北壁際が軟質。

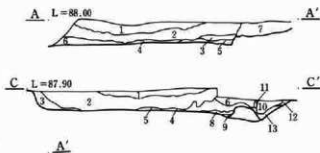
竪 東壁の南寄りに位置し、本体は地山を掘り込んで構築する。燃焼部の平面は半円形で、内面は奥行き60cm、幅40cmを測る。火床面は奥壁に向かって10~30°の傾斜角で立ち上がる。焚口から燃焼部を皿状に掘り込み、ローム塊の多い土で埋めて基盤を整える。奥壁付近で角閃石安山岩の礫が立位で出土した。表面の一部が焼成変化しており、支脚だろう。ビット 7基のビットのうち、P4とP5は出入り口施設に伴う支柱穴か。他は住居廃絶以後か。

た。柱穴 検出されなかった。

周溝 南西半壁際に廻り、最大幅15cm深さ7cm。

遺構重複関係 51号住、18号溝に切られる。

遺物 竪内と住居埋土から小土器片が出土。



56号住居跡 土層説明

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | 粒子粗く、礫名山輝石を含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 礫名山輝石、焼土を含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊と焼土塊を含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | 粘土塊を含む |
| 5 黒褐色土(10YR3/2) | 焼土とローム粒を含む |
| 6 暗褐色土(10YR3/4) | 礫名山輝石と焼土を含む |
| 7 暗褐色土(10YR3/3) | 礫名山輝石を含む |
| 8 黒褐色土(10YR3/2) | 焼土、粘土、ローム粒を含む |
| 9 暗褐色土(10YR3/3) | 8層に近似、夾雑物少ない |
| 10 明黄褐色土(10YR6/8) | やや硬質でローム塊を含む |
| 11 褐色土(10YR4/4) | 焼土を多く含む |
| 12 暗褐色土(10YR3/3) | 焼土塊を多く含む |
| 13 黒褐色土(10YR2/3) | 焼土を含む |



第212図 56号住居跡及び出土遺物

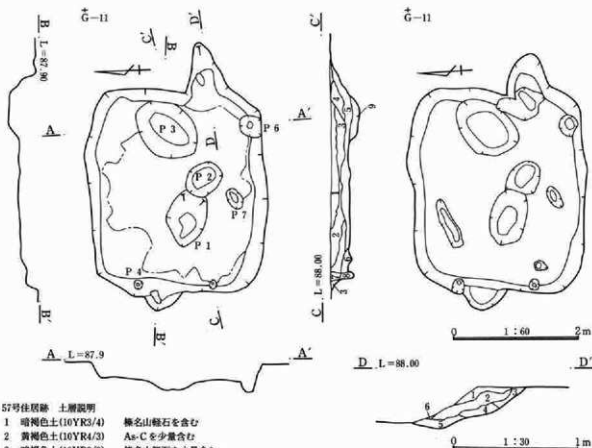
	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	81×62	15	40×25
P 2	60×47	14	40×27
P 3	113×81	23	72×34
P 4	12	8	4
P 5	14	6	5
P 6	40	45	10
P 7	35×22	7	20×8

第3章 検出された遺構と遺物

掘り方 北西隅に長さ80cm、幅18cm、深さ5cmの溝状の掘り込みが検出されたが、相掘り時の痕跡だろう。

遺構重複関係 24号掘立柱建物に切られる。

遺物 埋土から6～7世紀代の土器片が少数出土。

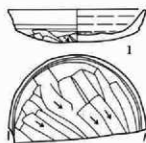


57号住居跡 土層説明

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | 株名山軽石を含む |
| 2 黄褐色土(10YR4/3) | A-Cを少量含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/3) | 株名山軽石を少量含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/3) | 3層に近似。軽石や多い |
| 5 褐色土(10YR4/4) | ローム粒を多く含む、不均質 |
| 6 黄褐色土(10YR5/6) | ローム粒を主とする |
| 7 褐色土(10YR4/4) | 砂質でやや締まる |
| 8 褐色土(10YR4/4) | ローム粒多く、軟質 |
| 9 褐色土(10YR4/4) | ローム粒多く、ローム塊も見られる |

■ 土層説明

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | 粘性帯が硬質、ローム粒含む |
| 2 赤褐色土(5YR4/6) | 地山ロームの焼土粒が主体 |
| 3 黄褐色土(10YR5/8) | ローム粒多い |
| 4 褐色土(7.5YR4/4) | 軟質で粘性帯び、ローム粒を多く含む |
| 5 褐色土(7.5YR4/4) | 焼土とローム粒主体、炭化物を少量含む |
| 6 灰色粘土(2.5YR7/3) | 竈本体の崩落土塊 |



0 1:3 10cm



0 1:2 5cm

第213図 57号住居跡及び出土遺物

58号住居跡 (第214・215図)

位置 4区L・M-13・14

規模 不明。壁高 60cm

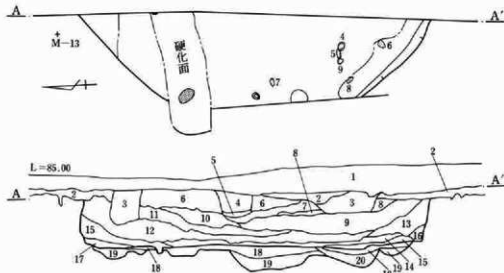
床面 全体に貼床を施し、中央部がやや低く、壁際との高低差は10cmほどである。北壁際と南西壁際に硬化面が見られ、北部では薄い硬化面が2〜3層重なる。

竈 調査範囲では検出できなかったが、北東ないし南東の壁際に位置すると思われる。西偏位置に直径25cmの円形に焼土の集中範囲が検出された。特に硬化した面は見られず、炉としての使用に疑問が残る。掘り方 壁際周縁部をやや深く掘り込み、ロームと暗褐色土で埋める。また、床下土坑かと推定される2基の掘り込みが南北方向に並んで検出された(住居土層断面より)。規模は径130〜110cm、深さ40〜30

cm。断面は鉢形。いずれもローム塊と暗褐色土の混合土で埋めており、南側土坑が北側土坑を切る。この南側土坑には焼土塊を含んでおり、電修築時の排土とも考えられる。

遺構重複関係 なし。

遺物 埋土から7世紀代の土器片が少数出土。また床面から大ききの揃った楕円形礫が散在して出土した。



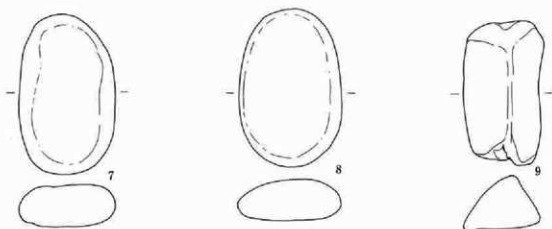
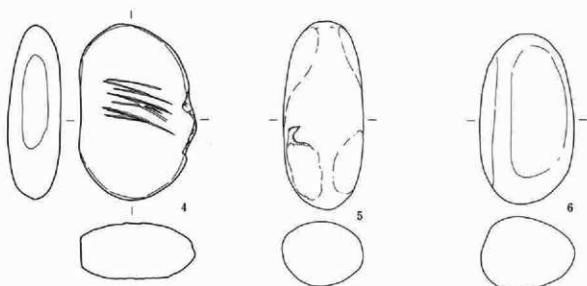
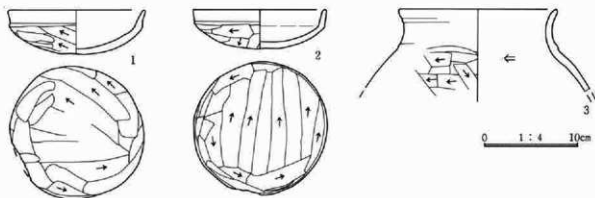
58号住居跡 土層説明

- | | | |
|------------------|----------------------|--------------|
| 1 現耕作土 | 11 黒褐色土(10YR2/3) | ローム塊を含む |
| 2 黒褐色土(10YR2/3) | 12 黒褐色土(10YR3/2) | ローム塊が互層で堆積する |
| 3 黒褐色土(10YR2/2) | 13 暗褐色土(10YR3/3) | ローム粒多く、ブロック状 |
| 4 黒褐色土(10YR2/2) | 14 黒褐色土(10YR2/2) | ブロック状 |
| 5 黒褐色土(10YR3/2) | 15 黒褐色土(10YR3/2) | ローム粒を多く含む |
| 6 黒褐色土(10YR3/2) | 16 黒褐色土(10YR2/2) | 14層にほぼ同じ |
| 7 黒褐色土(10YR2/3) | 17 黒褐色土(10YR3/2) | ローム粒を多く含む |
| 8 黒褐色土(10YR2/2) | 18 明黄褐色土と黒色土の混合土、床埋土 | |
| 9 黒褐色土(10YR2/2) | 19 ローム塊を主体とする、床埋土 | |
| 10 黒褐色土(10YR2/2) | 20 ロームと暗褐色土の混合土、床埋土 | |

第214図 58号住居跡

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

第215図 58号住居跡出土遺物

3 古墳時代以降の遺構と遺物

59号住居跡 (第216~218図)

位置 2区F-7・8、G-8

規模 4.0×3.6m 壁高 67cm

主軸方位 N-55°-E

床面 地山のロームを床土とし、ほぼ水平。南東壁際から中央部にかけて硬質。軟質部分は北西半に偏り、壁から60cmほどの帯状になる。また床下土坑の部分は軟質で、周囲より5cmほど陥没している。

竈 北東壁の南東寄りに位置し、燃焼部は竪穴内に位置して、平面は方形。袖は30cmほど竪穴内に張り出し、燃焼部は内法で45×30cmを測る。ローム塊を掘り方に埋めて基盤を整え、燃焼部は粘土で全体を包むように積み上げて芯材とする。この上にロームと粘土の混合土を積み上げて全体を構築する。火床面は平坦で、奥壁から煙道の底面は地山にローム混土を埋めて35~40°の傾斜をつけている。

貯蔵穴 東隅にほぼ同規模のピット2基が並列して

検出された。両者は接していることから、使用時は1基で、両者に新旧関係があったと考えられるが、調査では確認できなかった。規模は38×35cmの隅丸方形で、深さ45cm、下端径24cmを測る。貯蔵穴の上端南西側には高さ3~5cmの帯状の盛土をして、北東壁と南東壁との間に一辺50cmほどの蓋受けと思われる空間を作り出している。

柱穴 検出されなかった。

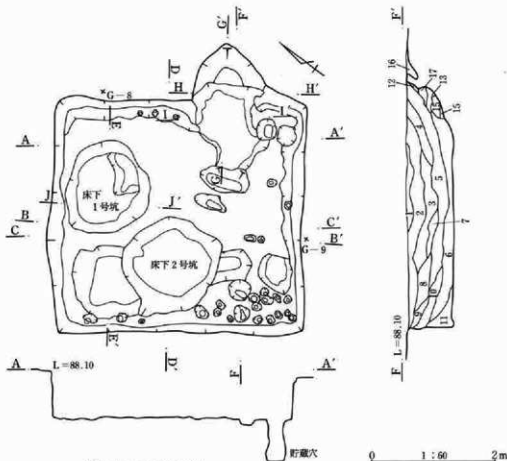
周溝 壁に沿って全周、幅15cm、深さ5cmを測る。南西壁際の底面に小さなピット状の凹凸が連続する。

床下土坑 1号は145×133cm深さ52cm、2号は155×150cm深さ61cmを測る。平面は不整形形で底面は平坦。ローム塊で埋填される。

遺構重複関係 なし。

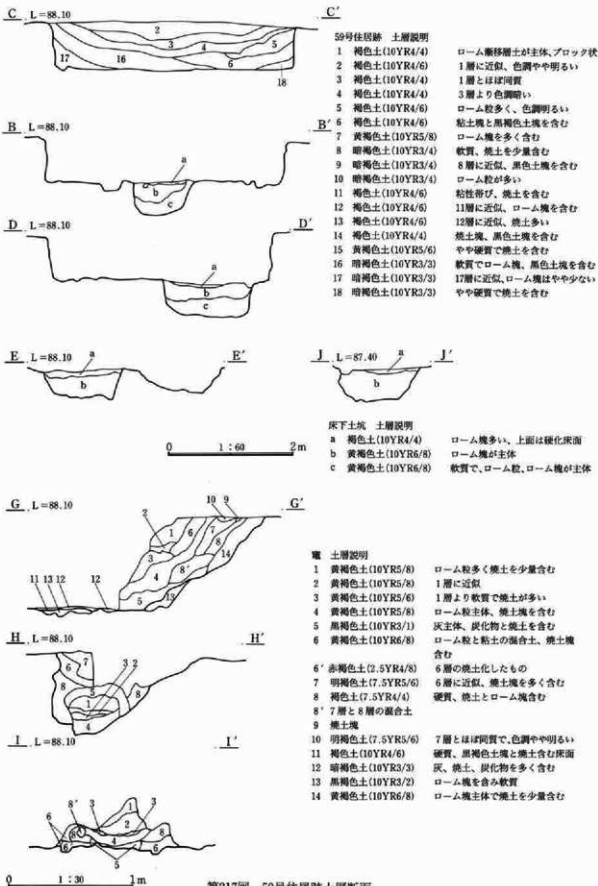
掘り方 南西壁際に平行して帯状に掘り、他は平坦。

遺物 床面直上および埋土下層から7世紀後半代の土器片が出土。

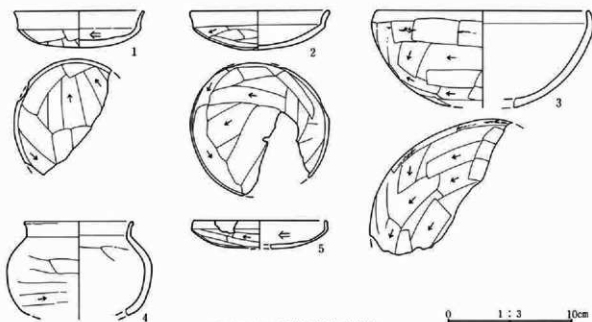


第216図 59号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第217図 59号住居跡土層断面



第218図 59号住居跡出土遺物

60号住居跡 (第219～222図)

位置 2区J-10・11

規模 4.5×3.8m 壁高 65cm

主軸方位 N-100°-E

床面 全体にローム、焼土を含む黒褐色土による貼り床を施す。

竈 東壁の南寄りに位置し、袖部は30cmほど竪穴内に張り出す。燃焼部の内面形は半円形で、検出された煙道立上がり部分までの奥行きは90cm。火床面は浅くくぼんでおり焼成硬化する。奥壁～煙道部は約50°の傾斜をもつ。掘り方にローム塊を含む黒褐色土で埋めて基底を整え、袖は粘土と暗褐色土を主材に構築。

貯蔵穴 南東隅に設けられ、平面円形で、径58×54cm、深さ26cmを測る。底面は南半部分が段状に深くくぼむ。ローム塊、焼土、黒褐色土塊が堆積し、人為的と思われる。竪穴の初期埋没土の6・7層に近い。

ピット 南壁東隅にピット2基を確認。P1は楕円形で、径37×22cm、深さ16cmを測る。P2は不整楕円形で径110×80cm、深さ37cm。いずれも性格は不明。

掘り方 壁に沿って周縁部を深めに掘る。

遺構重複関係 63号住居跡を切る。

遺物 貯蔵穴と竈周辺に集中して出土。時期は9世紀代にほぼ限定される。

61号住居跡 (第224・225図)

位置 2区M・N-10・11 規模 4.9×3.5m

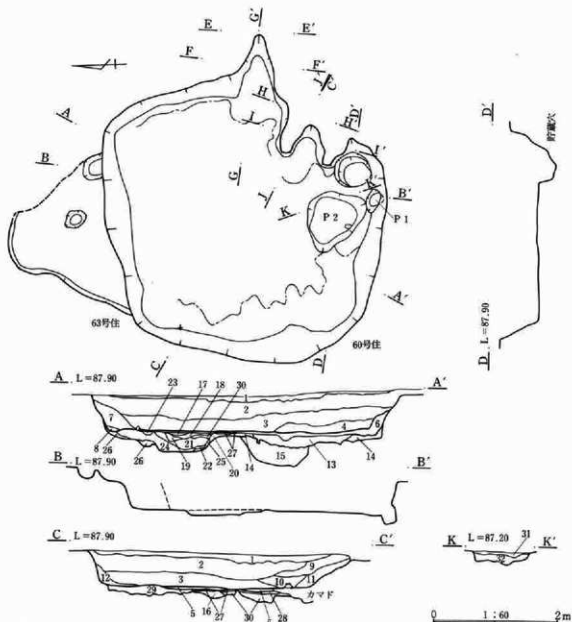
壁高 22cm 主軸方位 N-87°-E

床面 ほぼ全体に貼り床を施し、レベルは東～南半部分がややくぼむ。硬質範囲は南半に偏る。

竈 東壁のやや南寄りに位置。袖部はロームと粘土、焼土の混土で構築し、竪穴内に35cm張り出して端部には30cm大の礫を直立させて焚口部の補強とする。燃焼部は、平面三角形で、奥行き70cm幅40cm。焚口幅は45cm前後。火床面は掘り方に黒褐色土を埋めて整え、床面と同一高にする。奥壁傾斜角は40°。

貯蔵穴 南東隅に位置し、平面不整形で、径67×55cm、深さ26cm。断面は遊台形状、底径27×19cm。柱穴 確認できなかった。

床下土坑 中央部で南北に重複して2基が検出された。1号は不整形で径163×150cm、深さ17cm、2号は楕円形で短径79cm、深さ8cmを測る。いずれも底面はほぼ平坦で、浅いためローム層に止まる。床下ピット 5基検出。性格はいずれも不明。

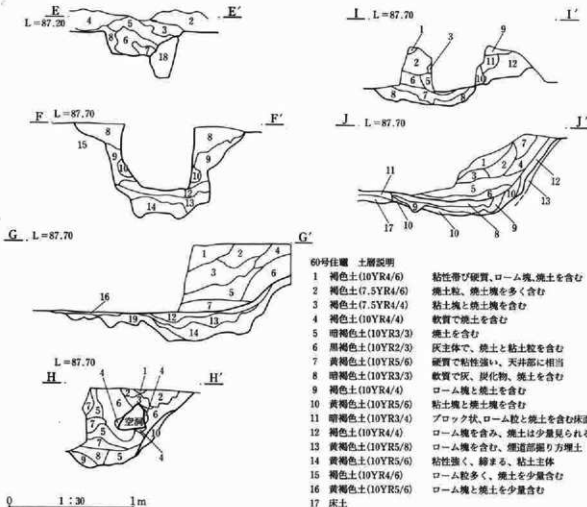


60号・63号住居跡 土層説明

- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色土(10YR2/2) | 褐色土塊、棒名山礫石を含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 1層に近似、焼土を少量含む |
| 3 黒褐色土(10YR3/2) | 1層とほぼ同質、炭化物と焼土を含む |
| 4 暗褐色土(10YR3/3) | 黒褐色土塊とローム塊を含む |
| 5 黒褐色土(10YR3/2) | ローム粒と焼土含む、上面は60号住床面
ブロック状 |
| 6 褐色土(10YR4/4) | ローム塊を多く含む |
| 7 暗褐色土(10YR3/3) | 褐色土塊を多く含む |
| 8 黒褐色土(10YR3/2) | ローム塊を含む |
| 9 黒褐色土(10YR3/2) | 棒名山礫石を含み、焼土も少量見られる |
| 10 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊、粘土塊、焼土を含む |
| 11 褐色土(10YR4/4) | 焼土、炭化物、粘土粒を含む |
| 12 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊を下部に含む |
| 13 黒褐色土(10YR3/2) | ローム塊を含み、焼土も少量見られる |
| 14 黄褐色土(10YR5/8) | ローム塊主体、暗褐色土塊を含む |
| 15 褐色土(10YR4/4) | ローム粒主体、焼土を少量含む |
| 16 明黄褐色土(10YR6/8) | ローム地山 |

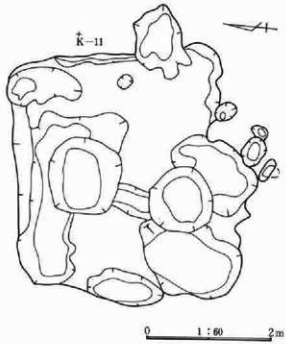
- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 17 黒褐色土(10YR3/2) | ローム塊、棒名山礫石を少量含む |
| 18 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊多く、焼土も少量含む |
| 19 黒褐色土(10YR3/2) | 17層に近似 |
| 20 黒褐色土(10YR3/2) | 19層とほぼ同質 |
| 21 暗褐色土(10YR3/4) | ローム塊、粘土塊多く、焼土を少量含む |
| 22 褐色土(10YR4/4) | 軟質、ローム粒と焼土を多く含む |
| 23 黒褐色土(10YR3/2) | 17層に近似 |
| 24 暗褐色土(10YR3/3) | 軟質、ローム塊、粘土、焼土を含む |
| 25 にい黄褐色土(10YR6/3) | 硬質で粘性強い |
| 26 褐色土(10YR4/4) | 25層に近似し、ローム塊を含む |
| 27 暗褐色土(10YR3/4) | 硬質、ローム塊を含む、床面 |
| 28 暗褐色土(10YR3/4) | 27層と同質、やや硬質 |
| 29 褐色土(10YR4/4) | ローム塊と少量の棒名山礫石、焼土含む |
| 30 黄褐色土(10YR5/8) | ローム塊主体、焼土を少量含む、63住居跡
土 |
| 31 黒褐色土(10YR2/3) | 軟質で焼土塊を多く含む |
| 32 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊を多く含む |

第219図 60・63号住居跡



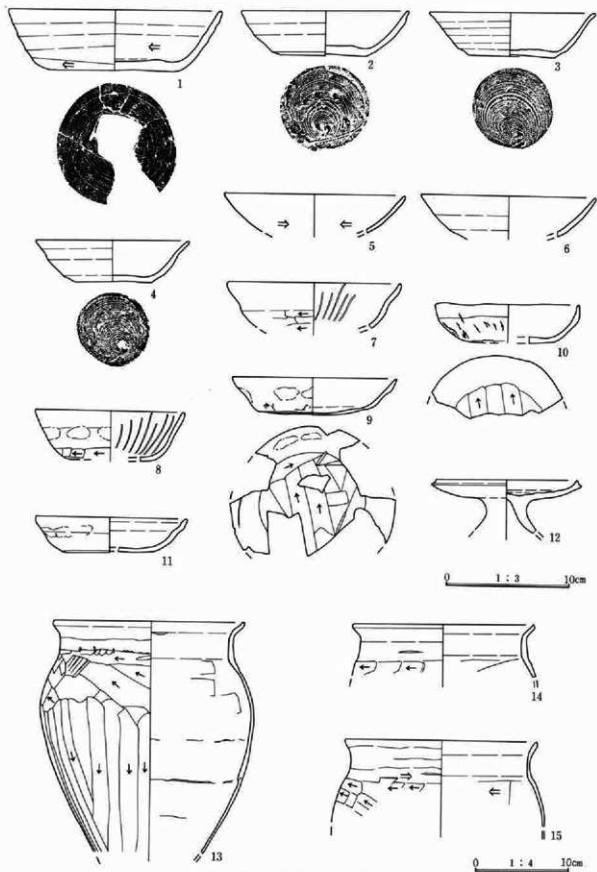
- 60号住竈 土層説明
- 1 褐色土(10YR4/6) 粘性帯び硬質、ローム塊、焼土を含む
 - 2 褐色土(7.5YR4/6) 焼土粒、焼土塊を多く含む
 - 3 褐色土(7.5YR4/4) 粘土塊と焼土塊を含む
 - 4 褐色土(10YR4/4) 軟質で焼土を含む
 - 5 暗褐色土(10YR3/3) 焼土を含む
 - 6 黒褐色土(10YR2/3) 灰主体で、焼土と粘土粒を含む
 - 7 黄褐色土(10YR5/6) 硬質で粘性強い、天井部に相当
 - 8 暗褐色土(10YR3/3) 軟質で灰、炭化物、焼土を含む
 - 9 褐色土(10YR4/4) ローム塊と焼土を含む
 - 10 黄褐色土(10YR5/6) 粘土塊と焼土塊を含む
 - 11 暗褐色土(10YR3/4) ブロック状、ローム粒と焼土を含む床面
 - 12 褐色土(10YR4/4) ローム塊を含み、焼土は少量見られる
 - 13 黄褐色土(10YR5/8) ローム塊を含む、煙道部張り方埋土
 - 14 黄褐色土(10YR5/6) 粘性強く、締まる、粘土主体
 - 15 褐色土(10YR4/6) ローム粒多く、焼土を少量含む
 - 16 黄褐色土(10YR5/6) ローム塊と焼土を少量含む
 - 17 床土

- 63号住竈 土層説明
- 1 暗褐色土(10YR3/3) 褐色土塊を含む
 - 2 褐色土(10YR4/4) ローム塊、黒褐色土塊を含む
 - 3 黒褐色土(10YR2/3) 褐色土塊と少量の焼土を含む
 - 4 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色土塊とローム粒、焼土を含む
 - 5 暗褐色土(10YR3/3) 焼土を多く含む
 - 6 褐色土(10YR4/4) 焼土を多く含む
 - 7 黒褐色土(10YR2/3) 焼土粒、焼土塊を多く含む
 - 8 暗褐色土(10YR3/4) ローム塊を多く含む、焼土は少量含む
 - 9 黄褐色土(10YR5/8) 暗褐色土塊を少量含む
 - 10 黄褐色土(10YR5/8) 焼土を多く含む
 - 11 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒と焼土を含む
 - 12 黒褐色土(10YR2/2) 灰と焼土を多く含む
 - 13 褐色土(10YR4/4) ローム塊を多く含む
 - 14 暗褐色土(10YR3/4) ローム塊を少量含む
 - 15 黄褐色土(10YR5/6) ローム地山
 - 16 黄褐色土(10YR5/8) 硬質、床面
 - 17 明黄褐色土(10YR6/8) 褐色土塊を含む
 - 18 黒褐色土(10YR2/3) 棒名山転石を含む、孤立柱建物跡柱穴か
 - 19 明黄褐色土(10YR6/8) 褐色ブロックを含む



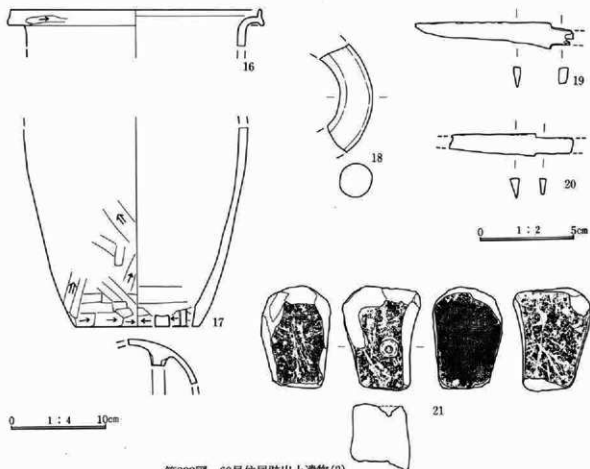
第220図 60・63号住居跡竈土層断面及び掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第221図 60号住居跡出土遺物(1)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第222図 60号住居跡出土遺物(2)

	上端径	深さ	下端径 (cm)
P 1	25×20	18	12×8
P 2	48×38	7	28×17
P 3	30×25	27	15
P 4	28×25	13	15×8
P 5	18	24	9×7

掘り方 電手前から南半部にかけて鉢状の掘り込み。

遺構重複関係 なし。

遺物 主に8世紀後半代の土器片、鉄鏝等が出土。

62号住居跡 (第226・227図)

位置 2区L-14 **規模** 不明

壁高 65cm

床面 東辺部分のみの検出で、この部分で貼り床が認められた。

竈 東壁中央付近、袖部は竪穴内に55cm張り出す。然焼部は平面が半円形で、奥行き50cm幅50cmを測る。



第223図 63号住居跡出土遺物

中央部を後世の溝に切られており、煙道は不明。

貯蔵穴 南東隅の壁から50cm離れて掘りこまれる。平面の形と規模は不明、深さは80cmで断面は筒状を呈する。内部には自然流入土が堆積する。

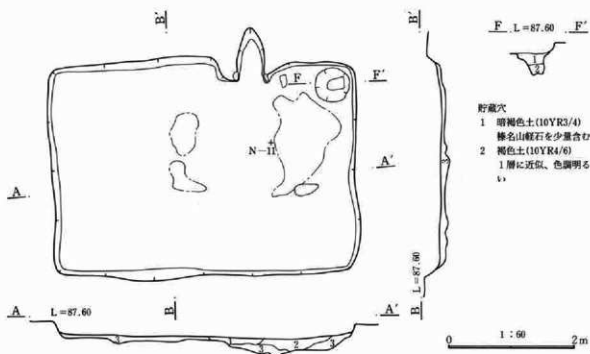
柱穴 不明。

周溝 南壁際に幅10cm、深さ8cm前後でめぐる。

遺構重複関係 3号道路跡の側溝に切られる。

遺物 竈周辺の床面直上から7世紀前半代の杯、甕等が出土。

第3章 検出された遺構と遺物

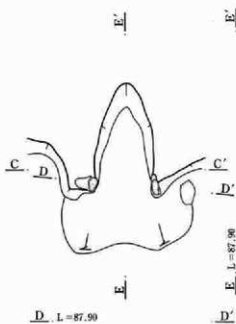


貯蔵穴

- 1 暗褐色土(10YR3/4)
礫名山軽石を少量含む
- 2 褐色土(10YR4/6)
1層に近似、色調明る

61号住居跡 土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4) ローム塊と少量の礫名山軽石を含む
- 2 におい黄褐色土(10YR5/4) ローム塊多く含む
- 3 明黄褐色土(10YR6/8) ローム粒、ローム塊が主体



土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4)
- 2 明赤褐色土(5YR5/6)
- 3 焼土塊
- 4 灰黄褐色土(10YR6/2)
- 5 暗褐色土(10YR3/4)
- 6 黒褐色土(10YR2/3)
- 7 褐色土(7.5YR4/4)
- 8 褐色土(7.5YR4/4)
- 9 褐色土(7.5YR4/4)
- 10 灰黄褐色土(10YR6/2)
- 11 におい黄褐色土(10YR5/4)
- 12 暗褐色土(10YR3/4)
- 13 明黄褐色土(10YR6/8)

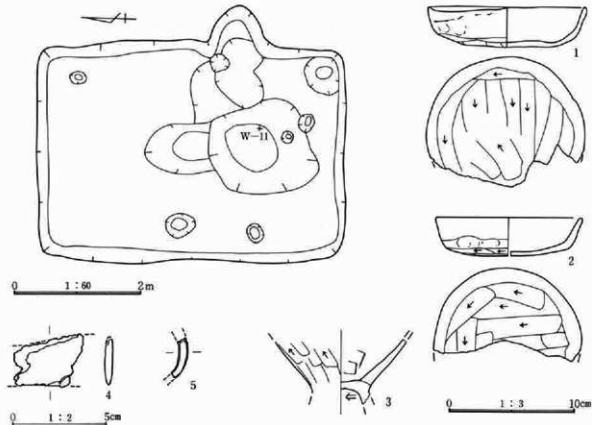
焼土粒を多く含む
炭化物と焼土を含む

ローム粒と粘土粒主体
灰と多量の焼土塊を含む
ローム塊多く、焼土と炭化物含む
粘性帯び、焼土を含む
7層にローム塊を含む
粘性帯び、粘土は見られない
4層に近似、ローム粒が多い
ローム塊と暗褐色土の混合土

ローム粒主体、住居跡り方埋土

第224図 61号住居跡及び竈土層断面

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第225図 61号住居跡掘り方及び出土遺物

63号住居跡 (第219・220・223図)

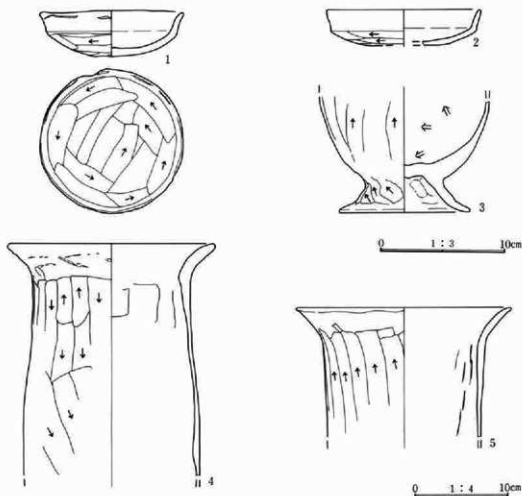
位置 2区J-10 規模 (3.7)×(3.3)m
 壁高 60cm 主軸方位 N-83°-E
 床面 ロームを含む褐色土による貼り床。床面レベルは重複する60号住居跡とほぼ同じ。
 竈 東壁の南隅に位置し、竪穴内に張り出す袖はほとんど確認できず、大部分は地山を掘りこんで構築する。掘り方は平面三角形状で、奥行き90cm、幅50cmを測る。本体は崩落していたが、ロームと焼土を多く含む土で構築したと思われる。
 貯蔵穴・ピット 検出されなかった。
 掘り方 北壁に沿って帯状に深く掘りこまれる。
 床下土坑 中央北半部で1基を検出。不整形円形で、径118×114cm、深さ48cm。
 遺構重複関係 60号住居跡に切られる。北側で浅い掘りこみと重複するが、新旧関係は不明。
 遺物 竈周辺から少量の土器出土。時期は8世紀代と思われる。



62号住居跡 土層説明

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 黒褐色土(10YR2/2) | 標名山軽石とローム粒を含む |
| 2 黒褐色土(10YR2/2) | 標名山軽石と小ローム塊を含む |
| 3 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊多く、炭化物も見られる |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒と焼土を含む |
| 5 におい黄褐色土(10YR4/3) | ローム塊多く、粘土塊が見られる |
| 6 暗褐色土(10YR3/3) | ローム塊と少量の標名山軽石を含む |
| 7 黒褐色土(10YR2/2) | 少量のローム粒を含む |
| 8 黒褐色土(10YR3/2) | ローム塊を含み、部分的に硬質 |
| 9 褐色土(7.5YR4/4) | 焼土、ローム粒、灰の混合土 |
| 10 黒褐色土(10YR2/2) | 少量のローム粒を含む |
| 11 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒多い |
| 12 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒主体、大ローム塊も見られる |
| 13 黒褐色土(10YR3/1) | 焼土と炭化物が多い |
| 14 におい黄褐色土(10YR4/3) | ローム塊を含む、住居掘り方埋土 |
| 15 18号溝埋土 | |

第226図 62号住居跡



第227図 62号住居跡出土遺物

64号住居跡 (第228・229図)

位置 2区M・N-15

規模 3.8×3.0m 壁高 67cm

主軸方位 N-29°-E

床面 全体に貼り床を施し、南側にやや傾斜する。全体的に硬質。

竈 東隅に位置し、燃烧部は竪穴内で煙道のみ地山を掘りこんで構築する。袖部は焼土を含む暗褐色土で構築し、焚口部で櫛を直立させて補強する。燃烧部は奥行き50cm、幅40cm前後を測る。火床面は平坦で、奥壁から煙道にかけては埋め土で40~60°の傾斜面を作り出す。

貯蔵穴 竈の右脇、平面は方形で断面は筒状を呈する。上端の一辺22cm、深さ64cm、底径15cm。貯蔵穴

を中心に竈と壁の間に90×60cmの空間を設け、周囲より5cmほどくぼませる。蓋受けと推定される。

柱穴 検出されなかった。

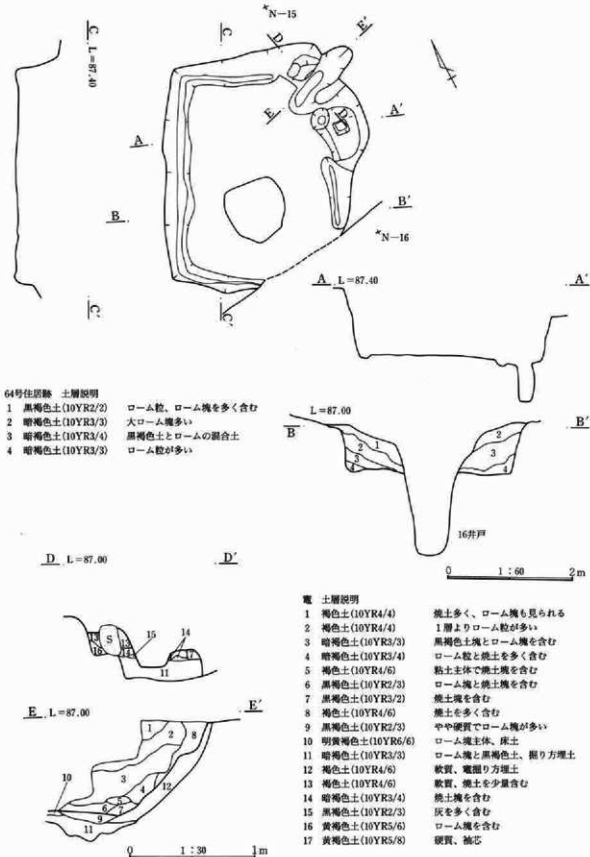
周溝 竈と貯蔵穴のある東隅を除いて全周し、最大幅28cm、深さ5cm前後を測る。

掘り方 北西壁、南東壁に沿って、帯状に掘削し、床下には幅80cm前後、深さ15cm前後の掘りこみを残す。埋土は黒褐色土とロームの混合土。

床下土坑 住居中央に掘りこまれ、平面は隅丸長方形で断面は方形。上端は125×110cm、深さ53cm、底径93×85cmを測る。ローム塊を主に埋め戻し、上位には黒色土で貼り床を構築する。

遺構重複関係 16号井戸跡に切られる。

遺物 埋土中から7世紀代を主とする土器片出土。



第228図 64号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第229図 64号住居跡掘り方及び出土遺物

65号住居跡 (第230図)

位置 2区F-16・17

規模 (4.5)×(3.6)m 壁高 41cm

主軸方位 N-(95)°-E

床面 北半部は地山を床面とし、南半部は重複する9号住居跡の埋土に貼り床を施す。南半部はややくぼむ。全体的に硬軟の差異は顕著でない。

竈 東壁の南寄りに構築され、左側袖部のみが検出された。燃焼部は竈穴内に張り出す形状と推定され

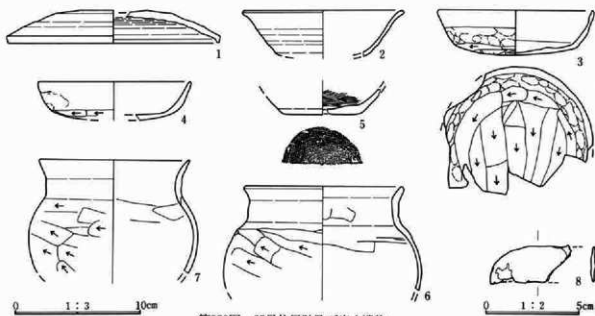
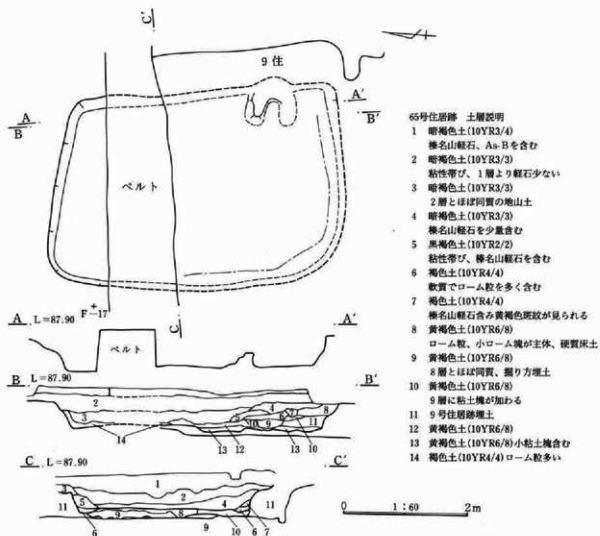
る。

貯蔵穴・ピット・周溝 検出されなかった。

掘り方 南半部をやや深めに掘りこんでおり、ローム塊を主とする土を埋める。

遺構重複関係 9号住居跡を切る。

遺物 大部分が埋土中からの出土で、重複する9号住居跡からの混入品も多い。9世紀前半代を主とする。



第230図 65号住居跡及び出土遺物

(2) 鍛冶跡 (第231~239図)

位置 4区 P-6・7、Q-6・7

平面形 隅丸方形か。規模 4.5×m

床・壁 床は、中央部が最も深く、緩い傾斜をもつて壁際に達し、壁は強い曲線的な立ち上がりとなる。深さは、中央最深部で50cm。床面のうちピットP1の東側が平坦で、作業場の主体と考えられる。

炉体 炉底面のくぼみが残り、本体は破壊されたと考えられる。本体は礎を組み合わせて構築されるが、原位置を留めどめるものは認められず、故意に破壊された状態で、堅穴内に散乱する。炉の背面から出土した炉石は堅穴内の他の破片と接合して完形に復元することができる。これは角閃石安山岩の円礫の一面面を平坦に整形したもので、大きさは長さ30cm、幅17cm、厚さ10cm。他には平坦面を作り出したもの、片面あるいは一部が焼けているもの、熔融したスラグが付着するものがあり、すべて炉石に用いられたものだろう。出土炉石は少なくとも12個以上は用いられていたと推定される。また炉石の片面に焼土化した粘土が付着するものがあることから、炉石の固定あるいは表面の被覆に粘土を用いたらしい。炉底は楕円形を呈し、規模は65×40cm、深さ15cmの範囲で皿状にくぼみ、焼成を受けて赤変硬化している。炉底面は南南西にやや傾斜し、10cmほどの段差で落ち込み(P3)、長さ70cmほどの短い溝状のくぼみとなってP1に落ち込む。

P1 上端径135cm、深さ75cmの楕円状で、炉から直

接鉄滓を廃棄する坑と考えられる。鉄滓2kg。

P2 幅100cm、長さ100cm以上、深さ57cm。平面は胴張り長方形か。炉の東側に隣接する。最下層には炭化物を含む黒褐色土が堆積しており、これを掘り直して、最終的には鉄滓やスケールを多く含む褐色土が堆積。この鉄滓、スケールは北側からの流入あるいは投棄と考えられる。鉄滓5.56kg

P3 幅40cm、長さ68cm、深さ15cm。炉からP1への廃滓溝と判明した。鉄滓0.88kg。

P4 幅65cm、長さ70cm、深さ55cm。平面は長方形か。P2と並列する。最下層には炭化物が見られ、上位は周囲からの流入土が堆積する。ほぼ同形態のP2に比べて鉄滓量が少なく、0.18kg。

P5 48×40cm、深さ32cm。平面は不整形楕円形、底面は凹凸あり。P4と重複。鉄滓1.05kg。

P6 46×38cm、深さ27cm。鉄滓0.16kg。

P7 40×34cm、深さ42cm。鉄滓なし。

P8 径23cm、深さ26cm、底径8cmでくぼむ。鉄滓なし。

P9 径25cm、底径10cm、深さ14cm。鉄滓なし。底部平坦。

P10 径25cm、底径15cm、深さ24cm。鉄滓なし。底部平坦。P1は廃滓坑、P6~P10は柱穴と思われる。

その他 炉北東部の壁までの範囲に、細かい炭化物が床面に密着して検出された。炭置き場と考えられる。P2とP4の間、約80cmの空間には径30cmの範

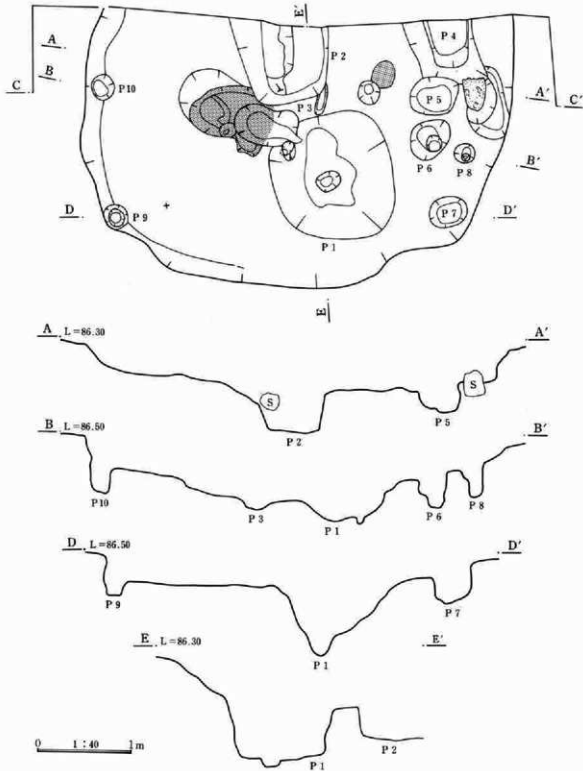


第231図 1号鍛冶跡断面

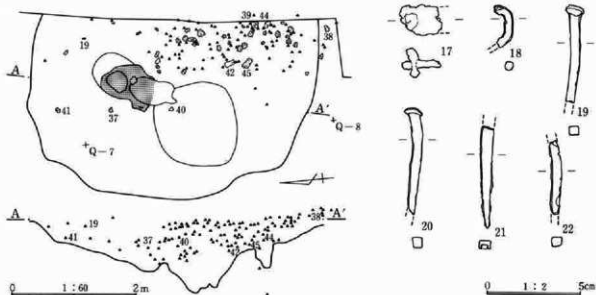
囲で床が焼け、この付近からスケールが多く検出された。P 5 の南側に長さ35cm、高さ25cmの腰が平坦面を上に向け床に埋め込まれている。鍛造作業の台

石か。

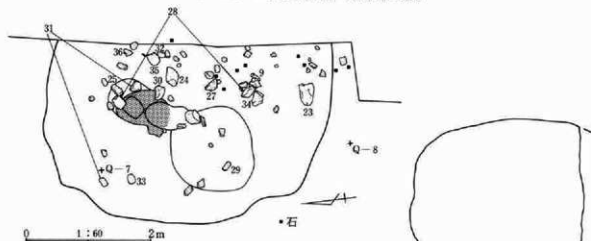
遺物 埋土から8～10世紀の土器出土。



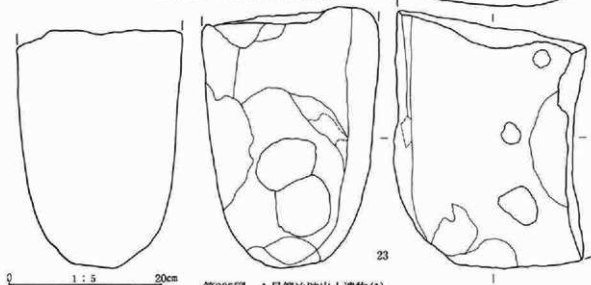
第232図 1号鍛冶跡



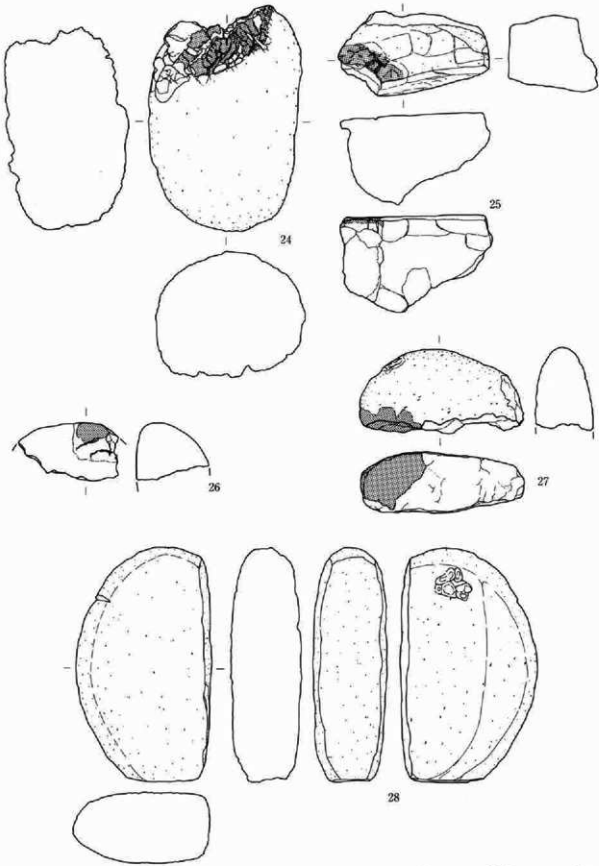
第233図 1号鍛冶跡鉄器・鉄滓出土状態



第234図 1号鍛冶跡石出土状態

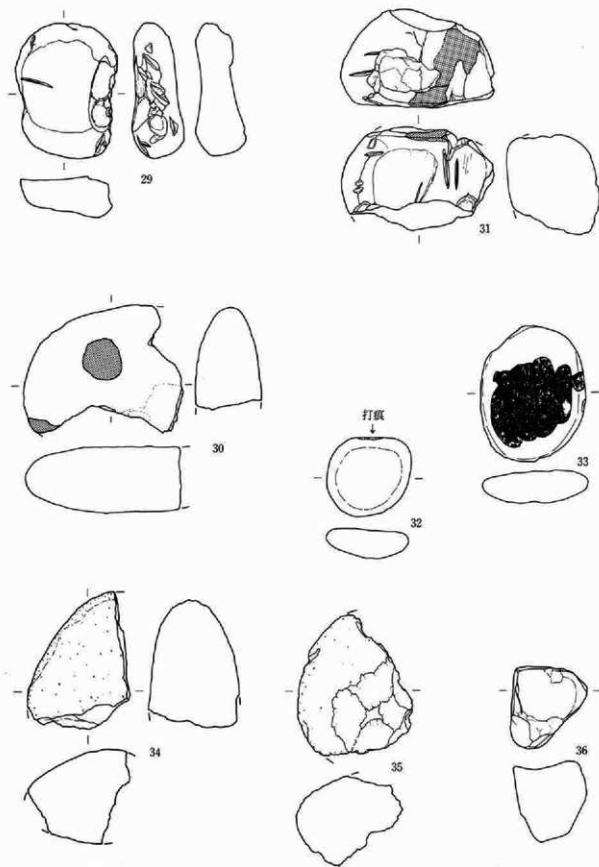


第235図 1号鍛冶跡出土遺物(1)



第236図 1号鍛冶跡出土遺物(2)

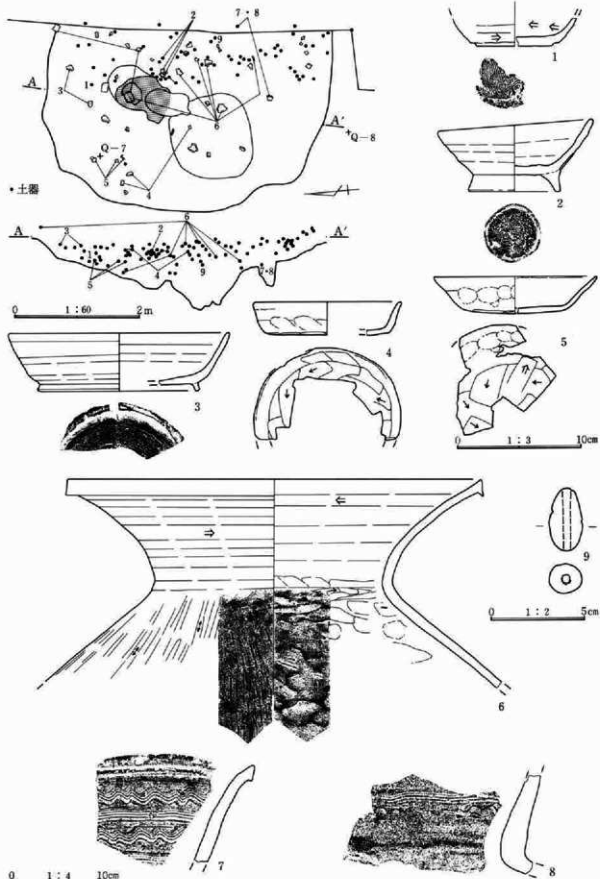
0 1:5 20cm



0 1 : 5 20cm

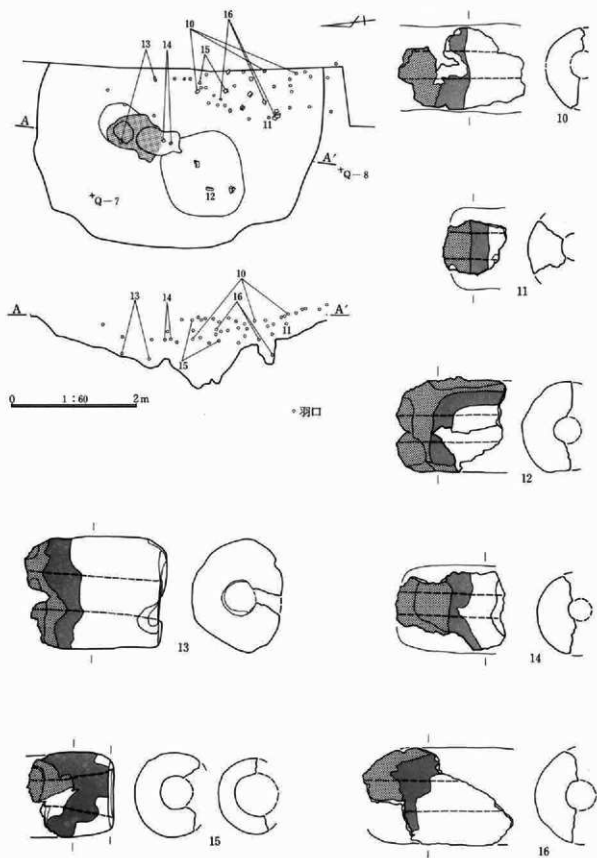
第237図 1号鍛冶跡出土遺物(3)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第238図 1号鍛冶跡土器出土状態及び出土遺物(4)

第3章 検出された遺構と遺物



0 1 : 60 2m *羽口 第239図 1号鍛冶跡羽口出土状態及び出土遺物(5)

(3) 掘立柱建物跡

概要 調査当初の遺構確認段階で24棟を登録したが、調査終了時点で18棟の存在が確認された。なお14号と15号については、掘立柱建物ではなく柱穴列として扱った。分布は、2区R-18グリッド付近と2区D-9グリッド付近を中心に見られる。前者は1～6号掘立柱建物が集中しており、次項で詳述するように中世～近世の屋敷跡を構成する建物と想定される。後者は主に古墳時代後期から平安時代にかけての独立した建物と思われ、竪穴住居群に伴うものだろう。なお2区中央部分から南寄りにかけて多数の柱穴らしきビットを検出したが、列を構成しないこと、規模が不均等であること、時期が限定できないことから建物復元はしていない。

1号掘立柱建物 (第241図)

位置 2区P-19

規模 3.8×3.94m (1×2間)

主軸方位 N-3°-E

柱穴計測値(cm)

上端径 深 下端径		上端径 深 下端径					
P 1	25×20	63	28	P 2	47	40	32×24
P 3	46	54	32	P 4			62
P 5	20×15		71	10			

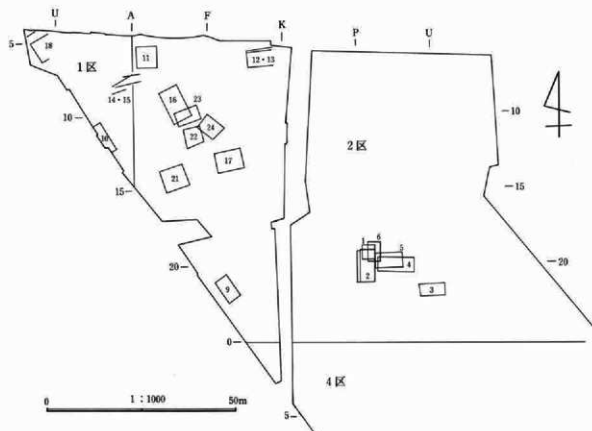
柱間寸法(cm)

P 1-P 2 190(6尺) P 2-P 3 190(6尺)

P 3-P 4 394(13尺) P 4-P 5 365(18尺)

P 1-P 5 390(13尺)

本建物跡は調査当初は後述する2号掘立柱建物跡の柱列に連続するものか、直交して建てられた5号



第240図 掘立柱建物位置図

第3章 検出された遺構と遺物

孤立柱建物跡にとまなうものにとらえていたが、柱列の方向や柱間寸法等の検討を行った結果、独立した小規模な建物との見方を強めた。第4章—4の建築学的考察では、この所見をもとに考察を行っている。ただし、この地点では複数の建物が度々建て替えを行ったらしく、柱穴が非常に多い。図示した以外にも多くの柱穴が検出されているが、柱筋や規模、柱間寸法の検討から消去法で残ったものを建物に伴う柱穴として取り扱ったものである。建物復元には慎重を期したつもりであるが、見落としや先入観による偏った復元の危惧がないわけではない。特に1号孤立柱建物跡に関しては、その感が強い。ここでは最も可能性が高いと判断した復元案であることを断っておく。

2号孤立柱建物 (第241～243図)

位置 2区P-19・20

規模 8.48×3.65m、1×4間

主軸方位 N-0°-E

柱穴計測値(cm)

上端径 深 下端径			上端径 深 下端径		
P 1	80×50	70 20	P 2	50×40	70 18
P 3	—	80 20	P 4	30	55 15
P 5	40	57 26	P 6	35	40 15
P 7	46×36	70 20	P 8	50×30	70 15
P 9	35	75 15	P 10	65	35 15

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	200(6.5尺)	P 2—P 3	250(8.5尺)
P 3—P 4	230(7.5尺)	P 4—P 5	185(6尺)
P 5—P 6	365(12尺)	P 6—P 7	190(6尺)
P 7—P 8	230(7.5尺)	P 8—P 9	225(7.5尺)
P 9—P 10	220(7尺)	P 1—P 10	355(12尺)

土間 南側の約2/3を占める。北側から南へ2段の掘りこみとなっているが、土層断面観察から北側は古い土間と考えられ、埋めて堅く締められた後、新たに南側を掘りこんで土間が構築されたことが判明している(第243図)。南側土間は、3.7m四方で壁は緩く外傾し、調査確認面からの深さは30cmを測る。

中央に小規模なピットとこれから北方にのびる浅い溝があり、その上に30～50cm大の礎が7点出土した。土間は、中央部がややくぼんでおり、その最も深い部分に小ピットが位置する。この特徴から、通常的生活空間としての土間ではなく、馬や牛の家畜小屋を想定することも可能だが、発掘調査で確定するに足る痕跡は確認できなかった。

北側の土間は南側土間と同様の形態と規模をもつ。南北方向の長さは不明だが、柱穴P 4とP 7を結ぶ線まで掘りこまれていたと仮定すれば、南側土間は柱穴P 5—P 6まで建物を拡張したのに伴って構築されたと考えられる。

なお、それぞれの土間の北辺中央には柱穴1基が掘りこまれている。

本建物跡は、数度の建て替えを行いながら、後述する3～8号孤立柱建物跡との組み合わせによって屋敷を構成したと想定されるが、その詳細については第4章に譲る。

出土遺物 土間埋土から磁石1点出土。

3号孤立柱建物 (第244図)

位置 2区S・T・U-21・22

規模 6.25×3.35m、1×4間

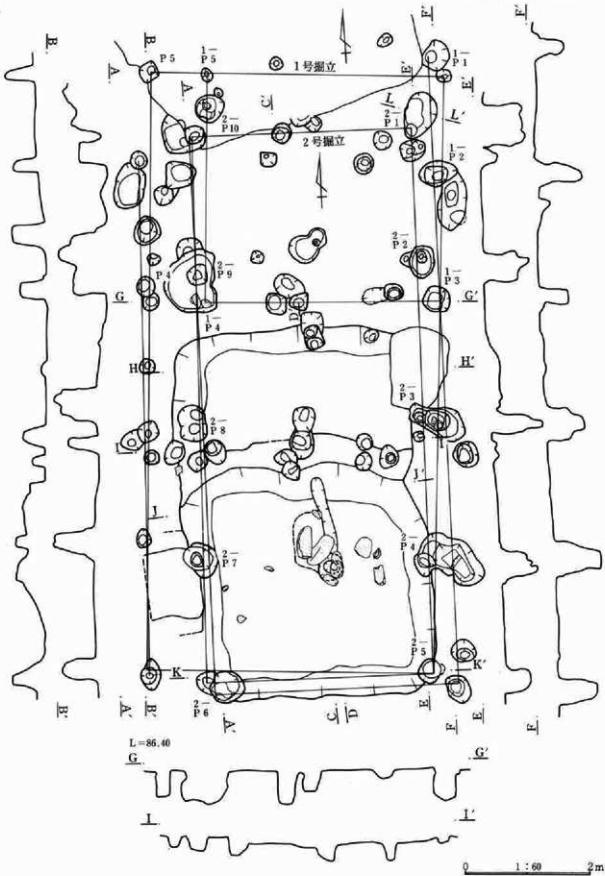
主軸方位 N-85°-E

柱穴計測値(cm)

上端径 深 下端径			上端径 深 下端径		
P 1	62×50	42 15	P 2	40	41 20
P 3	40	22 22	P 4	56×40	42 40×30
P 5	38	47 20	P 6	52	53 18
P 7	48	44 16	P 8	42	38 15
P 9	43	29 16	P 10	48×42	39 14

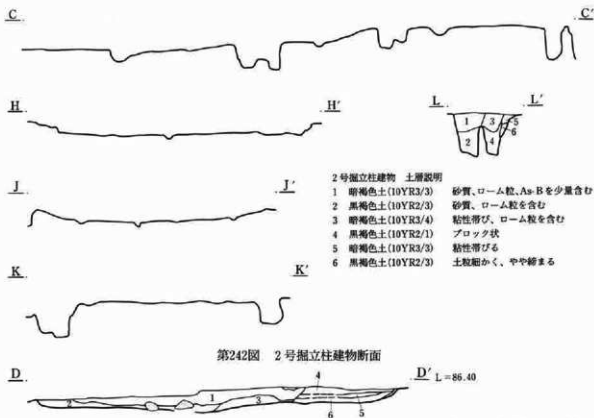
柱間寸法(cm)

P 1—P 2	150(5尺)	P 2—P 3	180(6尺)
P 3—P 4	175(6尺)	P 4—P 5	125(4尺)
P 5—P 6	320(11尺)	P 6—P 7	150(5尺)
P 7—P 8	190(6尺)	P 8—P 9	170(6尺)
P 9—P 10	180(6尺)	P 1—P 10	330(11尺)



第241図 1・2号掘立柱建物

第3章 検出された遺構と遺物



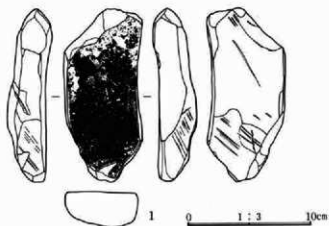
2号掘立柱建物 土層説明

- | | | |
|---|---------------|-------------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/3) | 砂質、ローム粒、As-Bを少量含む |
| 2 | 黒褐色土(10YR2/3) | 砂質、ローム粒を含む |
| 3 | 暗褐色土(10YR3/4) | 粘性帯び、ローム粒を含む |
| 4 | 黒褐色土(10YR2/1) | ブロック状 |
| 5 | 暗褐色土(10YR3/3) | 粘性帯びる |
| 6 | 黒褐色土(10YR2/3) | 土粒細かく、やや締まる |

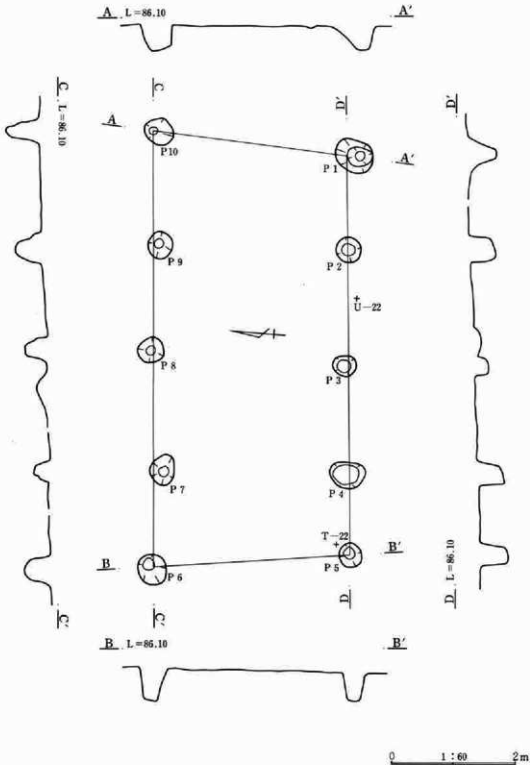
彫穴部分 土層説明

- | | | |
|---|---------------|---------------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/3) | As-Bを多く含み、鉄分凝集が見られる |
| 2 | 黒褐色土(10YR2/3) | 粘性帯び、小ローム塊と炭化物を含む |
| 3 | 黒褐色土(10YR2/3) | 砂質、小ローム塊を含む |
| 4 | 暗褐色土(10YR3/4) | やや硬質、As-Bとローム粒を少量含む |
| 5 | 黒褐色土(10YR2/3) | 堅く締まる、土間埋土 |
| 6 | 黒褐色土(10YR2/3) | やや軟質で、ローム粒は少ない |

0 1:60 2m



第243図 2号掘立柱建物断面及び出土遺物



第244図 3号掘立柱建物

第3章 検出された遺構と遺物

4号掘立柱建物(第245・246図)

位置 2区Q・R-19・20

規模 9.65×3.65m、1×5間

主軸方位 N-93°-E

柱穴計測値(cm)

上端径	深	下端径	上端径	深	下端径		
P 1	45	43	30×25	P 2	28	12	-
P 3	35	66	20	P 4	33	12	-
P 5	34	25	15	P 6	45×35	17	-
P 7	26	34	18×13	P 8	50×30	31	35×15
P 9	45×25	47	15	P 10	35×28	62	24
P 11	30	78	20×15	P 12	42×36	66	17
P 13	52×38	29	12	P 14	44×35	10	32
P 15	40	46	28×24				

柱間寸法(cm)

P 1-P 2	180(6尺)	P 1-P 3	200(7尺)
P 2-P 4	180(6尺)	P 3-P 5	190(6尺)
P 6-P 8	200(7尺)	P 7-P 8	190(6尺)
P 8-P 9	200(7尺)	P 9-P 10	365(12尺)
P 10-P 11	190(6尺)	P 11-P 12	195(6尺)
P 12-P 13	185(6尺)	P 13-P 14	190(6尺)
P 14-P 15	175(6尺)	P 1-P 15	355(12尺)

5号掘立柱建物(第245・246図)

位置 2区Q・R-19・20

規模 7.30×4.10m、1×3間

主軸方位 N-90°-E

柱穴計測値(cm)

上端径	深	下端径	上端径	深	下端径		
P 1	40×35	63	28	P 2	47	40	32×24
P 3	46	54	32	P 4	44	62	25×18
P 5	40×30	71	15	P 6	46×36	55	18×14
P 7	38	58	18	P 8	47	72	24
P 9	50×42	65	20				

P 3は基礎に礎を据える。

柱間寸法(cm)

P 1-P 2	225(7尺)	P 2-P 3	265(9尺)
P 3-P 4	240(8尺)	P 4-P 5	410(14尺)

P 5-P 7 240(8尺) P 7-P 8 260(9尺)

P 8-P 9 215(7尺) P 1-P 9 385(13尺)

6号掘立柱建物(第245・246図)

位置 2区P・Q-18・19

規模 5.15×3.15m、1×3間と思われる。

主軸方位 N-5°-E

柱穴計測値(cm)

上端径	深	下端径	上端径	深	下端径		
P 1	40	30	13	P 2	48×40	56	18
P 3	35	62	23	P 4	30	33	25
P 5	40×32	40	13	P 6	32×27	60	10
P 7	65×47	66	12				

P 4の基礎には礎を据え、P 5には柱根を押える礎を込める。

柱間寸法(cm)

P 1-P 2	360(12尺)	P 2-P 3	170(6尺)
P 3-P 4	190(6尺)	P 4-P 5	160(5尺)
P 6-P 7	190(6尺)	P 1-P 7	145(5尺)

重複遺構 5号柱を切る。

7号・8号掘立柱建物 1号・2号掘立柱建物と同一建物の柱列と判断したため、欠番とした。

9号掘立柱建物(第247図)

位置 2区F・G-20~22

規模 6.70×4.00m、2×3間

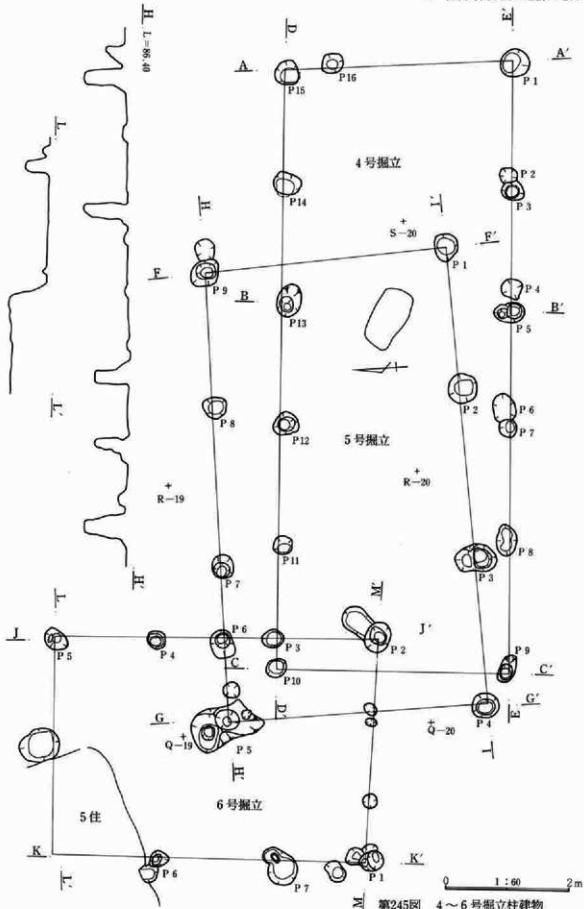
主軸方位 N-34°-W

柱穴計測値(cm)

上端径	深	下端径	上端径	深	下端径		
P 1	60×50	32	43×22	P 2	48	40	30×15
P 3	54	43	35	P 4	45×37	58	24
P 5	55	37	32×22	P 6	50	25	30
P 7	44	38	23	P 8	38	42	22×15
P 9	45	53	30×20	P 10	47	32	21
P 11	30	61	22	P 12	44	58	26

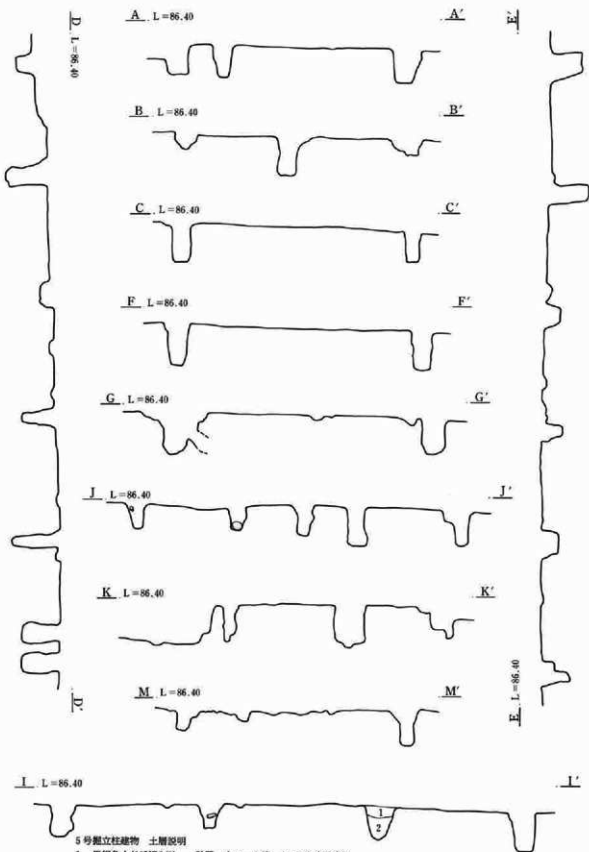
柱間寸法(cm)

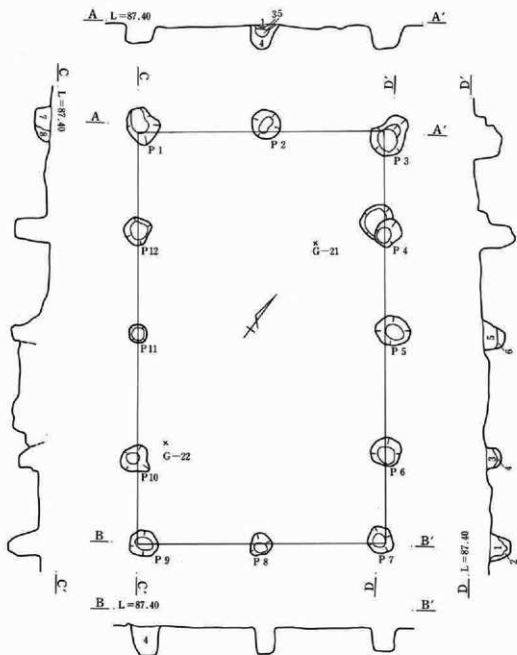
P 1-P 2	200(7尺)	P 2-P 3	200(7尺)
P 3-P 4	160(5尺)	P 4-P 5	155(5尺)



第245図 4~6号掘立柱建物

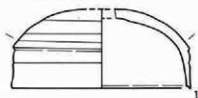
第3章 検出された遺構と遺物





9号獨立柱建物 土層説明

- | | | |
|---|---------------|------------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質でローム粒含む |
| 2 | 黄褐色土(10YR5/6) | ローム粒主体 |
| 3 | 褐色土(10YR4/4) | 砂質でローム粒含む |
| 4 | 黒褐色土(10YR2/3) | 軟質で粘性を帯び、ローム粒を含む |
| 5 | 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質でローム粒多い |
| 6 | 黒褐色土(10YR2/2) | ローム粒含む |
| 7 | 黒褐色土(10YR2/3) | 礫名山輝石を含む |
| 8 | 黒褐色土(10YR2/3) | A&C、ローム粒を含む |



0 1 : 60 2m

0 1 : 3 10cm

第247図 9号獨立柱建物及び出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

P 5-P 6	180(6尺)	P 6-P 7	145(5尺)
P 7-P 8	190(6尺)	P 8-P 9	185(6尺)
P 9-P 10	130(4尺)	P 10-P 11	210(7尺)
P 11-P 12	150(5尺)	P 1-P 12	180(6尺)

出土遺物 柱穴より須恵器杯蓋約1/3破片が出土。

重複遺構 柱穴P10とP11が10号住に切られる。

10号掘立柱建物 (第248図)

位置 1区W・X-9~11

規模 8.70m、桁行4間

主軸方位 N-28°-W

柱穴計測値(cm)

上端径		深	下端径	上端径		深	下端径
P 1	74	62	50	P 2	82×65	72	45×40
P 3	87×58	93	52	P 4	65	85	45
P 5	88	96	40	P 6	60	40	50

柱間寸法

P 1-P 2	220(7尺)	P 2-P 3	210(7尺)
P 3-P 4	200(7尺)	P 4-P 5	240(8尺)
P 5-P 6	185(6尺)		

重複遺構 25号住に切れ、29号住を切る。

11号掘立柱建物 (第249図)

位置 2区A・B-4~6

規模 5.60×5.50m、2×2間

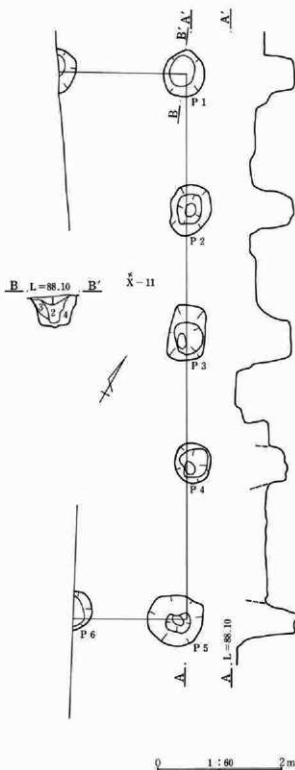
主軸方位 N-7°-W

柱穴計測値(cm)

上端径		深	下端径	上端径		深	下端径
P 1	115×90	67	25×18	P 2	168×90	72	40×27
P 3	105×80	28	35	P 4	120×70	60	75×28
P 5	93×63	30	35	P 6	98×90	75	46
P 7	63	42	35×28	P 8	68	40	35
P 9	122×63	65	25	P 10	122×63	62	36

柱間寸法(cm)

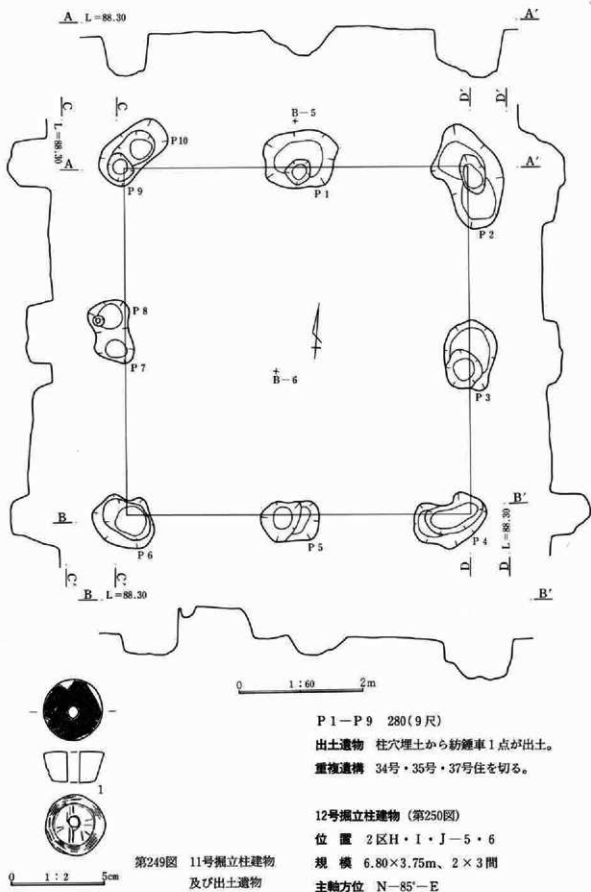
P 1-P 2	280(9尺)	P 2-P 3	310(10尺)
P 3-P 4	220(7尺)	P 4-P 5	300(10尺)
P 5-P 6	255(8尺)	P 6-P 7	270(9尺)
P 7-P 9	285(9尺)	P 8-P 10	270(9尺)



10号掘立柱建物 土層説明

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | ロームの凝灰、稀名山礫石を含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 均質で、夾雑物少ない |
| 3 褐色土(10YR4/4) | 小ローム塊を少量含む |
| 4 褐色土(10YR4/4) | ローム粒、小ローム塊を含む |

第248図 10号掘立柱建物



第249図 11号掘立柱建物
及び出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

柱穴計測値(cm)

上端径		深	下端径		上端径		深	下端径	
P 1	32	20	15	P 2	44	35	22		
P 3	45	28	16	P 4	32	40	22×13		
P 5	28	13	10	P 6	32×25	23	18×13		
P 7	50×40	33	25×18	P 8	43	51	16		
P 9	42	46	16						

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	250(8尺)	P 2—P 3	220(7尺)
P 3—P 4	210(7尺)	P 4—P 5	180(6尺)

P 5—P 6 195(6尺) P 6—P 7 205(7尺)

P 7—P 8 225(7尺) P 8—P 9 210(7尺)

P 1—P 9 390(12尺)

重複遺構 13号掘立柱建物とは同一建物と思われる。

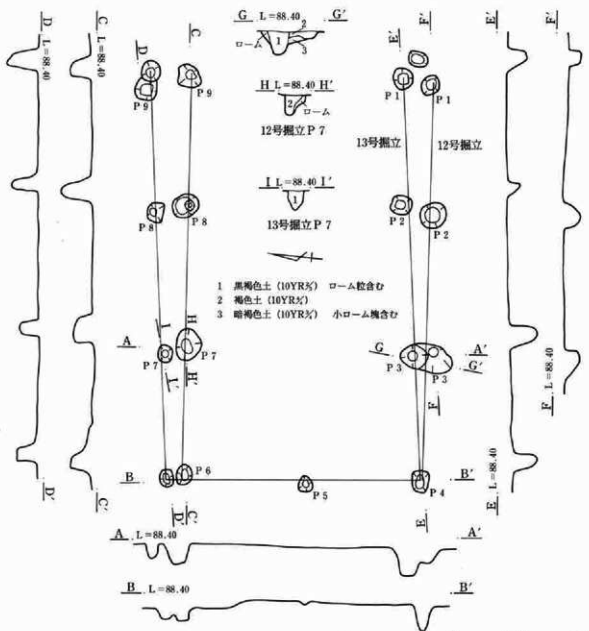
13号掘立柱建物(第250図)

位置 2区I・J-5・6

規模 6.45×4.04m、2×3間

主軸方位 N-82'-E

柱穴計測値(cm)



第250図 12・13号掘立柱建物

	上端径	深	下端径	上端径	深	下端径	
P 1	34	32	16	P 2	36	57	18
P 3	44	14	16	P 4	34×26	41	24×13
P 5	28	13	10	P 6	28×18	35	16×10
P 7	30	30	12	P 8	32×25	42	12
P 9	34	54	18				

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	200(7尺)	P 2—P 3	245(8尺)
P 3—P 4	200(7尺)	P 4—P 5	180(6尺)
P 5—P 6	224(7.5尺)	P 6—P 7	200(7尺)
P 7—P 8	225(7.5尺)	P 8—P 9	190(6尺)
P 1—P 9	408(14尺)		

14号・15号柱穴列 (第251図)

本遺構は柱穴の規模が一樣でないこと、直角方向の柱穴列が認められないことから、掘立柱建物ではなく棚列に近い遺構と推定される。

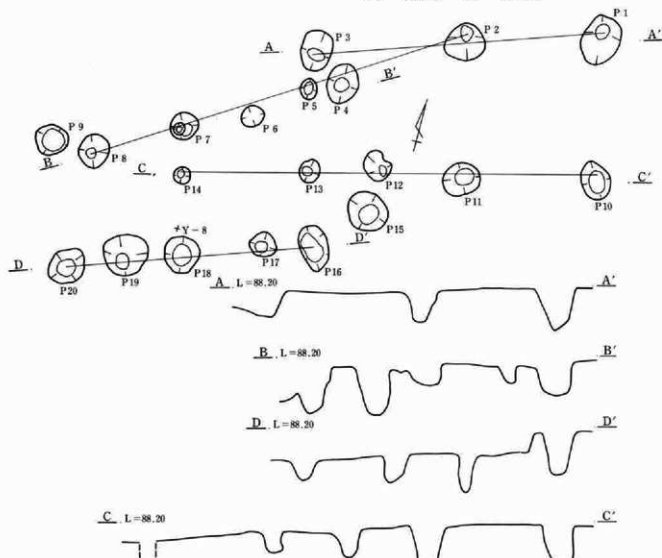
位置 1区X・Y-6~8、2区A-6・7

主軸方向

P 1—P 3 N-80°-E P 2—P 8 N-59°-E
P 10—P 14 N-77°-E P 16—P 20 N-70°-E

柱穴計測値(cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	80×60	73	20
P 2	66×60	64	26
P 3	65×48	43	28×16



0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物

P 4	65×50	67	26
P 5	32	40	22×12
P 6	36	65	—
P 7	48	35	20
P 8	52	43	12
P 9	50	57	36
P10	58	62	33×26
P11	58	77	30
P12	50	45	16
P13	28	30	16
P14	21	—	15
P15	68	69	35
P16	74×46	57	48×28
P17	45	27	21
P18	54	33	35
P19	70	76	25
P20	64	70	30

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	215(7尺)	P 2—P 3	245(8尺)
P 2—P 4	220(7尺)	P 4—P 7	275(9尺)
P 7—P 8	150(5尺)	P10—P11	215(7尺)
P11—P13	250(8尺)	P13—P14	200(7尺)
P16—P18	210(7尺)	P18—P20	185(6尺)

重複遺構 24号・40号住を切る。

16号掘立柱建物(第252図)

位置 2区B・C・D-7~9

規模 9.35×5.20m、3×4間

主軸方位 N-23°-W

柱穴計測値(cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	74	50	54×40
P 2	90×70	62	26×20
P 3	62	68	30
P 4	90	69	28×20
P 5	102×76	63	52×38
P 6	88	72	28
P 7	90	67	50×32

P 8	80	58	38×25
P 9	(48)	12	(22)
P10	50	63	33
P11	38	67	25
P12	56	75	34×24
P13	75×52	64	60×40
P14	72×64	111	30×25

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	170(6尺)	P 2—P 3	140(5尺)
P 3—P 4	165(6尺)	P 4—P 5	225(7尺)
P 5—P 6	220(7尺)	P 6—P 7	230(8尺)
P 7—P 8	215(7尺)	P 8—P 9	155(5尺)
P 9—P10	365(12尺)	P10—P12	230(8尺)
P12—P13	225(7尺)	P13—P14	250(8尺)
P 1—P14	230(8尺)		

重複遺構 52号・53号・54号住を切る。

17号掘立柱建物(第253図)

位置 2区F・G・H-11~13

規模 7.40×5.50m、2×3間

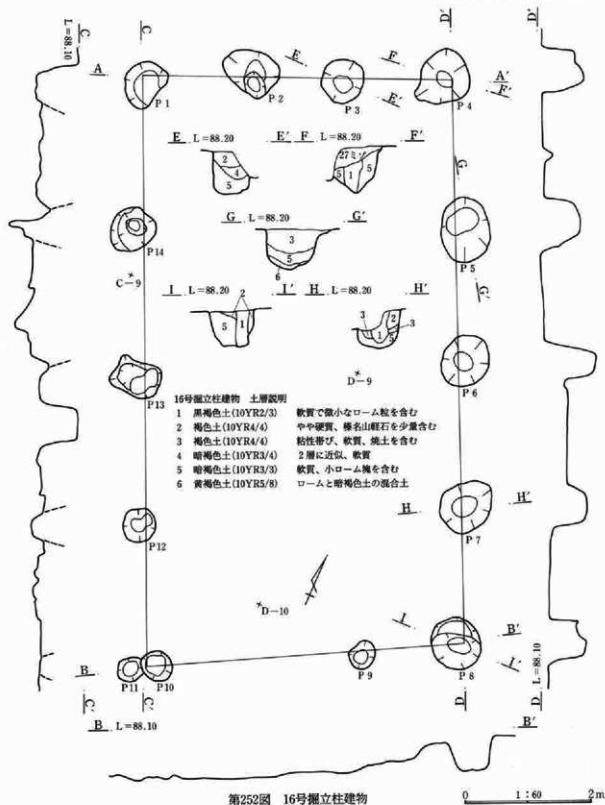
主軸方位 N-78°-E

柱穴計測値(cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	74×58	87	17
P 2	83×64	80	30×16
P 3	64	85	20
P 4	56	72	25×15
P 5	50	84	13
P 6	90×65	83	15
P 7	65	64	28
P 8	82×65	78	18×13
P 9	60×50	63	20×15
P10	80×57	55	18

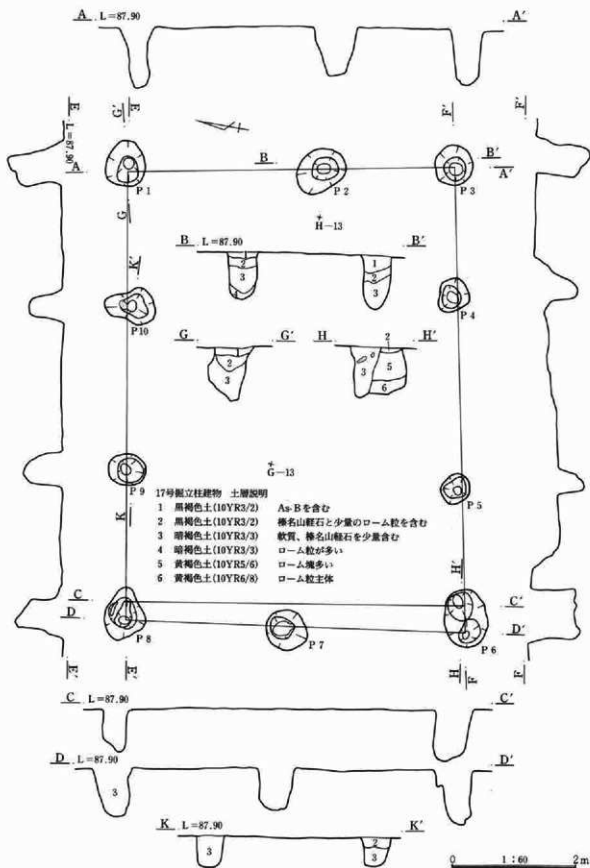
柱間寸法(cm)

P 1—P 2	310(10尺)	P 2—P 3	210(7尺)
P 3—P 4	205(7尺)	P 4—P 5	305(10尺)
P 5—P 6	230(8尺)	P 6—P 7	295(10尺)
P 7—P 8	255(8尺)	P 8—P 9	240(8尺)

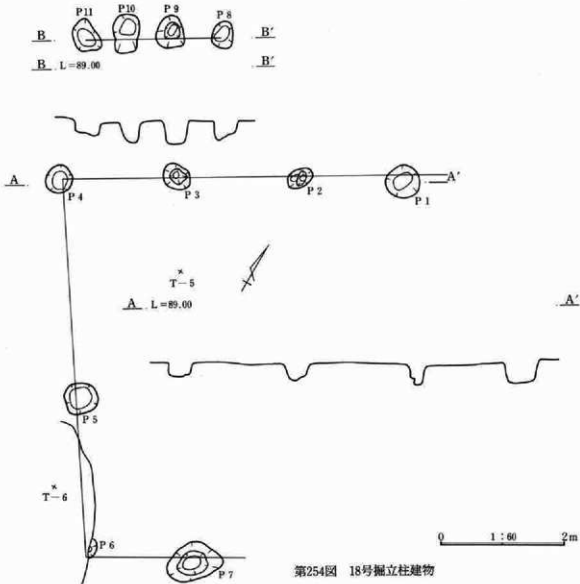


P9-P10 260(7尺) P1-P10 230(8尺)
重複遺構 190号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

18号掘立柱建物(第254図)
位置 1区S・T-3~5
規模 梁間5.80m、2×(3)間



第253図 17号掘立柱建物



第254図 18号掘立柱建物

主軸方位 N-58°-E

柱穴計測値(cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	52	37	30×20
P 2	42×28	29	23×15
P 3	48	36	26
P 4	48	18	26
P 5	54	20	36
P 6	—	32	—
P 7	90×58	33	26×20
P 8	40×33	25	—
P 9	46×52	35	—
P 10	40×62	60	—

P 11 52×40 30 —

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	150(5尺)	P 2—P 3	205(7尺)
P 3—P 4	185(6尺)	P 4—P 5	340(11尺)
P 5—P 6	240(8尺)	P 6—P 7	180(6尺)

P 8～P 11は、P 1～P 4 柱列と方位が一致しており、北西側に約 2 m 離れて並行する。柱間寸法は 80 cm 等間。本遺構に伴う柵列の可能性がある。

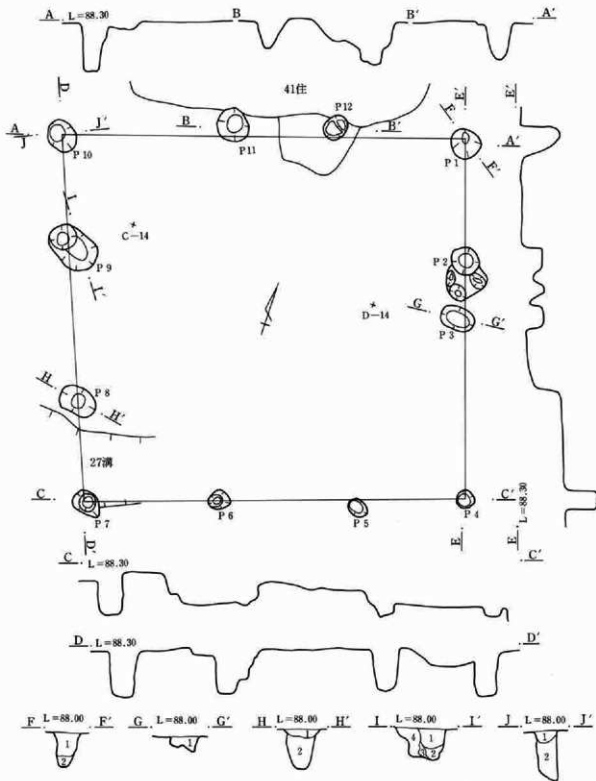
21号掘立柱建物 (第255図)

位置 2区B・C・D-13・14

規模 6.40×5.80m、3×3間(東柱列は2間か)

主軸方位 N-73°-E

第3章 検出された遺構と遺物



21号掘立柱建物 土層説明

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 地山土粒の流れ込み |
| 2 暗褐色土(10YR3/3) | 均質でやや軟質 |
| 3 暗褐色土(10YR3/3) | 2層にローム粒が加わる |
| 4 黄褐色土(10YR5/4) | ローム粒主体、人為的埋土 |

0 1:60 2m

第255図 21号掘立柱建物

柱穴計測値 (cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	48	64	16×12
P 2	95×65	32	24
P 3	55×35	31	36×25
P 4	27	(105)	18
P 5	33×25	(75)	21
P 6	35×30	30	10
P 7	52×45	70	18
P 8	58×40	67	23
P 9	85×55	48	20
P 10	53×43	76	25
P 11	50×45	50	30×25
P 12	42×35	66	28

柱間寸法 (cm)

P 1-P 3	290(10尺)	P 3-P 4	290(10尺)
P 4-P 5	180(6尺)	P 5-P 6	215(7尺)
P 6-P 7	210(7尺)	P 7-P 8	160(5尺)
P 8-P 9	260(9尺)	P 9-P 10	160(6尺)
P 10-P 11	270(9尺)	P 11-P 12	160(5尺)
P 1-P 12	210(7尺)		

重複遺構 41号住を切る。

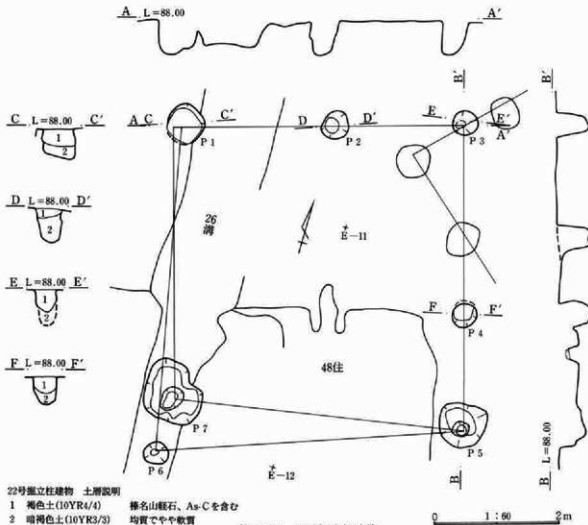
22号掘立柱建物 (第256図)

位置 2区D・E-10~12

規模 4.90×4.40m、北柱列2間、東柱列は3間の可能性あり。他は不明。

主軸方位 N-16°-W

柱穴計測値 (cm)



第3章 検出された遺構と遺物

	上端径	深さ	下端径
P 1	63	49	55
P 2	45	52	26
P 3	40	54	16×13
P 4	40	50	36
P 5	80	44	15
P 6	48	(4)	—
P 7	100×80	(70)	40×18

柱間寸法(cm)

P 1—P 2	240(8尺)	P 2—P 3	205(7尺)
P 3—P 4	300(10尺)	P 4—P 5	188(6尺)
P 5—P 6	485(16尺)		
P 1—P 6	530(18尺)		

重複遺構 26号溝に切れられ、49号住より古い可能性あり。48号住、55号住との関係は不明。

23号掘立柱建物 (第257図)

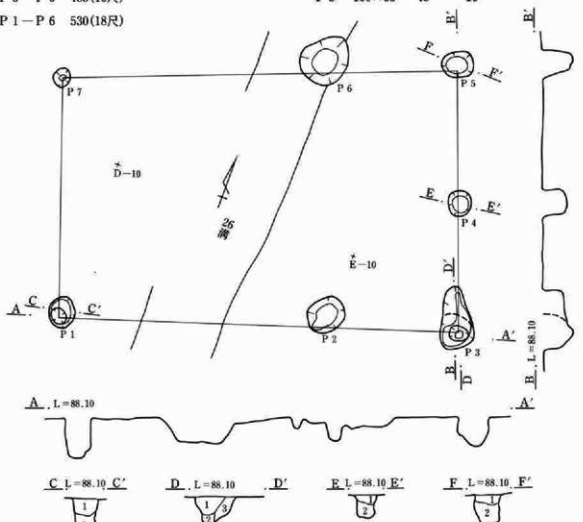
位 置 2区C・D・E-8~10

規 模 6.35×4.40m 2×3間

主軸方位 N-70°-E

柱穴計測値(cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	52	63	30×25
P 2	63×52	35	48×30
P 3	100×53	48	16



23号掘立柱建物 土層説明

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 礫山軽石、As-Cを含む |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ローム粒、小ローム塊を多く含む |
| 3 褐色土(10YR4/4) | 小ローム塊を多く含む |

第257図 23号掘立柱建物

P 4 38 38 27
 P 5 52×40 47 35×25
 P 6 85×73 66 43×35
 P 7 30×25 (7) 16

P5-P6 210(7尺) P6-P7 220(7尺)
 P1-P7 330(11尺)

重複遺構 54号住を切る。

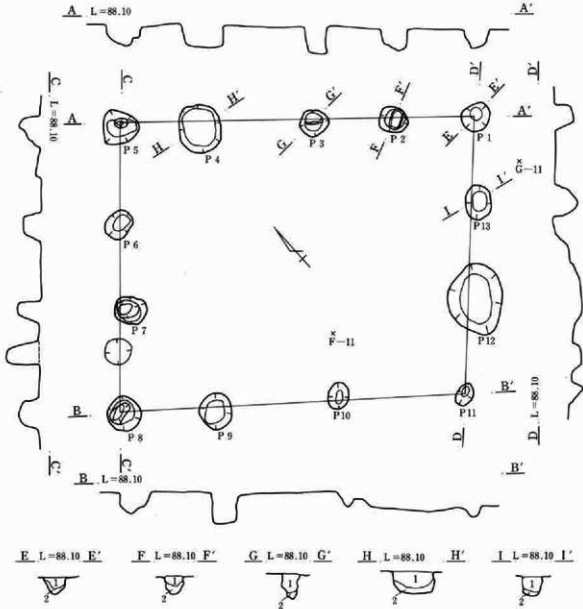
柱間寸法(cm)

P1-P2 420(14尺) P2-P3 215(7尺)
 P3-P4 210(7尺) P4-P5 230(8尺)

24号掘立柱建物 (第258図)

位置 2区E・F-9~11

規模 5.45×4.60m、3×3間(北東柱列は4間)



24号掘立柱建物 土層説明

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 褐色土(10YR4/4) | 礫名山群石、As-Cを含む |
| 2 褐色土(10YR4/4) | ローム粒、小ローム塊を多く含む |

第258図 24号掘立柱建物

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物

主軸方位 N-47-W

柱穴計測値 (cm)

	上端径	深さ	下端径
P 1	48×43	29	20
P 2	47×40	33	25×14
P 3	45	45	28×18
P 4	75	35	62×50
P 5	58×52	34	20×14
P 6	47×38	30	30×22
P 7	52×43	34	23×16
P 8	55	32	26×12
P 9	60×50	50	36×27
P 10	42×32	23	23×12
P 11	37×28	(45)	18×12
P 12	115×86	(48)	78×50
P 13	55×40	38	32×24

柱間寸法 (cm)

P 1-P 2	120(4尺)	P 2-P 3	123(4尺)
P 3-P 4	190(6尺)	P 4-P 5	120(4尺)
P 5-P 6	150(5尺)	P 6-P 7	150(5尺)
P 7-P 8	160(5尺)	P 8-P 9	150(5尺)
P 9-P 10	195(7尺)	P 10-P 11	200(7尺)
P 11-P 13	290(10尺)	P 1-P 13	140(5尺)

重複遺構 57号住に切られる。

(4) 竪穴遺構

1号竪穴遺構・2号竪穴遺構

2号掘立柱建物の土間に変更

3号竪穴遺構 (第259図)

位置 2区H・I-23・24グリッド

平面形 不整長方形 規模 4.2×2.8m

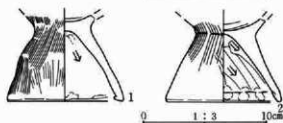
壁高 20cm 主軸方位 N-60°-E

床面 凹凸のある水平面で、硬化面は見られない。

堆積土 自然堆積の黒色土、As-Cが混入する。

遺構重複関係 なし。

遺物 古墳時代前期の台付甕の脚部2点が出土。



第259図 3号竪穴遺構及び出土遺物

4号竪穴遺構 (第260図)

位置 2区N・O-5・6グリッド

平面形 方形か。 規模 (3.7)×-m

壁高 30cm 主軸方位 不明

床面 全体に踏み固めによる硬化。凹凸は少ない。

柱穴 壁際にピット5基検出。いずれも柱穴と考えられる。P1底面の2カ所のくぼみとP2とP3は対称位置にあり、柱建て替えの痕跡だろう。

上端径 深さ 下端径 (cm)

P1 72×40 40×33 15×8

P2 30×25 37 10

P3 25 36 8

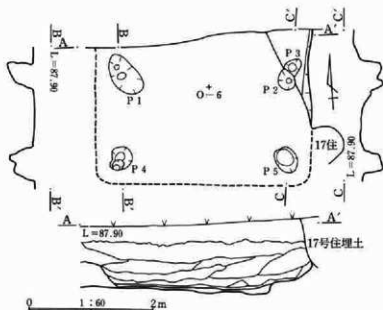
P4 40×35 43 8

P5 40×35 31 25

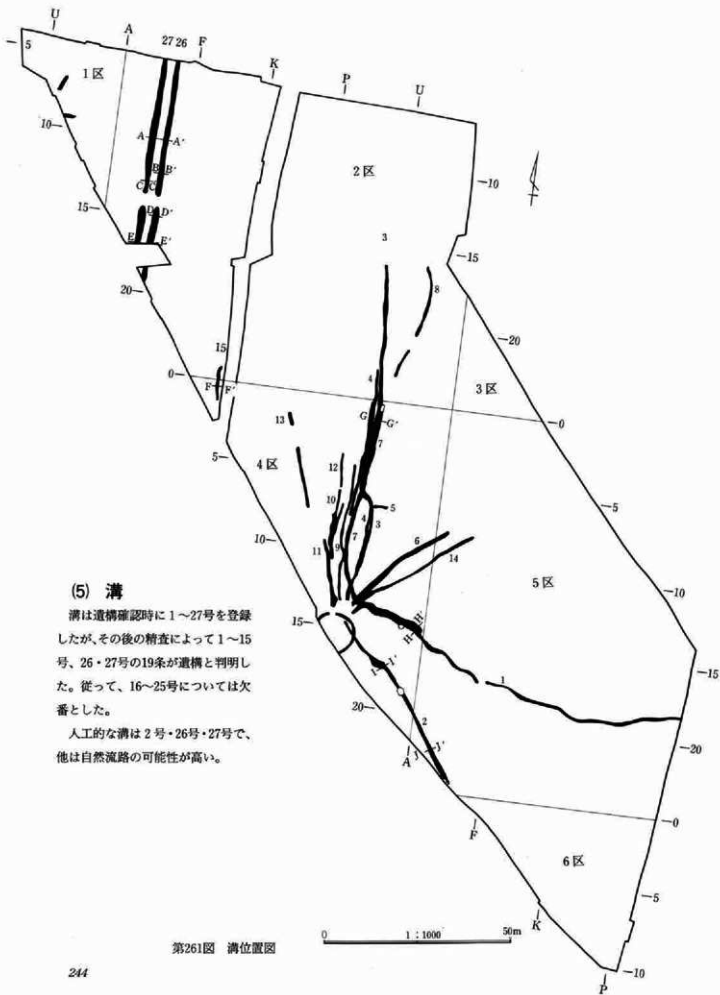
堆積土 10層ほど分けられるが、いずれもローム塊を多く含む人為的埋土である。切り込む17号住埋土に比べて軟質で粘性もない。

遺構重複関係 17号住居跡に切られる。

遺物 なし。



第260図 4号竪穴遺構



(5) 溝

溝は遺構確認時に1～27号を登録したが、その後の精査によって1～15号、26・27号の19条が遺構と判明した。従って、16～25号については欠番とした。

人工的な溝は2号・26号・27号で、他は自然流路の可能性が高い。

第261図 溝位置図

1号溝 (第261・262・265図)

位置 4区・5区

走向 ほぼ東西方向で、東から西方向に蛇行しながら傾斜下降する。

規模 最大幅180cm、深さ55cm。

断面形 浅い菜研棚状。

堆積土 黒〜暗褐色土の自然堆積。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 管玉1点。

2号溝 (第261・262図)

位置 4区・5区・6区

走向 南東から北西へ直線的に傾斜下降する。

規模 最大幅200cm、深さ35cm。

断面形 浅い蒲鉾状。

堆積土 暗褐色土の自然堆積。

遺構重複関係 28号土坑に切られる。

出土遺物 なし。

3号溝 (第261図)

位置 2区・4区

走向 北から南方向へ一部屈曲して傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の浅間山軽石As-B(降下推定1108年)が堆積し、硬化する。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 なし。

4号溝 (第261図)

位置 2区・4区

走向 3号溝に並行して、北から南方向へ一部屈曲して傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 なし。

5号溝 (第261図)

位置 4区

走向 東西方向に5mほどが検出された。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 なし。

6号溝 (第261図)

位置 4区・5区

走向 北東から南西方向に一部屈曲して傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 14号溝。

出土遺物 なし。

7号溝 (第261図)

位置 2区・4区

走向 3号溝に並行して、北から南方向へ直線的に傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 3・4号溝。

出土遺物 なし。

8号溝 (第261図)

位置 2区

走向 北から南方向へ蛇行して傾斜下降する。一部断続。

規模 最大幅80cm、深さ20cm。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

9～13号溝 (第261図)

位置 4区

走向 北から南方向に一部屈曲して傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 なし。

出土遺物 なし。

14号溝 (第261図)

位置 4区・5区

走向 北東から南西方向に直線的に傾斜下降する。

規模 計測不可。底面のみ検出。

堆積土 底面に2次堆積の軽石As-Bが堆積し、硬化する。

遺構重複関係 6号溝。

出土遺物 なし。

15号溝 (第261・262図)

位置 2区・4区

走向 北から南方向に直線的に傾斜下降する。

規模 最大幅60cm、深さ40cm。

堆積土 ロームの多い暗褐色土の自然堆積。

遺構重複関係 6号住居跡を切る。

出土遺物 なし。

26号溝 (第263～265図)

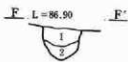
位置 2区D-6～19

走向 南北方向に59mが検出され、D-18グリッドで3mの断絶部分が認められる。

規模 最大幅160cm、深さ70cm。

断面形 箱梁研堀状。

堆積土 暗褐色土主体の自然堆積で、時期判定の基準となる純層テフラは認められない。一部に掘り直した土層堆積状況を見せる(第264図、セクションB-B')。



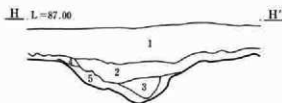
15号溝 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 軟質、全体にローム粒含む
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 硬質、酸化鉄凝集見られる



7号溝 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 粒子細かく軟質で粘性帯びる
- 2 赤褐色土(10YR5/6) 酸化鉄の凝集が著しい
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 砂質で硬質



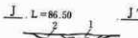
1号溝 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR4/3) 砂質、As-Bを含む
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 不均質で雑名山軽石を少量含む
- 3 黒褐色土(7.5YR2/2) 2層に近いが、色調暗い
- 4 暗褐色土(10YR4/3) 2層に近いが、やや粘性を帯びる
- 5 褐色土(10YR5/6) 均質で軽石を含まない



2号溝 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 粒子細かく軟質で粘性帯びる
- 2 褐色土(10YR4/4) 1層に近いが、As-Cを少量含む



0 1:50 2m

第262図 1・2・8・15号溝土層断面

遺構重複関係 38号住・49号住・50号住・54号住を切り、47号住、16号・21号～23号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。

出土遺物 第265図5～7のように重複する竪穴住居跡からの流れ込みと思われる遺物が多いが、1～4の須恵器、灰軸陶器は9世紀代のものであり、周囲の竪穴住居跡が古墳時代に属することから、これらは本溝に伴う遺物と考えられる。

27号溝 (第263・264・266・267図)

位置 2区C-6～16

走向 南北方向に50mが検出され、26号溝と同様にC-18グリッドで3mの断絶部分が認められる。

規模 最大幅150cm、深さ85cm。

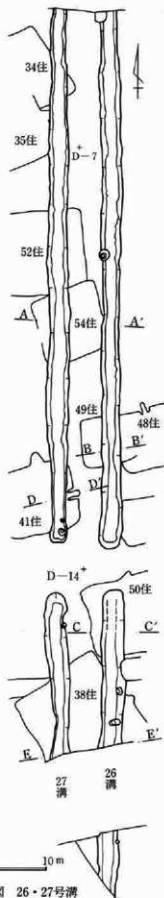
断面形 箱梁研細状。

堆積土 暗褐色土主体の自然堆積で、時期判定の基準となる純層テフラは認められない。一部に掘り直した土層堆積状況を見せる(第264図、セクションE-E')。

遺構重複関係 34号住・35号住・38号住・41号住・52号住・54号住を切り、16号・21号・23号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。

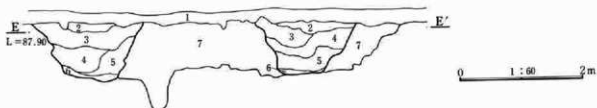
出土遺物 第266図3や第267図21～24のように重複する竪穴住居跡からの流れ込みと思われる古墳時代の土器を除けば9世紀代のものが主体を占めており、本溝に伴う遺物と考えられる。特に須恵器杯類の多いことが注目される。

26号溝と27号溝は2～2.3mの間隔を空けて平行しており、土橋状の断絶部をもつ一連の遺構であるのは間違いない。本遺構は第5章2で述べるように、北側に隣接する今井道上遺跡(1994 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上遺跡」)で検出された矩形に屈曲する溝と連続するもので、更に南側にそのまま延びることが判明している(前橋市教育委員会教示)。これらから本溝は、西側区域を囲繞する方形区画の溝と推測される。



第263図 26・27号溝

第3章 検出された遺構と遺物



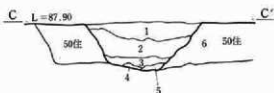
26・27号溝 土層説明(E)

- | | | |
|---|---------------|----------------|
| 1 | 表土層 | |
| 2 | 黒褐色土(10YR3/2) | 不均質で礫名山軽石を少量含む |
| 3 | 褐色土(10YR4/4) | 2層とほぼ同質 |
| 4 | 暗褐色土(10YR3/4) | |
| 5 | 暗褐色土(10YR3/4) | 4層より色調明るい |
| 6 | 褐色土(10YR4/4) | ローム塊を少量含む |
| 7 | 暗褐色土(10YR3/4) | 38号住居跡堆積土層 |



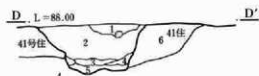
(B)

- | | | |
|---|---------------|---------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質で礫名山軽石を少量含む |
| 2 | 褐色土(10YR4/4) | 1層に近く、焼土を少量含む |
| 3 | 暗褐色土(10YR3/3) | 2層とほぼ同質 |
| 4 | 49号住居跡堆積土層 | |



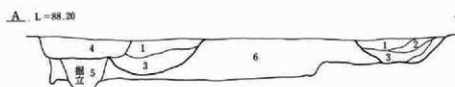
(C)

- | | | |
|---|---------------|---------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質で礫名山軽石を少量含む |
| 2 | 褐色土(10YR4/4) | 1層に近く、焼土を少量含む |
| 3 | 暗褐色土(10YR3/3) | 2層とほぼ同質 |
| 4 | 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊主体 |
| 5 | 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊主体 |
| 6 | 50号住居跡堆積土層 | |



(D)

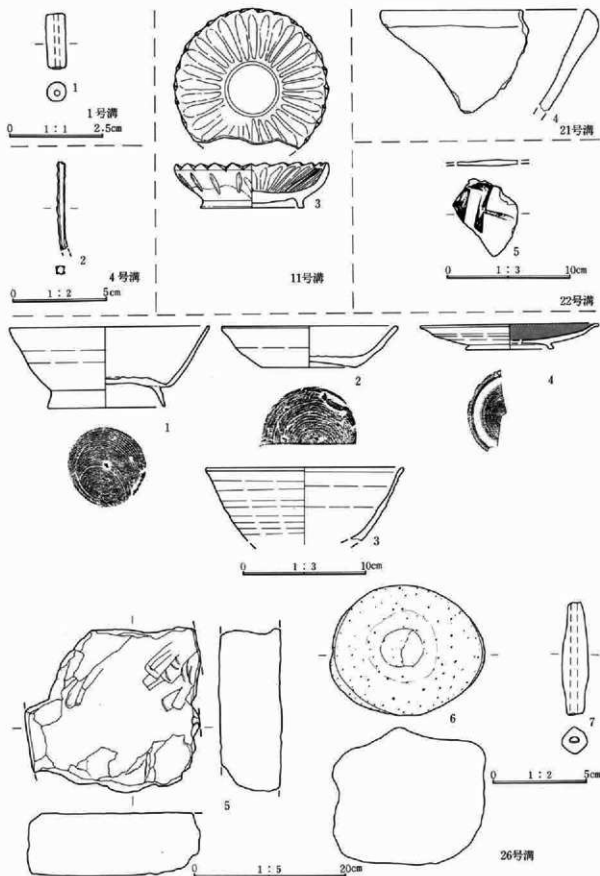
- | | | |
|---|---------------|---------------|
| 1 | 暗褐色土(10YR3/4) | 軟質で礫名山軽石を少量含む |
| 2 | 褐色土(10YR4/4) | 1層に近く、焼土を少量含む |
| 3 | 暗褐色土(10YR3/3) | 2層とほぼ同質 |
| 4 | 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊主体 |
| 5 | 黄褐色土(10YR5/6) | ローム塊主体 |
| 6 | 41号住居跡堆積土層 | |



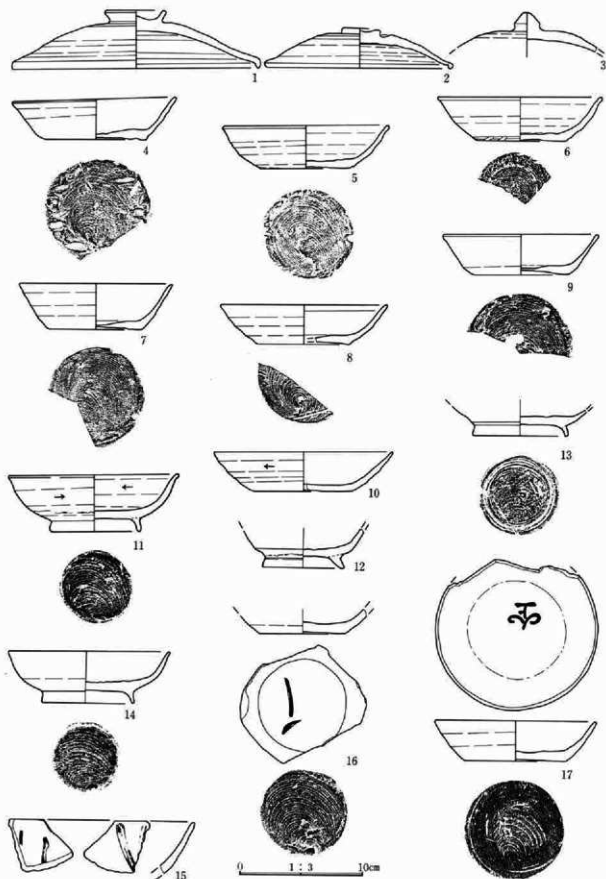
(A)

- | | | |
|---|---------------|-----------------|
| 1 | 褐色土(10YR4/4) | やや硬質、焼土、炭化物少量含む |
| 2 | 暗褐色土(10YR3/4) | 1層とほぼ同質 |
| 3 | 暗褐色土(10YR3/4) | 粘性帯び、ローム粒を少量含む |
| 4 | 暗褐色土(10YR3/3) | 土坑状の散乱 |
| 5 | 褐色土(10YR4/4) | 16号掘立柱建物柱穴埋土 |
| 6 | 褐色土(10YR4/6) | 54号住居跡堆積土層 |

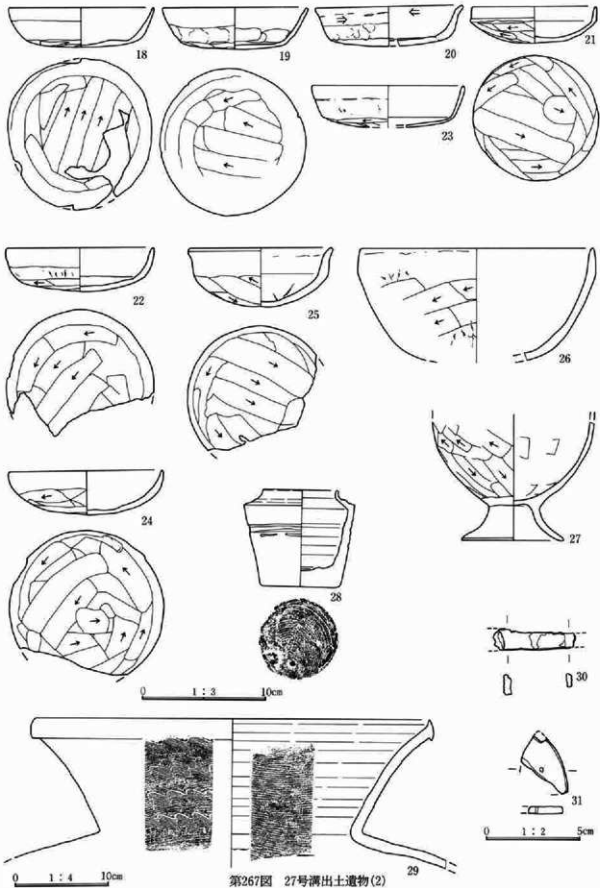
第264図 26・27号溝土層断面



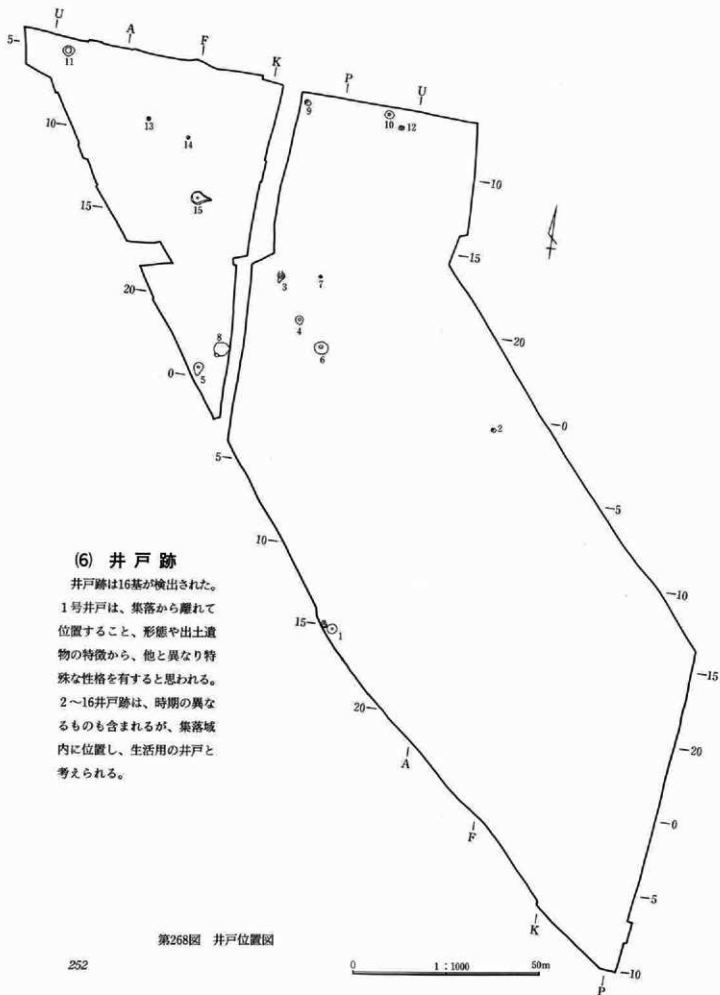
第265図 1・4・11・21・22・26号溝出土遺物



第266図 27号溝出土遺物(1)



第267図 27号溝出土遺物(2)



(6) 井戸跡

井戸跡は16基が検出された。
 1号井戸は、集落から離れて位置すること、形態や出土遺物の特徴から、他と異なり特殊な性格を有すると思われる。
 2～16井戸跡は、時期の異なるものも含まれるが、集落域内に位置し、生活用の井戸と考えられる。

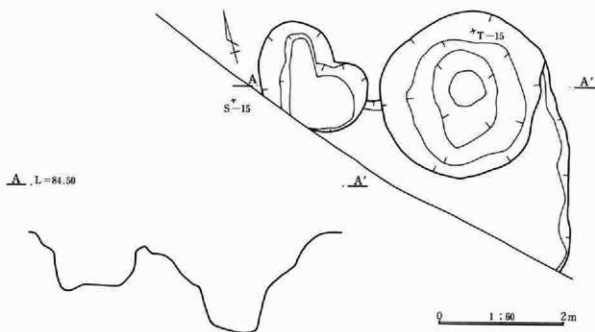
第268図 井戸位置図

1号井戸 (第269~273図)

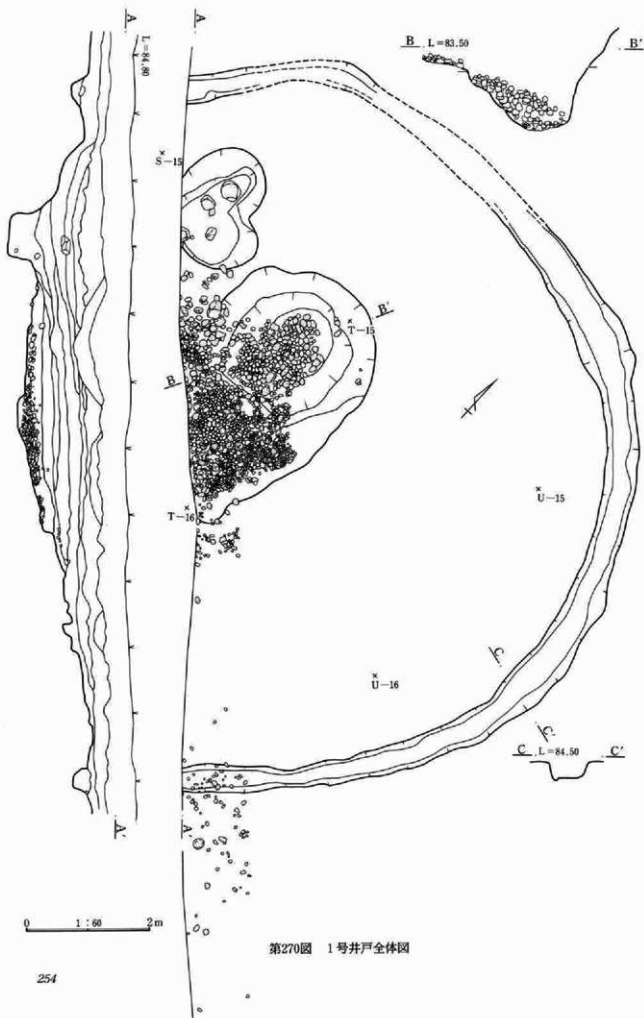
3区S-15グリッド付近で、調査区では最もレベルの低い場所(標高85m)に位置する。検出されたのは、東西に並ぶ茶掘りの井戸2本と、その南側傾斜面に敷設された礎群、そして井戸を中心にして円形に巡らされた浅い溝である。2本の井戸は、土層断面観察から時期の異なることが判明している(第270図)。東井戸が古く、西井戸が新しい。平面規模は東井戸が直径265cm、西井戸が直径175cmで、深さは東井戸が150cm、西井戸が100cmを測る。地下水位は当時からかなり変化したことが予想されるが、ちなみに1986年冬季における地下水の湧出レベルは標高83mほどで、井戸底面からそれぞれ100cmと20cmの高さまで水位が上がった。2本の井戸とも井戸枠やその痕跡は検出されなかった。東井戸の南側にはややくぼませて平坦にならした上に礎が敷設される。この部分の井戸断面が弱い階段状を呈し、貼り付けたような礎も見られることから、底面まで礎敷きであった可能性もある。井戸を巡る溝は、直径が11m、幅85cm、深さ30cmで、水が流れた痕跡は認められなかった。出土遺物は井戸内から土師器杯、甕、須恵

器蓋、壺等が出土しているが、周囲や傾斜面の礎敷き部分から、土師器杯を主とした大量の土器片が散乱する。土器は概ね7世紀~8世紀初頭と9~10世紀の時期に二分され、量的には前者が凌駕する。

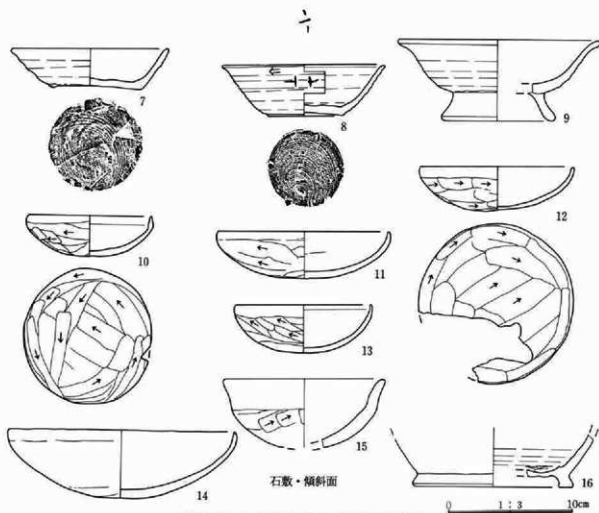
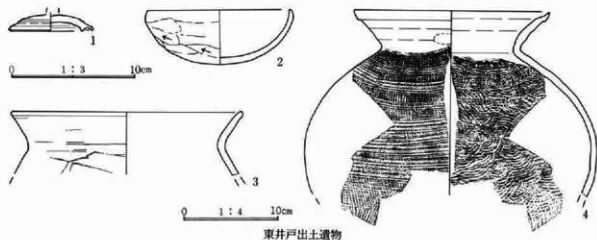
中央に位置する東井戸と礎敷き、環溝の組み合わせが当初の姿と考えられ、その性格はたんなる灌溉用の溜井や生活用の井戸としてよりも、むしろ祭祀にかかわる場としての性格を考慮しておく必要がある。湧水祭祀や聖水を必要とする祭祀との関わりが考えられようか。環溝は境界を、礎敷きは不浄の場を表したもので、多量の杯と須恵器の壺は祭祀参加者たちの使用した祭具と見なすこともできようが、ここでは本井戸の性格についての具体的な考察は避けておく。また、これを使用した集団は北西に60m離れた本遺跡の集落のみならず、礎敷きの方向から東側に120m離れた同時期の谷地遺跡の集落とも深い関係が推察される。なお、西井戸は礎の流入が見られず、環溝から偏って位置することから、東井戸が廃絶して埋まりきった後、礎敷きと溝を伴わずに再び井戸のみを開闢したと考えられる。

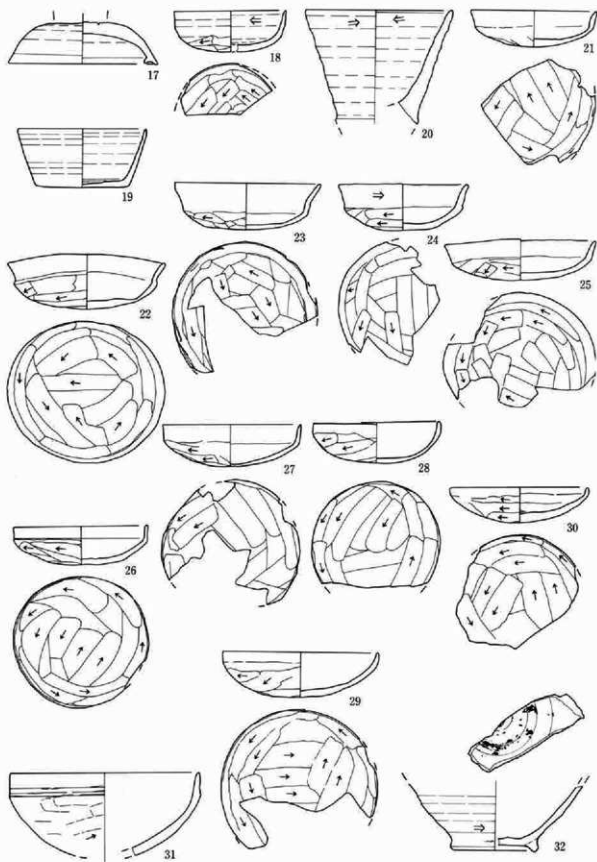


第269図 1号井戸掘り方



第270图 1号井尸全体图

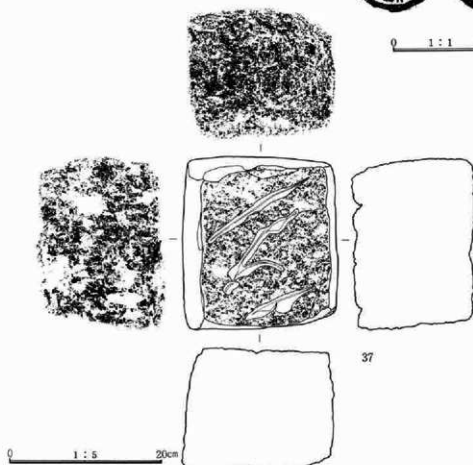
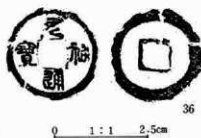
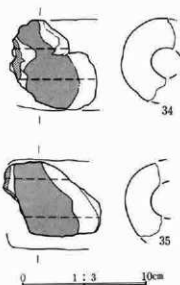
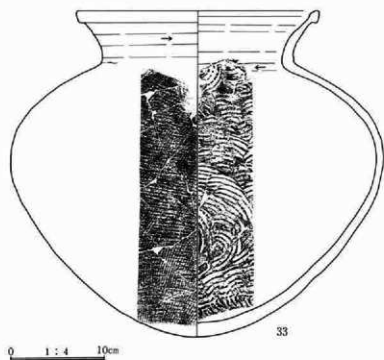




0 1 : 3 10cm

第272図 1号井戸出土遺物(2)

3 古墳時代以降の遺構と遺物



第273图 1号井戸出土遺物(3)

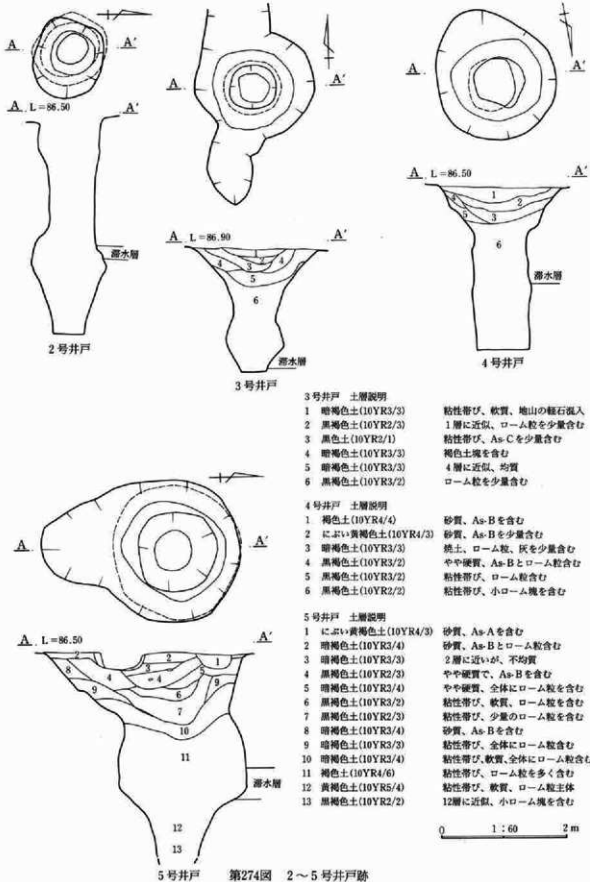
第3章 検出された遺構と遺物

表6 2～16号井戸跡一覧

井戸番号	位置	断面形	上端径(長軸×短軸) (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
2号井戸	5区C-1	筒状	1.3×1.1	3.5		
3号井戸	2区M-18	上位漏斗状	1.9×1.7	2.0		
4号井戸	2区N-20	筒状	2.1×1.9	2.6	軽石製品	
5号井戸	2区H-24	筒状	2.2	3.4以上	鉢	
6号井戸	2区P-22	筒状	3.5×3.2	3.5	甕、椀石	
7号井戸	2区O-19	筒状	0.85	1.9		5号住を切る
8号井戸	2区I-22・23	下位筒状	4.3×3.7	(5.0)	軽石製品	井戸枠廻り方
9号井戸	2区M-6	筒状	1.7×1.2	3.4	鉢、鉄貨	
10号井戸	2区R・S-6	筒状	2.3×2.1	3.3	石臼	
11号井戸	1区V-5	筒状	2.9×2.7	3.8	近世陶器	21号住を切る
12号井戸	2区S-7	筒状	1.35×1.2	3.2	鉢	
13号井戸	2区A-8	筒状	0.9	5.6	磨石	
14号井戸	2区E-9	筒状	0.9×0.8	5.7以上		
15号井戸	2区F・G-13	筒状	0.8	4.1	須恵、土師	土坑を伴う
16号井戸	2区M・N-15	筒状	0.8×0.65	1.1	近世陶器	64号住を切る

2～16号井戸は、いずれも平面が円形で、断面が筒状を呈する。素掘りが主と思われるが、8号では上半3mの深さまで井戸枠を組んでいた可能性がある。15号は調査時の登録名180号土坑に伴う。これは、平面「ラッキョウ」形をした特異な遺構で、竅穴状に掘りこまれており、その中央に井戸が掘穿される。古代の17号掘立柱建物に切られており、5世紀後半～6世紀の土器が出土することから、古墳時代後期のものととらえたい。3・4・6・7号は出土遺物と位置関係から、中世末～近世の屋敷跡と推定される1～8号掘立柱建物群に伴う可能性が高い。他は近世以降のものと思われる。なお、4・8・13号から出土した軽石製の磨石類は井戸脇で汚れ落としに使われたものであろうか。

3 古墳時代以降の遺構と遺物



3号井戸 土層説明

- 1 暗褐色土(10YR3/3)
- 2 黒褐色土(10YR2/3)
- 3 黒色土(10YR2/1)
- 4 暗褐色土(10YR3/3)
- 5 暗褐色土(10YR3/3)
- 6 黒褐色土(10YR3/2)

粘性帯び、軟質、地山の礫石混入
1層に近似、ローム粒を少量含む
粘性帯び、As-Cを少量含む
褐色土塊を含む
4層に近似、均質
ローム粒を少量含む

4号井戸 土層説明

- 1 褐色土(10YR4/4)
- 2 ぶい黄褐色土(10YR4/3)
- 3 暗褐色土(10YR3/3)
- 4 黒褐色土(10YR3/2)
- 5 黒褐色土(10YR3/2)
- 6 黒褐色土(10YR2/2)

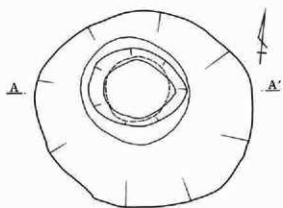
砂質、As-Bを含む
砂質、As-Bを少量含む
洗土、ローム粒、灰を少量含む
やや硬質、As-Bとローム粒含む
粘性帯び、ローム粒含む
粘性帯び、小ローム塊を含む

5号井戸 土層説明

- 1 ぶい黄褐色土(10YR4/3)
- 2 暗褐色土(10YR3/4)
- 3 暗褐色土(10YR3/3)
- 4 黒褐色土(10YR2/3)
- 5 暗褐色土(10YR2/4)
- 6 黒褐色土(10YR3/2)
- 7 黒褐色土(10YR2/3)
- 8 暗褐色土(10YR3/4)
- 9 暗褐色土(10YR3/3)
- 10 暗褐色土(10YR3/4)
- 11 褐色土(10YR4/6)
- 12 黄褐色土(10YR5/4)
- 13 黒褐色土(10YR2/2)

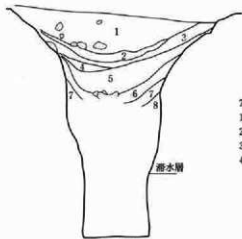
砂質、As-Aを含む
砂質、As-Bとローム粒含む
2層に近いが、不均質
やや硬質で、As-Bを含む
やや硬質、全体にローム粒を含む
粘性帯び、軟質、ローム粒を含む
粘性帯び、少量のローム粒を含む
砂質、As-Bを含む
粘性帯び、全体にローム粒含む
粘性帯び、軟質、全体にローム粒含む
粘性帯び、ローム粒を多く含む
粘性帯び、軟質、ローム粒主体
12層に近似、小ローム塊を含む

0 1:60 2m



A, L=86.60

A'

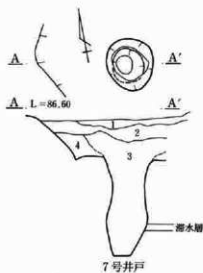


6号井戸

6号井戸 土層説明

- 1 黒褐色土(10YR2/3)
- 2 黒褐色砂(10YR2/3)
- 3 黒褐色土(10YR2/3)
- 4 黒褐色砂(10YR2/2)
- 5 黒褐色砂(10YR2/2)
- 6 黒褐色土(10YR2/2)
- 7 黒色土(10YR2/1)
- 8 黒褐色砂(10YR2/2)

砂質、A&Bを含む
ローム粒を少量含む
砂質、ローム粒を含む
均質で夾雑物をほとんど含まない
粗い砂が主体、ローム粒を含む
砂質、均質
粘性帯び、硬質、少量のローム粒含む
微小なローム粒を含む



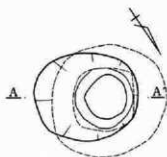
A, L=86.60

7号井戸

7号井戸 土層説明

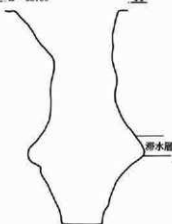
- 1 黒色土(10YR2/1)
- 2 黒色土(10YR2/1)
- 3 黒色土(10YR1.7/1)
- 4 黒褐色土(10YR2/3)

粘性帯び、やや硬質で、A&Cを含む
粘性帯び、やや硬質、礫名山輝石を含む
粘性帯び、ローム粒を含む
5号住居跡増築埋土



A, L=88.60

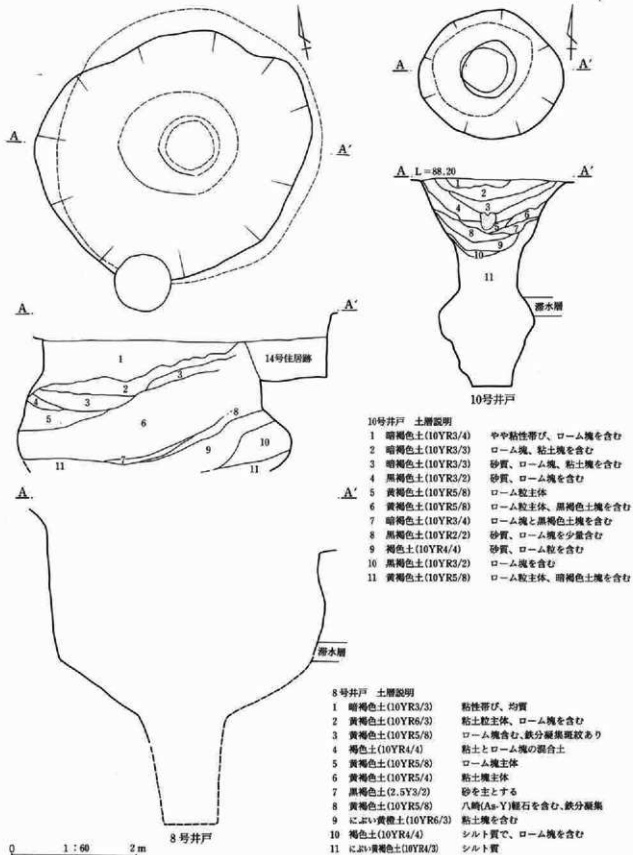
A'



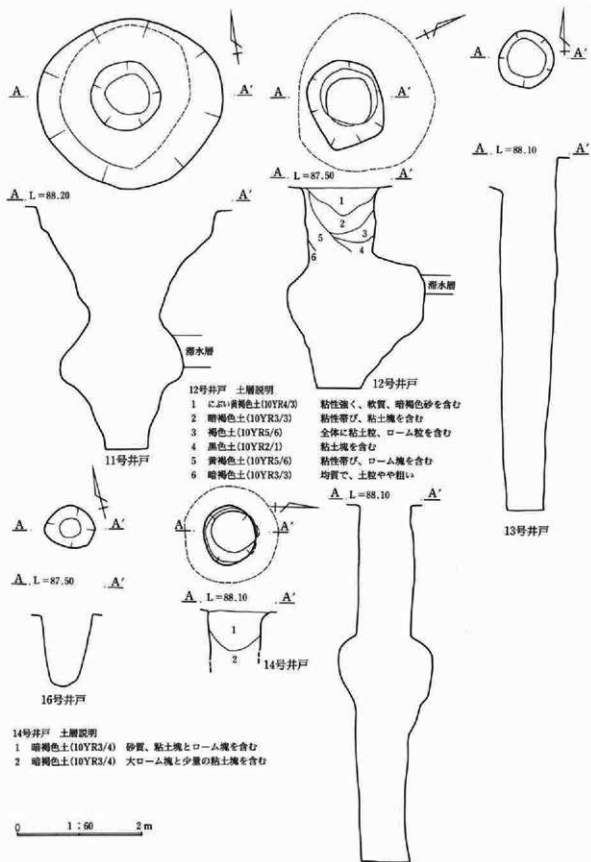
9号井戸

0 1:60 2m

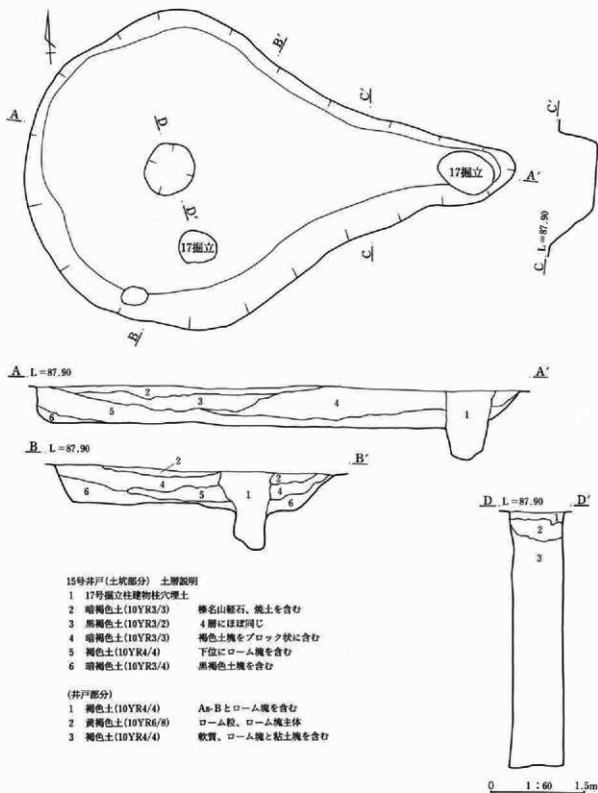
第275図 6・7・9号井戸跡



第276図 8・10号井戸跡

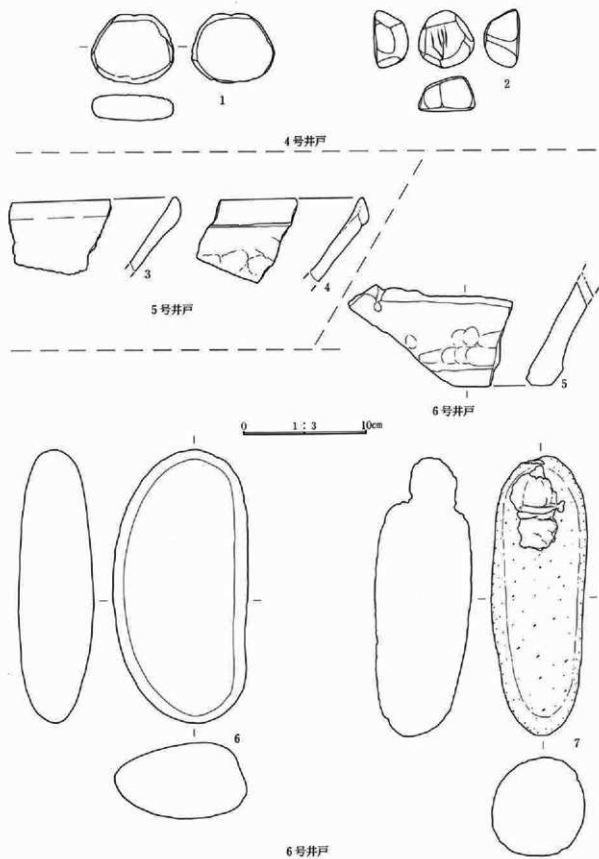


第277図 11~14・16号井戸跡

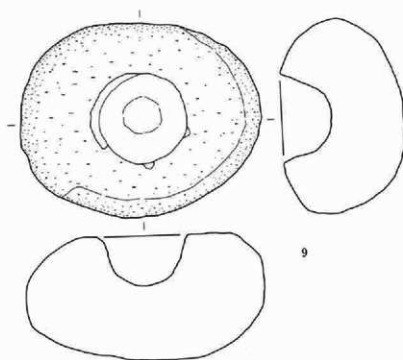
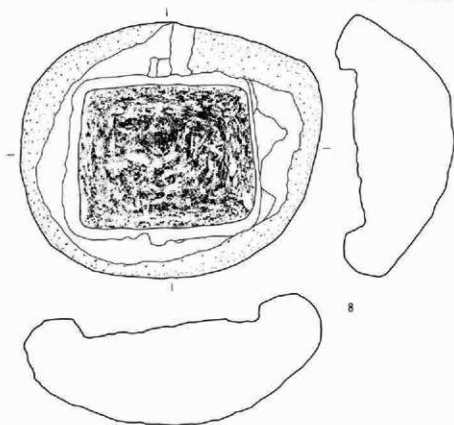


第278図 15号井戸跡

第3章 検出された遺構と遺物

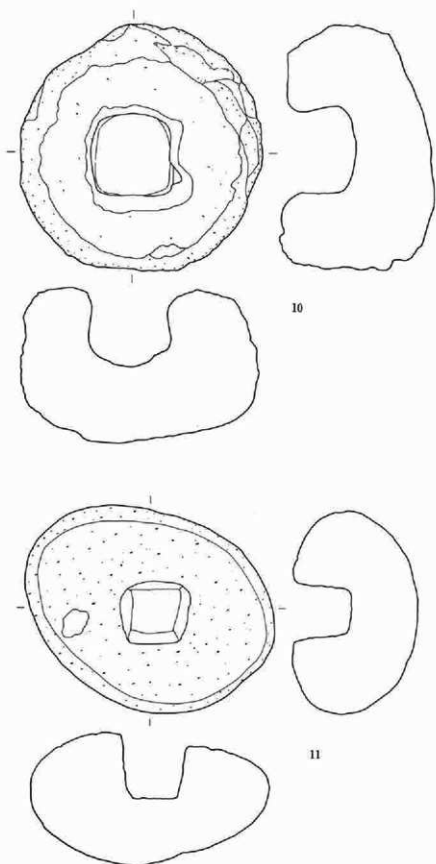


第279図 4・5・6号井戸跡出土遺物(1)

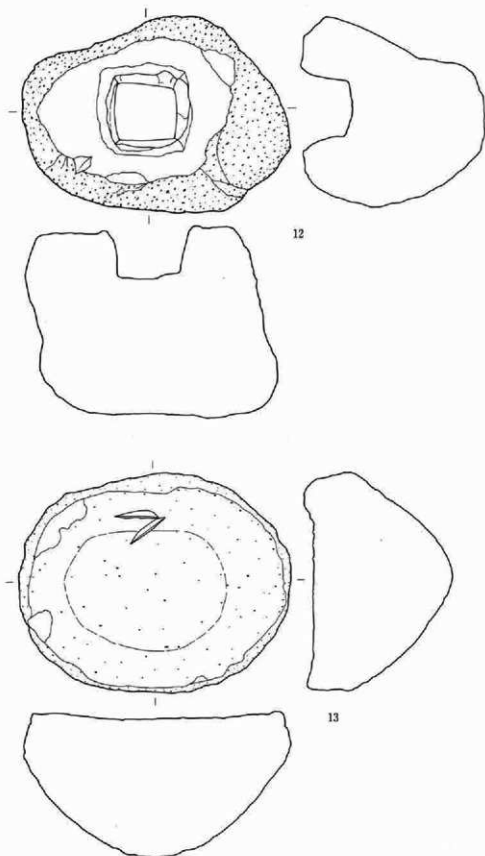


第280図 6号井戸跡出土遺物(2)

0 1 : 5 20cm

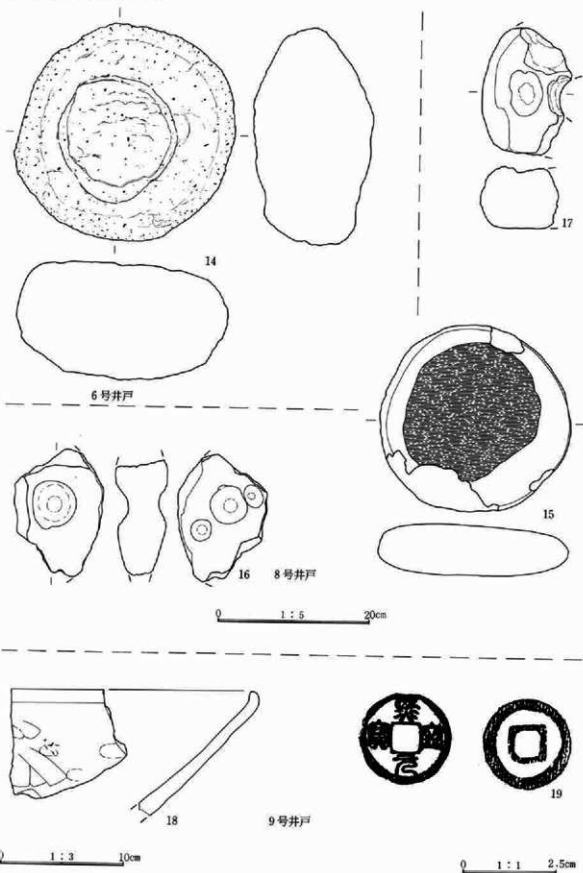


第281图 6号井戸跡出土遺物(3)

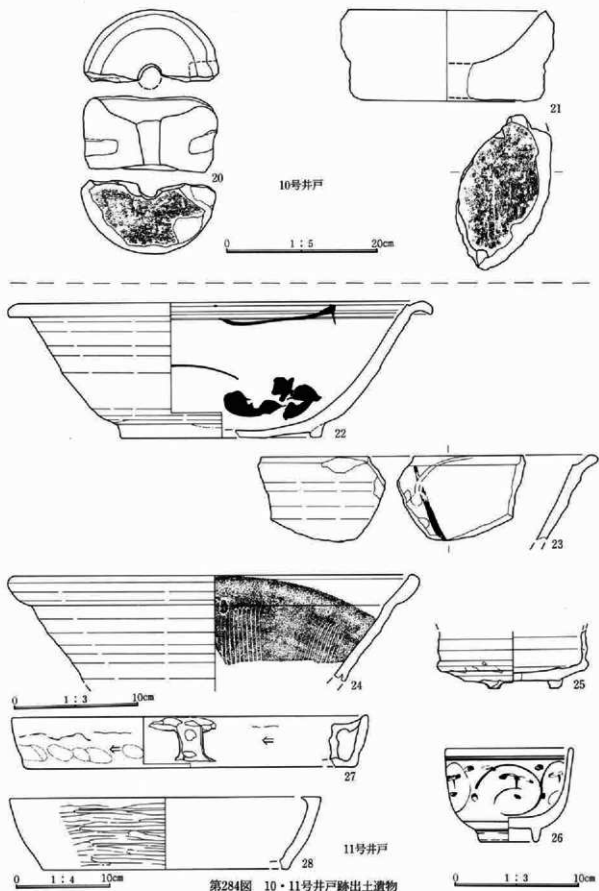


第282図 6号井戸跡出土遺物(4)

第3章 検出された遺構と遺物

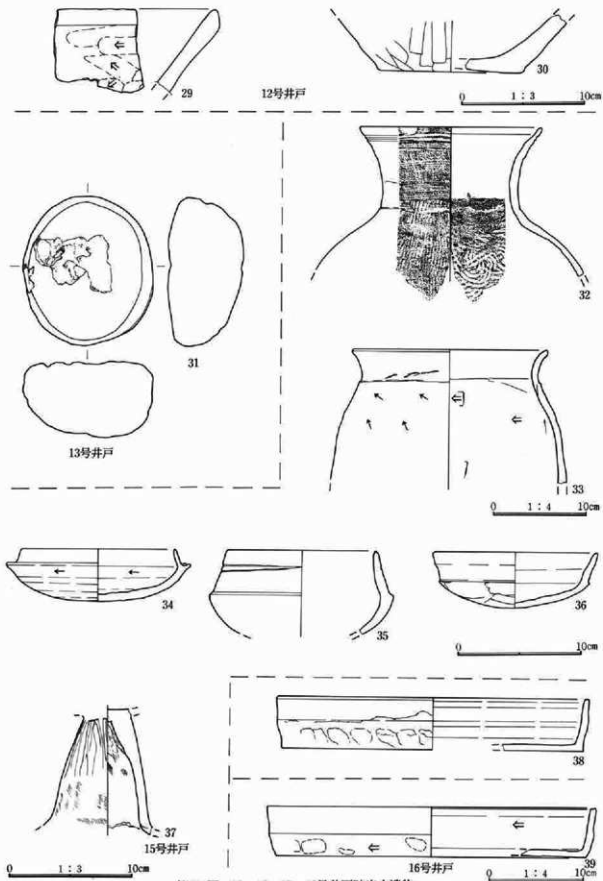


第283図 6・8・9号井戸跡出土遺物(5)

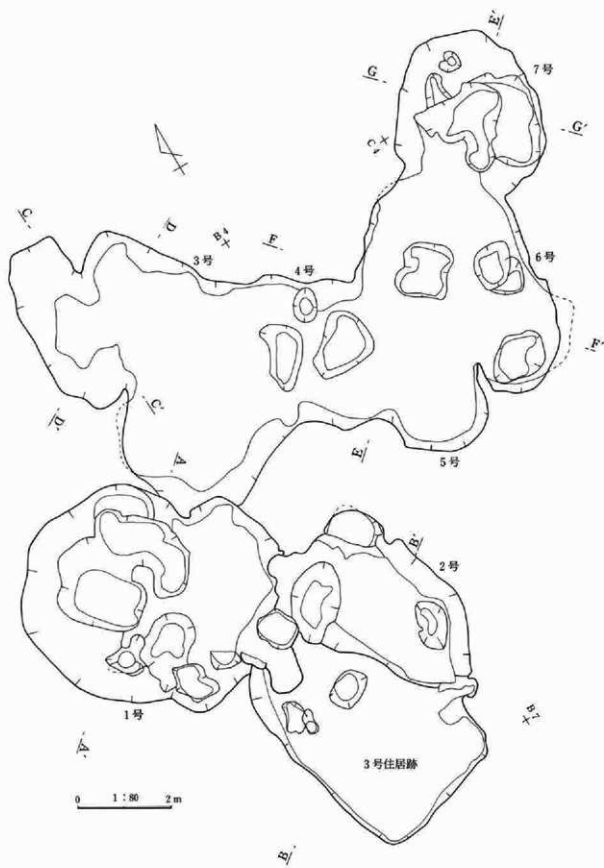


第284図 10・11号井戸跡出土遺物

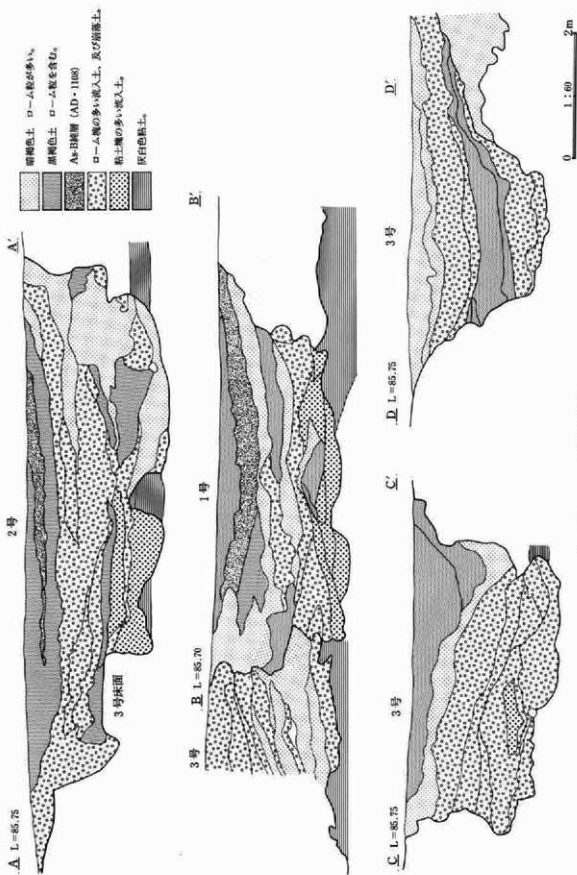
第3章 検出された遺構と遺物



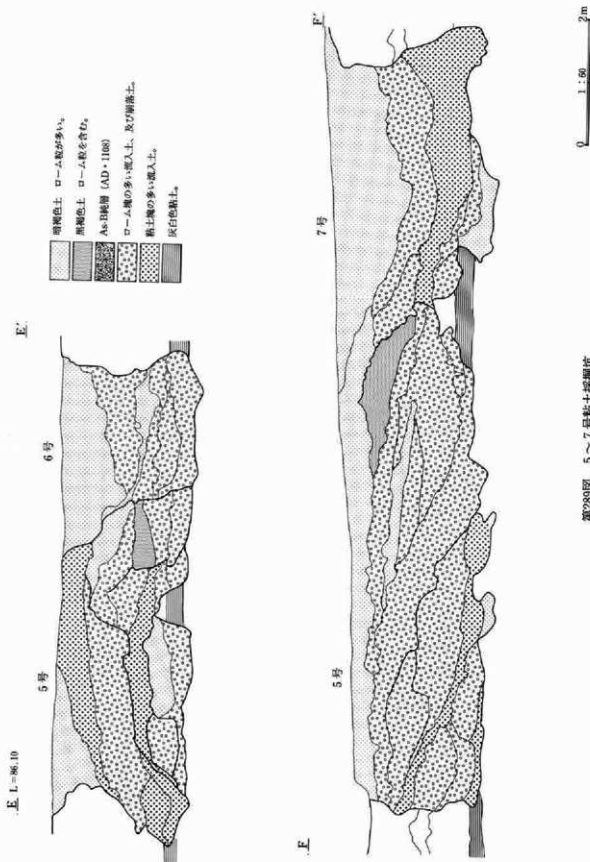
第285図 12・13・15・16号井戸跡出土遺物



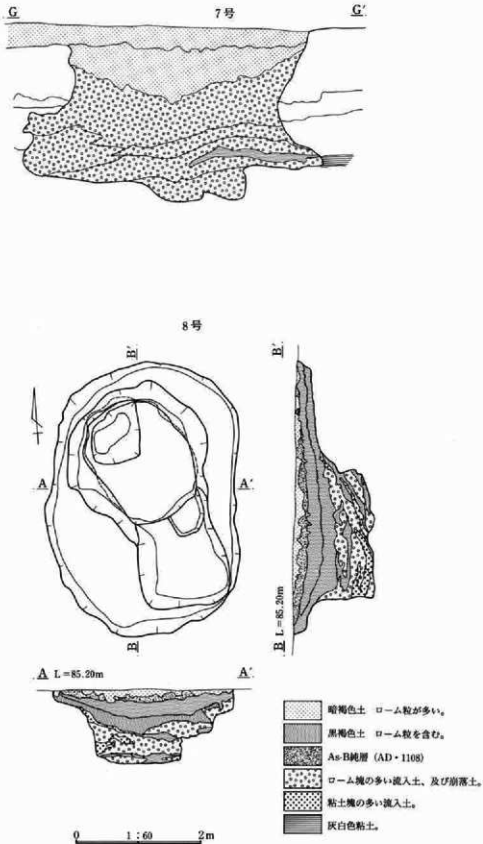
第287図 粘土探掘坑



第288図 1~3号粘土採掘坑

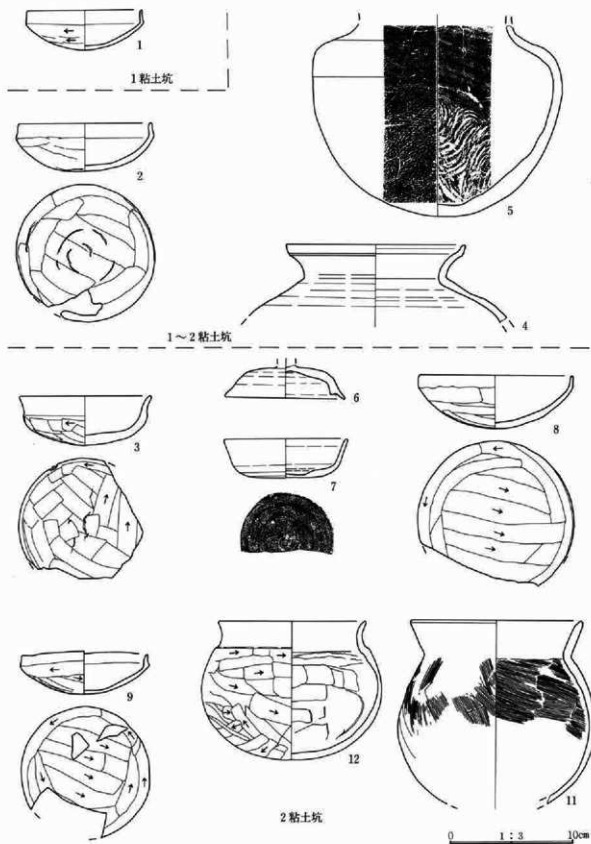


第289図 5～7号粘土探掘坑

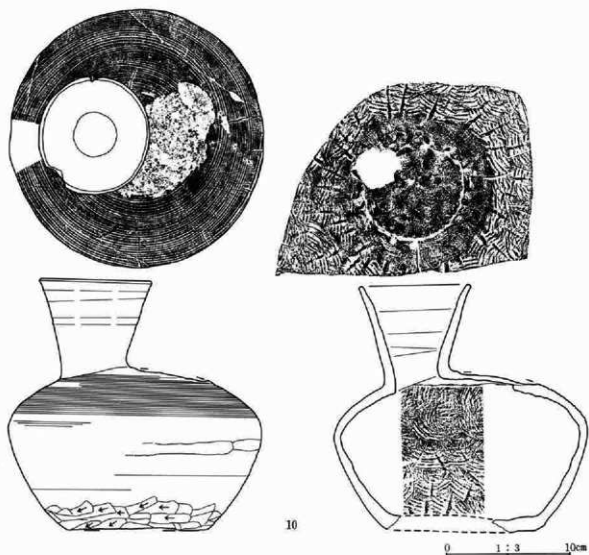


第290図 7号粘土探掘坑断面及び8号粘土探掘坑

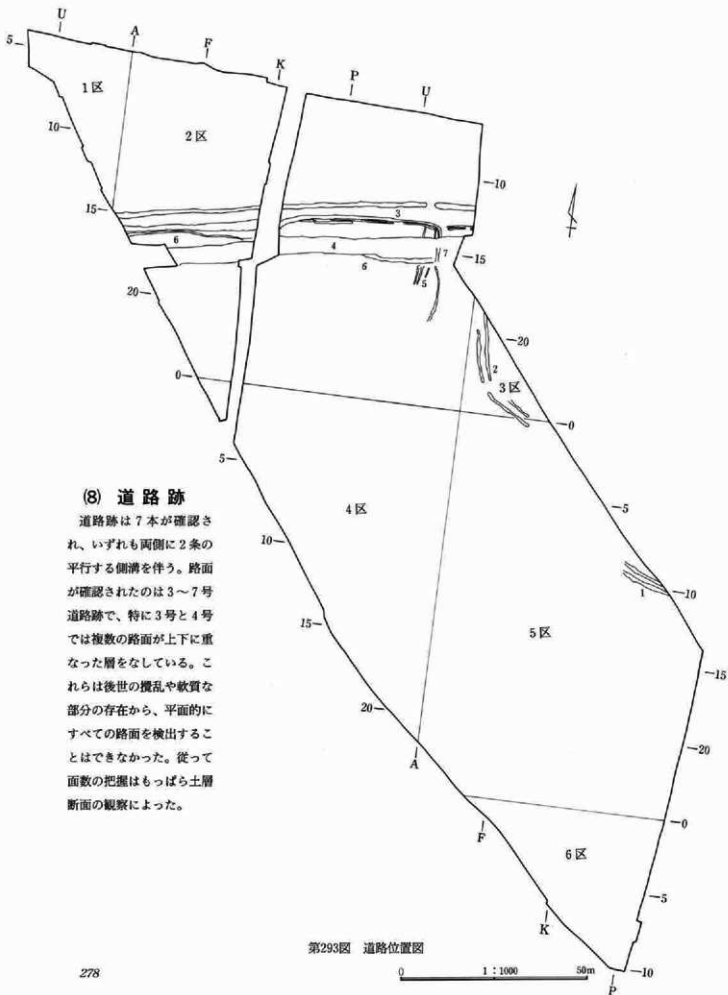
第3章 検出された遺構と遺物



第291図 1・1~2・2号粘土探掘坑出土遺物(1)



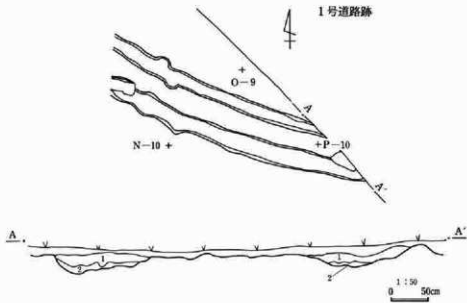
第292図 2号粘土採掘坑出土遺物(2)



(8) 道路跡

道路跡は7本が確認され、いずれも両側に2条の平行する側溝を伴う。路面が確認されたのは3～7号道路跡で、特に3号と4号では複数の路面が上下に重なった層をなしている。これらは後世の攪乱や軟質な部分の存在から、平面的にすべての路面を検出することはできなかった。従って面数の把握はもっぱら土層断面の観察によった。

第293図 道路位置図



- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 砂質。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) Hr・FP、As-C混在。

1号道路跡 (第294図上)

位置 5区M~P-8~10

走向 N-70°-W

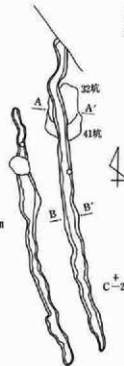
規模 路面幅2.2m

側溝幅1.2m、側溝深さ25cm

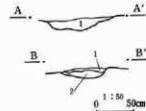
路面 削平されて遺存せず。

側溝 浅い皿状の断面。

遺物 なし。



2号道路跡



2号道路跡 (第294図下)

位置 3区A~G-19~24

走向 南南東から北へ折れる。

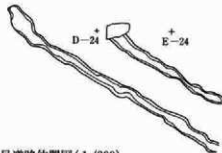
規模 路面幅2.2m

側溝幅1.0m、側溝深さ20cm

路面 削平されて遺存せず。

側溝 浅い皿状の断面。

遺物 なし。



第294図 1・2号道路位置図(1/200)

第3章 検出された遺構と遺物

3号道路跡 (第295～298図)

位置 2区A～X-12～15

走向 東西方向。N-82°E

規模 路面幅3.0m (10尺)

側溝幅1.8m、側溝深さ80cm

路面 上下に重なって5面が確認できた。最も古い最下層の面は部分的にしか確認できず、中位に位置する下から3番目の面が最も遺存状況が良好である。路面は側溝を伴いながら、南側へわずかつづ平行移動しながら、改築を重ねたようである。このときに、旧側溝の埋土上に路面を構築することになるが、この部分は旧路面上とは異なって軟質であったためか、一部で断層状に沈下している。

路面は全体的に硬化しているが、度重なる路面修復と路線改築、及びこれに伴う側溝の開削で、道路と平行するように路面が削り取られており、全面的に検出することはできない。遺存状況の良い部分では、小さな凹凸のある硬化面であり、道路面特有の粗い砂層がブロック状に形成されている。轍や直交する溝状の連続凹凸面などは見られなかった。

側溝 路面に対応する側溝は3条までが確認できた。いずれも、土層断面の観察から、前段階で使用された側溝が埋まり切ってから、新たに開削されていることが判明している。側溝は路面改築をおこなう度毎に南側へ路線をずらしているが、新しいものほど浅くなる傾向がある。これは路面レベルが次第に高くなることも関連するが、初期の段階に比べて極めて見劣りするのには間違いない。第296図に示した側溝平面図はこの初期のものと考えられ、後世のものに比べて画一的な断面形と規模を有している。このことから、側溝は新たに開削される度に、その意義が薄れていったと考えられよう。また、上位の新しい路面には断続的にしか溝が見られないことからこのことが裏付けられよう。

側溝の堆積土は周囲からの流入土が主体であるが、全体に粘性を帯びている。また、底面レベルは地点によって多少の差はあるが、一方への水流を想定させるような傾斜は認められない。このことから、

検出された側溝は降雨時の排水や路面の湿気除去の意味が強いと思われる。従って、土層観察で見られたように、土砂の流入等で多少埋まっていたとしても、機能的には十分だったと言えようか。

なお、北側の側溝は、V-11グリッドで幅2mの断絶部分が見られる。同様に南側側溝は、この位置で南方方向に向きを変え、直交する路面である7号道路に沿う溝となる。南側側溝はこの屈曲部分からやはり2mの間を空けて再び東方方向に延びる。この2mの断絶部分は7号道路との「辻」にあたると思われる。本地点では1108年に降下したと推定される浅間山軽石As-Bの2次堆積層が認められるが、本道路との関係は不明であった。ただし、側溝埋土に全くテフラを含まないこと、層序関係では確認できなかったが、テフラ層が最下層路面よりも下位のレベルにあることから、本道路跡の上限は11世紀以前にさかのぼるものではなく、12世紀以降の構築と考えておきたい。

遺構重複関係 33号・38号・50号・51号・62号住居跡、21号掘立柱建物を切る。

出土遺物 路面から銭貨、側溝埋土から中世の軟質陶器が出土している。

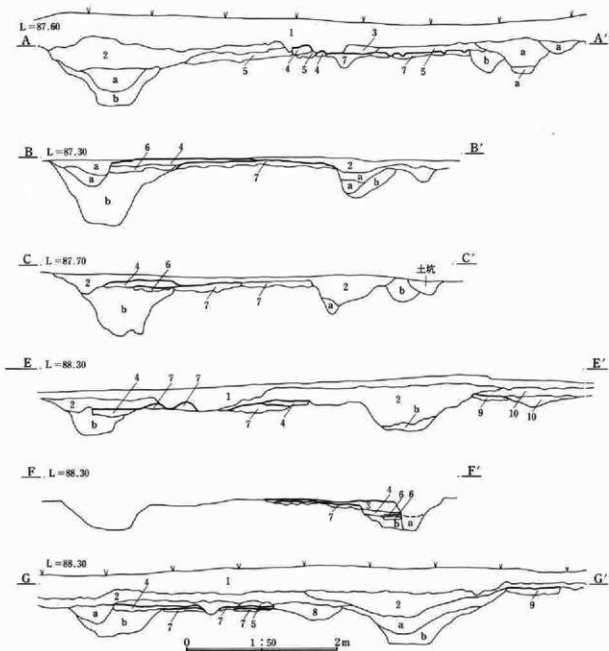
4号道路跡 (第296～298図)

位置 2区B～X-14～18

走向 N-82°E

規模 路面幅3.5m 側溝幅100cm、深70cm

路面 上下に7面が相互に重なって確認された。遺構として確認された最上面の上にはアスファルト舗装によって、現道路面が構築されている。最下層の路面の下層にはAs-Bの2次堆積層が見られる。路面はかなり荒れており、轍等の痕跡は認められない。側溝 確認された7枚の路面のそれぞれに沿って開削される。断面は稜研堀状。3号道路跡と同様に改築されるに従い、南側へ僅かつづ平行移動しているが、側溝の断面形や規模に大きな変化は見られない。自然堆積で埋まった後新たに開削を行う。



3号道路跡(第295図)

- | | | |
|----|-----------------|-------------|
| 1 | 現耕作土 | |
| 2 | 暗褐色(10YR3/4) | A&Bを含む、路面覆土 |
| 3 | 灰黄褐色砂(10YR4/2) | A&Bを含む |
| 4 | 上面 | |
| 5 | 暗褐色土(10YR3/3) | 上面の基土 |
| 6 | 上面陥没部分 | |
| 7 | 下面 | |
| 8 | 黒褐色粘質土(10YR2/3) | 下面基土 |
| 9 | 6号道路面 | |
| 10 | 暗褐色土(10YR3/4) | A&Bを含む |
| a | 上面に伴う側溝埋土 | |
| b | 下面に伴う側溝埋土 | |

第295図 3号道路土層断面

第3章 検出された遺構と遺物

5号道路跡 (第296図)

位置 2区V-12~17
方向 N-5°-E
規模 幅3.00m、長さ25mほどが検出された。
路面 As-Cを含む黒色粘質土が踏み固められ、ブロック状に硬化面が残る。レベル86.90~87.00m。両側の地山より20cmほど低くくぼんでいる。
側溝 東西両側に掘削され、幅30cm前後、深さ10~12cm。
埋没土 地山の土が流れ込んでおり、路面から20cm上位にAs-Bが堆積する。
出土遺物 路面及び埋没土から8・9世紀代の土器片が少量出土。
遺構重複関係 上位に3号・4号道路跡がのる。

6号道路跡 (第296図)

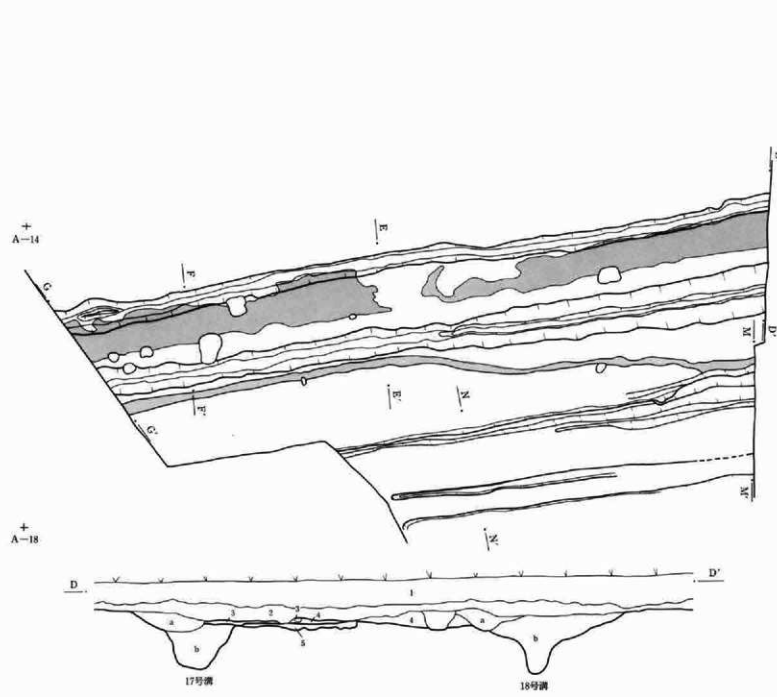
位置 2区
方向 ほぼ東西に走るが、西端では3号道路南側溝に、中央~東半では4号道路北側溝に沿う。
規模 幅1m前後が検出された。
路面 As-Bを混入する暗褐色土を踏み固める。レベルは87.25~87.55m。
側溝 検出されなかった。
遺構重複関係 3号道路南側溝(18号溝)に切られる(断面図E-E'・G-G')。
出土遺物 なし

7号道路跡 (第296図)

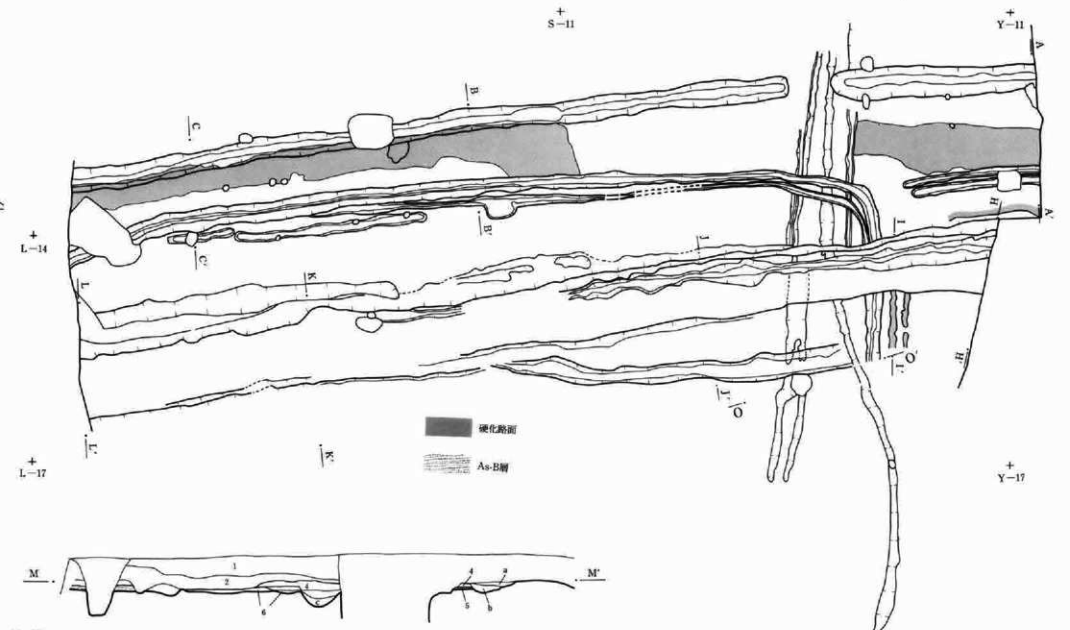
位置 2区W-14・15
方向 ほぼ南北。
規模 幅1.70m以上。
路面 Hr-FPを含む黒褐色粘質土をそのまま路面とし、やや硬化する。レベル87.25~87.30cm。3号道路の南に折れた支道と考えられる。
側溝 18号・20号溝を西側溝とし、東側溝はなし。
出土遺物 青磁碗片。

道路跡一覧表

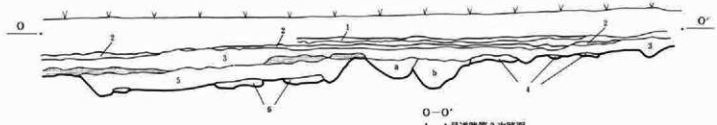
番号	方向	路面幅(m)	路面高(標高)	側溝	出土遺物	その他
3号	N-82°-E	3.00	87.30~87.50	両側	土器・陶器・土鍾・宋銭	上下2面検出
4号	N-82°-E	3.50	87.20~87.80	両側	土器・鉄器・煙管・宗銭	6面検出
5号	N-5°-E	3.00	86.90~87.00	(両側)	土器	As-B下
6号	N-80~90°-E	1.00前後	87.25~87.55	なし	なし	As-B上
7号	ほぼ南北	1.70以上	87.25~87.30	片側	青磁碗	3号道路支道



3号・4号道路跡土層説明(第296図)
 D-D'
 1 現地作土
 2 暗褐色土(10YR3/4) 3号道路面覆土 a 上面に伴う側溝埋土
 3 3号道路上面 b 下面に伴う側溝埋土
 4 暗褐色土(10YR3/4) 上面基土
 5 3号道路下面



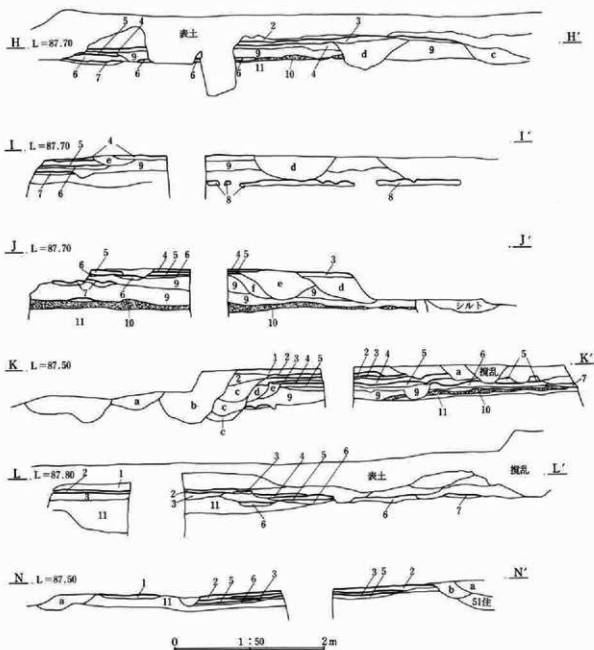
M-M'
 1 現地産土
 2 褐色土(10YR4/4) As-Aを含む
 3 4号道路第5次路面
 4 4号道路第4次路面
 5 4号道路第3次路面
 6 4号道路第1・2次路面
 a 第4次路面に伴う側溝か
 b 第3次路面に伴う側溝か
 c 第1・2次路面に伴う側溝か



O-O'
 1 4号道路第3次路面
 2 4号道路第2次路面
 3 暗褐色土(10YR3/3) As-Bを含む
 4 7号道路(3号道路敷設道路)
 5 暗褐色土(10YR3/3) 礫名ニツ系転石を含む、5号道路面覆土
 6 5号道路面
 a 7号道路側溝(20号溝)埋土
 b 7号道路側溝(18号溝)埋土



第296図 3・4号道路位置図及び土層断面

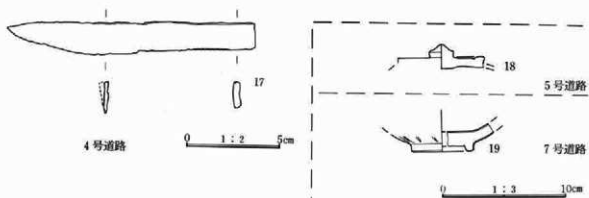
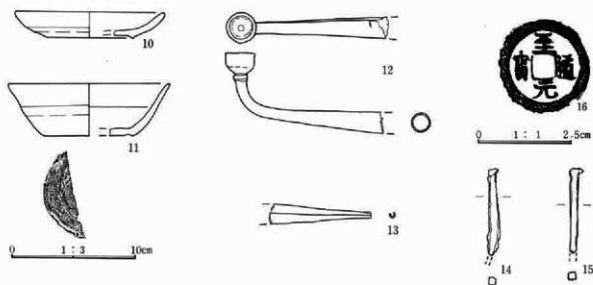
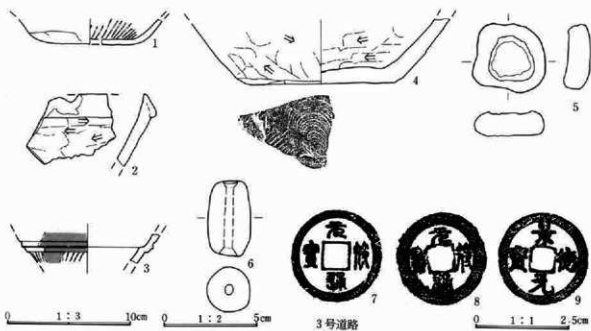


4号道路跡土層説明(第297図)

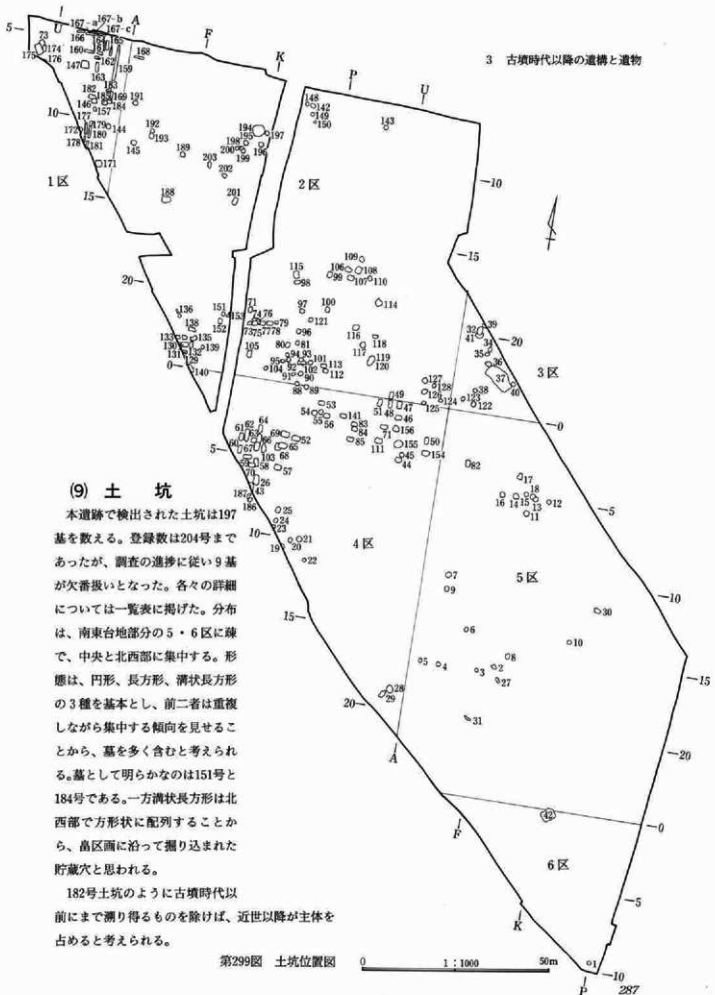
- | | | |
|------------------|--------------------|----------------------|
| 1 第6次路面 | L=87.30~87.80m | a 6次面以降に伴う側溝 |
| 2 第5次路面 | L=87.35~87.65m | b 6次面に伴う側溝、17世紀代埋管出土 |
| 3 第4次路面 | L=87.30~87.80m | c 4次面に伴う側溝か |
| 4 第3次路面 | L=87.30~87.70m | d 3次面に伴う側溝か |
| 5 第2次路面 | L=87.20~87.60m | e 2次面に伴う側溝か |
| 6 第1次路面 | L=87.20~87.60m | f 1次面に伴う側溝か |
| 7 6号道路面 | L=87.25~87.55m | As-B 視土の上位 |
| 8 7号道路面 | L=87.25~87.30m | 様名ニツ岳系磁石を含む |
| 9 褐色砂質土(10YR4/4) | As-B 視土 | |
| 10 As-B | 11 黒褐色粘質土(10YR3/2) | |

第297図 4号道路土層断面

第3章 検出された遺構と遺物



第298図 3・4・5・7号道路出土遺物



(9) 土 坑

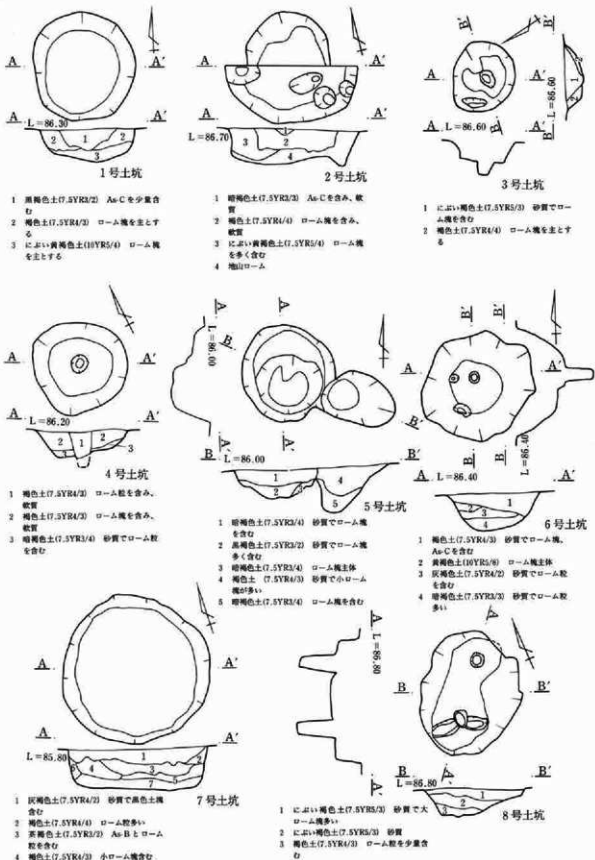
本遺跡で検出された土坑は197基を数える。登録数は204号まであったが、調査の進捗に従い9基が欠番扱いとなった。各々の詳細については一覧表に掲げた。分布は、南東台地部分の5・6区に疎で、中央と北西部に集中する。形態は、円形、長方形、溝状長方形の3種を基本とし、前二者は重複しながら集中する傾向を見せることから、墓を多く含むと考えられる。墓として明らかなのは151号と184号である。一方溝状長方形は北西部で方形に配列することから、畝区画に沿って掘り込まれた貯蔵穴と思われる。

182号土坑のように古墳時代以前にまで溯り得るものを除けば、近世以降が主体を占めると考えられる。

第299図 土坑位置図

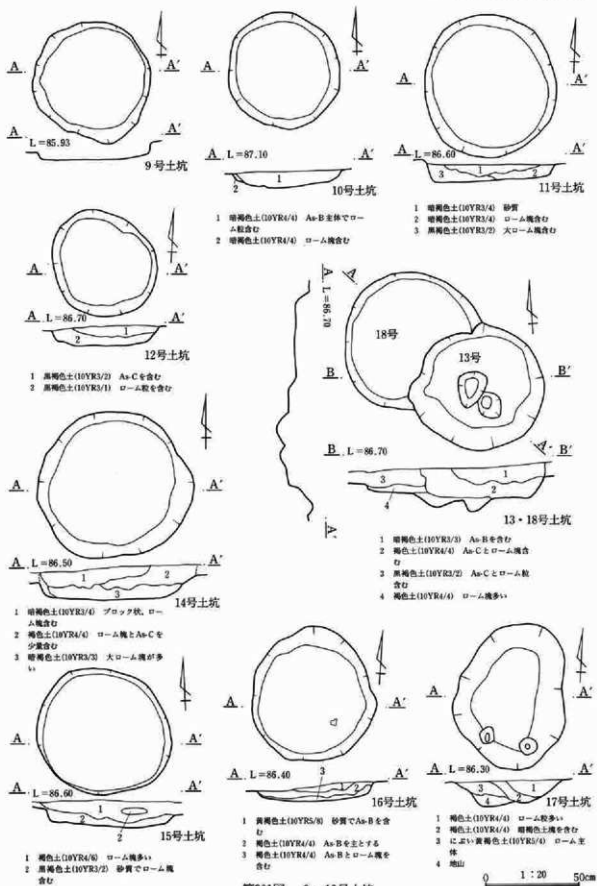
0 1 : 1000 50m

第3章 検出された遺構と遺物



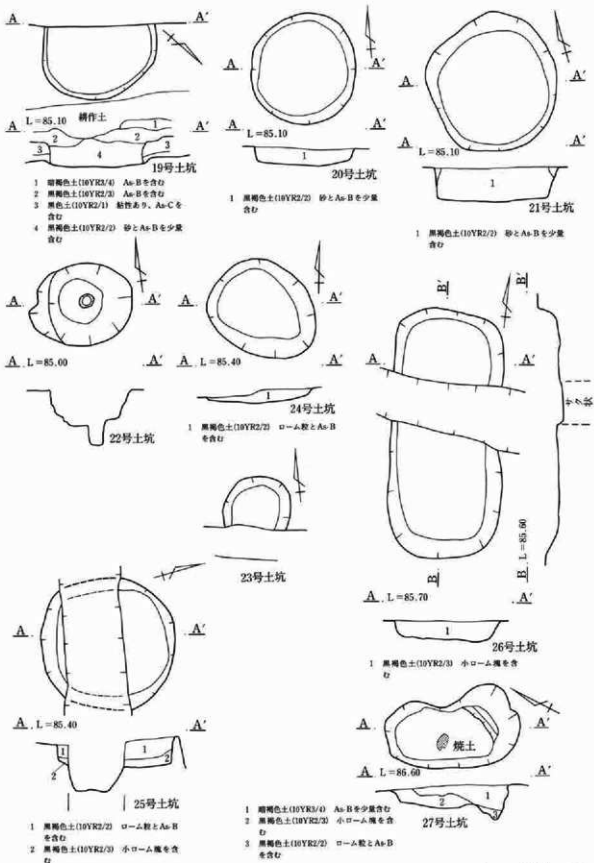
第300図 1～8号土坑

0 1:20 50cm

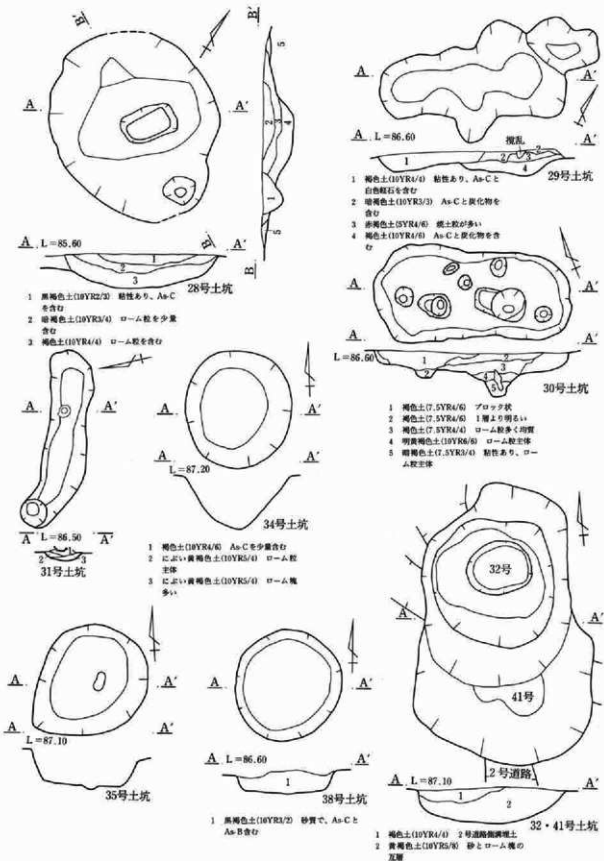


第301図 9～18号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

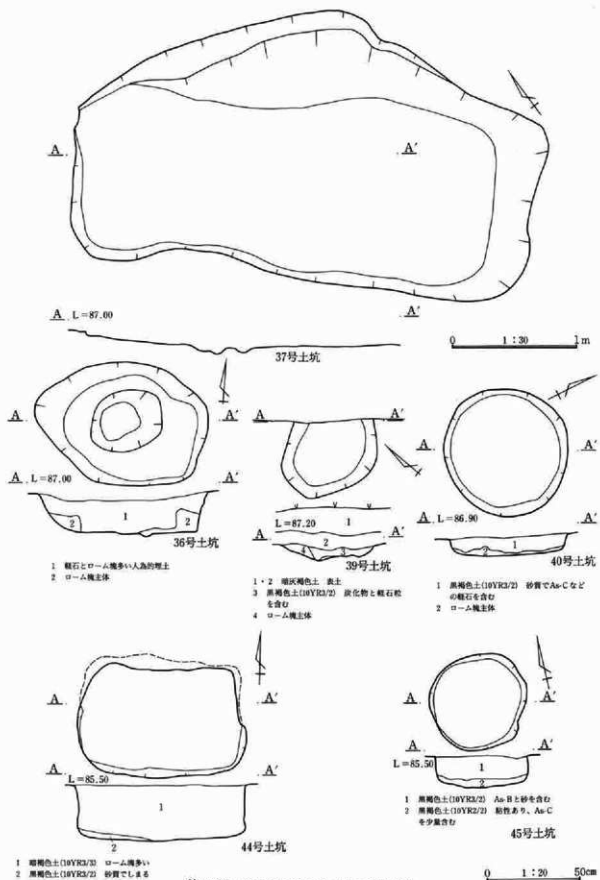


第302図 19～27号土坑

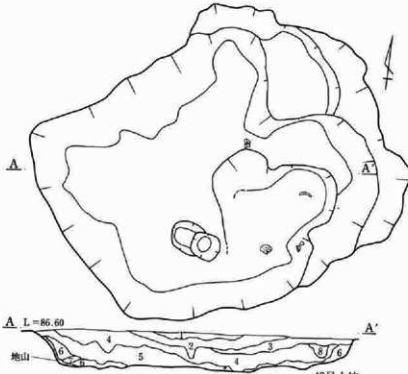


第303図 28~32・34・35・38・41号土坑

0 1:20 50cm

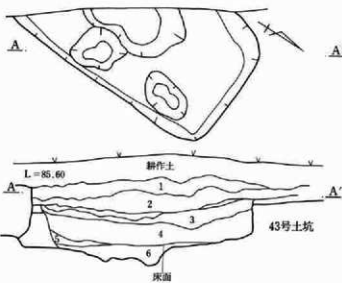


第304図 36・37・39・40・44・45号土坑



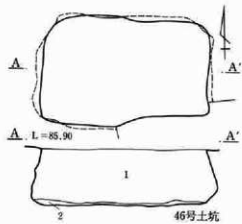
- | | |
|-----------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/2) | Hi-FF, A&Cを少量含みしめる |
| 2 黒褐色土(10YR2/2) | Hi-FF, A&Cを少量含みしめる |
| 3 暗褐色土(10YR3/2) | Hi-FF, A&Cを少量含み中軟質 |
| 4 暗褐色土(10YR3/4) | Hi-FF, A&C、ローム粒を含む
4層に近似、ローム粒少ない |
| 5 黒褐色土(10YR2/2) | 軟質で粘性あり |
| 6 褐色土(10YR4/4) | ローム粒多い |
| 7 黒褐色土(10YR3/2) | ローム粒多い |
| 8 暗褐色土(10YR3/3) | Hi-FF, A&Cを含み軟質 |

42号土坑



- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 暗褐色土(10YR3/4) | 砂質でローム粒とA&Bを含む |
| 2 暗褐色土(10YR3/2) | 砂質でA&Bを含み、しめる |
| 3 黒褐色土(10YR2/2) | 砂とローム粒含む |
| 4 黒褐色土(10YR2/2) | 砂とローム粒含む |
| 5 黒褐色土(10YR3/2) | 砂とローム粒含む、軟質 |
| 6 褐色土(10YR4/4) | ローム粒多い |

43号土坑



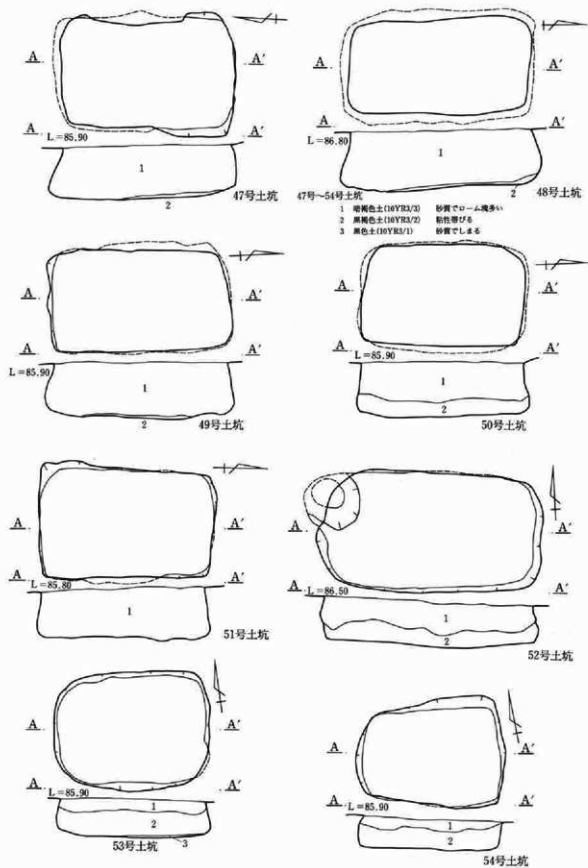
- | | |
|-----------------|-----------|
| 1 暗褐色土(10YR3/3) | 砂質でローム塊多い |
| 2 黒褐色土(10YR2/2) | 粘性帯ける |

46号土坑

第305図 42・43・46号土坑

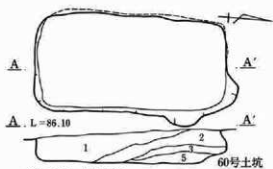
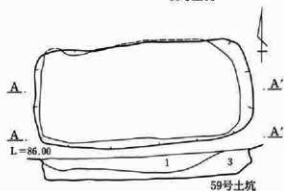
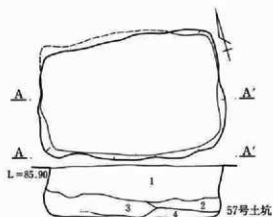
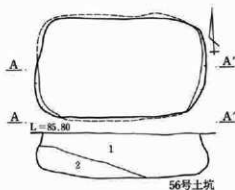
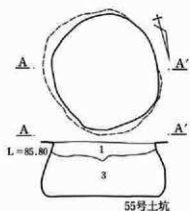
0 1 : 20 50cm

第3章 検出された遺構と遺物



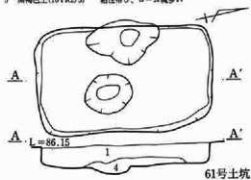
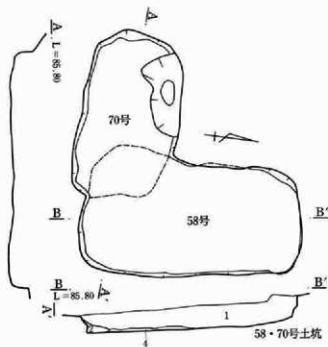
第306図 47~54号土坑

0 1:20 50cm



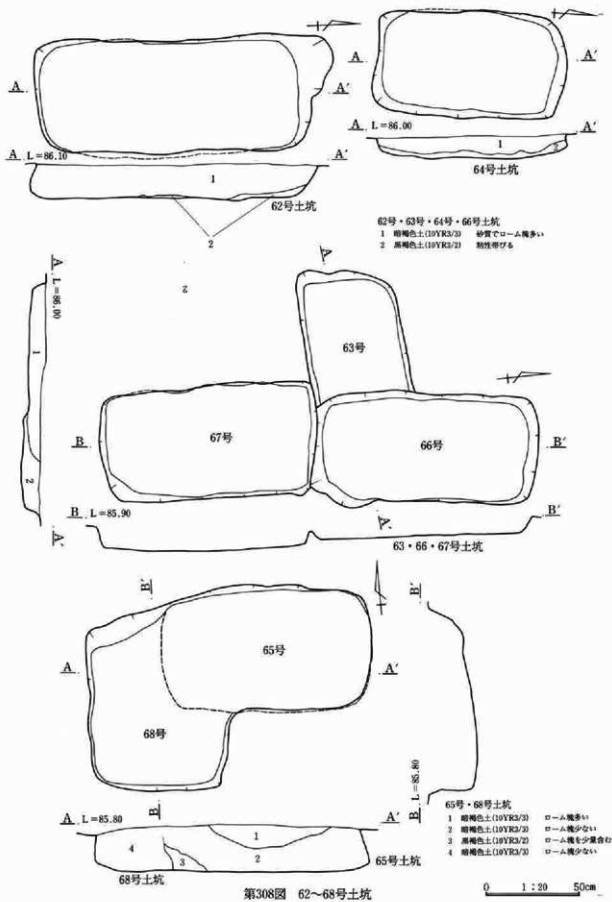
55号～61号・70号土坑

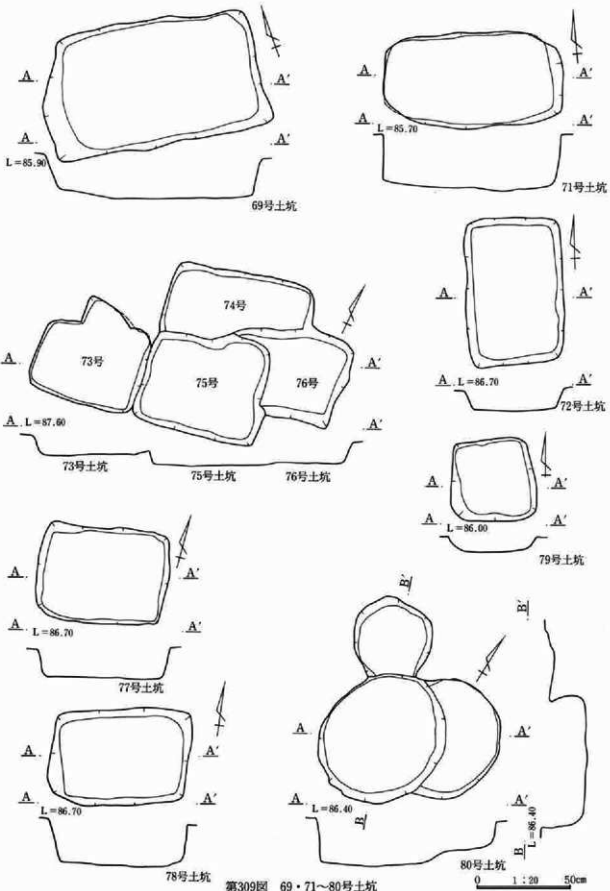
- 1 暗褐色土(10YR3/2) 砂質でローム残多い
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 粘性帯びる
- 3 褐色土(10YR4/4) ローム残多い
- 4 黒色土(10YR2/1) 砂質でしまる
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 粘性帯び、ローム残多い



第307図 55～61・70号土坑

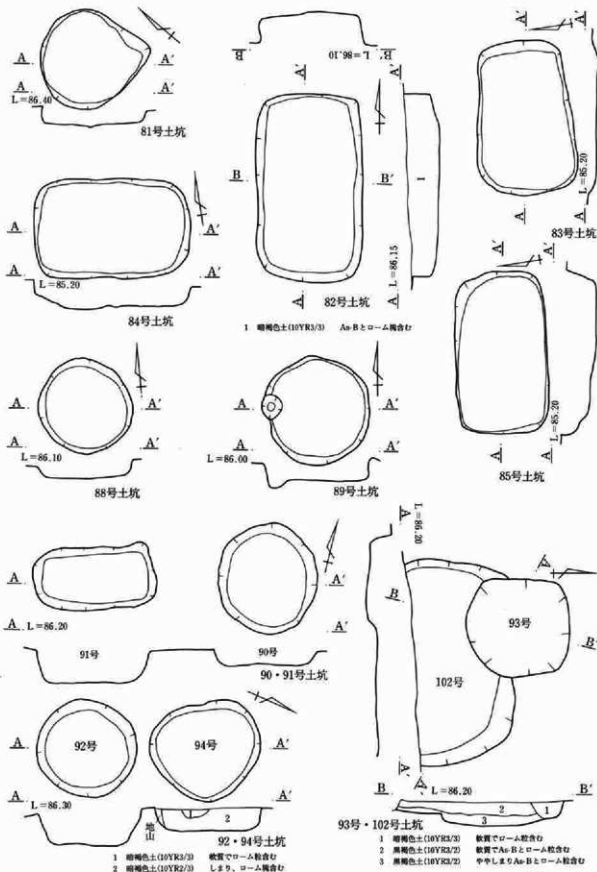
0 1:20 50cm





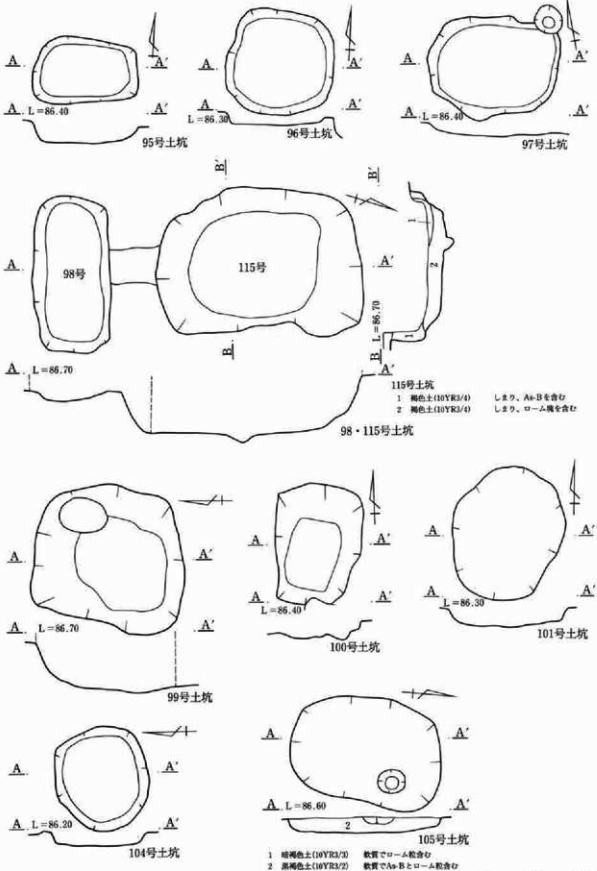
第309図 69・71~80号土坑

第3章 検出された遺構と遺物



第310図 81~85・88~94・102号土坑

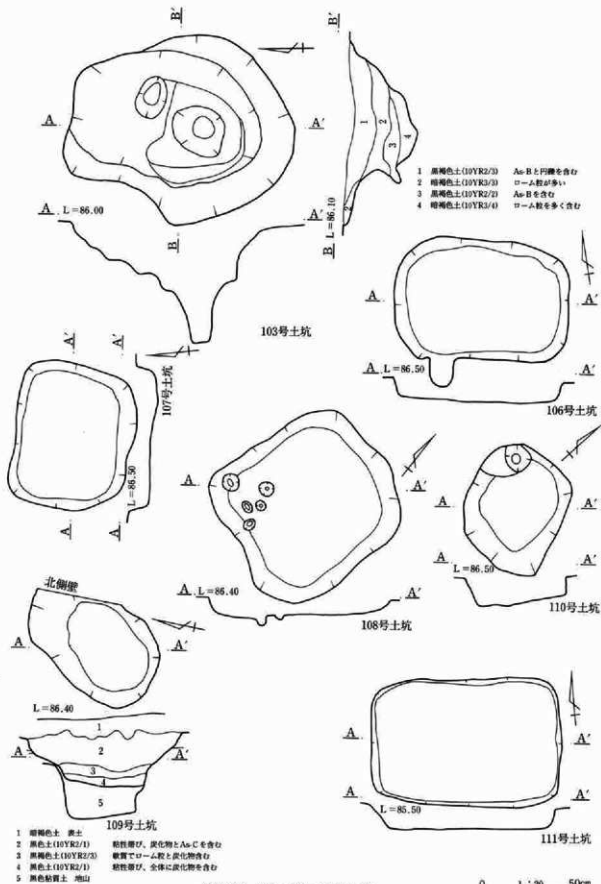
3 古墳時代以降の遺構と遺物



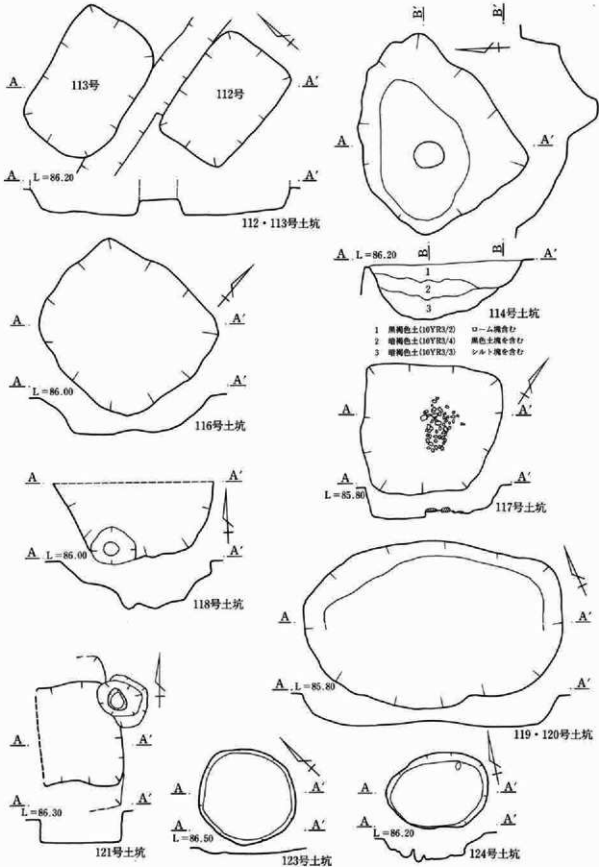
第311図 95～101・104・105・115号土坑

0 1 : 20 50cm

第3章 検出された遺構と遺物



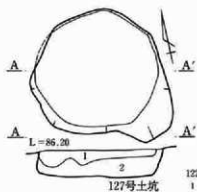
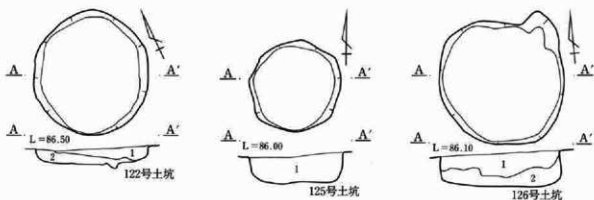
第312図 103・106～111号土坑



第313図 112～114・116～121・123・124号土坑

0 1 : 20 50cm

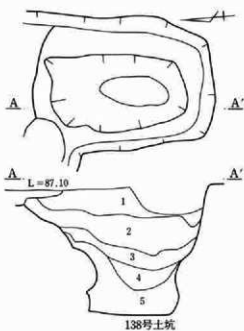
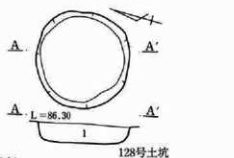
第3章 検出された遺構と遺物



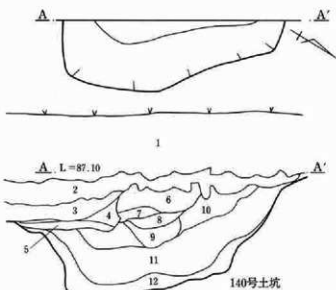
122号～128号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)
2 黒褐色土(10YR3/2)

砂質でAs-AとAs-Bを含む
As-Bとローム粒を含む



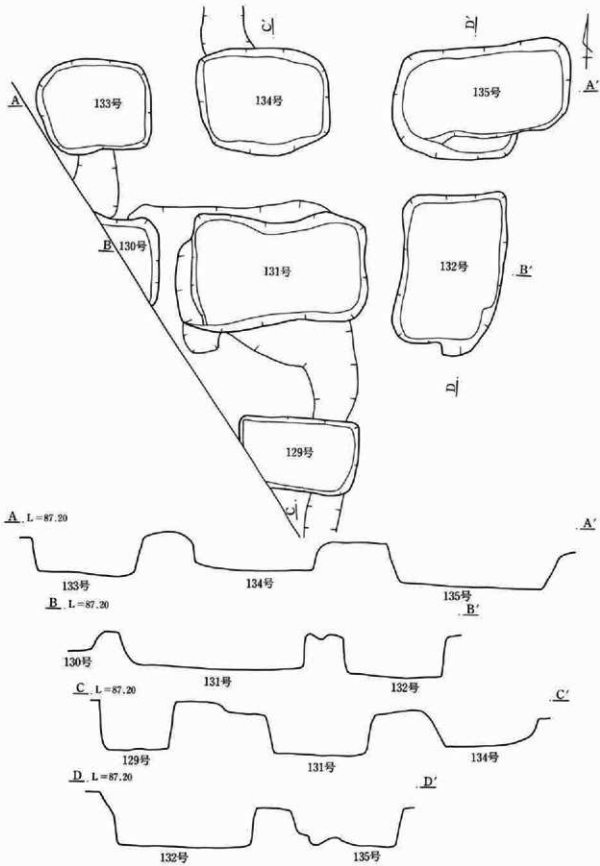
- 1 褐色土(10YR4/4) しまり、ローム粒含む
2 黄褐色土(10YR5/6) ローム塊含む
3 暗褐色土(10YR3/4) 軟質でローム粒含む
4 黒褐色土(10YR2/2) 粘性强び軟質
5 暗褐色土(10YR3/4) 軟質でローム塊含む



- 1 黄土
2～5 7号住居跡埋土
6 暗褐色土(10YR3/4) Hs-FFとAs-C、塊土を含む
7 褐色土(10YR4/4) 6層に近似、やや明るい
8 褐色土(10YR4/6) ローム粒主体
9 暗褐色土(10YR3/3) 塊土塊を含む
10 暗褐色土(10YR3/4) 粘性强び、As-Cを含む
11 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒とAs-Cを含む
12 黒褐色土(10YR3/3) ローム粒とローム塊多い

第314図 122・125～128・138・140号土坑

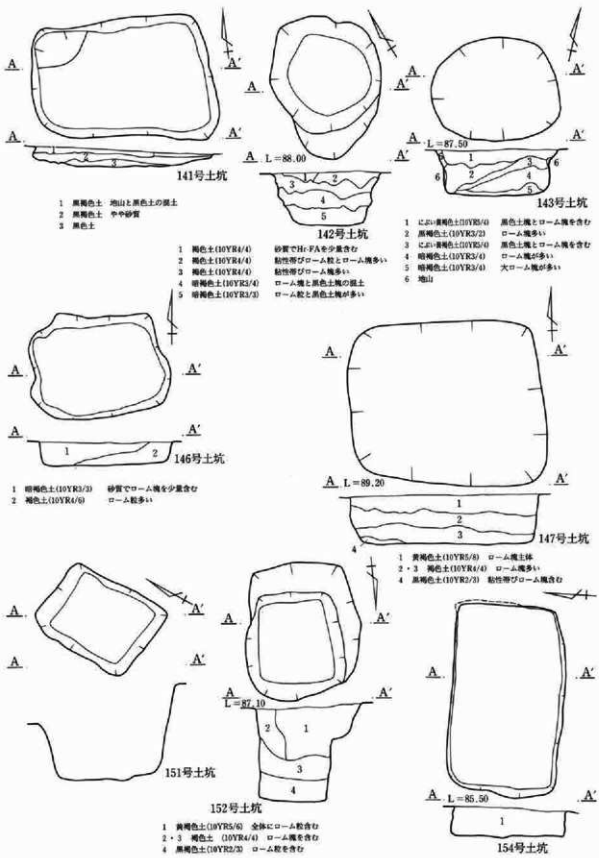
0 1:20 50cm



第315図 129~135号土坑

0 1:20 50cm

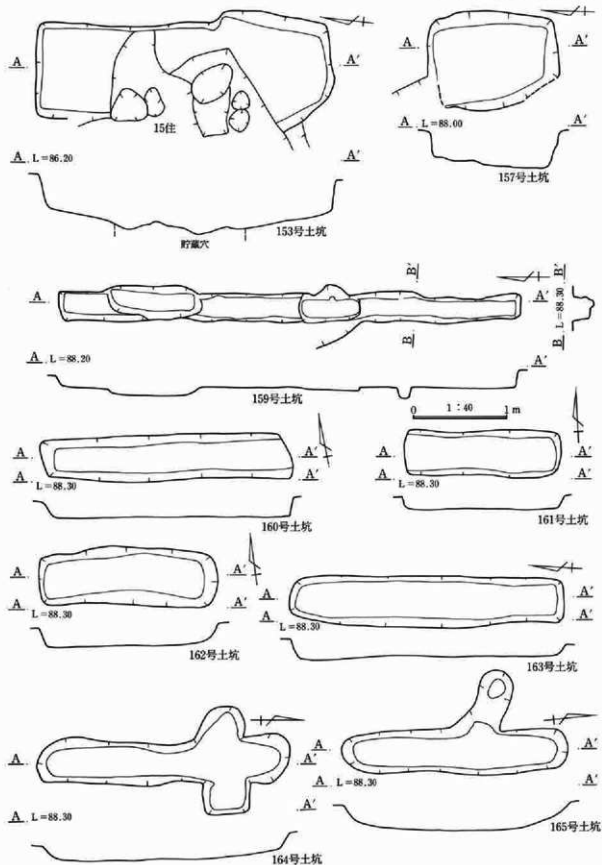
第3章 検出された遺構と遺物



第316図 141～143・146・147・151・152・154号土坑

0 1:20 50cm

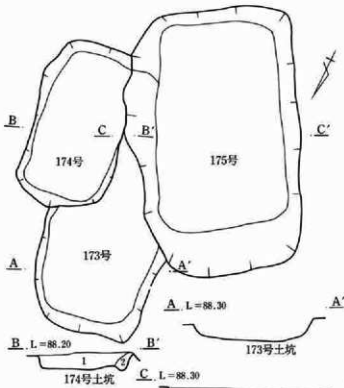
3 古墳時代以降の遺構と遺物



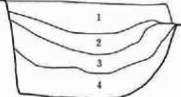
第317図 153・157・159～165号土坑

0 1:20 50cm

3 古墳時代以降の遺構と遺物

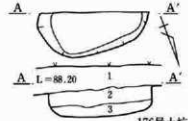


- 1 黒褐色土(16YR3/2) ローム塊を少量含む
2 褐色土(10YR4/4) ローム塊多い



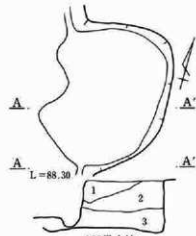
175号土坑

- 1~3 褐色土 ローム塊多い
4 褐色土 ローム塊と粘土を含む



176号土坑

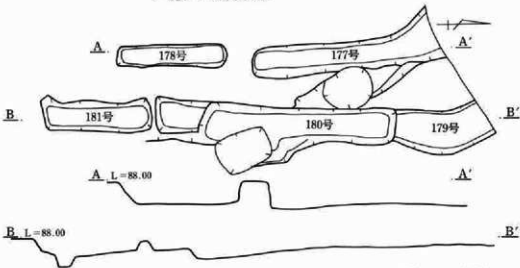
- 1 暗褐色土(10YR3/3) 黄土
2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質でローム塊を含む
3 黒褐色土(10YR2/2) 砂質でローム塊を含む



182号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) H+FFを少量含む
2 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒主体
3 褐色土(10YR4/4) しまり、ローム粒を含む

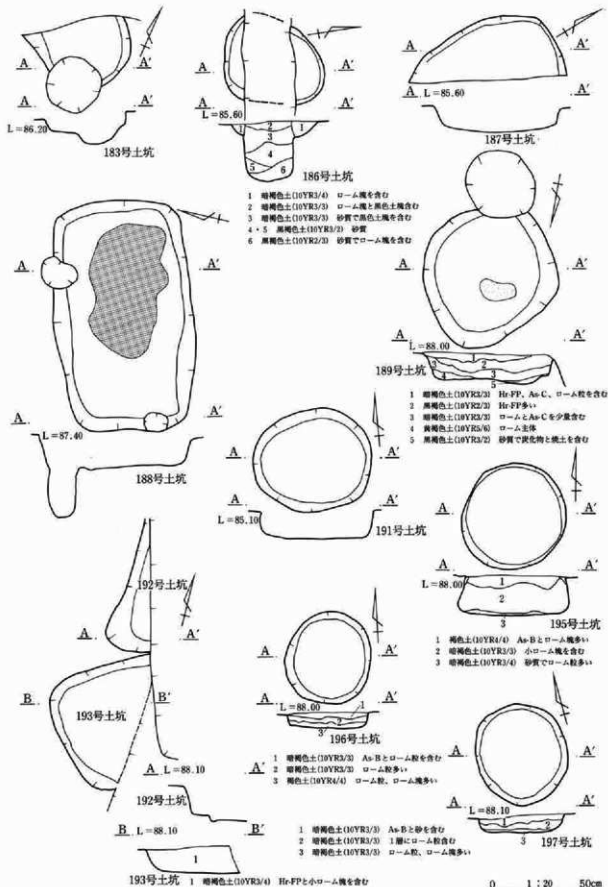
0 1:20 50cm



0 1:30 1m

第319図 173~182号土坑

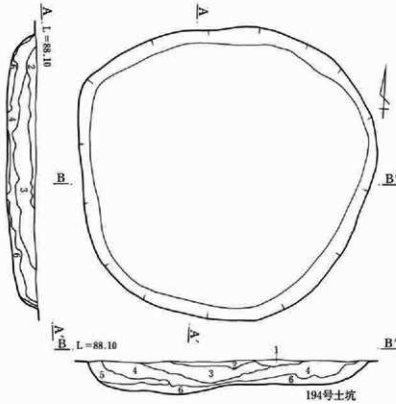
第3章 検出された遺構と遺物



第320図 183・186~189・191~193・195~197号土坑

0 1:20 50cm

3 古墳時代以降の遺構と遺物



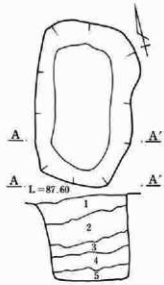
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 砂質
- 2・3 黒色土(10YR2/1) As・Cを含む
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 1層にローム散を含む
- 5 暗褐色土(10YR3/4) 褐色土塊を含む
- 6 褐色土(10YR4/4) ローム塊を含む

194号土坑



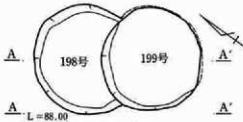
200号土坑

- 1 暗褐色土(10YR2/3) As・Bとローム塊を含む
- 2 暗褐色土(10YR2/3) 1層よりローム少ない
- 3 黄褐色土(10YR6/8) ローム粒、ローム塊主体



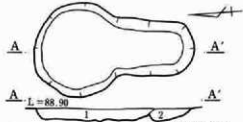
201号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) ローム塊を含む
- 2 黒褐色土(10YR2/2) ローム塊を含む
- 3 褐色土(10YR3/4) ローム粒、ローム塊多い
- 4・5 暗褐色土(10YR3/4) ローム塊と黒色土塊が多い



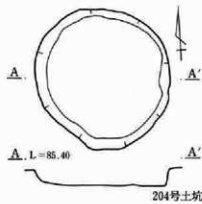
198・199号土坑

- 1 暗褐色土(10YR2/3) As・Bと砂を含む
- 2 暗褐色土(10YR2/3) 1層にローム散を含む
- 3 褐色土(10YR3/4) ローム粒、ローム塊多い



203号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3) As・Bとローム散を含む
- 2 褐色土(10YR4/4) ローム塊多い

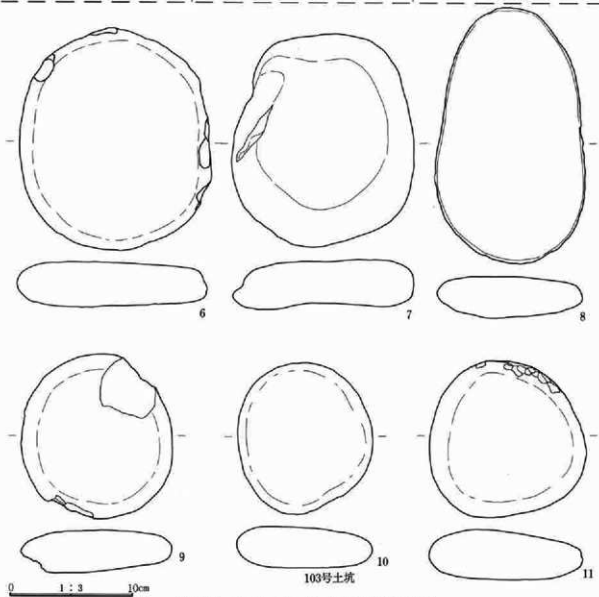


204号土坑

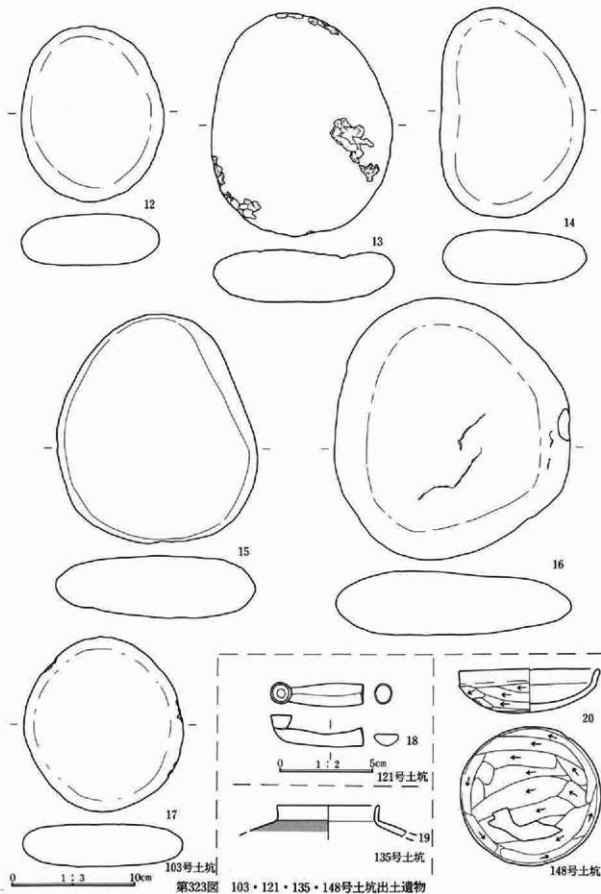
第321図 194・198~201・203・204号土坑

0 1:20 50cm

第3章 検出された遺構と遺物



第322図 2・31・32・42・103号土坑出土遺物



第323图 103・121・135・148号土坑出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

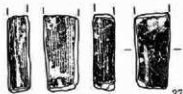


0 1:3 10cm



0 1:1 2.5cm

151号土坑



164号土坑

0 1:3 10cm

第324図 151・164号土坑出土遺物

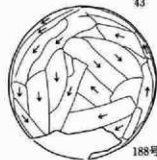
3 古墳時代以降の遺構と遺物



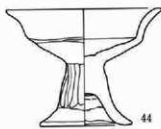
184号土坑



43



188号土坑



44

189号土坑

0 1 : 3 10cm

第325図 184・188・189号土坑出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

表7 土坑一覧(1)

土坑番号	位 置	平面形	規 模 (長軸×短軸)	深さ	主軸方向	出土遺物	備 考
1号土坑	6区L-0	円	58×55	17	—		
2号土坑	5区F-16	(円)	45×—	10	—	灰釉皿	
3号土坑	5区E-16	円	38×36	18	—		
4号土坑	5区C-16	円	50×47	30	—		
5号土坑	5区A-16	円	51	15	—		
6号土坑	5区D-14	(円)	65×58	43	—		
7号土坑	5区B-10	円	78	23	—		
8号土坑	5区B-15	楕円	65×55	35	N-40°-E		2基の柱穴か
9号土坑	5区B-11	円	60	8	—		
10号土坑	5区K-13・14	円	63	8	—		
11号土坑	5区G-6・7	円	75×70	11	—		
12号土坑	5区H-6	不整円	60×53	17	—		
13号土坑	5区G-5・6	円	67	18	—		
14号土坑	5区F-4	円	82	17	—		
15号土坑	5区FG-5	円	73	14	—		
16号土坑	5区F-5	円	70	11	—		
17号土坑	5区F-3	楕円	78×60	18	N-10°-E		2基重複
18号土坑	5区G-5	円	75	13	—		
19号土坑	4区P-10	円	60	15	—		
20号土坑	4区P-10	円	58	8	—		
21号土坑	4区Q-9	円	73	17	—		
22号土坑	4区Q-11	円	57×43	30	—		
23号土坑	4区O-9	円	35	2	—		
24号土坑	4区O-8・9	楕円	60×48	6	—		
25号土坑	4区O-8	円	72	15	—		
26号土坑	4区M-6	長方	130×60	10	N-4°-W		
27号土坑	5区G-17	(楕円)	72×33	11	N-30°-W		
28号土坑	4区XY-18	楕円	103×87	17	—		2号溝を切る
29号土坑	4区X-19	不定	98×48	12	—		2基重複か
30号土坑	5区LM-11	長方	105×43	23	N-69°-W		
31号土坑	5区E-20	長楕円	95×20	8	N-62°-W	須恵杯 染付皿	2号道路を切る
32号土坑	3区B-19	楕円	108×75	73	—		
33号土坑	欠番						
34号土坑	3区C-20	円	60	28	—		
35号土坑	3区BC-21	(円)	68×58	17	—		
36号土坑	3区C-21	不整楕円	90×65	23	—		
37号土坑	3区CD-22・23	長方	250×142	45	N-52°-W		
38号土坑	3区B-23	円	60	11	—		
39号土坑	3区B-19	不整円	55×—	8	—		
40号土坑	3区DE-22	円	68	10	—		
41号土坑	3区B-19	(円)	95×—	60	—		
42号土坑	6区KL-0	不定	182×140	20	—	壺、壺	
43号土坑	4区M-7	長方	72×—	20	N-90°-E		
44号土坑	4区W-3	長方	90×58	30	N-88°-W		
45号土坑	4区W-3	円	53	17	—		
46号土坑	4区V-1	長方	88×57	30	N-90°-E		
47号土坑	4区V-0	長方	93×54	27	N-4°-E		
48号土坑	4区V-0	長方	96×50	32	N-1°-W		
49号土坑	2区U-24	長方	95×52	31	N-3°-W		
50号土坑	4区X-2	長方	86×53	30	N-1°-W		
51号土坑	4区U-0	長方	93×56	28	N-2°-W		
52号土坑	4区P-3	長方	120×64	25	N-88°-W		
53号土坑	4区Q-1	長方	83×63	20	N-85°-W		
54号土坑	4区Q-1	(長方)	80×58	16	N-82°-W		
55号土坑	4区Q-1	円	62	28	—		
56号土坑	4区Q-1	長方	90×52	23	N-88°-W		
57号土坑	4区O-5	長方	100×63	28	N-75°-W		
58号土坑	4区M-5	長方	118×58	15	N-8°-W		
59号土坑	4区M-5	長方	90×50	20	N-90°-E		
60号土坑	4区L-4	長方	102×50	18	N-3°-W		

表8 土坑一覧(2)

土坑番号	位 置	平面形	規 模 (長軸×短軸)	深さ	主軸方向	出土遺物	備 考
61号土坑	4区L-3・4	長方	94×57	15	N-14°-E		
62号土坑	4区L-3・4	長方	146×59	20	N-2°-E		
63号土坑	4区M-4	長方	—×52	10	N-87°-E		
64号土坑	4区M-3	長方	100×58	11	N-89°-W		
65号土坑	4区O-4	長方	(112)×67	24	N-87°-W		
66号土坑	4区M-3・4	長方	(120)×56	9	N-6°-E		
67号土坑	4区M-4	長方	116×60	11	N-2°-E		
68号土坑	4区NO-4	長方	94×75	23	N-1°-E		
69号土坑	4区O-3	長方	116×67	20	N-85°-W		
70号土坑	4区M-5	長方	(90)×50	18	N-88°-E		
71号土坑	4区U-1	長方	95×52	28	N-86°-W		
72号土坑	2区K-20	長方	77×52	13	N-5°-W		
73号土坑	2区K-21	長方	58×46	10	N-85°-E		
74号土坑	2区L-21	長方	78×—	5	N-78°-E		
75号土坑	2区L-21	長方	68×56	15	N-79°-E		
76号土坑	2区L-21	長方	—×47	13	N-77°-E		
77号土坑	2区L-21	長方	69×51	17	N-73°-E		
78号土坑	2区M-21	長方	74×50	23	N-80°-E		
79号土坑	2区M-21	正 方	45×45	8	N-90°-E		
80号土坑	2区N-22	円	73・63・42	25-14	—		3基重複
81号土坑	2区O-22	(円)	53	10	—		
82号土坑	5区B-3	長方	100×56	17	N-2°-E		
83号土坑	4区S-2	長方	82×53	4	N-86°-W		
84号土坑	4区S-2	長方	84×52	15	N-81°-W		
85号土坑	4区S-3	長方	86×48	17	N-81°-W		
86号土坑	欠番						
87号土坑	欠番						
88号土坑	2区O-24	円	50	8	—		
89号土坑	4区P-0	円	58	13	—		
90号土坑	2区O-24	円	58	8	—		
91号土坑	2区O-24	長方	65×33	17	N-72°-E		
92号土坑	2区N-23	円	53	19	—		
93号土坑	2区N-23	隅丸長方	55×52	13	—		
94号土坑	2区N-23	不整円	60×52	13	—		
95号土坑	2区N-23	長方	56×36	11	—		
96号土坑	2区O-21	隅丸方	58×55	8	—		
97号土坑	2区O-20	不整長方	68×50	8	N-80°-W		
98号土坑	2区N-18	長方	82×42	5	N-75°-E		
99号土坑	2区P-17	不定	80×70	27	—		
100号土坑	2区P-19	不整楕円	65×47	10	N-12°-E		1・2号獨立と重複
101号土坑	2区P-23	楕円	70×59	10	—		
102号土坑	2区O-23	円	55	8	—		
103号土坑	4区N-4	(円)	120×103	62	—	礫12点	井戸か
104号土坑	2区M-24	円	55	8	—		
105号土坑	2区L-23	隅丸長方	82×55	8	N-5°-E		
106号土坑	2区Q-17	隅丸長方	93×62	11	N-80°-W		
107号土坑	2区R-17	隅丸長方	77×64	12	N-85°-W		
108号土坑	2区R-16・17	隅丸正 方	90×80	11	N-7°-E		
109号土坑	2区R-16	楕円	80×47	30	N-22°-E		
110号土坑	2区S-16	楕円	67×53	14	N-27°-E		
111号土坑	4区U-2	長方	102×67	13	N-85°-W		
112号土坑	2区Q-23	長方	65×46	11	N-89°-E		
113号土坑	2区Q-23	長方	75×48	12	N-82°-E		
114号土坑	2区T-18	不定	105×88	42	—		
115号土坑	2区N-17・18	長方	115×73	27	N-13°-W		
116号土坑	2区R-20	長方	86×77	20	N-89°-E		
117号土坑	2区S-21	不整方	74×65	16	—	礫	
118号土坑	2区T-21	不明	83×—	25	—		
119号土坑	2区T-22	不整楕円	138×87	16	N-26°-E		
120号土坑	欠番						

第3章 検出された遺構と遺物

表9 土坑一覧(3)

土坑番号	位置	平面形	規 模 (長×幅)	深さ	主軸方向	出土遺物	備考
121号土坑	2区O-20	(長方)	55×(44×)	25	N-5'-E	煙管	1・2号掘立と重複
122号土坑	3区B-24	円	66	8	—		
123号土坑	3区A-24	円	53	3	—		
124号土坑	2区Y-24	楕円	54×40	11	—		
125号土坑	2区X-24	円	46	16	—		
126号土坑	2区X-24	円	72	19	—		
127号土坑	2区X-23	円	69	14	—		
128号土坑	2区X-23	円	53	9	—		
129号土坑	2区G-24	長方	65×40	26	N-84'-W		
130号土坑	2区G-23	(長方)	—×(45)	11	—		
131号土坑	2区G-23	長方	102×53	26	N-84'-E		
132号土坑	2区H-23	長方	72×53	23	N-4'-E		
133号土坑	2区G-23	隅丸方	61×50	24	N-86'-E		
134号土坑	2区G-23	隅丸長方	70×57	18	N-85'-E		
135号土坑	2区H-23	隅丸長方	95×45	20	N-83'-E	短頭壺	
136号土坑	2区G-21	不定	115×—	19	—		
137号土坑	欠番						
138号土坑	2区G-22	長方	96×70	67	N-8'-E		
139号土坑	2区I-23	円	47	4	—		
140号土坑	2区H-24	不定	118×—	65	—		7号住に切られる
141号土坑	4区R・S-1	不整長方	97×60	8	N-89'-W		
142号土坑	2区M-5	(円)	62	28	—		
143号土坑	2区R-6	円	68×53	25	—		
144号土坑	1区Y-10	(円)	—×—	—	—		43号住を切る
145号土坑	2区B-11	円	67	5	—		26・27号住を切る
146号土坑	1区X-8	長方	75×53	12	N-80'-E		
147号土坑	1区W-6	長方	104×87	26	N-89'-E		
148号土坑	1区M-6	円	35	11	—	杯	
149号土坑	2区M-7	不整円	50	15	—		
150号土坑	2区N-7	不整円	32	15	—		
151号土坑	2区I-21	長方	56×44	48	N-2'-E	瓦、瓦水遣	墓、15号住を切る
152号土坑	2区I-21	長方	70×60	48	N-2'-W		
153号土坑	2区J-21	(長方)	159×(50)	26	N-7'-W		
154号土坑	4区X-3	長方	100×60	15	N-86'-W		
155号土坑	4区W-2	楕円	140×35	21	N-80'-E		
156号土坑	4区V-1	不定	90×—	6	—		
157号土坑	1区X-9	長方	70×52	20	N-9'-W		25号住と重複
158号土坑	欠番						
159号土坑	1区Y-5~7	(長方)	490×30	30	N-2'-W		土坑群
160号土坑	1区W-5	(長方)	—×25	20	N-86'-W		
161号土坑	1区X-5	長方	83×25	25	N-88'-W		
162号土坑	1区W-6	長方	96×30	21	N-88'-W		
163号土坑	1区X-6	長方	145×26	11	N-5'-W		
164号土坑	1区X-5・6	(長方)	133×23	24	N-1'-W	磁石	
165号土坑	1区X-5	(長方)	120×22	17	N-1'-E		
166号土坑	1区V-5	長方	82×25	8	N-82'-E		21号住を切る
167a号土坑	1区W-4	長方	144×28	24	N-90'-E		39号住を切る
167b号土坑	1区W-4	長方	88×24	21	N-90'-E		
167c号土坑	1区W-4	長方	110×31	30	N-90'-E		
168号土坑	2区A-5	長方	126×24	28	N-90'-E		
169号土坑	1区Y-8	(長方)	—×28	25	N-5'-W		
170号土坑	欠番						
171号土坑	1区Y-12	円	97	28	—		31号住を切る
172号土坑	1区W-10	(円)	(80)	40	—		
173号土坑	1区T-5	(長方)	—×63	17	N-10'-W		
174号土坑	1区T-5	長方	90×47	15	N-5'-W		
175号土坑	1区ST-5	長方	140×93	94	N-29'-W		
176号土坑	1区T-6	不明	(60)×—	16	—		
177号土坑	1区W-10	(長方)	—×26	22	N-3'-W		
178号土坑	1区X-11	長方	86×18	20	N-1'-W		

表10 土坑一覽(4)

土坑番号	位 置	平面形	規 模 (長×幅)	深 さ	主軸方向	出土遺物	備 考
179号土坑	1区X-10	溝状	—×35	8	—	—	25号住を切る
180号土坑	1区X-10	長方	152×30	26	N-1'-E	—	—
181号土坑	1区X-11	長方	87×24	15	N-1'-W	—	—
182号土坑	1区X-8	(円)	(77)	25	—	—	24号住に切られる
183号土坑	1区Y-7	(円)	(50)	17	—	—	—
184号土坑	1区Y-8	円	55	38	—	—	煙管、寛永通寶
185号土坑	1区XY-8	方	72×58	52	N-89'-E	—	—
186号土坑	4区M-7	不整円	60×45	8	—	—	—
187号土坑	4区M-7	(楕円)	85×—	29	—	—	—
188号土坑	2区E-14	長方	120×77	38	N-76'-E	杯	50号住を切る
189号土坑	2区E-11	円	78×73	15	—	高杯	48号住を切る
190号土坑	欠番						
191号土坑	2区B-8	(円)	(63)	24	—	—	—
192号土坑	2区C-10	不明	—×—	53	—	—	54号住と重複
193号土坑	2区C-10	(方)	—×—	30	N-60'-E	—	54号住と重複
194号土坑	2区J-8・9	不整円	163×156	25	—	—	—
195号土坑	2区I-9	円	58	22	—	—	—
196号土坑	2区J-9	円	48×45	17	—	—	—
197号土坑	2区K-9	円	53×48	21	—	—	—
198号土坑	2区I-10	円	55	8	—	—	—
199号土坑	2区I-10	円	53	12	—	—	—
200号土坑	2区I-10	円	45	8	—	—	—
201号土坑	2区I-13	不整長方	85×55	45	N-17'-E	—	17号溝を切る
202号土坑	欠番						
203号土坑	2区G-11	(円)	85×48	5	N-10'-E	—	楕円土坑と重複か
204号土坑	2区F-12	円	73	9	—	—	—

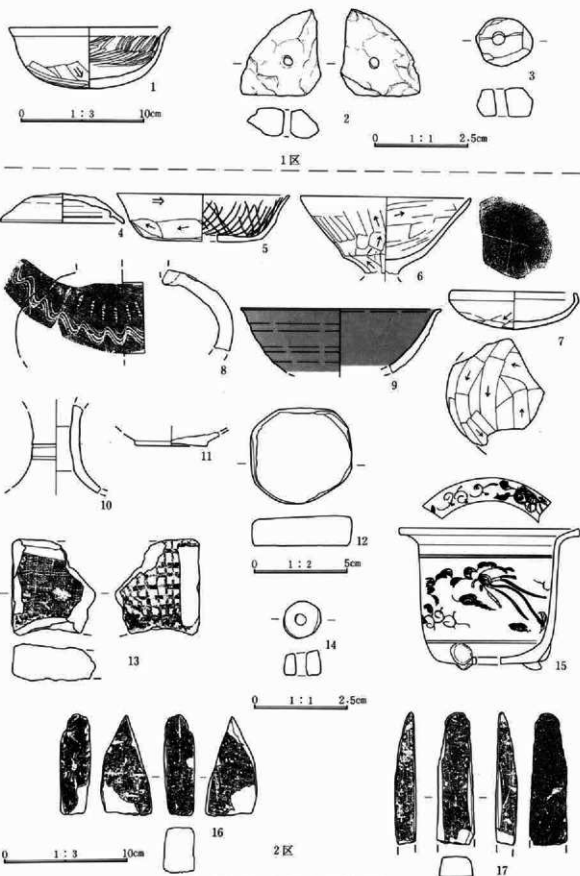
(10) 遺構外出土遺物

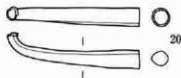
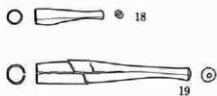
ここでは古墳時代以降の遺構に伴わない、もしくは帰属する遺構が判然としない出土遺物のうち、帰属時期の明らかなものと特殊な遺物について取り上げた。

1区で取り上げた古墳時代の杯と滑石製白玉は、いずれかの竪穴住居跡に伴うものであろう。

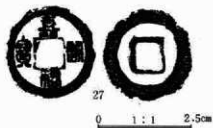
2区では、竪穴住居跡に伴うと推定される古墳～平安時代の土器類のほかに、瓦1点が出土しており26・27号溝で区画される遺構との関係を示唆している。近世以降のものでは、染付植木鉢や砥石、煙管、寛永通寶が出土したが、いずれも調査区中央に存在した屋敷跡と墓に伴うものだろう。

4区出土の手づくね土器2点は、1号井戸の祭祀にかかわる遺物の可能性がある。なお4・5区でも煙管と寛永通寶が出土しており、近世以降の墓が分布していたことを知る。





0 1:2 5cm



0 1:1 2.5cm

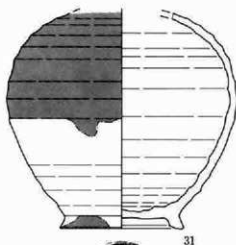


0 1:2 5cm



0 1:1 2.5cm

2区グリッド



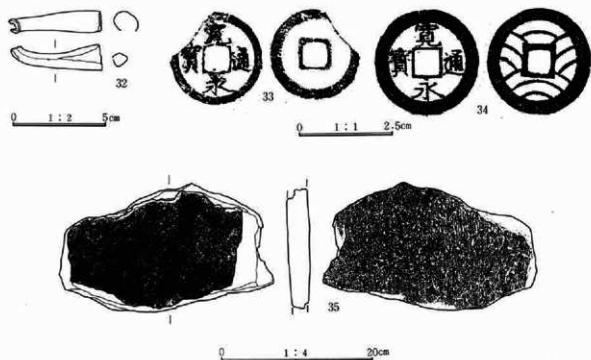
31

4区グリッド

0 1:3 10cm

第327図 2・4区グリッド出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第328図 5区グリッド出土遺物

第4章 科学分析及び建築学的考察

1. 鉄器・鉄滓の金属学的解析

岩手県立博物館 赤沼英男

群馬県前橋市今井に立地する今井道上・道下遺跡からは、土器を始めとする関連出土品によって6～10世紀代と推定される住居跡と、鉄生産関連炉が検出されている。鉄生産関連炉周辺からは、表面に赤錆が析出した小さな鉄塊と相当量の鉄滓が出土しており、住居内もしくはその周辺で使用する鉄器の自給がなされていたものと解釈することは容易であるが、生産の具体的内容については不明である。

鉄生産関連炉の性格と住居跡への鉄器の供給を明らかにすることを目的として、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団から、同遺跡より出土したもののうち8～10世紀代に比定可能な鉄器ならびに鉄滓、およびほぼ同時代に比定される隣接の二之宮谷地遺跡出土鉄器の金属学的解析を依頼された。

解析の結果、鉄生産関連炉は外部より供給された鉄鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用し鋼を製造するという鋼精錬炉である可能性が高いことが判明した。また、遺跡内での鋼の製造と併行して、製品鉄器の供給もなされていたことが明らかになった。群馬県上野園分僧寺・尼寺中間地域、東京都別所遺跡、および長野県吉田川西遺跡などにみられるように¹⁾²⁾、関東地方においても平安期には鋼精錬が行われていた可能性の高いことが指摘されているが、今回の分析によって、奈良時代にまで遡る可能性のある鋼精錬炉跡が関東地域においても確認されたことになる。さらに、鉄鉄塊の供給地としては大陸をも視野に入れて検討しなければならないなど、律令時代の東日本における鉄・鉄器生産と流通システムの見直しにつながる重要な情報が得られたものと判断される。以下に上述の結果が導き出された実験の過程を報告する。

1. 分析資料

分析した資料は、今井道上・道下遺跡から出土したNa1釘、Na13鉄滓を始めとする鉄器5点、鉄滓8点、および鉄塊2点、二之宮谷地遺跡から出土したNa6鎌を始めとする鉄器7点の合計22点である。分析を行った資料の出土遺構の詳細を表11に、鉄器の外観を第329図に、鉄滓の外観を第336図に示す。

2. 分析用試料の調製

鉄器からの分析用試料の採取は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを用い、鉄器の形状を損ねることのないよう細心の注意を払って行なった。鉄滓については、ほぼ中心線に従って2つに切断し切断面の一方の中央部分から分析用試料片を採取した。採取した試料片を2分し、一方は粉碎した後化学成分分析に、もう一方は組織観察に供した。

3. 分析方法

組織観察用試料は樹脂に埋め込み、表面の垂直面をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、さらに鉄器中に見いだされた非金属介在物、および鉄滓の生成反応を推定するうえで重要と判断された鉱物についてはEPMAによりその組成を決定した。

化学分析用試料は王水・ふっ化水素酸を使って完全に溶解し、誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により各含有成分を定量した。

4 分析結果ならびに考察

4-1 鉄器の化学成分

表12は鉄器から採取した試料片の化学成分分析値

である。No.3 板状鉄器およびNo.12鏝の T.Fe は100%に近く、健全なメタル試料が分析に供されている。No.1 釘、No.4 刀子、および No.10鏝については83.01、75.65、80.17%をとっており、主として黒錆と健全なメタルとから成る試料が分析に供されたが、他の7点の T.Fe は52~68%の間にあり、錆化が相当に進んでいる。

No.1 釘からは銅 (Cu) 分が0.197%、マンガ (Mn) 分が0.326%、No.3 板状鉄器、No.8 鏝先からはりん (P) 分がそれぞれ0.184%、0.131%検出されている。一方、No.9 釘にはP分、コバルト (Co) 分がそれぞれ0.099%、0.048%、No.10鏝にはCo分が0.069%、No.11鏝にはCu分、Ni分、Co分がそれぞれ0.065%、0.078%、0.142%含有されている。

No.1 釘およびNo.3 板状鉄器から検出されたCu分、Mn分、P分が、もとの健全な地金に含有されていたことは明らかである。Cu分、Ni分、Co分については埋蔵環境下から富化される可能性はほとんどない。No.9 釘、No.10・No.11鏝に銅のような鉄以外の金属によって製作された遺物が付着していたという事実も認められないことから、上述の3点の鉄器に含有されるCu分、Ni分、Co分も、それぞれの鉄器の製作に使用された地金に始めから含有されていたものとして扱うことができる。No.8鏝先およびNo.9 釘から検出されたP分については、埋蔵環境下からの富化の可能性もある。このような場合、同じ埋蔵環境下にあった他の鉄器との化学成分上の対比を行う必要があるが、ここでは困難である。従って、これら2点の鉄器から検出されたP分については、もとの健全な地金に含有されていた可能性のあることを述べるにとどめておく。

なお、No.2 刀子、No.4 刀子、No.6 鏝、No.7 刀子、およびNo.12鏝については、化学組成上の特徴を見い

表11 鉄器・鉄滓分析資料

資料名	出土地	出土遺構	時代(推定)
No.1 釘	今井道上・道下遺跡	11住	8 C 後~9 C 前
No.2 刀子	〃	11住	〃
No.3 板状鉄器	〃	44住	9 C 前
No.4 刀子	〃	60住	9 C 後
No.5 釘	〃	1 鍛冶	8~10C
No.6 鏝	二之宮谷地遺跡	8 住	9 C 後
No.7 刀子	〃	19住	10C
No.8 鏝先	〃	35住	8 C 前
No.9 釘	〃	58住	9 C 後
No.10 鏝	〃	24住	9 C
No.11 鏝	〃	50住	8 C
No.12 鏝	〃	43住	8 C
No.13 ガラス質鉄滓	今井道上・道下遺跡	1 鍛冶	8~10C
No.14 〃	〃	〃	〃
No.15 鉄滓	〃	〃	〃
No.16 〃	〃	〃	〃
No.17 〃	〃	〃	〃
No.18 〃	〃	〃	〃
No.19 〃	〃	〃	〃
No.20 〃	〃	〃	〃
No.21 鉄塊	〃	〃	〃
No.26 〃	〃	〃	〃

だすことができなかった。

4-2 鉄器から採取された試料片のマクロおよびミクロ組織

第330図-1-a₁はNo.2 刀子から採取した試料片のマクロ組織である。灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は亀裂および欠落孔に対応する。採取した試料片の断面中央部分には黒錆層が残存しているものの、他は赤錆層と欠落孔からなり、錆化が相当に進んでいる。第330図-1-a₂は第330図-1-a₁の領域A部のミクロ組織であるが、内部に微細な黒点群によって構成される組織が認められる。第330図

表12 鉄器の分析結果

資料名	化 学 成 分 (%)													ミクロ組織	N.M.J	
	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	Mo			Cr
No.1釘	83.01	0.197	0.326	0.075	0.027	0.010	0.005	0.124	0.003	0.014	0.001	0.020	0.007	0.009	no	D
No.2刀子	52.61	0.013	0.008	0.037	0.016	0.039	0.061	2.27	0.100	0.578	0.111	0.005	0.004	0.004	Cm(0.1~0.2%)	T
No.3靴状鉄器	98.94	0.011	0.016	0.184	0.010	0.025	0.007	0.119	0.048	0.014	-	-	-	-	(P-Cm)	no
No.4刀子B	75.65	0.025	0.006	0.036	0.021	0.035	-	-	-	-	-	-	-	-	Cm(0.3~0.4%)	no
No.5釘	59.66	0.012	0.003	0.021	0.013	0.028	0.011	0.028	0.014	0.062	0.007	0.004	0.005	0.004	Cm(0.3~0.4%) (0.5%量)	T
No.6鏝	57.85	0.010	0.004	0.053	0.023	0.028	0.018	0.712	0.030	0.160	0.013	0.005	tr	0.003	no	W.F.D
No.7刀子	55.25	0.013	0.008	0.029	0.023	0.037	0.014	0.651	0.175	0.023	0.010	0.005	0.003	0.004	no	T.F.D
No.8鋸先	67.35	0.022	0.001	0.131	0.028	0.033	0.027	0.630	0.019	0.146	0.009	0.003	-	-	Cm(0.2~0.3%)	no
No.9釘	67.95	0.015	0.008	0.099	0.023	0.048	0.029	1.56	0.080	0.462	0.088	0.002	-	-	Cm(0.2~0.3%)	T
No.10鏝	80.17	0.032	tr	0.026	0.031	0.069	0.007	0.372	0.025	0.091	0.010	tr	tr	tr	Cm(0.1~0.2%)	no
No.11鏝	64.78	0.065	0.003	0.017	0.078	0.142	0.017	0.725	0.043	0.057	0.013	0.004	-	-	no	T.D
No.12鏝	104.43	0.016	0.001	0.029	0.014	0.030	0.013	0.287	0.016	0.012	0.009	0.002	-	-	no	T

注1) 鏝鏝より上は今井温上・瀬下鏝鏝、鏝鏝より下は二之宮谷地鏝鏝から出土したものである。

注2) tr は痕跡、- は分析せず、no は観察されずを表す。

注3) P-Cm は初所セメントタイト、Cm はセメントタイトもしくはその欠陥孔、括弧内の数字はミクロ組織から観察される炭素含有量を表す。

注4) Wはウスタタイト(FeO)、FはFeO-MgO-SiO2系化合物、Tはタン化合物、Dはガラス質けい酸塩である。

第4章 科学分析及び建築学的考察

1-1-a₂は第330図-1-1-a₁の枠で囲んだ部分をさらに高倍で観察したものであるが、黒点群は島状組織(第330図-1にCmの符号を付している)を形成している。この島状組織はもとの健全な鋼におけるパーライト相 [α Feとセメントタイト(Fe_3C)の共晶組織]中のフェライト(α Fe)が失われ、セメントタイトが欠落することによって生じた組織とみなすことができる⁹⁾。島状組織の占める面積割合から、もとの健全な地金は炭素含有量0.1~0.2%の鋼と推定される。第330図-1-c₁・c₂・c₃・d₁・d₂・g₁・g₂から明らかなように、同様の組織はNo4刀子、No5釘、No10鏝にも見いだされ、炭素含有量はそれぞれ0.3~0.4%、0.3~0.4%、0.1~0.2%と評価される。

第330図-1-1-e₁・e₂はNo8鏝先から採取した試料片のミクロ組織である。金属光沢を示す細線状の結晶が残存しているが、これは、もとの健全な鋼におけるパーライト相中のセメントタイトと判定される。この組織からもとの健全な地金の炭素含有量は0.2~0.3%と評価される。第330図-1-1-d₁・d₂、および第330図-2-f₁・f₂から明らかなように、No5釘の領域D2部ならびにNo9釘にも同様にセメントタイト、もしくはその欠落孔が観察される。No5釘については緻密であることから炭素含有量0.5%強の鋼が、また、No8鏝先については炭素含有量0.1~0.2%の鋼が使用されたものとみなすことができる。

第330図-1-1-b₂は第330図-1-1-b₁領域B部、No3板状鉄器から採取した試料片のミクロ組織である。内部に片状をした組織が認められるが、これは初析セメントタイトの欠落孔の可能性が高い⁹⁾。No3板状鉄器には過共析鋼⁹⁾が配されていたものと推定される。今後、金属光沢を示す結晶を見だし、EPMAによる分析によって初析セメントタイトであることを確認する必要がある。

なお、第331図にはNo1釘、No6鏝、No7刀子、No11・No12鏝のマクロ組織を示しているが、これら5点の試料片からはもとの健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった。

4-3 鉄器から採取した試料片に見いだされた非金属介在物組成

第332図はNo1釘から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる2次電子像と反射電子像、ならびに定性分析結果である。介在物は、FeO-SiO₂-Al₂O₃系のガラス質けい酸塩からなる。ガラス質けい酸塩中のFe濃度はきわめて低い。

第333図はNo6鏝から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果を示したものである。介在物は灰色の粒状化合物、ウスタイト(理論組成:FeO)、暗灰色を呈したFeO-MgO-SiO₂系化合物(F:マグネシウムを固溶した鉄かんらん石と推定される)、およびFeO-SiO₂-Al₂O₃-CaO-K₂O-P₂O₅-MgO-SO₃系のガラス質けい酸塩によって構成されている。

第334図はNo11鏝から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果である。介在物は灰色のFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物(T)と黒色のFeO-SiO₂-CaO-MgO-P₂O₅系のガラス質けい酸塩からなる。第335図から明らかなように、No2刀子、No5釘、No7刀子、No9釘、No12鏝の介在物にもチタン化合物が認められた。

なお、No3板状鉄器、No4刀子、No8鏝先、No10鏝には非金属介在物を見いだすことができなかった。

4-4 鉄滓の化学組成

表13は鉄滓から採取した試料片の化学成分分析値である。資料の切断の段階で、No21については鉄滓中に健全な金属の残存が認められたので、金属部分のみを抽出し、鉄滓とは別に分析した。No21Bは抽出した金属の化学成分分析値であるが、Co分が0.056%と高レベルにある。また、Si分、Al分はそれぞれ0.332%、0.045%であり、金属中の不純物は少ないといえる。一方、No21A、すなわち鉄滓部分のT.Feは60.11%を示しており、鉄滓のほかにも黒錆、もしくは赤錆が残存していたものと推定される。Si分、Ca分、Al分、Mg分はそれぞれ3.95%、0.

表13 鉄滓の分析結果

資料名	成分 (%)													鉱物組成	
	T,Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	CaO+MgO+CuO+MgO /Sb ₂ O ₃		Al ₂ O ₃
№13鉄滓	48.09	nd	0.194	0.104	tr	0.004	2.65	3.64	1.50	3.97	1.14	0.233	0.385	0.607	W.F.T.M
№14 #	48.74	0.002	0.108	0.048	nd	0.004	1.11	5.59	1.65	5.21	0.853	0.113	0.309	0.575	H.F.M
№15 #	56.40	0.001	0.203	0.088	0.001	0.065	2.75	3.63	1.64	3.48	1.23	0.189	0.357	0.662	W.T.H.F.D
№16 #	47.87	0.001	0.143	0.074	nd	0.006	1.58	5.36	1.79	3.79	0.821	0.128	0.337	0.538	#
№17 #	60.09	0.002	0.050	0.097	nd	0.004	0.505	3.68	0.935	2.13	0.379	0.050	0.247	0.483	T.H.F.M
№18 #	55.38	tr	0.145	0.073	nd	0.006	2.24	4.52	1.05	1.92	0.128	0.185	0.037	0.10	W.T.F.D
№19 #	56.46	nd	0.092	0.103	nd	0.004	0.885	3.86	0.052	1.92	0.596	0.089	0.125	0.292	#
№20 #	49.29	0.002	0.163	0.076	nd	0.006	2.56	5.03	0.388	2.09	0.803	0.108	0.174	0.320	#
№21 A	60.11	0.008	0.022	0.038	0.006	0.023	0.094	3.35	0.303	0.861	0.215	0.007	0.062	0.477	(P-Cm)(W.F.D)
№21 B	101.60	0.014	0.009	0.039	0.014	0.036	0.075	0.332	0.034	0.949	0.026	0.006	-	-	-
№25 #	55.00	0.002	0.114	0.063	nd	0.004	1.35	4.98	0.966	2.54	0.746	0.134	0.243	4.80	W.T.H.F.D

注1) №21 A は鉄滓と鋼滓に混入した鉄滓から成る試料片、№21 B は鋼滓から抽出されたメタルである。

注2) tr は痕跡、nd は検出されず、- は分析せずを表す。

注3) W はワラストナイト、T はチタン化合物、H はFeO-Al₂O₃-TiO₂系化合物、F はFeO-MgO-SiO₂系化合物、D はガラス質けい酸塩、M はマトリックス、P-Cm は初析セメンタイトを表す。

第4章 科学分析及び建築学的考察

303%、0.861%、0.215%含有されている。これらの値を基に、 $(CaO+MgO)/SiO_2$ 、 $(CaO+MgO)/Al_2O_3$ を計算するとそれぞれ0.092、0.477となり、後者については通常の粘土のそれ [通常の粘土では $(CaO+MgO)/SiO_2$ 、 $(CaO+MgO)/Al_2O_3$ がいずれも概ね0.1となる] よりも高値を示す。

表13から明らかなように、No13を始めとする他の9点の鉄滓のT.Feも一様に48%を越している。ウスタイトおよびFeO-SiO₂系化合物が相当に残存しており、一部には鉄錆の混入もうかがえる。さらに、No13、No14、No15、No16、No18、No20、No26鉄滓のTi分はいずれも1%強であり、チタン化合物の残存をも示唆している。なお、 $(CaO+MgO)/SiO_2$ 、 $(CaO+MgO)/Al_2O_3$ は、No18鉄滓を除きやはり通常の粘土のそれよりも高い。

4-5 鉄滓から採取した試料片のマクロおよびミクロ組織

第337図-a₁はNo14鉄滓のマクロ組織、第337図-b₂は同図-b₁領域B₂部のミクロ組織である。灰色の角状を呈した化合物(H)とやや暗灰色の柱状をした化合物(F)、および微細な結晶が析出したマトリックス(M)からなる。第338図に示すEPMAによる分析結果によれば、化合物(H)は、Ti分を固溶したFeO-Al₂O₃系の化合物、化合物(F)はFeO-MgO-SiO₂系の化合物 [マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: $2(Fe,Mg)O \cdot SiO_2$ と推定される] であり、マトリックスにはFe、Si、Al、Ca、K、Na、P、Tiが含有されている。化合物(H)の端部にはTi濃度の高い、明灰色の領域がみられる。FeO-Al₂O₃-TiO₂系の融液が冷却する過程でまずチタン濃度の低いFeO-Al₂O₃系化合物が析出し、つぎにその化合物の回りにTi濃度の高いFeO-TiO₂-Al₂O₃系化合物が析出したものと考えられる。投入された砂鉄が還元され、分解したことによるのであろう。

第337図-c₁はNo15鉄滓のマクロ組織、同図-c₂は同図-c₁、領域C₂部のミクロ組織、第337図-d₁は同図-c₂を高倍で観察したものである。第339図の

EPMAによる分析結果が示すように、Ti分、Al分、Si分を微量に含む灰色の粒状をした化合物(W)、灰色の角状をしたFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物(T)、Al濃度の高い暗灰色のFeO-TiO₂-Al₂O₃系化合物(H)、やや暗灰色を呈したFeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、およびFeO-SiO₂-Al₂O₃-CaO-K₂O-Na₂O-MgO-P₂O₅系のガラス質酸塩(D)によって構成されている。第337図-a₁・a₂・a₃・d₁・d₂・d₃・e₁・e₂・e₃・f₁・f₂・f₃・g₁・g₂・g₃・h₁・h₂・h₃・k₁・k₂・k₃から明らかなように、同様の組織はNo13、No16、No17、No18、No19、No20、No26鉄滓にも認められる。なお、No17鉄滓に観察された粒状の化合物はTi分、Al分を微量に含む化合物であることが、EPMAによる分析によって確認されている。厳密には、No13をはじめとする他の6点の鉄滓に見いだされた粒状の化合物(W)もウスタイト(理論組成:FeO)ではなく、上述と同じ可能性がある。一方、No19鉄滓のミクロ組織には、化合物(W)の内部にチタン化合物と推定される微小な結晶が析出した様子を観察することができる。FeO-TiO₂-Al₂O₃系の融液が冷却する過程で2相に分離し結晶化したものと考えられる。いずれにしても、この化合物の生成経路については、今後EPMAによる精密な分析結果を基に慎重に検討する必要がある。

第337図-i₁はNo21鉄塊のマクロ組織である。灰色の黒錆層と暗灰色の赤錆層に鉄滓が貫入している様子が観察される。また、組織のいたるところには黒色の気泡発生の跡と推定される欠落孔が認められる。第337図-i₂に示す、領域I₂部のミクロ組織によると、貫入した鉄滓は、灰色の粒状化合物(W)(ウスタイト、もしくはTi分とAl分を微量に含むチタン化合物と推定される)、暗灰色の化合物(F)[FeO-MgO-SiO₂系化合物と推定される]、およびガラス質酸塩からなる。第337図-i₃、同図-i₄は、それぞれ同図-i₁の領域I₃、I₄のミクロ組織である。後者の黒錆層からはほとんどの健全な地金の状態を推定することができなかったが、前者には金属光沢を示す柱状の結晶(P-Cm)とその欠落孔が観察される。第340

図はNo21鉄塊の黒錆層に見いだされた結晶(P-Cm)のEPMAによる分析結果であるが、Feと炭素(C)が高濃度に検出されている。結晶形を考慮すると析析セメントと判定される。

第337図- j_1 、 j_2 はNo21鉄塊に付着した鉄滓部分から採取した試料片のマクロ組織と、マクロ組織の枠で囲んだ部分(領域J1部)のミクロ組織である。灰色の鉄滓に鉄滓が入り込んでいる。第341図のEPMAによる分析結果によると、鉄滓はウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、およびFe分をわずかに含むSiO₂-Al₂O₃-K₂O-Na₂O系のガラス質けい酸塩からなる。これら一連の組織観察によって、No21鉄塊は生成した過共析鋼に鉄滓が買入したものであることがわかる。

4-6 鉄器の製作に使用された地金の材質

ミクロ組織観察によって、分析を行った12点の鉄器はすべて鍛造鉄器であることが明らかである。

鋼の製造過程において砂鉄が使用された場合、砂鉄中のFeO-Fe₂O₃-TiO₂系のチタン化合物は炉内の温度と還元状態に応じチタン分が濃縮された化合物へと変わり、その一部が非金属介在物中に残る。従って、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされたNo2刀子、No5釘、No7刀子、No9釘、No11・No12鎌については、一応砂鉄の使用によって製造された鋼によって製作されたものとみることができる。ただし、No11鎌にはCu分、Ni分、Co分がそれぞれ0.065%、0.078%、0.142%含有されている。脈石中にCu分、Ni分、Co分を随伴する鉄鉱石(おそらくは磁鉄鉱)を始発原料として生産された鉄鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬により製造された鋼を用いて製作された可能性が高い。なお、No2刀子、No7刀子、No9釘にもCo分が0.03%強含有されている。それほど高い値ではないが、脈石中にCo分を随伴する特殊な磁鉄鉱、またはそれにTi分が加わったものが始発原料として用いられた可能性がないわけではない。もし前者であれば、Co分の含有量レベルの高い鉄鉄を素材とする鋼精錬によ

って製造された鋼が使用されたことになる。

一方、非金属介在物中にチタン化合物が検出されないNo1釘、No6鎌については、鉄鉱石を始発原料として製造された鋼を用いて製作された可能性が高いことになる。特に、No1釘については脈石中にCu分、Mn分を随伴する鉄鉱石が使用されたのであろう。

非金属介在物を見いだすことができなかったNo3板状鉄器、No4刀子、No8鋤先、No10鎌については、鋼の製造過程での砂鉄の使用の有無については不明である。ただし、Co分を0.069%含有するNo10鎌の始発原料は、脈石中にCo分を含む特殊な磁鉄鉱である可能性が高い。Co含有量が0.035%のNo4刀子についても同様の可能性がある。また、埋蔵環境からの富化の可能性を否定することはできないが、0.184%というP分および0.131%、0.033%というP分、Co分の含有量を考えると、No3板状鉄器の始発原料にはP分、No8鋤先についてはP分、Co分の含有量レベルの高い鉄鉱石が用いられたとみることができる。

上述を整理すると以下のとおりとなる。

- (1) 脈石中にCu分、Mn分を随伴する鉄鉱石を始発原料とするもの……………No1釘
- (2) 化学成分上の特徴がみられない鉄鉱石を始発原料とするもの……………No6鎌
- (3) 脈石中にCu分、Ni分、Co分を随伴する特殊な磁鉄鉱を始発原料として生産された鉄鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する、鋼精錬によって製造された鋼が用いられたもの……………No11鎌
- (4) 砂鉄の使用によって製造された鋼を素材とするもの……………No2刀子、No5釘、No7刀子、No9釘、No12鎌
ただし、No2刀子、No7刀子、No9釘、No12鎌については脈石中にCo分、またはCo分とTi分を随伴する特殊な磁鉄鉱を始発原料とする可能性がある。
- (5) 砂鉄の使用については不明であるが、少なくとも

第4章 科学分析及び建築学的考察

も始発原料は、脈石中にCo分を随伴する特殊な磁鉄鉱である可能性のあるもの

- ……………Na10鎌、Na4刀子
(6) 砂鉄の使用については不明であるが、始発原料として脈石中にP分を含む鉄鉱石が使用された可能性のあるもの……………Na3板状鉄器
(7) 砂鉄の使用については不明であるが、始発原料として脈石中にP分、Co分を含む鉄鉱石が使用された可能性のあるもの……………Na8鋸先

4-7 鉄生産関連遺跡の性格判定の現状

古代・中世の鋼の製造方法については未だに不明な点が多く、幾つかの仮説が提示されているが、それらを整理すると以下の3つの段階に区分することができる。

ア、原料鉱石（砂鉄もしくは鉄鉱石）から鉄分を抽出する段階

イ、アで抽出された鉄分を精製し目的とする鋼を製造する段階

ウ、イで製造された鋼から鉄器を製作する段階
以下ではアを製錬、イを精錬、ウを小鍛冶と呼ぶことにする。

アの製錬によって得られる鉄塊は鋼塊と鉄塊の2つである。後者の鋼塊はそのまま小鍛冶によって目的とする最終製品へと加工される。前者の鉄塊は溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器となる。また、鉄中の炭素分を低減させる、すなわち脱炭することによって鋼を製造することもできる。上述を整理すると、第342図のごとくなる。

これまで古代・中世の鉄生産関連遺跡の発掘調査によって、炉跡と併に流状滓を含む相当量の鉄滓、鉄塊が検出され、炉周辺に利用可能な原料鉱石（砂鉄もしくは鉄鉱石）と木炭資源が存在すれば、その炉は一応製錬炉とみなされてきた。しかし、北沢遺跡の例にみられるように、炉跡が確認されてもその炉は砂鉄を始発原料とする製錬炉ではなく、鉄塊を素材とし脱炭材として砂鉄を使用する精錬炉である可能性の高いことが遺物の金属学的解析によって

指摘されている⁸⁾。

一方、小型の火焔炉に伴って少量の鉄滓やふいごの羽口が検出された場合には、その炉は小鍛冶のための炉として扱われがちである。しかし、青森県百石町に立地する根岸（2）遺跡などのように、小鍛冶ではなく、外部から供給された鉄塊を素材とする鋼精錬が実施されていたと解釈しなければならない炉跡の存在も報告されている⁹⁾¹⁰⁾。

従って、鉄滓の化学組成と鉱物組成のみを根拠としての、あるいは炉跡の検出だけでもってただちに遺跡の性格を判定することは困難である。炉跡に伴って出土した鉄滓と鉄塊、および遺構内もしくはその周辺から採取される原料鉱石の組成を総合的に検討し、併せて炉内反応の状況を推定しながら慎重に遺跡の性格判定を行う必要がある。

4-8 鉄滓組成からみた今井道上・道下遺跡における鉄生産関連遺構の性格

小鍛冶工程では、鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄（スケール）が剝離（これは鍛造薄片と呼ばれる）する。一方、加熱のときは酸化鉄が半溶融状態になり、火焔炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半溶融状の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“塊形状”（供え餅を逆さにした形）の鉄滓状物質が、鉄関連遺跡の発掘調査では小鍛冶滓として扱われている。従って、小鍛冶滓は、金属鉄、錆層、ウスタイト(FeO)を主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成するFeO-SiO₂系化合物が混在した組成をとるはずである。

分析を行った10点の鉄滓のうち、Na14鉄滓とNa21鉄塊に付着した鉄滓を除く8点にチタン化合物が見いだされており、Na14鉄滓にはTi分を微量に含むFeO-Al₂O₃系化合物が検出されている。また、表13の右欄に示すように、ほとんどの鉄滓の(CaO+MgO)/SiO₂、(CaO+MgO)/Al₂O₃は0.1~0.7の間

にある。このような組成の鉄滓を小鍛冶滓とみることはできない。考えられるのは製錬滓か鋼精錬滓のいずれかである。No.14鉄滓とNo.21鉄塊を除くすべての鉄滓にチタン化合物が見いだされていることから、前者であれば砂鉄を原料鉱石とする製錬、後者であれば脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬ということになる。

遺跡の性格を判定する際の重要な遺物として鉄塊系遺物がある。この鉄塊系遺物は、製錬を想定した場合には炉内での生成物として、一方、鋼製錬を想定した場合には脱炭途中、あるいは脱炭が完全に終了した後の鋼塊か、始発物質である鉄塊塊のいずれかとして扱うことができる。

鉄生産関連炉跡からは、鉄滓が付着した鉄塊 (No.21) が検出されている。鉄塊と鉄滓の境界部分、炉内では熔融もしくは半熔融状態のスラグ浴と鉄浴の界面部分ということになるが、この界面部分のガラス質けい酸塩中の Fe 濃度は、第341図から明らかに十分に低いレベルにある。今後 EPMA による定量分析によりガラス質けい酸塩の化学組成を明確にし、平衡状態図から融点を推測する必要があるが、常識的には相当の高還元雰囲気下で生成した鉄滓とみなければならない。既にこの報告書において述べられているように、今井道上・道下遺跡において検出された鉄生産関連炉跡は、断面の内径が約 65×40 cm の楕円形であり、炉底は粘土で構築されている。また、炉壁材には長辺約 30 cm、短辺約 17 cm、厚さ約 10 cm の石材が使用された可能性が高く、装着されたふいごの羽口の内径は約 2 cm であることが発掘調査によって明らかにされている¹²⁾。このように炉高が低く、粘土で構築された炉床をもつ炉での操業の場合、Fe 分をほとんど含まないガラス質けい酸塩が生成されるには、炭素含有量の高い鉄浴とスラグ浴との接触を考えなければならない。No.21の鉄塊部分は過共析鋼からなることが組織観察によって確かめられており、上述の考察と分析結果とは一致する。さらに、過共析鋼には 0.05% 強の Co 分が含有されている。このように高いレベルの Co 分が砂鉄に

由来する可能性は低い。過共析鋼の原料鉱石は、脈石中に Co 分を随伴した特殊な鉄鉱石 (おそらくは磁鉄鉱) であったとみなければならない。こうして、今井道上・道下遺跡では、砂鉄を原料鉱石とする製錬ではなく、Co 分の含有量レベルの高い鉄鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬がなされていた可能性が高いことがわかる。No.21の過共析鋼は、鉄鉄を脱炭することによって得られた鋼塊である。また、No.17を始めとするいくつかの鉄滓に見いだされた、ウスタイトに類似した結晶形をとる $FeO \cdot TiO_2 \cdot Al_2O_3$ 系の化合物は、鋼精錬の最終段階で $FeO \cdot TiO_2 \cdot Al_2O_3$ 系のスラグ融液が冷却・固化することによって生成したのであろう。なお、鉄滓中の $(CaO + MgO) / SiO_2$ 、 $(CaO + MgO) / Al_2O_3$ が高値を示したのは、鋼精錬時における CaO 質材料の使用によるものと考えられる。群馬県地質図によれば今井道上・道下遺跡から南西に直線約 25 km のところに位置する群馬県多野郡神流川周辺、および北東に 15 km のところの山田郡渡良瀬川流域には古生界が分布しており、石灰岩の採取が容易である¹³⁾¹⁴⁾。

4-9 今井道上・道下遺跡への鉄器・鉄塊の供給

4-6 で分類した鉄器の中で、鋼精錬炉に伴って出土した Na.5 釘を、精錬炉において製造された鋼を用いて製作されたこととみなすことに矛盾はない。(4) に分類された Na.5 釘を除く他の 4 点の鉄器、および (5) の 2 点の鉄器についても同様に解釈できる。一方、(1)、(2)、(3) の Na.1 釘、No.6・No.11 鏃は製品として遺跡内に持ち込まれたのであろう。なお、過共析鋼で器形が不明瞭な Na.3 板状鉄器は、鉄器製作のための鋼素材の可能性もある。もし、この鉄器が鋼素材であるならば、少なくとも今井道上・道下 44 号住居跡では、小鍛冶による製品鉄器の製作が行われていたとみなければならない。また、No.3 板状鉄器そのものは、外部から鋼素材として供給されたか、供給された鉄塊塊を用いて遺跡内で製造されたかのいずれかである。後者の場合、Co 分の含有量レ

第4章 科学分析及び建築学的考察

ベルの高い鉄鉄塊の他に、高P分の鉄鉄塊も外部から供給されていたことになる。二之宮宮地遺跡から検出された№8鋸先についても、遺跡内もしくはその周辺において製作されたものとして扱うことができる。

いずれにしても、今井道上・道下遺跡では外部からもたらされた鉄鉄を素材とする鋼精錬による鋼の製造と鉄器の製作が行われており、それと併行して製品鉄器の供給もなされていたことは確実である。

既に述べた青森県石町に立地する根岸(2)遺跡においても、同様の方法により鋼が製造されていたことが、出土した鉄塊ならびに鉄滓の分析によって明らかにされている。鉄鉄を素材とする鋼精錬が、断面が長楕円形の半地下式型型の炉において行われていた可能性の高いことは既に指摘されているが、より小型の簡便な炉においても実施されていたとみななければならない。このことは、火室炉をただちに小鍛冶のための炉と判定することができないことを示している。そして、Co分の含有量レベルの高い鋼塊が新潟県豊浦町に立地する真木山遺跡からも検出されていることを考慮すると¹³⁾、生産規模の大小の問題はあるにしても、鉄鉄を素材とする鋼の製造が、8~10世紀の東日本の広い地域でなされていたものとみることができる。

最後に問題となるのが鉄鉄塊の供給地であるが、Co分に着目すると大陸にまで視野を広げて検討する必要がある。

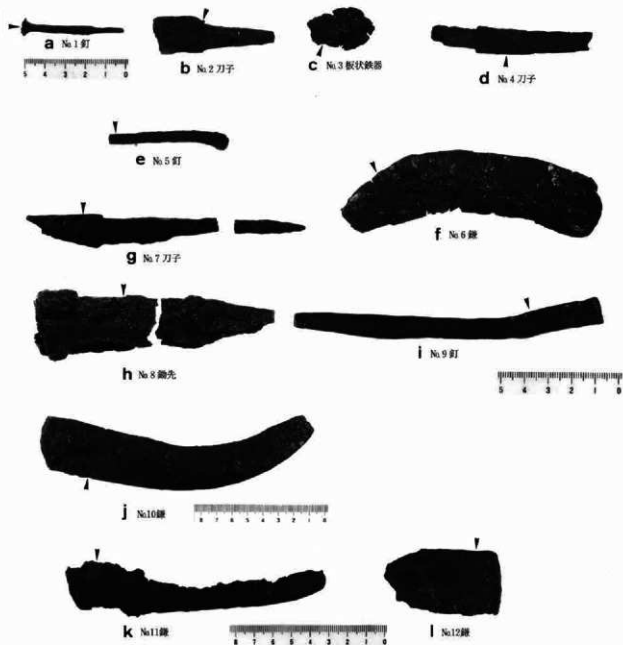
まとめ

今井道上・道下遺跡では、石材を炉壁材に用いて断面が内径約65×40cmの楕円形の炉が構築され、その炉でもって外部から供給された鉄鉄塊を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼の製造、すなわち鋼精錬が行われていた可能性の高いことが明らかになった。また、鋼精錬と並行して製品鉄器そのものも外部からもたらされていたことが判明した。そして、分析した試料の化学組成から、鉄鉄塊や製品鉄器そのものの供給地としては、大陸をも視野に入

れて検討しなければならないことが指摘された。

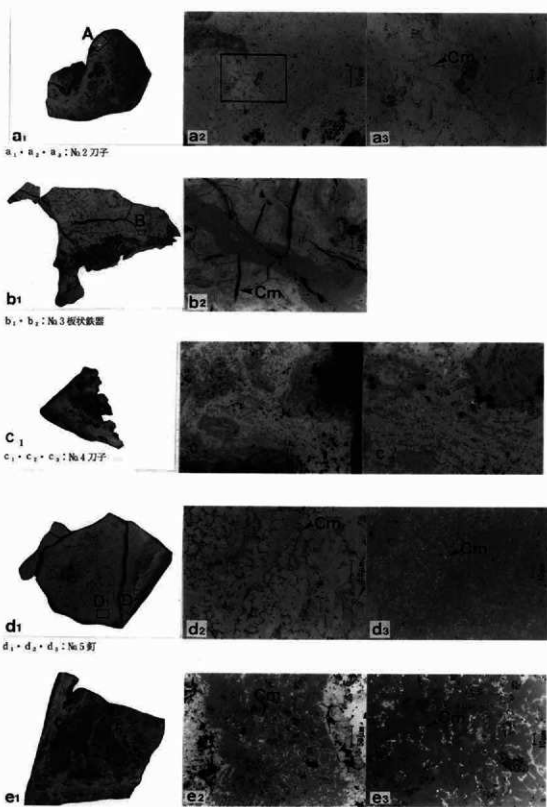
注

- 1) 赤沼英男「上野国分寺・尼寺中間地域出土鉄器・鉄塊の金属学的解析について」〔上野国分寺・尼寺中間地域(8)〕(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992年 P.529~561
- 2) 赤沼英男「EPMaによる東北地方北部出土鉄器の金属学的解析」〔国立歴史民俗博物館研究報告第38集〕1992年 P.77~88
- 3) 伊藤重「鉄律と鉄器の金属学的解析」〔中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内—古田川西遺跡〕長野県教育委員会 1989年 P.367~369
- 4) 日吉製鉄史同好会「福留山鉄衝の六片の鋼」『鉄の文化史』東洋経済新聞社 1984年
- 5) 4)と同じ。
- 6) 炭素含有量0.8%強の鋼である。
- 7) 古代・中世における鋼の製造方法としては、砂鉄を始発原料としての直接製鋼法と、鉄鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用する間接製鋼法の2通りの方法が指摘されている。非鉄金属化合物中に検出されたチタン化合物が始発原料として用いられた砂鉄か脱炭材として投入された砂鉄かと区別することができないため、砂鉄の使用という表現をとった。
- 8) 赤沼英男、岡田康博、川上貞雄「遺物の解析からみた半地下式型型の性格」〔平成4年度たたら研究会大会発表要旨集〕たたら研究会
- 9) 赤沼英男「根岸(2)遺跡出土小丸および鉄律の金属学的解析」〔平成4~5年度根岸(2)遺跡発掘調査報告書〕石町町教育委員会 発掘報告書編集中
- 10) 伊藤の形状は不明であるが、静岡県浜松市天王中野遺跡の奈良時代の遺構から検出された鉄塊は、鉄鉄の脱炭途中のものであり、化学組成から少なくともその原料は大陸のものであることが佐々木隆氏によって指摘されている。奈良時代における鉄鉄の流通がかなり広い範囲に及んでいたことを示すものである。
- 11) 佐々木隆「浜松市天王中野遺跡出土の鉄塊と奈良時代の鋼精錬法」〔浜松市博物館館誌—VIII—浜松市立博物館 1995年 P.5~18
- 12) 本書P.214~220による。
- 13) 新井樹夫「群馬県地質図」内外地図株式会社 1964年
- 14) 『日本の地質3 関東地方』共立出版株式会社 1986年
- 15) 大澤正巳「真木山遺跡出土の鉄律・鉄塊の調査」真木山製鉄遺跡 豊浦町教育委員会 1981年 P.56~80



第329図 分析を行った鉄器の外観

矢印と斜線で示した部分は分析用試料採取位置を表す。a～eは今井道上・道下遺跡から、f～lは二之宮谷地遺跡から出土したものである。



a₁・a₂・a₃:No.2 刀子

b₁・b₂:No.3 板状鉄器

c₁・c₂・c₃:No.4 刀子

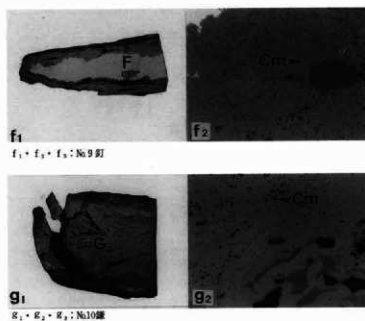
d₁・d₂・d₃:No.5 釘

e₁・e₂・e₃:No.8 鍔先

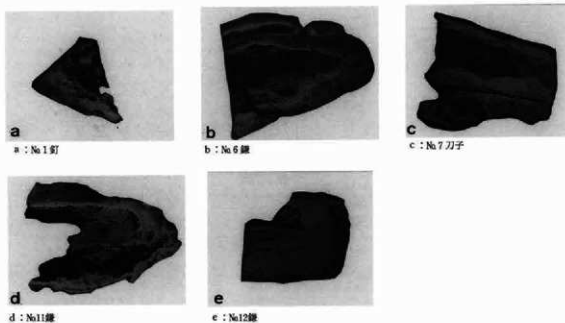
第330図-1 鉄器から採取した試料片のマクロおよびミクロ組織

Cmはセメントタイト (Fe₃C) もしくはその欠落孔、P-Cmは初析セメントタイトもしくはその欠落孔を表す。

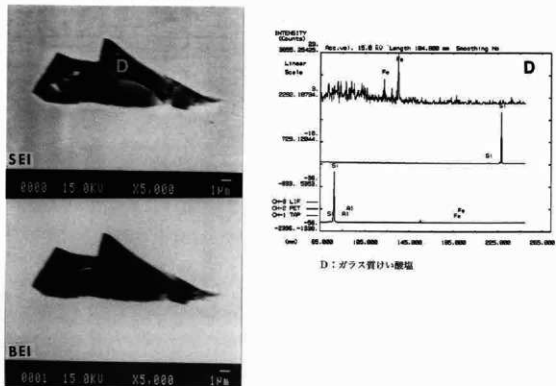
マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置である。



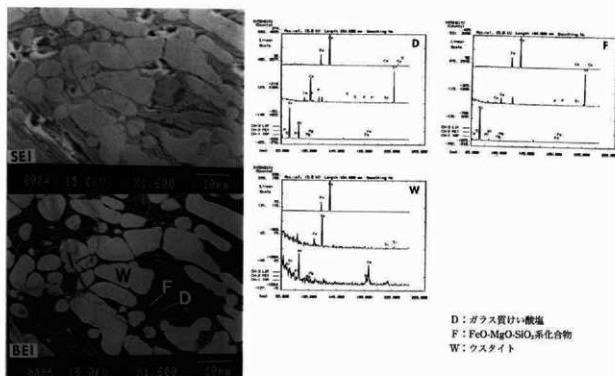
第330図—2 鉄器から採取した試料片のマクロおよびミクロ組織（つづき）



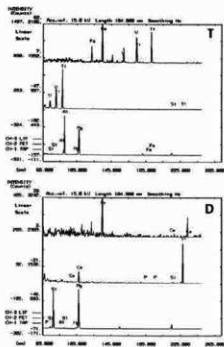
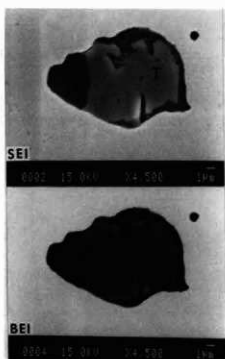
第331図 No.1釘、No.6鎌、No.7刀子、No.11鎌、No.12鎌から採取した試料片のマクロ組織



第332図 No 1釘から採取した試料片に見いだされた非金属介在物の EPMA による分析結果
SEI：2次電子像 BEI：反射電子像

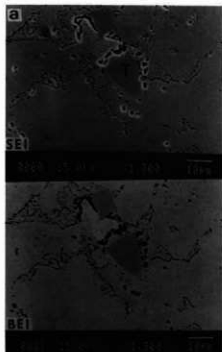


第333図 No 6 鎌から採取した試料片に見いだされた非金属介在物の EPMA による分析結果
SEI：2次電子像 BEI：反射電子像

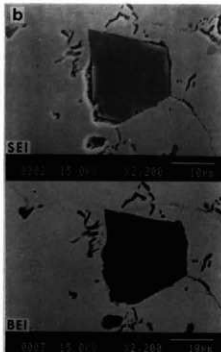


T: タンタン化合物 D: ガラス質けい酸塩

図334図 Na11鏝から採取した試料片に見いだされた非金属介在物の EPMA による分析結果
SEI: 2次電子像 BEI: 反射電子像



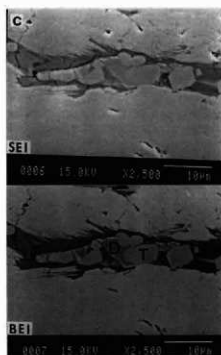
a: No 2 刀子



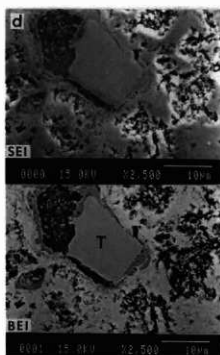
b: No 5 釘

第335図-1 No 2 刀子, No 5 釘, No 7 刀子, No 9 釘, No 12鏝から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

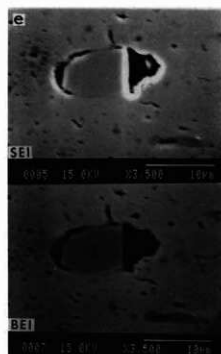
SEI: 2次電子像 BEI: 反射電子像 T: タンタン化合物
D: ガラス質けい酸塩



c : No.7 刀子

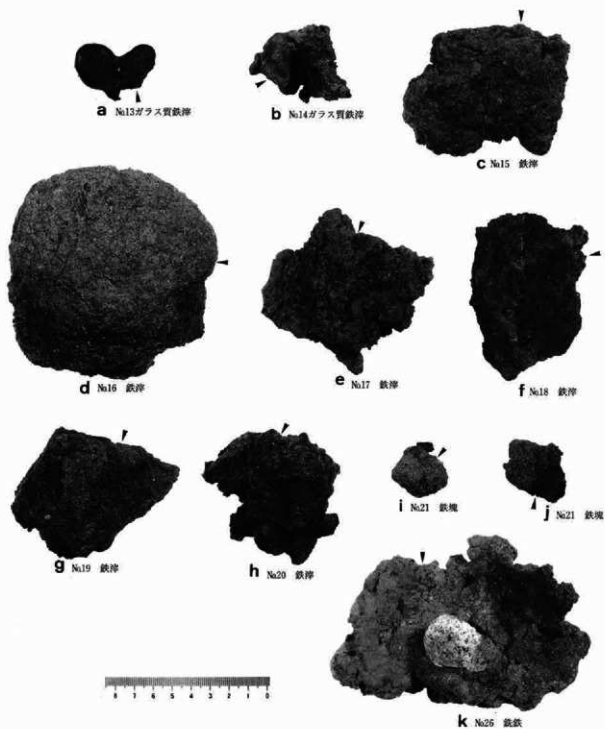


d : No.9 釘

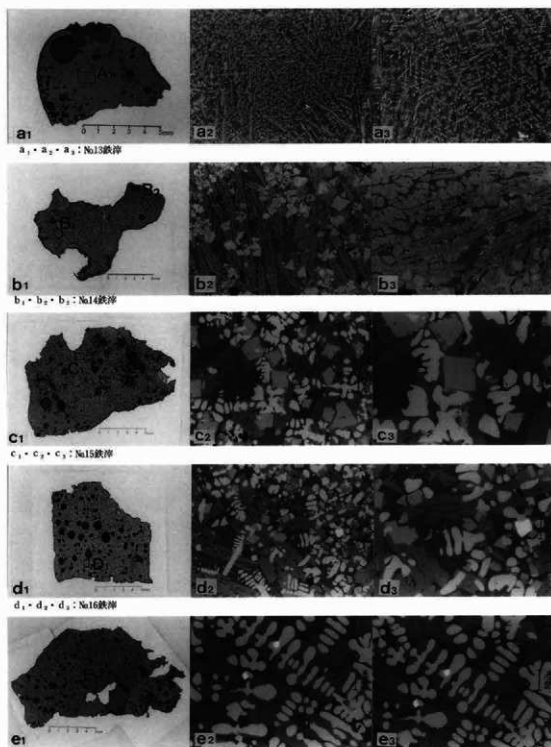


e : No.12 鎌

第335図—2 No.2 刀子、No.5 釘、No.7 刀子、No.9 釘、No.12 鎌から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果（つづき）

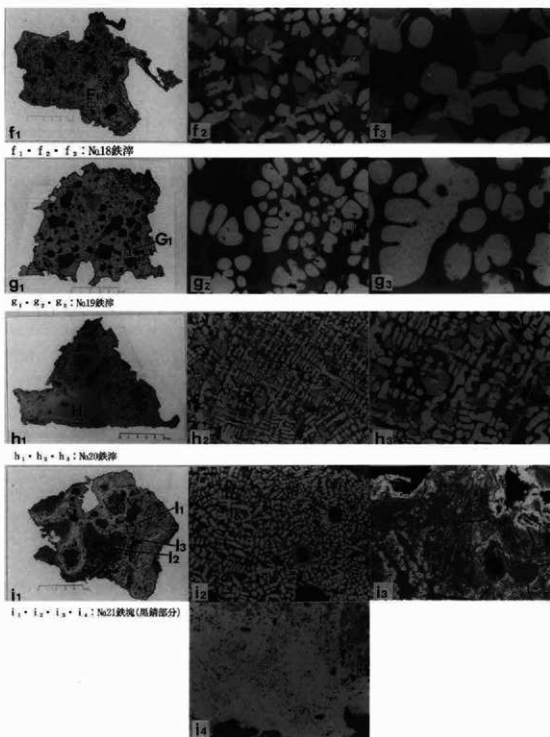


第336図 鉄滓の外観
矢印は資料の切断位置である。

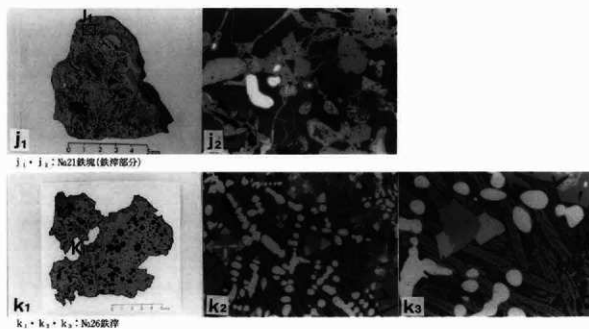


第337図—1 鉄滓のマクロおよびミクロ組織

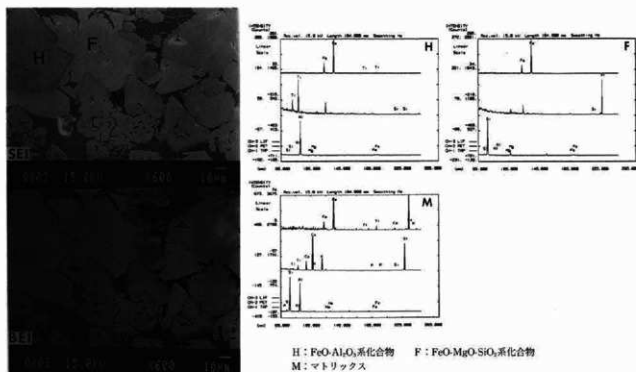
マクロ組織の枠で囲んだ部分は、ミクロ組織観察位置である。



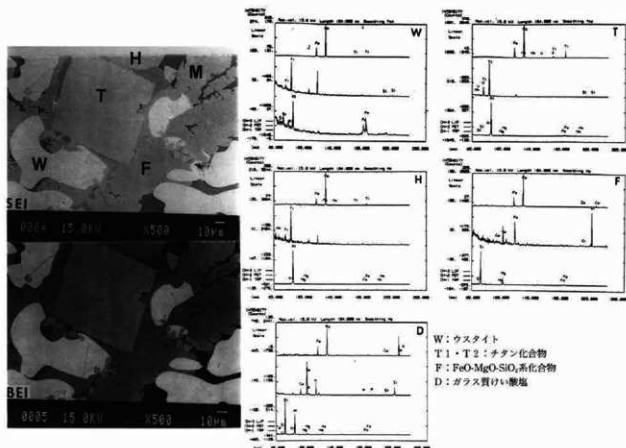
第337図-2 鉄滓のマクロおよびミクロ組織(つづき)



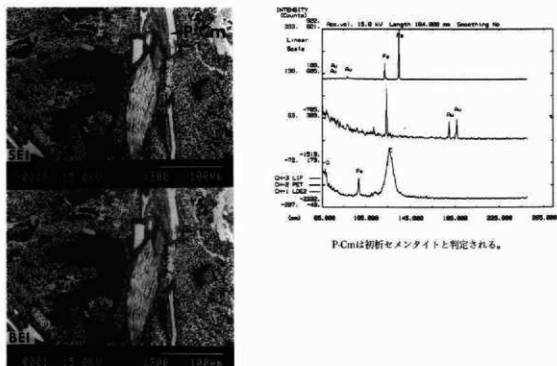
第337図—3 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織 (つづき)



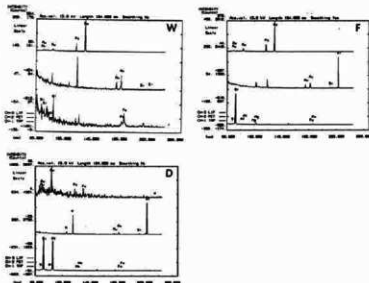
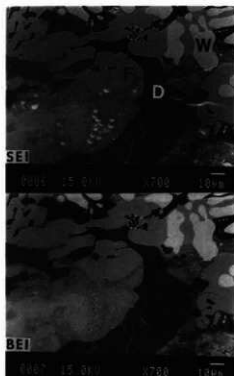
第338図 No14鉄滓の EPMA による分析結果
SEI：2次電子像 BEI：反射電子像



第339図 Na15鉄滓の EPMA による分析結果
 SEI: 2次電子像 BEI: 反射電子像

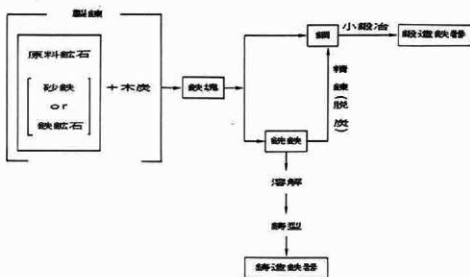


第340図 No21鉄塊の黒錆層に見いだされた結晶 (P-Cm) のEPMAによる分析結果
 SEI: 2次電子像 BEI: 反射電子像



W:ウスタイト
F:FeO-MgO-SiO₂系化合物
D:ガラス質けい酸塩

第341図 Na₂鉄塊に附着した鉄滓の EPMA による分析結果
SEI: 2次電子像 BEI: 反射電子像



推定される鋼製造法

第342図 推定される鋼製造法

2 出土土器胎土分析

—X線回折試験及び電子顕微鏡観察—

朝第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は表14胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパックリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02° , 計数時間: 0.5 ESC.

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は表14胎土性状表に示すとおりである。表14右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に見られる各鉱物に特有の

ピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第343図上に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo、Mi、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいい、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $\text{Mo}/(\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb})\times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1~4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第343図上に示すとおりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

第343図下に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mi, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mo}/(\text{Mo}+\text{Ch})\times 100$ と計算し、Mi, Hb, Chも各々同

様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1～7はMo, Mi, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第343図下に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土（葉地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については表14の右端の欄に理由を記した。

3 分析結果

3-1 タイプ分類

分析は今井道上・道下（以下、今井）遺跡の土器10個、および、粘土採掘坑露頭断面から採取した粘土11点に対して行った。表14胎土性状表に示すように、前年度分析した隣接の二之宮谷地（以下谷地）遺跡、二之宮洗橋（以下洗橋）遺跡の土器と粘土も記載してある。タイプ分類はこの3遺跡の土器と粘土全体に対して行った。表14・15に示すように土器と粘土はA～Lの12タイプに分類された。最も多いタイプはDタイプの10個次いで、Lタイプの8個、Fタイプの6個、Hタイプの5個、Gタイプの4個、Eタイプの3個、B、Jタイプの各2個、A、C、I、Kタイプの各1個となっている。土器と粘土は表15タイプ分類一覧表に示すように、土器は土器の組成、粘土は粘土の組成をもっており、組成的には分析した粘土と土器は関連性が薄いように見受けられる。土器と粘土の組成が一致するのはB、D、Hタイプだけである。今井道上・道下遺跡の焼成粘土塊は土器の組成と一致する。

今井道上・道下遺跡の土器は電子顕微鏡によるガラスの分析では、中粒のガラスが生成している焼成ランクがほとんどである。

Aタイプ：今井粘土-20

Mont, Mica, Hb, Chの4成分を含む。

Bタイプ：今井粘土-11、洗橋-17

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。

Cタイプ：今井粘土-16

Mont, Mica, Hb, Chの4成分を含む。組成的にはAタイプと同じであるが、強度が異なるために、位置分類が異なる。

Dタイプ：今井-2、4、6、7、谷地-6、8、10、15、18、洗橋粘土-21

Hb1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。今井遺跡、谷地遺跡、洗橋遺跡の土器が含まれ、洗橋の粘土と同じ組成をする。

Eタイプ：今井粘土15、19、洗橋粘土-23

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Fタイプ：今井-1、3、5、10、谷地-7、洗橋-19

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。今井遺跡の土器が主体で、谷地遺跡と洗橋遺跡の土器と共存する。

Gタイプ：今井-8、9、谷地-2、洗橋-14

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。組成的にはEタイプと類似するが強度が異なる。

Hタイプ：今井粘土-12、14、谷地-4、9、洗橋-16

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。組成的にはFタイプと類似するが強度が異なる。粘土と土器が含まれる。

Iタイプ：洗橋-22

Mica, Chの2成分を含み、Mont, Hbの2成分に欠ける。

Jタイプ：今井粘土-13、21

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Kタイプ：今井粘土-17、18

Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

Lタイプ：谷地-1、3、5、11、12、13、洗橋-20、洗橋粘土-24

Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。谷地-1と3は須恵器で、高温焼成のために、鉱物が分解してガラス化したために、4成分が検出されなかった。他は本来の組成で、 $mAl_2O_3 \cdot nSiO_2 \cdot lH_2O$ (アルミナゲル) で構成される。洗橋の粘土と共存し、土器との関連性が伺える。

以上の結果から明らかな様に、土器と遺跡より採取した粘土はほとんどが明瞭に分かれ、土器は土器、粘土は粘土となっている。Dタイプは最も多いタイプで、今井遺跡、谷地遺跡、洗橋遺跡の土器が共存し、関連性が伺われる。Lタイプは谷地遺跡の土器

がそのほとんどで、洗橋遺跡の土器と粘土が共存する。今井遺跡の粘土のうち土器と同じ組成をするものはほとんどなく、関連性が薄いように見受けられる。

3-2 石英 (Qt) -斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂はおおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一環と考えられる。第345図Qt-Pl相関図には今井遺跡、谷地遺跡、洗橋遺跡の土器と粘土が記載してある。図に示すように、I~VIIIの8グループと*その他*に分類された。

Iグループ：今井粘土-11、12、13、14、21、宮東-21、洗橋-24

このグループは粘土だけが集中する。石英と斜長石の強度が低いグループである。宮東-21はDタイプ、洗橋-24はLタイプで、ともに土器の胎土との関連する粘土である。

IIグループ：谷地-5、7、13

斜長石の強度が高く異質なグループ。とくにLタイプの胎土で、5は甕、7は土製品、13は縄文土器と統一性がない。谷地遺跡の土器だけで構成されるのが特長である。

IIIグループ：今井-6、10、洗橋-14、15、16、17、18、20、道上粘土-22

洗橋遺跡の土器が集中するグループで、今井遺跡の土器が共存する。Dタイプの胎土で造られた坏で特長付けられる。今井-6はDタイプの坏、今井-10はFタイプの焼成粘土塊である。

第4章 科学分析及び建築学的考察

IVグループ：今井-2、3、5、7、8、今井粘土-15、16、17、18、19、谷地-4、6、8

今井遺跡の土器が集中するグループで、谷地遺跡の土器と共存する。今井遺跡の土器は坏と甕で或るが、ともにDタイプの胎土が主体となる。谷地-6と8もDタイプで、土製品である。今井の粘土は15と19がEタイプ、17と18がKタイプと土器類とは組成的に異なる。

Vグループ：谷地-10、11、遺上粘土-23

このグループは谷地遺跡の瓦塔だけが属する。

VIグループ：谷地-2、9、12

谷地-9と12はともに瓦塔で、谷地遺跡の土器と瓦塔だけで構成される。

VIIグループ：谷地-1、3

ともに須恵器で、1は短頸壺、3は碗である。

VIIIグループ：今井-9、洗橋-19

ともに器種は甕で、統一性があり、関連性があるように見受けられる。

その他：今井-1、4、今井粘土-20

今井-1はS字口縁の台付甕で、どのグループにも属さず明らかに異質である。今井-4はDタイプの胎土の坏で、グループの組成と器種が同じであり、グループに属するものであろう。

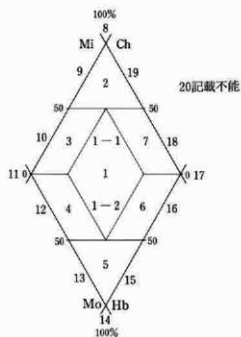
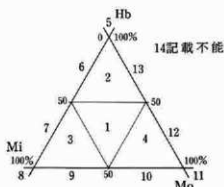
以上の結果から明らかな様に、今井遺跡と谷地遺跡、洗橋遺跡の土器は基本的には各々独自のグループに集中する傾向が認められる。IVグループに於て今井遺跡の土器と今井遺跡の粘土が共存するが組成が異なり、関連性は薄いように見受けられる。

4 まとめ

a) 今井遺跡の土器と粘土の分析結果と前年度分析した谷地遺跡と洗橋遺跡の土器と粘土を対比し、新たにタイプ分類を行って、A~Lの12タイプに分類した。土器胎土と粘土とはタイプが異なり、組成的には洗橋-24の粘土ぐらいしか見当たらない。Dタイプは最も多く10個が該当し、今井遺跡の土器と谷地遺跡と洗橋遺跡の土器で構成される。Lタイプは谷地遺跡の土器が集中する。

b) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、今井遺跡の土器は中粒のガラスが生成した地成ランクⅢのもの为主体である。

c) 石英と斜長石の相関では、I~Ⅷの8グループと*その他*に分類された。Ⅲグループには洗橋遺跡の土器が集中し、IVグループには今井遺跡の土器が集中し、II、V~Ⅶグループには谷地遺跡の土器が集中するというように、各遺跡の土器は独自のグループを形成する。洗橋遺跡のグループに今井遺跡の土器が、今井遺跡のグループに谷地遺跡の土器がともに共存し、関連性が伺われる。



第343図 三角・菱形ダイアグラム位置分類図

表14 胎土性状表

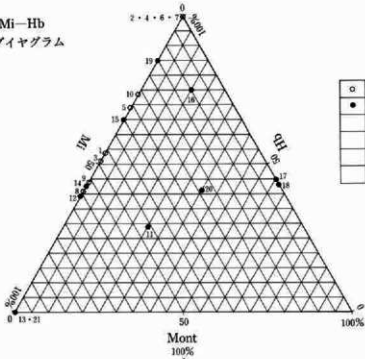
試 験 試 料	タイラック 分 類	胎 成 ラ ンク	組成分率 Mol%胎土・M%炭	土 性 状										備 考				
				Hb	Mica	Ch/Fe/Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-feld	Halloy	Kaol		Pyrite	Au	ガラス	
今井遺上・遺下-1	F	III	6	29	83	92	2855	540	207									中 脱 古片裏S字LC
今井遺上・遺下-2	D	III	5	20	144	144	2095	381	199									中 脱 胎6 C.L
今井遺上・遺下-3	F	III	5	20	183	188	2153	398										中 脱 胎6 C.L
今井遺上・遺下-4	D	II	5	20	89	89	1610	237	108									中 脱 胎7 C.L
今井遺上・遺下-5	F	III	6	20	88	198	1704	619	136									中 脱 胎7 C.L
今井遺上・遺下-6	D	III	5	20	81	1362	686	152										中 脱 胎8 E
今井遺上・遺下-7	D	II	5	20	194	205	1957	596	116									中 脱 胎8 E
今井遺上・遺下-8	G	III	7	9	165	113	205	73	2096	485	110							中 脱 胎9 C.L
今井遺上・遺下-9	F	III	7	9	185	145	264											中 脱 胎9 C.L
今井遺上・遺下-10	G	III~IV	6	20	134	355	1398	543	261									中 脱 胎9 C.L
今井遺上・遺下-11	B	I	16	140	260	160	817	321										中 脱 胎9 C.L
今井遺上・遺下-12	H	7	20	212	138		437	271										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-13	J	8	20	183			422	165										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-14	H	7	20	175	137		715	115										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-15	E	6	10	131	248	168	2272	431										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-16	C	2	4	179	113	80	1822	496										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-17	K	12	14	156			2157	265										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-18	K	12	14	140			1819	400										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-19	E	6	10	123	683	197	1505	220										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-20	A	1	1	154			531	539										5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-21	J	8	20	146			3797	64	281	122								5区2号胎土脱
今井遺上・遺下-22	K	I~II	14	20			3276	475										粗 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-23	G	III	7	9	169	87	205											粗 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-24	K	I~II	14	20			119	3729	74	663	141							粗 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-25	H	III	7	20	121	115		1680	444	114								中 脱 土師環9 C.L
今井遺上・遺下-26	K	III	14	20			1139	1600	345									中 脱 土師環9 C.L
今井遺上・遺下-27	D	III	5	20			1984	301	238									中 脱 土師環9 C.L
今井遺上・遺下-28	F	III	6	20	131	1966		1477	1236	204								中 脱 土師環9 C.L
今井遺上・遺下-29	D	III	5	20			1970	321										中 脱 土師環9 C.L
今井遺上・遺下-30	H	III	7	20	110	95	3054	335										中 脱 土師環8 C
今井遺上・遺下-31	D	III~IV	5	20			2543	284										粗 脱 土師環8 C
今井遺上・遺下-32	H	III	14	20			2892	113	195	104								粗 脱 土師環8 C
今井遺上・遺下-33	K	III	14	20			3724	319	170	53								中 脱 土師環8 C
今井遺上・遺下-34	K	III	14	20			1065	1203										中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-35	K	III	14	20			1413	456	128									中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-36	S	III	5	20	157	123	178											中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-37	D	III	7	20	93		1401	559	168									中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-38	H	II	7	20	121	105		1526	696	145								中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-39	B	II	1	16	123	163	104											中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-40	F	II	5	20	134	146	77											中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-41	F	III	6	20			2131	789	167									中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-42	F	III	14	20			1306	653	196									中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-43	D	5	20				1022	232										中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-44	I	8	8		154	171	1524	367										中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-45	E	6	10	125	413	138	2445	259										中 脱 須賀原遺8 C.L
今井遺上・遺下-46	K	14	20				691	207										中 脱 須賀原遺8 C.L

第4章 科学分析及び建築学的考察

表15 タイプ分類一覧表

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch.Mi-Hb	
今井道上・道下-20	A		1	1	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-11	B		1	16	5区2号粘土探掘坑露頭
二之宮洗橋-17	B	III	1	16	坏
今井道上・道下-16	C		2	4	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-2	D	III	5	20	壘6CL
今井道上・道下-4	D	II	5	20	坏7CL
今井道上・道下-6	D	III	5	20	坏8E
今井道上・道下-7	D	II	5	20	壘8E
二之宮谷地-6	D	III	5	20	土製品9CL
二之宮谷地-8	D	III	5	20	土製品9CL
二之宮谷地-10	D	III~IV	5	20	瓦塔8C
二之宮洗橋-15	D	III	5	20	型造り痕坏
二之宮洗橋-18	D	II	5	20	硬質丸底坏
二之宮洗橋-21	D		5	20	未焼成土器
今井道上・道下-15	E		6	10	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-19	E		6	10	5区5号粘土探掘坑露頭
二之宮洗橋-23	E		6	10	3号探掘坑「へ」層
今井道上・道下-3	F	III	6	20	坏6CL
今井道上・道下-5	F	III	6	20	壘7CL
今井道上・道下-10	F	III~IV	6	20	焼成粘土塊
二之宮谷地-7	F	III	6	20	土製品9CL
二之宮洗橋-19	F	III	6	20	球脚壘
今井道上・道下-1	F	III	6	20	S字台付壘4C
今井道上・道下-8	G	III	7	9	壘9CL
今井道上・道下-9	G	III	7	9	坏9CL
二之宮谷地-2	G	III	7	9	土師坏8CL
二之宮洗橋-14	G	III	7	9	型造り痕坏
今井道上・道下-12	H		7	20	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-14	H		7	20	5区2号粘土探掘坑露頭
二之宮谷地-4	H	III	7	20	土師坏9CL
二之宮谷地-9	H	III	7	20	瓦塔8C
二之宮洗橋-16	H	II	7	20	大型丸底坏
二之宮洗橋-22	I		8	8	3号探掘坑「ナ」層
今井道上・道下-13	J		8	20	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-21	J		8	20	5区2号粘土探掘坑露頭
今井道上・道下-18	K		12	14	5区2号粘土探掘坑露頭
二之宮谷地-1	L	I~II	14	20	須恵短頸壘8CL
二之宮谷地-3	L	I~II	14	20	須恵碗8CL
二之宮谷地-5	L	III	14	20	土師壘9CL
二之宮谷地-11	L	III	14	20	瓦塔8C
二之宮谷地-12	L	III	14	20	瓦塔8C
二之宮谷地-13	L	III	14	20	縄文土器中期
二之宮洗橋-20	L	III	14	20	長脚壘
二之宮洗橋-24	L		14	20	基盤層粘土

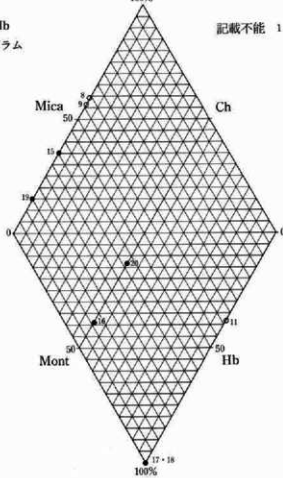
Mo—Mi—Hb
三角ダイヤグラム



○	土器
●	原土

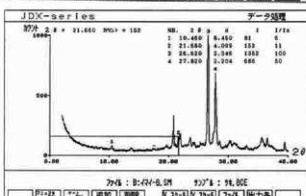
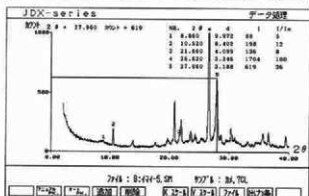
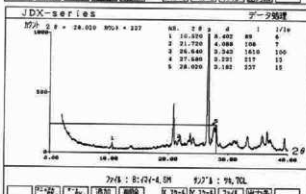
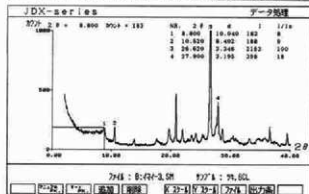
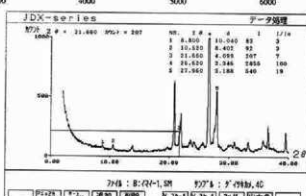
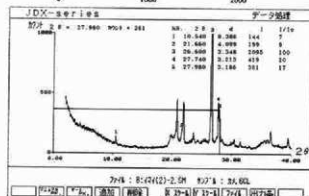
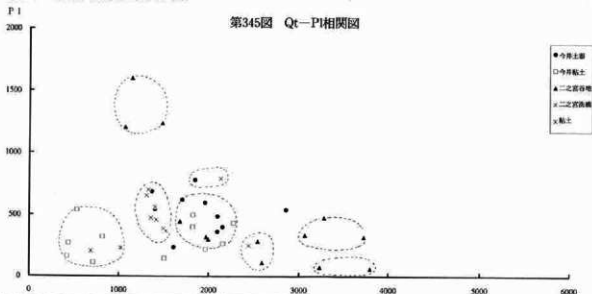
Mo—Ch, Mi—Hb
菱形ダイヤグラム

記載不能 1・7・10・12~14・21



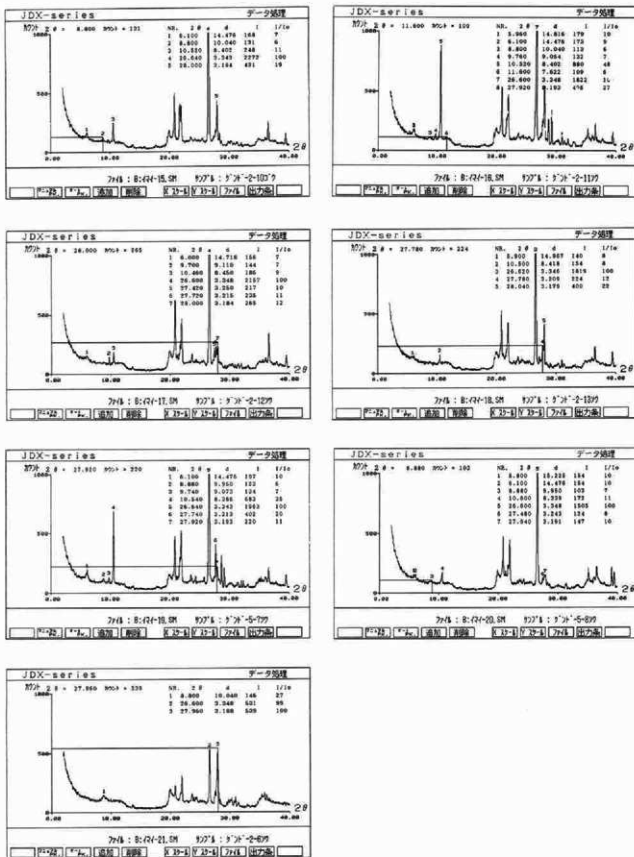
第344図 三角・菱形ダイヤグラム

第345図 Qt-Pt相関図



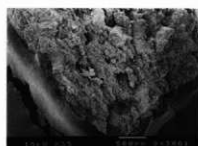
第346図 X線回折試験チャート(1)

第4章 科学分析及び建築学の考察

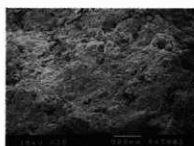


第348図 X線回折試験チャート(3)

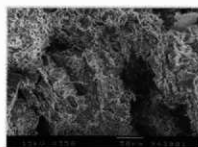
2 出土土器胎土分析



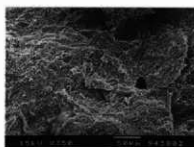
今井道上道下1
(III)
Mica 83
Cb 92
Crist 207
Qt 2855
Pl 540



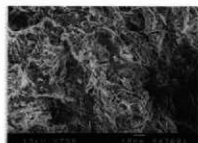
今井道上道下2
(III)
Hb 144
Crist 199
Qt 2095
Pl 361



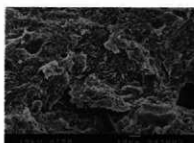
clasticclay



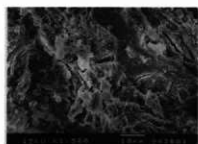
Casticcay



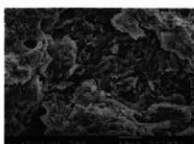
clasticclay



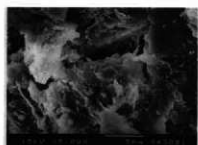
clasticclay



$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O + glass$



$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O + glass$



$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O + glass$



$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O + glass$

1 細粒砂を混入した砂質性粘土(clasticclay)

2 原土の組織を残す

3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O$ (アルミナゲル)+
glass(ガラス)

4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

1 細粒砂を混入した砂質性粘土(clasticclay)

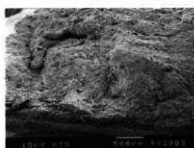
2 原土の組織を残す

3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot IH_2O$ (アルミナゲル)+
glass(ガラス)

4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

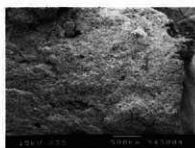
第349図 土器胎土電子顕微鏡写真(1)

第4章 科学分析及び建築学的考察



今井道上道下3
(III)

Mica	183
Hb	188
Qt	2153
Pl	398

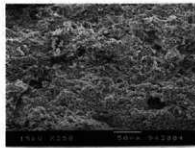


今井道上道下4
(II)

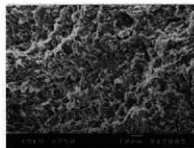
Hb	89
Crist	108
Qt	1610
Pl	237



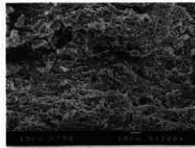
clasticclay



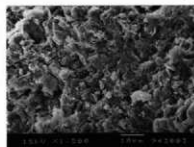
clasticclay



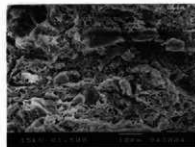
clasticclay



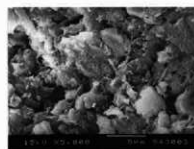
glass



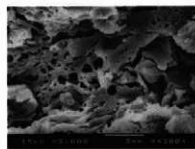
$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$



glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$

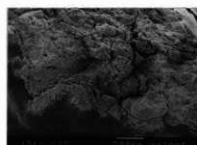


glass

- 1 細粒で、均質な粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
- 4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

- 1 細粒砂を含む砂質性粘土
- 2 glass 生成により、組織が変形
- 3 マトリックスは glass
- 4 glass は粗粒で、焼成ランクはII

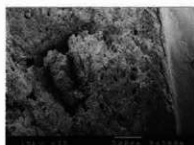
第350図 土器胎土電子顕微鏡写真(2)



今井道上道下 5

(III)

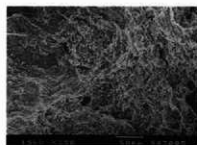
Mica	88
Hb	198
Crist	136
Qt	1704
Pl	619



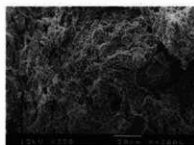
今井道上道下 6

(III)

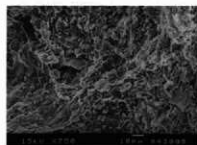
Hb	81
Crist	152
Qt	1362
Pl	686



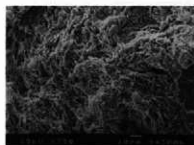
clasticclay



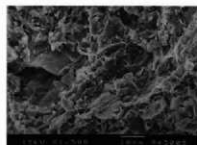
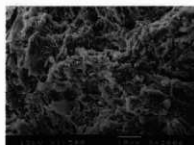
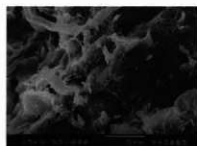
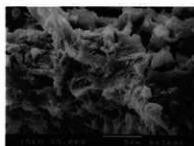
clasticclay



clasticclay



clasticclay


 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

- 1 細粒砂を混入した砂質性粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

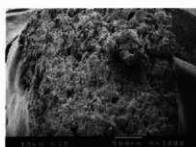
- 1 細粒で、均質な粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

第351図 土器胎土電子顕微鏡写真(3)

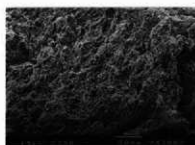
第4章 科学分析及び建築学的考察



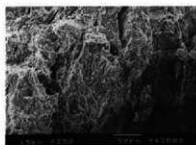
今井道土道下7
(II)
Hb 194
Crist 116
Qt 1957
Pl 596



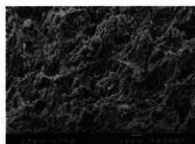
今井道土道下8
(III)
ch(Fe) 205
Mica 165
Hb 113
Ch(Mg) 73
Crist 110
Qt 2096
Pl 485



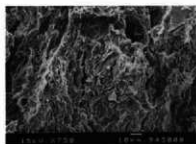
elasticclay



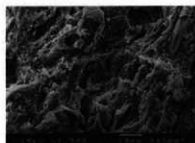
elasticclay



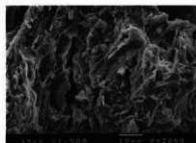
elasticclay



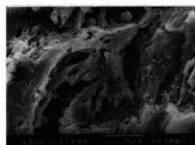
elasticclay



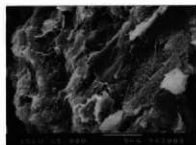
glass



$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$



glass

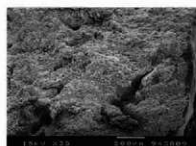


$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$

- 1 粗粒砂を混入した砂質性粘土
- 2 原土の組織は glass 生成により若干変形
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は中〜粗粒で、焼成ラントはII

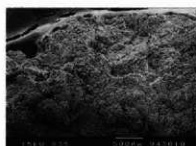
- 1 細粒砂を含む砂質性粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は中粒で、焼成ラントはIII

第352図 土器胎土電子顕微鏡写真(4)



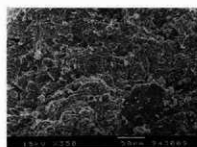
今井道上道下9
(III)

Ch (Fe)	264
Mica	185
Hb	145
Crist	100
Qt	1843
Pl	779

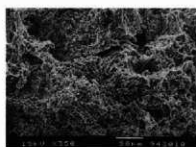


今井道上道下10
(III~IV)

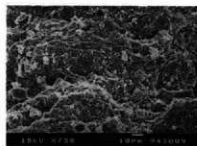
Mica	134
Hb	355
Crist	261
Qt	1388
Pl	543



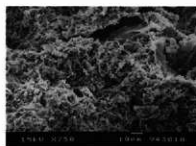
Clasticclay



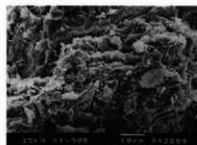
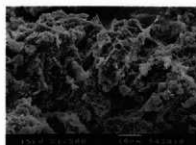
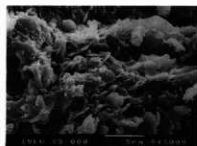
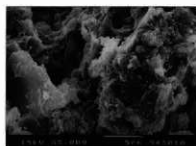
Clasticclay



Clasticclay



clasticclay


 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot$
 $lH_2O + glass$

- 1 細粒砂を含む砂質性粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は中粒で、焼成ランクはIII

- 1 細粒砂を含む砂質性粘土
- 2 原土の組織を残す
- 3 マトリックスは $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O + glass$
- 4 glass は細~中粒で、焼成ランクはIII~IV

第353図 土器胎土電子顕微鏡写真(5)

3 住居跡出土材の樹種同定

パレオ・ラボ 藤根 久

1. はじめに

今井道上・道下遺跡は、前橋市今井町字道上・道下地内に所在する遺跡で、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構・遺物が検出される複合遺跡である。このうち古墳時代や奈良・平安時代の住居跡では、焼失に伴う炭化材がまとまって出土している。これら炭化材の大半は、その産状から住居建築材と考えられる。

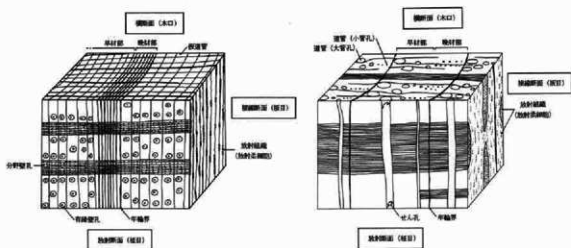
ここでは、これら炭化材の樹種を調べ、当時の住居建築材の樹種利用状況について若干の考察を行う。なお、一部の住居跡から、炭化していない生材が出土しており、合わせて樹種の同定を行う。

2. 樹種の記載と結果

試料は、炭化材が41号住居跡20点（6世紀後半）、29号住居跡6点（6世紀）、33号住居跡3点（6世紀後半）、1号井戸1点である。また、生材が33号住居跡3点である。

これらの試料のうち、炭化材は比較的保存の良い硬質部分を選び、適宜手割りで横断面を作成し、実体顕微鏡下で観察する。この段階で同定できる試料と同定できないものに分類する。同定される典型試料と同定できない試料すべてについて、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柎目と同義）の3断面を作る。各断面試料は、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM T-100型）で観察する。また、炭化していない生材は、片刃カミソリを用いて、上述の3断面を作製し、生物顕微鏡下40倍～400倍で観察・同定する。いずれも樹種同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠について述べる。

なお、材組織およびその名称について第354に示す。記載の用語については同図を参照されたい。



第354図 材組織とその名称

表16 住居跡等出土材の樹種

No.	遺構(時代)	取上No.	樹種	No.	遺構(時代)	取上No.	樹種
1	41号住居(6C後)	1	クスギ節	18	41号住居(6C後)	18	クスギ節
2	#	2	コナラ節	19	#	19	#
3	#	3	#	20	#	20	コナラ節
4	#	4	クスギ節	21	29号住居(6C)	1	クスギ節
5	#	5	コナラ節	22	#	2	#
6	#	6	クスギ節	23	#	3	#
7	#	7	#	24	#	4	#
8	#	8	コナラ葉脈	25	#	5	#
9	#	9	コナラ節	26	#	6	#
10	#	10	クスギ節	27	33号住居(6C)	1	ク リ
11	#	11	#	28	#	2	#
12	#	12	ヤマグワ	29	#	3	#
13	#	13	クスギ節	30	#	4	アカマツ(生材)
14	#	14	#	31	#	5	#(#)
15	#	15	ヤマグワ	32	#	6	#(#)
16	#	16	#	33	1号井戸(旧井戸石下)		クスギ節
17	#	17	ク リ				

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 第358図6a~6c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している(放射断面)。放射組織は、エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~10細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属のアカマツの材と同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する樹高30~35m、幹径60~80cmに達する常緑針葉樹である。

クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第357図2a~2c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~4列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のもの集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクスギ節の材と同定される。クスギ節の樹木には関東地方に普通

に見られるクスギ(*Q. acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 第357図1a~1c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のもの集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

第4章 科学分析及建築学的考察

コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* ブナ科 図版なし

年輪のはじめに大型の管孔が並ぶ環孔材である。道管のせん孔は単一である。放射組織は、単列同性的のもの集合放射組織からなる。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ亜属の材と同定される。コナラ亜属は、コナラ節（コナラ節の記載参照）とクスギ節（クスギ節の記載参照）からなり、晩材部の小道管の配列により識別されるが、本標本は材組織の保存が悪いため明瞭ではない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第357図3a~3c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~11細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第358図4a~4c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管孔の内腔にはらせん肥厚が明瞭に認められる（放射断面）。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~30細胞高からなり、大型の結晶細胞が見られる（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 第358

図5a~5c.

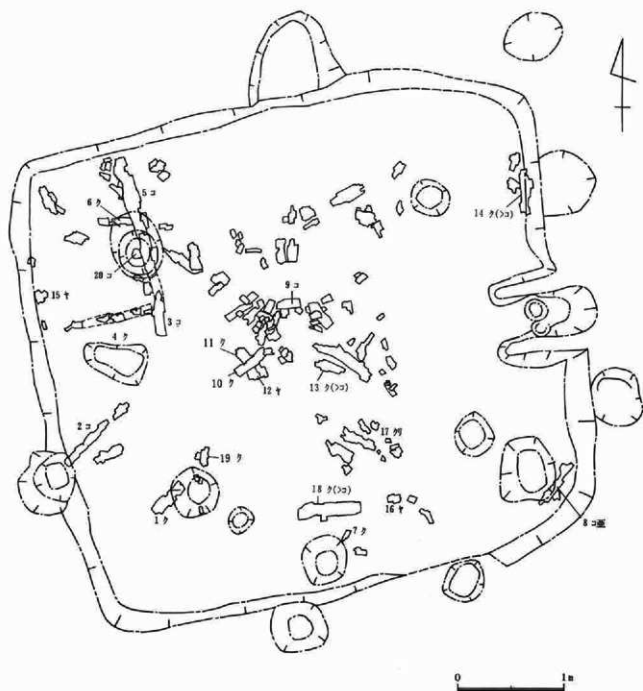
年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~56細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

3. 考 察

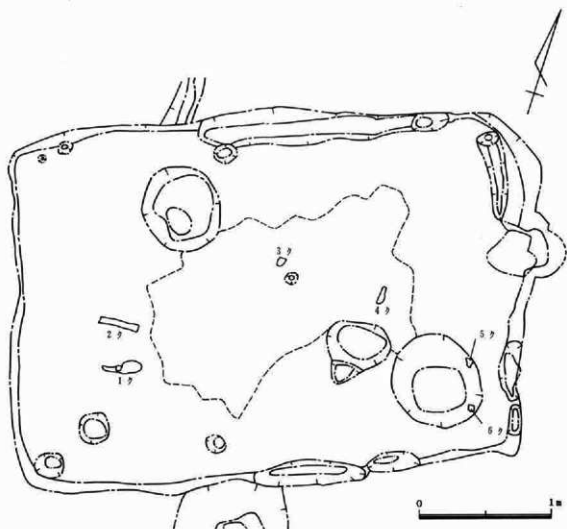
はじめに41号住居跡について見ると、Na2~Na5のように大型の炭化材ではコナラ属クスギ節あるいは同属コナラ節の樹木から構成されているが、Na12やNa16あるいはNa17のように比較的小型の炭化材においてはヤマグワやクリから構成される（第355図）。一方、29号住居跡では、点数が少ないもののいずれもクスギ節の樹木から構成されている（第356図）。今井道上・道下遺跡の南東に位置する二之宮千足遺跡では、榛名二ツ岳火山灰（FA）降灰前後以降ではそれ以前と較べ大きく植生が変化している。特に、コナラ亜属（コナラ節とクスギ節からなる）は、65%前後から30%前後に激減している（パリーノ・サーヴェイ、1992）。これは、これら樹木の利用を目的とした伐採が関係していると思われる。クスギ節の樹木は、建築材のみならず炭類や枕類など多くの木製品の材料として利用されていることが明らかになりつつある（例えば藤根ほか、1994など）。41号住居跡では、クスギ節やコナラ節の樹木以外にクリやヤマグワの材が検出されており、建築材としての樹種選択性は強いものの、樹種選択幅は広い。

なお、33号住居跡から出土した生材は、その樹種がアカマツであること、また生材として遺存することなどを考えると、新しい時代の材である可能性がある。この点については今後の検出例などの検討が待たれる。



第355図 41号住居跡出土炭化材の樹種

ただし、コ：コナラ節、ク：クスギ節、コ垂：コナラ垂頭、クリ：クリ、ヤ：ヤマグワ
ク (>コ)：クスギ節がコナラ節を量的に圧倒

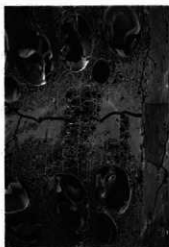


第356図 29号住居跡出土炭化材の樹種

引用文献

- パリオ・サージュエイ (1992) : 『二之宮千足遺跡の古墳地解析、二之宮千足遺跡 (自然科学・分析編)』、建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 61-111.
- 藤原 久・鈴木 茂 (1994) : 『元総社寺田遺跡出土材の樹種特定と周辺植生』、『元総社寺田遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

第357図 今井道上・道下遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真



1 a. コナラ節 (横断面) 41号住 W-20 bar: 0.5mm



1 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



1 c. 同 (放射断面) bar: 0.5mm



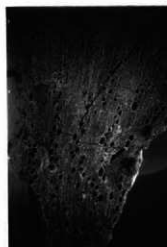
2 a. クスギ節 (横断面) 41号住 W-6 bar: 1mm



2 b. 同 (接線断面) bar: 1mm



2 c. 同 (放射断面) bar: 0.5mm



3 a. クリ (横断面) 41号住 W-17 bar: 1mm



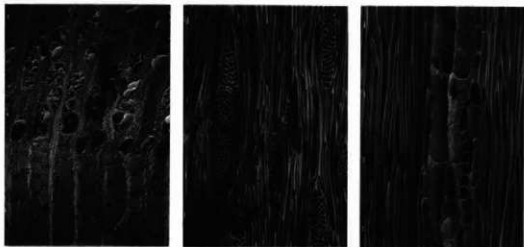
3 b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



3 c. 同 (放射断面) bar: 0.5mm

第4章 科学分析及び建築学的考察

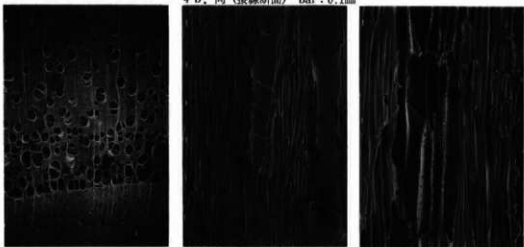
第358図 今井道上・道下遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真



4 a. ケヤキ (横断面) 1号遺井戸 bar: 1 mm

4 b. 同 (接線断面) bar: 0.1 mm

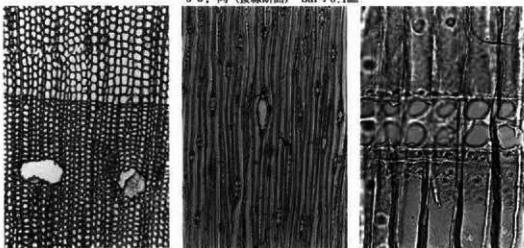
4 c. 同 (放射断面) bar: 0.1 mm



5 a. ヤマグワ (横断面) 41号住 W-16 bar: 1 mm

5 b. 同 (接線断面) bar: 0.1 mm

5 c. 同 (放射断面) bar: 0.1 mm



6 a. アカマツ (横断面) 33号住 bar: 0.2 mm

6 b. 同 (接線断面) bar: 0.2 mm

6 c. 同 (放射断面) bar: 0.05 mm

4 中世以後の掘立柱建物跡の検討

1. はじめに

本稿は、上武国道建設に伴う今井道上・道下遺跡の発掘調査により検出された遺構（1～6号掘立柱建物跡）を建築史的に検証するものである。

今井道上・道下遺跡は、既に本篇で既述されたように、荒砥川の東方に位置している。今調査により、中世以後の掘立柱建物遺構群が検出され、さらに北側には中世期と推定される道（東道）が併せて確認されており、本遺構群が少なくとも中世期に溯る可能性を持っていることが想定できる。

しかし、下限については江戸時代後期には人家などの存在が確認されていないことから、遺構の時代的範囲を限定する困難さがあった。さらに、出土遺物が少なく、遺構群の性格を検討する事もできなかった。

本遺構は、2区P-20グリッド付近にあって複数の掘立柱建物群が確認されており、それらを外観するならば、西側寄りに南北に長い建物群、それに直交するように東西に長い建物群に分類することができる。そこでまず各群の特徴を述べ、引き続き各遺構の検討、さらにはまとまりとしての遺構群を検討したい。

なお、それらの遺構のうち、今報告では最も特徴のある建物跡のみについて、可能な範囲で検証を加えたことをはじめにお断りしておく。

2. 掘立柱建物群の検討

本遺構は、約6棟の掘立柱建物跡から構成され、それぞれが検出された位置により大きく3つの群に分類する事ができる。仮にこれらの群を1・2・6号掘立柱建物跡がある範囲を西群、4・5号掘立柱建物跡がある範囲を中央群、そして3号掘立柱建物跡がある範囲を東群と設定することとした(第359図)。

これら3群を設定した理由として、各建物跡は同一軸線或いは棟方向を持つ建物が、群としてまとまっ

世田谷区教育委員会 石井 栄一

ていたからである。また、これら群相互の建物跡を一体的に検討することにより、建物配置としての特徴を考察できる可能性があったからである。

もう少し各群の特徴を検討すると、西群ではほぼ同程度の規模の建物跡が数回にわたり建て直されていることが、重なって検出されている柱穴から推定できる。特に、中通り筋に見られる切り合った柱穴は、内部の間仕切り柱或いは棟持柱のような構造柱との推定ができる。これと併せて、地盤面の高さが3種類あることも確認されている。詳細は後述するが、南側の約2間四方の範囲が最も低く最深部では40cm程度の掘込み、またその北側には、1段高く2×1間の方形の範囲で掘込みが続き、他は地表面と同一高であることが検出されている。

次に中央群を見てみると、西群とは違って、4号及び5号の建物跡はそれぞれ軸線が異なって配置されている。また、4号建物跡には複数の柱穴が確認でき、互いに切り合っていることから、建て替えが行われたことが想定できる。

最後に東群であるが、3号建物跡のみで、建て替えの痕跡は認められない。

以上のように、各群の特徴を見ても、西群の遺構には掘立柱建物が建っていた頃の状況が色濃く残っていることが見て取れるのである。

3. 各掘立柱建物跡について

1号建物跡は、南北方向に3.8m(12.5尺)、東西方向に3.94m(13尺)の規模と推定でき、南北方向のみ1間1.9m(6.3尺)の柱間が二間となっている。恐らく南北方向を桁行とした掘立柱建物と思われ、桁行と梁間がほぼ同様な寸法であるため、切妻造りより方形造りの屋根形式を持っていた建物と推定できる。なお、遺構は磁北から東に3.5度程振れている。

2号建物跡は、1号とほぼ同じ西群に位置し、南

第4章 科学分析及び建築学的考察

北に長く棟を持つ建物であったと推定できる。棟方向はほぼ磁北に向き、桁行(南北)8.48m(28尺)を四間に分けている。柱間は不揃いで、南より6.5・6.5・8・7尺である。梁間(東西)は3.64m(12尺)、西側に0.96m(3.2尺)程の下屋を持っていると想定できる。

南より第3通りと、第4通りの中央にそれぞれ柱穴が確認できる。いずれも梁間の中央あたり、1.83m(6.04尺)の柱間を持つ。この柱穴に建つ柱であるが、当然棟通りの位置にあるため、棟持柱と見られることもできるが、他に同様な柱穴は見られない。この場合は、間仕切りを構成する柱跡と見るべきであろう。

また、これらの柱穴は前述したように2段にわたり掘り下げた床面の境に位置している。ここで、この掘り下げられた床面がどのようなものであったかについても検証を加えておく必要がある。土層断面図によれば、間仕切りの柱跡と推定している第3通りと、第4通りの範囲では、3層にわたってほぼ同質の土が堆積している。比較的土の締まりが良く、かつ均一の厚さで堆積しているところを見ると、意図的に地盤面を構築した跡と見る事ができる。南側の第1通りより第3通りの間、約2間四方の部分に関しては建物廃棄後の自然堆積と思われるが、地山中央に楕円状に掘りくぼめられたピットが検出されている。直径0.45m程で、そのピットに向かって北より1.2m程の溝が入り込んでいる。さらに、その溝西側に沿っては床面が固く締められていることが併せて確認されている。

土間面の構築については、礎石を持つ建物の場合、建物範囲を全面的に盛土した上に通常は礎石の据えられている位置より内側を掘りくぼめ、何層かにわたり粘土やニガリ、砂等を混ぜて叩き締めながら構築していくのが一般的である。掘立柱建物においてもそれは同様と思われる。室町期に建築された民家で唯一現存する「箱木千年家」でも、移築に際しての発掘調査では同様な報告がなされている。⁽¹⁾ よって、地下遺構として確認される場合、2号建物跡の掘り

くぼめられた床面と同様な検出状況となる。

次に、なぜ地山面を2段にわたり構築したかであるが、一般的にはやはり湿気等の点を考慮していると思われるのが自然であろう。特に南側の2間四方の範囲には、中央に溝付きのピットが設けられているが、これを集水施設とみることもできる。前出の箱木千年家では、土間面よりさらに30cm掘り下げて馬屋としており、平面規模も3.91m×3.45mでほぼ同様である。

以上のように、第1通りより第4通りの間の掘り下げられた床面は土間などとするために意図的に構築されたものと思われる。使用目的については、2号建物跡は南側の地山面より砥石が出土しており、砥石を使用し刃物や農耕具を研ぐ作業場と見られることもできる。しかし、先の事例から馬屋を持つ掘立柱住居と推定することも可能であり、本報告では馬屋と位置付ける事としたい。

3号建物跡は東群にあり、桁行(東西)6.51m(21.5尺)を四間に分けているが、柱間寸法は不揃いで西側より1.33m(4.3尺)・1.8m(5.9尺)・1.75m(5.8尺)・1.6m(5.4尺)となっている。梁間(南北)は3.2m(10.6尺)の間としており、桁行及び梁間いずれも、1間が1.82m(6尺)に満たない間詰りの柱間寸法となっている。軸線は、磁北に対して東側に4.5度振れており、東西に棟方向を持つ建物であったと思われる。建て替えの痕跡は認められない。

4号建物跡は中央群にあり、東西を桁及び棟方向とする掘立柱建物であったと推定できる。検出された柱穴を見ると、東側の第2通りから西方向の柱穴では、切り合った形で検出されていることから、少なくとも規模(東側桁行を一間詰める)を変えて2度の建て替えが行われたことが推定できる。また、桁行方向西側の位置に付いても2案想定できる。1案は、桁行長さを9.43m(31.12尺)とし、柱間を五間に分け、1間あたり1.89m(6.2尺)とする案である。もう1案はさらに西側にもう一間柱間を延ばし、桁行長さ12.6m(41.6尺)、柱間を六間とする案である。柱間寸法は、新たに加えた西側柱間約3.17

m (10尺) が追加される。

梁間は、3.73m (12.3尺) と同一である。軸線は、磁北に対し東に約4度振れている。

さて、この2家であるが、後者の桁行6間の規模では西群の建物跡と重なってしまい、配置復元から検討すると無理がある。しかし、単独で建てたと想定する事も十分にできる。

なお、東側より第3通り中ほどに、柱穴が検出されている。この柱穴は側柱より1.85m (6.1尺) の柱間寸法を持ち、梁方向の中央に位置している。また、柱穴も重複して検出されていることから、先に記した建て替えの際に、間仕切りの柱として若干位置をずらし利用されたものであろう。

5号建物跡は、4号建物跡と一部重なり合うように検出され、東西を棟通りとする遺構で、軸線はほぼ磁北と揃っている。桁行(東西)6.96m (23尺) で、各柱間は不揃いであるが三間に分けている。柱間寸法は、東より2.12m (7尺)・2.42m (8尺)・2.42m (8尺) となっている。梁間(南北)は3.94m (13尺) の一間としている。

6号建物跡は西群に属しているが、1号・2号からみると外れた位置から検出され、一部は4号建物跡と重なっている。軸線は、東に3.5度振れており、南北の棟通りとなっている。規模は桁行5.3m (17.5尺) を三間に分けており、柱間寸法は不揃いで、南より1.82m (6尺)・1.82m (6尺)・1.67m (5.5尺) である。一方、梁間(東西)は3.42m (11.3尺) の一間で、北西角の柱穴は壁穴住居と重なっているため、確認はできない。

4. 掘立柱建物群の配置関係について

以上のように、各掘立柱建物の遺構を検討してきたが、これらのうち幾つかの建物跡は互いに共通項目を持っていることが判明した。そこで、共通項目を持つ掘立柱建物から想定できる配置関係を検討し、併せてそれらの建物跡の機能或いは特徴についても推定してみる。

まず、配置関係が探れる建物跡としては、中央群

にある4号・5号の建物跡と、西群或いは東群の各建物跡が結び付くか否かである。このうち、まず条件が満たされる建物跡に1号と4号が上げられる。軸線がいずれも磁北に対し東に3.5度程振れていること。桁行の柱間寸法が一間あたり1.89m (6.2~6.3尺) とほぼ同寸法を用いていることである。これらの共通条件から見ると、両掘立柱建物はほぼ同時期に建てたと推定できる。仮に、4号建物跡を規模や間仕切り柱の存在等から推定して、住居建物とするなら、1号建物跡は2間四方の規模などから類推し、納屋或いは物置などの付属家と見ることが可能である。

建物配置も、4号が東西に棟通りを持っていると想定できる事から、当然南面するように意図的に配置されたのに対し、1号は北西方向に突き出た位置に配置されている。このように、鍵の手に建物を配置する事は現在も良く見られることである。

次に、2号建物跡と5号建物跡(第360図)にやはり共通項目が見られる。まず軸線を見ると、いずれもほぼ磁北と合っていること、桁行柱間寸法は一間をいずれも2.12m (7尺)~2.42m (8尺) が使用され、かつ一定していないなどである。

先に述べたとおり、2号建物跡の復元については南側2間四方を馬屋とした。さらに北側に続く中通りの2×1間の範囲は土間、その奥の2×1間の範囲は床敷きの居室と推定することが可能である。

一方3号・4号・5号の各建物跡は、その範囲から性格付けできる遺物等が検出されていないことから、むしろ生活が営まれた建物ではなかった、と見ることできる。一応、規模の大きい納屋や物置或いは土間と同様な機能を持っていたのではないかと推定できる。

ここで技術的問題としても検討しておかなければならない点に、両建物の間隔が60cmほどしかない事がある。2号建物跡が南北に棟通りがあるのに対し、5号建物跡はそれに直交することになり、当然両建物間の屋根の一部が接していたであろうし、その場合どのような雨水処理が想定できるかである。

第4章 科学分析及建築学的考察

恐らく、屋根同志が接する部分には丸太を刳り抜いたような椀などを設置し、雨水処理を行ったのではないだろうか。また、両建物間は互いに開口部を設けることにより行き来が可能となり1棟の建物と同様な機能を持つことができる。一般的にはこのような形式を分棟型と呼び、江戸時代中期の建築ではあるが、旧太田家住宅・作田家住宅（重要文化財・川崎市立日本民家園）は同様な形式を持つ建物¹⁾として参考になろう。

以上、互いに重なり合う建物跡について検討を試み、2案想定することができた。次にこれらの建物跡の年代的検討を加え、本遺構群検証のまとめをしたい。

5. まとめ

前項の掘立柱建物群の配置関係において検証された2棟の建物跡群の年代を検討する上で、時代を推定できる遺物等が出土していない現状では、柱間寸法等の建築学的特徴から比較する以外に有効な方法はない。そこで、遺構群で用いられている1間あたりの寸法を列挙してみると、表17のとおりとなる。

この表からもわかるように、2号及び5号は柱間寸法を7尺(2.12m)前後を計画寸法としているようである。また、1号及び4号は6.3尺(1.89m)程度を計画寸法と見ることができる。一般的に、中世期では1間を8尺(2.42m)～7尺(2.12m)とする場合が多く、江戸時代までの時間経過の中で、現在用いられている1間を6尺(1.82m)とする基準寸法に移行してきている。その変遷過程が、少なくとも本遺構中に見えてとることができる。

地域差もあろうが、両建物に用いられている1間あたりの柱間寸法を比較して見ると、7尺前後を使用するのに対し、6.3尺(1.91m)を使っている1号及び4号掘立柱建物は明らかに時代が下がると見て良いであろう。

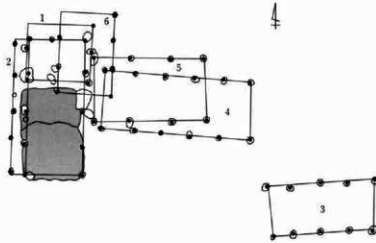
先に報告された『五日牛南組遺跡』の報告中に中世末期から江戸時代初期と思われる掘立柱建物遺構の検討を行った。²⁾ その際、1間の尺度は6.3尺が用

表17 柱間寸法一覧表

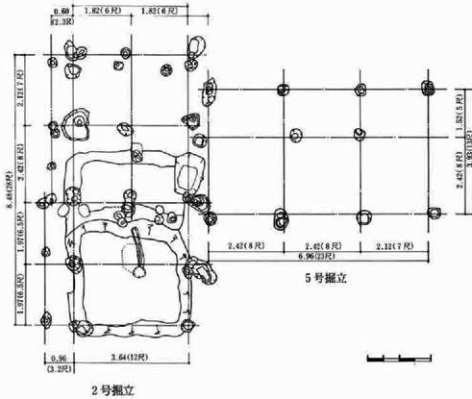
遺構番号	規 模 m		柱間寸法 [1間あたり] m (尺寸法)	
	前 行 (尺寸法)	壁 間 (尺寸法)		
5号	7.1 (23.3)	3.94 (13)	2.12 (7)	2.43 (8)
2号	8.13 (27)	3.67 (12.1)	1.97 (6.5)	2.12 (7)
1号	3.8 (12.5)	3.94 (13)	1.9 (6.3)	
4号	9.43 (31.12)	3.73 (12.3)	1.89 (6.2)	
	12.6 (41.6)	同上	同上	3.17 (10)
6号	5.3 (17.5)	3.42 (11.3)	1.82 (6)	1.67 (5.5)
3号	6.51 (21.5)	3.2 (10.6)	1.33 (4.3)	1.8 (5.9)
			1.6 (5.4)	

いられ、一応江戸時代初期の年代判定を行った。1間を6.3尺とする寸法は、関西方面では桃山期頃用いられ、室町期はそれよりも広い7尺～6.6尺(1.99m)であったとの研究³⁾がなされている。しかしこれは多分に地域差があり、今回の検討では前出の五日牛南組遺跡の検討を参考に時代設定をした。この尺度を考察の目安と考えるならば、1号及び4号の掘立柱建物は江戸時代初期頃と推定できるのである。一方、2号及び5号掘立柱建物の尺度は7尺を用いていることから、当然それ以前に測ることが検討できる。つまり、江戸時代初期以前と見るのが妥当であろう。

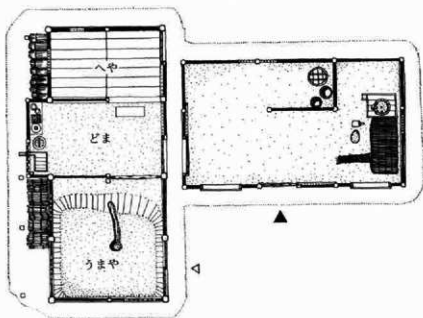
- (1) 1979 箱木家住宅修理委員会編・神戸市『重要文化財 箱木家住宅(千年家)保存修理工事報告書』
- (2) 1993 同編編集・刊行『川崎市立日本民家園』
- (3) 1992 鶴岡高早理蔵文化財調査事業団『五日牛南組遺跡発掘調査報告書』
- (4) 1991 伊藤剛爾著・東京大学出版会『中世住居史』



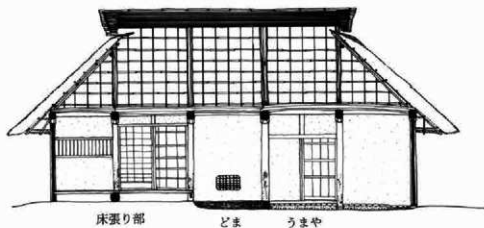
第359図 掘立柱建物群位置図



第360図 2号・5号掘立柱建物柱芯想定図



第361図 2号・5号掘立柱建物推定平面図 (1/120)



第362図 2号掘立柱建物推定断面図 (1/100)

第5章 ま と め

1 道路跡について

本道跡は、東山道駅路に推定される、通称「あづま道」が横断しており、その下位から5本の道路跡が検出された。この調査で得られた知見は東山道駅路を推定する上で重要と思われるので、ここにその概略を記すことにする。

まず、検出された3号～7号道路跡の新旧関係は、重複状況から5号→6号→3号→4号と推測される。5号と6号との間には、浅間山降下テフラAs-Bが堆積しており、路面との間にそれぞれ間層を挟むことから、両者には時間的断絶があったことが知れる。3号・4号・6号は方向をほぼ同じくして併走しており、路面もほぼ重層していることから、大きな時間差はなく継続的に使用されたと考えられる。

使用された時期について、最古の5号はAs-B堆積層まで約20cmの間層があることから、11世紀以前に遡るのは明らかである。また、少数ではあるが路面付近から8～9世紀代の土器が出土すること、更に70m西方で方向を同じくする26・27号溝が9世紀代と推定されることから、これと関連付けて5号道路は9世紀代には存在したと考えたい。6号道路は、As-Bとの関係から12世紀以降で、3号道路構築以前ということになる。3号道路は、側溝出土遺物の年代観から中世に使用されたと考えられるが、具体的な時期の限定は困難である。4号道路は、3号道路に継続して南側に再構築され、側溝出土遺物が江戸時代を中心とすることから、近世を通して使用され、最終的には舗装されて現代まで残ったと解される。

東山道駅路との関係については、調査当初は最も企画性に富み、直線で東西に延びる3号道路がもっとも近い存在と考えられたが、その構築年代が11世紀を遡らないことから否定的にならざるを得ない。

これより下位でAs-B降下以前、つまり11世紀以前の層位に東西方向の道路関連遺構は検出されなかった。このことから、本地域における通称「あづま道」は、中世以降に構築され、補修改築を繰り返しながら現代にまで使用された道路と結論づけられる。ただし、9世紀代と推定される南北方向の5号道路及びこれと並行する26・27号溝は、駅路との関連が十分考えられよう。26・27溝は後述するように東西辺約110mの方形区画を構成する層館ないしは官衙的色彩の濃い遺構であり、その北辺に並行して東西方向の幹線道路が延びていたと想定してもおかしくはない。本道跡の北側にあたる今井道上遺跡では、方形区画の北辺に当たる溝が検出されており、その方向はN-82°-Eを指して、3号道路と一致する(註1)。9世紀代と中世以降と年代の開きのある両者が、一定方向に規制されているのは事実で、それが駅路に関連したものと仮定すれば、この3号道路は位置を変更しながら東山道駅路の方向を踏襲したとも推測されよう。上武道路関連の発掘調査では東西の道路関連遺構が発見されなかったため、おそらくその位置は現在の国道50号線の北側にあたり、その存否については今後の調査に託すところが大きい。また、5号道路と26・27号溝は並行してほぼ南北方向に走ることから、条里地割との関係も注目され、駅路の再検討とともに今後の重要な検討課題となる。

なお、3号道路から4号道路への路線変更、およびそれぞれの路面の改修は、北から南へ次第に平行移動して行われている。これはこの土地が平坦な微高地から谷頭のある窪地への地形変換点にあたり、道路構築当初は南側が湿気の高い土地で、時代が下るに従い乾燥が進んで道路として利用可能になったためではないかと考えている。それを裏付けるように、道路跡以南では古代以前の竪穴住居跡が分布せず、中世以降になってようやく家屋(1～6号孤立

柱建物跡)が建てられるのである。

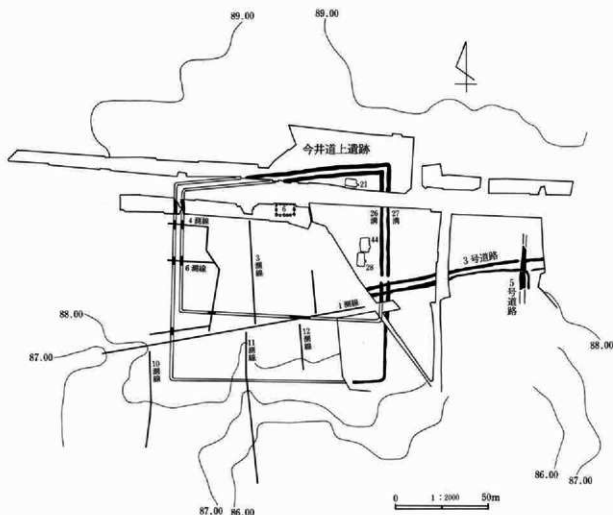
さて、本遺跡の西方約1.5kmの箕井八日市遺跡でも、通称「あづま道」の下から側溝を伴う直線の道路跡が検出されており(註2)、3号道路と規模や形態および地表からの深さが近似することから、同一の道路跡であった可能性が考えられる。ただし、これは走向が西北西から東南東に向いており、本遺跡3号道路とは異なる。これらが一連の道路跡だとすれば、箕井八日市遺跡と本遺跡の間、荒砥川付近で方向を変えたと考えられよう。

2 方形区画溝について

はじめに

今井道上・道下遺跡では、調査区の西側で南北に平行して走向する26号と27号の2条の溝が検出された。この溝は、幅1.5m前後、底面幅1m前後、深さ0.5~0.9mを測り、お互いの間隔は2~2.5mである。II区D-14グリッド付近では、土橋状に3mほど掘り残した部分が確認されている。

この溝は、今井道上・道下遺跡の発掘調査した今井道上遺跡や南側の前橋市教育委員会の発掘調査でも確認され、ほぼ方一町の区画をもつ施設を画す区画溝であることが判明している。



第363図 方形区画溝想定図

また、この区画溝についての若干の検討は、今井道上遺跡の報告書中に行なった。今回、今井道上・道下遺跡の整理事業が行われたことによる成果の追加と周辺の地質調査の成果が得られたのでここに再度検討を行った。

地質調査の成果

この調査は、応用地質株式会社により今井道上・道下遺跡の周辺を地下レーダー探査による方法で実施されたものである。

地下レーダー探査とは、地表から地中に向けて電磁パルス波を反射し、その反射波を捉えることによって、地下浅部の地盤構造や空洞、埋設物などの異物を非破壊的に探査する方法である。県内では、北群馬郡子持村での軽石層下の遺構を捉えることで多大な成果を上げている。

この調査によると内区の溝は、東側の土橋から南へ20mの地点で90度角度を変え東西方向の走向になることが確認されている。その結果、南側での外区と内区の間隔は約30mの空間が有することになる。また、内区の内部の調査では、今井道上遺跡6号掘立柱建物の南側で礎石をもつ掘立柱建物または竪穴住居の存在が予測されている。

しかし、地下レーダー探査は、地表からの調査であるため遺構の存在の有無やある程度の種類についての判断は可能であるが、確実な点や遺構の時期についての判定は不可能であるため推定や補足のための資料である。

区画溝の規模

区画溝の規模については、『今井道上遺跡』の報告書のなかで記述したように、外区の区画溝は北辺が114m、東辺が118m、南辺が113m、西辺が91mの台形状を呈している。また内区の区画溝は、北辺が103m、東辺が85m、南辺が102m、西辺が74mの規模をもつと考えられる。なお、外区と内区の2条の溝は、北、東、西側では2～2.5mの間隔で平行しているのに対して南側は約30mと幅広い間隔をとり約3000㎡

の空間をとっている。

区画溝の時期

26号・27号溝内部からは、土師器・須恵器や石製品、土製品が若干出土している。これら出土遺物は、おおむね7世紀から10世紀前半代の年代観が与えられるが、出土遺物をさらに検討すると8世紀前半代～中頃の土器が皆無である。また、これらの出土遺物のうち重複する竪穴住居から混入したと思われる6世紀から7世紀代の遺物を除くと8世紀後半から10世紀前半のものである。このことは、今井道上遺跡においても出土した土器から重複する竪穴住居に共存する遺物を取り除くと同様の結果が見られる。

また、重複する12棟の竪穴住居をみると6世紀から7世紀にかけてのもので、最も新しい住居でも49号住居で7世紀末～8世紀初頭のものである。これは、今井道上遺跡の重複する竪穴住居でも同様に6世紀から7世紀前半のものである。

以上のような出土遺物や重複する遺構の年代観などからこの区画溝の存続した年代は8世紀後半からほぼ200年の間に限定されよう。

内部の施設

前回の検討の際には、整理作業の進行した今井道上遺跡の遺構を主体的に行なったが、今井道上遺跡ではこの施設の中心的な建物であると想定される今井道上遺跡6号掘立柱建物、今井道上遺跡21号住居が共存することは判明した。今回、今井道上・道下遺跡の整理事業が行われたことにより、区画溝の存続した8世紀後半から10世紀前半の遺構を抽出すると、内部では28号住居、44号住居が該当する。この他、11号掘立柱建物は重複する6世紀代の竪穴住居より新しい年代観が与えられ主軸方位も区画溝と同様なことから本施設に伴うものと想定される。また、今井道上遺跡の7号掘立柱建物も主軸方位の点からみると可能性は高い。

この施設は、北側の中央部に2×5間の大型の掘立柱建物を、そしてその南側には掘立柱建物を配置

第5章 まとめ

し、東側の区画ぎわには1×2間（今井道上遺跡7号掘立柱建物）や2×2間（11号掘立柱建物）の小型の掘立柱建物を、そしてその内側の列には竪穴住居（28号・44号住居、なおこの住居は接するような位置関係にあり規模も28号住居が若干小規模になり、出土遺物による住居の年代観も44号住居が9世紀前半、28号住居が9世紀中頃であることから、44号住居→28号住居への建て替えが想定される）が位置していることが発掘調査と地質調査の成果によって判明している。

また区画の外を見ると、北側は全く建物や住居等の配置は見られないが、東側では8棟の竪穴住居（4号・6号・7号・8号・10号・11号・60号・65号住居）が見られ、その配置も土橋の南側に位置していることから、住居の構築場所については何らかの規制があったのではないかと想定される。

施設の性格について

区画溝に囲まれた本施設は、発掘調査の行われた範囲が北側と東側の一部分でしかないため内部の建物の配置など詳細な点は不明であるが、二重の溝や土塁によって区画され、北側の中央部分に大型の掘立柱建物を配し、その南側にも掘立柱建物を置くなど官衙的な要素をもつ一方で東側に竪穴住居を数棟配置するなどから、むしろ居館等の私的施設と想定される。

また、区画溝や掘立柱建物、共存する竪穴住居からの出土遺物も全体的に量が少なく、種類も土器器の壺や杯、須恵器杯など一般の竪穴住居出土遺物とほとんど変わらず、本施設の性格を特色づける遺物は出土していないことから、遺物からの究明は困難である。

7世紀後半から10世紀代にかけての本施設のような区画溝等により画された施設で、明確に官衙や寺院と推定されるものを除いた類別をみると、県内や近県では次のような例がある。

群馬県内では、前橋市下東西遺跡、長野県では塩尻市吉田川西遺跡、松本市下神遺跡、神奈川県では

横浜市北区神陽丸山遺跡、千葉県では千葉市芳賀輪遺跡等がみられる。

これらの遺跡に見られる区画施設は、それぞれ官衙や館、神社などと想定されている。

また、周辺の遺跡では、「大郷長」の墨書土器を出土した荒砥洗橋遺跡、「芳郷」の墨書土器を出土した二之宮洗橋遺跡、瓦塔や水瓶などの仏具を多く出土し近接地に寺院址が存在したと推定される二之宮谷地遺跡が存在するなど今井道上・道下遺跡の周囲は、当時の勢多郡または芳賀郷の中心地であったと考えられる。こうしたことから、今井道上・道下遺跡の区画施設は、この地域の有力豪族の居館と推定される。

3 集落について

本遺跡で検出された竪穴住居は63棟、古代に属する掘立柱建物15棟で、これらは集落の一部を構成したとみられる。調査区南部の谷頭部分とこれに続く中央部の窪地を取り巻くように北側から西側にかけて集落居住域が広がっており、本遺跡で検出された建物群はこの東端にあたる。集落の中心は調査区の北西側、隣接する今井道上遺跡に相当すると考えられる。さらに、調査区南部～中央の窪地を挟んだ南東の微高地には二之宮谷地遺跡で検出された集落が展開する。集落の全体像や変遷相を明らかにするためには、これらの遺跡群全体を通して検討する必要がある、ここでは触れない。とりあえず集落理解の一助とするため、検出された遺構についてその時期と傾向について略述する。

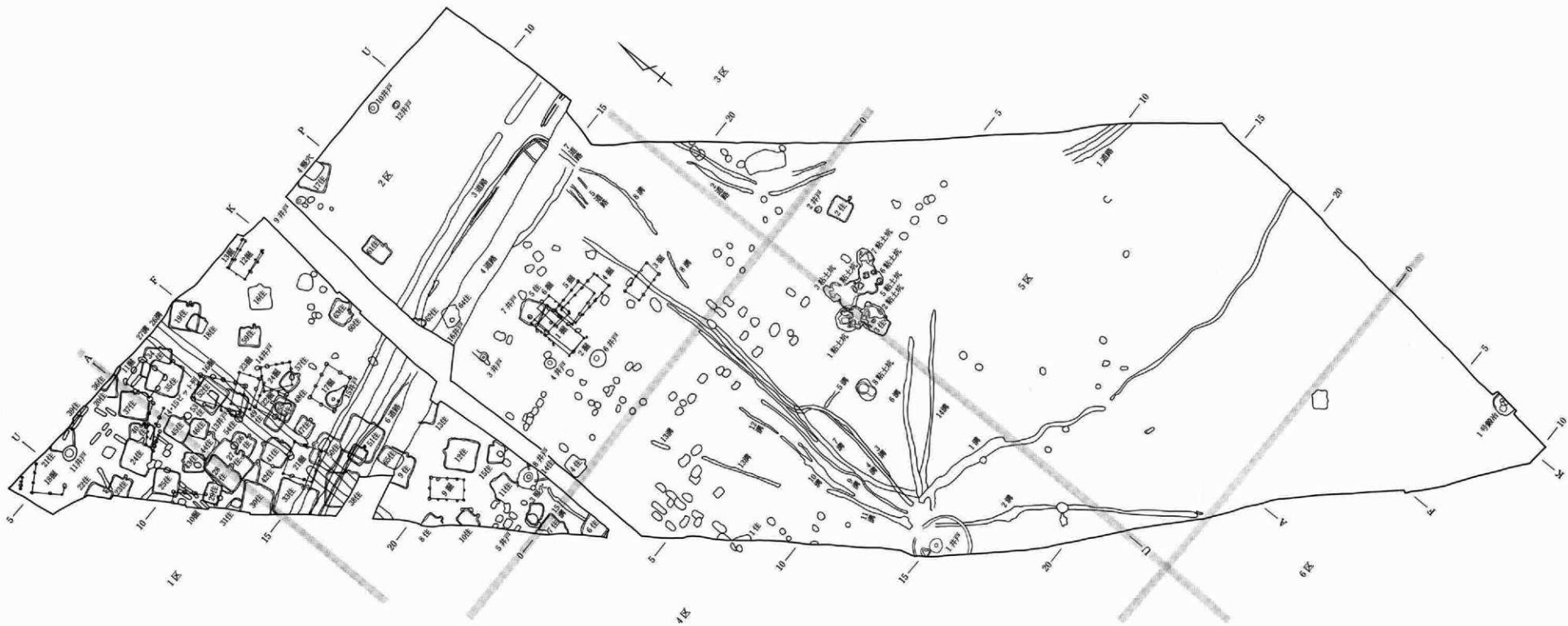
竪穴住居は出土遺物と重複関係からある程度の時期認定が可能である。これによれば、最古が4世紀後半で、5世紀代はみられず6世紀から9世紀まで継続してみられる。4世紀後半に属するのは3棟（1号・5号・14号住居）で、窪地に近いところにそれぞれ20～30mの間隔を置いて散在する。この時期は、今井道上遺跡や二之宮谷地遺跡でみられないことから、当初は竪穴住居数棟による小規模な集落として開始したらしい。これは、東方約500mに開析された

宮川低地の周辺に分布する荒砥宮川遺跡、荒砥島原遺跡、荒砥宮原遺跡などから、派生あるいは移動した短期的な集落だったと思われる。次代の5世紀には遺構が見られず、別の地点に集落が移動した可能性がある。5世紀には本遺跡の西約500mに今井神社古墳が知られており、これと関連する集落の存在が当然予想されるところだが、少なくとも調査区では認められなかった。6世紀からは概ね継続的に建物が構築されており、9世紀後半までは確実に見られる。時期別に住居数を見ると、6世紀代が27棟、7世紀代が17棟で、検出された竪穴住居の7割を占め、8世紀以降は激減する。建物配置については6～7世紀のものが北北西に主軸をもち、調査区北西側に集中するのに対して、8世紀後半以降は主軸（ここでは棟方向）を南北に揃え、調査区中央部寄りに散在する傾向を示す。これは同一集落を構成する今井道上遺跡とあわせて分析する必要があるが、前述した居館と推測される方形区画遺構が8世紀後半以降9世紀代に存在したことと大きく関連しよう。すなわち一般住居群は区画の外側に配置される規制が働いたと憶測される。このことと、南東に位置する二之宮谷地遺跡が本遺跡よりも遅れて6世紀後半以降に集落が形成されたにもかかわらず、10世紀後半まで集落が継続し、むしろ8世紀以降は本遺跡で検出された集落よりも住居棟数が増える傾向にあることは、不可分の関係にあるのかもしれない。居館と一般民衆の居住域が明確に分離されたと解釈することも可能だが、それは集落全体の分析を経て明らかにすることとしたい。

なお、掘立柱建物は6世紀代（10号）を最古として、9世紀まで存在すると推測されるが、時期の限定が困難で、配置関係や分布の傾向を捉える事ができない。ただし、主軸を北西に向けているものは、6～7世紀で竪穴住居とともに散在し、南北のもの（11号）は8世紀後半以降の方形区画遺構に関連して竪穴住居群とは隔絶するものと捉えておきたい。

註

- 1 1994(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上遺跡」
- 2 1994(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「箕井八日市遺跡」



第364図 今井道上・道下遺跡全体図

今井道上・道下遺跡発掘調査報告書抄録

フリガナ	イマイミチウエミチシタイセキ
書名	今井道上・道下遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告
シリーズ番号	第187集
編著者名	大木幹一郎 津島秀章 岩崎泰一 山口逸弘 神谷佳明 赤沼英男 藤根久 石井英一 井上麻
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279(52)2511
発行年月日	西暦1995年3月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今井道上道下	群馬県北橋村今井町 字道上、道下	102016	00123	36°21'58"	139°9'24"	19861001- 19870331 19870401- 19871031	6000 10800	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
今井道上道下	生産 住居	旧石器時代	石器ブロック	1カ所	石器、石核、剥片	石器製作跡
		縄文時代			縄文土器、石器	
	住居	古墳時代	竪穴住居	63軒	土師器、須恵器、鉄器	方1町の方形区画 祭祀的な特殊井戸
奈良時代		掘立柱建物跡	11棟	陶器、石製品、銭貨		
平安時代		鍛冶遺構	1基		羽口、鉄滓	
		粘土探掘坑 方形区画溝 井戸				
	道路	中世～ 近世	道路跡	7面		
			掘立柱建物跡 土墳墓	8棟		

写 真 图 版



5区 1号ブロック遺物出土状況

SE→



5区 1号ブロック遺物出土状況

SW→



1号住居跡東半部分
右重複遺構は近代以降の畠サク

SE→



1号住居跡西半部分

S→



2号住居跡遺物出土状況

W→



2号住居跡全景

W→



3号住居跡掘り方全景（左方は粘土採掘坑）



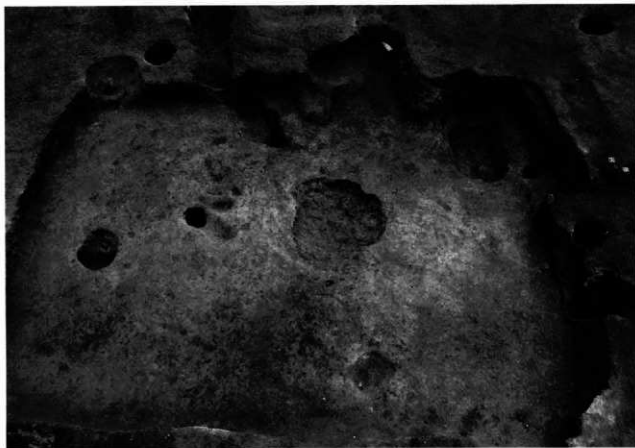
3号住居跡断面（左方は粘土採掘坑）



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡遺物出土状況



4号住居跡全景

W→



4号住居跡遺物出土状況

W→



5号住居跡全景

W→



5号住居跡断面

S→



6号住居跡全景

N→



6号住居跡遺物出土状況

N→



7号住居跡全景

N→



7号住居跡竈



7号住居跡貯蔵穴



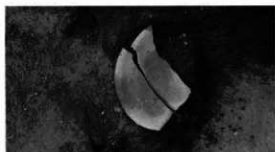
7号住居跡遺物出土状況全景

E→

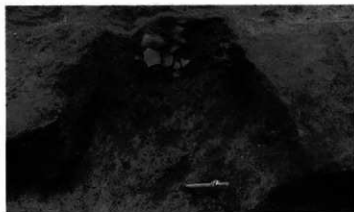


8号住居跡全景

E→

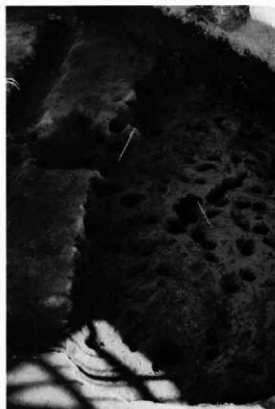


8号住居跡遺物出土状況



8号住居跡竈遺物出土状況

W→



8号住居跡掘り方全景

N→

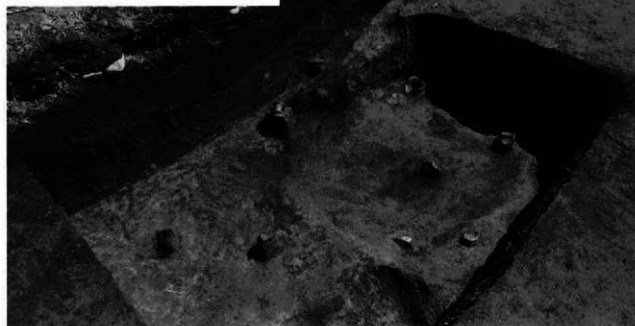


9号住居跡全景

W→



9号住居跡竈遺物出土状況 SW→



9号住居跡遺物出土状況全景

SW→



10号住居跡全景

N→



10号住居跡電 W→



10号住居跡電断面 N→



12号住居跡遺物出土状況

S→



12号住居跡遺物出土状況

S→



12号住居跡掘り方全景

S→



13号住居跡全景

W→



13号住居跡竈 W→



13号住居跡掘り方（部分）N→



15号住居跡掘り方全景

W→



15号住居跡遺物出土状況

S→



16号住居跡全景

NW→



16号住居跡断面

E→



16号住居跡断面

S→



16号住居跡遺物出土状況

NW→



17号住居跡全景

W→



17号住居跡遺物出土状況

SE→



18号住居跡遺物出土状況

S→



18号住居跡土層断面(東西)

S→



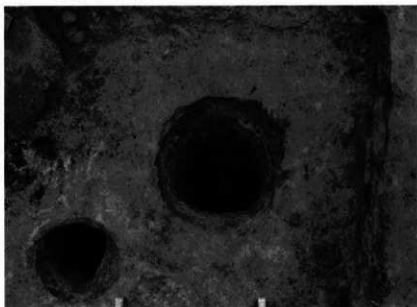
18号住居跡(右)・19号住居跡(左)

SW→



19号住居跡全景

SW→



19号住居跡貯蔵穴

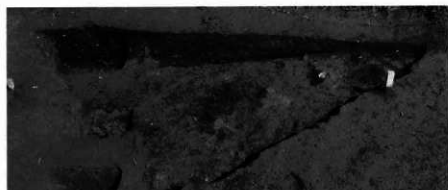


19号住居跡竈脇遺物出土状況



20号住居跡全景

SE→



20号住居跡土層断面 S→



20号住居跡掘り方全景

SE→



21号住居跡全景

SW→



21号住居跡土層断面 S→



21号住居跡竈
(袖石と支脚)

NE→



21号住居跡竈
(中央は支脚)

S→



22号住居跡全景

N→



22号住居跡土層断面 E→



22・23号住居跡重複関係（上方が23号住居跡）



23号住居跡全景

S→



23号住居跡竈

W→



24号住居跡全景

SW→



24号住居跡掘り方全景

W→



25号住居跡全景

S→



25号住居跡遺物出土状況

N→

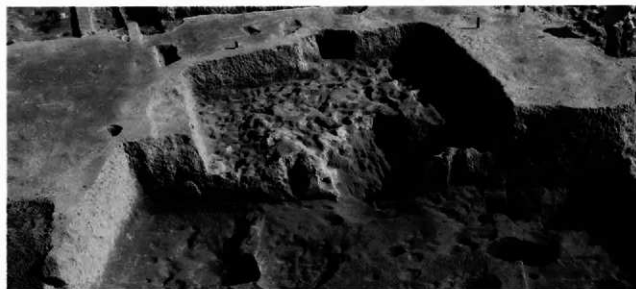


26号住居跡全景

W→



26号住居跡竪断面



26号住居跡掘り方全景 (手前は27号住居跡)

W→



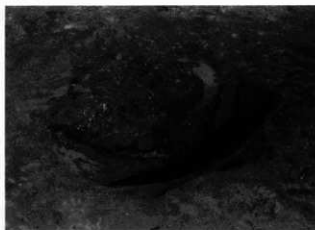
27号住居跡全景

W→

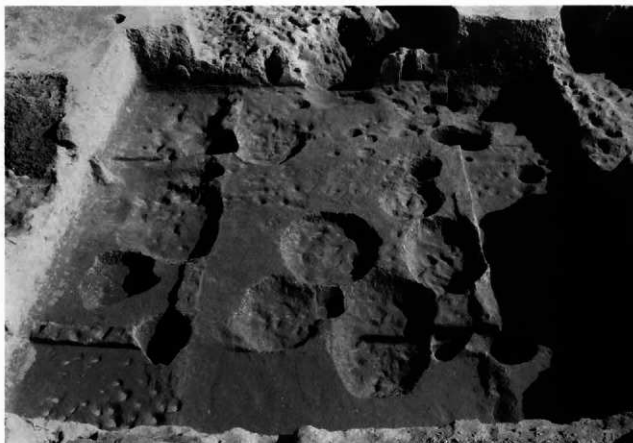


27号住居跡竈

W→

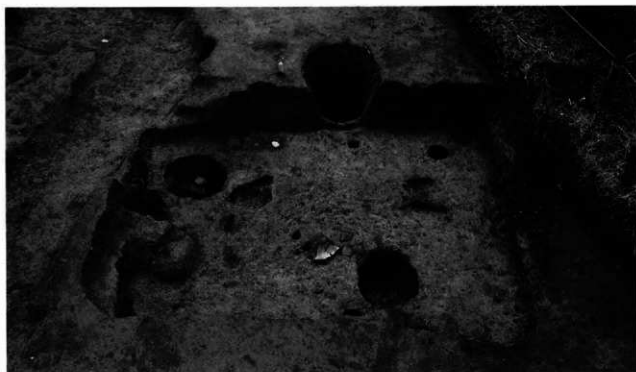


27号住居跡ピットP 3 断面



27号住居跡掘り方全景

W→



29号住居跡全景

N→



29号住居跡竈遺物出土状況

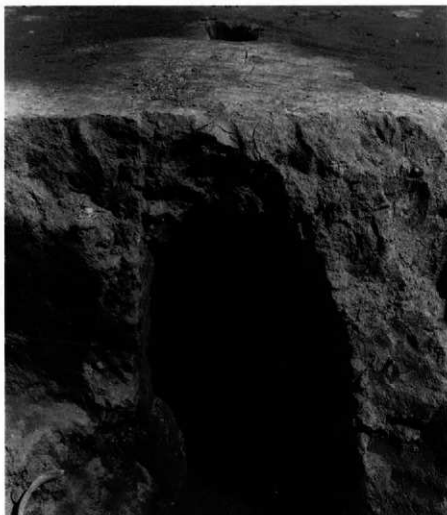


29号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



30号住居跡全景

E→



30号住居跡電景
(上方に標道があく)



33号住居跡全景

N→



33号住居跡南壁炭化材出土状況

N→



33号住居跡南壁炭化材出土
状況 N→

33号住居跡竈遺物出土状況



33号住居跡竈全景

33号住居跡竈断面





34号住居跡全景 (右は35号住居跡)

SW→



34号住居跡電掘り方

SW→



34号住居跡竈遺物出土状況

W→



34号住居跡掘り方全景

SW→



35号住居跡全景 (左上は34号住居跡)

SW→



35号住居跡竈遺物出土状況 W→



35号住居跡竈北袖際遺物出土状況



35号住居跡掘り方全景

SW→



36号住居跡全景

S→

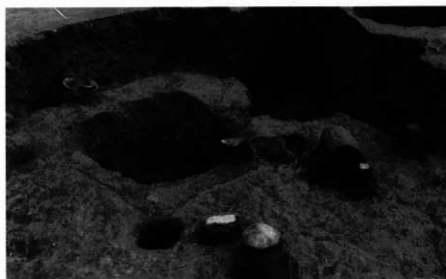


37号住居跡全景

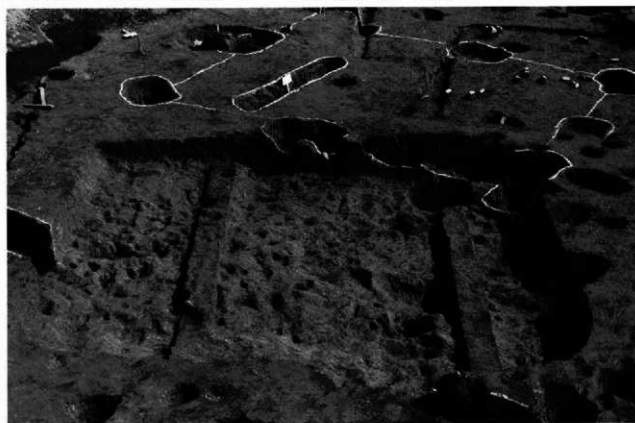
SW→



37号住居跡壘全景 SW→



37号住居跡貯蔵穴



37号住居跡掘り方全景 (上は11号掘立柱建物跡)

SW→



38号住居跡全景

NW→



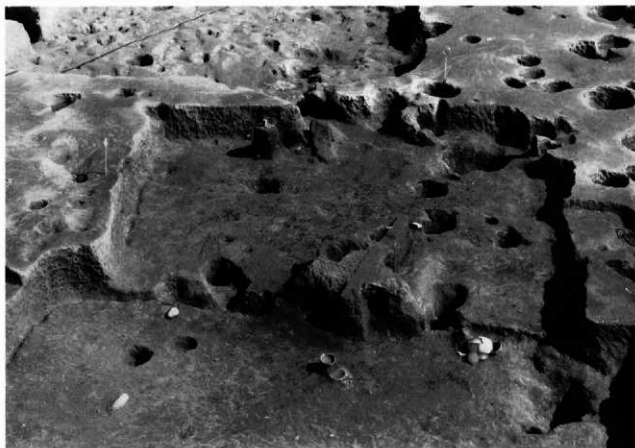
38号住居跡掘り方

N→



39号住居跡土層断面

S→



40号住居跡全景 (手前は24号住居跡)

W→



41号住居跡

W→



41号住居跡竈 SW→



41号住居跡竈



41号住居跡炭化材出土状況

W→

41号住居跡炭化材出土状況

W→



41号住居跡炭化材出土状況 W→



42号住居跡電掘り方



42号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

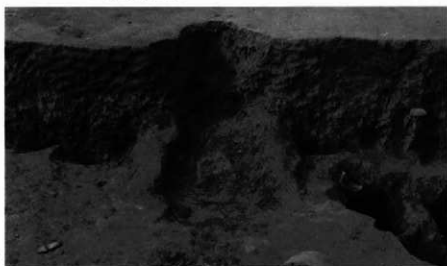


42号住居跡全景 W→

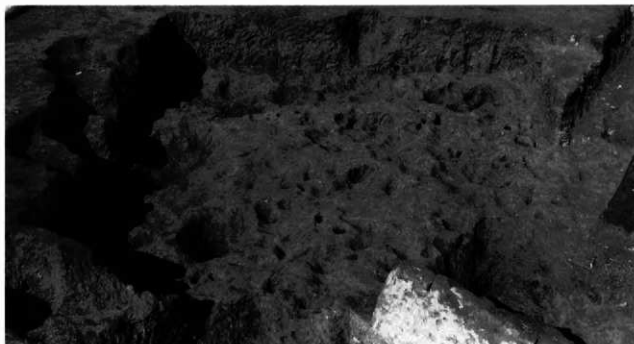


43号住居跡全景

SE→



43号住居跡電掘り方 S→



43号住居跡掘り方全景

SE→



44号住居跡全景 (手前は43号住)

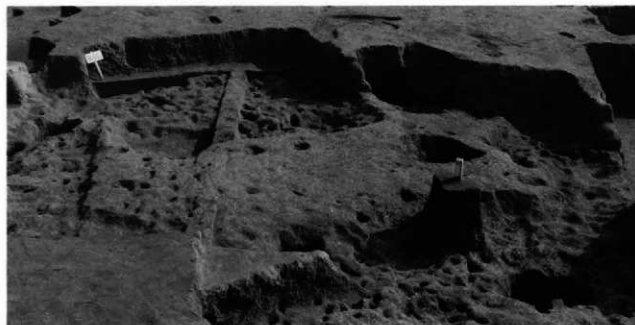
W→



44号住居跡電



44号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



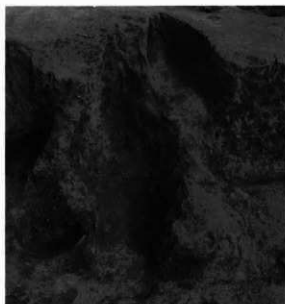
44号住居跡掘り方全景 (左奥は46号住居跡)

W→



45号住居跡全景

SW→



45号住居跡電掘り方

W→



46号住居跡全景

W→



46号住居跡土層断面

SE→



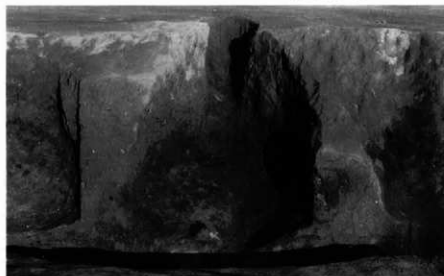
46号住居跡遺物出土状況

W→



47号住居跡全景

W→



47号住居跡電掘り方



47号住居跡掘り方

W→



48・49 (左)・55号住居跡全景 (中央貫通するのは26号溝)

S→



48号住居跡・貯蔵穴 E→



48・49・55号住居掘り方 (上は22号掘立柱建物跡)

SE→



50号住居跡全景

S→



50号住居跡竈 S→



50号住居跡掘り方

S→



51号住居跡全景

W→



51号住居跡遺物出土状況

N→



52号住居跡竈部分 S→



52号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 S→



52号住居跡土層断面 S→



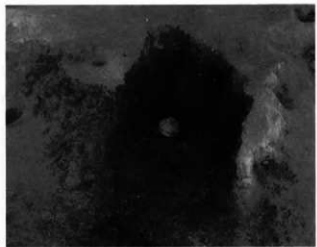
52・53号住居跡全景 (中央の方形凹みが53号住)

S→



54号住居跡全景

W→



54号住居跡電

W→



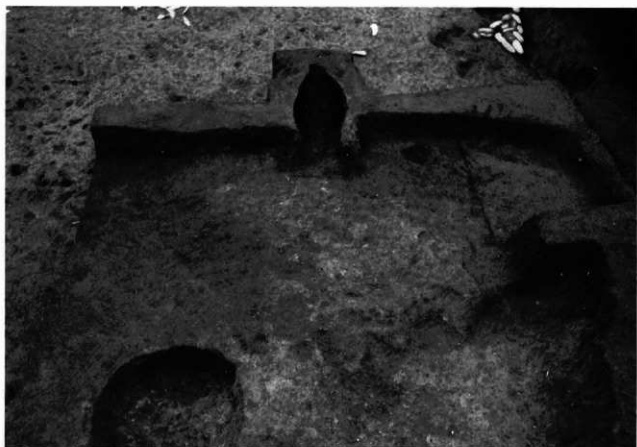
54号住居跡南壁際遺物出土状況

NW→



54号住居跡掘り方

W→



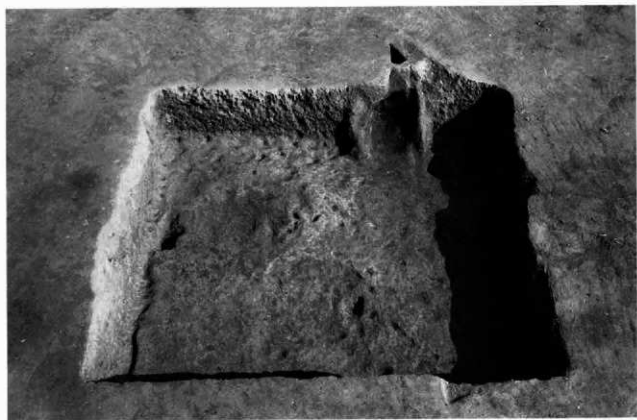
56号住居跡全景

W→



57号住居跡全景

N→



59号住居跡全景

W→



59号住居跡竈

59号住居跡竈断面





60・63号住居跡全景 (右側が60号住)

W→

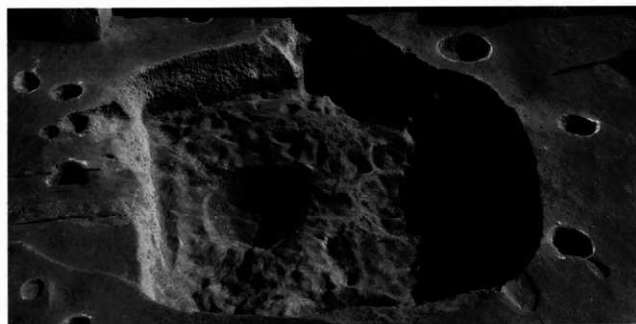


60号住居跡電

W→



60号住居跡電断面



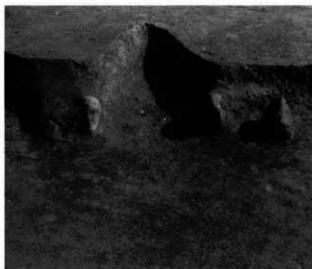
60・63号住居跡掘り方

W→



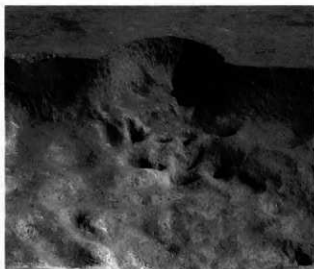
61号住居跡全景

W→



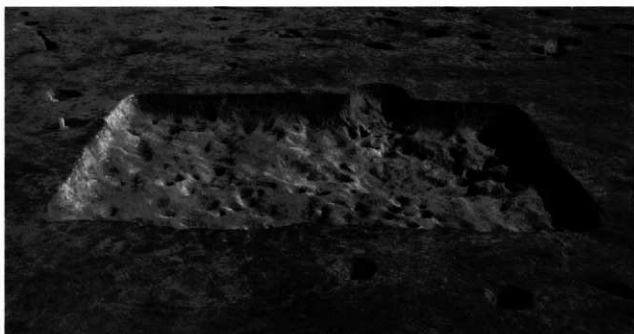
61号住居跡竈

W→



61号住居跡竈掘り方

W→



61号住居跡掘り方

W→



1号鍛冶跡遺物出土状況

W→



1号鍛冶跡掘り方全景

W→



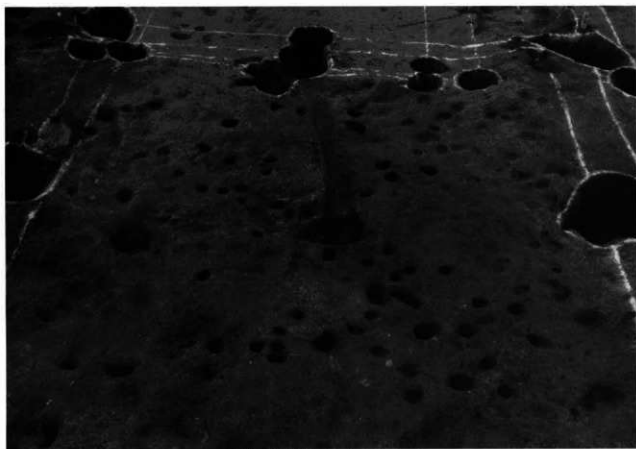
2号掘立柱建物跡土間部分断面

SE→



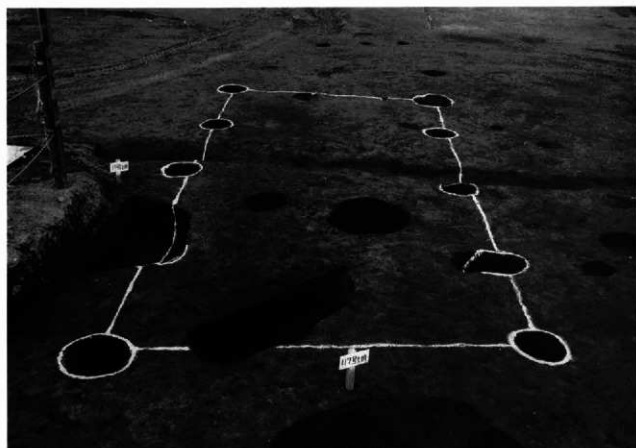
2号掘立柱建物跡土間部分

S→



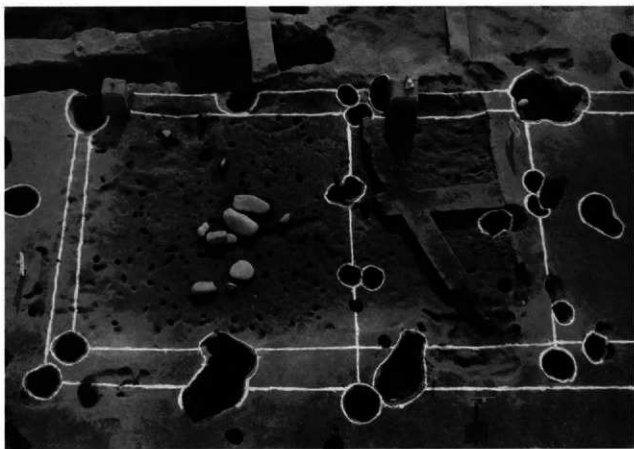
1号掘立柱建物跡中央石下ビット

S→



3号掘立柱建物跡全景

W→



2号掘立柱建物跡全景

E→



2号掘立柱建物跡全景

S→



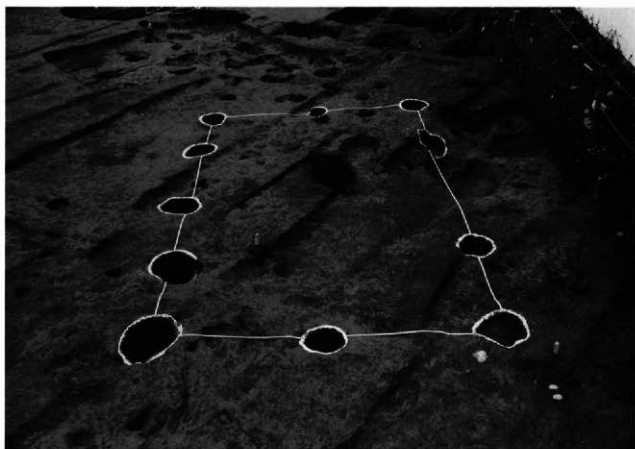
1～8号掘立柱建物跡全景

N→



1～8号掘立柱建物跡全景

NE→



9号掘立柱建物跡全景

NW→



10号掘立柱建物跡全景

N→



11号掘立柱建物跡全景

S→



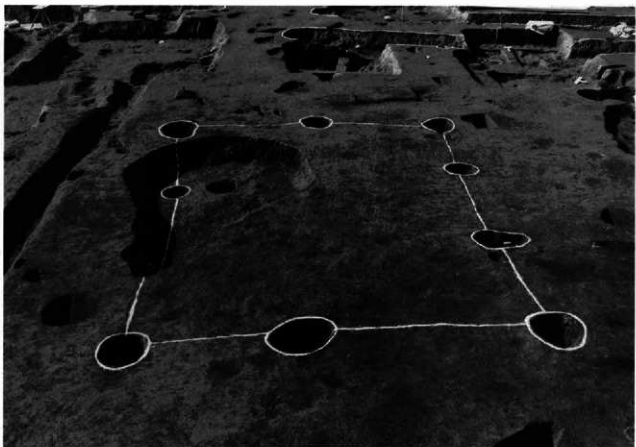
12・13号掘立柱建物跡全景

S→



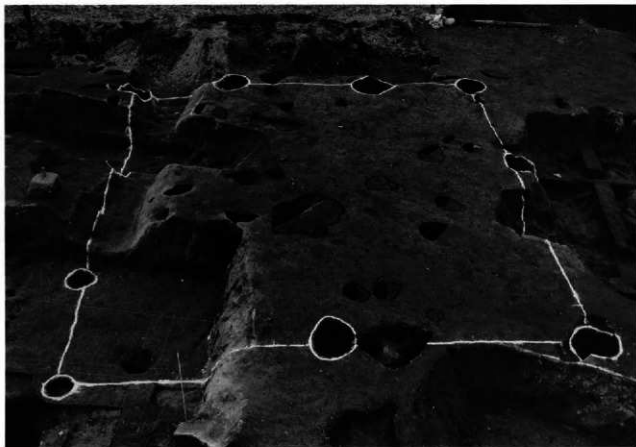
16号掘立柱建物跡全景

SE→



17号掘立柱建物跡全景

E→



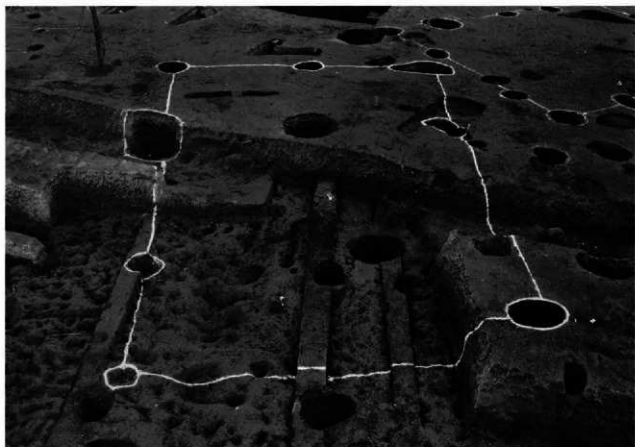
21号掘立柱建物跡全景

E→



22号掘立柱建物跡全景

SE→



23号掘立柱建物跡全景

SE→



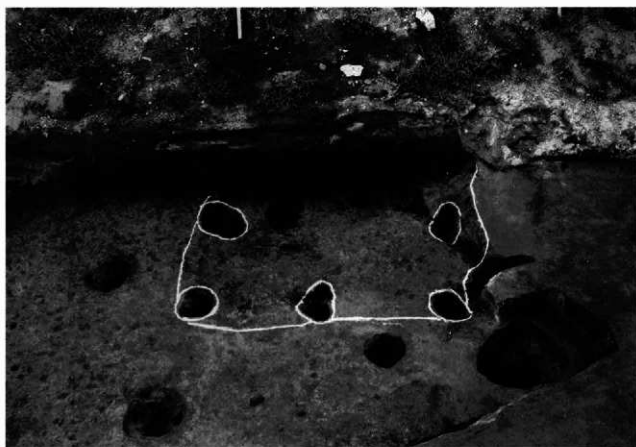
24号掘立柱建物跡全景

S→



3号堅穴遺構全景

E→



4号堅穴遺構全景

S→



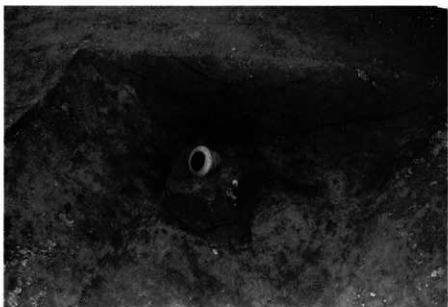
26・27号溝

SE→



26・27号溝

S→

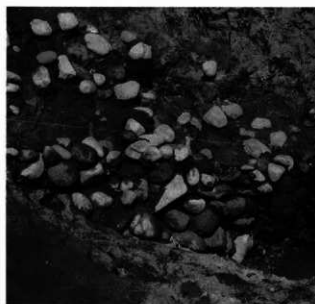


27号溝遺物出土状況



1号井戸自然湛水状態

N→



1号井戸石敷断面

SE→



1号井戸を廻る溝

N→



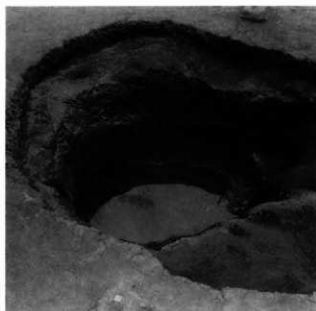
1号井戸新井戸

S→

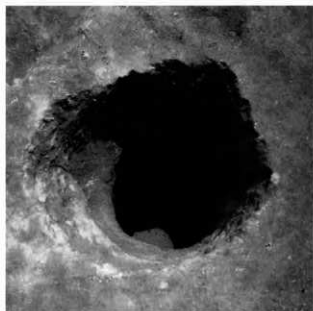


1号井戸 傾斜面遺物出土状況

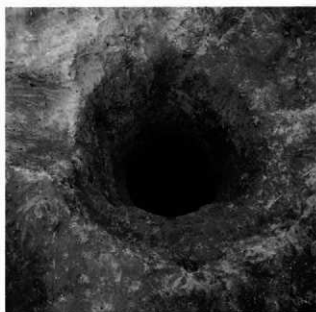
N→



1号井戸



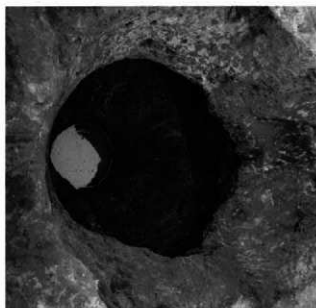
2号井戸



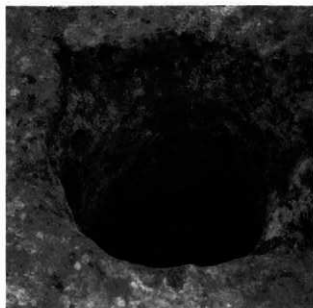
3号井戸



4号井戸



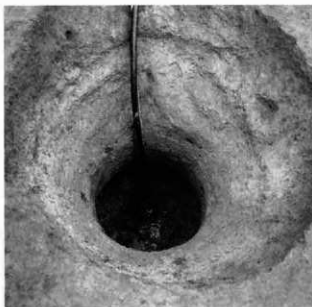
5号井戸



7号井戸



9号井戸 SE→



10号井戸 NW→



11号井戸 SE→



12号井戸 NW→



14号井戸 S→



15号井戸 E→



15号井戸断面

W→



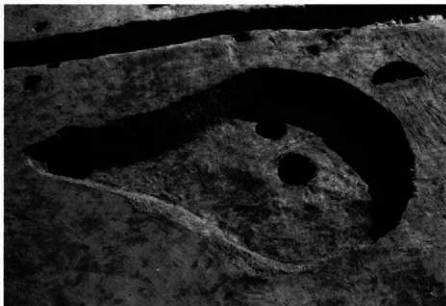
16号井戸

E→



15号井戸

W→



15号井戸

N→



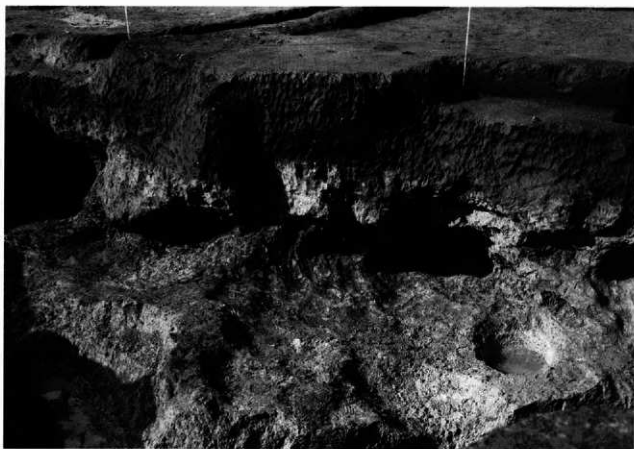
粘土採掘坑検出状況

SW→



粘土採掘坑検出状況

W→



1~3号粘土探掘坑



2号粘土探掘坑



1~2号粘土探掘坑



2号粘土探掘坑



3号道路跡（現道の右）

E→



3～7号道路跡全景



3号道路跡西側下層路面

E→



3号道路跡土橋状部分

NE→



3号道路跡側溝断面

東側W→



4号道路跡全景

E→



4号道路跡全景

W→



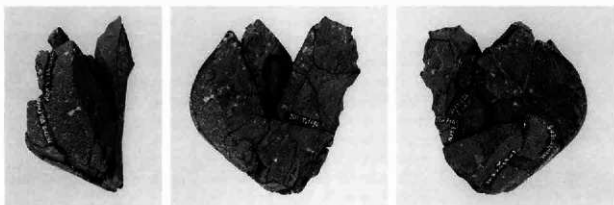
1号道路跡全景

W→

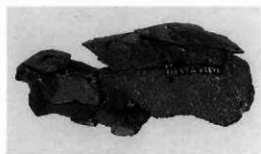


1号道路跡

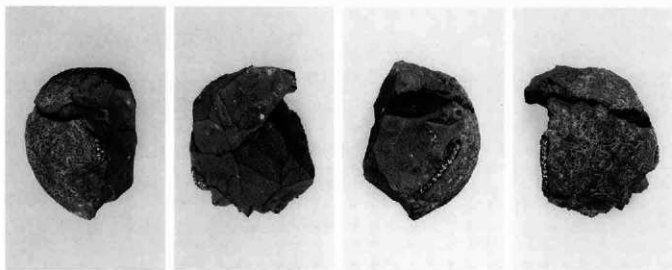
SE→



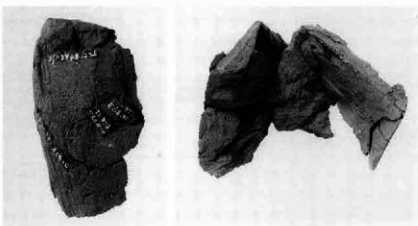
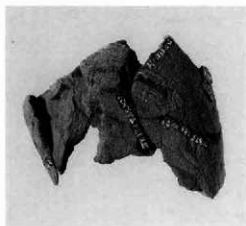
母岩 1 接合資料 1



母岩 1 接合資料 2



母岩 2 接合資料 1



母岩 3 接合資料 4



77

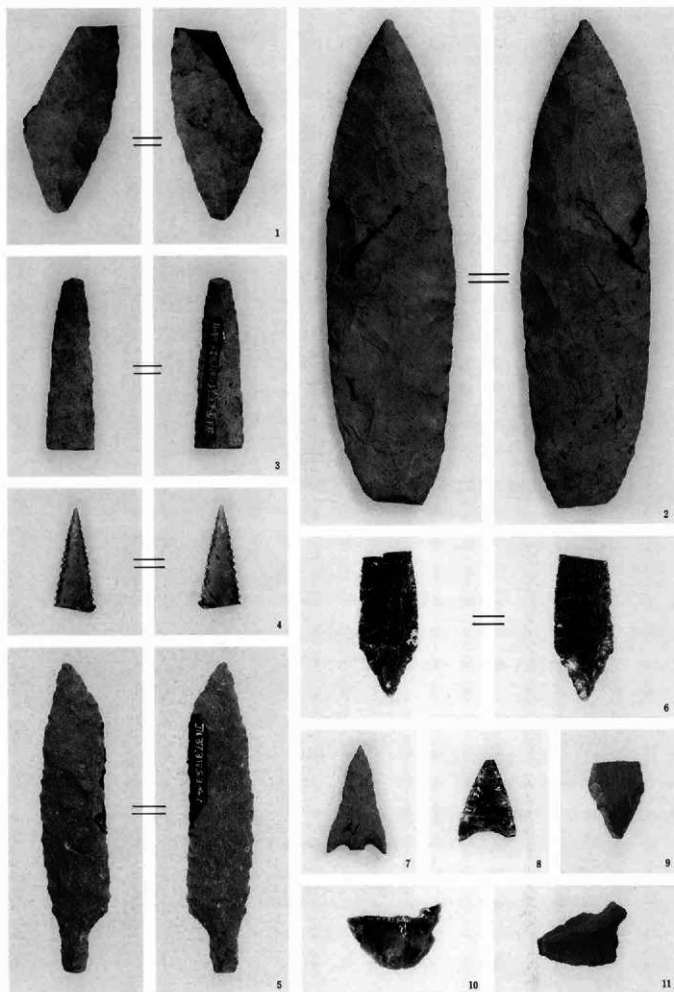


78

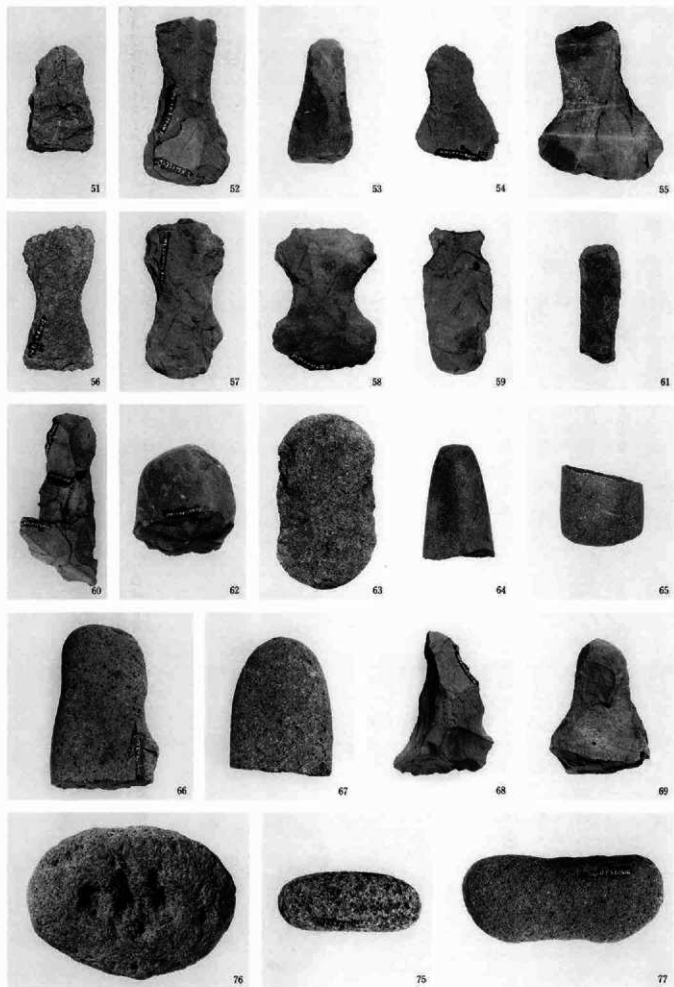


79

包含層出土縄文土器
(番号は挿図番号と一致)



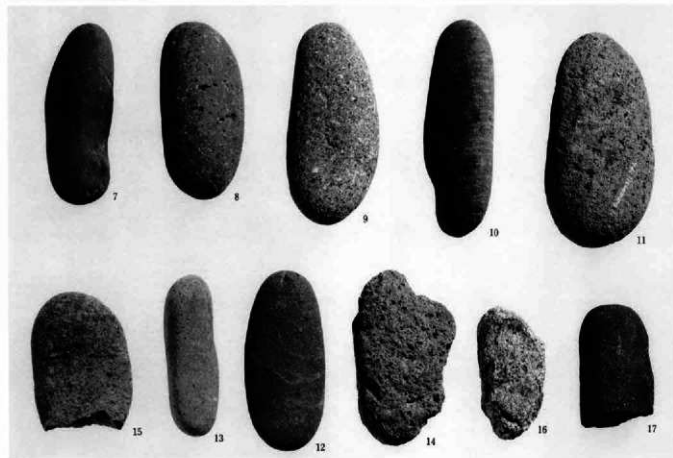
縄文時代の石器 (1)



縄文時代の石器 (2)



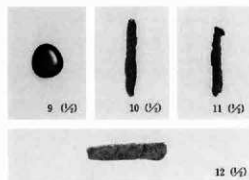
1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



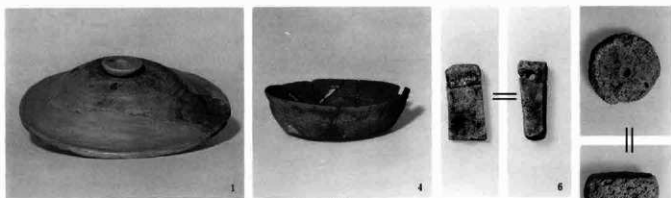
3号住居跡出土遺物



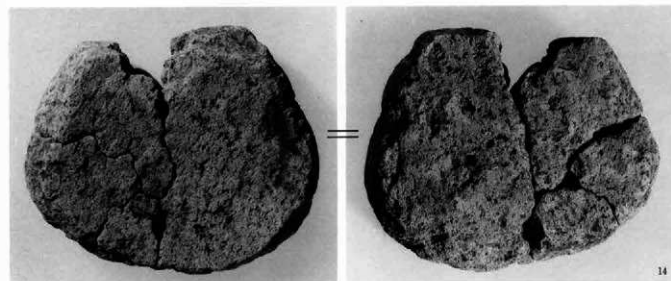
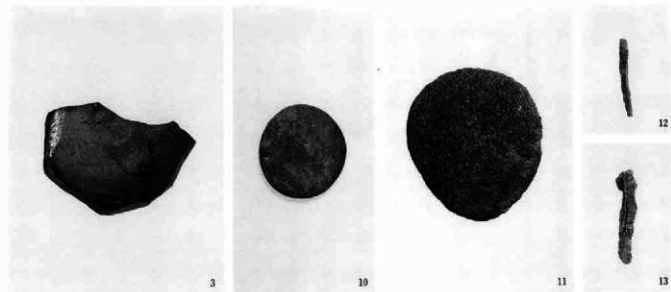
4号住居跡出土遺物



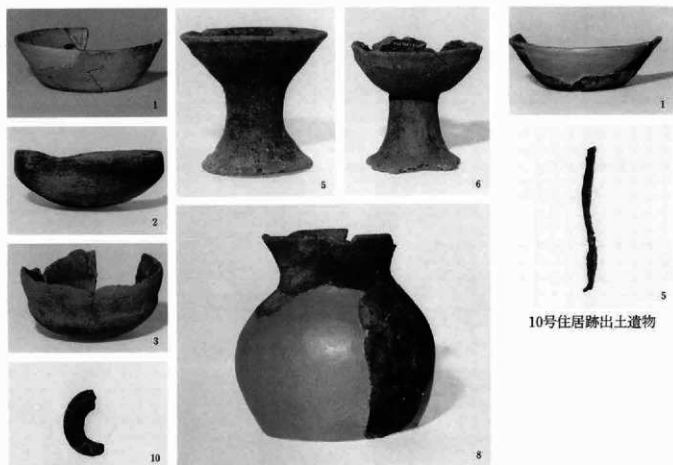
5号住居跡出土遺物



6号住居跡出土遺物

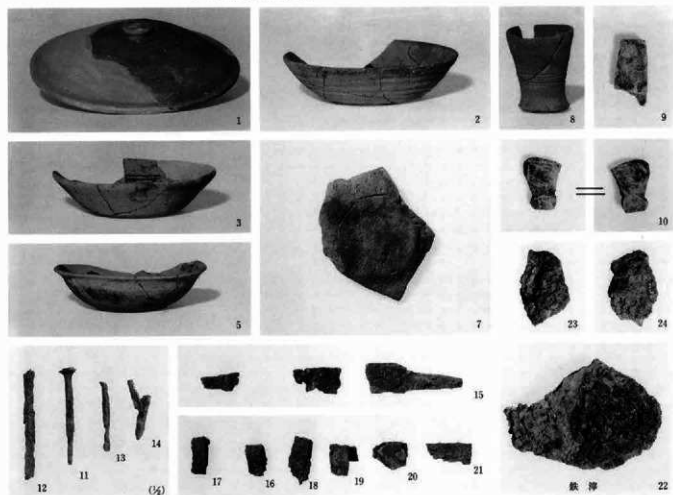


7号住居跡出土遺物

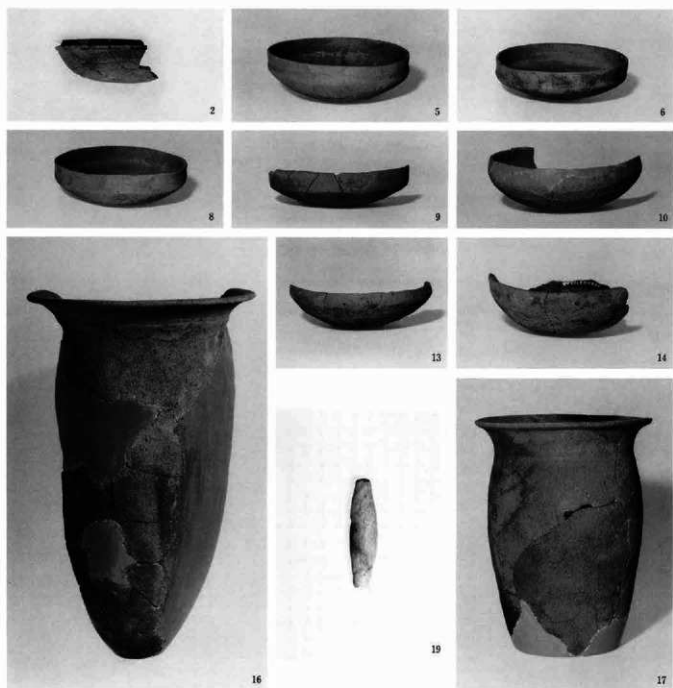


10号住居跡出土遺物

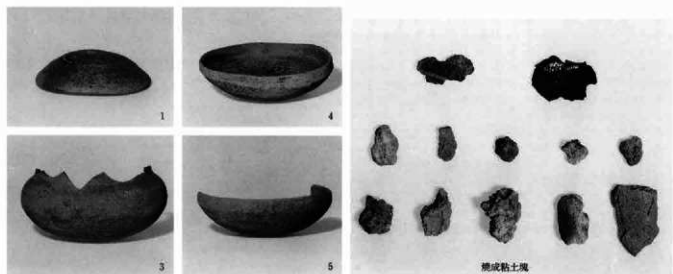
9号住居跡出土遺物



11号住居跡出土遺物



12号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物

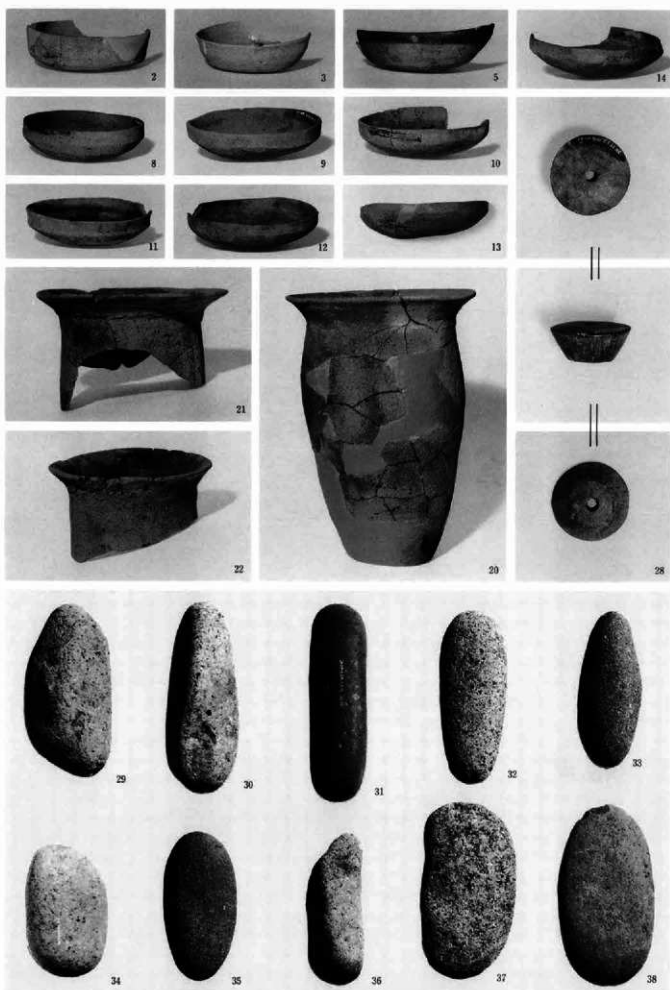
焼成粘土塊



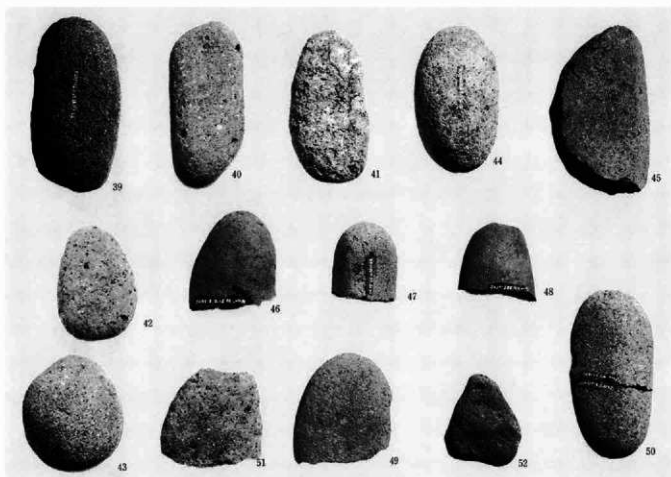
14号住居跡出土遺物



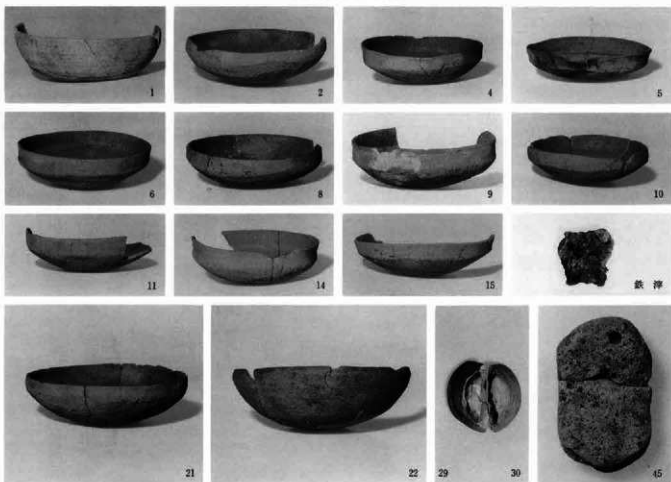
15号住居跡出土遺物



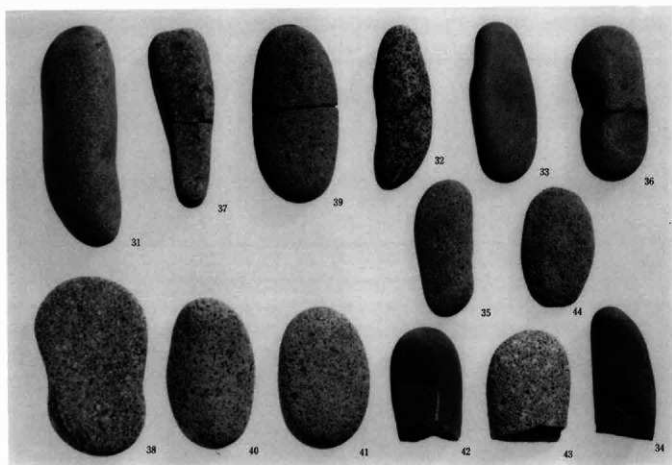
16号住居跡出土遺物



16号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物(1)



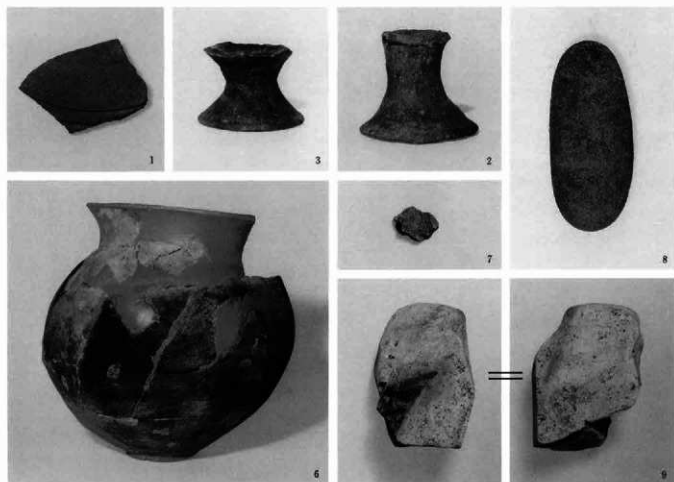
17号住居跡出土遺物(2)



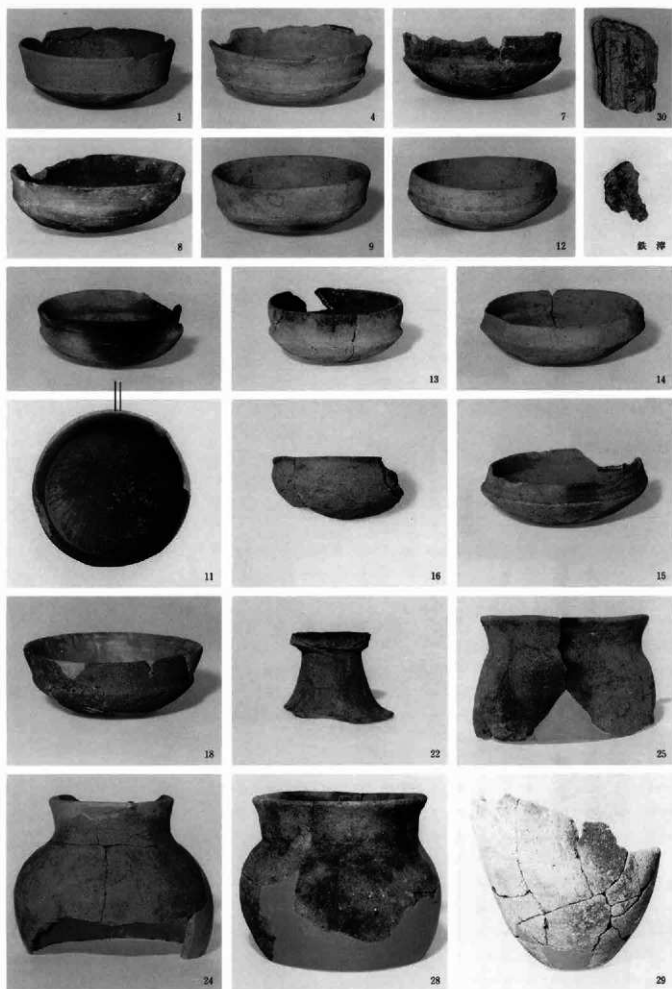
19号住居跡出土遺物



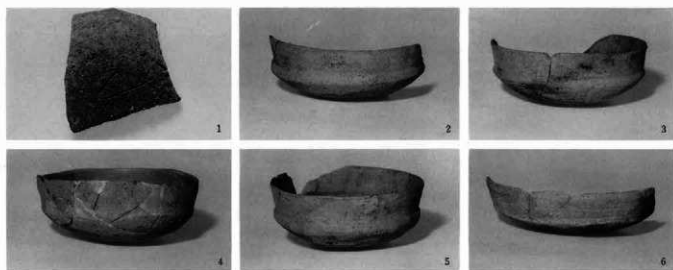
22号住居跡出土遺物



23号住居跡出土遺物



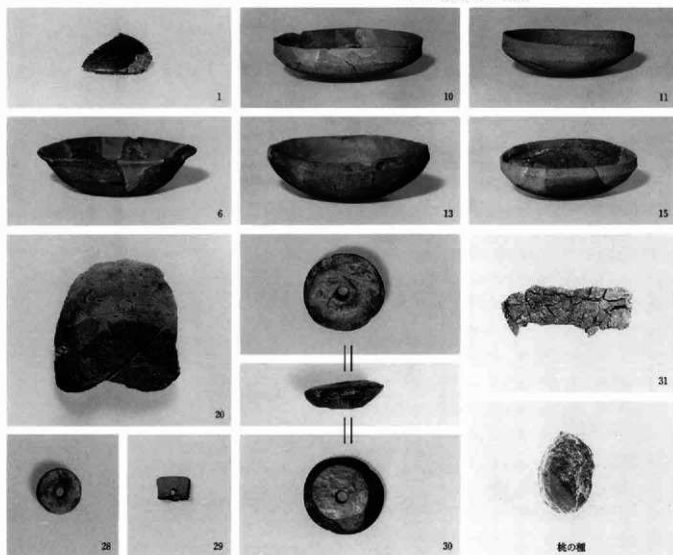
25号住居跡出土遺物



24号住居跡出土遺物



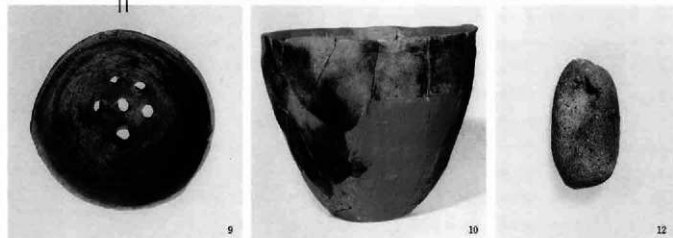
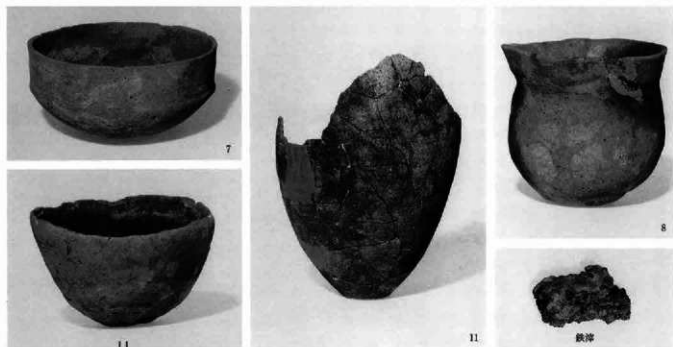
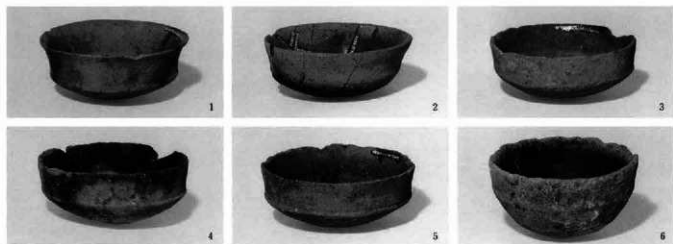
26号住居跡出土遺物



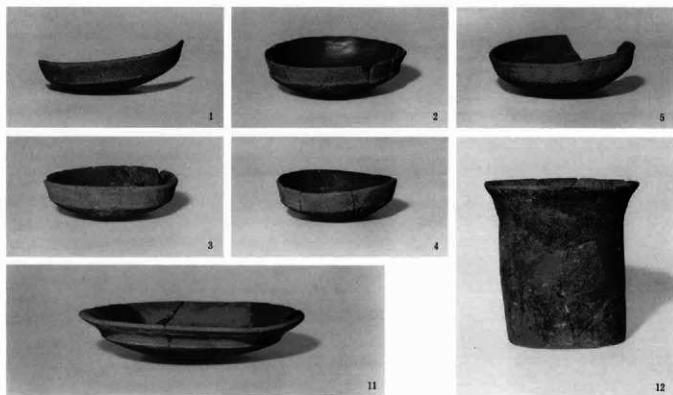
27号住居跡出土遺物



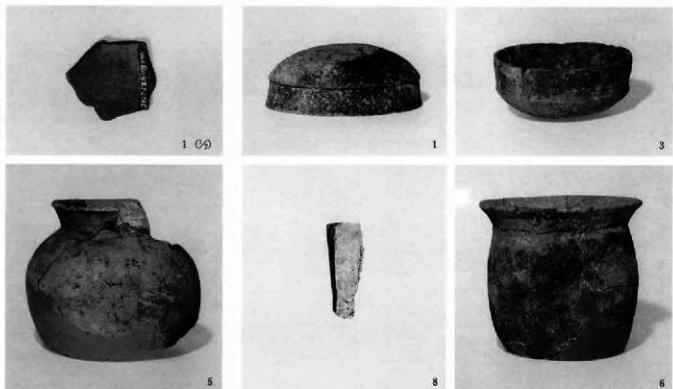
28号住居跡出土遺物



29号住居跡出土遺物

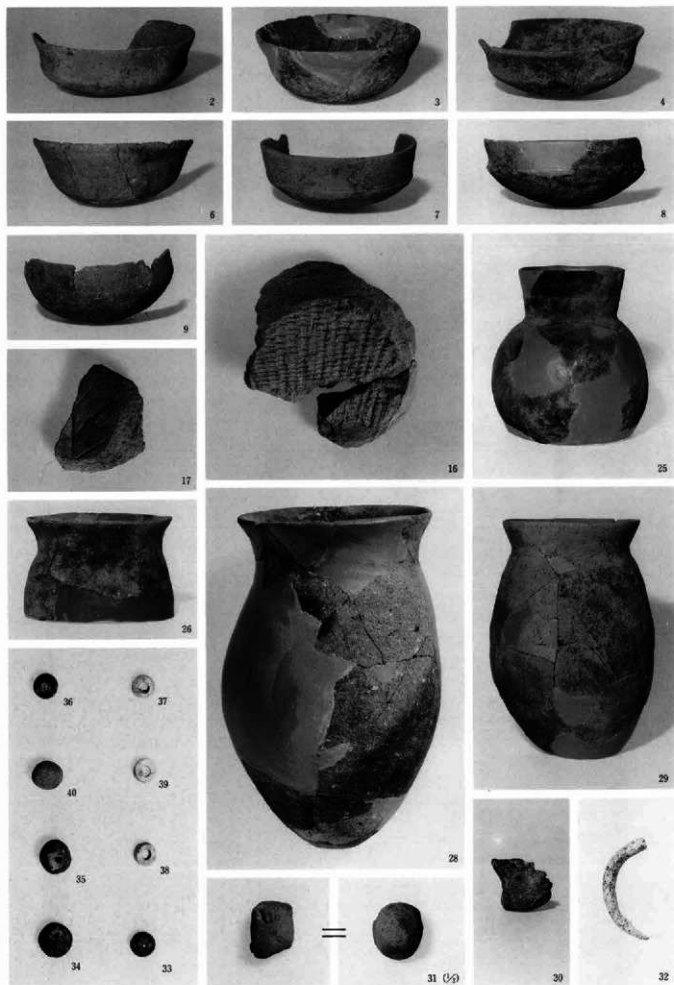


30号住居跡出土遺物



31号住居跡出土遺物

34号住居跡出土遺物



33号住居跡出土遺物



35号住居跡出土遺物(1)



35号住居跡出土遺物(2)

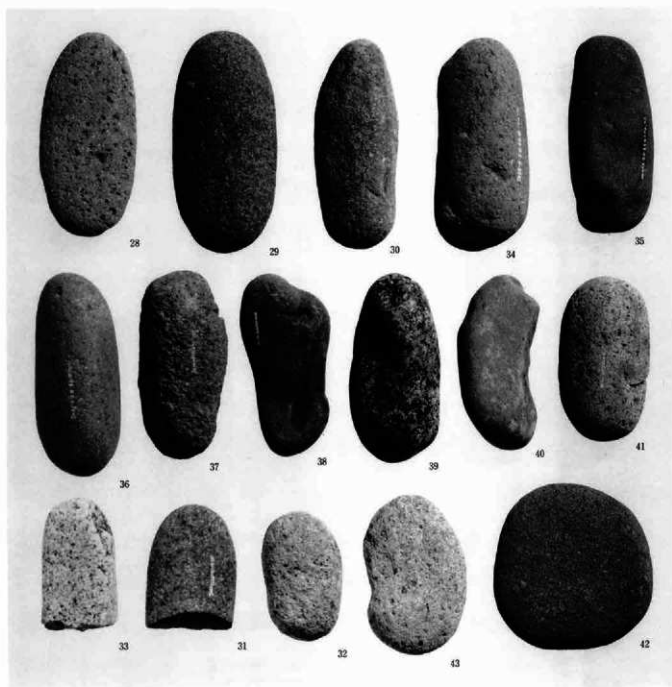
36号住居跡出土遺物



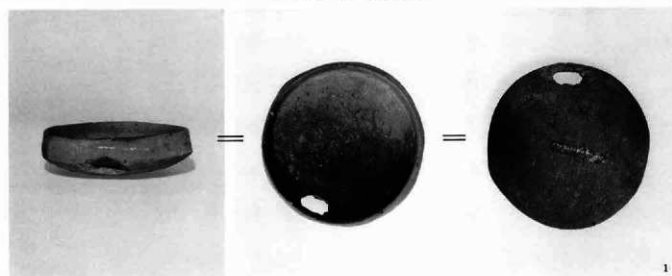
37号住居跡出土遺物



38号住居跡出土遺物(1)



38号住居跡出土遺物(2)



39号住居跡出土遺物



3

40号住居跡出土遺物



1



2



8



6



5



7

41号住居跡出土遺物



1

42号住居跡出土遺物



4



6

43号住居跡出土遺物



1

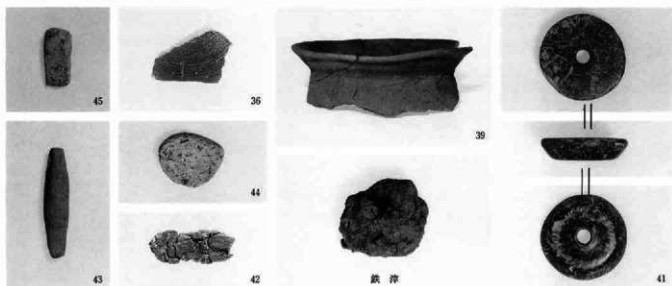
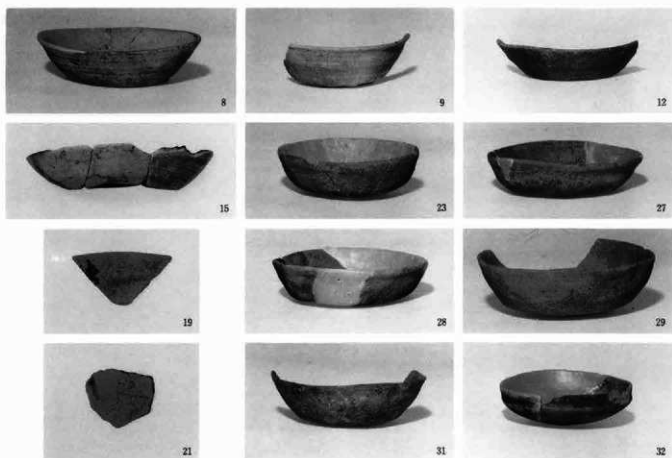


4

45号住居跡出土遺物

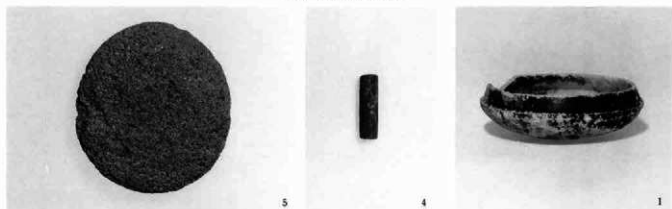


鉄滓



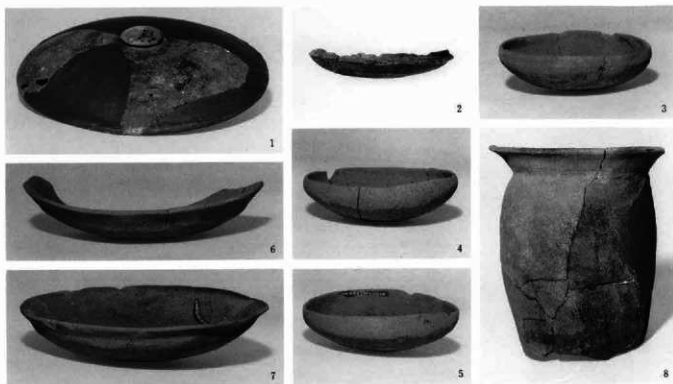
鉄 押

44号住居跡出土遺物

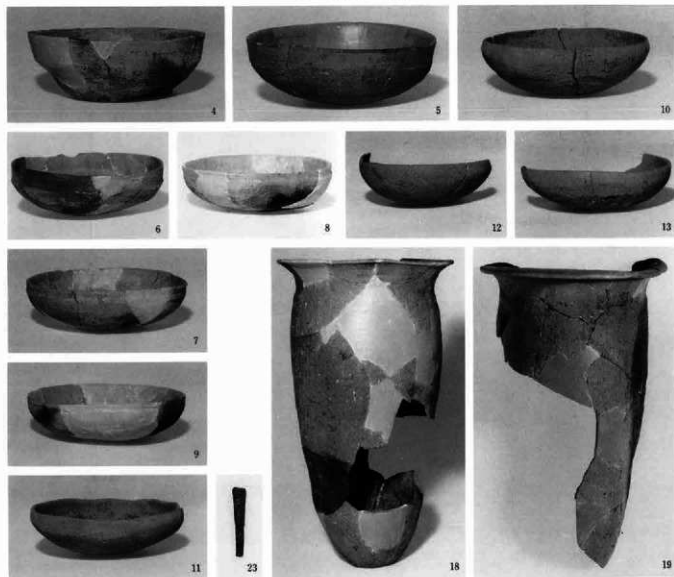


47号住居跡出土遺物

48号住居跡出土遺物



49号住居跡出土遺物



50号住居跡出土遺物



51号住居跡出土遺物(1)



33



35



37



38



39



42



40



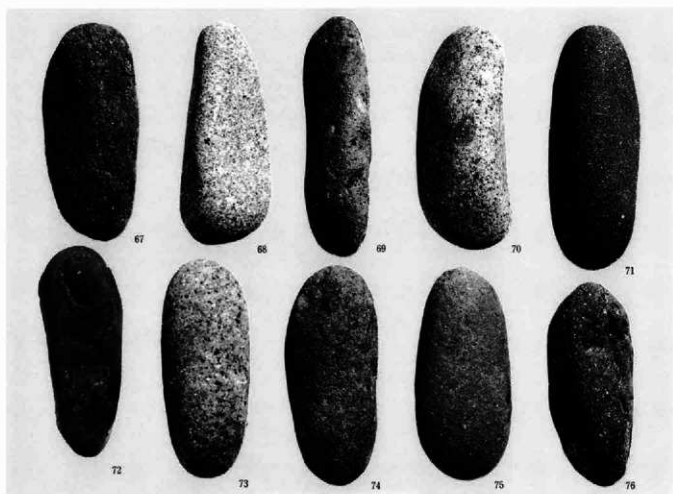
44



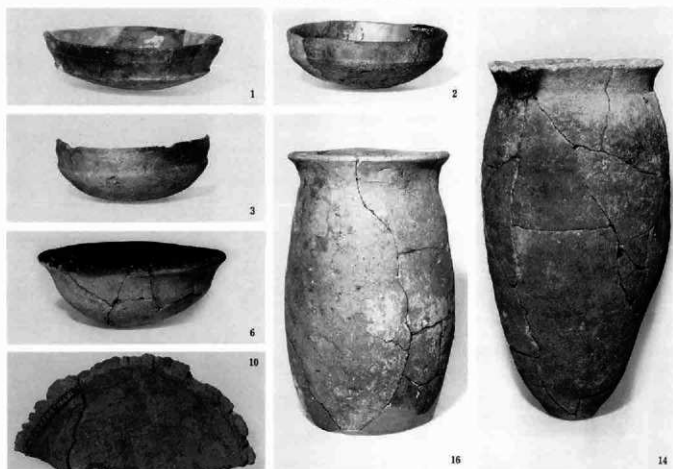
45



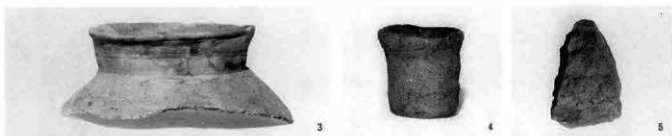
46



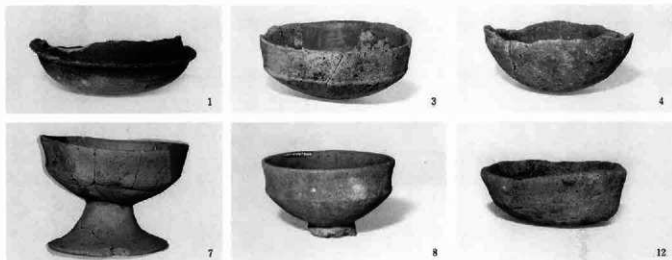
51号住居跡出土遺物(3)



52号住居跡出土遺物



53号住居跡出土遺物



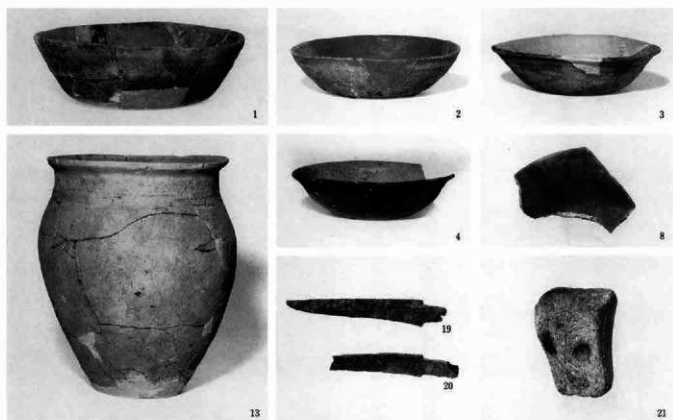
54号住居跡出土遺物



57号住居跡出土遺物



58号住居跡出土遺物



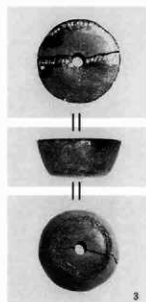
60号住居跡出土遺物



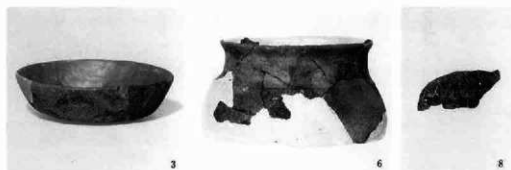
61号住居跡出土遺物



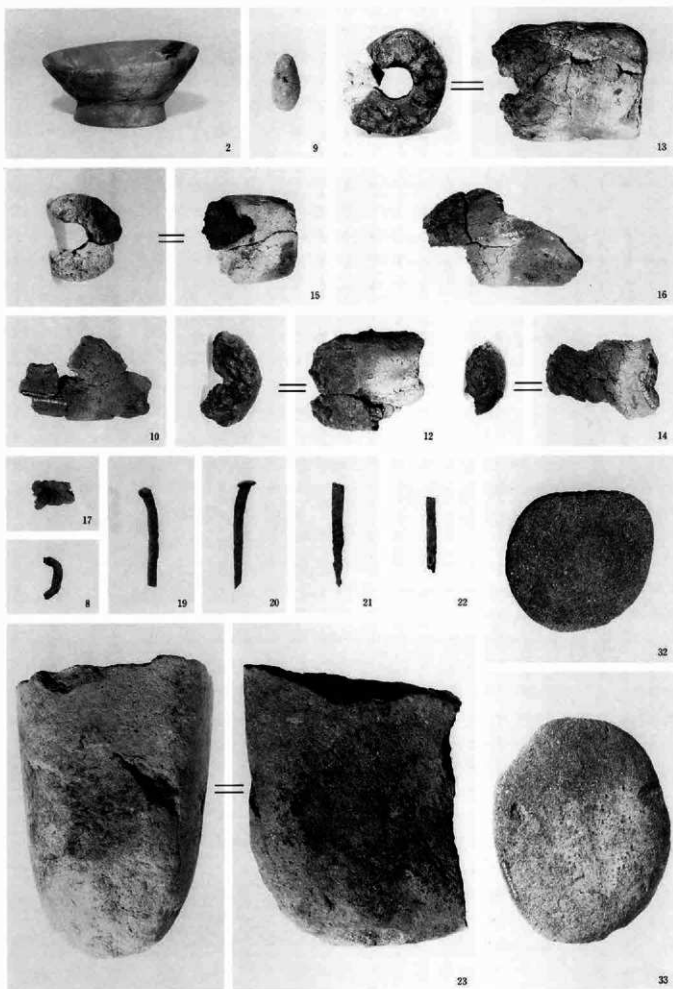
62号住居跡出土遺物



64号住居跡出土遺物



65号住居跡出土遺物



1号鍛冶跡出土遺物(1)



24



27



25



28



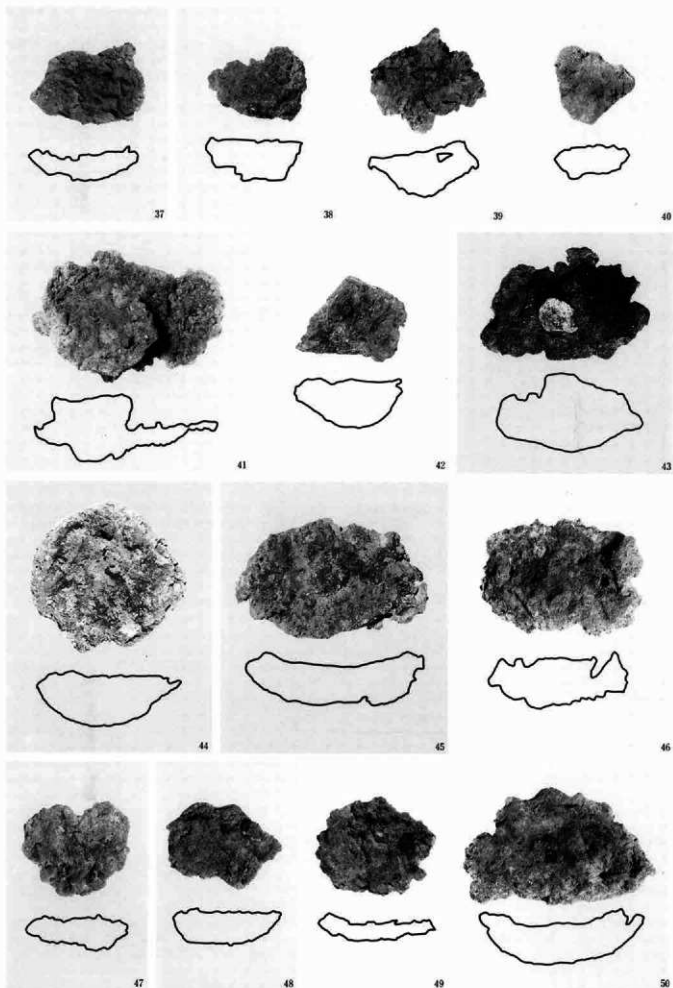
29



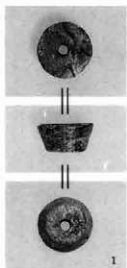
34



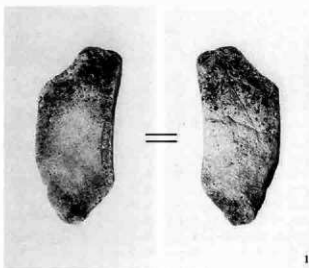
30



1号鍛冶跡出土鉄滓



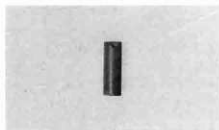
11号掘立出土遺物



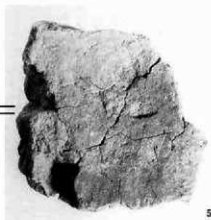
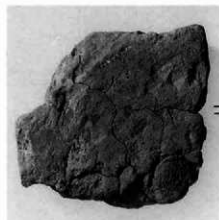
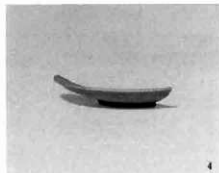
2号掘立出土遺物



3号竪穴遺構出土遺物



1号・4号・11号溝出土遺物

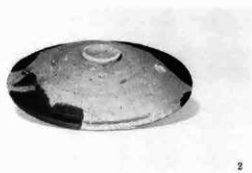


26号溝出土遺物





1



2



4



5



7



11



14



18



12



19



21



17



22



25



29



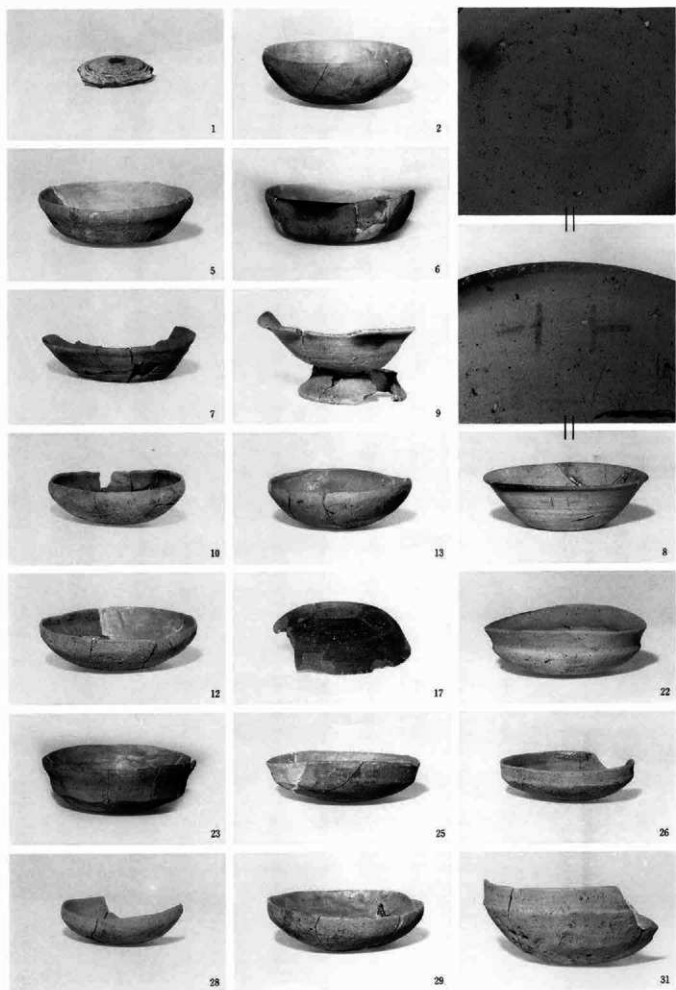
28



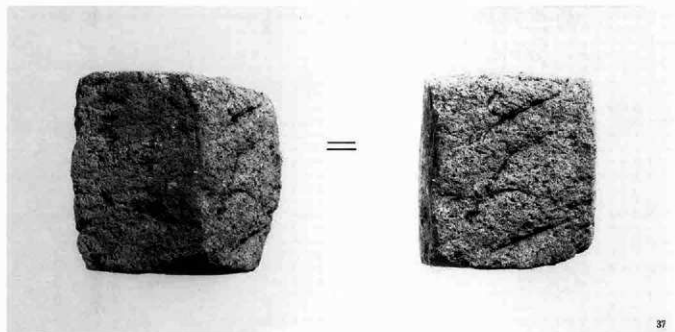
30



31



1号井戸出土遺物(1)



1号井戸出土遺物(2)



1



2

4号井戸出土遺物



6



7



||



14

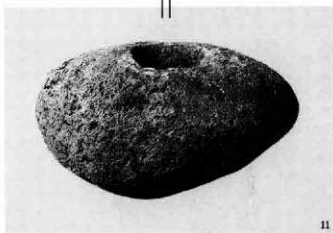
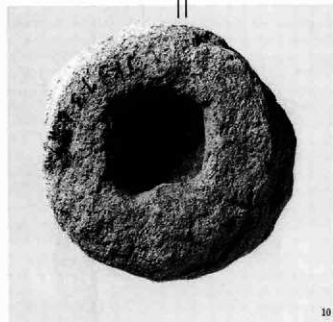


8



9

6号井戸出土遺物(1)



6号井戸出土遺物(2)



19

9号井戸出土遺物



20

10号井戸出土遺物



34

15号井戸出土遺物



25



31

13号井戸出土遺物



24

11号井戸出土遺物



2



6



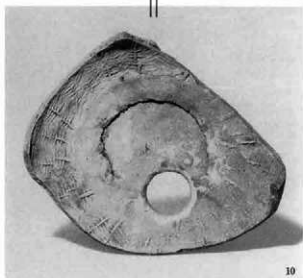
8



9



||



10



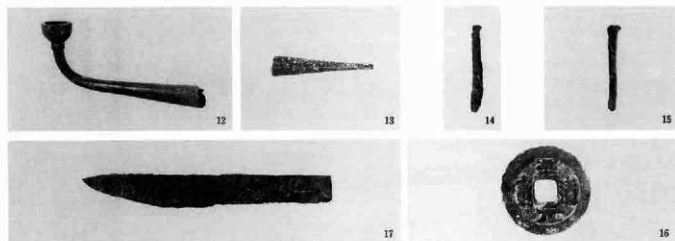
5



11



3号道路跡出土遺物



4号道路跡出土遺物



27号土坑出土遺物

31号土坑出土遺物

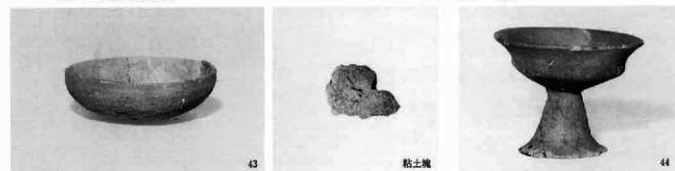
42号土坑出土遺物



164号土坑出土遺物

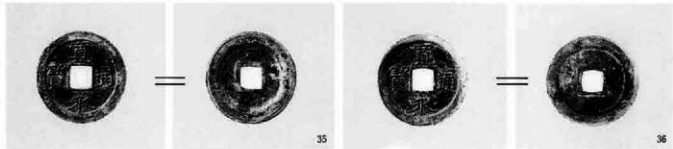
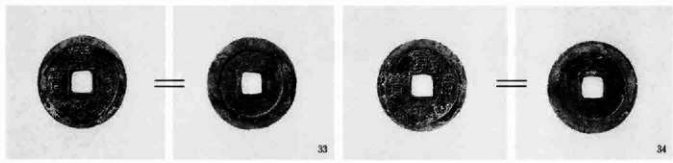
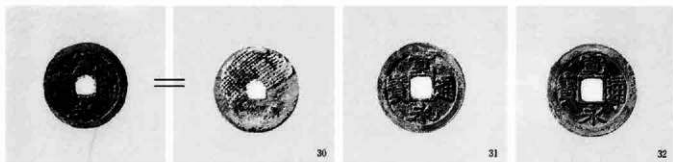
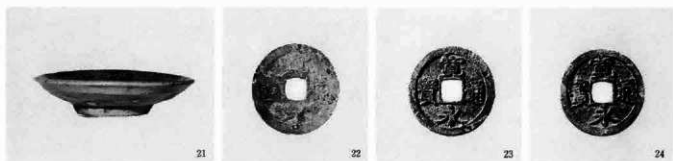
121号土坑出土遺物

184号土坑出土遺物



188号土坑出土遺物

189号土坑出土遺物



151号土坑出土遺物



184号土坑出土遺物



群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第187集

今井道上・
道下遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月22日 印刷

平成7年3月27日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社